

銀子ちゃんを可愛い可愛い
可愛い×5するだけの話
(+短編集)

銀推し

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

将棋？ 知るかバカ！ そんなことより銀子ちゃんだ！

……な話です。ただそれだけです。

加えて同作者が書いた短編もここに載せる事としました。

短編はシリーズ部分とは設定的には繋がりのないものとなっています。

この話はpixivにも投稿しています。

目次

銀子ちゃんを可愛い可愛い×1するだけの短編集

短編 夏の日の1頁 | 1

短編 10月31日の奇跡 | 25

短編 10月31日の奇跡(の裏側)

71

短編 【祝☆昇段】空銀子四段を応援す

るスレPart4588 【浪速の白雪姫】

| 128

短編 そんなバレンタイン | 153

短編 棋士・九頭竜八一の有意義な研

究 | 169

短編 甘えたい日 | 195

短編 限界突破空銀子 | 248

短編 全肯定空銀子 | 312

短編 天地創造宇宙開闢空銀子

369

短編 可愛い頃の空銀子 | 407

銀子ちゃんを可愛い可愛い×5するだけ

の話 本編

1. 出会いの話 | 436

2. 四人の話 | 449

3. 夢の話 | 462

4. JKの話 | 474

5. 初日の話 | 486

話

17.	空銀子ちゃん(4歳女の子)	650	28.	謝罪の話	799
16.	更に幼女の話	635	27.	浮気の話	783
15.	幼女の話	621	26.	報いの話	770
14.	大人な話	607	25.	呼び出しの話	757
13.	よく分からない話	596	24.	J Cと風呂の話	744
12.	更にJ Sの話	582	23.	J Sと風呂の話	731
11.	J Sの話	568	22.	更に風呂の話	718
10.	一週間後の話	553	21.	風呂の話	704
9.	おしごとの話	539	20.	幼女とJ Sの話	692
8.	J CとJ Kの話	525	19.	仲直りした幼女との話	680
7.	J Cの話	513	18.	更に空銀子ちゃん(4歳女の子)の話	665
6.	関係性の話	499			

3 8.	3 7.	3 6.	3 5.	3 4.	3 3.	3 2.	841	3 1.	827	3 0.	812	2 9.	
更に空銀子たちの話	空銀子たちの話	人命救助の話	思い違いの話	命にも関わる話	夜の話	影響と変化の話		再びのJ CとJ Kの話		更にJ Kと不思議な夢の話		J Kと不思議な夢の話	
957	940	920	905	891	875	858							
おまけの話	1078	おまけの話	1058	おまけの話	おまけの話	おまけの話	4 3.	4 2.	4 1.	990	4 0.	975	3 9.
J C 銀子のその後③		J C 銀子のその後②		J C 銀子のその後	J C 銀子のその後	J C 銀子のその後	これからの話	5 人目の話	とある日の話		更に空銀子V S 空銀子の話		空銀子V S 空銀子の話
							1040	1024	1010				

- 1210 おまけの話 J S 銀子のその後④
- 1190 おまけの話 J S 銀子のその後③
- 1172 おまけの話 J S 銀子のその後②
- 1156 おまけの話 J S 銀子のその後
- 1140 おまけの話 J C 銀子のその後⑤
- 1119 おまけの話 J C 銀子のその後④
- 1097

- おまけの話 J S 銀子のその後⑤
- 1231
- おまけの話 J S 銀子のその後⑥
- 1247
- おまけの話 J S 銀子のその後⑦
- 1264
- おまけの話 幼女銀子のその後
- 1289
- おまけの話 幼女銀子のその後②
- 1305
- 八月某日の空銀子
-
- 1322

銀子ちゃんを可愛い可愛い×1するだけの短編集

短編 夏の日の1頁

——おでかけデートとは何か。

それはその名の通り、恋人同士がおでかけしてデートをする事を言う。

「いい天気ね、八一」

「うん、そうだね」

空を眺めながら銀子ちゃんが呟く。

これは確かにいい天気だ。こういう天気であれば絶好のおでかけデート日和と言えるだろう。

「ほら、風も気持ちいい……」

「そうかな？」

思えばこのおでかけデートという言葉。これはよくよく考えてみると不思議な言葉だ。

だってデートといったら言うまでもなくおでかけをする事だろう。であるならば、わざわざ言葉の頭におでかけと付ける必要は無い。

だからこれはきつとおでかけをしないデート、つまりおうちデートという考え方の隆盛がそのキツカケにあるのだと思う。

互いに想い愛し合う恋人にとって、家の中でおうちデートする事だって選択肢の一つになってきたからこそ、その対局にあるおでかけデートという言葉が生まれたのだろう。

「あ、なんかいい匂いがする。なんの香りだろう？」

「どうだろう。俺にはちよつと分からないかな」

そして今ここに居る二人、俺こと九頭竜八一と空銀子ちゃん。

俺達は互いに想い愛し合う恋人であつて……そして俺達にとってのデートというのは、普段からおうちデートの頻度が圧倒的に多い。

その理由としては、銀子ちゃんは超が3つ付く程の有名人なので、外出して身バレでもしたら色々と面倒くさい事になりかねないという事。

他にも銀子ちゃんがインドア気質なので人混みを嫌っていたり、直射日光が駄目であつたりと。

そしてお互いにとって共通の趣味……というか、まあ要するに結局は将棋が一番楽し

くて、盤を挟んでいる時間が一番至福であったりと。

それらの事情が合わさって、俺と銀子ちゃんのデートはおうちデートが多めになっている。

「ちよつと遠かったけど……でも、やっぱり来てよかったね」

「そうだね、そうかもしれないね」

そして、俺達は普段からおうちデートの頻度が圧倒的に多めだからこそ……今日はおでかけデートをする事にした。

そこはほら、一応カップルだしね。勿論おうちデートだって悪くは無いんだけど、やっぱり恋人同士になったからには、もっと色んな所に行って色んな事してみたいよね。

だから今日はおでかけデートだ。俺も銀子ちゃんもよそ行きの整った格好をしている。

一応俺の方でデートプランの大枠は決めてあるけど、しかしそこは臨機応変に。今日は銀子ちゃんの行きたい所に付き合っただけだ。

「ほら、八一……」

とその時、隣にいた銀子ちゃんが眩しいものを見るかのようにその目を細めて。

「どうしたの？」

「見て……古都ローマの町並み……凄く綺麗……」

ああ、本当だ。

俺達の眼下に広がる景色、ローマの町並みは思わず息を呑んでしまう程に美しい。

今日はおでかけデートという事で、俺と銀子ちゃんは遠くイタリアはローマまでやって来た。

やっぱりおでかけデートと言うからにはね、これ位のおでかけはしちゃうよね、うん。

——なわきやない。

いい加減この茶番に付き合うのも虚しいので、そろそろ本題に入る事にする。

「あのさあ銀子ちゃん」

「なに？」

「今日つてさ、二人でおでかけデートの予定だったはずだよな？」

「そうね」

俺の問い掛けに対して、銀子ちゃんはなんら憚る事なくいつも通りの顔で頷く。

ここにきてこの平然とした態度、この神経の凶太さにはさすがと言う他無いだろう。

今、俺と銀子ちゃんは関西将棋会館近くにあるワンルームマンション、銀子ちゃんが将棋の研究用にと購入した部屋のリビングに居る。

こうしてこの部屋に居る時点で明らかなのだが、俺達はおでかけデート中では無い。むしろ完全にいつも通りというか、いつも通りのおうちデートに突入する流れとなっている。

……え？ ならさつきまでの会話は一体何だったのか、って？

それは単に写真を見ての感想だ。銀子ちゃんがその手に持つタブレット端末に表示されているローマの風景写真、恐らくはネット上から適当に拾ってきたものだろう。

まさかこんなものまで用意していたとは。驚いた俺はつついそのノりに付き合ってしまったよ。

「てか銀子ちゃん、もしかしておでかけデートの予定を忘れてた……なんて事はないよね？」

「あのねえ、デートの予定を忘れる訳が無いでしょ。私だって勿論そのつもりだったわよ」

「だったら——」

「でもね八一、これを見なさい」

すると銀子ちゃんはタブレット端末を操作して、切り替わった画面を俺に見せ付けて

くる。

そこに表示されていたのはお天気アプリだ。本日の大阪の天気は晴れ、そして気温は

「ほら、今日は最高気温31℃だって」

「そうだね。もう8月だし、これから更に暑くなってくるだろうね」

「ええ、そうね」

すると銀子ちゃんは我が意を得たりとばかりに大きく頷いて。

「つまり……そういう事よ」

……なるほど、そういう事か。

つまり「やだやだお外暑い。銀子エアコンがガンガンに効いたこの部屋から出たくなーい」……と、この子はそう言いたいのだろう。

「今日は天気が悪いの。残念な事にね」

「いやいや、むしろいい天気でしょ。雲一つ見当たらない晴天だよ」

「八一。何事もね、過ぎたるは猶及ばざるが如しって事なのよ」

過ぎたるは猶及ばざるが如し。何事も程々が一番という意味合いの中国の故事だ。

「どうやら銀子ちゃんの内にあったおでかけ欲は、夏の暑さの前に萎れてしまったらしい。」

一緒に段重ねのアイスを食べながら、おてて繋いでのラブラブデート……なんてイメージは、残念ながら絵に描いた餅になったようだ。

「……そっか。まあ、銀子ちゃんが出不精だったのは元から分かっていたけどね」
ただでさえ出不精な銀子ちゃんのだが、夏になるとその傾向はより一層顕著になる。

ちなみにそれは何も暑さだけでは無く、冬の寒さを前にしても似たりよつたりである。空銀子というのは室内を好む生き物なのだ。

「別に私に限った話じゃないわ。アウトドア派な将棋指しなんてこの世には存在しないのよ」

「それは言い過ぎだつて……」

そりや将棋はインドア向けのゲームだけど、棋士達の中にはアクティブな人も多い。最近では棋士達によるフットサル大会なんでものが開かれたりするぐらいだし。

かくいいう銀子ちゃんだつて時にはサッカー観戦を楽しんだりと、口ではこう言っているがなにも完全なるインドア派という訳では無い。

けれど、まあ、銀子ちゃんの言い分も分かる。特にこの夏という季節はどうしてもねえ。

この子の白磁のような真っ白お肌にとって、夏の太陽の光というのは特に天敵だ。た

だ日に焼けてしまうからというだけでは無く、色素が薄い体質のせいで体調を崩してしまふ事も多い。だからこそ夏は特に外出したがるらないのだ。

「……うーん」

けれど。それでも。

暑いし日差しも強いから外に出たくない、という銀子ちゃんの言い分は大いに理解出来る。

だがそれを理解した上で尚、俺はまだ気持ちの落とし所が見つけれないでいた。

だつてさあ。元々の予定だと俺達、今日はおでかけデートをする予定だった訳じゃん？

けれどもポシヤった。となるとこれって、俺は恋人として夏の暑さに負けたつて事じゃん？

銀子ちゃんの中での優先順位として、彼氏とのおでかけデートよりも『暑いのだやだ日光やだやだー』の方が上にあるって事じゃん？

それってなんかさあ、事情は分かかっていてもなんかちよつときみしいじゃん……？

——しかし、だ。

「……でも、そうだね。なら今日はこの部屋で大人しくしていようか」

あえて、あえてここは頷いておく。ここはひとまず物分かりの良い彼氏を演じてお

く。

「ここでゴネてもあまり益は無い。そのように俺の棋士としての読みが言っている。

「……いいの？」

「いいよ。せつかくの二人だけで居られる休日なのに銀子ちゃんに無理させたくないしね」

俺が笑顔でそう答えると、

「……うん、ありがと」

銀子ちゃんが小さな声でそう呟く。

その顔はちよっぴり照れ混じりで……こういう表情をしている銀子ちゃんは本当に可愛い。

おでかけデートはポシヤったけど、俺としてはこの子のこんな表情を見られただけでもう満足だ。

……とは言えない、そう思えないぐらいには俺も欲張りになっちゃったんだけど。それでもこの場はこうしておくべきだ。とにかくここは譲っておくのが吉だろう。

例えばここで俺が本気で駄々をこねたら。

そうしたら最初こそ反発するだろうが、多分最終的に銀子ちゃんは折れると思う。

何故なら元々の予定はそっちだから。だからここで俺がひたすら駄々をこねれば

きつと銀子ちゃんも「……はあ、仕方ないわね……」とか言いながら重い腰を上げてくれる。

そしてガンガンにエアコンの効いたこの部屋から出て、俺とおでかけデートしてくれるだろう。

しかしその場合、恐らく銀子ちゃんの機嫌があまり良くないものとなってしまう。

せっかくのデートをご機嫌斜めな状態で迎えるというのは宜しくないし、それにやっぱり今日が暑いのは本当だからね、銀子ちゃんが本当に体調を崩したりでもしたら大変だしさ。

なのでここは文句を言わずに、いつものようにおうちデートを受け入れておく。

その事について何かを言うのは……仕掛けるのもう少し後になってからだ。

「さてと、それじゃ……」

言いながら俺は座布団を二枚、座りやすいような位置に並べて。

「それじゃあ、対局しよっか」

「うん」

そして、俺達は将棋盤に向かい合う。

それは恋人ではなく棋士として。ここからは棋士の時間だ。

「……ところでさ」

「なに？」

「エアコンの温度、もう少し上げない？ これ涼しいっていうより寒いぐらいなんだけど」

「寒いなら上に何か着たら？」

「……………」

あくまで譲る気はないらしい。

この身震いするような涼しさの中で平然としているこの子は本当に身体が虚弱なのか。そう思ってしまったのは俺だけではあるまい。



そして、その後。

午前中はずっと対局を重ねて——昼。

出前で頼んだ昼食を食べ終えて、そして時刻が昼過ぎになった頃。

「……………はあ」

俺はおもむろに溜息を吐き出した。それはもう残念そうな表情を作って。

「……はああく」

「……なに？」

これみよがしに大きく嘆息してみせると、銀子ちゃんが警戒心を孕んだ目を向けてくる。

昼食休憩を挟んで対局は一旦終了、つまり棋士の時間はもう終わった。

ここからは恋人の時間で……そろそろ仕掛ける頃合いだ。

「なんかさー、やっぱりおでかけデートしたかったな、って思ってたさー」

「む……」

俺が仕掛けた一手に反応して、銀子ちゃんの整った眉がぴくつと動く。

これは何も虚言ではなく、おでかけデートがポシヤった事に対する俺の率直な気持ちである。

それをこのタイミングで仕掛ける。あえてあの時すぐではなく「今からじゃもうおでかけデートって気分じゃないよねー」と思う位の時間が経過してから言うのがミソだ。

「久々のおでかけデートだったのになー。予定組んだ時から楽しみにしてたのになー」

「……別に、私だってそうだったわよ。……ただ、今日はなんか、ちよつと、暑すぎて

……」

言い訳している自覚はあるのだろう、歯切れが悪く答える銀子ちゃん。

互いのスケジュールを調整して今日の日の予定を組んだのは一週間前程。だからその時は銀子ちゃんもおでかけする気満々でいたのだろう。

しかしこれも夏の悪戯か、ここ一週間で急激に最高気温が上昇した。そしていざ当日になって玄関から出たら、うだるような外気温を前にして急激にテンションが下落してしまった……と、銀子ちゃんの事情としてはそんな所だろう。

……が。

そんな事情は分かっているけど俺は仕掛ける。棋士としてこの攻め所は逃すまいて。

……え？ 過ぎた事を今更になって言うのは男らしくないって？

知らんねえそんな事は。男には時として男らしさなんかよりも優先するべき事があるのだよ。

「そりゃあ確かに今日は暑い、暑いのは分かるけどさあ。でも恋人とのデートだよ？」

「一週間前から約束してたんだよ？」

「……でも、暑いんだもん」

「んな暑いっていつてもずつと外に居る訳じゃないし、どっかお店に入ったら涼しい訳じゃん？」

「……でも、最近は環境問題がどうこうって、あんまりエアコンが効いてない店も多いじゃない」

「そんなの極一部の店だけでしょ。大体の場所はちゃんと快適な気温が維持されているって」

しかしこの子、ほんとにエアコンに拘るな……。

この様子だとエアコン無しではきつと一夏も越す事は出来ないだろう。同年代の俺が言うのもなんだがバリバリの現代っ子精神極まるといった感じだ。

「……てか銀子ちゃんさあ、俺とエアコン、どっちが好きなのわけ？」

「エアコン」

ノータイムで答えやがった……。

どうやら俺は恋人をエアコンに取られてしまったようだ。エアコンめえ……許すまじッ！

大体銀子ちゃんも銀子ちゃんだ！ そんなにエアコンが好きならエアコンとデートしてればいいよ！

……とは言わないけどね。

さすがに先程の発言、あれがただの冗談だって事ぐらいは俺にも分かる。

その程度なら恋人同士の他愛ない会話の一つであって……だからこれぐらいだって

許されるはずだ。

「あーあー、おでかけデートしたかったなー」

「……………」

「昨日から楽しみにしてたんだけどなー。デートプランとかも沢山考えてたんだけどなー」

「……………」

俺が次々と繰り出す口撃を受けて、銀子ちゃんはむすつとした顔で沈黙するのみ。

うるさい黙れ、とは言つてこない。というか言えないのだろう。何故ならそれが俺の本心の一つであるという事をこの子も分かっているから。

「……………」

今の銀子ちゃんにはおでかけデートをボシヤってしまったという負い目がある。

だからこそ俺に対して言い返す事が出来ず、ただただ沈黙していたのだが……。

「…………ちつ」

やがて大きく舌打ちを——自らの敗北を認めるかの如き舌打ちをして。

「…………八一」

「なに?」

そして俺と向かい合つて。

少し赤らんだ頬、そして目線を右斜め下に向けて俺と目を合せないまま——言った。

「……どうして欲しいの?」

——よし来たつ!

来たぜ来たぜえ! こちとらその言葉をずっと待ってたんだよお!

「うん? どうして欲しいのって、それはどういう事かな?」

しかしここは逸らずに。ちゃんと言葉にしてその意図を確認する。

あるいは……焦らすかのように。銀子ちゃんの事を徐々に追い詰めていく。

「どういふもなにも……言葉の通りだけど」

「というど?」

「だから……そこまでいじわるな事を言うって事は、私に何かして欲しい事があるんでしょ?」

「いじわるな事なんてそんな、俺はただ率直な気持ちを口にしていただけで——」

「もう、分かったから。今回は私が悪かったから……だから……」

その声はとても弱々しくて。

その表情はとても恥ずかしそうに。

「……代わりに、したいこと、させてあげるから」

なんとという事でしょうっ！ あの銀子ちゃんが自ら無条件降伏をしてくるだなんて！

その様子は自らの運命を受け入れて怯える小動物のよう、普段からクールで強気な浪速の白雪姫もこうなってしまうては型無しである。

ふふふふ。どやあ、これぞ俺の狙い通りの展開、言わば名を捨て実を取る作戦。

やはり隙を見せたらそこを突くのが棋士というもの。銀子ちゃんの負い目を上手く突いて文句の言えない状況に追い込み、抵抗の出来ないお人形さんにしてしまおうという訳だ。

とかく銀子ちゃんっていうのはね、意外と律儀な性格をしているからね。

おでかけデートに対する俺の期待と楽しみをフイにってしまった分、代わりの何かを差し出さなきゃと考えるような子なんだよね、可愛いね。

「へえ。したいことって……なんでもいいの？」

「……………（コクリ）」

「後から文句言ったりしない？」

「……………（コクコク）」

この先何をされるのか分かっているのだろう、銀子ちゃんのお顔はもう真っ赤だ。

そっかそっかあ、この子にここまで言われちゃあしやうがないよね。

なんでもしちやう程に負い目を感じているなら、それを解消してあげるのが彼氏の役目だよ。

「では遠慮なく」

という事で、まずは俺は銀子ちゃんの身体をぎゅつとハグした。ぎゅー。

「あつ……」

ああ、女の子の柔らかい感触が、銀子ちゃんの低めな体温がじわりと伝わってくる。

その心地を味わうのもそこに、そのまま銀子ちゃんの身体を優しく押し倒す。

「んっ、やい、ち——」

そして押し倒したのもそこに、俺は目の前にあつた瑞々しい唇に自分のそれを重ねた。

「…………ふ、う…………」

銀子ちゃんの唇、柔らかい。

銀子ちゃんの唇の端から漏れる息、エロい。

このままこの感触を味わってもいいんだけど……だけどここはもう少し踏み込む。

「…………んっ！ う、む…………っ」

唇を割ろうとする舌先の感触に気付いたのだろう、銀子ちゃんの両目が大きく見開か

れる。

基本的に銀子ちゃんというのはムードを重視する女の子なので、これ程に攻めを急いだ場合、普段であれば多少なりとも嫌がる素振りを見せたりするはずなんだけど……。

「……………ん、……………んう」

そのまま銀子ちゃんはすつと瞼を閉じる。

そして唇を少し開いて、ねじ込んで来た俺の舌を優しく迎え入れてくれる。

おお、やつぱり抵抗が無いっ！ 抵抗が無いぞ！

今日の銀子ちゃんはもう無抵抗だ。無抵抗な銀子ちゃん……いいよね！

俺なんてもう『無抵抗な銀子ちゃん』っていう字面だけでめっちゃ興奮するもん。

「……………はっ、はぁ……………もう……………」

そうして暫く濃厚接触をした後、唇を離れた銀子ちゃんは熱い吐息を吐き出して。

「……………ねえ、八一」

「なに？ ここまで来て待ったは無しだよ？」

「そうじゃない。そうじゃないけど……………」

そこで銀子ちゃんはじとつとした目付きを、とても非難がましい目を向けてくる。

「……………もしかしてさ、最初からこうなるって分かってた？」

「……………なるって？」

「だから……おでかけデートが駄目になって、その代わりに……こうなっちゃうって」
「……んーと、それは……」

まあ、ここまで来たら言っちゃってもいいか。

「——うん、そうだね。正直に言うとも最初からこっちを期待してた」
「やっぱり……」

見事に読みが当たっていた事を知って、銀子ちゃんが恨めしそうに呟く。

けれども読みの早さと深さで言うなら、今日は俺の方が上回ったかな。

やっぱり俺達は棋士だからね。どんな状況にあっても先の展開は読んでいかないと。

……ていうかね、答えを言っちゃうとね。

出発直前になって、突然待ち合わせ場所を駅前からこのマンションに変更する旨のLINEがあった時点で、なんとなく察しがつくよねっていうか。

だったら今日はどうするか、どんな流れにもっていかは計画立てるよねっていうか。

「……すげべ」

「知りませんなあ。大体これは銀子ちゃんが悪いんだからね。当初の予定通りおでかけデートをしていけばこんな事にはならなかったんだから」

「ぐう……」

ここを突けば何を言えない時点で、今日の銀子ちゃんはまな板の上の鯉を逃れられないのだ。

さーてさて、となればこの可愛い可愛い鯉をどうやって料理したものか。まあとりあえず？ さつきはエアコンに浮気をされてしまった訳だし？となれば「エアコンよりもやいちが好き♡」と言わせるのを目標にしてみようか。



——そして。それからしつとり数時間。

恋人らしくイチヤイチャと、恋人らしい事を沢山して。

無事「エアコンよりもやいちが好き♡」という言葉まで頂戴した後……。

「……いい天気ね、八一」

「うん、そうだね」

確かに良く晴れたいい天気だ。

まあ、もはや天気とかよく分からないぐらいに真つ暗なんだけどさ。

あれからたつぷりとイチヤついて……夜。俺と銀子ちゃんは買い物に出掛けていた。

マンションの近くにあるコンビニまで。銀子ちゃんが食べたいと言い出したアイスを買いに。

「ほら、風も気持ちいい……」

「確かにね。これぐらいの時間になったら涼しくなってきた気持ちいいね」

「あ、なんかいい匂いがする。なんの香りだろう？」

「これは……カレーかな？ よその家の晩飯の香りって妙に美味しそうに感じるよね」

「ちよつと遠かったけど……でも、やっぱり来てよかったね」

「そうだね……って、それは待った。すぐそのコンビニまでだし遠くはないでしょ」

恋人らしい会話を交わしながら、恋人らしくその手を繋いで。

どちらのものか、重ね合った手のひらからは少し汗ばんだ感触がするけど……まあ、それ以上に散々イチャついた後ではお互い気にはしない。

「……でも、珍しいね。銀子ちゃんがこうして買い物に付いてくるなんて」

「そうっ？」

「うん。家で待っていても良かったんだよ？ アイスぐらい俺が買ってきてあげたのに」

「……まあ、そうね。いつものように八一をパシらせても良かったんだけど……」

パシらせるのは当然の事のように言いながら、銀子ちゃんはふう、と息を吐いて。

「……したかったんでしょ、おでかけデート」

えっ？

「……あ、これってそういう事？」

「そーいう事。ちゃんとした埋め合わせは今度するつもりだけど……ひとまず、ね」
なるほど。おでかけデートとは恋人同士がおでかけしてデートをする事を言う。

だとしたらまあ確かにこれも一応、おでかけデートっちゃおでかけデート……かな？

但しとつくに日も落ちちやってるし、目的地はすぐそのコンビニまでだけど。

「そっか、おでかけデートか。確かに今日はそういう予定だったもんね」

「そうね。……はあ、最初からこうしていればあんな事をせずに済んだのに……」

「……ハハハ」

「なにその笑い。ムカつくんだけど」

そんな話をしながら歩いていると……お、目的地であるコンビニが見えてきた。
なんとも短いおでかけデートだったなあ……とか思っていたら、

「……ねえ八一。私、段重ねになってるアイスが食べたい」

唐突に銀子ちゃんがそんな事を言い出して。

「え。食べたいアイスってそのアイスなの？」

「うん。コーンの上に丸いアイスが重なってるアレが食べたい」

「でもそれってコンビニには売ってないんじゃないかな？ ソフトクリームなら見た事あるような気がするけど……」

「やだ。段重ねのがいい。三段にしたアイスが食べたい気分なの」

「つて言われてもなあ……」

段重ねのアイスはコンビニじゃなく、専用のアイス屋さんとかじゃないと売っていないだろう。

さーて困ったぞ。こうなった銀子ちゃんを納得させるのは結構大変な仕事なのだ。

ここはなんとかハー○ンダツツとかで満足してくれないものか……つて、あ……これはまさか。

「……じゃあ、もう少し歩こうか。駅前まで行けば売り場があったと思うけど」

その意図を読み切った俺がそう尋ねてみると、

「……うん、そうする」

正解だと言うかのように、銀子ちゃんが満足そうな顔でこくりと頷く。

という事で。

三段重ねのアイスを見つけに、俺達はもう少しだけおでかけデートを続行する事にした。

短編 10月31日の奇跡

「にゃー」

と、聞こえた。

「はっ」

思わず俺はそう呟いた。

そして身体の方が抜けた。コンビニで買ってきたお菓子や飲み物などが入ったレジ袋が手の中から滑り落ちて、ドサリと音を鳴らした。

ここは関西将棋会館近くにあるワンルームマンション、その801号室。
玄関ドアを開けて部屋の中に足を踏み入れて、その直後だった。

「にゃー」

ともう一度、その鳴き声。

耳をくすぐるような甲高い声、愛らしいその鳴き声の主とは勿論――

「……ね、ハッ？」

にゃー、と鳴く生き物とは何か。

それは猫だ。そう、猫だ。猫が居る。

今、俺こと九頭竜八一の目の前には、とても見目麗しい一匹の猫が居た。

「……え。なんで、ネコ？」

「にゃー」

「……えーと」

「にゃー」

話し掛けてみても、当然ながら「にゃー」としか返事をくれない生き物、ねこ。ネコ。猫。

……ちよつと待つて、一旦状況を整理しよう。

まずこの場所。ここは俺にとって大切な人、俺の姉弟子であつて恋人でもある空銀子ちゃん（職業・プロ棋士）が、将棋の研究を行う際に静かな環境が欲しいからの理由で購入したワンルームマンションの一室だ。

そして今日、俺は将棋の研究を行う為この部屋にやつて来た。久し振りに銀子ちゃんと二人で過ごせる時間に胸を踊らせながら玄関ドアを開けると……この猫が迎えて

くれたというわけだ。

「にゃあ」

「……猫、か」

「にゃん」

けれど……これは、このネコは。

見知らぬネコがここに居るといふ事は、これはつまり……。

「……そうか」

ある事情を察した俺はふう、と息をつく。

「……まず、何故ここに猫が居るのか、だけど」

「にゃあ」

「この猫は首輪をしてない。て事はペットショップとかから買って来た猫ではないはずだ」

「にゃ」

「んでここにっつて八階だし、まさかペランダから忍び込んだっつてわけでもないよね？」

「にゃん」

「てことは銀子ちゃんが拾ってきたのかな。で実家の方は親御さんに駄目って言われたからとりあえずここに連れてきた……みたいな流れかな？」

「にゃお」

まあ細部は異なるかもしれないけど、大まかにはこんな流れなはずだ。

とにかくこの猫がここに居るのは家主である銀子ちゃんが原因に違いない。にゃーにゃーと鳴く猫ちゃんに語り掛けながら俺はうんうんと頷く。

「そつかあ……拾い猫かあ……」

「にゃあ」

「てことは野良猫か、それとも捨て猫だったりするのかな？ 漫画とかでよくある『拾つて下さい』って書かれたダンボールの中に居たとか」

降りしきる雨の中、ずぶ濡れになっているのを見かねた銀子ちゃんはその猫を抱え上げる……みたいなシーンを想像しながら、レジ袋を拾い直した俺は靴を脱いで玄関を上がって。

リビングへ続く廊下の真ん中、道を塞ぐかのように居座るその猫ちゃんに近付いていく。

「拾ってきたって事は、もしかして銀子ちゃんはこの猫を飼うつもりだったりするのかな？」

「にゃあ」

「まあペットを飼う経済力は問題無いだろうし、猫はペットとしては一般的だからそれ

なりに飼いやすい生き物だとは思うけど。でも野良の猫って病気があったりするから一度獣医さんに見せなきゃいけないなかったりするんじゃないかな？ そこら辺の事知ってるのかなあ銀子ちゃんは」

「うにゃあ」

どうやらこの猫ちゃんは人懐っこい性格なのか、近付いても逃げる素振りを見せない。

ならばと俺はこちらを見つめる灰色の瞳と視線を合わせたまま、腰を屈めて手を伸ばして――

「なでなで」

「……………にゃ」

小さな頭を優しく撫でる。

すると猫ちゃんは心地よさそうに目を細めてころころと喉を鳴らした。

「おお、この手触りは……………ふわふわしてる」

「……………ふにゃ」

「うーん、これは確かに……………猫を飼いたくなる人の気持ちも分かるなあ」

「……………うにゃん」

そして猫耳もさわさわ。

すると身を振った猫ちゃんの白いしっぽがゆらゆらと揺れる。ううむ、かわいい。

「なでなで、さわさわ……」

「……にゃあ」

この子の毛の色は艶のある綺麗な銀色。偶然にも拾い主であるあの子と同じ色をしている。

もしかして自分と同じ毛色をしていたから感情移入しちやつて拾ってきた……とか、そういう理由だったりするのだろうか。

「にしても綺麗な銀毛だな……そういえばこの猫って品種は何なんだろう」

「うにゃん」

「猫の品種ってあんまり知らないんだよなあ。アメシヨーとかマンチカンとか、そんなんだっけ」

「にゃん」

そういう品種名こそは知っていても、その品種の特徴まではちよつと分からない。

だからこの猫ちゃんの品種が何かまでは俺には判別できない。ペットショップに連れていけば分かると思うけど……まあ野良猫だし雑種なのかな。

「まあいいか。そういう込み入った話は銀子ちゃんが戻ってきてからにしよう」

「……にゃお」

「ほら、おいで猫ちゃん。お菓子……は食べさせちゃマズいだろうから、お水を飲ませてあげる。ミネラルウォーターなら大丈夫だよね」

「にゃ」

俺がリビングに向かうと猫ちゃんも後ろをよちよちと付いてくる。かわいい。

猫は気まぐれな性格とかって聞くけど、この子は随分と素直な性格をしているみたいだ。

……まあ、その理由は分かるけどね。

「……さてっと」

そうして俺はリビングにあった座布団の上に腰を下ろして。

「……あのさ」

「にゃあ」

語り掛ける。

俺の膝下まで歩み寄ってきた素直で人懐っこい猫ちゃんに対して、言った。

「……そろそろ良くないかな？」

「にゃー」

「いやあの、にゃーじゃなくてさ。この流れ……まだ続けるの？」

「にゃー」

……うん。いや、まあ、その。

こうして「にゃー」と鳴く生き物と言えば、猫の他にもう一つ答えがあるよねっというか。

それは何か。

それは……猫の真似をして鳴く、人間だ。

「あの……銀子ちゃん？」

「にゃあ」

「だからにゃあじゃなくて」

「ふにゃ」

「……………」

……そうなんだよね。

銀子ちゃんなんだよね。これ。

「にゃー」

これは、空銀子だ。

さつきからずっと「にゃー」と鳴いていたのは誰であろう空銀子ちゃんその人である。つまりこれは猫じゃなくて、猫真似をしている人間、空銀子四段（職業・プロ棋士）である。

繰り返し三回も念押ししてしまっただが、とにかくこれは空銀子ちゃんなのである。

もうね、本当にビックリだよ。

玄関ドアを開けたらさ、廊下の奥からこの銀子ちゃんが出てきたわけだよ。

猫の鳴き声を上げてさ、猫の真似をして四つん這いになってこちらに歩いてくるわけ。

しかもこの子、なんと猫の仮装までしてんのよ。ちゃんと猫耳と猫しっぽを付けてさ、そんで手には肉球型の手袋みたいのまで付けてんの。

白のセーラー服を着て猫耳と猫しっぽと猫手袋を付けた完全ネコスタイルで、四つん這いになりながらにゃーにゃー言う銀子ちゃんを目撃した時の俺の衝撃を想像してみて欲しい。

マジで頭フリーズしたから。最初はこれを現実だと認識出来なかったよホントにさ。

「にゃあ」

と猫のように可愛く鳴く銀子ちゃん。

その瞳にはなんら躊躇の色が無い。その表情は至って真面目だ。

さも自らが猫である事を当たり前の事として振る舞っている、そんな顔をしていて。

「……銀子ちゃん」

「にゃ」

「……………」

「うにゃん」

「……………」

「にゃ？」

これは一体……どうしたんだろうか。この子は一体全体どうしちゃったんだろうか。

だって銀子ちゃんがこんな事を仕出かすなんて。普段の彼女だったらまずあり得な

い。

空銀子とはこういうボケやおふざけをするような子ではないんだ。銀子ちゃんが突

然猫真似をするなんつー奇行に走るなんて……それはもう狂気の姿と言わざるを得な

い。

故にこれは只事じゃない。なにかがおかしい。

そう感じた俺は咄嗟の判断で話の流れに乗ったんだけど……しかし、それでは駄目

だ。

そろそろ猫と戯れるのは止めて、おかしくなった銀子ちゃんと向き合う必要があるだ

ろう。

「どしたの？　なんで突然ネコに？」

「にゃー」

「にゃーじゃ分からないって。猫語で喋るのは止めて人の言葉を使ってくれよ」

「にゃあ」

「いやだから……」

「ふにゃ」

駄目だこりゃ。

相変わらずにゃーしか言わん。どうやら銀子ちゃんはまだ猫真似を止めるつもりは無いらしい。

にしてもマジでなんでこんな事に？

ほんとに頭がおかしくなっちゃったのかな？

もしかして将棋の研究に打ち込み過ぎて、許容量を超えた頭がパーになっちゃったとか？

「でもなあ。この子が研究熱心なのは今に始まった事じゃないしなあ」

「うにゃ」

「だったらなにか……何かしらの理由があつての行動だったり？」

「じゃあ」

頭がくるくるパーになったからこそその奇行じゃなくて、あくまで頭の中は冷静だとすると。

何か理由あってこんな猫真似をしているのだとすると……理由、理由……いやでもこうまで猫になりきる理由って一体なんだ？

例えば……なにかのイベントとか？ 今日の日付は10月31日だけど……って、あ。

「……まさか、ハロウィンだからってこと？」

「にや……」

「いや違うか。ハロウィンだったら相手を怖がらせるおぼけとかの仮装はずだし、なによりもトリック・オア・トリートって言うはずだしな」

「……にやあ」

今日は10月の31日、ハロウインの日だ。

しかしハロウィンというのは子供達がおぼけなどの仮装をして「トリック・オア・トリート！」と言って大人からお菓子を貰うイベントであり、なにも猫の真似をする行事では無い。

まあ最近では仮装の傾向もおぼけとかに限られず何でもアリになっていて、子供だけ

じゃなく大人も仮装してパレードしたりわいわい騒いだりと、ハロウインの形が変わっているのは確かだけど。

しかし、だとしてもこれは。この銀子ちゃんの奇行の理由はハロウインでは無いはずだ。

だつて猫になつて「にゃー」と鳴き続ける姿が世間一般に言うハロウインだとは思えないし。

この銀子ちゃんを例えば桂香さんに見せたら「あらあら銀子ちゃん、ハロウインを楽しんでるわね」とは言わずに「どうしたの銀子ちゃん、頭おかしくなっちゃったの？」と心配するはずだ。

「そうだよなあ。あの銀子ちゃんがそんな馬鹿げた真似をするはずないよなあ」

「にゃ……」

「だとするとこれはなんだろう……猫の日はにゃんにゃんで2月22日だったはずだし……やっぱイベントとかは関係無いのかな？」

「にゃあ」

「だつたら猫真似をする意味とは一体……ただ単に猫の可愛さを俺にアピールしてる、とか？」

「にゃ」

「あ、そうなの?」

「にゃあ」

「それ、どつちのにゃあ?」

「うにゃん」

やっぱり駄目だ。人間である俺には猫と意思疎通を図る事は出来ない。

けど……猫の可愛さアピールか。正直、そんな理由でこの子が猫真似をするかと言われると微妙だけど、でも案外そういう大した事のない理由が正解なのかも、という気はしている。

あるいはそれとも……。

猫そのものではなくて、猫になった自分の可愛さアピール、とか。

「……なるほど。それはアリだな」

「にゃー」

相変わらずの素知らぬ顔でにゃーと鳴く銀子ちゃん……いや、今は銀子にゃんと呼ぶべきか。

とにかくこれはつまり、銀子にゃんなのかまってかまってアピールなのかもしれないね。

だってほら、今日は互いの予定が合って久し振りに二人で過ごせる休日になったわけ

でね？

だからいつも以上に触れ合いたい、いつも以上にイチャイチャしたいと考えて、かまってかまっつての思考が強くなった結果、空銀子は銀子にやんになったのかもしれない。

「うにゃあ」

そう考えてみると……どうだろう。

なんか……さっきまでは奇行を繰り返しているだけにしか見えなかった銀子にやんが、俺の愛情を欲するがあまり猫になっちゃったいじらしい姿に見えてきたではないか。

「ふにゃ」

こんな猫真似をしてまで俺にかまって欲しいだなんて……。

だとしたらちよつと可愛くない？ いや超可愛いよね？ ヤバいよね？

「そうか……そういう事なんだね？ まったく可愛いヤツめ、うりうり」

「にゃ、うにゃあ……」

俺は両手で銀子にやんの顔を抱えて、その頭をちよつとだけ雑にわしわしと撫で回す。

普段なら嫌がりそうな行為だけど、銀子ちゃんならぬ銀子にやんは文句一つ言わな

い。

それはこの子が自らに課した縛り。今は人間じゃなくて猫になりきっているからであって。

「まあこの際理由はなんだっていいや。とにかく銀子にゃんは人間じゃなくて猫、今日はずもうとことんネコを貫き通すつもりなんだね？」

「にゃあ」

「そっか、分かったよ」

銀子にゃんがあくまで「にゃあ」としか言わないのなら俺にとっては是非も無し。

だったら俺は猫と接するつもりで、この子を猫として扱うのが最善の一手であろう。

「……よし。この子はネコだ」

「にゃあ」

「ここに居るのは一匹のネコ。猫にしてはちよつと身体の大きめなこの子の名前は銀子にゃん」

「にゃあ」

そう、この子は猫なんだ。

という事で……では、さっそく。

「——銀子にゃんっ！」

「にやつー！」

俺は脇目も振らず銀子にやんに飛び付いた。

何故かって？ そりやもう俺の忍耐力がとつくに限界を超えてたからだよ！！

「ああ銀子にやん銀子にやんっ！！ 銀子にやーんっ！！」

「にや…………ふにや…………！」

驚きに目を丸くしてるその顔も！！ 猫耳を付けたその愛くるしい姿も！！

銀子にやん可愛い！！ 可愛いよ！！ 可愛いねえ可愛いよお銀子にやあん!!!

「ああ可愛いっ！ かわいいかわいい銀子にやんかわいいにやんっ！！」

「にやにや…………にや…………」

床を転がりながらその銀毛の中に顔を突っ込んでみたり、ほっぺを合わせて頬ずりしてみたり。

プルプルと震える銀子にやん、その全身を両腕でぎゅつとハグして思う存分に愛おしむ。

だつてねえ!? そんなん当然つかこの銀子にやんの可愛さつたらないよねえ!?

普段はあんなにもクールな銀子ちゃんが！ 暴虐無比な女王、浪速の白雪姫がだよ!?

あの銀子ちゃんが猫耳と猫しっぽを付けて四つん這いになってにやあと鳴く銀子にやん!? そんなんもう環境破壊兵器でしょうがこんなにかわいさの概念が壊れちゃ

うよオ!!

ああもう本音を言えば玄関で出会った時からこうして飛び付きたかったっ! どうでもいい思考とかちっぽけな理性なんてとっとと捨ててにやんにやんしたかったんだよオ!!

「ああああ銀子にやああん……猫なんて駄目だよそんなの俺もう駄目になっちゃうよお……!」

「……ふにや」

「ああかわええかわええ……猫になりきってる銀子にやん激ヤバかわ萌え萌えきゅん……!」

「……うにやあん」

俺の豹変ぶりに驚いたのか、銀子にやんは弱々しく鳴き声を上げるだけで。

「あそうだっ! 俺さ! 猫飼ったら猫吸いやってみたかったんだよね! 猫吸い!」

「にやあ?」

「猫吸い! 知ってる!」

「にやん」

「知らないかな!? まあどつちでもいいか!」

俺はむくりと身体を起こすと!

「はい銀子にゃんっ！ 仰向けになって!!」

「にゃ……」

床に寝転んでいた銀子にゃんを仰向けの体勢にさせて！

「とうっ!」

銀子にゃんが着ているセーラー服のすそをガバっとめくって!!

「にゃ!?!」

大きくはだけたお腹に頭から突っ込んだ!!

「ふにやつ!?!」

「はあああ……猫だあ……!! これが猫吸いかあ……!!」

「……にゃ、……にゃ」

「くんくん、クンクン!! ああいい匂い、銀子にゃんの良い匂いがするよお……!!」

「…………にゃう」

猫吸い。それは猫を吸い込む事。飼い主が飼い猫のお腹などの匂いを嗅ぐ行為。

それは言わば愛情表現の一種であり、主にリラックス効果などが期待されるらしい。

分かるー! 猫吸い初めて体験したけどこれめっちゃクルわー!!

だって銀子にゃんの真っ白なお腹が、ほっそりとしたお腹が目の前にあつてさあ……

!

うわわあ……！ 銀子にゃんのおなか、あつたかいナリイ……！

「にゃおおおん……！ 銀子にゃあん……！」

「……にゃあ」

その柔らかいお腹に顔面をぐりぐりと押し付けて大興奮な俺の一方。

銀子にゃんの様子は先程と変わらず、か弱い猫はただ弱々しく鳴き声を上げるだけで。

「……ふにゃあ」

ただそれだけ。猫となった銀子にゃんは俺のする事なす事に文句一つ言う事が出来ない。

勝手に抱きついたり猫吸いしたりしちやつて、もしかしたらこの子は怒っているかもしれない。

今もにゃあにゃあと鳴くその心中は穏やかじゃないかもしれない……けど、猫真似をしている限りは文句を言わずに俺の行為を受け入れざるを得ないわけで。

つまりこれはこの子が何処まで猫を貫けるか。

一方で俺は銀子にゃんが空銀子に戻ってブチギレるギリギリのラインを攻められるか。そういう一種のチキンレースみたいなものだ。

ただそのラインを超えたら俺はぶちころされて、銀子にゃんは猫真似を貫けなかった

という事になるわけで、双方敗北とも言える結果となるのがチキンレースとは大きく違う点だけだ。

ならば……双方敗北とはならないように。

その上でこの状況を楽しみたい、銀子にやんのギリギリを攻める次の一手とは。

「よし、なら次は……」

「にゃ……」

「あそうだ。さつきお水を飲ませてあげるって言ってたよね。用意してくるよ」・

俺は銀子にやんのお腹から顔を上げると、持参したレジ袋を持ってキッチンへと向かう。

そしてコンビニで買ったミネラルウォーターを袋の中から取り出して、キャップを外して……。

「ええつと……この皿でいいかな」

用意したのはお皿。コップではなくお皿だ。

底の薄い平べったいお皿の中に、ミネラルウォーターを汲んで……つと。

「はいどうぞ。銀子にやん」

それを彼女の前に差し出した。

ミネラルウォーターの入ったお皿を。

フロアリングの床の上に置いてあげた。

「……こや」

すると銀子にゃんは目を大きく見開いた。

それは驚きの表情か。あるいは唾然とした表情と言ったところか。

まあそりやそうだろう。

だつて床の上に置いたこのお皿が示す意味なんて一つしかない。

これはまさしく猫のように、手を使わずに舌で舐めるように飲めと言っているのだから。

「ふにゃあ……」

銀子にゃんは水を汲んだお皿をじつと見つめる。

明らかに警戒している。そのまま猫パンチでも繰り出しかねない。

「……（ごくり）」

そんな緊迫した空気に、ただならぬ雰囲気には押されて俺も息を飲み込む。

犬猫のように水を飲ませる、まさにペット扱い。

こんな失礼極まりない行い、普段の銀子ちゃんにしたら即グーパンが飛んでくるだろう。

いいやこれは銀子ちゃんに限らず普通の人なら普通は怒る。というか俺だつて怒る

と思う。

しかし……銀子にゃんならばどうか。

猫は水を飲む際に手なんて使わない。ペロペロと舌で舐めるように飲むはずだし、そもそも肉球手袋をはめている状態では手を使う事は出来ない。

だからこの子が真に猫なのだとしたら、こうしてお皿に汲んで差し出すのが正解のはずなんだ。

「……にゃ」

ペット扱いを受け入れるのか。

それとも人間に戻って俺をぶん殴るのか。

その狭間で揺れているのだろう。銀子にゃんはにゃあと鳴くだけで微動だにしない。

「にゃ……にゃ」

果たして空銀子はどちらを選ぶのか。

人間か——それとも猫なのか。

さあ……どうなる!?

「……にゃう」

すると……あ、銀子にゃんが動いたぞっ!

両肘を曲げて低く屈んで、そのお顔をそーっとお皿に近付けて……!!

「……………（ぺろぺろ）」

飲んだっ!!

銀子にやんがお水を飲んだっ!!

「にゃあ……………」

ぺろぺろペロペロと、何度も舌を出して銀子にやんはお水を飲む。

やはり恥ずかしいのだろう、そのお顔は真っ赤に色づいていて。

「……………にゃあ、にゃあ」

「ぎ、銀子にやん……………」

あ……………あの銀子ちゃんが。

四つん這いになって身体を低く伏せて。

ぺろぺろペロペロと、舌だけを使ってお水を飲んでる姿を見ていると……………!!

「……………や、ヤバイ」

な、なんかこれはヤバイ……………!!

これ、なんかヤバイ性癖に目覚めそうだ……………!!

「……………よし、お水は終了だ」

「にゃ……………」

なので俺は銀子にやんの口元にあつたお皿をそつと拾い上げた。

これはちよつとヤバすぎてヤバイ。銀子にやんにお水を与えてはいけない。

こんな背徳的過ぎる水飲みシーンを見てたらマジで俺の頭がおかしくなってしまう。

「ほら銀子にやん、もう身体を起こして」

「にやあ」

「でもさすがは銀子にやんだね。手が出せない状況でもこんな方法で攻撃してくるなん

てや」

「にや?」

四つん這いからおすわりの体勢になって、俺の言葉に小首を傾げる銀子にやん。

この子はさつき自分がどんな姿を見せていたか、それすらも理解していないに違いな

い。

……うん。やつぱり駄目だ。この銀子にやんはあらゆる意味で危険過ぎる。

猫で、ペットで、従順で、俺の言う事を何でも聞く猫みたいな空銀子にやんなんて。

そんなの言葉にしようがないくらいに素晴らしい存在なんだけど……でも、あまりに

素晴らし過ぎて俺の精神力が持たないよ。

「だから……お楽しみはここまでにして、そろそろ銀子にやんを人間に戻そうか」

「うにや?」

この銀子にやんを元の空銀子に戻す方法。

いくつか挙げられるだろうが、その中でも一番簡単な方法を俺はすでに閃いていた。
「にゃん」

「てなわけで……いただきます」

「にゃあ」

俺は両手を前に出して。

そして一直線にそこを目指す。

そこにある——慎ましやかな膨らみへと。

「えいつ」

ふにつ、とした感触。

「っ——」

おっぱいを、揉んだ。

銀子にゃんのおっぱいを。両手でむんずと揉んでやった。

どうだい？　これが銀子にゃんを人間に戻す一番手っ取り早い方法だと思わないか

い？

まあね。確実にブチギレられてぶん殴られるだろうけどね、それでもいいんだ。

ここまでの諸々の謝罪の意を込めて、一発は銀子ちゃんにどつかれるとしようじゃないか。

……などと、俺はそう思っていたのだが。

「にゃあ」

——な、に？

「……えっ？」

「にゃあー」

銀子にゃんは、ただ鳴き声を返すのみ。

「……嘘だろ？」

「にゃ」

「え、だって……おっぱいだよ？」

両手をにぎにぎさせて、銀子にゃんのおっぱいを何度もみもみしてみても。

それでも……銀子にゃんは。

「うにゃん」

と、猫のように鳴くだけで。

「……え。ぎ、銀子ちゃん……怒らないの？」

「にゃあ」

「だって、おっぱいだよ？ 俺今おっぱい揉んでるんだよ？ ほら、もみもみーっと」

「にゃーお」

「…………マジ？」

反応が…………変わらない。

抱きついたり、猫吸いしたり、お皿で水を飲ませたりした時と全く同じ。

「なら…………これは？」

俺は次なる一手を打つ。

震える手をそつと動かして、恐る恐る銀子にゃんのスカートを捲つてみる。

「…………あ、ピンクだ」

銀子にゃんの下着が見えた。

すらつとした太ももの奥にある薄ピンク色のそれを俺がまじまじとガン見したつて。

「にゃあ」

「……………」

銀子にゃんは、ただ猫のように鳴くだけで。

「……………え。…………ちよつと、待ってね」

「にゃ」

なんだか…………怖くなってきたぞ。

俺はスカートから手を離して……銀子にゃんから距離を取るように一歩下がった。

「……なんだ？　これ……こんなこと……一体、これ、どういう事だ？」
分からない。

銀子にゃんの思考が読めない。

俺の目の前に居る存在が……誰よりも知っているはずのこの子の正体が分からない。
だって俺におっぱい揉まれて、パンツをまじまじと見られても怒らないなんて事あるか？

いや無いだろう、そんな事は。こんな事をしてあの空銀子が怒らないはずがない。
だったら銀子にゃんは今、その心中ではもの凄く怒っているはずなんだ。……それなのに。

なのに……こうしている今、銀子にゃんは怒る素振りすら見せやしない。

こんな事があり得るのか？　どうして銀子ちゃんは今ここまでされて怒らないんだ？
その答えは……猫真似をしているからか？

人間の言葉を喋れないから。いやそもそも猫はおっぱいを揉まれてもパンツを見られても気にしない生き物だから、だから怒らないのか。

本当は怒っていて、その怒りを我慢しているだけなのかもしれないけど……でも。

「……でも、銀子ちゃんがそこまでする理由ってなんだ……？」

そこまで怒りを耐える理由が。

そこまでして猫真似を貫く理由が。

空銀子が銀子にやんになってきている意味が……俺には全く分からない。理解出来ない。

ボケやおふざけで猫真似をしたりするような性格じゃない空銀子が。

おっぱいを揉まれてもパンツを見られても、それでも猫真似を止めない理由とは。

そんな理由が……あるか？

……いや。無い……と、思う。

「……だとしたら」

だったらこれは……もしかして。

もしかして……問題の大前提が違っていているんじゃないか？

「けれど……まさか……」

「にやあ？」

これは……答えとしては限りなく可能性の低いアンサーだとは思う。

しかし、この状況を説明するとしたら……俺にはもうこれしか思い付かない。

「……銀子にやん」

「にやあ」

「銀子にやん、きみは……」

震える声で、俺は言った。

「まさか……きみは……本当に猫になっちゃったんじゃ……!」

そう。つまりこれは猫真似などではなくて。

空銀子は本当に猫になったのだ、という可能性。

「にゃあ」

「……そうなのかい?」

「にゃ」

「違うのかい?」

「にゃー」

俺がどれだけ語り掛けても、銀子にゃんはやっぱりにゃあとしか返してくれない。

けれどもこれは猫真似なのか。これは人間が猫の真似をして鳴いているのではなく、

そもそも猫が猫として普通に鳴いているだけ……という可能性はないだろうか。

まさかそんな馬鹿な事を、と思うだろう。

いくら何でも現実的じゃない、とも思うだろう。

でもさ、考えてもみてくれ。

これは銀子ちゃんだ。空銀子ってのはね、もう存在自体が現実的じゃないんだよ。

だってこんなに可愛いんだよ?

この可愛さがもう現実的じゃないでしょ？

んで更に銀髪だよ？ 銀髪。こんなに可愛い銀髪美少女が現実世界にいると思うかい？

思えば俺は子供の頃からずっと思っていた。

空銀子という生き物は現実的じゃない。お婆けか、妖精か、それとも天使か。

それこそファンタジー世界の住人だと言われた方が納得出来る、それが空銀子なんだよ。

だからこそ——あり得る。

銀子ちゃんに限って言うなら、非現実的な事が起こり得る可能性は十分にあり得るんだよ。

「……だから、君は猫になった」

「うにゃん」

「神のいたずらか、きつと野良猫の魂が君の身体に宿っちゃったんだ。……そうなんだね？」

「ふにゃ」

「そうか、もう猫なんだから答えられないよね。……でも、きつとそれが答えなんだ」
多分だけ間違いはない。

空銀子は猫になった。ここに居るのは正真正銘一匹のネコなんだ。

「……もう元には戻れないのかな？ 銀子にゃんが銀子ちゃんに戻る事は……」

「にゃうん」

「分からないよね。そんな事……。君にとつても突然の出来事だっただろうし……」

「にゃあ」

「銀子ちゃん……」

もう……人間だった銀子ちゃんとは会えないのだろうか。

もしそうだとしたら……悲しい。それはとても悲しい事だと思う。

「……でも」

——でも。

銀子ちゃんと会えないのはとても悲しいけど、それでも悲しんでいる場合じゃない。

だって俺はこの子の恋人なんだから。

だったら俺は——改めて、猫に生まれ変わったこの子と向き合わなければ。

「……銀子にゃん」

「にゃ」

猫になった銀子にゃんと目が合う。

人間だった時から変わらない、綺麗な灰色の瞳を正面から見つめる。

「安心してくれ。君の事は……俺が飼うから」

「にやつ……!」

そうだ。猫となったこの子には飼い主が必要だ。

銀子にやんを迷い猫にしちやわない為にも……俺がこの子の飼い主になるんだっ!

「俺が飼ってあげるからね! 銀子にやつ!」

「うにゃあ……!」

俺は再び銀子にやんに抱きついた。

温かくて柔らかい飼い猫の感触を感じながら、そのままフローリングの床に倒れ込む。

「今日から君は俺のペットだ。いいね?」

「ふにゃああ……」

「よし。いい子だね、銀子にやん」

「にゃうん……」

そして俺は銀子にやんの左手を握った。肉球手袋をはめているその左手を。

もう二度とこの手を離したりはしない。この手を繋ぎ直した時、俺はそう誓ったんだ。

だ。

だから……その誓いを守る為にも、俺がこの子の飼い主になって生きていくんだ。

「空銀子が猫になったなんて知れたら将棋界は……いや、きっと日本中が大騒ぎだろうね」

「うにゃあ」

「でも大丈夫だよ。安心して。なにがあっても君の事は絶対に俺が守るからね」

「うにゃん……」

「お、喜んでくれているのかい？」

「にゃあん……」

すると俺の愛情が伝わったのか。

銀子にゃんは喉をころころと鳴らして、頬をすりすり俺の胸元に寄せてきた。

「そっかそっか。よーしよし、かわいいね」

「にゃうん……」

俺は飼い猫の頭を優しく撫でる。

すると銀子にゃんは心地良さそうに頬を緩めて幸せそうに微笑む。

「なでなで……」

「ふにゃあ……」

ああ、なんて可愛い猫なんだ。

人間だった頃も可愛かったけど、猫になってもやっぱり銀子にゃんは可愛い。

この子の笑顔が曇らないように、俺が飼い主としてしつかりしないと。

「俺が飼い主になった以上、銀子にゃんには沢山贅沢させてあげるからね」

「にゃ」

「キャットフードは最高級のを食べさせてあげるし、おやつもチャオちゅーるだって毎日のように食べさせてあげるからね」

「ふにゃ」

「猫用エステサロンだつて毎週連れて行つてあげるからね。金に糸目をつけないで贅沢して、君を立派なセレブ猫にしてあげるからね」

「うにゃあ」

「君は何も心配しないで、これから猫として自由気ままに生きればいいんだ。身の回りのお世話は飼い主である俺がしてあげるからさ」

「うにゃあん……」

にゃーんととろけそうな顔をしながら甘ったるい声で鳴く銀子にゃん。

まるでマタタビの匂いに当てられたみたいになににゃふになつて。その顔を見ていると、その声を聞いていると……なんかこつちまで嬉しくなつてきちゃうね。

「これがペットを飼う事による癒やし効果つてやつなのかな……」

「ふにゃあ」

「ああ、銀子にゃん……」

「にゃ……」

この腕の中に居る存在が、飼い猫という存在が今はとにかく愛おしい。

空銀子が猫になっちゃって。きつとこの先問題は山積みだろうけど……でも大丈夫。

この愛しい存在は俺が守ってみせる。飼い主は飼い猫の為ならなんだって出来るんだ。

「差し当たって……まずは食事か」

「にゃ」

「あと、君のおうちが必要だよ。室内に置く用のペットハウスを買ってこようかな」

「ふにゃ」

「あ、ペットハウスやだ？ 放し飼いがいい？」

「うにゃん」

「そっか。まあとりあえずペット用品が売っているお店に行って色々買ってくるよ。だから銀子にゃんはちよっとお留守番しててね」

「にゃ」

「こうしてペット用品を買いに行く為、俺は寝転がっていた床から身体を起こして。

「……あ」

だがその時。

ふと、脳裏の端で小さな疑問が生まれた。

「そういえば……野良猫の魂が銀子ちゃんの身体に宿ったって事は、元々の銀子ちゃんの魂は一体何処にいったんだろう？」

「にゃ？」

空銀子の身体には野良猫の魂が宿った。

その事はここに居る銀子にゃんが証明している。

だが……その場合、空銀子の身体から追い出された元々の空銀子の魂はどうなったのか。

「もしかして……野良猫の方にいったのかな？ 魂の取り替えつこの感覚で」

「にゃあ」

仮にそうだとしたら……それは。

猫になった空銀子がここにいるように、空銀子になった猫が何処かに居るという事になる。

この大阪の街の何処かに。空銀子の魂を宿した野良猫が存在しているという事だ。

「もしそうだったら……銀子ちゃんの魂は……」

「……にゃ」

人間としての意識を持ったまま、ある日突然自分が野良猫になったとしたら。

空銀子の魂がそんな状況にあるのだとしたら……きつと銀子ちゃんは今、困っているはずだ。

いや困っているどころか、あの子が野良猫として生きていくのは多分無理だと思う。まずエサが取れない。銀子ちゃんって運動神経悪いから獲物を狩る事とか出来なそうだし、コミュニケーション能力だつて低いから仲間の猫達から食べ物恵んで貰う事とかも出来ないはずだ。

それと寝床にも困るはず。あの子はケンカも弱いから縄張り争いだつて勝てないだろう。それに野宿とかも出来るタイプじゃないし……。

「銀子ちゃん……」

もしかしたら今……銀子ちゃんは。

猫社会の中から弾き出されて、何処かの公園の隅で小さく丸まって震えているかもしれない。

そんな銀子ちゃんの現状を想像したら……なんだか胸の奥がキュツと痛んで。

「……………」

「……………にああ」

あの子とずっと一緒に居た俺には分かる。

空銀子は猫として生きていく事なんて出来ない。

銀子ちゃんってのはそういう子なんだ。そもそもあの子が生きてくには将棋が無いと――

「――あ」

……そうだ。肝心な事を忘れていた。

「……将棋」

「……にや」

「そうだ。銀子ちゃんじゃないと……猫のままじゃ将棋が指せないじゃないか」

「……にやあ」

将棋。それは九頭竜八一と空銀子を結び付ける唯一無二の代物。

だって俺達は将棋で出会った。だから俺達の関係は将棋が無いと成立しない。

弟弟子と姉弟子という関係でも。

そこから進んで恋人同士になっただとしても。

どんな関係だったとしても、俺と銀子ちゃんには将棋が必要で……だからこそ。

「……銀子にやん」

「にゃ」

「……………ごめん」

だからこそ、俺は頭を下げた。

「やっぱり……………君の事は飼えない」

「にゃ……………」

この子の事は俺が飼うと宣言した、先程の言葉を自ら反故にした。

猫のままじゃ駄目なんだ。銀子にゃんとは……………猫とは将棋を指す事が出来ないんだから。

「俺は銀子ちゃんがいい。猫じゃなくて人間のあの子じゃないと駄目なんだ」

「にゃあ」

「この先銀子ちゃんと将棋が指せないなんて……………そんなの絶対に嫌なんだ」

「……………ふにゃ」

「だからお願いだ。銀子にゃん……………元の空銀子に戻って欲しい」

そう言つて俺は両手と額を床に付けた。

入れ替わった魂を元に戻すなんて。そんなのどうすればいいのか全く分からないけど。俺に出来る事なんて土下座くらいしかないけど……………それでもどうにかするしかない。

「頼むっ！ 銀子にゃん！ 元の銀子ちゃんに戻ってくれ!!」

「にゃ……」

「君が元の人間に戻ってくれるなら俺はなんだってする！ だから……どうか……!!」

それは心からの願いだっただ。

心の底から願った事で、その願いは遠い空の彼方にいる将棋の神様の元に届いたのか。

「……………」

「……………銀子にゃん？」

「……………」

長らくの沈黙の後。

「……………ふう」

と、息をつく声が聞こえて。

「……………はあ、疲れた。ずっと四つん這いになってたから身体が痛くなっちゃった」

その声は——！

「銀子ちゃん……!!」

俺は弾かれたように顔を上げた。

すると四つん這いの体勢じゃない、ちゃんと身体を起こした銀子ちゃんの姿があった。

「銀子ちゃん!! 元に戻ったんだね!!」

「……ええ、そうよ」

「良かった、良かったよお……!!」

「ちよ、ちよつと八一……!!」

ああ、良かった……!

感激のあまり俺は銀子ちゃんに抱きついた。

「ホントに良かった、銀子ちゃん……」

「……ん」

この感触はさつきまでと変わらないけど、それでもこれはもう猫じゃない。

銀子ちゃんは人間に戻ってくれた。俺と一緒に将棋を指す事が出来る唯一無二の存在に。

「野良猫に宿った君の魂が元に戻らなかつたら……俺、もうどうしようかと……」

「大げさよ、そんな……」

「あそうだ、野良猫になっっている間になにか危険な目に合わなかつたかい? 近所のボス猫からいじめられたりしなかつた? 怖い人間からエアガンで打たれたりしなかつた?」

た？」

俺がそう尋ねると、銀子にゃんは呆れたように半眼になって。

「しないわよ。ていうかね、私は別に野良猫になってたわけじゃないから」

「えっ、そうなの？ 野良猫と魂が入れ替わってたわけじゃないの？」

「当たり前でしょ。魂の入れ替わりなんてそんな事が起こるわけじゃない。バカ八

一」

「……そっか」

どうやら魂の入れ替わりではなかったらしい。

野良猫になった銀子ちゃんが困っているはず……というのは俺の取り越し苦労だっ

たみたいだ。

「まったく……ほんとにバカなんだから」

そう呟いた銀子ちゃんの表情は、猫だった時よりも赤く染まっていた。



こうして、空銀子は人間に戻った。

がしかしこれで全てがハッピーエンドとはならないもので。

「……とところでさ、銀子ちゃん」

「なに？」

「ちよつと聞きたいんだけど……どうしてこんな真似をしたのかな？」

そして、最後に残った最大の謎。

この部屋を訪れて、銀子にやんと遭遇した当初からずつと疑問に感じていた事。

「こんな本気の猫真似なんてして……一体どういう理由で？」

空銀子と野良猫の魂が入れ替わった……という説は間違いだった。

となるとやっぱり、銀子ちゃんは最初からずつと猫真似をしていたという事になる。

しかし……何故。どうして。

どうして空銀子は、あんなにも頑なに猫真似を貫いて銀子にやんとなっていたのか。

「……………」

「銀子ちゃん？」

その疑問を尋ねてみると、銀子ちゃんは顔色を読ませないような表情でゆつくり口を

開いて。

「……八一」

「なに？」

「あんださつき、私が元に戻るんだったらなんでもするって言ったわよね？」

「え、あ、うん、言ったけど……」

「だったらこの件について一切の詮索をする事を禁ずるから」

「えっ」

「勿論今日あった事を口外するのも絶対に禁止。いいわね？」

「え、でも……」

「でもじゃない。返事は？」

「……はい」

こうして、それを尋ねるのは禁止となった。

ハロウインの日に起こった銀子にやん事件は、最大の謎が残される事となったのだ
た。

短編 10月31日の奇跡（の裏側）

「あ……そういうえば、ハロウィンだ」

ふと気付いて、呟く。

ほんの数秒前まで、私は八一と電話をしていて。

そしてスマホ画面の通話OFFの表示をタップして電話を切った、その直後。

「来週の土曜日って10月31日じゃない。ていうかあいつも気付いてなかったわね」

八一との電話の中で一番の話題となった事。来週の土曜日。10月31日の予定。

お互いのスケジュールが空いていたので、ならばと久し振りにあの部屋で一緒に研究会をしようかと決まったその日は……世間一般ではハロウィンというイベントがある日だ。

電話中は10月31日がハロウィンだって事をすっかり忘れていた。私に限らず八一の方も言い出さなかった辺り、きつとあいつも約束した日がハロウィンだと気付いていないに違いない。

「ハロウィンかあ……」

ハロウィンとは。なんかこう、仮装というか、色々なコスプレとかをして騒ぐ行事だ。昔はそうでもなかったと思うんだけど、最近では結構大きなイベントになっていって、そして、東京の渋谷の街とかでは大勢の人がコスプレをしてハロウィンを楽しんで、その結果騒動になったり溢れ返るゴミなどが問題になっている。

……みたいなネットニュースを去年のハロウィン終わりに見たような記憶がある。

「ハロウィン……ハロウィン、か」

でも……ハロウィンねえ……。

正直に言ってしまうと、私はハロウィンというイベントについては大して興味が無い。い。

コスプレをする事も、そういう行事だからと街に繰り出して知らない誰かと一緒に騒ぐ事も。それは私の人生において不要なもの、関わり合いになる必要のないものだと感じていて。

だから私はこれまで10月31日になったからと言って特別な何かをした事は無かった。

「……けど」

と呟き、私は思案げに顔を伏せる。

これまではそうだった。けど……今年のハロウインはこれまでとはちよつと違う。だって……ね？　今年のハロウインはき、八一と一緒に過ごすハロウインになるわけ。

別にそれ自体は初めてじゃない。子供の頃なんかは当然のように毎年一緒にいたわけで、八一と一緒に過ごすハロウインだからどうのこうのってわけじゃないんだけど……。

つまりは……ね？

ほら、今年は……その、ね？

その……こ、恋人と、一緒に、二人きりで過ごす初めてのハロウインになるわけで。

「……なにか、した方がいいのかな？」

そういう意味での、特別なハロウイン。

これまでとは違うのだから、これまでとは違う事をした方がいいのかもしれない。

ハロウイン当日を一週間後に控えて、この時の私は自然とそんな気分になっ

ていて。「……ふむ」

特別なハロウインを楽しむ、これまでとは違う特別な何か。

イベント事には興味の無い私だけど……でも、せつかく八一と一緒に過ごせるんだから……。

「ハロウィンと言ったら……やっぱり仮装だよね」



そして、一週間後。

今日は10月31日。ハロウィン当日。

待ち合わせ時間の一時間程前、一足先に私はこの801号室にやって来て準備をしていた。

「……受け取りよし、つと……」

玄関ドアを閉めて、カチャリと鍵を掛ける。

私の腕の中には両手で抱えられるサイズのダンボール箱が一つ。

この箱は今しがた配達員のお兄さんから受け取ったもの。今回の特別なハロウィンを楽しむ為に用意した仮装アイテムである。

「本当は実物を見て選びたかったんだけど、さすがに今はちよつとね」

今の私はちよつとした有名な人だ。……ううん、ちよつとしたでは済まないかな。

前からそうだったんだけど、特に先日昇段を果たして世界初の女性プロ棋士になった事で、これまで以上に世間の注目の的になってしまった。

特徴的な外見も相まって外を出歩けば空銀子だと気付かれない事の方が少なく、そんな状態じゃやおちおち買い物もしてられないので、ハロウインの仮装アイテムについてはネット通販で済ませる事にした。

受け取りのタイミングが合うかどうか心配だったんだけど、配達時間を指定するサービスを利用したおかげでこの通り問題無く、この部屋に八一がやって来てしまう前に受け取る事が出来た。

「さてと……」

そんな経緯で届いたネットショッピング印のダンボール箱を開封して。

その中にあつたのは――

「……あ、実際に見ると結構かわいいかも」

それは――猫耳。猫耳付きのカチューシャ。

そして肉球型の手袋。

更には細長い尻尾。

これが私の用意したハロウィン用アイテム。猫のコスプレ一式セットである。

ちなみに今回届いたのはこれらのアイテムだけで衣装は購入していない。

商品ページにサンプルとして載っていた衣装、猫のコスプレに合わせたファンシーな衣装とかにはちよつとだけ興味はあつたけど、ネット通販じゃサイズが合うかどうか

よく分からなかったので見送る事にしたのだ。

そしてこれは余談になるけど……どうして私は今回この猫のコスプレを選んだのか。これに関して言うとは別に他意は無い。ただなんとなく猫にしようかなって思っただけ。

まあ強いて言うなら……ハロウィンとはいえあんまり奇抜な仮装をするつもりは無くて。

それでどうしようかなーって考えていたら、以前に桜ノ宮で着たアレの事を、八一に将棋で負けてコスプレをする羽目になったあのデンジャラスな格好の事を思い出した。

勿論あんな露出の多い格好をするつもりなんて金輪際無いんだけど、それでもあの時身に付けていた耳とか尻尾は生かせるのでは。

そんな事がアイディアとなつて、最終的にだったら猫にしようかなと思つたってわけ。

それに……ほら、八一のやつもね？

桜ノ宮の時はちよつとテンションがおかしいぐらいに喜んでくれていたから……。

……だから、まあ、他意は無い。うん、無いっつたら無いの。

「仮装と言うにはシンプルな格好だけど、あんまり変に気合を入れるのもあれだしね」
猫のフェイスペイントとかをするならともかく、ただ単に猫のアイテムを身に付ける

だけ。

最近のハロウインの傾向からしたら面白いのな、仮装かもしれないけど、これまで仮装なんかした事の無いハロウイン初心者の方がするにはちよつどいい塩梅つてやつよね。

それに言つてしまうと、そもそも今日の目的はハロウインが主題ではない。目的はあくまで将棋の研究会であり、そこを履き違えない為にもこれぐらいの格好がベストだろう。

……と、そろそろ待ち合わせの時刻が近い。

八一が来る前に仮装を済ませちゃわないと。

「これ尻尾はどうやって……あ、紐で腰に巻き付けるんだ。なるほど……」

洗面台にある鏡の前に立つて、猫用コスプレアイテムを一つ一つ身に付けていく。

愛用のカチューシャを外して、猫耳付きのカチューシャに付け替えて。

紐で腰に撒いた尻尾はスカートの上に出して。肉球の手袋をはめてつと……よし、完成。

「……うん、まあまあいいんじゃない？」

鏡に映るのはネコの仮装をした私。

頭に猫耳が生えて、お尻に猫尻尾が生えて。両手には肉球が付いた空銀子の姿。

少々恥ずかしい格好だとは思うけど……けど。

「にやあ、にやあ……って感じ?」

ちよつと乗り気になった私は両手を丸めて、しなを作つて猫っぽいポーズを取つてみる。

そして「にやあ」と鳴いてみれば。これはもう何処から見ても立派な猫だ。

猫コスプレの上に猫のポーズと猫の鳴き声。

高校生がするにはちよつと幼稚というか、多少の痛さはある。……けど、それが許されるのがハロウィンというイベント、年に一度ぐらい羽目を外したつていいよね。

……と、そのように考える事が。普段はそんな事を考えないはずの私が、将棋にしか興味を示さない空銀子がそういう考え方になる事こそ、ハロウィンの魔力と言えるのかもしれない。

「あそうだ。どうせだったたら本気で猫真似をしてみようかな」

それもお会い頭に。

この部屋に八一がやって来たら、猫になりきつて出迎えるというのはどうだろう。

「そしたら絶対驚くわよね。なんせ八一は何も知らないんだから」

一週間前のあいつは今日がハロウィンだって事に気付いていなかった。

もしこの一週間の内に気付いたとしても、それでもお会い頭なら警戒はしていないは

ずだ。

なんら警戒していない中、まさかの猫になっている空銀子を目撃したらどうなるか。「こんな仮装までしたんだし……驚かせてこそそのハロウィンよね」

ネコの格好をしてにゃーと鳴く私を見たら、八一は間違いなくビツクリするはずだ。その時のあいつの表情を想像すると……ふふつ、なんかちよつと楽しくなってきたかも。

「……ようし」

そんな気分になった私は間違いなくハロウインの魔法に掛かっただけ。

ちよつと大きめだった肉球手袋の中、気合を込めて両手をぎゅつと握り締めた。

そして、それから10分程経って。

律儀にも待ち合わせ時間のちょうど5分前、ピンポーンとチャイムが鳴らされた。

「っ、来たっ！」

洗面所に続く廊下の角、私は猫のように四つん這い状態になって待機する。

二度三度と鳴るチャイムを無視していると……私がまだ到着していないと思ったの

だろう、合鍵を使って鍵が開けられて。

そして、ゆっくりと玄関ドアが開かれる――

――よし、今だっ！

「にゃー」

「は？」

聞こえたのはそんな一言。

その表情はほかんとしていた。

全ての思考が抜け落ちたような表情をしていた。

そして身体の力まで抜けたのか、八一の右手が握っていたレジ袋がドサリと玄関に落ちた。

「にゃー」

「……ね、ん？」

そう。ねこだ。

今の私はねこ。ネコ。猫。にゃー。

「……え。なんで、ネコ？」

「にゃー」

「……えーと」

「にゃー」

ふふふつ、驚いてる驚いてる。

八一のやつ、見るからに動揺しちやつてる。頭の中が真つ白になつてゐるって感じかしら。

まあそれも仕方ない。それ程に今回は私の奇襲が見事に決まったからね。

空銀子が必要な鬼手を指してくるなんて、さすがの竜王でも想像していなかったに違いない。

将棋の序盤戦法では奇抜な手は指せない私でも、こういう奇襲なら出来るって事なのよ。

「にゃあ」

「……猫、か」

「にゃん」

「……そうか」

私が繰り出した猫真似奇襲戦法を受けて、大いなる戸惑いと混乱の中にいた八一だったが。

けれどもようやく目の前にある現実を頭が認識し始めたのか、ふう、と息をついた後。

「……まず、何故ここに猫が居るのか、だけど」

お？

「この猫は首輪をしてない。て事はペットショップとかから買ってきた猫ではないはずだ」

「にゃ」

「んでここつて八階だし、まさかペランダから忍び込んだつてわけでもないよね？」

「にゃん」

「てことは銀子ちゃんが拾ってきたのかな。で実家の方は親御さんに駄目って言われたからとりあえずここに連れてきた……みたいな流れかな？」

おお。八一のやつ、この場の流れに乗ってきた。

まともに奇襲を食らった状態で、その上で私の仕掛けた戦型に合わせて来たつてわけね。

劣勢でも逃げずに迎え撃とうとするだなんて、さすがは竜王、いい度胸してるじゃないの。

「にゃお」

私の読みでは「銀子ちゃん、なにしてるの？」とか言ってるだろうと思ってたんだけど。

そしたら「ハロウィンよ、驚いたでしょ？」とか言つて人間に戻ろうかなって思つてただけけど……でも、八一が乗つてくるんだつたら私ももう少しだけ猫真似を付き合つてあげようかな。

傍から見ればバカバカしいやり取りだろうけど、そこはやっぱりほら、なんと云つてもせつかくのハロウィンなわけだしね。

「そつかあ……拾い猫かあ……」

「にやあ」

「てことは野良猫か、それとも捨て猫だったりするのかな？　漫画とかでよくある『拾つて下さい』って書かれたダンボールの中に居たとか」

違いますー。

私は野良や捨て猫なんかじゃなくてちゃんとした家猫なんだから。

「拾つてきたつて事は、もしかして銀子ちゃんはこの猫を飼うつもりだったりするのかな？」

「にやあ」

「まあペットを飼う経済力は問題無いだろうし、猫はペットとしては一般的だからそれなりに飼いやすい生き物だとは思うけど。でも野良の猫つて病気があつたりするから一度獣医さんに見せなきゃいけないかつたりするんじゃないか？　そこら辺の事

知ってんのかなあ銀子ちゃんは

「うにゃあ」

病気なんて無いわよ。失礼な。

ちやんと予防接種だつて受けてるんだからね。……インフルエンザのだけど。

……とか、猫になりきつて猫みたいな事を考えていると。

靴を脱いで玄関を上がった八一が私のそばに近付いてきて、腰を屈めて手を伸ばす。

「なでなで」

「……にゃ」

八一の手が、私の頭を優しく撫でた。

「おお、この手触りは……ふわふわしてる」

「……ふにゃ」

ん……まあ、中々悪くない手付きね。

雑に撫でたら引つ搔いてやろうと思つてたけど、これならまあ……まあ許そうじやないの。

私的には右手で撫でたのが高ポイントだ。やっぱり右手はいいよね。にゃあ。

「うーん、これは確かに……猫を飼いたくなる人の気持ちも分かるなあ」

「……うにゃん」

「なでなで、さわさわ……」

「……にゃあ」

うう、なんかくすぐったいよお。

こうやって八一に撫でられると背筋がぞわぞわしちやって、思わず身をよじってしま
う。

「にしても綺麗な銀毛だな……そういえばこの猫って品種は何なんだろう」

「うにゃん」

けど、そんなくすぐったさとは別に。

今の私には不思議と奇妙な感覚があつて。

「猫の品種つてあんまり知らないんだよなあ。アメシヨールとかマンチカンとか、そんな
んだっけ」

「にゃん」

「まあいいか。そういう込み入った話は銀子ちゃんが戻ってきてからにしよう」

相変わらず八一はこの場の流れに乗って、私の事を本物の猫のように扱っている。

だから私もその流れに乗って、こうして猫真似を続行して猫のように振る舞つてい
る。

それはハロウィンだからこそ許される、ハロウィンの魔力によって出来上がった光景

だ。

……そのはず、なんだけど。

「……にゃお」

……なんだろう。

なんか……何かがしつくりこない。

不思議と奇妙な感覚がある。……違和感がある。

今日は10月31日、ハロウィンだ。

だからこそ私はこうして猫の仮装をして、猫になりきって猫真似をしている。

それで問題無いはずなのに……けれど、なにかが間違っているような気がしてならな

い。

なんだろう。何が違っていているんだろう。この違和感の原因はなんだろう。

まるで攻めているはずなのに、しかし詰みの一手が一向に見えてこないような。

正しい一手を打っているはずなのに、徐々に追い詰められていくかのような。そうい

う判然としない気味の悪さみたいなものがある。

そもそもハロウィンって……これであってるのかな？

ハロウィンって猫真似をして猫になりきる行事だったっけ？ それとも、もつと別の

「ほら、おいで猫ちゃん。お菓子……は食べさせちゃマズいだろうから、お水を飲ませてあげる。ミネラルウォーターなら大丈夫だよね」

「にゃー」

八一がリビングへと歩いていく。

私はなにかがおかしいと首を傾げながらも、四つん這いで歩いて八一の後に続く。

「……さてっと」

そうして八一はリビングにあつた座布団の上に腰を下ろして。

「……あのさ」

「にゃあ」

ここからが本題とばかりに。

猫となった私を見つめながら、言った。

「……そろそろ良くないかな？」

「にゃー」

「いやあの、にゃーじゃなくてさ。この流れ……まだ続けるの？」

「にゃー」

……む。これは……。

先程までみたい私を猫として扱わず、八一は普通に話し掛けてきた。

さてはこいつ……痺れを切らして攻めに転じるつもりのようなね。

「あの……銀子ちゃん？」

「にゃあ」

猫の鳴き声で答える私の一方。

「だからにゃあじゃなくて」

「ふにゃ」

八一は「そろそろおふぎけはいいよね？」と言わんばかりの表情をしている。

……さて、どうしよう。

八一がこの手を打ってきた以上。ここでハロウインはお開きにしたっていいんだけど。

「どう？ 面白かったでしょ？」とか言いながら肉球手袋を外してもいい頃合いなんだけど。

「……銀子ちゃん」

「にゃ」

「……………」

「うにゃん」

「……………」

「にゃ?」

……そろそろ、こんな猫真似は終わりにして。

人間に戻るべき頃合いだって、そんな事は分かっているんだけど。

……でも。

「どしたの?　なんで突然ネコに?」

「にゃー」

「にゃーじゃ分からないって。猫語で喋るのは止めて人の言葉を使ってくれよ」

「にゃあ」

「いやだから……」

「ふにゃ」

……でも、どうしてなのか。

それでは危険だと、それでは大頓死しかねないという予感がある。

ここで猫真似を止めてはならないと……私の本能がそのように警鐘を鳴らしていた。

「でもなあ。この子が研究熱心なのは今に始まった事じゃないしなあ」

「うにゃ」

「だつたらなにか……何かしらの理由があつての行動だつたり?」

「にゃお」

理由？

私が猫真似をしている理由なんて……そんなのハロウィンだからに決まってる。

それなのに。今日はハロウィンだからにも間違っていないはずなのに、私はどうして

「……まさか、ハロウィンだからってこと？」

あつ——

「いや違うか。ハロウィンだったら相手を怖がらせるおぼけとかの仮装なはずだし、なによりもトリック・オア・トリートって言うはずだしな」

………あ。

そっか。やつと違和感の正体が分かった。

答えはそれだ。私のハロウィンにはトリック・オア・トリートが無かったんだ。

ハロウインの合言葉。いたずらか、お菓子か。トリック・オア・トリート。

それが無いから違和感があった。いたずらも、お菓子も、そのどっちも存在していない私のハロウインはどうにもハロウインらしくなかった。

更に言えばかぼちゃのおぼけ、ジャック・オー・ランタンとかも居ないし、なんか考えれば考える程にハロウインに必要なものが尽く足りていないような気がしてきた。

「………にやあ」

……え。ちよつと待つて。

だとしたら、今私がしている行為ってなに？

猫耳と猫尻尾と猫肉球を付けて、猫真似をしながらにゃーと鳴いて。

トリック・オア・トリートもないのに、しきりににゃあにゃあと鳴くだけで。

……これ、ハロウインかな？

……ううん。これハロウインじゃないよね？

「そっだよなあ。あの銀子ちゃんがそんな馬鹿げた真似をするはずないよなあ」

「にゃ……」

瞬間、喉の奥がきゅつと締まった。

一瞬息をする事が出来なくなった。呼吸が止まりかけてしまった。

——馬鹿げた真似。

言われてしまった。まさか八一からそんな酷い言葉を言われてしまった。

しかし……悲しいかな、今の私にはそれが見事に的を射た発言だと思えてならない。

ど……どうする？

どうしよう……ど、どうしようっ！

なんかっ、なんか今更ながらにメチャクチャ恥ずかしくなってきたんだけど!?

だってこんな、こんなのハロウィンじゃない!

ていうかなにしてんの!? なに私ってば猫になりきってにやあにやあ言ってるの!?

バカじゃない!? アホなんじゃないの!? 頭おかしいんじゃないの!?

ううんでも待って! 違うの! さっきまではこれで良かったの!

だってさっきまではこれがハロウィンだと思っていたから、だから気にならなかったの!

ちゃんとハロウィンしてるつもりだったのに……でも、これは違うって気付いちやつたから。

そしたらなんかもう……む、むり。マジむり。

ハロウインの魔力が消えちやつたら……私のしていた行為はただの奇行ではないか。

「だとするとこれはなんだろう……猫の日はにやんにやんにやんで2月22日だったはずだし……やっぱイベントとかは関係無いのかな?」

私が猫真似をしている理由を。

その真相をまさかハロウィンだとは思わない、思ってくれない八一ははてなと首を傾げる。

……どうしよう。どうやってこの状況をやり過ごそう。

これじゃあ人間に戻れない。ここで人間に戻って八一に「なんでこんな真似してたの？」って聞かれたら私は返す言葉が無い。

ハロウィンだから猫真似してたなんて知られたら馬鹿にされる。あるいはその逆に八一は私を生暖かい目で、かわいそうな子を見るような目で見てくるかもしれない。そんなの絶対耐えられない。

「だったら猫真似をする意味とは一体……ただ単に猫の可愛さを俺にアピールしてる、とか？」

「にや」

「あ、そうなの？」

「にやあ」

「それ、どつちのにやあ？」

「うにゃん」

人間に戻る事が出来ず、八一の質問に答える事も出来ない。

ひたすら猫真似を続けてにやあにやあと鳴きまくる私。……泣きたい。

成功したかのように見えた私の奇襲は結果的には悪手だった。

八一の攻めによってハロウィンの魔法は消されてしまい、私は劣勢へと追い込まれた。

……けれど、それでも私は棋士だ。

地獄の三段リーグを乗り越えて、私だってもうプロの棋士の端くれだ。

窮地に追い込まれても頭を絞って、逆転の一手を捻り出すのがプロの棋士たる姿なはずだ。

だから私は諦めない。

どうにかこの状況を乗り切ってみせる。

八一を……竜王を倒してみせるっ！

「……なるほど。それはアリだな」

「にゃー」

そこで私が考え付いた一手。

それはもう攻めの手は変えずに攻めきる事。このまま猫真似を貫き通してしまう事。

意地を張っても無駄だ。と思うだろう。

それに何の意味があるのか。とも思うだろう。

けれどもそうじゃない。棋士としての私の考えは異なる。

ここで意地を張る行為には意味があるのだと、私の読みがそう言っている。

何故ならここで重要なのは八一をどう倒すか、という事だからだ。

一見バカバカしい行為に見えても、それで八一を詰ませてしまえば私の勝ちなのだ。

だから私には勝算がある。私は八一と勝負をして勝つつもりでいる。けれども八一は私と勝負をしているつもりなんてないはずだ。つまりはそこに勝機がある。

「ふにや」

「そうか……そういう事なんだね？ まったく可愛いヤツめ、うりうり」

「にや、うにやあ……」

すると何を思ったのか、八一が両手で私の頭を抱えてわしわしと撫で回してきた。

む。さつきとは違ってこうしてちよつと雑に撫でられるのも……それはそれで悪くはない。

だから抵抗はしないで頭を撫でさせてあげた。今日はもう猫を貫き通すのだ。にや。

「まあこの際理由はなんだっていいや。とにかく銀子にゃんは人間じゃなくて猫、今日はどうとことんネコを貫き通すつもりなんだね？」

「にやあ」

「そっか、分かったよ」

私が人間には戻らないと察したのか、八一は大きく頷いた。

「……よし。この子はネコだ」

「にやあ」

「ここに居るのは一匹のネコ。猫にしてはちよつと身体の大きめなこの子の名前は銀子にゃん」

「にゃお」

その通り。私は空銀子ではなく銀子にゃんだ。

私は自らの事前研究を信じる。準備していた猫真似奇襲戦法で八一を投了させてみせる。

だったら本気で銀子にゃんになりきらねば、最強の竜王を倒す事なんて出来ないだろう。

だから私は猫になるんだ。

さあ八一、掛かってきなさいにゃん！

……とか、思っていたら。

「——銀子にゃんっ！」

「にゃっ！」

それは突然だった。

ほんとに突然八一が飛び掛かってきたっ！

な、まさか、ここにきて更なる攻めの手を!?

ていうか掛かってきなさいってのはそういう意味じゃないんですけど!?

「ああ銀子にゃん銀子にゃんっ!! 銀子にゃーんっ!!」

「にゃ…………ふにゃ…………!」

な…………なんだこいつ!?

八一のやつ、一体どうしちゃったの!?

「ああ可愛いっ! かわいいかわいい銀子にゃんかわいいにゃんっ!!」

「にゃにゃ…………にゃ…………」

抱き付かれたまま床に倒れ込み、そのまま私は八一に揉みくちやにされた。

後頭部に顔をぐりぐりと押し付けられたり、互いの頬を合わせて頬ずりされちゃった

り。

「ああああ銀子にゃああん…………猫なんて駄目だよそんなの俺もう駄目になっちゃうよお

…………!」

「…………ふにゃ」

「ああかわええかわええ…………猫になりきってる銀子にゃん激ヤバかわ萌え萌えきゅん

…………!」

「…………うにゃあん」

…………八一が、壊れた。

というか、とつくに壊れていたのかも。

思い返せば桜ノ宮の時も、八一は興奮し過ぎてヤバいテンションになっていた。

もしかしたらだけど……八一はコスプレをした私という存在に弱いのかもかもしれない。

全く、このバカときたら。

……まったく……八一つてば……。

八一つてばあ、ほんとに私の事が好きなんだから……もう……♡

「あそうだつ！ 俺さ！ 猫飼ったら猫吸いやつてみたかったんだよね！ 猫吸い！」

「にやあ？」

ねこすい？

「猫吸い！ 知ってる!？」

「にやん」

「知らないかな!? まあどつちでもいいか!」

なんだろう、ねこすいって。

ねこすい、ねこすい……猫水？

あ、あれかな？ 電柱の周りとかに猫避けとして置いてある水の入ったペットボトル

の事？

「はい銀子にやんつ！ 仰向けになって!!」

「にや……」

テンションが上がっている八一の勢いに流されるがまま、私は仰向けの体勢になる。

「とうっ！」

すると八一の手がシュバツと伸びてきた。

その手は私のセーラー服のすそを掴んで……そのまま一気に胸元まで捲くり上げ

たあ!?

「にや!?!」

ちよっとお!?! こいつまさか私を脱がせるつもりなんじゃ!?!

とか思ったのもつかの間、露わになった私のお腹に向かって八一が頭から突っ込んで

きた!!

「ふにやつ!?!」

「はあああく……猫だあ……!?! これが猫吸いかあ……!?!」

「……にや、……にや」

こ、こいつ……私のお腹の匂いを嗅いでる!?!

これがねこすいななの!?! 私が想像してたのと全然違うんだけど!?!

「くんくん、クンクン!! ああいい匂い、銀子にやんのいい匂いがするよお……!?!」

「……にやう」

こ、このバカ、このばかあ……………!

だつてこんな……………こんなの、恥ずかしいよお。

親しき仲にも何とやらだ。いくら恋人だからって女性の体臭を嗅ぐのは駄目だと思
う。

ていうかこいつ……………さてはこれが狙いか。

私が猫になりきつてるのを良い事に、猫と触れ合う体であれこれ好き勝手楽しむつも
りか。

「にやおおおん…………… 銀子にやあん……………!」

「……………にやあ」

今の状況を勝負と見なして、あくまで勝つことを重視している私の一方。

そんなつもりは無い、勝負だとは思っていない八一はただ実利を求める方針らしい。

追い詰められて切羽詰まつてる私をよそに八一はいい思いをして……………くう、悔しい。

「……………ふにやあ」

けれどもこうなると、次に八一が何を仕掛けてくるかはある程度読む事が可能だ。

こいつの事だからきつと、きつと……………もつとエツチな事、とかを……………つ!

「よし、なら次は……………」

「にや……………」

「あそうだ。さつきお水を飲ませてあげるって言ってたよね。用意してくるよ」

そう言つて八一は身体を起こすと、持参したレジ袋を持つてキッチンへと向かった。

……つて、お水？ 次の一手はお水なの？ そろそろ一息入れて休憩するつてこと？

ここで緩急を付けてくるとは私も読めなかった。さすがに童王の攻めは変幻自在だ。

「はいどうぞ。銀子にゃん」

八一はすぐにキッチンから戻つてきて。

さあ飲んでいいよ、とばかりにお水をくれた。

……底が浅めなお皿に水を汲んで。

フローリングの床に直接それを置いた。

「……にゃ」

……こ、こう来たかあ……。

本当にこいつは骨の髄まで童王だ。こんな妙手が私に読めるはずがない。

「ふにゃあ……」

目の前に置かれたお皿の意味は明らかだ。

これはつまり手を使わずに舌を使って、猫のようにべろべろ舐めろと言っているんだ。

犬猫のように水を飲めと命じるに等しい、まさにペット扱いだ。

しかし私が猫真似を貫こうとする以上、その一手は文句の付けようが無い完璧な対応だ。

その上でこんな辱めを与えて私の心を折ろうとしてくるだなんて、これが竜王の恐ろしさか。

「……にゃ」

私は……どうすればいい？

ここで八一の迷惑通り、四つん這いになって舌でペロペロと水を飲んじやったら。

そんな事をしちやったら、その時は人間として大切なものを失ってしまうような気がする。

がしかしここで人間に戻る事に逃げたら、その時点で私の敗北が決定してしまう。王手飛車取りを受けたにも等しい絶望的な局面だ。

「にゃ……にゃ」

すぐ隣から八一の視線を感じる。

私が如何なる応手で返すのか、八一も固唾を飲んで見ている。

ここで逃げる事は簡単だ。

い。ただど暴虐無比な竜王に勝とうと言うなら、逃げの一手では勝機なんて見えてこない。

だったら……っ！

「……にやう」

私は両肘を曲げて低く屈んだ。

そして顔をそーっとお皿に近付けて……。

「……（ぺろぺろ）」

と、私が舌を使って水を舐め取った瞬間、八一がハッと息を飲んだのが分かった。

「にやあ……」

く、屈辱……！

八一が見ている中で、こんなほんとに猫みたいな恥ずかしい行為をお……！

舌先に冷たい水の感触がする。けどそんなの分からないぐらいに顔が焼けるように

熱い。

「……にやあ、にやあ」

「ぎ、銀子にやん……！」

ええそうよ。私は銀子にやん。

勝利の為に人間としてのプライドを捨てた一匹のネコ。笑いたければ笑いなさい。

「……や、ヤバい」

けれども八一は笑いはず、むしろその声は恐怖か何かによつて震えていた。

「どうやらこの水飲みによって多大な影響を受けたのは私だけではないようだ。」

「……よし、お水は終了だ」

「にや……」

横からスツと八一の手が伸びてきて、私がお水を飲んでいたお皿をそつと取り上げた。

「ほら銀子にやん、もう身体を起ここして」

「にやあ」

そして言う通りに身体を起こす。

なんだろう、八一のやつ。自分からさせておいて急に止めさせるとはどういう事か。

さすがにこの水飲みは恋人にやらせるには可哀想だと思ったって事かな？ だった

らさせる前に気付いて欲しかったんだけど。

「でもさすがは銀子にやんだね。手が出せない状況でもこんな方法で攻撃してくるなんてさ」

「にや?」

攻撃?

「だから……お楽しみはここまでにして、そろそろ銀子にやんを人間に戻そうか」

「うにや?」

私を人間に戻す？

そう言い切るって事は、まさか……八一は勝負を決めるつもりなのか。

「……にゃん」

となればここは……ここが勝負の分かれ目になるかもしれないっ！

ここで八一が放つ一手を。その読みを私の読みが上回っていたなら、きつと——
「てなわけで……いただきます」

「にゃあ」

そして、八一が両手を前に出す。

それは一直線に向かってくる。

その手が——私の胸元へと。

「えいっ」

瞬間、身体を走るぞくつとした感覚。

「っ——」

おっぱいを、揉まれた。

八一の両手に。私のおっぱいはむんずと驚掴みにされてしまった。

なるほどこれが私を人間に戻す方法か。

さてはこいつ死にたいらしいな。だったらお望み通りぶちころしてやろうじゃない

の。

と、私の中の空銀子がそう言っていた。けど。

……けどっ！

「にゃあ」

と、鳴いた。

全神経を集中させて、表情も声色も一切変えないよう細心の注意を払って。

胸部に触れられたって気にしないネコのように、銀子にやんになつてにゃあと返した。

「……えっ?」

「にゃあー」

「……嘘だろ?」

この返しが余程想定外だったのか、八一が驚愕に目を見開いた。

どうだっ！ これは効いたはず！ 私のカウンターパンチが八一の急所に刺さった

！

だって、これは分かった！ これは少し前の時点でもう読んでたんだからっ！

猫になった私に対して、このバカがエッチな事をしてくるなんてのは想像が付いたっ！

展開がエスカレートしていけばやがてはおっぱいに手を伸ばす事なんて、そんなのはこいつの恋人である私にとっては三手詰めを解くよりも容易く読めた事だ。

だから私は「にやあ」と返せた。

事前に読んでいたからこそ、おっぱいを揉まれても無反応を貫き通す事が出来た。

ここは私の読み勝ちだ。どれだけ恐ろしい竜王の攻撃だからってね、すでに読み切っている攻めの手だったなら全然怖くないんだから。

「にや」

「え、だつて……おっぱいだよ？」

「うにゃん」

驚愕しながらも八一は私の胸を揉む……が。

ふふん、残念だったわね。そんなの無駄よ。

そんな陳腐な攻撃では私を人間に戻す事なんて出来やしな。分かったら諦めなさいな。

「……え。ぎ、銀子ちゃん……怒らないの？」

「にやあ」

「だって、おっぱいだよ？ 俺今おっぱい揉んでるんだよ？ ほら、もみもみーつと」

「にゃーお」

……あの、もう、それは無駄だから、ね？

だから、もう、負けを認めて……そろそろ、揉むのはやめてつてばあ……！

「……マジ？」

と呟いた八一は明らかに動揺していると分かる表情をしていた。

だがさすがにこの一手だけでは竜王を追い詰めるには足りなかったのか。

「なら……これは？」

続けて更なる攻撃が来た。

八一はその右手をゆっくりと伸ばして……その指が、私のスカートの、すそを。

「……あ、ピンクだ」

ぴらつと捲られた。スカートを捲られた。

……ここ、こいつうー！ おっぱいだけじゃ飽き足らずにパンツまで見おつたなあ……

!!

——けどつ、ここは我慢だつ!!

ここはなんとしても耐えるのよ銀子!! ここさえ耐えればきつと八一は……！

「にゃあ」

「……………」

どうだつ！ にやあと鳴いてやったつ！

おっぱいを揉まれても、パンツを見られても、それでも私は猫真似を貫き通した!!

「……………え。…………ちよつと、待ってね」

「にゃ」

まさに肉を斬らせて骨を断つ一手。

事前の読みと、屈辱を飲み込む精神力によつて成立させた一手の効果はとても大きかった。

八一は捲くつていたスカートから手を離すと、私から距離を取るように一歩下がった。

「…………なんだ？ これ…………こんなこと…………一体、これ、どういう事だ？」

なんて弱々しい声だ。どうやら随分と悩んでいるようね、八一のやつ。

まあそりやそうだ。普段の私だったら絶対にこんな反応はしないもん。普段の私ならおっぱいはおろか水飲みの時点でグーが出ていたと思う。

「…………でも、銀子ちゃんがそこまでする理由ってなんだ…………？」

私がかこみでする理由。それは序盤に打った致命的な悪手を挽回する為。

ハロウィンだからと気合を入れて猫真似をしたらそれはハロウィンになってなかつ

た。

そのアホさ加減を誤魔化す為、私はなんとしても猫真似を貫き通す必要があった。

「……だとしたら」

そして今。猫真似をひたすらに貫き通したおかげで戦局は大きく変わった。

それはこの八一が証明している。ついさっきまでは私を可愛がって遊んでいたのに、その時の明るい表情は今ではもう見る影もない。

「けれど……まさか……」

「にや?」

私は何故これ程までに猫真似を貫くのか。

その答えはどれだけ考えたって八一には読めないはずだ。

だとしたら……そんな八一が、この状況を鑑みて導き出す結論とは。

私はもうそこまでを読み切っている。だからこそこの戦法を選んだのだから。

「……銀子にやん」

「にやあ」

「銀子にやん、きみは……」

八一は震える声で……言った。

「まさか……きみは……本当に猫になっちゃったんじゃ……!」

……勝ったっ!

聞こえてきた言葉に「にゃあ」と返しながらも私は内心で喝采を上げた。

今の言葉は私にとっては投了と同義だ。この勝負は私の勝ち、見事に八一を詰ませたのだ。

「……そうなのかい?」

「にゃ」

「違うのかい?」

「にゃー」

空銀子は猫真似をしているわけじゃない。

そうじゃなくて本当に猫になったのだ——と、今の八一は本気でそう考えている。

普通の人ならそんな馬鹿げた考え方はしないだろうけど、それでも八一ならそう考えるのだ。

どうしてかって?

そんなの簡単。だってこいつアホだから。

「……だから、君は猫になった」

「うにゃん」

「神のいたずらか、きつと野良猫の魂が君の身体に宿っちゃったんだ。……そうなんだね？」

「ふにゃ」

「そうか、もう猫なんだから答えられないよね。……でも、きつとそれが答えなんだ」

アホな八一は的はずれな事を考えてアホな結論に確信を深めていく。

よしよし、これならもう大丈夫だ。私が思い描いていた通りの展開になってくれた。

野良猫の魂が宿った空銀子。八一の中で今の私はそういう扱いになつたらしい。

これで私が人間に戻ったとしても、それはハロウインを勘違いして何故か猫コスプレして猫真似していたアホな空銀子ではなくなった。

悪手は好手によつて上書きされたのだ。ここで私が人間に戻ったとしたら、それは野良猫の霊の除霊に成功した空銀子になるだろう。

これでもうハロウインの大失敗を八一に突かれる恐れは無いわね。良かった良かった。た。

「……もう元には戻れないのかな？ 銀子にゃんが銀子ちゃんに戻る事は……」

「にゃうん」

「分からないよね。そんな事……。君にとつても突然の出来事だつただろうし……」

「にゃあ」

八一つてば、見るからに悲しそうな顔をしちゃってる。

それは自らの思考を疑っていない証拠、本気で私が野良猫になったのだと信じている証拠だ。

「銀子ちゃん……」

八一のこういう分かりやすい所は嫌いじゃない。

……けど、しかしこいつ……なんでこんなにアホなのに将棋はあんなにも強いのかしら。

八一の脳は出来が良いのか悪いのか。長年連れ添っている私でも答えが出せない難問だ。

「……でも」

するとそんな八一は何事かを決心したのか。

悲しそうにしていた表情を改めて、真摯な表情になって私を真正面から見つめてきた。

「……銀子にゃん」

「にゃ?」

なあに? そろそろ人間に戻って欲しい?

さあどうしようかしらね。八一がどうしてもって言うなら考えてあげてもいいけど？

……とか余裕をかましていたら。

どうやら八一の思考は更に飛躍していたらしく、続けてこんな事を宣言してきた。

「安心してくれ。君の事は……俺が飼うから」

「にやつ……!」

かつ、……飼う!?

私、八一に飼われるの!?

でも、言われてみれば確かにそうだ。

私が猫真似をしているんじゃないかと、野良猫の魂を身体に宿したというのなら。

空銀子が本当に猫になったというのなら、私は誰かに飼われる必要がある。その場合

八一が飼い主として名乗りを挙げるのは当然の事だ。

……でも、飼うなんて、そんな——!

「俺が飼ってあげるからね! 銀子にやつ!」

「うにゃあ……!」

その言葉の衝撃に打ち震える私をよそに八一の行動は迅速だった。

再び私の身体に抱きついてきて、勢いそのまま二人でフローリングの床に倒れ込む。

「今日から君は俺のペットだ。いいね？」

そして、契約の呪文が耳元で聞こえた。

わ、私は……八一のペットになっちゃうの!?

それは……駄目だよな？

だって私は八一の恋人なんだよ？

恋人だから……恋人、なのに。

それなのに……どうした事か。

まるで魔法に掛けられたみたいに、私の思考と意識が急速に塗り替えられていく。

そして本当の猫になっちゃったみたいに……口からは自然と鳴き声が漏れた。

「ふにゃあぁ……」

「よし。いい子だね、銀子にゃん」

「にゃうん……」

八一の手が私の左手をぎゅつと掴む。

ああ、八一が居る。肉球越しにでも八一の右手の力強さを感じられる。

こうして八一がそばにいてくれるなら……私にそれ以上望むものがあるだろうか。

「空銀子が猫になったなんて知れたら将棋界は……いや、きつと日本中が大騒ぎだろう

ね」

「うにやあ」

「でも大丈夫だよ。安心して。なにがあっても君の事は絶対に俺が守るからね」

「うにやん……」

嬉しい……。

やいちが、わたしを守ってくれるんだ。

それなら。それならわたしは……うん。べつに人間に戻れなくたっていいや。

「お、喜んでくれているのかい？」

「にやあん……」

うれしい。とつても嬉しいよ、やいち。

この嬉しいさを伝える為に私は顔を八一の胸元に寄せてすりすりする。すりすり。

「そっかそっか。よーしよし、かわいいね」

「にやうん……」

そしてやいちの手が――

……ううん、違う。これはご主人さまの手だ。

だってわたしは猫だ。銀子にやんになった。

わたしはやいちのペットになって、ご主人さまに頭を撫でられながら生きていくんだ。

「なでなで……」

「ふにゃあ……」

ふわわあ……気持ちいいよお。

「主人さまに頭をよしよしされると幸せな気持ちになっちゃう。にゃあん……」

「俺が飼い主になった以上、銀子にゃんには沢山贅沢させてあげるからね」

「にゃ」

「キャットフードは最高級のを食べさせてあげるし、おやつのチャオちゅーるだって毎日のように食べさせてあげるからね」

「ふにゃ」

「猫用エステサロンだって毎週連れて行ってあげるからね。金に糸目をつけないで贅沢して、君を立派なセレブ猫にしてあげるからね」

「うにゃあ」

「君は何も心配しないで、これから猫として自由気ままに生きればいいんだ。身の回りのお世話は飼い主である俺がしてあげるからさ」

「うにゃあん……」

そんな……そんな贅沢、ほんとにいいの？

高級キャットフードにチャオちゅーるも、それに猫エステもだなんて……。

うにやにやあ……ご主人さまあ……銀子うれしいにやん……♡

「これがペットを飼う事による癒やし効果ってやつなのかな……」

「ふにやあ」

「ああ、銀子にやん……」

「にや……」

私を抱きしめてくれる腕。

やいちのぬくもりを、愛情を感じる。ああ、幸せ……♡

にやあにやあ。ご主人さまのペットになれて、銀子はとつてもしあわせだにやん。

「差し当たって……まずは食事か」

「にや」

「あと、君のおうちが必要だよ。室内に置く用のペットハウスを買ってこようかな」

「ふにや」

やだ。ご主人さまとずっといつしよがいい。

わたしは首をふりふりする。ふりふり。

「あ、ペットハウスやだ？ 放し飼いがいい？」

「うにやん」

そう、それがいいの。

夜はご主人さまのお布団にもぐり込んでいっしょに眠るんだもん。うにゃん。

「そっか。まあとりあえずペット用品が売っているお店に行って色々買ってくるよ。だから銀子にゃんはちよっとお留守番しててね」

「にゃ」

お留守番ならまかせてご主人さま。

わたしは優秀なネコなの、壁をひつかいたり部屋をちらかしたりなんてしないんだから。

「……あ」

そして、ペット用品を買いに行こうと立ち上がったご主人さまは。

けれどそこで何かに気付いたのか、ふと立ち止まってわたしの方を見た。

「そういえば……野良猫の魂が銀子ちゃんの身体に宿ったって事は、元々の銀子ちゃんの魂は一体何処にいったんだろう？」

「にゃ？」

わたしの……たましい？

「もしかして……野良猫の方に行ったのかな？ 魂の取り替えつこ的な感じで」

「にゃあ」

「もしそうだったら……銀子ちゃんの魂は……」

「……にゃ」

わたしのたましいが、何処に行ったのか。
それは……。

「銀子ちゃん……」

野良猫の魂と入れ替わった？

ううん、そんなの違う。

だつて私の魂の在り処は――

「……」

「……にゃあ」

沈痛な面持ちで沈黙していた八一だったが、

「――あ」

と、ふいにそう呟いた。

どうやら八一も気付いたようだ。

空銀子の魂がどこに有るのかを。

「……将棋」

「……にや」

そう。将棋だ。

私の魂の在り処。そんなのは将棋盤の前に決まっている。

「そうだ。銀子ちゃんじゃないと……猫のままじゃ将棋が指せないじゃないか」

まるで正気に戻ったみたい、八一はそんな至極当然の事を呟いて。

「……にやあ」

そしてそれは……私もだ。

さつきまで夢見心地でぼわぼわしていた頭の中が急速に落ち着いていく。

「……銀子にやん」

「にや」

「……ごめん」

そして、八一は頭を下げた。

「やっぱり……君の事は飼えない」

「にや……」

うん……分かってるよ、八一。

もういいの。だってもうハロウインの魔法は解けちゃったから。

私達二人に掛けられたハロウインの魔力を払ったのは、やっぱり将棋という存在だっ

た。

「俺は銀子ちゃんがいい。猫じゃなくて人間のあの子じゃないと駄目なんだ」

「にやあ」

「この先銀子ちゃんと将棋が指せないなんて……そんなの絶対に嫌なんだ」

「……ふにや」

そうね。それは完全に同步。

私だつてそんなの絶対に嫌だ。この先八一と将棋が指せないなんて死んでも御免だ。

ていうか、私……なんかさつきまで頭の中が変な事になつてなかつた？

なんか……思考が猫になつていたというか、アホになつていたというか。

八一の飼ひ猫になつてお世話される気満々だったような気がするけど……気の所為かな？

……うん。そうだよね、気の所為だよね。

私がそんなアホな事を考えるはずがないし、きっと何かの間違ひだ。そういう事にしておく。

「だからお願いだ。銀子にやん……元の空銀子に戻つて欲しい」

とかなんとか考えていたら、その間に八一はなんと土下座の体勢に移行していた。

そこまですて私が人間に戻る事を望むなんて……これは八一にとつても切実な話の

ようだ。

「頼むっ！ 銀子にゃん！ 元の銀子ちゃんに戻ってくれ!!」

「にゃ……………」

「君が元の人間に戻ってくれるなら俺はなんだってする！ だから……………どうか……………!!」

……………よし。

「……………」

「……………銀子にゃん?」

「……………」

……………まあ、あれよね。

随分と回り道をしちゃったけど、結果的にこうして言質は取れたわけで。

「……………ふう」

と呟いて、私は四つん這いの体勢から身体を起こした。

そして両手から肉球手袋を外す。もうずっと前から蒸れて暑かったのよねこれ。すでに目的は達した。だから猫の真似をするのはもう終わりだ。

「……………はあ、疲れた。ずっと四つん這いになってたから身体が痛くなっちゃった」

「銀子ちゃん……………!!」

私が人間の言葉で喋ると、即座に八一がバツと顔を上げた。

その顔は大きな歓喜とそれ以上の安堵が入り混じったような表情だった。

「銀子ちゃん!! 元に戻ったんだね!!」

「…………ええ、そうよ」

「良かった、良かったよお…………!!」

「ちよ、ちよつと八一…………!!」

そしてまたまた八一は私に抱きついてきた。

こいつ今日は私に抱きついてばつかじやない? ……まあいいんだけど。

「ホントに良かった、銀子ちゃん…………」

「…………ん」

「野良猫に宿った君の魂が元に戻らなかったら…………俺、もうどうしようかと…………」

「大げさよ、そんな…………」

「あそうだ、野良猫になっっている間になにか危険な目に合わなかったかい? 近所のボス猫からいじめられたりしなかった? 怖い人間からエアガンで打たれたりしなかった?」

「するかそんなもん。」

まさかこいつは本気で私が野良猫になっていたと思っっているのか。

「しないわよ。ていうかね、私は別に野良猫になつてたわけじゃないから」

「えっ、そうなの？ 野良猫と魂が入れ替わってたわけじゃないの？」

「当たり前でしょ。魂の入れ替わりなんてそんな事が起こるわけないじゃない。バカ八」

「……そっか」

「そうよ。私は最初からずっと猫になりきって猫真似をしていただけ。」

人間に戻ったのだから、八一があれ程に熱望するから仕方なく戻ってあげただけなんだから。

私と将棋が指したいって。

そうじゃないと嫌なんだから、そう言ってくれたあの言葉が。

あの言葉が……やっぱり一番嬉しかったから。

「まったく……ほんとにバカなんだから」

そんな想いを胸に秘めて、私は元飼い主に呆れ混じりの視線を向けた。にや。



そして、肉球手袋に続いて猫尻尾と猫耳カチューシャも外して。

完全に人間の姿に戻って一息ついていた頃、八一が話し掛けてきた。

「……ところでさ、銀子ちゃん」

「なに？」

「ちよつと聞きたいんだけど……どうしてこんな真似をしたのかな？」

「……どうしてこんな真似を？」

「こんな本気の猫真似なんてして……一体どういう理由で？」

「……どうという理由で……。」

「……そんなの、言えるわけがない。」

「……………」

「銀子ちゃん？」

「けれどね、この対局は私の勝ちだから。」

「……八一」

「なに？」

勝者の私は、勝者たる権利を悠然と行使した。

「あんたさつき、私が元に戻るんだっただらなんでもするって言ったわよね？」

「え、あ、うん、言ったけど……。」

「だっただらこの件について一切の詮索をする事を禁ずるから」

「えっ」

「勿論今日あった事を口外するのも絶対に禁止。いいわね？」

「え、でも……」

「でもじゃない。返事は？」

「……はい」

よし。これで問題なし。

こうして、私と八一が恋人になって初めて過ごしたハロウインは終了した。

私が打った致命的な悪手は晒される事はなく、永久に闇へ葬られる事となったのだ
た。

短編 【祝☆昇段】空銀子四段を応援するスレPart 4

588 【浪速の白雪姫】

【祝☆昇段】空銀子四段を応援するスレPart 4588 【浪速の白雪姫】

1：名無しの将棋ファン

ここは空銀子四段を応援するスレです。

次スレは>>950 お願いします。

2：名無しの将棋ファン

>>1おつ

3：名無しの将棋ファン

一乙

4：名無しの将棋ファン

いちおつー。

8：名無しの将棋ファン

1 おつ

一日経つてようやく少し流れが落ち着いてきたな

11：名無しの将棋ファン

昇段決定からの流れは凄かった

ザツと見た感じ昨日今日だけでスレが50以上は進んでるし

14：名無しの将棋ファン

スレを開いて「空銀子昇段記念カキコ！」をしようと思ったらもうスレが埋まっていた。

昨日の勢いはそれぐらいヤバかった。

18：名無しの将棋ファン

そりや世間の注目度も桁違いだったし

三段リーグ最終戦にあんなにマスコミが集まって報道するのなんて初めてじゃないか？

20：名無しの将棋ファン

ス
そういやいつの間にかスレタイも変わってるね。祝☆昇段と四段を入れたのはナイ

……祝☆昇段、空銀子四段を応援するスレ。Part 4588……か。

久々に見にきたけど凄いな。まずスレ番の数字が凄い。俺のスレの軽く四倍以上はある。

そして何よりも勢いがすごい。スレの勢いとはどれだけ多くの人がこのスレを見てレスをしているかの表れ、つまりはそれだけ世間の関心を惹いているという事に他ならない。

多分だけタイトル戦の実況スレとかでもこれ程の勢いは出ないと思う。それぐらい現在の空銀子単独スレの消費速度はものすごい。

40：名無しの将棋ファン

空銀子 祝☆昇段！

55：名無しの将棋ファン

銀子ちゃん昇段おめでとう！

67：名無しの将棋ファン

空銀子はすごかった（小並感）

80：名無しの将棋ファン

昨日は将棋の歴史が変わった記念すべき日だ。空銀子を変えた

99：名無しの将棋ファン

昇段、それも一期抜けだもんな。女性の15歳でこれはほんとに凄い。

105：名無しの将棋ファン

三連敗した時はもう無理かと思っただけど諦めずに応援してきて良かった

110：名無しの将棋ファン

昨日何度も書いたような気がするけど今日も書く。

空先生の事は先生が小さかった頃からずっと見てきてずっと応援してきた。一将棋ファンとして本当に感無量。

120：名無しの将棋ファン

昇段決定の速報を見た瞬間にガチ泣きした俺が通ります。

……こうしてネットの掲示板を眺めているだけでもよく分かるね。

銀子ちゃんは本当に多くの将棋ファン達から愛されている。今回あの子が成し遂げた偉業は多くの人達から祝福されている。

将棋界でトップを誇るであろう空銀子人気の高さは知っていたつもりだけど……やっぱスゴいね。本スレにすらアンチが多く住み着いちやってる俺とは大違いだ。

……なんか自分で言っつて悲しくなってきた。

ああ、俺のスレも誰か管理してくれないかな。つつても最近はろくに見てないんだけ

ど。

170：名無しの将棋ファン

ところで空銀子なんで記者会見しないの？

175：名無しの将棋ファン

>>170 空先生は対局終了直後に体調不良でそのまま入院したってどこのテレ

ビでも言うとするやんけ

189：名無しの将棋ファン

>>175 それは知ってるけどまだ治らんの？

体調不良だったらもう一日経ったわけだし記者会見ぐらい出来るだろ

201：名無しの将棋ファン

>>189 してねーんだから出来ねーんだよハゲ。てめーの基準で考えんな

211：名無しの将棋ファン

というか体調不良って本当なのかな。本当だったらおじさんちよつと心配になつて
しまう

223：名無しの将棋ファン

少なくとも将棋会館に救急車がきたのはガチでしょ。どっかに動画上がってたし

230：名無しの将棋ファン

空先生つて元々身体弱いんだよね。体調不良ってそれが影響してたりするんかね

235：名無しの将棋ファン

そうなん？俺は対局終盤のプレッシャーに押されて吐いたからって聞いたんだけど。

245：名無しの将棋ファン

俺は過呼吸で倒れたからって聞いたけど

251：名無しの将棋ファン

持病の癩が発病したからって聞いたけど

……ふーむ、やっぱり記念すべき昇段の記者会見をしていない事が話題になってるね。

銀子ちゃんは三段リーグ最終戦を勝利して、その直後入院をする羽目になった。対局中に自ら喝を叩き込み過ぎて怪我をしてしまったからだ。

その後、連盟の方にコメントを提出したのみで未だ銀子ちゃんは公の場に姿を見せていない。そのせいあって様々な憶測を呼んでいるようだ。

報道で出た情報とは違って、実際は体調不良どころかガッツリ怪我して入院中だからテレビの前に出るのはもっと後になるだろうけど……まあ将棋を指していて肋骨をへ

し折ったとは思わないよなあ、普通。

282：名無しの将棋ファン

まあ近い内に記者会見はするでしょ。世界初の女性プロ棋士の姿を早く見たい

295：名無しの将棋ファン

女性のプロ棋士誕生か。時代は進んだもんだ

305：名無しの将棋ファン

でもプロになったって事はもう女流の試合には出ないのかね？ タイトル返上？

312：名無しの将棋ファン

そりゃ出ないでしょ。そういうルールだし

319：名無しの将棋ファン

てか出なくていいだろ。女流との対局はもう虐殺にしかないじゃん

328：名無しの将棋ファン

同意。もうプロ棋士になったんだし女流の試合に出るのはなんか違うと思う

あの子が所持している二つの女流タイトル、女王と女流玉座の行方も話題の一つか。現在の規定上、女性であってもプロ棋士になったら女流棋戦には出られなくなる。で

あれば所持している女流タイトルは返上するしかない。規定通りに考えれば当然そうなる。

これは女性のプロ棋士が存在しなかった時代に出来た規定なので、今回史上初の女性プロ棋士が誕生した事を受けて規定を変更する可能性も無いとは言えないけど……どうかな。

まあ女流玉座戦はもうすぐ始まるし、近い内に連盟の方から声明が出されるだろうけど。

354：名無しの将棋ファン

個人的には銀子ちゃんにはこの先も女流タイトル戦に出て欲しい。

理由は女流の試合が無くなると単純に露出が減る。銀子ちゃんを見る機会が減るから。

368：名無しの将棋ファン

むしろプロになったんだから露出は増えるだろ。女流タイトル戦なんて年に数回だけだし

375：名無しの将棋ファン

でも女流タイトルを返上すると着物を着た空銀子が暫く見られなくなりそうでそこ

が残念。

……あー、着物か。なるほど……言われてみればそれは確かに……。

公式戦の際に銀子ちゃんが着るのは基本的に学校の制服、普段から着ている白のセーラー服だ。

今回三段リーグを戦った際の衣装も制服だ、普通タイトル戦でも無い限り着物は着ない。まあ高校を卒業したら制服は止めるだろうけどそれでもさすがに着物は着ないだろう。

着物というのはタイトル戦での正装だ。無論プロでのタイトル戦に挑む際は着るだろうけど、プロ棋士になったばかりの銀子ちゃんにとってタイトル戦とは遠い道のりになる訳で……。

女流のタイトル戦とは年に6回、銀子ちゃんの着物姿を確実に見られるチャンスでもあった。あの子が女流に出なくなるという事はそれが失われてしまうという事だ。そっかあ……。

401：名無しの将棋ファン

女王戦と女流玉座戦は銀子ちゃんの着物姿を見る事だけが楽しみだったのに……

(． ． ．)

411：名無しの将棋ファン

>>401 気持ちに分かる。肝心の対局が一方的過ぎてそれぐらいしか見どころが無かったからな。

419：名無しの将棋ファン

着物姿の空先生が美しすぎるのが悪い。この前出た現代将棋の表紙とか奇跡の一枚だと思う。

同歩である。

着物姿の銀子ちゃんはヤバいから……マジで美しさに溢れてるから……。

もう神々しさが天元突破してるから……あれが見られなくなっちゃうのは惜しい……。

422：名無しの将棋ファン

女流タイトル戦に出ないならせめて撮影の仕事とかバンバン受けて欲しい。

それも同歩である。

でもなあ、銀子ちゃんってそういう仕事は嫌いなんだよ……滅多に受けてくれないんだよ……。

439：名無しの将棋ファン

着物姿も良いけどどうせなら普段は見られない格好とかが見たい

永世女王記念にあった水着グラビアとか永久保存レベルものだよ

ああ、あの水着撮影をゴリ押した特別インタビュー記事の事かな？

あれはね、何を隠そうこの俺が頑張ったからなんだよ？ 褒めるなら俺を褒めてくれ。

456：名無しの将棋ファン

着物は女流棋士が対局の際に着るからいいとしても水着グラビアはどうかと思う。

空先生は才能あるんだしアイドル売りをする必要は無い。

467：名無しの将棋ファン

>>456 分かる。水着はやり過ぎだよ。

もうプロ棋士になった事だし空先生には変に媚びないでいて欲しい。

ほう、なるほど。そういう意見もあるのか。

ファンなら必ずしも水着姿とかを見たいと思うってわけじゃないんだね。これは目から鱗だ。

480：名無しの将棋ファン

てか空銀子って胸ないじゃん。水着なんか着ると胸ないのが丸わかりになっちゃうじゃん。

491：名無しの将棋ファン

>>480　そこに触れるなよ

ホントだよ。そこは生暖かい目でスルーしてあげなさいよ。

500：名無しの将棋ファン

銀子ちゃんかわゆす。ぺろぺろしたい

同歩。

511：名無しの将棋ファン

銀子ちゃんかわゆす。ちゅっちゅしたい

同歩。

530：名無しの将棋ファン

よく○○界のアイドル、とか言ったりするじゃん

でも空銀子は将棋界に限らずマジでアイドル顔負けのビジュアルしてると思う
同歩だわー。それマジ同歩だわー。

大真面目に銀子ちゃんはグループアイドルのセンターを張れるビジュアル力がある
からね。

あの子はアイドルの道でも天下を取れる才能があると思う。ただし愛想と胸は無い。

550：名無しの将棋ファン

自分は銀子ちゃんのガチ恋オタクです。

どうやったら銀子ちゃんと付き合う事が出来るでしょうか。

555：名無しの将棋ファン

>>>550 諦めろ

561：名無しの将棋ファン

>>>550 来世に期待する

570：名無しの将棋ファン

>>>550 お前がプロになってタイトル取れたらワンチャンあるかも。

無いから。ワンチャンなんて無いから。

ノーチャンスだからスッパリと諦めてくれ。ちなみに来世に期待したって駄目だか

んな？

583：名無しの将棋ファン

銀子ちゃんかわゆす。ペろペろしたい

分かったつて。同歩同歩。

599：名無しの将棋ファン

というかそもそも空銀子つてクズ竜王と付き合ってるんでしょ？

ええ!?! あれれー!?!

ちよつとまってよその話どうしてバレちゃってるのさー!?! なんでー!?!

ちよつとちよつとやめてよーそれまだ一応オフレコなんだからさー内緒にしててよー。

607：名無しの将棋ファン

白雪姫は魔王の毒牙に掛かってしまったんやな。悲劇やなw

魔王？

611：名無しの将棋ファン

ロリコン魔王はロリコンだから銀子ちゃんとは付き合っていないよ

620：名無しの将棋ファン

もう諦めろ。あれは絶対付き合ってるって。

627：名無しの将棋ファン

あの二人は単なる師弟関係で付き合っていないって結論出てただろ。蒸し返すな

634：名無しの将棋ファン

蒸し返すもなにもそんな結論ねーよ

649：名無しの将棋ファン

クズの話題は荒れるからここでは出すな。出すなら個人スレにいけ。

……うむ。どうやら各々様々なご意見があるようだ。

まあ答えは出ちやってるんだけどね。それをここで明らかにする程野暮ではないさ。

というか俺、銀子ちゃんのスレでは荒れネタになってるのか……。

667：名無しの将棋ファン

空先生はつい昨日まで奨励会員だったんだぞ？

プロ目指して真剣に戦っていたのに恋人とか作ってるヒマあるわけないだろjk

671：名無しの将棋ファン

だよね。空先生は将棋にストイックだから恋人とか作るわけない

……ん。……まあ、なんだろ。

あれだね。人の夢と書いて儚いと読む、的な。

674：名無しの将棋ファン

分かる。空銀子は絶対に恋愛とかそつちのけで将棋一筋な性格してるよね。

人の夢と書いて、儚いと読む。

680：名無しの将棋ファン

銀子ちゃんにはこの先も恋人とか作らないで俺達将棋ファンの希望であり続けて欲

しい

人の夢と書いて（略）

686：名無しの将棋ファン

銀子ちゃんかわゆす。銀子ちゃんと付き合って「ペロペロしていい？」って聞きたい。

それで「ええ!?!」そんなの困るよお……」つてもじもじする反応を見たい。

いやあ……それはどうだろう。ちよつと読みが浅いような気がするね。

銀子ちゃんの事だし「ぶっ飛ばされたいの？」とか返してくると俺は思うけど。

691：名無しの将棋ファン

でも空銀子って付き合ったら面倒くさそう。

は？

694：名無しの将棋ファン

それもちよつと分かる。性格キツそうだよね

はあ!?

699：名無しの将棋ファン

率直に言つて地雷だと思う。

ハアア!?! ざけんなよテメエらどこの誰だよテメエらに銀子ちゃんの何が分かるん

だよ!?

まあ確かに性格はちよつとだけキツいところもあるけどっ！ あるけどさあ!!

でも可愛いところだつて沢山あるんだよ!! そのギャップがいいんじゃないかねえかそん

な事も分からねえド素人は引つ込んでろ!!

711：名無しの将棋ファン

空銀子の性格がキツイのは有名でしょ

一度指導対局を受けてみれば分かる。めっちゃ厳しくて優しさの欠片もないから

729：名無しの将棋ファン

あれはもう厳しいのが売りになってるからね。一種のプロレスみたいなもの。

737：名無しの将棋ファン

滅多に無いファンサの時などにこやかにしているけど目が笑っていない事はあまりにも有名。

……ぐ、ぐぬぬ、言い返せねえ……!!

他の棋士達より圧倒的に人気がある分銀子ちゃんファンサは基本塩対応だから……。

最低限の事はしてるからそれでいいでしょ？　って言わんばかりな態度だから……。

……でもっ！　でもね!?

ファンサの対応であの子の全てを語るだなんて愚の骨頂だ。そうだろう？

銀子ちゃんってのは将棋に対して真摯な子で、とつても努力家で、生真面目な子なんだ。

そりゃあ愛想が無かったり胸が無かったりちよつと乱暴だったりもするけど、その程度の欠点なんて誰にだってあるはずだ。

そんなのはね、好きになっちゃえば全然気にならないから。いや気にならないどころかチャームポイントのように見えてくるから。少なくとも俺にはそう見えるね。

740：名無しの将棋ファン

正直付き合うならもつと良い女流棋士は沢山いるよね。たまよんとか。

空銀子を見る分にはいいけど付き合うのはナシだと思う。

あ？ オイ黙れよテメエ。

750：名無しの将棋ファン

空銀子は恋人居ないって言うより可愛げがないから恋人出来ないタイプ。

……テメエらよオ、なんなんだよさつきから俺にケンカ売ってんのかア!?

匿名掲示板だからっていい気になんなよ!?! こんなの弁護士先生の先生とかに相談してプロバイダ側に情報開示請求すればお前らの個人情報なんて簡単に分かるんだからな!?!

金と時間さえありゃ出来るんだからな!?! やってやろうかマジでよおオオン!?!

766：名無しの将棋ファン

ここは空先生を応援するスレなんだからアンチコメはやめろって。

772：名無しの将棋ファン

ぼくは性格キツくてもいいから銀子ちゃんといチャイチャしたいです！

やかましいわ！ そんな俺だっけしたいわ！ てかするわ!!

784：名無しの将棋ファン

空先生に可愛げが無いとか言うヤツ正気か？

長年追っかけをしていた俺には分かる。あれほど可愛い人はいないだろ

そう！ そうなんだよなあ〜！

この人ホンマに分かつてるわー。レス番784とはもう一緒に飲みに行きたいね。

朝まで飲んで銀子ちゃんの可愛さについて語り明かしたいわー。俺まだ酒飲めないけど。

789：名無しの将棋ファン

銀子ちゃんはぼくの事をどう思ってるんだろう (・ω・)

多分だけだなんとも思っていないと思う。

797：名無しの将棋ファン

空銀子は俺の嫁。

ざけんな!! 俺の嫁じゃ!! 死ね!!

つて、落ち着け落ち着け俺。……ふう、ちよつと熱くなってしまったね。反省反省。とりあえずこれで……うん。ざつと目を通してみたけどようやく最新のレスに追いついたかな。

見ていて思ったけど、やつぱりあれだね。こういう匿名掲示板つてのは得てして利用者のモラルが欠如しがちだよね。

ちゅつちゅつしたいだとかべろべろしたいだとか、俺の嫁だとか。書かれているのはどれも身勝手な内容ばかりだ。全く以て遺憾の極みである。

それに情報の選別という面でも気になる。

こういう場で嘘を書くのは論外として、事実関係が不確かな事を書くのも良くはない。

匿名の相手とはいえ、皆が利用する掲示板なんだからそういうモラルやマナーは守らないとね。

せつかくだし俺が手本を見せてあげようか。

嘘や不確かな事は書かない、匿名掲示板の正しい利用の手引きというものを。

という事で……俺はスマホを操作して「空銀子四段を応援するスレ」にレスを試してみ

た。

801：名無しの将棋ファン
空銀子なら俺の隣で寝てるよ

「八一」

「え？」

声が聞こえて、振り返る。

「ああ、銀子ちゃん。起きたんだ」

「ん」

そこに居たのは史上初の女性プロ棋士。

先程まで眠っていたはずの銀子ちゃんがベッドの上で身体を起こしていた。

「何見てたの？」

「ん、いや、ちよつとエゴサをね」

「エゴサ？ あんた前にエゴサは病むから止めたとか言っただけだ？」

「まあそうなんだけど。単なる暇つぶしだよ」

まさか自分自身では無く銀子ちゃんのエゴサをしていたとは言えまい。

俺は答えながらもそそくさとスマホをポケットにしまい込んだ。

「ところで銀子ちゃん、身体の具合はどう？ 痛みとかは？」

「痛みは……よく分かんない。それよりも胸の辺りが窮屈で呼吸が辛い」

「包帯をガチガチに巻いているみたいだからね。それが取れるまでは我慢しないと」

今、俺と銀子ちゃんは病院の個室に居る。

昨日は共に強敵との死闘を繰り広げて、今日はようやく二人きりで落ち着ける時間になった。

「こうして病院に居るとき、昔を思い出すよね」

「そうね。ちよつと懐かしい」

昨日、想いを伝えあつて……今は正式に俺の恋人になった姉弟子、銀子ちゃん。

「……うーん」

「なに？」

少しやつれたその表情を眺めていると、銀子ちゃんが不思議そうに小首を傾げる。

「いや……無事で良かったなって思ってたさ」

「……心配した？」

「そりゃあね。白い制服が血で汚れていたら誰だって心配するって」

「……ふうん」

「それに……なんか、寝起き姿の銀子ちゃんって久しぶりに見た気がする」

「っ、」

俺がそう言うと、銀子ちゃんは途端にしかめっ面になって。

「……すげべ」

「いやいや、別に変な意味じゃなくてさ」

「変な意味にしか聞こえないわよ、ばか」

そう言っつて頬を赤らめる、その表情も。

ついとそっぽを向く、その仕草も。

ほらもうめっちゃ可愛いでしょ？　こんな可愛い銀髪美少女この世に銀子ちゃんだ

けだよね？

今の銀子ちゃんは寝起きでアンニュイな雰囲気醸し出しちゃって、髪とかも整ってないし所々寝癖も付いてるしで、そういう気の抜けちゃってる油断した姿がめちゃ可愛い。

こんな可愛い銀子ちゃんを相手に「性格がキツイ」だとか「可愛いげが無い」だとか、マジであの掲示板の利用者共は目玉が付いてないんじゃないかねーかって思っちゃうよね。

まあ掲示板を利用するとは言わないけどさ。

それでも曇った目で見えた事を真実とは思わないで欲しいよね。将棋ファンであるなら尚更。

もつと心の目を見開いて、銀子ちゃんの事をちゃんと見てからレスをして欲しいなあ
と、一利用者である俺としてはそう願うばかりである。

……って、あ、そうだ。

「ねえ銀子ちゃん」

「なに？」

「ペロペロしていい？」

「は？ ぶっ飛ばされたいの？」

ほらね、当たったでしょ？

これが本当の空銀子だから。だからこそ銀子ちゃんは可愛いんだよ、いやマジで。

短編 そんなバレンタイン

「ねえ銀子ちゃん」

「なに」

「チョコが欲しい」

「チョコ？」

「うん。バレンタインのチョコ」

2月14日。となれば誰もが頭に浮かべるバレンタインデーのチョコレート。

そんなお決まりのキーワードを出すと銀子ちゃんは「……ああ」と気だるげに呟いて、

「チョコ、ね」

「うん。勿論くれるよね？」

「……さあ」

「ええ!? ウソでしょ!？」

さあ、って何!? 何その反応!? 俺達恋人同士ですよね!?

恋人同士だったのにバレンタインデーにチョコ貰えないの!? そんな事ってある!?

「……いい、いやいや、それは無いよね」

「なにがよ」

「俺には分かる。そっけない事言ったりしても裏では準備してるんでしょ?」

「チョコを? 私が?」

「うん。銀子ちゃんは何んのかんの言つてチョコをくれる子だよ。俺はそう信じてるよ」

空銀子といえ、その外見から冷たくてクールな人間だと勘違いされがちだ……が。

しかし俺の見解は異なる。この子はクールである以上に乙女、根がとつても乙女なこの子は乙女のイベントは絶対に外さないはずだ。

……とそんな読みは見事に冴えていたようで。

「……ま、一応考えてはいたけど」

やれやれとばかりに頭を振る銀子ちゃん。

ああ良かった。やつぱりちゃんとバレンタインデーを意識してくれてはいたようだ。

「でもね。はつきり言つて難しいのよね」

「難しいって?」

「チョコを選ぶのが。私、チョコレートの販売メーカーとか詳しくないし……あんたが

どんなチョコでもOKだって言うなら簡単なんだけど」

「いやまあ……別に俺は貰えるならどんなチョコだっていいけど……」

「じゃあパ〇の実とかキット〇ットでいい?」

「そ、それはさすがに……ちよつと……」

バレンタインデーに愛しの恋人から貰うチョコがパ〇の実というのはあまりに切ない。

どんなチョコだつていいとは言ったものの……せめて、せめてG〇D I V Aのチョコぐらいは高望みしたつてバチは当たらないはずだ。

……というより、欲を言えば――

「なら……手作り、とか」

俺がそう言うのと、

「ああん?」

うわ、すつげー不機嫌な声が聞こえた。

これ程にメンチを切るのが似合う女性は中々居ないと思うよ……じゃなくてっ!

「手作り! いいじゃん! やっぱ手作りチョコ欲しいじゃん!!」

ね! ね!! そうだよね!!

せっかくのバレンタインデーなんだし恋人からの手作りチョコが欲しくなっちゃう

よね!!

「手作りなんて……そんなのどうせ店売りのチョコの方が美味しいに決まってるじゃない」

「いやいや銀子ちゃん、こういうのは美味しさの問題じゃないんだよ。銀子ちゃんが俺のために頑張って苦労して手作りチョコを作ってくれた……ってそういうその気持ちが嬉しいんだよ」

「なにそれ。市販品のチョコレートには気持ちが籠もらないとも言いたいワケ？」

「い、いやそうは言わないけど……でもほら、今回のチョコは銀子ちゃんと恋人同士になつてから初めて貰えるチョコだしさ。となればそういう気分にもなっちゃうっついていか」

そりゃあね。味で言うなら市販品のものを選べばいいんだろうけどさ。

というかその方が俺も銀子ちゃんも色々な意味で安心だとは思っただけさ。

てか正直な所、去年までだったら別に市販品のチョコだつて十分嬉しかったんだけどさ。

でも今年は……今年はずう。

去年とは違う、今年だからこそワガママを言ってみたい。

そりゃあ銀子ちゃんにとっては面倒だろうけど、それでもおねだりしてみたの

だ。

「……手作り、ねえ」

「うんうん、手作り手作り」

「でもあんたさあ、そのわりには私が料理を作つてあげようとするど露骨に嫌がるじゃない」

「うぐっ！」

「なのにこんな時だけ手作りチョコが欲しいとか、随分と都合の良い事を言つてくれるわね」

さ、さすがに痛い所を突いてくるね。

半眼になつてジロリと睨みを効かせてくる銀子ちゃん。視線が冷たいっす……。

……いや、だつてさあ。

銀子ちゃんつて……ほら、料理の腕が少々……あれじゃん？

そんなこの子がキツチンになつて立つたら……あれがあれになつちやうじゃん？
それで完成した料理なんてのはもう……あれのあれのあれに決まつてるじゃん？

……だが。

「……うん、ごめん。都合の良い事を言うようだけど手作りチョコは欲しい」

「堂々と言ひ切つたわね」

「言い切ったさ。だって欲しいんだもん」

今日この時ばかりは悪びれるつもりは無い。

俺は銀子ちゃんの手作りチョコが欲しい。恋人からのチョコを望んで何が悪いってんだ。

「……はあ、手作りチョコか……」

すると強情な俺に見かねたのか、銀子ちゃんは面倒くさそうに嘆息する。

根がとつても乙女な銀子ちゃん。この子の心に『彼氏に手作りチョコを作ってあげたい欲』がある事ぐらい俺にはお見通しだ。だからここまでの展開だってお見通しなんだよね。

……特に、今年は。

「あれって確かお店で売ってるチョコを一旦溶かして、それで型にはめて冷やすんだっけ？」

「そうそう。溶かして固めるだけなんだからさすがの銀子ちゃんにだって出来るって」

「さすがの私にだってとはなんだ貴様」

「ごめんなさい調子乗りました」

「……全く」

口を滑らせた俺を見ながら呆れ顔になって。

そして、囁くように言う。

「……先に言つとくけど、自信無いわよ。手作りチョコレートなんて」

だろうね。

けど、それでもいいんだ。

「失敗しちゃうかも」

「失敗したつていいよ」

「砂糖と塩を間違えるかも」

「それでもいいよ。食べられさえすれば」

「……間違えて賞味期限切れのチョコを使っちゃうかも」

「そつ、……いや、うん、いいよ。ちよつとお腹壊すぐらいなら平気だから」

こうなつたらどんとこいだ。たかだが腹痛程度で退がる俺ではない。

最悪食中毒で入院するかもしれないけど……まあ、それでも死にはしないだろう、たぶん。

「……そんなにチョコが欲しいの?」

「うん、欲しい」

真つ直ぐに、真つ向から頷きを返す。

たとえチョコとは呼べない代物だったとしても、それでも俺はこの子のチョコが欲し

い。

「……そっか」

だがそんな気持ちも伝えても、銀子ちゃんの表情には笑みがなくて。

かといって照れたり恥じらったりしている訳でもなくて……その憂いを帯びた表情は。

「……でも」

「え？」

「そもそもあんた、チョコなんて私以外の女から沢山貰ったんじゃないの？」

——おいおい、そこに触れるか。

わざわざ自分からそこに触れてくるとは……やっぱりこの子は。

「——うん。そうだね、貰った」

だから俺はそう答えた。

隠そうかとも一瞬考えたけど……でも今更な話だと思っただから。

「可愛い弟子達は勿論の事、綾乃ちゃんからも貰っちゃった。他にも桂香さん、月夜見坂さんや供御飯さん、ああそうそう、飛鳥ちゃんからも貰っちゃってさ。後は——」

次々と女性の名前を上げて、バレンタインデーにおける戦果を発表していく俺。

「……ふーん」

けれども銀子ちゃんは怒らない。

恋人の隣で他の女性から貰ったチョコの話をも自慢げにする俺に対して怒ることもなく、それどころか自らその話題を広げてきたりして。

「それってどれも義理チョコ？ それとも本命チョコがあつたり？」

「どうだろ。もしかしたら本命チョコも一つ二つぐらいはあつたかもね」

「へえ……私以外の女から貰ったチョコは美味しかったかしら？」

「うん。どのチョコも美味しかったよ」

にしても俺、我ながらおっそろしいセリフをべらべらと喋ってるよね。

こんなのいつ断罪の刃が頭上に振り下ろされたっておかしくない……と思うんだけど。

「……そっか」

でも銀子ちゃんは。

怒るどころか切なげな笑みすら浮かべて。

「——なら、良かった」

……ああ、もう。本当にこの子は。

「……銀子ちゃん」

これ以上見てられなくて……俺は愛しい恋人をぎゅつと抱きしめた。

「銀子ちゃん」

「なに？」

「俺さ、銀子ちゃん以外の女の子からチョコを貰ったんだよ」

「それは聞いたけど」

「んでそれを美味しくいただいたわけ。全部べろりと平らげたわけ」

「だから？」

「怒んないの？」

「そう尋ねずにはいられない。」

傷口に触れているのは分かっているけど、下手に放置して化膿するよりは良いはずだ。

「怒らないけど」

「…………怒っていいのに」

「…………怒れないよ」

むしろ怒って欲しい。

そんな気持ちで呟いた俺の言葉に、銀子ちゃんは小さく首を振って答える。

「…………そっか」

「うん」

「やっぱり…………そう簡単には消化出来ないか。銀子ちゃんらしいと言えづらいけど。」

「ここで俺をぶん殴るくらいで解消出来るなら。それならいくらだって殴られてあげ
るんだけど……中々そうもいかないみたいだ。」

「……でもさ。やっぱりちよつと違うなあとは思ったよ」

「違う？」

「貰つといて本当に失礼な話だけどね。でも……貰う側としての本命っていうかさ」

とはいえ。俺だつてむやみやたらと傷口を突きたいわけじゃない。

ここからはもつと前向きに。これからはもつと明るい話をしたいたんだから。

なんだつて、今年は——

「俺は……俺は、銀子ちゃんからのチョコが一番欲しかったんだからね」

「……ほんとに？」

「本当に。もちろん今だつてそうだよ？」

「……そっか」

「うん。だつて……去年は貰えなかったからさ」

——そう。今年のチョコは二年分だ。

去年のバレンタインの日には……銀子ちゃんは俺のそばにはいられなかったから。

「だから……欲しい」

「この子の作るチョコを。」

銀子ちゃんの愛情が欲しい。今は何よりもそれが欲しい。

「……八一」

「なに？」

「ごめんね。去年のチョコ、あげられなくて」

「それはいいって何度も言ってるじゃん。お願いだから謝らないでよ」

「……うん」

去年の2月14日。俺と銀子ちゃんが付き合い始めて最初のバレンタインデー。

その時この子は体調不良で長期入院をしていた。当時は俺との連絡手段を完全に断っていて……だから去年はチョコを貰うどころか会うことすらも出来なかった。

その選択は正しかった。その事は今ここにいる銀子ちゃんが証明している。

けれどもその選択によって、暫くの期間俺達と一緒にいられなかったのもまた事実で。付き合い始めて最初のバレンタインデーを幸せな思い出には出来なくて。

その事を未だに後悔してる。だから銀子ちゃんはこのなにもしおらしくなっちゃってる。

「銀子ちゃん」

「……………」

「…………ぎーんこちゃん」

これ以上しおらしい銀子ちゃんを見ていたいとは思わない。

困った俺は銀子ちゃんをハグしたまま、その頭の上で顎をぐりぐり。ぐーりぐーり。

「……痛い。なに？」

「もう済んだ事なんだしいい加減気にするのは止めなつて。気分が滅入るだけだよ？」

「それは分かっているんだけど……でも、バレンティンみたいな特別な日は……どうしても去年の事を思い出しちゃつて……」

去年の事を思い出す……か。

……まあ、気持ちはよく分かるけどさ。俺だつて当時は凄くすごーく寂しかったし。

さつき言った通り、幸いにも他の人達からいくつかチョコを貰えたおかげで気分を持ち直す事は出来ただけど……それでも埋めようのない空白を感じていたのは事実だ。

しかしそれはもう一年も前の話。だから俺としてはもうとっくに消化済みの話だ。

そりや当時こそ落ち込んだものの、その後全ての事情を聞いたらすとんと腑に落ちたというか、俺としては怒るべくも無い話だと理解したから。

だからこそ、銀子ちゃんにはこれ以上無用な負い目を感じて欲しくはないんだけど

……そう簡単にはいかない話なのか。傷が癒えるのにはまだまだ掛かるかもしれない。

「でもさ、この分だと来年まで引き摺るかもよ？」

俺は一旦身体を離して、銀子ちゃんの顔をよく見ながら言う。

「……そうかな」

「そうだよ。いいやそれどころか再来年、更にその先までずーっと引き摺るかもね」

「……………」

「毎年毎年バレンタインデーの度にこうやって暗いテンションになるの、さすがにヤじゃない？」

「……そうね。さすがにそれはイヤ」

銀子ちゃんは苦笑するように笑う。

そうそう、せつかくのバレンタインデーなんだしもつと笑顔を見せて欲しい。

あの時の苦しさはもう終わった事なんだから、早く吹っ切ってくれていいんだ。

それに……なにも全てが悪かった事ばかりではないんだから。

「分かったわよ。じゃあ作ればいいんでしょ、チョコレート」

「お、その気になってくれた？」

「まあね。じゃないとあんたがしつこそうだし。それに……」

「それに？」

「……本当の事を言うとな、最初からそうしようかなって決めてたから」

少し恥ずかしそうに口にした、その言葉とか。

去年の今頃はそりやもうキツイ時期だったけど……でも、良かった事だつてある。

それは勿論今こうしていられる事。元気になった銀子ちゃんから、今年のバレンタインチョコを貰えるつてのが一番嬉しい事なんだけど。

……でも、それだけじゃなくて。

「八一」

「ん？」

「……あの」

「なに？」

「……遅くなったけど、去年の分、あげる」

もじもじしている銀子ちゃん。どうやら去年の分をくれるようだ。

ああ可愛い。これも良かった事の一つかな。銀子ちゃんはより一層可愛くなったよね。

「いいの？」

「……いいけど」

特に……すつと一歩分、自分から歩を進めて距離を寄せてきた銀子ちゃんの、これを。

この変化を怪我の功名と言つては怒られちゃうかもしれないけど。

「……八一。好き」

「うん。俺も」

「好き。……大好き」

するりと俺の首に回される腕。

あの頃よりも、銀子ちゃんはやつとだけ自分の気持ちに素直になったよう。

「……んっ」

そうして去年の分を、チョコレートよりもとびきり甘いやつを貰った。

短編 棋士・九頭竜八一の有意義な研究

棋士にとっての研究とは。

それは将棋を勉強する事だ。と、そう答える棋士はいるだろう。

それは最も大事な事だ。と、そう答える棋士だっているかもしれない。

とにかく棋士にとっての研究とは。

それは将棋を勉強してより強くなる事で、棋士にとっては何よりも大事な事の一つだろう。

そんな研究について。一口に研究と言ってもそのやり方は様々だ。

現物の将棋盤、あるいはタブレット端末とにらめっこしながら一人で黙々と研究を行う場合だってあるし、誰かとの一対一の対局を繰り返すVS形式や、複数人で集まって対局や検討を行う研究会という形もある。

どの形式の研究を好むかは棋士によってそれぞれだろう。例えば俺の場合で言うな

ら……その時々によってまちまちだね。少し前までは個人研究が多かったけど、最近はまだV S の機会が増えてきたかもしれない。要はケース・バイ・ケースという事だ。

そして研究の本身、つまり研究テーマに関して。

これもまあ言っちゃうとケース・バイ・ケースという話になりそうなんだけど——
——しかし、だ。

一部の棋士先生達の中には、生涯を懸けた研究テーマというものを持つ人が存在している。

例えば生石先生。これはあえて言う必要も無いだろうが、ズバリ振り飛車だ。

振り飛車党の総裁であるあの人のとって、振り飛車とそれから派生する戦法が生涯を懸けての研究テーマである事は間違いないだろう。

他にも釈迦堂先生なんかも長年懸けて研究しているテーマがあるとか聞いた事がある。ある程度年配の棋士先生達ほど、そういった思い入れの強い研究テーマを持つ傾向にあるのかもしれない。

さて、そんな話を踏まえて。

若輩ながらも棋士の一人であるこの俺、九頭竜八一の研究テーマといえば。

これは生憎だけ……生涯を懸けて、と言える程の研究テーマは今の所見つからない。

「勿論研究はちゃんとしているよ？ それは棋士として当たり前に行っているけど、その研究テーマはやはりケース・バイ・ケースといった感じだ。」

以前は一手損角換わりが俺の中でアツかった時期もあるし、生石先生のような捌きの感覚を少しでも身に付けたくて振り飛車研究に傾注していた時期だってある。

その時々によつて研究テーマが変わってくる、それが今の俺。

ただまあ多分だけど、多くの棋士達にとつて研究というのはそういうものだと思うけどね。

やはり戦法にも流行り廃りがある以上、その時々で最先端というものは変わってくる。となれば研究の方もその時々で変わってくるのがセオリーというものだろう。

と、ここまでの話を踏まえて——今。

今現在、九頭竜八一の中で一番アツク来ている研究テーマと言えば何か。

それは……。

「……………」

それがこれ。

5筋の七に置かれた歩兵。

そしてその一段上。5筋の六に置かれた銀将が燦々と光を放つ——

「……ふむ」

それがこの戦法……『腰掛け銀』だ。

そう、腰掛け銀。腰掛け銀こそが今九頭竜八一の中で一番アツク来ている戦法なのだ。

腰掛け銀とは『步越し銀』という形の一種だ。

歩の上に銀を移動させる事を步越し銀といい、特に5筋に置く步越し銀の事を腰掛け銀と言う。

先手なら5七に置かれた歩の真上、5六まで銀を上げてくる。まるで銀が歩の上に腰掛けてるように見える事から腰掛け銀と呼ばれる。

序盤で双方の角を交換する角換わり戦法においての角換わり腰掛け銀や、相掛かり戦法での相掛かり腰掛け銀などの戦法で見られる、プロ棋士の対局の中でも採用される事の多い戦法だ。

将棋の歴史を語る上でも外せないぐらいにメジャーな戦法、腰掛け銀。

そんな腰掛け銀戦法について、俺は今一番アツク研究しているという訳だ。

という事で……棋士・九頭竜八一による腰掛け銀研究の成果をここで少し披露したいと思う。

さーてきて、それじゃあ何から語ろうかな。

そうだな……まずはね、この『腰掛け銀』っていうワードのセンスが良いよね。

まずはここに注目したい。この腰掛け銀というワードは本当に素晴らしい名前だと思っただ。

だってこれが歩越し銀のままだったり、あるいは5筋銀とかいう名前が付いていたとしたら。

それだったらこれ程に心揺さぶられはしないというか、これ程までにエモさを感じる事は無かった。

歩の上に銀が腰掛けるから腰掛け銀。この名前を名付けた人はマジで凄まじいネーミングセンスをしていると思う。俺としてはもう万雷の拍手を贈って讃えたい気分だ。

だってさあ、ほら……。

こうして腰掛け銀の形を取ると、そこには……。

「……………」

ほらあ……うなじが見えるでしょ？

ああ、うなじ……目の前にうなじがあるよ……。

「……………」

うなじ。うなじ。

真つ白なお肌の綺麗なうなじ。シミ一つない本当に綺麗なうなじ。

よく見ると微かに産毛が生えているうなじ。俺はふーっと息を吹きかけてみる。

「……………んっ」

おお、産毛が揺れている。

色素が薄いせいかわ透明な産毛。キラキラと光りながら揺れる産毛。綺麗なうなじ。

この素晴らしいうなじこそ、腰掛け銀戦法における第一の長所である事は言うまでもない。

——え？

今聞こえた「……………んっ」という女の子の声は一体誰の声だ、って？

……………そ、それは。

……………それはね……………あれだよ、あれ。今の声は……………そうっ！ 今のは将棋の妖精さんの声だ。

ほら、ヒ〇ルの碁みたいなき感じでき。棋士の脳内には将棋の妖精さんが住み着いているんだ。

それでこうして研究している時なんかはね、時折妖精さんが俺にだけ聞こえる声で語り掛けてくれたりアドバイスしてくれたりするんだよ。

……え？ そんな見え見えの嘘を吐くなつて？

いやいや本当だつて。これはマジの話なんだ。

これは本当のホントに将棋の妖精さんだから。一目見れば誰だつて信じると思うよ？

……つと、話を戻そうか。

とにかくこの美しいうなじを間近で見られるのが腰掛け銀における長所の一つで。

そしてその次、腰掛け銀戦法における第二の長所と言えば……それはやはりこの感触だろう。

「……あ」

俺は両手を前に回す。

盤上にある銀を優しく抱えるように、そのお腹の下辺りに手を下ろした。

「ん、ちよつと……」

反射的に身体を揺すつた妖精さん。

その声を無視して俺は銀を抱き寄せる。両腕に力を込めてぎゅつと抱きしめる。

「……やわらかい」

「……あつそ」

あー……これだよこれこれ、この感触ね。

この肉付きの薄いほつそりとした感触。これを味わってこそその腰掛け銀戦法だ。

ただ抱きしめるだけじゃない。こうして腰掛けられる事によって感じる銀自体の重

み、銀という存在の全てを余すところなく味わう事が出来る、それが堪らないんだよね。

こうしてその細さと軽さを実感しているとさあ。

つくづく銀って本当に華奢だなあつて、か弱い存在だなあつて思えてきて……。

これは絶対に俺が守つてあげなきゃ！ つて気分になる。俺の中の庇護欲が爆発し

ちやう。

こんなにも細くて軽い銀だけ……ただね、この細さにはマイナス面もあるんだ。

専門家の中にはこの細さこそが欠点なのではと、そのすらつとし過ぎている薄さこそ

が銀の短所なのではと指摘する者も存在している。

しかしね、俺も専門家の一人としてここは声を大にして言いたい。その考えは大きな

間違いだ。

だって銀とはこういうものだ。これこそが銀のあるがままの姿なのだから、そこにケ

チを付けるよりもその細さを存分に愛でるべきだろう。

そもその話、これ程に銀が細くて軽いからこそ腰掛け銀戦法だつて成立するんだ。つまりこれは銀の強みを生かした形であり、これで肉付きが良ければなんて思うのは本末転倒ではないか。

けれど……まあ、ね。

かくいう俺自身もまだまだ未熟者だからさ、時折そういう妄想はしちゃうんだよ。

もし銀の胸部に豊満なものがあつたら、それはもうパーフェクトな存在だったのになあつて、そんな事を考えちゃつたりもするけどさ。

でもね、それでもやっぱり思うんだ。

それは銀じゃない。肉付きの良いグラマラスな銀なんて銀じゃないよ。

そういう局面はもつと別の駒に任せればいい。例えば桂馬とか、香車とかさ。

……と、また話が逸れてしまった。

とにかくこの軽さ、この細さ、この銀でしか味わえない感触こそが第二の長所で。

そして……こうしてピタリと密着すれば、腰掛け銀戦法における第三の長所が浮かび上がる。

それは何かつて？

それは勿論……この香りだ。

「ああ、いい匂い……」

「ん、なにを……」

銀駒から香る甘い匂い。芳醇なフェロモン。

腰掛け銀戦法を採用する以上、これを堪能しない手は無いだろう。

てな訳で俺は鼻先をぴたりと綺麗なうなじにくっ付けて……くんくん、くんくんか。

「ちよ、いっしょ……」

恥ずかしくなったらしい妖精さんが慌てた声を出すけど、これは無視。

だって今日の対局は俺の勝ちだったからね。約束通り今日の主導権は俺のもの。なので心ゆくまで銀の香りを堪能しちゃうのだ。くんくん。

「くんくん、すーはー、すーはー」

「八一、あんたねえ……」

あー……マジ、銀……いい匂いがする……。

俺もうこの香りが世界で一番好きだ。こんな事言うときモがられるから口には出せないけど。

なんかね、こう……懐かしくなるんだよね。

子供の頃、同じ毛布に包まって一緒にお昼寝していた時の事を思い出すような。

今でもその頃と変わらない匂い。暖かくて、俺を幸せな気分させてくれる銀の香り。

……あ、いや、あれだよ？

これは単なるたえつて言うか……つまりね、将棋の駒の香りがするって事だからね？

棋士として、俺が使用している銀駒は最高級の物だからさ、最高級の木材である黄楊のいい香りがするんだよね。うん、ソユコトソユコト……。

……さて。

以上三点、ここまで腰掛け銀戦法における長所をザツと紹介してみた。

勿論これ以外にだつて長所は沢山あるよ？

例えば銀の背後を取る事で、こちらの行動や狙いが銀に勘付かれないようになる所とか。

こうして抱えている事で、銀の全てをコントロールしているかのような優越感に浸れる所とか。

このままちよつと本気を出せば、すぐに銀を投了させられる体勢まで持っていけちゃう所とか。

「……あのさ」

「なに？」

「もう投了の流れまで持っていい？」

「えっ」

「いい？」

「……だめ」

ちえつ、駄目だつて。

妖精さんからNGが出たので、今日はもう少し研究に没頭する事にしよう。

まあ、とにかく、だ。

とにかく腰掛け銀には数多くの長所がある。それは分かってくれたと思う。

その魅力を挙げたら枚挙に暇がない。多くの棋士達に支持されるのも納得の戦法だと言えよう。

しかし……そうは言っても腰掛け銀とは。数多ある将棋の戦法の中の一つでしかない。

そして必勝の戦法なんて存在しない以上、腰掛け銀にだって短所はある。であるならば、腰掛け銀の研究をする者としてそちらとも向き合えない訳にはいかないだろう。

なのでここからは腰掛け銀の弱点……というか、その崩し方についても考えてみる。……ただ、まあ、なんと言うか。

崩し方とはいってもね、この腰掛け銀の場合はそう難しい話でもないんだけど、さ。

さてさて、腰掛け銀の弱点……を語る前に。

まずは腰掛け銀戦法の中核となる駒、銀将そのものについての弱点にも触れておきたい。

例えば。将棋の格言の一つに『攻めは銀、受けは金』というものがある。

機動力に勝る銀将を攻めで使用して、守備力に勝る金将を守りで使えという意味合いの格言だ。

しかしこれはどうだろう。裏を返せば、銀は守備力に難があつて攻められるのに弱い、という見方も出来るのではないか。

とかく銀というのは攻撃的な性格をしている。

その攻めの迫力は凄まじく、キレた時なんかはもう手が付けられない……が。

しかしその反面受けに回ると脆い。こちらから攻めれば強気な仮面の裏にある素顔を、弱くて儂い部分を見せてくれるって訳だ。

「ね、そうだよね」

「なにが？」

「だから……攻められるのに弱いって話」

「……なにそれ。私が？」

「うん」

「……別に、そんなことないっ」

つーん、とそっぽを向いちやう妖精さん。

すると妖精さんの銀髪がサラサラと揺れて、ふわっと甘い香りが漂ってきた。

……ぐぬぬう、投了まで持っていきたい……！

「さっきの対局は途中で攻めが途切れちゃったただけだもん。私は別に受け将棋だって――

――

「あ、違う違う、これ将棋の話じゃないよ？」

「え？　じゃあなんの話なの？」

「いやだからさ、こうやって俺に攻められる事に弱いよねって言う……」

「つー！　べ、別に、……そんなこと、ない……」

言葉の意味の違いを知って、妖精さんの声がごにごによと小さくなっていく。

「私は……そんな、弱いわけじゃ……」

「でもさあ、どっちかって言えばやっぱり攻められる方が好きだよな？」

「…………うるさいっ、…………ばか…………」

何を想像したのか、顔からうなじまで真っ赤にしちやう妖精さん。

あー可愛い可愛い投了させたい投了させたい！ マジで投了させてやりたいい

……………！

…………じゃないや。冷静になるんだ俺。

…………ええつと、なんだっけ。あそうだ、銀将自体の弱点の話をしていたんだったね、うん。

ま、とにかく銀は攻められるのに弱いつて事。さつき妖精さんは違うと否定していたけど、まあ妖精さんの立場ではそう言うしかないだろう。

ただそれでも経験則としてね、銀が攻められるのに弱いつてのは紛れもない事実だからね。そう、事実ではあるんだけど…………しかし、ここで一つ大事なポイントがある。

妖精さんが否定した事も含めてだけど、銀将にもプライドってもんがあるんだ。

だからただ闇雲に攻めようとしても、それでは無理筋に終わってしまう事が多い。

銀はとてモプライドが高くて、更に言えばとつても恥ずかしがり屋さんな駒だからね。攻められて弱い部分を晒すのを嫌がっちゃうんだよ。

だから銀を攻める上で大事なものは、しっかりとした攻めの展開を構築する事。

それに加えて、こちらが行う攻めの展開を正当化出来る理由。それがあれば尚良しだ。

こつちの攻めを認めさせる理由、言い換えれば銀に受ける事を納得させられるだけの理由。それを用意しておくのが銀対策としてはベストだろう。

例えば今日のように対局で勝ってみたりとかね。

今こうしている姿が一番分かりやすいと思う。腰掛け銀然り、それを受け入れざるを得ない理由一つ用意すれば、銀はこちらの思うがままに動いてくれて、可愛い姿を沢山見せてくれるって訳だ。

「そう。本当に思うがまま、だよね」

「……何が？」

「何がって……それ言ってもいいの？」

「っ、……なんか、今日の八一は……いじわる」

「そうかな？」

意地悪って、そりゃあ……こんなにも可愛い反応をされたらそりゃあねえ。

妖精さんのそんな可愛らしい反応こそが、俺を意地悪にさせている最大の要因である。とこの子は気付いているのだろうか。

この反応でなんとなく分かると思うけど、銀自体も本当は攻められるのが好きなんだ

よ。

但し照れ屋な銀は自分が攻められるのが好きだという事を受け入れたがらない。だから受け入れるだけの理由をこちらで用意してあげる。今日は将棋で負けたから腰掛け銀しちやうのも仕方ないよね、とかさ。

これは銀を愛でる上での礼儀というか、マナーのようなものだ。そこまで計算して展開を組み立ててこそそのプロ棋士だと言えよう。

……けれど、けれどね、あんまりこういう事を言ったりするとさあ……。

これもまた批判の声が拳がったりするんだ。有識者会議とかで「なんかそれって面倒くさくない？」みたいな意見が拳がったりするんだよ。

ここは俺も有識者の一人として断言するけど、その意見は大きな間違いだからね。本当に。

いいかい？ 銀つてのはね、こういう面倒くさい所が可愛いんだよ。

素直でいい子ちゃんて手間の掛からない銀なんてそれもう銀じゃないから。いやマジで。

そういう局面はもつと別の駒に任せればいい。例えば銀よりも若いJSとかさ。銀つていうのはとつても意地つ張りで、普段からつんつんしていて、無愛想で。そりゃあ素直じゃないけど……でも、それでも大きな想いを寄せてくれていて。

こっちが愛情を向ければ、照れながらも愛情を返してくれる所とか、そういういいらしい姿が銀の最エモポイントなんだよ、うんうん。

それにね。確かに銀を愛でようとする際には一手間二手間掛かる事も多いけどさ。

そうやって手間を掛ければ掛けた分、ちゃんとりターンは約束されているからね。

今回だつてそうさ。今回はしつかり銀を攻めるだけの理由を用意したから、銀は文句も言わずに俺の腰掛け銀研究に付き合ってくれている訳で。

「……………ね」

「……………なに？」

「なんかさ、可愛いなあって」

「……………なにが」

「可愛い」

「……………」

「かわいいなあ」

「……………」

あ、妖精さんが沈黙しちやつた。

妖精さんは可愛いという言葉に弱い。こういう所とかマジで可愛いと思う。

こうやって言葉で攻めるのも有効かもしれないね。とにかくきちんと下拵えさえす

れば、攻撃的な性格の銀だつてこの通り大人しくなるつて事だ。

そして一度大人しくしてしまえば……そこからはもう銀なんて崩し放題だ。

「……(そーつと)」

「……つー！」

俺は左右からそーつと手を伸ばす。

ここからは本格的な銀の攻略法。まずは左右から攻めるのが定跡だろう。

「ちよつと、八一……」

将棋用語に『銀ばさみ』という言葉がある。

銀の左右を歩などで挟んで動けないようにする、銀に対する有効な手筋の一つだ。

銀将は左右には手が出せないからね。隙の多い両側から攻めるのが効果的つて訳だ。

「……(ふにふに)」

「あ、ん……(ら……)」

銀の両脇の下から手を回して、銀の柔らかい部分をほぐしに掛かる。

……いや、柔らかい部分、あるから。華奢な銀にだつて柔らかい部分はちゃんとあるから。

というか意外な程にある、あつたからね。この発見は革命的であると同時に、未だ銀

の研究が完全には進んでいない事の証左であろう。

「……（もみもみ）」

「ふあ……もう、駄目だって……」

「……（ぐりぐり）」

「……んあ、や、いちい……」

ちよūdど手のひらに収まるぐらいのサイズ、銀の柔らかくて儂い部分。

か弱い銀を傷付けないよう優しく丁寧に、それでも念入りにじつくりと。

手のひらに伝わる甘美な感触を楽しんでいると……次第に妖精さんが甘い声を出し始める。

「あ、うん……、は、んう……」

……エロい。妖精さん、素直にエロいっす。

その艶めかしい嬌声を聞いていると、こうしてその身体を好きに触っていると……ヤバイ。

こちらのボルテージだって否が応でも増してくるといふもの。もう展開なんか一切合切無視してこのままガバって襲い掛かりたくなる。

けれど……くっ、駄目だ……！

ここは攻め手を急いでは駄目だぞ……！

俺の方が年上なんだから。ここで我を忘れてがつつくような格好悪い姿は見せたくない。

ここは慌てず騒がず、冷静に次の一手を指す。

次の一手は、じゃあ……この、耳とか。

「ひゃっ……!」

口元を寄せて、銀の耳たぶを軽く甘噛み。

すると妖精さんが甲高い声を上げた。……ああ可愛い、もつとその声が聞きたい。

「ううん……、ふ、んあ……」

舌を伸ばして、耳の筋を這うようにしてねつとりと舐め回す。

この通り、銀は耳を攻められるのにも弱い。とかいうかぶつちやけ大体のところ弱い。攻められるのに弱い銀は身体中弱点だらけなのだ。

例えば……首筋とか。

「ひゃ、うん、くすぐりたい……」

他にも……背中とか。

「あつ、やん、やいちい……」

そして……内ももとか。

「あつ、ん、そこ、だめ……!」

俺の手が触れる都度、確かな快樂に押されて妖精さんが切ない呻きを漏らす。

立て続けとなる攻めを受けて、銀の身体がどんだん熱を帯びていく。

ああヤバイ銀可愛い。銀のエロさがヤバイ。

もう駄目だ。もう限界だ。もう投了させたい。今すぐソツコーで投了に持ち込みたい。

……が、まだ大事な話をしていなかった。

さつき言おうとして後回しにした事、腰掛け銀戦法における弱点。これだけは話しておこう。

ただまあ弱点とは言ってもね。腰掛け銀は今でも研究盛んな戦法だしね。

多くの棋士が実際の対局で採用する戦法である以上、目立った弱点がある訳じゃないんだけど。

でも、あくまで一例を挙げるなら……そうだな。角換わり戦法においての話を示そうか。

角換わり戦法には大きく分けると三つの戦型分類が存在し、角換わり腰掛け銀の他にも角換わり早繰り銀、そして角換わり棒銀という戦法がある。

そしてこの三つの戦法はそれぞれ三竦みの関係というか、相性があると言われていた

りする。

つまり棒銀は早繰り銀に弱く。

早繰り銀は腰掛け銀に弱く。

そして、腰掛け銀は棒銀に弱い。

……と、古くから言われていたりする。

……そう。つまり棒に弱いのだ。腰掛け銀は。

なんかもうね、あえて例える必要も無いくらいにド直球なワードである。これを下ネタにしたくなつちやう月夜見坂先生の気持ちも分かる。

とはいえまあ、角換わり戦法における三竦みの関係については昔の話で、研究の進んだ今では異なる意見もあつたりするんだけど……。

しかし、それはあくまで角換わり戦法における腰掛け銀についての話であつて。

今、俺が熱心に研究しているこの腰掛け銀について言うなら、棒に弱いのは紛れもない事実だ。

という事で。

「……ふう、もう限界」

「あ、ちよつと……！」

俺は銀の腰に手を回すと、少し体勢を変えてお姫様だつこの形にする。

というのもね、この腰掛け銀は攻めるのには有効だけど投了させるのは難しいんだ。いや別に俺は構わないんだけど、銀が嫌がる。銀は背後からじゃなくてちゃんとお互いの顔が見られる体勢が好きなんだつて。

「……つと、これでよし」

「む……」

なので銀を持ち上げたまま少し移動して、背中が痛くならないお布団の上に下ろしてあげる。

そして、そのまま銀の上に覆い被さった。

「……ねえ」

「なに？」

すると、銀はじとつとした目を向けてきた。

そんな非難がましい目付きすらも可愛い。今はもうこの子の全てが愛おしく見える。

「これ、腰掛け銀じゃないけど」

「え、ここまで来てそこにこだわるの？」

「こだわるっていうか……そもそも今回は研究をさせて、つていう約束だったわよね？」

私、ここまでするとは言っていないんだけど」

えー、そりやまあ、名目上はそうだけどさ。

でも普通に考えたならこれも込みだよねえ？ 二人きりの研究で何もしない訳がないよねえ？

「これも研究だって。腰掛け銀研究改め……そうだな、寝かせ銀、いや、押し倒し銀、つて事で」

「そんな戦法無いわよっ！」

「じゃあ新手研究つて事にしよう。それなら問題ないよね」

「無い訳ない……ん、あつ、ちよつとお……！」

新手研究。未知の戦法を発見したら俺の名前が付くかもしれない、ロマン溢れる研究だね。

……とそんな事を考えながら、俺は銀の服の中にするりと手を滑らせていく。

……あ、そういえば。

この話の冒頭で、俺にはまだ生涯を懸けての研究テーマが無いって言ったけど、あれは嘘だ。

この『銀』の可愛さを追求する事。

それこそが生涯を懸けての研究テーマなのだ、今の俺は胸を張ってそう言える。

しかし『銀』とは。

いつ何度見ても。触れても。かくも可愛さの尽きない存在であるからして……。俺としてはもう、日々研究あるのみである。

短編 甘えたい日

——甘えたい。

そう、甘えたい。率直に言うけど俺は今、未だかつて無い程にむっちゃ甘えたい。

いやいきなり何言ってるだと思われるかもしれないが、とにかく猛烈に甘えたい気分なんだ。

果たして俺は誰に甘えたいのか……というのは言うまでもない事だから端折るとして。

何故俺は今こんなにも甘えたい気分なのか。これについてはハッキリとした理由は無い。

例えば対局で負けたとか、精神的にへこむ出来事があったから慰めて欲しいとかそういうんじゃないかって、ただ単純に今日は朝からそんな気分だった、としか言いようが無いんだよね。

これは思うにだけど……人間にはバイオリズムってものがあるでしょ？

心身バランスの波、バイオリズム。その変化によってとても調子が良い日もあれば、その逆に何をやっても冴えない日だってあるだろう。

それが人間だ。身体の状態、心のバランス、バイオリズムは毎日によって変動するものだ。

となれば、こういう日だってあるだろう。

訳も無く理由も無く、ただただ猛烈に恋人に甘えたくなっちゃう日だってあるのではないか。

そう、あるんだよ。だからこれは俺が人間である以上は仕方ない事なんだね。

「……つてことなんだ」

とか、そんな俺のあれこれを。

「分かってくれたかい？ 銀子ちゃん」

隣に座るこの子にね、こうして一から説明してみたわけさ。

無論甘えさせて貰う為に。俺が持て余している甘えたいエネルギーを発散する為にね？

「……はん？」

ほならね、返ってきたのはこの反応よ。

やる気もない、愛情も無いような目を向けて、鼻で軽く笑うかのように。

実に淡泊極まりないリアクションである。恋人に取る態度としてこれはどうなのだろうか。

「なんか……反応薄いつすね」

「そう?」

「うん。てかさ銀子ちゃん、今の説明ちゃんと聞いてた?」

「ううん、途中から耳に入ってこなかった」

「えー……」

銀子ちゃんは俺のすぐそば、一メートルも離れていない所に座りスマホをいじっている。

この距離で耳に入らないって事は無いだろうし、要はスルーしたいって事だろうね、了解了解。

「じゃあもう一回説明するよ」

「懲りないわね」

「懲りないとも。えー……人間にはバイオリズムの波による心身バランスの変化があつてだね」

「へえ」

「何をやっても絶好調な日があったり、その逆に何をやっても駄目な日があったりするじゃん？ 銀子ちゃんだってそういう経験あるでしょ？」

「まあ」

「でその一環として、誰かに甘えたい気分になっちゃう日だってあるよね、ってことなんだよ」

「ふうん」

ちなみに。先程から俺が語っている内容はほぼほぼ事実だ。

繰り返しになるけど、今日は本当に朝起きた時から誰かに甘えたい要求が半端無かった。人肌恋しいような気分っていうか、母性に包まれないような気分っていうか……なんていうか。

ここ最近はず定が合わなくて二人で会うのがご無沙汰だったのが理由かもしれないけど、とにかく今日は朝から銀子ちゃんに会いたかった。すぐくすぐりく銀子ちゃんに会いたかった。んで甘えたかった。

さつきも言ったけど、人間なら誰しもそういう日があるはずだ。それが俺は今日だったんだ。

だから今日はちよつと強引に予定を開けて、久しぶりに銀子ちゃんと会える時間を作った。

そしてここ、俺達の密会でよく使用する銀子ちゃんの研究用マンシヨンに到着して早々、俺は冒頭からの流れを説明した。そして今に至るといふ訳である。

「これはなんせバイオリズムの変化だからさ。本人にはもうどうしようもない事なんだよね」

「それはそれは」

「そう、これは人間である以上抗えないもので……だから俺は今、誰かに甘えたい気分なんです」

「そうなんだ。困ったわねえ」

困ったわねえ、と一ミリも困ってなさそうな顔で呟く銀子ちゃん。

相変わらずリアクションが薄い。まさに糠に釘、暖簾に腕押し……だけど、生憎この程度の塩対応には俺も慣れているからね。

銀子ちゃんは嫌な事には嫌だとハッキリ言うタイプだ。なので「嫌だ」とか「バカ」とか「死ぬ」とかが飛んでこない限りはまだ大丈夫、まだ引き下がる必要は無い。

「そうなんだよ、困ってるんだよ、俺」

「……………」

「朝からとつても困っててさあ……誰かになんとかして欲しいなあ、つて」

「……………誰かって、私に？」

その目がスマホ画面から離れて、じろりとこちらを向く。

「そうなんです。ここは是非とも銀子ちゃんにお願いしたく」

「……………」

俺が答えると、銀子ちゃんは半眼に閉じた目でじとーつと凝視してきた。

その胡散臭いものを見るような目を見ると……まあ、この子の言わんとする事は分かる。俺だって少々アレな事を言っている自覚はあるんだ、ていうか普段ならこんな事言わないし。

きつと銀子ちゃんは「唐突になに言い出してんだこいつ」と呆れているか、あるいは何か裏があるんじゃないかと警戒しているのかもしれない。

——が。

「……………え？」

「……………」

「え？ え？ もしかしてだめなの？」

「……………」

けど、それでもだ。

それでも……駄目って事は、無いよねえ？

なんせ俺達、恋人同士なんだし。まさか恋人に甘えちや駄目なんて事は無いよねえ？

「……………」

「もしもし？ 空銀子さん？」

うん、ないない、だって俺は恋人として普通の要求をしているだけなんだし。

その点は銀子ちゃんも分かっていたのか、嫌そうながらもその首を左右に振ることはなく。

「…………ま、駄目とは言わないけど」

だよねえ！ そうこなくっちゃ！

「けどさつきからあんたの言い分がムカつく」

「えっ」

「…………はあ、まあいいわ」

一体俺の言い分の何が悪かったのか。それはよく分からないけど…………ともあれ。

銀子ちゃんはさも面倒くさそうに嘆息すると、スマホを置いて俺の方に向き直った。

「で？」

「え？」

「甘えたいって？ 具体的にはどうしたいの？」

「あ、ええと…………じゃあ膝枕とか」

「足が痺れそうだからやだ」

「ぐう……………」

早速却下してきた。どうやら俺の甘えたい願望は足の痺れに負けたりらしい。悲しい。膝枕、いいよね。単に頭を乗せるだけなんだけどいかにも恋人つて感じがするじゃん？

ここは是非とも銀子ちゃんのスラっとした太ももの感触を後頭部で感じたかったが……ただね、銀子ちゃんの御御足の健康状態を守るのだからって大事な事だからね。

だからこれはしようがない事だよ。うん、これはしようがないししようがない。

「じゃ、じゃあせめて！　せめて頭を撫でて欲しいんですけどもね！」

「……………まあ、それぐらいはいいけど」

若干の沈黙の後、銀子ちゃんの手がすつと伸びてきて。

俺の頭の上に落ちると、わしわしと髪を掻き混ぜるように撫でてくれた。

「でも八一、あんたさつきから大分カツコ悪い事言ってるわよ」

「大丈夫だよ、それは自覚してるから」

「自覚してりやいいつてもんじゃない」

ごもつともで。銀子ちゃんの至極真つ当なツツコミが刺さる。

がしかし、こんな要求しておいて今更カツコつける事など出来ないだろう。全ては今日の俺の心身バランスの悪化が、バイオリズムの変化が悪い。

こうなってしまった以上、少なくとも今日一杯はそういう目で見られる事は甘んじて受け入れなくちゃならない訳で。となればもつと多くを味わっておいた方が得だというものだろう。

「銀子ちゃん、もつとガッツリ甘えたい」

「は？」

「出来ればさ、こう……俺の頭をね、両手でぎゅつと抱える感じでお願いしたく」

「っ、……はいはい」

呆れて物も言えない心境、なのだろうか。

そんなオーラはガンガンに出しつつも、なんのかんの言つてその通りにしてくれるからね。

ちゃんと恋人らしい事はしてくれる。銀子ちゃんつてばそういうところ可愛いよね。

「……………うう？」

「そうそう、これこれ……」

下ろしていた反対側の手も俺の頭に伸ばして、ぐいつと抱き寄せられる。

そのまま両手でぎゅつと抱えて、俺の頭が銀子ちゃんの腕の中にすっぽりと収まった。

「ああー、ええ感じー……」

少しもたれ掛かるような体勢になって、俺と銀子ちゃんの距離が密着する。

そうすればほら！ 慎ましやかな、慎ましやかな母性がすぐ目の前に！

「……てかなに？ 今日なんかあったの？ 誰かにイジメられた？」

「別にそんな事は無いって。ただ単にこういう気分っていうか、そういう欲求がもの凄
いだけ」

「あつそ……」

そう、理由なんて無いんだ。

「とうかこうして甘える事に、愛しい恋人の母性を求めちゃう事に理由が必要なの
だろうか。」

「もしかしたら俺、疲れてたのかな。だから自然と癒やしが欲しくなっちゃったとか」
「癒やしねえ……疲れているんだったら温泉にでも行ったら？」

「あ、いいね温泉、今度行く？」

「……予定、合うかな」

「大丈夫でしょ。なんなら日帰りでもいいし」

「日帰りいゝ？ せっかく温泉に行くならもつとゆつくりしたいんだけど」

「勿論泊まりだって大歓迎ですが？ そんなじゃ後でスケジュール調整してみようか—
—」

そんな、取り留めもない会話を交わしながら。

こうしてその優しさを、母性を、愛情を味わう。これ以上の至福があるものか。きつと、こういう恋人の時間が最近の俺には不足していたんだね。

ああ、マジ癒やされる……—



—そして、その後。

つかの間の逢瀬を楽しんだ後、私は八一と別れて帰路に就いた。

「……………ふう、疲れた」

自宅にある自分の部屋。ベッドに腰を下ろして、ふと頭の中に浮かんだのは先程の事。

「にしても……………今日のあいっ……………」

今日の八一は妙に引っ付いてきた。

いつも以上に身体的接触が多かった。ちよつとスキンシップが過剰だった。

私が鬱陶しがるような素振りを見せても、一向に私の元から離れようとしなかった。

まあ、正直言つて八一はアホでスケベだから。

だから今日みたいな事は往々にして良くある事だったりするんだけど……でも、今日はそのようになった理由がちよつとだけ気になった。

八一曰く、今日は甘えたい気分だったとか、疲れていたからだとか。

「……ま、なんだっていいんだけど」

私に甘えたいと思うのは、まあいい。

なにバカな事を言ってる、男だったら甘えるな……とか、そんな事を言うつもりは無い。

私だってそこまで鬼じゃない。私よりも二歳年上の男が年下相手に取る態度としてどうなのかと思わないでもないけど、そこには目を瞑ろう。

なんせ私は年下だけど姉、姉弟子だし？

その上あいつの恋人となれば、そりゃあ甘えたい対象にはなつちやうのだろう。

それは私だって理解している。というか八一が甘えていい相手なんて空銀子オンリーな訳で。

だから別に甘えたいっていうなら、私としては応えてあげるのも吝かではないんだけど……。

「……はあ」

バイオリズムがどうだとか。心身バランスの変化がどうだとか。

あの時の八一の言い分を思い出して、思わず口から呆れの混じった溜息が漏れる。甘えたいと言うのなら、応えてあげるのも吝かではない。

けどね。それならもつと男らしくというか、もつと直球で来て欲しい。

シンプルに「甘えたいから甘えさせて」と言われれば「いいけど」とすぐに返せるのに。なのに初っ端からああもぐだぐだと屁理屈を捏ねられては、こっちもそういう気分が失せてしまう。

「あれはきつと八一なりの作戦だったんだろうけど……今回のはいまいちだったわね」

聞き齧った知識を絡めて、自分の言葉に説得力を持たせるのが狙いだったんだろ……が。

でもあの奇策は失策だ。将棋には滅法強い八一でもこういった事では読みを外す事もままある。

というか勝負に際して策を用いる事。ううん、策に嵌める事こそが勝負だと考えてしまうのは将棋打ちの悪い癖なのかもしれない。

その悪癖は時に直球勝負という選択肢を頭の中から消してしまう。今回の八一のよう。

「まあ、別にいいんだけどね。別にいいんだけど……それでも今回ののはちよつと……」
バイオリズムがどうだとか。心身バランスの変化がどうだとか。

それで甘えたい気分になっちゃった、とか。そんな与太話をぐだぐだ長々と。「全く……なにをバカな事言ってるんだか……」



——そして、翌日。

「……ん」

朝、私は差し込む日差しと共に目覚めて。

ピピピと鳴るスマホのアラームを止めて、もぞもぞと身を振りながら身体を起こして。

「……んー」

朝が弱い私はすぐには動き出せない。

そのままの体勢で暫しの間ぼんやりとして。

「……んう」

やがて頭の中がすつきりしてきた頃。

身体の隅々まで力が入るようになってきた頃。

「……………んっ？」

そこで——私は違和感に気付いた。

「……………んっ」

あれ。なんか……………身体が、体調が、変、だ。

身体中が……………ざわざわ？ ううん、もそもそ？ するよな、とても奇妙な感覚が。

「……………んんっ？」

なんか……………身悶えするような感じが、すごい。

指先が蠢いて、両手で、こう……………全身を掻き筆りたいような気分、が。

けどそれじゃ収まらない、そんなんじや到底満たされない事も、分かる。

「……………んん、ん……………ん！」

これは……………私は今、渴望している。

身体が。心が。大音量で警報を鳴らして大至急アレを欲しがっている。

あの熱を。あの温もりを。そしてついでに言うなら頭に浮かぶのは勿論あいつの顔で。

端的に言つて今の私は。

この心理状態は——

「……………あ、甘えたい」

え、なにこれ。なんかとつても甘えたいんだけど。

えちよつと待つてなにこれ。なんかウソみたいにめちやくちや甘えたい気分なんだけど。

「……あ、甘えたいんですけどっ!？」

つい声に出して叫んでしまった。

こんな朝っぱらから何を大声出してる私。そう思えども心と身体が付いてこない。

だつて甘えたい。私の心も身体も何もかも、その全てがあいつに甘える事を欲している。

「甘えたい! 八一に甘えたい!」

甘えたい。甘えたい甘えたい甘えたい。八一に甘えたい。

えほんとなににこれ、なんか信じられないぐらいに八一に甘えたい気分なんだけど。

八一にぎゅつてして欲しいんだけど。頭などでして欲しいんだけど。そのまま顎の下とかお腹とかも撫でられたいし、何なら全身包み込むようにぎゅぎゅーつてされたいし、それを越えてもつと色々なあれやこれやをして欲しいんだけど。

「あ、あま、あままま……っ!」

甘えたい気持ち——尋常じゃない。

こんな、とても抑えられそうにない莫大な規模の甘えたいエネルギーが、ここにある。朝起きて早々自分が自分じゃないみたいだ。まさかこんな事になるなんて――

「つて、これはまさか……まさかこれが、ば、バイオリズム!？」

これが。これがバイオリズムの変化によつてめっちゃ甘えなくなっちゃう日、なのか。

え、ていうかちよつと待つて。昨日あいつが言つてたあの与太話つて本当の事だったの!？」

「けれど、確かに……これは八一が言つていた症状そのもの……!？」

昨日八一は言つていた。今日は朝から無性に甘えたい気分だったのだと。

それはまさしく今の私だ。まさか八一から一日遅れで次は私の番だとも言うのか。

そんなまさか。バイオリズムなんて胡散臭いものが……でも、あ、甘えたい……!

「ぐ、ぐぐ……ぐ……ど、どうしよう……どうすれば……!？」

この甘えたいエネルギー、ハッキリ言っちゃうと到底我慢出来るような気がしない。

となれば対処法は一つ、この欲のままに八一と会つて発散するしかない。甘え倒すしかない。

「なら、今すぐ八一を呼び出す? けど……!」

叶う事なら今すぐ八一に会って甘えたい……けれどもさすがにそれは難しい。

こんな朝早くに呼び出すなんて迷惑もいい所だ。八一にだって予定があるだろうし、そもそも私だって今日は昼過ぎまで用事がある。

「待ち合わせるとしても夜、どんなに早くても夕方までは……くう……っ！」
それまでは頑張つて耐えるしかない。

この狂おしい程の渴望を。今にも破裂しちやいそうな程の甘えたいエネルギーを。
「ぐ、ぐにゅにゅ……！」

甘えたい、甘えたいっ——！

そう叫び続ける心に活を入れる。身体はざわざわするし頭はふらふら朦朧とする。

私は這い出るようにしてベッドから抜け出すと、覚束ない足でリビングへ向かうのだった。



そして——その後。

「はあ……はあ……」

荒い、熱い呼吸を何度も繰り返す。

「はあ……はあつ……！」

頭が、熱い。胸の奥が、熱い。

甘えたい、甘えたい。そう叫ぶこの身体の全てが平常時を超えた熱を帯びている。八一に甘えたいという欲求が強まりすぎて、私はもう息も絶え絶えになつていた。

「くっ……ふう、ば、バイオリズムがつ、こんなに恐ろしいものだつたなんて……！」

大阪の町の片隅で。マスクをして帽子を被つてサングラスまで掛けて。

ビルの壁に寄り掛かりながら息を荒げる私。世の中には到底出せない空銀子の姿がここに

「はあ……っ、でも、やっと……！」

時刻はそろそろ三時を過ぎた頃合い。やっと、やっと今日の予定が片付いた。

今日が簡単な雑誌取材だけで本当に助かった。先程記者の人と別れた私は晴れて自由の身だ。

「もし今日が対局日だったとしたら……ヤバかつたわね……！」

こんな状態で対局する事になったら。そしたら絶対にヤバかつた。

今、私の頭の中は八一に甘える事だけで一杯だ。こんな状態じゃ将棋盤に向き合つても指し手なんて考えられる訳が無い。きつと竜王の事だけしか見えず、飛車を成らせる事だけに熱中してしまい頓死するのがオチだろう。

というかもう暴露しちゃうと、先程の取材中からそうなっちゃった。

記者の質問に答えながらも、私の頭の中では八一に甘える事しか考えていなかった。

この後会ったらどうしようかな、八一の温もりをどう味わおうかな、どういふ話の流れで甘えモードに持っていつて、最終的にはどこまで——……とかとか、取材中は取材内容そつちのけでそんな事ばかり考えてしまっていた。

「とにかく……とにかく耐えきったわ……！　これで後は……」

今日の予定は済ませた。となれば後は待ち合わせ場所に向かうだけ。

勿論八一の予定も確保してある。朝の段階で「今日の夕方から予定を開けて」と連絡済みだ。

どうやら明日に東京で仕事がある八一は今日中に前乗りするつもりだったようだが、「大切な話があるからお願ひ」と頼み込んだら快く予定を変更してくれた。

「……ふっ、くう……！　もうすぐ、もうすぐだから頑張るのよ、銀子……！」

そう、もうすぐだ。

私は熱い身体を引きずりながら、のろのろと緩慢な動作で歩を進めていく。念には念を入れて、表通りではなく人通りの少ない路地を進んで。

そして——

「はあ……っ、疲れた……」

無人の受付を済ませてようやく辿り着いた——ここが待ち合わせ場所。人の目が無くなって緊張の糸が切れたのか、私はだらしなくもベッドの上に倒れ込んだ。

——そして。

それから小一時間後。

「やいち……」

八一を待つ、私。

「やいち……やいちやいちやいちやいち……!」

ぶつぶつと呪文を唱えながら。

カタカタと足踏みを鳴らしながら。

一人部屋の中で八一を待つ私。あいつはまだ来ない。イライラが募る一方である。

「ていうか遅いんだけどまだこないのあいつはほんとばかばかばか……っ!」

来ない。八一はまだ来ない。私の精神はすでに破裂寸前だというのにまだ来ないとは。

ちなみにこの予定をドタキャンされたらそれはもう私の死と同義なので、そこら辺を八一にはよく肝に銘じて欲しい所である。

「うゝゝゝ……やいちいゝゝゝ……!!」

焦れる。早く来てよばかやいち。

恋人を待たせるなんて駄目なんだから。後でみっちり教育してやる。

「……………ゝゝゝゝつ!」

焦れる。焦れる——つ!

けれど……実の所、待ち合わせの時刻はまだ。

単に私が早く到着し過ぎただけで、まだ八一の到着が遅れている訳ではない。

それが証拠に……ほら。

その時ドアの方から、ガチャリ、と。

「つ!!!」

ドアが開く音——来た、八一が来たつ!

その瞬間に心臓がドクンと跳ね上がる。抑えていた甘えたい衝動が一気に湧き上がってきた。

「……………つ」

が、私は息をぐつと飲み込んで……ここはまだ抑える、自制する。

しないから、しないからね。そんないきなり八一に飛び付いたりなんて絶対しないから。

そんなはしたない真似は出来ないの。私にだってプライドつてもんがあんのよ。
「銀子ちゃん、お待たせ」

来た。来た来た。

八一が来た。遂に私の八一が来た。

「……八一」

「うん」

ああ、八一がいる。これでようやく甘えられる。

なんかもうだめ。こうして八一と会えただけでもう感無量なんだけど。

「もしかして結構待った？」

「……まあ、そこそこ」

「そっか、ごめん。中々電車が来なくてさ」

「予定時刻よりは早く来たから許す。それよりも八一、呼び出しておいてなんだけど明日の予定は本当に大丈夫なの？」

「ああ、それは平気だから気にしないで。明日の午前中に新幹線に乗れば十分間に合うから」

これから私に甘え倒されるとも知らずに、八一はまんまとやって来た。

というかこいつ、昨日はあんなに甘えたい甘えたい言ってたのに今日は平然としている。昨日のアレはバイオリズムの変化が原因だから一日で元通りになったのか。

だったら私も明日には元通りの私に戻るのかもしれないけど……でも問題は今日、ここだ。ここでこの破裂しそうな程の甘えたいエネルギーを余す所なく発散しなければ。

「ところでさ、ちよつと気になったんだけど」

「なに？」

「……その、なんでここなの？」

なんでここ、と右手の人指し指を真下に向けながら眉を顰める八一。

どうやらここを待ち合わせ場所に指定した私の意図、それが気になっているようだ。

「別にいいじゃない。懐かしいでしょ？　ここ」

「いやまあ懐かしいっっちゃ懐かしいけど……それにしたってここは……」

言いながら八一はどこか居心地悪そうにきよろきよろと周囲を見渡す。

それもそのはず、ここは居心地良く落ち着けるような場所じゃない。どちらかと言えば落ち着かない場所というか、全体的にメルヘンチックな部屋の内装は妖しい雰囲気醸し出す為のもので。

そしてついでに言えば、今私が腰掛けているのはド派手なピンク色のハート型ベッドな訳で。

つまりここは……桜ノ宮という町で。

桜ノ宮と言ったら……まあ、ご定番の場所っていうか、その……いわゆる、ラブホテル。

以前、対局前のルーティンとしてもお世話になったあの場所『HOTEL白雪姫』の一室だ。

「ここじゃあ駄目？ 何か問題でもあんの？」

「問題っていうか……その、うーん……」

ここは以前にも二人で通っていた場所、今更問題があるとは言えないだろう。

故に言い淀む八一。ただ何故待ち合わせ場所がここなのかという疑問はまあ尤な疑問だと思う。

私と八一の密会では基本的にあの部屋が、以前に私が研究用として購入したワンルームマンションの一室で落ち合うケースが多い。あそこはまだ誰にも知られていないし、将棋会館からも近くて便利だからね。

だから当然今回もあの部屋で待ち合わせようかとも考えたんだけど……結局ここにしたのは……まあ、なんだろう、あの……ほら、気分転換というか？

ていうかこっちが近かったから。そう、今日の取材場所からはこっちの方が近かった。その他色々手っ取り早かったからこっちを選んだだけなので他意は無い。無かったら無いの。

「でもさ、さすがにちよつと危険じゃない？」

「危険つてなにが」

「いやだつて……前に対局ルーティンとして使っていたあの頃からそうだったけどさ、今はもうあの頃以上に銀子ちゃんの知名度爆上がりしてる訳で、ここを待ち合わせ場所に使うのはリスクが高すぎるような……」

「バレないようにちゃんと変装したから大丈夫。そんな事よりもあま——」

「あま？」

あま、あま、あま……つ！

じゃ、なくて……抑えて私、抑えて……！

「……ん、んんっ！」

「銀子ちゃん？」

「……ま、とりあえず、座りなさいな」

「あ、そだね」

言われるがままに八一は腰を下ろした。

私のすぐ隣に。およそ一人分の間隔、40cm程距離を開けて。

「……………んう」

すかさずにじり寄る私。

さり気なく重心を横にずらしてずらして、徐々に八一との空間を詰めていく。

「ん？」

互いの肩が触れそうな距離まで近付くと、気付いた八一がこちらを見た――が。

「……………」

「銀子ちゃん？」

「なに」

「……………いや、まあいいんだけど」

「そう」

「……………うん」

返答はしれつとした顔で。あくまで平然を装うのが大事だ。

ここで弱みを見せてはいけない。今も頭の中は八一で甘える事で一杯一杯などと、そんな事を知られては空銀子の沽券に関わるからね。

「……………さてっと」

あえて聞こえるように呟いた、これは言わば対局開始の合図。

こうして八一も来た事だし、早速だけどそろそろ仕掛ける頃合いだろう。さて、今日ここに八一を呼び出した目的。

それは勿論、ひとえに私の欲望を解消する為。ひたすらに甘え倒す為なんだけど——しかし、それにはちよつとした問題がある。

まあ問題つて言う程のものじゃないけど、それでも捨て置けない悩みが一つあつて。甘えるのはいい。それはいいんだけど、その方法については検討の余地がある、というか……。

……ほら、つまり……つまり。

つまりね？　ここで私が「甘えさせて？」つて真正面から言うのは……ね？

それはなんか……癪というか。いや別にいいんだけど、でもなんか……あれでしょ？　分かるでしょ？　分かるわよね？　そうなの、やっぱそれはちよつと躊躇うわよね。うん。

だから私は考えた。今日の午前中雑誌の取材を受けながらずっとこの事を考えていた。

私から攻めるのはリスクが高い。下手に攻めたら八一に引かれるかもしれない。それは駄目。

となれば……あえて先手は八一に譲る。それが良策と言えるだろう。

つまり私が動くのは後。とりあえず、とりあえずは先に八一に手を出させる。まずは定跡通りに男性の方からリードして貰う。そうすればほら、その時は私の方からだつて甘えやすい空気になつてはいるはずでしょ？

言わば後の先を取る作戦。今日の攻め手は受けから構築する、それが私の用意したプラン。

……え？ 直球勝負？

いやしないけどてかするわけないでしょそんなのだつて恥ずかしいもん。

それにいついかなる時でも私は棋士。だったら勝負の際には策を講じないとね。……という事で。

「……ん、んう」

喉を鳴らしながら、小さく身体を揺すつてみる。

こうしてすぐ隣にいる私の存在をアピールする。その意味が分からない八一ではあるまい。

個室に二人きり。ベッドの上。恋人のスキンシップを取るのには最適なロケーションだ。

さあ八一、かかって来なさいな。

あんたの大好きな空銀子が、こんなにも無防備な空銀子が隣に座っているんだから。ほら、先にそつちから手を出すのよ。そして私に思う存分甘えさせて。

「……………ん？」

ん？

「……………いや、えっ？！」

えっ？ と首を傾げる八一。

「え、なに？」

「……………なにつて、なにが」

「いやだから……………話があるんだよね？ 俺に」

甘える事しか頭に無い私の目を見つめて、その上で八一は淡々と答える。

話。はなし……………大事な話。ああ、そういえばそんな名目でこいつを呼び出したんだつた。

けれどもそれは建前だ。大事な話なんかなし、あつたとしてもそんな悠長にお喋りをしているような余裕なんて今の私には無いから。

「……………ふう」

「銀子ちゃん？」

仕方が無い。この程度では足りないと言うならば次の手を打つまで。

「……………んっ」

次なる攻めは直に攻撃する。私は座ったままの体勢で身体を横に動かす。

振り子のように左右に揺らして、自らの肩を八一の肩にちよこんとぶつけた。

「んっ」

「え?」

「んっ、んっ」

二度三度と肩で肩をノックする。まるで何かを急かすかのように。

どう? こんなにもあからさまにアピールすれば気付かないはずは無いわよね。

さすがにここまですればね。その意図を察するつてもんでしよう。

「……………ん、んっ」

「……………」

さすがに……………ここまですれば。

「……………え?」

「……………なによ」

「いやあの、銀子さん?」

「……………だからなに」

「いやほら、話が……………あるんですよね?」

……話とか、今はいいから。

まだ仕掛けが浅いのだろうか。どうしてか八一は乗ってきてくれない。

普段ならとつくに食らい付いてきそうなものなのに。今日の八一はにぶちんなのか。

「……………ふう」

こうなつたら仕方ない。更なる一手を放つ。

これは少し危険だけど――

「……………ん、んう……………」

と、艶かしく唸りながら。

「……………ん、んんーっ……………」

両手を前に突き出して、大きく伸びをして。

「なんか、今日は堅苦しい雑誌の取材だったから……………ちよつと、肩凝っちゃった」

なんて言いながら、前開きの制服の襟元にあるボタンを一つ、二つと外す。

更にはインナーの首元も捲るように下げて、胸元を少しでも緩く開放する。

さすがにタイまで自分で外すのは無理、それは恥ずかしすぎるのでこれが限界だ。

「ふう……………」

そうして、身体をほんの少しだけ横に倒して八一に寄り掛かる。

ど、どうだ。これ以上の挑発の手はもう無い。これが空銀子必殺の誘い受けだ。

この渾身の勝負手で……さあ八一、来なさい！

「……銀子ちゃん、どしたの？」

こ、こいつ……！ 肝心な時に限って全然手を出してきやがらないし……っ！

普段なら「銀子ちゃんん！」とか言つてとづくに抱き付いてきそうなものなのに。

今日に限ってなんなんだ。まさかバイオリズムの変化で平常時よりもにぶちな日なのか。

「ん、んんう……っ、んー……！」

私は必死に身体を揺すつてみたり、わざとらしく喉を唸らせてみたり。

ほらっ！ 気付いて八一！ 対局時のような神憑り的な思考の冴えを見せなさい！

こんなな！ こんなにも無防備で美味しそうな獲物がすぐ隣にいるのよっ！ ほらあ！！

「……銀子ちゃん？」

「……なに」

「いやだからさ……話ってなんなの？」

なんなの？ じゃないでしょむしろなんなんだお前は。やる気あんのか。

ていうかラブホに呼び出して真面目な話をするとでも思ってたの？ バカなの？

「……くっ」

「え、なんか怖いんですけど。なんでそんな恨めしそうな目で俺を睨むの？」

「……………」

……まあ、正直私にも過失はある。

大事な話があるから、という呼び出し文句は悪手だった。それは認めようじゃないの。

……けどねえ！ こんな状況になったら話なんてどうでもいいでしょ！ 話なんて！

「はにや……………」

「はにや？」

うう、もうだめだあ。

甘えたいエネルギーが爆発間近なせいで、なんかもう上手く喋れなくなってきたあ。

「……………やいちのばか」

「……………えつと」

「ばか。ばかばか、ばか」

「え、ええつとお……………あ、俺分かりました」

分かった？ 分かったってなにが？

「え……………察するにですが、恐らくは俺が何かをやらかしてしまい、今日はそのお叱りの

為に呼び出された……ってことですな？」

「……………」

「ほら、その反応はアタリだ」

全て読み切ったと言わんばかりな顔の八一だけど……ううん、全然違うから。大ハズレだから。

今日は本当に察しが悪い。ほんと八一ってアホでスケベなくせしてにぶちんのおバカで……。

九頭竜八一とはそういう男だ。それなのに、そんな八一にこんなにも……わたしは。

「……………」

だって、だってしようがないじゃないの。今日はもう朝からずっと我慢してきたんだもん。

今日はほんとにやいちに甘えたくて……ずっとずっと甘えたくて……ああだめ、もう限界。

「……………」

「ぎ、銀子ちゃん？」

辛抱堪らず、私は自分のおでこを隣に座る八一の胸元に押し当てた。

そしてそのままおでこでぐりぐり、ぐりぐり。

「……やーいーちー」

「な、なになに、どしたの?」

「あたまなでて」

「え。あ、うん……」

一瞬躊躇があつたものの、すぐに八一の手が私の頭の上に乗せられた。

そしていつものように優しく、慈しむような手付きで……なーでなーで。

「なーでなーで」

「うあ……」

「なーでなーで、よーしよーし」

「……はふう……」

あ、ああああ……やいちの手が、やいちのぬくもりが……わたしの脳を溶かしていきう……。

まるで小動物になつて愛でられている気分。ああこれほんとだめ、心地良くて死にそう。

もう作戦とか駆け引きとかどうでもいい。ていうか最初からそんなの無視して良かった。今日はとにかくこうしたかつたんだから。その為に日中ずっと耐えてきたんだから。

「んう……やいち……」

「よしよし……なんか今日の銀子ちゃんは大人しいね」

「……んー？」

「いやほら、こうやって頭撫でたりすると嫌がる時だつてあつたりするじゃん？」

「んー……」

頭撫でられるのを嫌がる時、あるかな。……まあ、あるっちゃあるかもしれない。

その時の八一の絡み方がウザったい感じだと鬱陶しく思う時はある。つまり大体は八一の方に原因があるんだけどその事には気付いていないようだ。

「そういえば今日は雑誌の取材だったつて言つてたけど、もしかして疲れちゃつた？」

「……んー、まあ」

「そっか。お疲れ様」

ゆっくりと労るように、八一の手が私の頭を撫で続ける。

アホでスケベでにぶちんでおバカな八一だけど、更に言えばこいつはロリコンで。ロリコンなおかげで幼女や小学生をあやす技能を習得している。

故にこうして頭ナデナデするのは上手い。この右手の温もりが堪らない。八一の右手好き。

「……でもさ、銀子ちゃん」

「……………んうー?」

「まさか頭を撫でて欲しいからって呼び出したわけじゃないよね?」

そうだけど。そのまさかだけど。なに、なんか文句でもあるわけ?

……………とか言いたいけど、さすがにそんな事は言えない。あまりにも子供じみている。

「……………そんなわけない」

「だよ。でも、じゃあ……………」

「……………んー」

頭をなでなでされながら、顔を八一の胸元に埋めたままの私。

どの道こんな姿のままでは子供じみていると言われても反論は出来ない……………けど。

とはいえ思い返してみると、昨日は八一が今の私みたいな姿になっていた。言い換えれば今の私は昨日の八一と同じ姿をしている訳で。

となれば私と八一には二歳の年齢差がある分、まだ私の方がセーフだと思う。そうでしよ?

「……………きのう」

「昨日?」

「うん。昨日会った時……………なんか、ちよつと、わたし……………八一に冷たかったかな、って」
そんな思い付きの言い訳に。

「え……ああ、そういうことか」

一瞬言葉を途切れさせた八一だったが、すぐに納得したように頷く。

それで緊張が解けたのか、一旦両手を緩めると改めて私の頭に置き直した。

「そっか、昨日の事が気掛かりだったんだね。それでこうして銀子ちゃんの方から時間を作ってくれたって訳だ」

「……ん」

「なら変に気を遣わせちゃったね。昨日の埋め合わせなんて別に……そんなの全然気にしないで良かったのに」

苦笑するように呟く八一。ただ生憎とそれは誤解もいい所なんだけど……。

けどまあ、なんか八一が一人勝手に納得してくれているようなので良しとする。

「だって、昨日の八一……なんか、すごく甘えたそうにしてたじゃない。それなのに私、昨日は結構適当にあしらっちゃったような気がして……」

「ああ、あれは……いや、昨日の俺はね、ハッキリ言っただけで冗談みたいなもんだからさ。本当」

「冗談？」

「うん、冗談。軽口というか、そういうノリっていうかさ……あるじゃん？ とにかくそんな真面目に捉える程のもんじゃないんだって」

ううん八一、これは冗談じゃないの。本当に何一つ冗談なんかじゃないから。

これは軽口やノリなんかじゃ済まない。八一に甘えたいエネルギーが爆発しそうで、朝から生きるか死ぬかの瀬戸際にいた今日の私にとってはおちつとも冗談になってないから。

「……でも、そっか。大事な話っていうから俺ちよつと身構えちゃってさ。けど別にお叱りとかそういう類の話じゃなかったんだね」

「ん……」

「ていうかむしろ……嬉しい話だったり？」

ん？

「そっかそっかー、そうなんだー、そういう事だったんだねー銀子ちゃん」

「んう、……わっ」

段々と八一の声が弾んできた、とか思っていたらその両腕が私を包み込んできた。

そしてそのまま背後に、八一にハグされたままハート型ベッドに倒れ込んだ。

「じゃあなに？ 昨日俺にそっけない態度を取っちゃって、んでその事が気になっちゃってて」

「……ん」

「それですぐ次の日に埋め合わせしなきゃーって思っちゃったってこと？ いやあもう

ほんと可愛いなあ銀子ちゃんは一、そういうところマジ可愛い」

「……………んう」

……………なんか、全然見当違いの話で八一は嬉しそうにしてる。

どうやら今回の私の行動が心のツボに刺さったというか、八一的にはアリだったようだ……………が。

そう言われたとて、そんなつもりじゃなかったこつちとしては反応に困ってしまう。

……………でも。

「可愛い、可愛い」

「……………うう、……………んみゆ」

八一の手が。私の髪を撫でる。さわさわする。

そして顔にも触れる。ほっぺむにむにしてくる。

「かわいいな、かわいいな」

「……………んにゆ……………あ……………」

「銀子ちゃんかわいいなー。こんなかわいい恋人がいて俺は幸せ者だなー」

八一の顔が、すぐそばにある。八一の髪の匂いが伝わってくる距離。

たとえば見当違いでも。それでも八一にかわいいかわいい連呼されると……………わたしは、

弱い。

弱いのだ。ああ、頭が、頭の中があつい。うう、顔がぼおつてしてくるよ……。

「んにゆう……やいちい……♡」

「ん、おいで」

少し身を振って八一の方に身体を寄せる。

するとそんな私の意図を察したのか、八一は両腕を開いて私を招いてくれた。

「ふあ……」

「はー……銀子ちゃんとうこうして連日イチャつけるなんて……ラッキーだなあ」

「んう……」

ああ、八一の腕の中……ふわふわする。

八一に大事にされている感覚、八一にちゃんと守られている感覚、しあわせ。

なんかもう今日はこのまま八一に甘えるだけの子猫になりたい。んにやー。

「んにやあ……」

「よーしよし、銀子にやん、なでなで」

「んにやにやあ……」

「銀子にやんはいい子だねー、かわいいねー」

ふわわあ……やいち……ちゆき……♡

「んー……」

「おや、眠そうな目をしてる。銀子にやんもうおねむかい？」
「んにゆう……」

んー……だつて、あまりにここちよすぎて。

あたかもからだもぼかぼかするし、やいちがいてくれるから。

「んうー……」

「このまま……」

「……………はっ！」

「おお、起きた」

バツと目を覚ます私。危ない危ない、寝ちやうところだった。

この通り、八一とのイチヤつきはあつという間に私の脳を溶かしてしまうから怖い。

「別に寝たつていいけど。疲れてるんでしょ？」

「寝ないわよ。そんな子供じゃあるまいし」

そんなのは駄目だ。私はなにも寝る為にここに来た訳では無い。

ていうかせつかく八一が隣に居るのにすぐ眠つちやうなんて勿体無いし。

それにまだ足りない。まだ全然甘え足りない。朝からの甘えたい欲がまだ沢山残っている。

「八一。もっと」

「もつと?」

「うん、もつと」

そうおねだりしてみると、私を抱く腕の力がちよつとだけ強くなった。ん、よろしい。

「ていうかね」

「ん?」

「八一はね、私への優しさが足りない」

「え。……そうかな?」

「うん」

そうなのだ。今日一日、極限状態を耐えてきた私にはそんな疑惑が生まれてしまった。

今日は朝から猛烈に八一に甘えたい気分だった。――がしかしそれは普段からの甘えが足りていなかったから。つまり八一の優しさが足りていなかったからではないだろうか。

だからこそ甘え欠乏症になって、今日の私はこんな事になってしまったのではなからうか。

「つまり八一が悪い。八一のせいでは今日は大変だったんだから」

「俺のせいって……いやでも異議あり、俺ってそんなに優しくないかな? お互い予定

が合わない時はしようがないとして、会えた時にはちゃんと彼氏らしくしてるともりな
んだけど」

「……………どうかしら」

不満げに答える私。

だけど……………まあ、異議を申し立てた八一の主張は分からないでもない。

私だって八一が全然ちつとも優しくないだなんて言うつもりは無い。そんな事は無い。
い。

「……………まあ、優しい時もあるけど」

「だよね？」

「ん……………」

とかいうかむしろ……………基本的に八一は優しい部類の人に入るとは思う。

その優しさが誰にでも、特に女性とあらば誰にでも優しくしがちなのは大きな欠点だ
けど……………いずれにせよ八一が優しい事には変わらない。

そう。八一は優しく……………そんな八一に私がつい甘えてしまった事も、ちよつとはあ
る。……………まあ、多少はある。ある程度はある。

しかしだ。そうは言ってもね、そもそも八一は私より二歳も年齢が上なわけで。

そして私と八一は実質的には姉弟みたいなもの。四歳と六歳の頃から一緒に居たわ

けで。

年下が年上に甘えるのは当然だ。となればこの私空銀子には原則的に九頭竜八一に對する甘える権利が発生しているわけなんだけど……それ程までには甘えていない、と私はここで主張したい。

例えば一般的な四歳児と六歳児の姉弟が一般的に甘える量と比較した場合、私はそれ程までには八一に甘えていない、甘えてきていないのだ。ちなみにこれに関して異論は受け付けない。

という事で。出会った頃から換算すれば私には八一に甘えるべき時間が大幅に足りていない。

その生涯甘え分、つまり出会った時から今までに本来甘えるはずだった分の総量から、実際に甘えて取得してきた量を引いた分、それがマイナスである事が今回の甘え欠乏症に繋がっている。

要するに空銀子が本来得られるはずだった甘えたい欲の損失分、更にはその利息までを含めて私は八一から受け取る権利があるってわけ。

え？ 何言ってるんだかよく分からないって？ そんなもん私だってよく分からないわよ。

「とにかく私には甘える権利がある」

「そ、そっか。なんだか凄い自信だね」

っていかいいいじゃないの、甘えたって。

八一は私よりも年上なんだから。年下である私には甘える権利があるってものだ。

そうでなくともか弱い乙女なんだし、彼氏に甘えたいと思う事の何がおかしいと言うのか。

「そういう事だから。八一、もつと甘やかして」

「分かった分かった。銀子ちゃんを甘やかすぐらいお安い御用でございますよー」

もう一度八一の手が私の頭に触れて、私の銀髪を透くように撫で始める。

ていうかこの私が八一に甘える時間が足りていないというのなら、その場合は八一だつて私を甘やかす時間が足りていないという事になる。

私と八一は言わば表裏一体なんだから。私がこうして甘やかされて幸せになつてい
る以上、八一だつて私を甘やかして幸せになつてはるはずだ。ぜつたいそうだ。てかさ
うじやなきややだ。

「素直な銀子ちゃんも可愛いなあ、よしよし」

「ん…………やいち…………」

「銀子ちゃん…………」

「んゆ…………やいち…………♡」

首元に優しくキスをされる。わたしはまたふわふわしてきた。ふわわ……。

どうして八一に触れられるとわたしはすぐこうなっちゃうんだろう。ほんとにふしぎ。

「ん……んう……やいち、もつとさわって……」

「……銀子ちゃん」

でも……先の通り、私と八一は表裏一体だ。

つまり私がふわふわになる時、八一もまた――

「……俺も明日から東京出張だし、今日の内に銀子ちゃん成分をたっぷり補給しておかないと」

「んう……行っちゃやだ」

「いや、さすがにそれは難しいかな……」

「むー……」

「だから……ねえ、銀子ちゃん」

んー？ なあにー？

と私がぼんやりしている間に、八一は身体を起こして私の上に覆い被さってきて。

「……いいい？」

「……え」

そして、私を見つめてくる。

そんな八一の目の奥には——熱いものが。

対局中の熱とは大きく異なる、でも同じくらいに熱く渦巻くなにかがあつて。

「や、八一……あんたつて、もう……すぐそういう方向に持つていこうとする……」

「いやだつてさ、場所も場所だし……」

その熱の意味が理解出来ない程、私はもう子供じゃない訳で。

「優しくする、今日は特に優しくするから、ね？」

「あつ……」

八一の手が私の片手を取つて、そのまま上に押し上げる。

それだけでもう私は殆ど身動き取れない、八一にされるがままになつちやう体勢。

「やい、ち……」

ちよ、ちよつと待つて、まつて八一。

違う、違うの。私はただ甘えたいだけ。今日の私はただただ甘やかされたいだけの。

だから別に、私は……別に、そういう事を望んでいたわけじゃなくて。

だから——

「……う」

「銀子ちゃん……いいよね」

よくない、よくないよ。

よくないのに——

「……うにゃあ♡」

しかし——嗚呼、どうしたことか。

私の喉奥からはまるで猫みたいな甘ったるい声しか出ないではないか。一体どうして。

「今日の銀子ちゃんは本当に素直だね。……かわいいな」

私の鳴き声を了承の合図として八一が動く。

「んう……♡」

そして唇と唇が触れる——キスをする。

八一とのキス。そういうえば今日はここまでおあずけ状態だった。もっと欲しい。

「ちゅ、あ……もつと……♡」

「ん……」

「ん……ちゅ、やいち、すき……♡」

そのまま何度も、啄むような口付けの感触を味わいながら。

私は頭の片隅でふと思う——これも要するにそういう事なのかな、と。
つまり……そう、バイオリズム。

「銀子ちゃん……」

「ふあ……あ、やいち……っ」

心と身体のリズムの波、バイオリズムの変化による影響。

なるほどこれは中々悪くない言い訳かも……なんて、そんな事を考えてしまった。

そして——その後。

色々あって、私の中に疼いていた八一に甘えたい欲もようやく収まってきた頃。

「ねえ、銀子ちゃん」

「なに」

「今更だけどき、今日の銀子ちゃんって全体的に様子が変わったけど何かあったの？」

とか、八一が聞いてきた。

「それは……」

「もしかして今日の取材で嫌な事でもあった？ ストレスの溜まる質問攻めを受けたとか」

「ううん、そういうのじゃなくて……」

今日は朝起きた時から体調がおかしかった。

とにかく甘えなかった。居ても立っても居られなかった。猛烈に八一に甘えたい気分だった。

それ以外に説明は出来ない。とにかくそうなってしまったのだから仕方が無い。きつと昨日八一が言っていたように、バイオリズムの変化でおかしな感じになってしまったのだろう。

「……っつてことなの」

「ふーん……」

とか、そんな私のあれこれを。

さすがに直接言うのは恥ずかしいので、やんわり遠回しな言葉で説明してみた。

「……でもさ」

「ん？」

すると。

「それってさあ、ただ単純に発情してたってだけじゃないの？」

とか言つてきやがったので、その憎らしい頬を思いつきり引つ叩いてやった。

短編 限界突破空銀子

それは……去年の暮れ頃の事。

あの日、私は八一の元を去った。

勿論それには理由があった。どうしても言わざるを得ないような理由が。

本当は離れたくなかなかったけど、それでも私は、私の心はそうする事を決断した。自分で決断した以上、その選択は間違っていないかった……って、そう思っていたいけど。

それでも悔いはある。

それはあの時、私の方から一方的な形で八一との繋がりを断ってしまった事。

あの時、八一に言うべき言葉は沢山あつたはずで、伝えるべき想いも沢山あつたはずだった。

八一に不安を抱かせないように、ちゃんと事情を説明したりとか。

これはどうしようもない事だからって、そんな言い訳をしたりとか。

ずっと貴方が好きな気持ちだけは変わらないからって、そんな未練がましい言葉とか。

だから、どうか私を待っていて欲しいって……でも、そんな言葉なんてとても言えなくて。

心配は掛けたくないのに、それでも心配して欲しい気持ちもあって。

自分の弱さなんか見せたくないのに、全てを打ち明けて甘えちゃいたい気持ちもあって。

そういうのがごちやませになった結果、私は書き残した想いを届ける事がどうしても出来ずに。

そのまま一方的に連絡手段を断ち切って、逃げるように八一の元を去った。

私は八一の恋人だったのに。一切事情を説明しないで姿を消して音信不通になって。

ハッキリ言っても身勝手な真似だと思う。後から謝って許されるような事ではない。

きつと八一はとても悲しかっただろうし、とても不安だっただろうし、私に対して怒りとかそういう気持ちも湧いたんじゃないかと思う。

ううん。怒るどころか……これは。

これは、フラれちゃっても、おかしくないって。

身勝手な私に愛想を尽かして、愛情が消え失せてしまってもしょうがないとすら思っていた。

だから私はずっと怖かった。

ずっとずっと、不安の渦の中にいた。

八一の事も。当然ながら自分の身体の事も。そして将棋の事も。復帰の事も。何もかも。

そうでなくとも入院中は心が弱くなる。私は過去何度も経験しているけど慣れるものじゃない。

私はどうなるんだろう。いつ八一の元に戻れるんだろう。もしかしたらもう戻れないのかな。

というか戻ったところで。八一はもう私の事なんか忘れて、新しい彼女と楽しくやってるんだろうな……って、そんな悲観的な妄想に取り憑かれた事も一度や二度ではない。

だから療養中はずっと辛かった。苦しかった。

先行きの見えない不安や、愛しい人に会えない寂しさで心が押し潰されそうだった。

——けれど。

「……………」

そんな時。私の元に届いた……あの本が。

だからこそ、あの本が……私の心に響いた。

私が療養をしている間、どうやら八一の方は棋書を書いていたらしくて。

完成したその本が私の元に届けられて。その本を読んだ時……私は。

私は、嬉しくて。嬉しくて……涙が止まらなくなりました。

だってあの本の中には……将棋の事だけじゃなくて八一の想いがあったから。

私だけに向けたメッセージが、いなくなってしまうた私への想いが綴られていたか

ら。

あの本のおかげで、私は離れていても八一の想いを受け取る事が出来た。

そこには私が不安に感じていた事や、ずっと怯えていた事なんて笑つちやうくらいに無くて。

俺は君の事が好きだよって、八一はそう言ってくれていた。

寂しいよ、早く会いたいよって、八一はそう言ってくれていた。

でも心配しなくていいからねって、八一はそう言ってくれていた。

いつまでも待っているよって、八一はそう言ってくれていた。

あの本の中には、八一からのそんなメッセージで溢れていたから。

「……八一」

私はそれが、とても嬉しくて。

とつてもとつても嬉しくて。

……嬉し、すぎて。

「……やいち♡」

嬉しさが爆発して、私は。

あの本を読んだ結果、私は以前よりも更に八一の事が好きになった。

……などと、その程度の話では済まなかった。

「やいち♡……♡」

あの本を読んだ結果……私は。

私は、八一の事を好きになり過ぎた。

そう、好きになり過ぎてしまったのだ。

好き。好きなの。とにかく八一が好き。ずっと好きだったけど今はそれ以上だ。

もうね。大好きとか、すごい好きとか、そういうレベルじゃないから。

あまりに嬉し過ぎて好き過ぎて、私の愛は限界を越えて溢れ返ってしまった。

とつづくに満タンまで溜まっていた心の容器の、0から100までのメモリを安々と振

り切つて。

となればその先は200か。あるいは1000か、はたまた10000か。ううん違う。その先に上限なんてものはない。溢れ返るつてのはそういう事だから。その先に際限なんてなくて、ただただ八一への好きが無限に溢れ出しちゃう、ような。

そんな、空銀子が出来上がった――

――出来上がった、らしい。

というの、後から聞いた話であつて。

銀子ちゃんと再会した当初、俺はそんな事など知る由も無かつたわけで。というか、再会した当初は正直そんな事なんかどうでもよかつたわけで。

——再会。

再会。そう、再会だ。

会えなくなつて、一度は音信不通になつて。それでも再び巡り会えた——再会。

去年の暮れ頃より音信不通になつて、そして今。

その間には語るべき話が沢山、紆余曲折、あるいは二転三転、そんな表現は多々あれども。

ともあれ、色々あつた末に空銀子は帰つてきた。

そうなんだ。そうなんだよそうなんです。なんと銀子ちゃんが帰つてきたんだ。

去年末より、体調悪化が原因による療養という形で表舞台から姿を消して、俺目線では殆ど行方不明になつていた銀子ちゃんはそれでも俺の下に戻つてきてくれた。

という訳で……ほんの数日前、俺は念願叶つて遂に銀子ちゃんと再会を果たした。

向こうからブロックされて、ずっと着信拒否状態で連絡の取りようがなかつた俺のスマホに突然『駅まで迎えに来て』とのメッセージが入つて。

これはまさか夢かと、あるいはたちの悪いイタズラじゃないかと半信半疑ながらも大慌てで駅に向かつたら、そこには銀子ちゃんがいた。普通にいた。久しぶりに聞いたその声が奏でる第一声は「遅い」だった。

でまあ何が言いたいかというとね、その時には全然気にならなかつたんだよ。

だってその時はほら、言ってみれば感動の再会シーンみたいな感じだったわけだしさ。

当たり前だけど俺は久々に目にしたあの子の姿に感極まっていた。驚きと感動と嬉しさとで泣きそうだった、というかちよつと泣いた、普通に泣いた。

俺とあの子は子供の頃からずっと一緒、そして今では恋人なんだ。それぐらい大切な存在と数ヶ月以上も離れ離れになっていたんだ、そりやそうなるのが極自然な話と言えよう。

んでそれはつまり、同様に銀子ちゃんの方もそうなのがあるのが自然な話というわけ。

再会直後はそんな感じだ。感極まって平常時よりもハイなテンション……というか、それまでの想いが溢れ出ちゃうというか、とにかく平然としている事なんて出来ないだろう。

感動の再会シーンではそれが自然な事、そういう高まった雰囲気当たり前だと思っただから、その時の俺は違和感に気付かなかったんだ。

しかしそれから数日経って、今日。

再会の感動や熱も徐々に収まってきて——今、俺はようやくそのおかしさに気付いた。

いやおかしいっていうか、これをおかしいと表現してはいけないような気もするんだけど――

「八一」

という事で。

こうして今、俺のすぐ隣にいて、俺の名前を呼んだこの子が空銀子ちゃんである。とにかくね……いる。ここにいます。いるんだよ。

あの再会は夢や幻ではなかった。その事に俺は今でもホッと一安心な気持ちで一杯だ。

ぶつちやけると最近はそのような夢を見る事も多かったから。夢の中で銀子ちゃんと再会して、目を覚ましてそれが夢だと気付いて急激にテンションが落ち込むなんて事も日常茶飯事だったから。

だから夢の世界の話じゃない、現実の空銀子がここにいます、それだけで大きな幸せを感じる。

「八一」

でこの通り、俺の名前を呼んでいる。可愛い。

というか喋っているじゃん。可愛い。というかそもそも動いているよね。可愛い

なあ。

可愛い。そう、可愛いのである。

空銀子と書いて可愛いと読む。随分ぶりに見た銀子ちゃんはやっぱり可愛かった。ただ動いているだけでこんなにも可愛いのだから堪らない。

しかしそれもそのはず、だってここにいるのは再会するまでの期間俺の心の支えだったスマホの中の空銀子画像や動画データなどではない。生だ、生の空銀子なのだ。

生はスゴい。生の空銀子はそこにいるだけで伝わってくる情報量が桁違いだ。そのどれもが空銀子が可愛いという圧倒的事実のエビデンスとなっている事は言うまでもない。

「八一？」

というか髪がね、髪が伸びているんだよ。

今ここにいるのはロング銀子ちゃんだ。入院中に散髪する機会が無かったからなのか、ずっと伸ばしていたのであろうその美しい銀髪は胸元辺りにまで差し掛かっている。

まるで一時期その髪を伸ばしていた小学生時代を彷彿とさせる今の銀子ちゃん。長らく会っていないなかった事実も重なって、ここに来てのイメチェンにはまた違った可愛さと新鮮な驚きがあるというものだ。

「……八一」

……という、言わば外面における変化が。

そうした変化や発見がある事は、久しぶりに顔を合わせた以上ある程度当然なんだろうけど。

それよりも顕著に……というか、より深刻だと感じてしまうのは。

外面よりも、内面の変化にこそあつて。

「……やいちい」

聞こえた——ほら、今の、分かるかな？

まず声がね、甘つたるいんだよ。普段のハリのあるシャキつとした声じゃなくなっている。

「やーいーちい」

これはつまりあれだ。銀子ちゃんの甘えモード時特有のふにやふにや声なのだ。

その名の通り甘えモード時だけの特別有料DLCボイスなはずんだけど、再会して以降の銀子ちゃんはどうしてかこの有料ボイスがデフォルト装備になっちゃってる。

そもそものがこの反応もおかしいっっちゃおかしい。俺が知る空銀子であれば「ちよつと八一、シカトすんな」とか言ってくるはずであつて。

こんな猫撫で声で、こんな物欲しそうな声で俺の名前を連呼する時点でもうおかし

い。

「ねえねえ、やいちい」

「ん、なに？」

「やつとこつち向いてくれた。なんできつきから無視するの？」

「ご、ごめんごめん。無視していた訳じゃないんだけど、ちよつと考え事をしててさ」

「もうっ」

銀子ちゃんはぶうつとほつぺたを膨らませる。

可愛い。とても可愛い表情なんだけど、しかしその仕草もハッキリ言っただけはな
い。

いやもう全く以てらしくはない……んだけど、そんなのはまだまだまだ序の口で。

「ねえ、やいち」

「どうしたの？」

「……えへへ」

そこにいたのは、なんと。

「やいち……すーき♡」

蕩けそうな笑顔で愛の言葉を囁く、空銀子が。

「っ、……うん」

対して俺は思わず喉を詰まらせる。

ちよつと気持ちの準備が出来てなかった。どうしようもなく心臓がドクンと跳ねてしまった。

「すき♡」

「うん」

「やいち。……すきだよ♡」

「……うん」

その言葉に、ドクンと跳ねた心の奥が次いでじんわりとあたたかくなってくる。たとえ離れ離れになっても、お互いの気持ちに一切の変化なんて無かった。

その事がとにかく嬉しいし、一方で安心したというのもまた事実。

「けどまさか……まさかここまでとは……」

「うん？」

「いやだつてまさか銀子ちゃんがこんなに……銀子ちゃんは……俺が好きなの？」

「うん。だーいすき♡」

「そつかあ……」

とまあこの通りね、すぐに「好き」が来る。来るんだよ。

この銀子ちゃんは俺に向かって「好き」と言葉にするのに一切の躊躇が無い。マジで

無い。だからほんの少しでも油断しているとすぐに「好き」が飛んでくる。

空銀子がこんなに明け透けな性格になっっているなど誰が予期出来ようか。だって空銀子といえども意地っ張り、かつ恥ずかしがり屋さんなのがデフォルトの性格だったはずなのに。

驚くべき内面の変化、まるで甘えモード時のスイッチが入りっぱなしになっているみたいだ。

「好き」

「うん」

「好き♡」

「うん」

「すーき♡」

「うん」

「好きい……♡♡」

「こんなんである。大体ずーつとこんなんである。」

「可愛い。とても可愛い……が、これはちよつと世の中には出せない空銀子だ。」

「なんなら外を歩かせるのすら怖い。それ程に今の銀子ちゃんキマっちゃってる。」

「好き。すーき♡」

「あのさ、銀子ちゃん」

「なに？ 好きだよ♡」

「あ、うん。好きは分かったから……」

「うん。好き」

「あの……」

「八一。好き♡」

……好きの圧が、スゴい。

「すーき♡」

「……うん。好き、だよ。俺も」

根負けした俺が好きと返せば、銀子ちゃんは可愛らしく「えへへ♡」と頬を緩める。可愛い。とても可愛いがそれ以上にとんでもない銀子ちゃんだ。今の会話なんて全部の語尾に「好き」がくっついちゃってるし。

「やいちい……すーきい……♡」

「ん？」

すると「好き」ばっかりになった銀子ちゃんは俺の右手をその両手で持ち上げて。

「えへ……すき、すきい……♡」

「お、おおう……」

この手の甲にすりすり、愛おしそうに頬ずりなんかをしてくるではないか。

これは……これが、これが今の空銀子なのだ。目を疑うような光景だが真正銘の現実だ。

俺が知っている以前の銀子ちゃんであれば勿論こんな事はしない。こうも簡単に「好き」などとは言ってくれないし、こんな愛玩動物のような愛らしい真似なんかも然りだ。これが長期療養の影響なのか。果たして入院中にこの子の身に何があったというのか。

「……あ、あのさ銀子ちゃん。好きはとりあえず置いといてさ」

「やだ。置いとかない。好き」

「あの……うん、分かった。分かったから。好きなのはもう十分に伝わったから」

「うん。好きだから、好きなの」

「そうだね。好きなんだね。銀子ちゃんは俺の事が好きなんだね」

「うん。だーいすき♡」

「そ、そっかあ……」

すげえ。なんかもうすげーぐらいに脳内全てがピンク一色な銀子ちゃんだ。

この子って俺としばらく会えない期間があるとこんな事になっちゃうのか。衝撃の事実だ。

子供の頃から一緒に居たけど、俺はまだまだ空銀子について知らない事ばかりだったようだ。

「すきい、すきー……………あ」

「ん？」

「そういえばさ、やいち」

「うん」

「やいちのお家、なくなってたよ。昨日見てみたら全部更地になっちゃってたの。なんで？」

「あ、ああ……………そうだね」

言われて思い出す。そういえばその件を伝え忘れていた。

銀子ちゃんと音信不通になって以降、俺は諸事情により元々住んでいたアパートを追い出されるような形で引っ越しを行い、現在は西宮北口駅付近のタワーマンションに住んでいる。

元々あのアパートは銀子ちゃんが選んでくれた物件でもあったので、引っ越し際には多少の逡巡もあつただけど……………まあ、あれはしょうがない。だって新しい家主が怖すぎたから……………。

「……………てなわけで、引っ越しをしたんだ」

「引つ越し?」

「うん。思い切った買い物だったけど、色々な賞金とかでお金も結構貯まっていたからね」

数ヶ月ぶりの再会、となれば銀子ちゃん側だけでなく他のあれこれにも変化はあるというもの。

元々住んでいたあのアパートは老朽化が進んでいたので取り壊す予定だと聞いていた。具体的な時期は知らなかったけど銀子ちゃんが言うようにすでに更地となっていたようだ。

ちなみに今俺とこの子がいるのは銀子ちゃん所有のワンルームマンションの一室。俺の新居は色々と問題がアリアリなので、この子と会うならば必然的にここしかない。

「さすがにあのアパートはボロっっちゃかったし、潮時が来たというかなんというか」

「んう? あのアパートはボロっっちゃかったから潰れちゃったの? 地震?」

「いやそういう事じゃなくて。普通に工事をして普通に取り壊されたんだよ」

「工事? 八一が工事したの? すごいね」

「いや俺じゃなくて。あのアパートの家主が業者に取り壊し工事を依頼したんだ。分かった?」

「ううん。銀子難しいことよく分かんない」

「いや難しくくないよ。難しくくないでしょ……」

あれ？ この子もしかして入院生活中に知能指数を大幅に下げちゃったのか？

直球で好意を伝えてくる点も含めて、なんだか幼児を相手にしている気分になってきたぞ。

「ねえねえ。八一の引越先、行ってみたい」

「えっ」

「ん？」

「お、れの家……来たいの？」

「うん。行ってみたいな」

ふにやりと笑顔で頷く銀子ちゃん。可愛い。ああもう可愛い。

し、しかしだ。俺の新居は……あそこはなんていうか……まあ高級タワーマンションだけあって居住性とかそういうのは快適なんだけど……さ。

しかし一つだけ大きなマイナスポイントが。諸事情あって恋人を自宅に招く事が出来ない。そこだけがあまりにも大きすぎる欠点なのである。

「俺の家は……ど、どうかな。まだ引越しの荷物とか片付いてないし……」

「そうなの？」

「う、うん。それに俺としてはさ、銀子ちゃんと会うならこの部屋の方がいいかなーっ

て」

「そうなの？」

「そうそう。だってほら俺の新居にはなんの思い入れも無いけどさ。この部屋は前に銀子ちゃんと二人で研究会をしたり、あんな事やこんな事したり……色々な思い出がある特別な場所でしょ？」

「そっか。じゃあこっちでいいよ」

そこには変わらず花咲くような笑顔が。ああ、真実を言えないこの俺にその笑顔は眩しすぎる。

とはいえ心境としては九死に一生を得た気分になっちゃっているのは否めないよね。銀子ちゃんは俺の引越先にもっと関心を示すだろうと思っていたんだけど、意外にもアツサリと引いてくれて助かった。

「いつか……タイミングがね、色々なタイミングが合えば俺の新居も紹介出来ると思うから」

「うん、分かった。けどね、私は八一の新居でもこのマンションでもどつちでもいいの。別にどつちでも変わらないから」

「変わらない？」

「うん。八一がそばに居るならそれでいい」

「あ……」

天使か。天使なのかこの子は。

「……銀子ちゃん」

「私は八一が居てくれるならどこでもいいの。場所なんて気にしないよ。………
ちゅっ」

「んっ、そっか、そう言ってくれると嬉しいよ。だったら……—え？」

え？

「え？」

「なあに？ やっぱり八一の引っ越し先に行く？ 別にそれでも構わないけど」

「いやあの、そうじゃなくて」

「ん？」

どうしたの？ と言わんばかりにきよとんとした表情を見せてくる銀子ちゃん。

だがちよつと待ってくれ、今なんか……え？

「い、いやあの、銀子ちゃんさ」

「うん」

「さつき……ちゅっ、って音が聞こえたね？」

「うん。聞こえたね」

「でそのタイミングでさ。あの、なんかきみ……おれに……ちゆ……ちゆう、したよね？」

「うん。したけど」

あつさりと白状する銀子ちゃん。どうやらしらばつくれるつもりなど欠片も無いらしい。

「……うん。そう、そうなのだ。なんと俺は今キスをした。銀子ちゃんとかちゆうをした。」

「ちゆう……したね」

「うん。したね」

「……された、ね」

ほんの十秒前ぐらいか、会話途中でいきなり銀子ちゃんの顔が近付いてきて。

そのまま軽く押し付けるようなささやかなキス。無論マウスとウマウスである。

あのタイミングで、流れるような淀みない動作でその顔を寄せてきての口付け。あまりにも自然過ぎて、あまりにも流暢過ぎて俺は一瞬キスされた事にすら気付かなかつた。

「え、まって、でもそんな、なんで急に?」

「なんでって……ちゆうぐらいするでしょ」

「そ、そうなの?」

「そうだよ。何がおかしいの?」

こてりと首を傾げる銀子ちゃん。

その顔には一点の曇りもない。純粹に俺の言葉を不思議がつているような顔だ。

「……おかしくは、ない?」

「うん」

「……………」

いやしかし、それは……そう、なのか?

これはおかしな事ではない……のか? ちゅうぐらいは……するもんなのか?

そう言われると確かに、そりや俺達は恋人同士なわけで。恋人同士がキスをするのは自然だ。となればさつきみたく会話途中に突然キスをしたって、別におかしくは……ない? のか?

「ね?」

「ね?」

「そう……だ、ね?」

釣られて頷きそうになるけど……ああ駄目だ、俺には答えが分からない。

このおかしな現実の中、何が正しくて何が間違っているのか。答えは何処にあるというのか。

「いやでもやつぱり待ってくれ。それでも銀子ちゃんの行動としてはおかしいと思うんだよ」

「そうかな？」

「うん。絶対そうだって」

さつきも言ったけど、空銀子つてのは意地っ張りで恥ずかしがり屋さんな女の子なはずなんだ。

そんな子があんなふうにならんと自然とキスしてくるってのはやつぱりおかしいだろう。恋愛耐性がなくウブな銀子ちゃんにあんなプロミタいな犯行が出来るわけがない、そのはずなんだ。

これまでを振り返っても、銀子ちゃんの方からあんなにも堂々かつ積極的にアクションを起こしてくるなんてのは経験がない——

「ちゅっ♡」

「んっ」

っ、された。またキスされた。

経験がない——とかどうとか。悠長にそんな事を考えている時点で俺は油断をしていたようだ。

「えへへ、またしちやっただ♡」

「そう、だね。ははは……」

触れ合ったばかりの唇を指先で軽くなぞって、ふにやつとはにかむ銀子ちゃん。

可愛い。えげつない程に可愛い……が。にしてもこの子は一体全体どうしちやつたってんだ。

「ぎ、銀子ちゃん。キスもいいんだけどさ」

「うん」

「でも……なんか、その前の「好き」の連発とかもそうなんだけどさ。なんか……なんかちよつと、変じゃないかな？」

「へん？ そうかな？」

「うん。変っていうかなんだろ、なんか銀子ちゃんらしくないような気がしちやつて……」

「らしく……」

すると銀子ちゃんは。

俺とは異なる感覚でいたのか、不思議そうに小首を傾げて。

「なんで？ 私が好きって言っちゃだめなの？」

「そうじゃないよ。そうじゃないんだけど……」

「私はやいちの事が好きだよ。それともやいちが私の事、好きじゃないの？」

「そんなわけない！ 好きだよ、俺だって銀子ちゃんが大好きだ！」

嘘偽りのない本音だ。相手を想う気持ちの量は俺だってこの子と変わらない。

「だよね。じゃあ何がだめなの？」

「駄目ってわけじゃないんだけど……ただ……」

「私とちゆうするの、いや？」

「ううん、それだっていやなわけがない」

「じゃあいいよね。ちゅっ♡」

「んむっ……」

またキスが来た。速い、そして躊躇の無い電光石火の如き口付け。

その速さこそは俺が知らない未知なる空銀子。だったら俺はその秘密を探る必要がある。

「んちゅ……」

「ん……あのさ、銀子ちゃん」

「うん？」

「やっぱり……なんかさ、ちょっとらしくないなって思うんだよね」

空銀子らしさとは。もしかしたら本人が思うそれと俺が感じるそれは別なのかもしれないけど。

それでも今の俺がそう感じているのは事実で。この唇に残る柔らかさの残滓が、そこにある変化についてはやっぱり気になる。

「正直に言うとう、俺は……記憶にある銀子ちゃんと今の銀子ちゃんとの違いにビツクリしてる」

「……そうなんだ」

「うん。ただ勘違いしないで欲しいんだけど、別に責めているわけじゃないんだ。好きって言ったり、キスしたりする事が駄目ってわけじゃなくて……」

再会して以降の銀子ちゃん——その変化自体を拒否しているわけじゃない。

こう言っちゃなんだけど、俺はどんな空銀子だって愛する自信があるから。だから別にこの子の性格や内面性が変化する事自体は構わない。そこにケチを付けるつもりなんてなくて。

「ただ……理由を知りたいなって」

俺はその理由が知りたい、知っておきたい。

俺達と一緒にいられなかった期間、長期療養中に銀子ちゃんの身に何があったのか。何をどう感じて、どんな影響があったのか。その理由をただ知っておきたいだけなんだ。

「……理由」

「うん。入院生活中に何かあったのかなーとか、そういう事がどうしても気になっちゃうんだよ」

「そっか。……うーん、理由……」

「どうやら本人にはあまり自覚が無いらしいその圧倒的な程の積極性、その理由とは。銀子ちゃんは自らに問い掛けるように呟いて。」

「私は……」

「うん」

「今まで密かに隠していただけで、元からやいちの事が好きだったんだけど」

「う、うん」

「ただ、強いて言うなら……」

「言うなら？」

「……あの本、が」

あの本？

「やいちが書いた、あの棋書」

「ああ、九頭龍ノート？」

「うん。それ」

九頭龍ノート。——それは数ヶ月前、棋士・九頭竜八一として書き上げ世に出した棋

書。

「そういえばあの本は供御飯さんを通じて療養中の銀子ちゃんの元へ届けられていたはずで——」

「そっか。あの本、ちゃんと読んでくれたんだ」

「……うん。ちゃんと読んだよ。やいちが私の為に書いてくれた、あのコラムも」

「あ、ああ……あれね」

当の本人からそう言われて、顔がじんわりと熱くなるのを実感する。

九頭龍ノートは棋書としての内容も然ることながら、それ以外の部分にも徹底的にこだわった。

あの時は何処にいるのかも分からなかった銀子ちゃんに俺の想いを届ける為、棋書内に収録される短編コラムの中に銀子ちゃんへの想いやメッセージをこれでもかど詰め込んだ。

「前書きに書いてあった将棋のお化けて、あれ私の事だよな？」

「うん。さすがに直接空銀子って名前を出す訳にはいかなかったからさ」

「もうっ、お化けなんてひどい」

「いや違うんだよ。あれはなんていうか、あの当時の印象がそうだったってだけで……」

今思い返しても、あのコラムにはかなりこっ恥ずかしい内容を書いたと思う。

俺と銀子ちゃんの子供の頃の関係性とか、そういうのを知らない人にとってはよく分からない単なる一コラムだろうけど、知っている人には結構丸分かりな内容になっちゃつてると思うし。

処女作となる棋書にそんなこつ恥ずかしいコラムを載せて、それでも後悔はしていない。

というよりも、当時は銀子ちゃんと会えなくて。この先もう一度会えるのかも分からなくて。

そんな状況に置かれて、俺は後悔しないようにあの本を書き上げたつもりだった。

「でも……嬉しかったよ」

「……そっか」

「うん。とっても嬉しかった」

……良かった。俺の想いはちゃんと届いていた。

本当に嬉しそうに微笑む銀子ちゃんを見るとこっちまで嬉しくなる。

こう言つて貰えると頑張つて書いた甲斐がある。顔から火が出るような恥ずかしさを押してあのコラムを書き上げた甲斐があったというものだ。

「ほんとに嬉しかった」

「そっか」

「うん。嬉し過ぎたの」

「そっかそっか……ん？」

「で、好きになり過ぎた」

「……………」

……ええつと。

「ごめん銀子ちゃん、今のところもう一回」

「嬉し過ぎて、好きになり過ぎた」

「……………」

つまり……俺が書いたあの『九頭龍ノート』内のコラムが。

そこにあつたメッセージが、その想いが、療養中の銀子ちゃんにとっては嬉し過ぎて。

それで……好きになり過ぎた、と。

「あの、一応念の為に確認しておくけど……好きになり過ぎたって、なにを？」

「やいちを」

「……な、なるほど」

真正面から堂々と、そんなセリフを言っちゃう所からしてもうヤバイ。

好きになり過ぎた、それが理由か。ここに居るのは好きになり過ぎた空銀子なのか。

「ねえやいち、だめだよ？」

「え?」

「あんなコラムをね、入院中でただでさえ心が弱っている人に届けたりなんかしちゃだめだよ?」

「えっ、どうして?」

「だって嬉し過ぎるよ。あんなの入院中に読んだら嬉しすぎて下手したら心臓止まっちゃうよ?」

「いやそんな——」

「幸い私は死ななかつたけど、反動で好きになり過ぎちゃったの。これやいちのせいだよね?」

「……………」

……………どう反応すればいいのか分かんないっす。

この「なり過ぎた」というフレーズにどこか不穏な印象を受けてしまうのは俺だけだろうか。

ただまあ……………とにかく謎は解けた。要するに俺のせいだった。

どうやら九頭竜ノートは俺が想像していた以上に銀子ちゃんの心に刺さっていたようだ。

「そっか。あの本のせい……………ていうか、それぐらい喜んでくれたって事だよね」

「うん。嬉しかった、ほんとに嬉しかったよ」

そういう事ならこの変化にも納得だし、理由さえ分かれば受け入れるのだって容易い。

少しでも銀子ちゃんに届けばいいなと思って綴ったメッセージがちゃんと届いて、それが理由で俺に対する愛情が深まったというのなら……うん、これは別になんの問題もない、はず。

……だよな？ これは良い事だよな？

少なくとも変に思ったり、おかしく感じたりするような事態ではないはず……だよな？

「私がこうなったのはやいちのせい。だから……責任取って？」

「銀子ちゃん……うん、分かったよ」

この状況で責任を取れなんて言われるとなんだか変な想像をしてしまうなあ。などと思いつながら俺はおもむろに両腕を広げた。

「ほら、おいで」

「うにゃあ……やいちい……♡」

すると一瞬で猫と化した銀子にゃんが甘え声と共に擦り寄ってきた。

「にゃあん……♡」

「おーよしよし、可愛いねー」

「ふにやにやあ……やいちい……すきすき……♡」

猫だ。猫がいる。ほら見てくれよこれ、だって俺もう鼻血出そうだもんこんなの。

こんなに可愛い生き物に進化した事、それが間違っているなんて事あるはずないじゃないか。

うんうん、そのはずだ。これは絶対に良い事なはずだ。だって愛情が増したんだから。

だからこれが今の銀子ちゃんだ。これこそが今の空銀子らしさって事なんだ。

——と、そんな感じで。

半ば思考停止気味に この現実を受け入れようとする俺がいる一方で。

それでも心の何処かでは。未だ待ったを掛け続ける声が聞こえていたのもまた事実で。

「やいち……やいちの腕の中、あったかい」

「そうかい？」

「うん。こうしているの、すっごく幸せ……」

「そっか。俺も幸せだよ」

「やいちもっ？」

「うん。銀子ちゃんが俺の腕の中にいる、これ以上の幸せなんてないよ」
「そっか。じゃあ……」

銀子ちゃんは至って平然と、言う。

「一生こうしていようね」

「え」

「一生、こうしていようね」

「いや、あの——」

「ね」

「……………」

一生とは。

それは生まれてから死ぬまでの間。すなわち一人の人間の人生全ての事を指す。

「い、一生？」

「うん。一生」

「い、一生って……一生ってのはさすがに無理じゃないかな？」

「やだ。一生こうしてる」

「……でも、ほら、明日の予定とか」

「知らない」

「……ていうか、ずっとこのままの体勢でいるってお手洗いとかに——」
「気にしない」

「……………」

俺——九頭竜八一と、空銀子は、この部屋で一生抱き合つたままでいる。

一生とは決して泡沫の夢などではない。ここに一つの永遠の形があつたのだ。

「やいち」

「え？」

「私、本気だから」

本気なのかよ。そこは冗談だつて言つてくれよ。

「一生こうしていようねー、やいちー♡」

「……………」

一生こうしているつもりらしい銀子ちゃん。一方で俺は言うべき言葉が出てこない。

さつきの『好き過ぎる』もそうだけど、この『一生』とか。この子の口から放たれる言葉の端々に仄かな狂気を感じてしまうのは俺だけだろうか。

「やいちい……………一生好きだよ♡」

「そ、そつか。俺もだよ」

だつてさすがに『一生』は言葉の圧が強いよ。ちよつと強すぎるよ。

そりや俺だつて銀子ちゃんと一生添い遂げようつて気持ちはある、あるけどさ。

それでもこんな感じで「一生」とかわれると心臓がキュつてなっちゃうよ。

これは……やっぱり、異常事態なのか？

薄々気付いていたけど、この空銀子は何かが致命的におかしくなつてしまったのか？

「やいちい……嬉しいな……」

「銀子ちゃん……」

「嬉しい嬉しい……やいち♡」

「ぎ、銀子ちゃん……っ」

けれど……でもっ、だがッ！

たとえ何かがおかしくても、今の空銀子が極めて愛おしい感じになつているのもまた事実で。

だつてほら、その証拠に――

「……大好きだよ、八一♡」

そう言つてふにやりと笑う銀子ちゃん。

そこには相変わらずの極上の笑みが。

「か……っ！」

ほああああああ、可愛ええ……!!

かわええよお。かわええよお。こんなもろ脳が溶けちまうよお。

やっぱりこれは正義だ。この圧倒的可愛さの前では全てが正当化されるような気がする。

ちよつとおかしな所は多々あれど、ちよつと狂気が見え隠れしているけど、それを補つて余りあるぐらいに今の銀子ちゃんも可愛いんだよ。

こんな可愛い生き物から「大好き♡」なんて言ってもらえるこの現実が。これをおかしいだなんて言ったらもうバチが当たつちゃうよ、マジで。

ていうかそもそも話さあ、俺が好き過ぎる事のなにか悪いってんだい。そうさうだ、なにもおかしい事なんてないじゃないか。

「……そうだな。こつちが正解な気がしてきた」

「こつちっ？」

「うん」

今日も空銀子は可愛くて、世界は平和である。

それで万事OKじゃないか。これ以上なにを望むというのか。

「ねえやいち、こつち向いて」

「え？ ……んむっ」

とか思っていたらまたキスされた。本当に油断も隙もないなこの子。

「ちゅ……ちゅっ♡」

「ちよ、銀子ちゃ……」

「ちゅっ……ちゅう……ちゅ……♡」

すると銀子ちゃんの両手が俺の頭の後ろに回されて、そのままガツチリホールド。そして啄むようなキスの繰り返し。一度の接触じゃもう満足出来ないと言うかのよう。

「ちゅ、ちゅう……ちゅ♡」

「……っ、く……っ」

抱き合っていた体勢が崩れてフローリングの床に倒れ込む。

しかし銀子ちゃんはそのような事を気にもせず、夢中で……キスが、き、キスの雨が。

「ちゅっちゅ……ちゅうちゅ……♡」

「ぎ、んこちゃ……」

銀子ちゃん感覚が、伝わる。その柔らかさに全身が痺れて頭がとろけそうになる。

こんなに情熱的なキス……頭がっ、頭の中が沸騰してきちやうよお……っ！

——いやてかマジで理性飛ぶわこんなんっ！

「ぎ、銀子ちゃん、ちよ、ちよっつ」

「ちゅ?」

「いやあの、ちゅ？　じゃなくて……」

ちゅうする事しか考えていませんけど？　みたいな顔をする銀子ちゃん。

今にも脳内が爆発しそうな俺と違って、好きが溢れる銀子ちゃんはけろつとして
いる。

この精神力の強さはどうだ。なんて理性の強さなのか。あるいはそれとももうとつ
くに理性なんて頭の中から溶け出しているのか。

「ちゅ……」

「ま、待った。一旦待った」

「やだ。一生ちゅうする」

「い、一生ですか」

「うん。一生」

俺の言葉に当然のように頷いて。

「わたしと一生ちゅうするの……いや？」

口元を僅かに窄めて、潤んだ瞳でこてりと首を傾げる銀子ちゃん。

可愛い。究極的に可愛い。この可愛さを前にノーと言えるような俺ではない。

「だよね。やなわけないよね」

「いやまだ何も言っただけ……んくっ」

「ちゅ……ちゅ……♡」

再びのキス。口付けの連打が止まらない。

ヤバイヤバイ、本当にこのちゅうの雨あられから抜け出せないかもしれない。

それぐらい圧倒的な攻め手だ。一生という言葉だって受け入れたくなってしまう程に。

「ちゅっちゅっ……♡ すき、すき……♡」

「………っっ！」

そもそもね、空銀子つてのは顔が良い、顔が良いんだよ。

全将棋界顔が良い女ランキング断トツ一位である事は確定的に明らか（俺調べ）なのに。

その顔の良さを溢れんばかりの暴力性でバランスを取ってきたのが空銀子という女の子なの。

「ちゅ、ちゅう……やいち、だいすき……♡」

「……ぎんこ、ちゃん……ッ！」

それが今やどうだ。

長期入院の影響なのか、本来その身に宿るべき暴力性はすっかりとかき消えて。

今や俺の事が好き過ぎて、俺とのちゅうを求めるだけの究極恋愛脳女子へと変貌し

た。これが空銀子の進化した姿だというのか。

「ちゅ……ちゅ♡」

「……ツ、くっ!」

これはマズい。これでは空銀子のバランスが取れないではないか。

こんなにも顔が良くて、こんなにも可愛い銀子ちゃんはその凶暴性を失ってはいけな
いんだ。

だつてそうなつたら……そうなつたらもう勝ち目なんか無いじゃないか。

「ちゅうちゅ……♡ ……ちゅ♡」

「——ツツ!」

こんな銀子ちゃんは駄目だ。空銀子の絶妙なる黄金比を崩しては駄目なんだ。

これでは世界の均衡が崩れて、その流れで全次元宇宙が連鎖崩壊を起こしてしまう
ぞ。

宇宙が……うちゅが、ががが……ツ!!

「……ぎっ!」

「ちゅ?」

「ぎ、ぎんこちゅわああーん!!」

「ちゅ……っ!」

選択——襲い掛かる。宇宙よりも先に崩壊したのは俺の理性だった。

至極当然の帰結である。一体こんな怪物にどうやったたら俺の理性が勝てるというのか。

「銀子ちゃんのばかあ！ もうしらないぞー!!」

「ふあ、や、やいちい……!」

銀子ちゃんの両手首を掴んで体勢を反転、上に乗られていた状況を入れ替える。

そして襲い掛かる。何処にどう襲い掛かるかって？ そんな知らんわ、勝手に想像してくれ。

「このっ！ このおっ!!」

「あつ、ん……!」

「このおっ！ このおっ！ いけない子め!! いけない子めえ!!」

「あ、ふあ……んう……!」

そうだ。これは銀子ちゃんがいけない。

あんな熱っぽいキスの雨で俺を誑かすなんて、そんな事は絶対にやっちゃいけないんだ。

だってこんな事になっちゃうから。だからこれは銀子ちゃんが悪いんだ、絶対そう

「やあ……やいちい、だめえ……」

「まだそんな事を言うか!! 本当は駄目だなんてちつとも思っちゃいけないにー!!」

「そんな、ちがうの、わたし……!」

「言い訳をするなー!!」

「あん……っ!」

こんな色っぽい声を、こんな淫らな声を上げる銀子ちゃんを許してはいけない。

この子には制裁を与える必要がある。だからこれは正義の行いなんだ。

「ふーっ! ふーっ!」

「ああ……やいちにたべられちゃう……!」

「ふーっ、ふー、……」

「……やいちっ!」

……てな感じで。

猛る勢いに全てを任せてあんな事やこんな事をしたっていい。

俺と銀子ちゃん、二人共に理性を捨て去ってしまう展開もありっちゃありなんだ

ど。

「……………」

しかしここで激情の波がすーっと引いていく。

テンション上げたり下げたり忙しい奴だなど思われるかもしれないが、事実俺はここで一旦冷静になった……もとい、理性は残っていた。

というのも……大前提として俺は銀子ちゃんを傷付けたくないし、嫌われたくもないから。

「……………」

「やいち、どうしたの？」

「…………いや、そのお……………」

要するに…………これは冒頭でも言っただけど、今日は銀子ちゃんと再会して数日目なんだよ。

この「数日」ってのがミソでさ。つまりは初日、その次の日、そのまた次の日あったわけで。

白状してしまうとね、こんな感じで勢いに任せる展開はもうすでに何度も経験済みなんだよね。

「さすがにその…………こうね？ これ以上あんまりがつつくのもどうかと思ひまして

……………」

「…………別に気にしないよっ…」

「っ、……………」

だつてほら、この子こういう事言うんだもん。

「それに……なんか、病み上がりの銀子ちゃんに負担を掛け過ぎるのもいかなものかと」

「……いまさら……」

そりやそつすね。こういう言葉は初日に言わないと意味ないつすよね。

「なんかさ。この数日は俺の方も……ちよつと焦つちやつたかなと思つて」

「焦る？」

「うん。ようやく銀子ちゃんに会えたから……気が急くつていうか、歯止めが利かなくて」

それはしようがない事——だと思いたい。我が事ながら言い訳がましいとは思うけど。

世界で一番愛しい人とずっと会えなかつたんだ。それで銀子ちゃんがこうなるぐらいいなんだし、そりや俺だつてちよつとはおかしくもなろう。

「けど焦る必要なんかないだよね。だつてもう銀子ちゃんは帰つてきたんだから」

「……うん」

「だから……ここであんまりがつつくのもどうかかなーつと思つて。もつとこれまで通り……つていう言い方があつてるかどうか分からないけど、とにかくもつと普通でいいん

じゃないかなあと」

「ふつう……」

やっぱり再会直後はね。多少はハメを外しちやつてもしょうがないよ、うんしょうがない。

でもこれからは違う。これからは以前みたく銀子ちゃんがここにいる事が当たり前な状況に戻るのだから、もつと耐性を付けるといふか、銀子ちゃんが居る事に慣れていかないといふ。

「……………」

となると、俺の事が好き過ぎるこのラブラブ銀子ちゃんにも慣れていく必要があるわけ。

大丈夫かなあ俺すっかり我慢出来るかなあ家の中でならまだいいけど将棋会館とかで会った時にちゅつちゅ好き好きしちゃうのはさすがにヤバイよなあどうすつかなあ。

「……………」

……とか、思っていたら。

「……………やっぱりっ」

ほそりと、一言。

「え？」

「やっぱり……変、だった？」

おずおずといった感じで尋ねる声。

ふと見てみれば、そこにあるのは俺の顔色を恐る恐る伺うような視線。

「……あれ？」

「……………」

「まさか……」

その沈黙の奥には先程までは無かったものが。

好き過ぎる代わりに失ってしまったもの、とつても大事な理性の兆しがあつて。

「まさか……銀子ちゃん？」

「……………」

「これは……真正正銘の、銀子ちゃん？」

「……………」

囁くように呟き、頷く。

その銀子ちゃんは……そう、銀子ちゃんだ。空銀子という名前の銀子ちゃんだ。

なんだか哲学的な問答のようにも見えるけど全然そんな事はない。ただ単純に空銀

子である。

「ていうかなによ正真正銘って。まるで人をパチ物みたいに」

「い、いやいや……」

その声は至って普通。その口調も「好き♡」だけを連発していた先程までとは違う。

これが空銀子のノーマル、特別有料DLCボイスは配信終了となったのか。という事は――

「え、じゃあもしかして正気にもどつ――ていうか、なんだろう、まともに――でもなくて」

「だからなによ、正気とかまともとか。さっきまでの私をなんだと思ってるわけ？」

「いやそれは……と、とにかくつ、普段通りの銀子ちゃんに戻った……んだよね？」

「……まあ」

銀子ちゃんは視線を明後日の方向に背けながら答える。

そんな無愛想な反応も。これは何処からどう見ても以前のまま。

ちゅつちゅ好き好きしたりはしない、俺がよく知る空銀子がそこにいた。

「……そっか、戻ったんだ」

「うん」

「とうか元に戻る事が可能だったんだね。将棋の駒みたいに一度成ったらもう一度裏返る事は無いのかと思ってたよ」

「……………うん」

こうして、空銀子は完治した。

いや完治つてのは駄目だな。ならえーっと、退化した……………つてのも違うか？

……………えー、まあ要するに、空銀子は失いかけていた空銀子らしさを取り戻したのだ。

「え、でもなにキツカケて戻ったの？」

「なにキツカケてわけじゃなくて……………なんかこう……………段々と……………」

「段々と？」

「うん。最初はすつごい本気だったんだけど……………でもなんか八一が「私らしくない」とかって言った辺りから……………そう言われると確かに私らしくないかもって気がしてきて……………それで……………」

「ははあ、なるほど……………」

自分らしくない、そう他人から言われる事で今の自分のおかしさに気付いたという事か。

それで段々と正気に戻って……………もとい、平常な思考を取り戻したという事だろうか。最初はすつごい本気だったという点もちよつと引つ掛かるけどそこはもう触れないでおこう。

「……………え？」

段々と、平常な思考を取り戻していった？

「待った。てことは途中からは半分ぐらい素であんなノリをやってたってこと？」

「……悪い？」

「い、いや別に悪くはないけどさ……ちなみに何処らへんからまともな思考に？」

「一生ちゆうするとか言ってた頃から」

嘘だろマジかよ。それまともな思考のセリフだったのかよ。

それが一番の衝撃だよ。果たして銀子ちゃんが言う「まとも」とは本当にまともな状態なのか。

「……い、いっしょう、ちゆうする、とか」

「え？」

「……ううう、な、なんか、なんかあ……」

とか思っていたら。

次第に銀子ちゃんは口元をわなわなさせながら弱々しく唸り始めて。

「なんか、今思い返すと……わたし、勢いでとんでもない事をしちゃったような……っ
！」

「え、まさか今更恥ずかしくなってきたの？」

「そりや恥ずかしいに決まってるでしょっ！ う、うう……っ！」

先程までの超好き好きラブラブモード。限界を越えた自分の姿を受け止めきれなかったのか。

両手で顔を隠すように覆う銀子ちゃん。指の合間から覗ける色はもう真っ赤つかだ。

「あんなに好きとか、あんなにキスとか……っ！」

「本当にすごかったね、再会してからのここ数日」

「あああゝゝうううううゝゝ……！」

麻酔が解けたように、今更湧き上がってきた羞恥に頭を抱えて悶絶する銀子ちゃん。

可愛い。可愛いね。やっぱり照れたり恥ずかしがったりしている銀子ちゃんが一番可愛いね。

「ばか、ばかあ……！ わたしのばかあ……！」

こんな可愛い銀子ちゃんも、今日の日の事も。やがては美しい思い出に変わっていく。

こうして人の黒歴史というのは積み重なっていくんだね。

「うう……」

「まあまあ。別に俺は気にしないからさ」

「そういう問題じゃない……」

「それにいつもとは違ったとはいえ、すっごく可愛かったんだからいいじゃん」

「だからそういう問題じゃない……!」

自らの過ちを振り返って、そのまま銀子ちゃんは深い後悔の谷底に沈んでいく——
——かと思いきや。

「……でも」

ん?

「……でも、いい」

「いい?」

「……うん」

すると銀子ちゃんは。

相変わらず真つ赤な顔ながらも、それでも吹っ切れたように目を開いて。

「……さっきの。……嘘は言っていないから、いい」

「……おお」

……正直言って驚いた。だってまさかそんな言葉が返ってくるとは。

たとえば嘘じゃなかったとしても、それを正直に白状するのはまた別の話だというのに。

「……本当に?」

「……うん。いいの」

これは銀子ちゃんにとって抹消したい黒歴史になるかと思っていた。でも違った。どうやら正面から受け止めるだけの覚悟があったようだ。

「それに……これは言えなかった分だから」

「え？」

言えなかつた分つて、それは――

「……うん。ずっと待たせちゃったから」

「っ、……」

――ずっと待たせちゃった。

そう言われて、そんな事はないよと返してあげる事は出来なかつた。

待っていた。ずっと待っていた。心の底から待ち望んでいたのは紛れもない事実だったから。

「私の都合で待たせちゃったから……せめてその間の分ぐらいは返さなきゃと思つて」
言えなかつた分、待たせていた分の愛情が積み重なつていた。

だからあの空白期間に言うはずだった分の「好き」を沢山言つたし、その分のキスを沢山した。

そう言つて銀子ちゃんは潤んだ瞳を、それでも真つ直ぐな瞳を俺に向ける。

「だから……いい。いいの」

「……そっか」

「うん。恥ずかしいけど受け入れる」

「そっか。最初から銀子ちゃんはそのつもりだったんだね」

「……うん」

離れ離れになっていた期間、失われた時間はもう戻ってはこないけど。

ただそれでも。多少なりとも埋め合わせが出来たらとそんな思いだったのだろう。

「けど、そういう事なら……いや？」

「八一？」

いや待てよ。結論を急いではいけない。

だって銀子ちゃんのさっきのあれが。あの「好き」の連打やキスの雨が。

あれが離れ離れになっていた期間、その間に積み重なっていた愛情の分だと言うならば。

——それならば。

「足りない」

「え？」

「足りない、足りないよ銀子ちゃん」

「た、足りない？」

「うん。そういう事だつてんなら足りない。まだまだこんなもんじゃ全然足りないよ」
足りない。俺は至極大真面目な顔で言う。

だつてそうだろう。これが今日一日の分の愛情だつてんなら供給過多もいいところ
だけど、そうじゃなくてこれまで会えなかった期間中に積み立てられていた「好き」だつ
てんなら話は別だ。

それだつたら足りない。あの期間を埋める量はこんなんじゃない、まだまだ全然足り
ない。

「てなわけで銀子ちゃん、もっと」

「……あ、あのね。この数日間で私が何回あんに好きだつて言ったと思つてんの。少
なく見積もつても多分百回以上は——」

「それでも足りないよ。本来なら銀子ちゃんは一日十回程は「好き」と言つてくれてたわ
けで、だつたら一ヶ月で三百、ほら、一ヶ月分にも満たない」

「どんな計算よそれは！ ていうか一日に十回も好きとか言うつもりは無いんだけど
!？」

案の定銀子ちゃんは必死に反論してくるけど……でも、前は言つてたよねえ？

うん。言つてた言つてた。昔からそれぐらいの回数は平気で言つてた。俺ちゃんと
覚えてる。

「とにかくくさ。こんなんじや全然足りないから、もつとちようだい」

「……ちよつとあんたね、がつつくのは止めたんじやなかったの？」

「これはがつつくがつつかないの話じやないよ。だってこれが今までの不足分ってんなら足りない」と損しちゃうじやん」

「そ、損って……！」

大体ね、去年末からの蓄積分をこの数日だけで返済するなんてのが土台無理な話なわけ。

本来なら得られていたはずの貴重な愛情を損したくはない。ここは大阪、商人の街。たとえ恋人相手だろうとビタ一文たりともまけるつもりはない。

「ていうか逆に聞くけどさあ、銀子ちゃんはこれだけで足りたつもりなの？」

「な、そ、れは……っ！」

「ずっと会えなかった期間の分があ、それがたつたこれっぽちで足りちゃうんだ。へー」

「ぐっ……！」

「俺は全然足りないと思うんだけどなー。なんかちよつと温度差があるのかなー。うーん」

「ぐ、ぐぐっ、ぐ……」

ああ、なんかこうやって悔しげな銀子ちゃんを挑発するのも随分と久しぶりだなあ。得てしてこういう真似をすると容赦無くグーパンが飛んできたりするんだけど、どうやら今回に限っては多少なりとも痛い所を突かれている自覚が銀子ちゃんにもあるようだ。

「…………ぐ、ぬ、にゅぬう…………！」

銀子ちゃんは恥ずかしさと屈辱が入り混じったような半眼で俺を睨み付けてくる。

この睨みの視線も懐かしいね。この表情も俺にとっては子供の頃から見慣れた顔、ちゃんと黄金比の整った空銀子本来の表情だ。

「…………ねえ、八一」

「なに？」

「私…………さ。もうこの通り…………至って普通の状態に戻っているわよね？」

「そうだね。今はもう何処からどう見たってなんの変哲もない普段通りの銀子ちゃんだ」

俺がそう言うと、なんの変哲もない普段通りの銀子ちゃんは大層恥ずかしそうに頷いた後。

「…………こうして、一回まともに戻った後にね」

「うん」

「もう一度、あの……要するに、さつきみたくヤバいぐらいおかしな状態になって、それで好き好き言ったりするのってすつごい勇気がいるんだけど」

「だろうねえ」

さつきのあれはほんとに凄かった、なんせ自らヤバいぐらいおかしな状態と表現するぐらいだ。

そりや正気に戻った今、そう安々とあそこまで感情のメーターを振り切れやしないだろう。

「それが分かっているのに……それなのにあんたは私にそんなむごい事を要求するわけ？」

「うん」

「即答すんな」

「だって一度は出来たじゃん。さつきのあれは偶然の産物なんかじゃない、きつと銀子ちゃんには理性を振り切って好き好き言うだけのラブラブモードになれる素質があるんだよ」

「そんな素質いらない」

「いらんだなんてそんな！ それを捨てるなんてとんでもない!!」

「ほらほら、早く愛をちょうだいよ」

「……ねえ八一。この際だから言うけどあんただって結構恥ずかしい事言ってると思うわよ」

「ははあ、何を仰りますやら。俺は将棋のお化けへの愛のメッセージを目一杯詰め込んだ棋書を日本中で何万部と売りに出した男だよ？ これ以上に恥ずかしい事なんてあると思うかい？」

「くう……！ 勝てるわけがない……！」

はっはっは。直筆のラブレターみたいなものもテレビやネットで紹介されたり、書店にずらっと陳列されているのを目にした気分と言ったらもうね。

さすがに今は慣れたけど、発売当時はじわりと嫌な汗をかいてしまうのを抑えられなかったよ。

「知つての通り、俺はこんなにも恥ずかしい真似をやらかしたんだ。分かるでしょ？」

「……う」

「だったら銀子ちゃんもさあ、ちよつとぐらいは身を切つて欲しいなーって」

「……うう」

「どれだけ恥ずかしくても見るのは俺だけなんだから全然ましでしょ？ ほらほら」

「ううううゝ……！」

袋小路まで追い込まれて可愛らしく唸る銀子ちゃん。

順番で言うなら先に届けたのが俺なので、次は銀子ちゃんが返してくれる番。問題はその量がどれぐらいになるのかって事なんだけど——

「……………ふう」

と、小さな吐息が。

それは覚悟を決めた音か。はたまた心のスイッチを入れた音か。

「…………や、」

やがて——震える声で。

「——や、やいちい！ 好きい!!」

「おおっ!!」

愛の告白の同時、銀子ちゃんがやけっぱちになったかのようなノリで飛び込んできた。

「すき！ すきい!!」

「ぎ、銀子ちゃん……………」

「やいちい！ やいちい！ すきすき——！」

す、すげえ…………!!

自分からヤバいぐらいおかしな状態に変わった、ラブラブモードに入りやがった……!!

「す、すきい……好きだよ八一……ちゅ」

そして愛情たつぷりなキス。……でも、これは先程のアレとは違うものだ。

純粹にゾーンに入っていた先程とは違い、今はその演技をしているだけだと分かる。

その証拠に目をぎゅつと閉じているし、窄めた唇がぶるぶると震えている。

「すきい……好きなのお、やいちい……!」

睫毛の先だつてびくびく震えているし、声も所々裏返つてるし、何よりも顔中がもう真つ赤だ。

多分だけどめちやくちや無理している。めちやくちや無理しながら愛情表現をしている。

しかし。誠に遺憾ながら……無理している銀子ちゃんもまためちや可愛いのである。

「銀子ちゃん……すこいよ、完全に一皮剥けたね」

「こんな剥け方嬉しくない……。でも、好きだよやいちい……♡ちゅ、ちゅ♡」

これは……これはきつと、以前までの銀子ちゃんには出来なかつたと思う。

俺達が離れ離れになつていた間、きつと銀子ちゃんには銀子ちゃんの戦いがあつて。

それに屈しなかつたからこそ今がある、辛きを耐えたその心はいつしか限界を突破し

て。

「すきい……すきい……♡ ちゅう♡ ちゅう♡」

そうして今——ほら、見てよ。

すでに頭の中は冷静なのに、その上でおかしくなっている演技をしてまでキスをくれる。

これはすごい。素直に脱帽だ。銀子ちゃんは本当に強くなって帰ってきたんだなあと、そんな事を思わずにはいられない。

「ちゅう……ちゅう……ん……」

するとキスの位置が。

次第に口元から徐々に頬の方へ、そして首筋に。

「……ほんとに」

「えっ？」

やがて俺の右肩辺りに顔を埋めて。

耳元で囁くように。

「……本当に、本当に嬉しかったよ。八一」

「……うん」

そんなの、俺だって。

今この瞬間以上の幸福なんてないと、抱き締める腕の力を僅かに強めた。

短編 全肯定空銀子

「……………」
——沈黙。

顔を合わせて早々、初っ端からの沈黙である。

「……………」
そんな沈黙の主は。

輝く銀髪が今日もお美しいこの御方、誰あろう空銀子先生その人である。

「……………」
で、そんな銀子ちゃんが、だんまり。

お互いの都合がついた本日、いつも通りに逢引き用もとい研究用ワンルームマンションで落ち合って、ちよつと世間話を広げる間もなくこれである。

「……………」

沈黙もそうなんだけど、この見るからに「ぶっすー」っとした感じのお顔が、ね。頬杖をつけてそっぽを向いて、眉を顰めて口をへの字に曲げて。一見ただけで不満を抱えている事がありありと分かる顔。せつかくの可愛いお顔が台無しである。

「ぶっすー……」

「うわ」

言うた。言うたよこの子。自分でぶっすー言うたよ。

なんともあからさまな態度である。私今不機嫌なんですけど？ アピールがすごい。

「分かった、分かったよ銀子ちゃん。きみの不機嫌さ加減はよく分かった」

「ぶっすー……」

「分かったから。ぶっすーじゃなくてちゃんと喋ろうね」

分かったというか、分かった。

ここに到着する前、今朝LINEで連絡を取っていた時からその文面ににじみ出ていたからね。

「でもさあ、正直そんなに目くじら立てる程のものじゃなかったでしょ」

「そんなことない」

「そんなことあると思うけどなあ、俺は」

「だったら怒ってない。もう見るからにあんたの上品な下心が見え見えだったから」

「それこそそんなことはないって……」

俺の抗弁にも耳を貸さず、随分とおかんむりな様子の銀子ちゃん——だけど。

とはいえ実際のところ、このぶつすーとした不機嫌フェイスの理由は大した話ではない。

「あれはもう浮気ね、浮気」

いやいや浮気だなんてそんな、事実無根の言いがかりにしてもヒドい。

あれは単なる仕事の一環、本当に大した話ではないのだから。

事の発端は昨日。俺はネット中継のある女流タイトル戦の大盤解説の仕事に出ている。

でその時、解説の聞き手役として若い女流棋士の先生が一緒だったわけ。それは大盤解説の形式としてごく自然なこと、その人と一緒に解説を行ったわけ。特に問題もなく恙なく。

しかしお仕事終了後、スマホを覗くと空銀子先生からの物言いが入っていた。やれ美人と一緒にだったから普段より浮かれていた、だの。大盤や中継モニターじゃなくて隣で揺れる胸ばかり見ていた、だの。目付きがいやらしくて実に不快だったのだ、なんだのと。

「冤罪だって、冤罪」

確かにご一緒させて貰った女流棋士の方は美人と呼ばれるに相応しい人だったと思う。

二十代中頃の落ち着いた雰囲気的女性で、その胸囲にも迫力があつた。美人で優しい年上のお姉さんつとてでもいいと思いますよね。

ただね、とはいえそれで俺が解説仕事中に浮かれていたかと言われたらそんな事は無い。胸ばかりみていたというのも目付きがいやらしかったというのも、全て空銀子先生の一方的な主観に基づくいちゃもんに過ぎないのである。

「あんな不快なものをネット中継するなんて、見せられるこつちの身にもなつて欲しいわね」

「いやいや……」

で、本人はこのぶつすーとした不機嫌顔。

要するにこれはジェラシー、あるいは焼きもちか。美人な女流棋士と仲睦まじく解説業をこなす恋人の姿を見て、銀子ちゃんの繊細な乙女心が嫉妬という名の癩癩を起こしちゃつた。

その挙句の冤罪容疑である。全く困つたものだね、かわいいけど。かわいいけど。「大丈夫だつて。確かにああいう包容力がある感じの大人の女性は素晴らしいけど、それでも銀子ちゃんの可愛さには及ばないから」

「そつ、う、いう話をしてるんじゃないんだけど!？」

つまりはただそれだけの話であつて、先程から言つていられるように大した話ではない。それが証拠に、銀子ちゃんだつてなにも本気で怒つていられるわけではない。この子が本気で怒つていたら「ぶつすー」とか言つていられる余裕なんてあるはずないからね。

こうして露骨に不機嫌アピールするぐらいの余裕はある。それでも完全に演技ではなくてちよつとぐらいはプンスカきている。それぐらいの絶妙な火加減で燃えている状態と言えよう。

「八一は昔つからああいいうタイプの年上女に弱い。すぐ外見と雰囲気だけに騙されて鼻の下伸ばすんだから」

「騙されてなんかないつて。けど……ちよつと桂香さんに似た雰囲気があるから、そういう意味では親しみを感じるところはあるのかも」

「……ふん」

つーん、とそつぽを向く銀子ちゃん。

この子と付き合い始めて以降、あるいはそれ以前からも、この子がこういうツンツンな態度になる事は往々にしてよくある為、今更対応に慌てたりはしない。

というか最近はもうなんかこれは誘ひ受けの為の建前というか、こうしておけば俺はご機嫌取りの為に銀子ちゃんを甘やかしちゃうわけで、俺からのアプローチを受けて仕

方ないという体を取りつつイチャつく為の前フリとして怒っているのではないか？
と思う事もしばしばである。

「本当はそういうことなんだよね、銀子ちゃん」

「なにが」

「俺はちゃんと分かってるよ、銀子ちゃん」

「だからなにが」

ね。そういうことなんだよ。可愛いやつちゃでほんまに。

「それでも浮気はないでしょ浮気は。いちやもんで人に冤罪吹っ掛けちゃ駄目だつて」
「いちやもんじやないから。あれはほぼ浮気、少なくとも未遂までは確実にいつてた」

「またまたそんな……もしそれが本当だったらそんな光景をネット中継しちや駄目でしょ」

「だからそう言ってるの。あれが冤罪だなんて思っているのはあんただけ、視聴者としてあの中継を見ていないからそんな事が言えるのよ」

とかなんとか言っちゃってるけど、それでもこれは前フリだからね。

しやーないなあ、不機嫌アピールしている銀子ちゃんを可愛がつてあげるとするかよしよし。

……とか、普段ならそんなノリでイチャつき始めたりするんだけど。

「……うーん」

ふと俺には気になることがあった。

「浮気……浮気、か」

「うん？」

『浮気』——俺と銀子ちゃんみたいなラブラブカップルには耳馴染みの悪い言葉である。

しかし、だからこそ無視出来ない言葉とも言える。今回の件だつてそう、昨日の大盤解説での俺の立ち振る舞いが浮気に該当するのか。その判決は一旦置いておくとしても。

俺が引つ掛かったのは、それが『俺だけがそう思っている事』という場合について。

「なんか……改めて考えてみるとさ、全部が他人事つてわけでもないのかなつて」

「そりゃ他人事なんかじゃないけど」

「いやそういう事じゃなくて……昨日の大盤解説に限らないけどさ、ある出来事について、それが浮気になるのか否かつてのは人それぞれ判断基準が異なるものだから——」

恋人間において、その判断基準が双方異なるといふのは良くある話だと聞く。

例えば——恋人がいるのに異性と二人で食事をしたら浮気、とか。または食事はセーフだけど手を繋いだら浮気、あるいはキスをしたら浮気、とか。はたまた実際には会わずとも頻繁に連絡を取り合っているだけでも浮気、とか。

どこを浮気のボーダーラインとして線引きするか。その認識は個々人によって異なるものだろう。

「それはまあそうでしょうね」

「でそういう認識の違いってき、往々にして破局の原因になるとかつて聞くよね」

自分はセーフだと思っていた。しかし相手はそう思っていない。それが問題だ。

まあ揉めるよね。そりゃ揉める。そしてその場だけの口論で終わらず喧嘩に発展し、やがて二人の関係は修復不可能なものとなり破局に至る……というのは恋人関係の終わり方として定番とも言える詰み筋である。

「……確かに、なんか聞いたことはあるわね」

「でしょ?」

「うん。……破局、破局」

「そう。破局」

「……はきよく」

破局。実に嫌な響きで聞こえるフレーズ、呟く銀子ちゃん表情も硬い。

俺だつて破局はいやだ。大好きな銀子ちゃんと別れたくなんてない。絶対に。

「そんなふうと考えてみると、今回の一件も他人事じゃないなって思えてきちゃつてさ」

「うん……」

「まあ今回の浮気冤罪は認識の違い云々とかはなーんも関係なくて、ほぼ間違いなく俺の読み通りで銀子ちゃん流誘い受け前フリの一手だろうから別に心配はしてないんだけど」

「うん……」

「でもそういう油断や慢心こそが危険だって、そんな気もするんだよね」

昨日の大盤解説は恙なく終了した。というのは俺の認識違いであって、中継を見ていた銀子ちゃんからは本当に俺が浮気をしていたかのように、十分以上の好意を抱いて相手の女性と接していたように見えていたかもしれない。

だから先程の不機嫌顔が単なるアピールだっていうのも俺の認識違いで、銀子ちゃんには本当にご立腹で、このことがやがて破局の理由になる可能性だってゼロではない。

……というのが、この話の恐ろしいところだ。とはいえ銀子ちゃんは先程の会話でサラツと冤罪であることを告白していたりするんだけど、それには見て見ぬふりをしてあげるのが優しさというものだ。

「……にしても、八一」

「なに？」

「あんたって、よくそういうこと考える気分になれるわね。私、ここで破局どうこうとか

想像するだけで嫌なんだけど」

「そりゃ俺だつて気乗りする話だとは微塵も思わないけどさ。それでも考えることには意味がある、だつてそうすれば対策が打てるでしょ?」

「対策?」

そう、対策だ。破局へと通じかねない詰み筋を回避する為には事前の対策が必須と言えよう。

今回の話は「恋人間における浮気に対する認識の違い」が問題になっている。問題が明確であるならば対策を取ることだつて可能だ。

「要するにさ、自分のことだけじゃなくて相手の認識を知っておけばいいわけで」

大前提として、銀子ちゃんとお付き合いをしている俺は浮気をするつもりなんて一切無い。

ただ俺は浮気だと思っていないのに、銀子ちゃんにとっては浮気だと感じるような行い。それが例えば昨日の大盤解説での冤罪、ひいては破局へと通じる詰み筋を誘うわけで。

であればそこを事前に共有しておけばいい。認識を一致させておけばいいんだ。

「俺と銀子ちゃん、お互いが納得する浮気のボーダーラインを予め決めちゃえばいいんだ」

「……ボーダーライン、ねえ」

「そうすればほら、知らない内にそこを踏み越えていたー、なんてことは無くなるじゃん？」

「……………」

「何事も大事なのは事前研究。事前研究を具に行う事で頓死を回避する事が出来るのだ。」

「俺がそんな提案すると、銀子ちゃんはどこか胡散臭いものを見るような目付きに変わった。」

「……なんかそれ、すつごい悪用されそう」

「え？」

「何処までがセーフ扱いになるのか知っておきたいからー、って言ってるように聞こえる」

「そ、そんなまさか！ それこそ冤罪だつて！」

「そんな事は無い！ 神に誓ってもそんな事は無いから！」

「これは破局を防ぐ為の対策、悪用なんて以ての外だ。有罪判決を下されないギリギリを攻める為に提案しているわけじゃないから！ 本当に！」

「……………ほんとに？」

「本当！　ほんとほんと！」

「ふうん……」

銀子ちゃんは暫く疑いの目を向けていたが、やがて「でも、そうね」と頷いて。

「確かに、そこをハッキリさせておくつてのは大事なこともね」

「でしよ？」

「うん。私という存在がありながら一向に節操を欠いたままな八一の躰にも使えそうだし」

「躰って。それ恋人相手に使う言葉じゃないよね？」

「じゃあ八一、あんたが思う浮気のラインってどのぐらいなの？」

「俺の認識は至って普通で一般的だと思うよ。それよりも銀子ちゃんの考えを聞かせて

「よ」

「私？」

「多分だけど、俺よりも銀子ちゃんの方が一般的基準からは大きく外れていそうだしね。」

「その上で尚、俺はそんな銀子ちゃんの事が大好きだから。銀子ちゃんを怒らせたくないし悲しませたくないと思う、だから知っておく必要がある。」

「……ふうむ」

顎に軽く手を当てて考え込む銀子ちゃん。

人よりもちよつと嫉妬深さが強めなこの子が考える浮気のボーダーラインとは、果たして。

「じゃあ……女と喋ったら浮気で」

「言うと思つたよ、それ」

読めた。今の一手は読めていたね。

「じゃあ女と対局したら浮気で」

「それもう仕事もなにも出来なくなるじゃん……」

棋士から対局を封じるなんて、りゆうおうのおしごと何もあつたもんじゃない。

「だって、今のおあんたが浮気しそうな相手なんてほぼ間違いなく将棋関係者だろうし」

「そ、そりやそうかもしれないけど……銀子ちゃん、ここは一つ真面目に、ね？」

「私は真面目だけど」

まあ、とはいえね。さすがの銀子ちゃんだってこれを本気で言っている訳ではないからな。

子供の頃からもう長い付き合いだからね、それぐらいのことは俺にだって分かるんだよ。

「私は本気で言ってるけど」

「そうは言っても空銀子。ちゃんと常識的な一面だって持ち合わせている子ですからね。」

「だってそんな、喋ったり対局するだけで浮気扱いだなんて、さすがにそんな事言わないでしょ。」

「本気だつてば」

「……………」

「……まあ、とにかく。」

「銀子ちゃん、一旦冷静になろうか」

「私は冷静だけど」

「うん。本当に冷静かつ平然とした顔で言ってるから銀子ちゃんってすごいなあと思う。う。」

「オーケーオーケー。分かったよ。なら考え方を変えてみようか」

「考え方？」

「いいかい？ こういう時にはね、相手の立場に立つて考えてみる必要があるんだ」

「俺がそう言うのと、銀子ちゃんは虚を突かれたような表情に変わった。」

「……………相手の立場？」

「要するに……………する側ってこと」

そう、これは浮気のボーダーラインの話。であればここで言う浮気とは、なにも男である俺だけにその可能性があるものではない。

正直これは破局以上に想像したくもない話なんだけど、あくまで仮定に仮定を重ねた話だと念入りに前置きをした場合、銀子ちゃん側にだってその可能性はあるわけで。

「私は浮気なんてしないわよ。あんたじゃあるまいし」

「それは分かってるよ。でもさ、じゃあここでもし俺が銀子ちゃんに対して『男と会話したら浮気だから』なんて言い出したら、どうする？」

「む」

「『男と対局したらそれ浮気だから』なんて言われたらどうする？ 困るよね？」

「むう……」

さすがに反撃の一手を思いつかないのか銀子ちゃんがむつと押し黙る。

まあそりゃそうだ。会話や対局だけで浮気扱いはちよつと無理筋が過ぎるというもの。

というか実際問題これまでの人生やこの先の人生を考えても、異性と対局する機会は俺よりも銀子ちゃんの方が圧倒的に多くなるはずだからね。それを禁止出来るはずがない。

「というわけで。異性と対局したらそれ浮気だから理論は成立しないんだよ。分かった

かな?」

「分かつてるけど。ていうかね、そんなことを私が本気で言うはずがないでしょ」

またまたー。

「恋人つてのは対等な関係だからね。厳しいボーダーラインでもお互いに適用される、俺だけじゃなくて銀子ちゃんも道連れなんだよ」

「私にあんたと違って節操ある常識人だから浮気なんてしないし、ボーダーラインなんかあつても無くても同じなんだけど……まあいいわ。さすがに対局を封じたら棋士として生きていけないしね」

そう言つて一旦は納得の姿勢を見せた銀子ちゃんだつたが。

「——でも」

と、その灰色の瞳が妖しく輝いた。

「八一。あんた今、墓穴を掘つたわよね」

「え?」

「気付いていないの? はつきり言つて頓死級よ」

墓穴? 頓死? はて、そんなつもりは無いんだけど。

俺が首を傾げる一方、銀子ちゃんは完全に詰み筋を読み切つた時の顔をしていて。

「あんた今、相手の立場に立つて考えるべきだーつて言つたわよね」

「そりや言ったけど」

「だったら。あんたも私も立場に立って物事を考える必要がある、っていう事よね？」

「そりやまあ、そうだね」

一体その何処が墓穴なのか、何ら疑問を抱く事も無く俺は頷いた。

さつきも言ったけど、恋人関係っていうのは対等であるのが自然な形だろうからね。片方だけが我慢を強いられたり過度な負担を負うような関係は健全とは言えないだろう。

銀子ちゃんが俺の立場に立って浮気の成否を考えるケースがあるように、時として俺も銀子ちゃんの立場に立って物事を考えてみる必要があるだろう。

「それじゃあ八一、ちょっと私の立場になって考えてみて」

「うん。いいけど」

銀子ちゃんの置かれた立場。言われた通りに想像してみよう。

前提としては史上初の女性プロ棋士で、九頭竜八一という恋人がいる、ってところか。

「まずはそうね、今回の件で言うなら……じゃあ例えば胸、」

「胸？」

「じゃなくて、えっと……胸筋？ の大きさ……でもないか。とにかく、八一よりも年上

の男がいたとして」

「うん」

「で、その人は八一よりも顔がイケメンで、八一よりも高収入……ではないかもしれないけど、高身長で、高学歴で……あ、そうだ、鏡洲さんなんてちょうどいいかも」

「ふむふむ、鏡洲さんね」

鏡洲飛馬。奨励会を退会するまで俺も銀子ちゃんも共通でよくお世話になっていた人だ。

具体的な名前が挙がると顔見知りな分想像はしやすくなる。俺よりも云々のところが少々引つ掛かると言えば引つ掛かるが今は聞き流しておこう。

「で、ある時あんたは将棋のネット中継を見ようと思ったわけ」

「ふむふむ、それで？」

「するとそこで、私と鏡洲さんが一緒になって大盤解説をしていたわけ」

「ああなるほど、言いたいことが分かったよ。それでその大盤解説中に銀子ちゃんと鏡洲さんが楽しげに会話していたり、なんかイイ感じの雰囲気になったりしつつあったわけだ」

「そうそう、そういうこと」

わが意を得たりとばかりに頷く銀子ちゃん。

要するに、冒頭の件での女流棋士さんの立ち位置を鏡洲さんに置き換えたわけだ。

「そんな光景を見せられて、あんたはどう思う？」

「なるほど、それが銀子ちゃんの立場ってわけだね……ふうむ」

銀子ちゃんと。あの鏡洲さんが。

二人でイイ感じな雰囲気で、大盤解説をしていて？

「……………」

……それで？

「——いやいや、別にどうってことないでしょ」

「……………ほんとに？」

「勿論。そんなことで俺がイライラしたり怒ったりするわけないじゃんか」

俺はハッキリと否定してやったね。ぶっちゃけ悩むような問題ですら無かったよ。

だって大盤解説で？ 鏡洲さんと一緒にいる銀子ちゃんの視線や態度が気になっ

ちやつて？ それで俺が銀子ちゃんみたく「ぶっすー」な気分になっちゃうって？

ないないそんなの、あり得ないって。俺はそんな狭量な性格じゃないからね。そんなことで浮気を疑ったりなんてしないでしょ。それどころか二人と一緒に仕事をしていたら昔からの関係を思い出して微笑ましい気分になるとすら思うね。

「単なる仕事の一環だよ。銀子ちゃんの立場になつてみたら猶更その考えが強まったよ」

「……ふーん」

それは意に反する回答だったのか、あるいはそれとも想定通りだったのか。

銀子ちゃんは然程気に留めた様子もなく「そう」と軽く流して。

「まあいいわ、本番はこれからだから。じゃあ次、私が本を書くことになりました」
「え、本？」

「そうよ、本。出版社に依頼されて空銀子名義で将棋の本を出すことになりました」とします
「ふむ……」

これは先程の例から考えると、以前に俺が書いた『九頭竜ノート』との対比だろうか。
自分で言うのも悲しいけど、世間一般での空銀子人気を考えれば俺が書いた本よりも
この子が書いた本の方が圧倒的に売れそう。そう考えればこれも全然あり得る話で
はあるね。

「本を書く時つてき、なんか編集者みたいなのが付くのよね？」

「まあそうだね。出版社に依頼されて書くんだったら編集の人は付くだろうね」

「で、その時私に付いた編集者は年上の男性で、これまた胸、はどうでもいいんだけど、
私にとって昔からの顔馴染みで、性格は最悪なんだけど顔はまあまあイケメンで……う
ん、これも鏡州さんをイメージすればいいかも。性格以外は」

「ふむふむ……」

編集者で、昔からの顔馴染みで胸が大きい人と言えば心当たりは一人しかいない。

もしかしなくてもこれは供御飯さんの事だろう。確かに要素を抜き出すと鏡州さんに重なる部分はある。俺を銀子ちゃんに、供御飯さんを鏡州さんに置き換えての対比という訳だ。

「私は頑張つて執筆をしていたんだけど、本を書くなんて初めての事だし中々筆が進まなくつて」

「うん」

「それで無理やり原稿を書き上げる為、執筆に集中出来る場所に隔離しようつて話になつて」

「うんうん」

「いわゆるカンヅメね。場所は……そうね、京都とか。天橋立なんかいいかもね」

「……………うん？」

あれ、なんか背筋が、背筋が寒い。すうつと冷たい感触が走つたような気がするぞ？

原稿執筆に集中する為にカンヅメ。移動先は京都の天橋立にある老舗旅館、とか。

その流れは完全に身に覚えがある、あり過ぎるぞ。し、しかし……それは。

「ちよ、ちよつと待った」

「なに？」

「いや、あの……ですね、その、それ……どうして、銀子ちゃんが知ってるの?」

おかしい。あの一件は銀子ちゃんに話してはいないはずなのに。何故知っているのか。

誰から聞いた? 何処から情報が流出した? 供御飯さんや出版社関係の方からか、

それともあの時はカンツメになって暫く家に帰らない事を天衣には連絡していたから、そっち方面から漏れた可能性も……。

……などと脳内混乱する俺の一方、銀子ちゃんはさも思わせぶりに「ふっ」と笑って。

「さあ、どうしてかしら。風の噂で聞いたのかもね」

「え、ちよつと本当に誰から聞いたの? 供御飯さん? それとも天衣? それとも――

――」

「いいこと八一。私に隠しごとなんて出来ると思わない方がいいわよ」

怖い。ただただ怖い。

知られていた事実も、その上で今まで泳がされていたという事実も、全てが怖すぎる。

「天橋立、いいわよね。私も一度行ってみたいな」

「……あ、あのさ、これは……違うんだよ、銀子ちゃん」

「なにが?」

「これは別に、隠していたわけじゃなくてね? ただ単に話す機会が無かっただけとい

うか」

「わざわざ私に話す程の事じゃない、その程度の取るに足らないような出来事だった？」
「そうそう、そういう事そういう事」

ああヤバイ駄目だー、この逃げ方は絶対に悪手になってしまふよー。

そうと分かっているのに自ら袋小路へと進んでしまう愚かな俺。なんか完全に銀子ちゃんの狙い通りの展開に誘導されている気分になってきた。

「そっか。じゃあさっきの話の続きだけど、執筆原稿を書き上げるまで私は天橋立にある旅館の一室でカンヅメになる事になったとして」

「……………うん」

「その際は編集の人も一緒に行く事になって、カンヅメ中はあろう事か同じ部屋で寝泊まりする事になったとしても、それも取るに足らないような出来事かしらね」

「……………ぐっ」

なんか自然と喉の奥が苦しく鳴った。

ああほらやつぱり。絶対にこうやって切り返されるのがもう目に見えていたじゃん。だからこれは内緒にしておかなければならない話だったのに。

えだつて俺の銀子ちゃんが？ 天橋立の旅館にカンヅメ？ それで何処ぞの誰とも知れない編集者の男（鏡州さん似）と？ 同じ部屋で寝泊まりするって？

いや普通に考えて駄目でしょ絶対。俺というものがあいながら何を言っているんだ。

もし現実でそんな事が起きたら刀傷沙汰になってもおかしくないぞマジで。

……というのが、率直かつ正直な気持ちなのだ。

それをそのまま答えてしまつては更なる悪手になるであろう事は言うまでもない。

「どうなの、八一？」

「……それは、仕事で、締切までに本を書き上げるといふ目的の為、仕方無くなんだよね？」

「まあ、そうね」

「それなら……ぎぎ、ギリ、で？」

「ギリで？」

あんた本当にそう思つてんの？　と言わんばかりに語気を強めてくる銀子ちゃん。

うんごめん、本当はそう思つてない。ギリセーフどころか余裕でアウトだと思つています。

「これは想像だけだね、ただ黙々と執筆作業を行うだけじゃ済まないと思うわよ」

「そ、そんな事はないさ。だつて締切間近でヤバくてカンヅメだったんだからそりやもう必死に執筆作業をしてた、じゃなくて、するはずでしょ。それ以外の事をするヒマなんて無いよ」

「そりや原稿を書き上げるまではそうでしょうけど、完成後はどうかしらね。気分も上

がってその場で打ち上げなんかしちゃうんじゃないかしら。それで相手の編集者はお酒も飲んだりしちゃうんじゃないかしら。それで——」

それで——その先で何が起きたか。銀子ちゃんに言われるまでも無く覚えている。

あの日、女流名跡リーグ最終戦に敗れた供御飯さんと残念会を兼ねた打ち上げをした。敗戦直後という事もあつたり結構な量のお酒が入っていたりと、とにかく平常時とは異なる条件が色々重なっていて。

それで……突然に供御飯さんが衣服を脱ぎだして。それで……告白を、された。供御飯さんが胸の内に秘めていた気持ちを知る事になった。

とすると。あの出来事の立場を入れ替えて、あれが銀子ちゃんの身に起きたと仮定すると——

「——いやでもまあってまあって！ やっぱりこの『相手の立場に立って考えてみよう』理論も破綻してないかな！ だあってだあって、これ男側と女側で色々条件が変わってくるこあるでしょ!？」

脳内に浮かんだ想像を一瞬でシャットアウトした自分を褒めてやりたいよ！ マジで!!

だってこれさあ！ これは駄目じゃん！ だって男の俺が裸の供御飯さんに後ろから抱き付かれて告白されるのは問題ない、というか問題は起きなかつたけどさ!!

これ性別逆にしたらもうその時点で問題大有りでしょ!? 告白とかその結果どうこうとかなんも関係ないじゃん!! 前提条件が大きく違ってくるじゃん!!

「何を今更。相手の立場に立って物事を考えましようって言ったのはあんたじゃないの」

「いやそうなんだけど……! そりゃ俺が言ったんだけど……!」

なるほど、頓死だ。言われてみればものすごい墓穴発言だったかもしれない。これは。

要するに俺の今までの行いを俺じゃなくて銀子ちゃんが行っていた場合、それで俺はどう感じるか、ということ突き付けられているのだ。

「いやでも……これは駄目だって。もし銀子ちゃんがそんなことになったら……死ぬ」

「死ぬってあんたが?」

「いや、その鏡州さん似の編集者が」

俺は心底大真面目に答えた。

でもそれしかないよね? 鏡州さんに恨みは一切無いけどこればかりは仕方が無い

いでしょ。

仕事を建前にして銀子ちゃんと一緒に旅行するだけでも完全アウトなのに、傷心やお酒の勢いを理由にして不埒な真似に及ぼうとする下種な存在を生かしておく事は出来

ない。

その時は俺も覚悟を決める。たとえ刺し違えてでも息の根を止めなければなるまい。

「八一、あんたって随分と物騒な事を言うのね」

「うん。だって……やだし」

「……嫌なんだ？」

「……うん」

「ふうーん……」

ああああ、含みをたつぷりと感じさせるような銀子ちゃんの視線が痛いよ。

いや分かっているんだよ。これが立場を入れ替えただけで実際にあつた話だったのは。

「ホント反省してますからもう勘弁して下さい……俺を前科者にしたくないでしょ？」

「それはまあ、そうだけど」

「それにさ、この話で互いの立場を入れ替えたらそもそも成立しないと思うんだよな。

いくら執筆の為とはいえ高校生の銀子ちゃんを相手に旅行で同じ部屋に寝泊まりなんて提案してくる編集者はいないでしょ。色々な法律や条例に引っ掛かっちゃうって」

「それもまあ、そうね。ていうか私ならそんな話は最初から承諾しないし」

そりやまあそうなんだよね。じゃなんで俺は承諾したのかって話になるんだけどさ。

一つだけ言い訳させて貰うと、あの時は銀子ちゃんが所在不明で一切連絡が取れない状態だったからね。加えてあの本を書き上げる事が銀子ちゃんへのメッセージを綴る事とイコールでもあったから、そういう事情が色々噛み合って……ね？

あれが普通に銀子ちゃんがそばにいる状態であったなら、執筆の為とはいえさすがに無断で女性と旅行に行ったりはしない、説明と同意の為に予め連絡を入れるぐらいはしていた。……はず。

「どう？ 自分がどれだけ罪深い存在なのか、ちよつとは理解出来たかしら？」

「はい。理解しました。山よりも高く海よりも深く理解しました。本当に」

「ん、よろしい」

銀子ちゃんは満足そうに頷いて。

「それじゃあ次」

「え、これまだあるの!？」

「うん。次が一番肝心な話だから」

一番肝心な話って。なんかもうこの時点で聞くのが怖いんですけど。

「ある日、私に弟子が出来たとします」

「え、弟子？ って、将棋の弟子だよね？」

「そう、将棋の弟子。私が将棋の弟子を取って師匠になったと想像してみてください」

「はあ……」

言われるがままに想像してみる。銀子ちゃんが将棋の師匠になった姿。

将棋の師匠となれる条件は四段以上、つまりプロ棋士である事。であれば銀子ちゃんもプロ棋士である以上、弟子を取る事は確かに可能だ。

今まで考えた事も無かったけど、こうして言われてみるとその可能性は十分にあり得る。

「その弟子は小学校高学年ぐらいの男の子で」

「うん」

「将棋の才能溢れる将来有望な子で。例えばそうね……梶創多みたいな」

「ふむふむ、創多ね」

梶創多。すでにプロ棋士ではあるが、現在小学六年生の男子という点では当てはまる。

すでに分かり切っている事だけど、先の鏡州さんの例からしてこれはあいや天衣の立ち位置を創多に置き換えたのだろう。時系列的に考えて銀子ちゃんが創多の師匠になる事はあり得ないが、たとえば話で想像する事なら可能だ。

「ここからが肝心なんだけど、その弟子はね、ただの弟子じゃなくて私の内弟子になるの」

「内弟子、ですか」

「そう、内弟子」

内弟子とは。師匠と同居をして、寝食を共にしながら修行をする弟子の事を言う。

何を隠そう俺や銀子ちゃんも元々は師匠清滝鋼介の内弟子だった。そしてあいも俺の内弟子であつた以上、今回の対比ではその創多似の弟子が師匠空銀子の内弟子になるのが当然と言える。

……つて、え？ 内弟子？

「え、ちよつと待つて。それつて銀子ちゃんと同居して一緒に生活するつてこと？」
「そうね、内弟子なんだから当然そうなるわね」

「……………え？」

銀子ちゃんど？ 同居？ 寝食を共にする？

え、誰が？ 弟子が？ 小学校高学年の男子が？ 創多が？

「いやいや、それは駄目でしょ」

いつそ驚く程にすんなりとその結論が出た。

これに関しては悩むまでも無い、自明の理というやつだろう。

「八一、あんたね——」

「違うんだ銀子ちゃん、聞いてくれ。これは君の為を思つての事なんだよ」

「よくもまあ抜け抜けとそんな事が言えるわね。大体これはあんたの立場と同じ——」
「俺は銀子ちゃんの身を案じているんだ、何かあつてからじゃ遅いんだから！」

俺は銀子ちゃんの言葉を遮る勢いで声を荒げた。

だつて同居なんて。寝食を共にするなんて。そんなの駄目に決まつてる。それをお前が言えた立場か、と返されそうだがこれも先程の例と同じである。

つまり高校生（年代）の俺が小学生女子を内弟子にして一緒に暮らす分には何も問題無い。というか何も問題は起きなかつたよな？

でもさでもさ、高校生女子の銀子ちゃんが小学生の男子を内弟子にして一緒に暮らすつてのはとつても問題があると思うんだよ。

「百歩譲つて小学校低学年とか幼稚園児とかならギリ納得も出来たけど、高学年は駄目だつて。創多なんて今年六年生じゃん、そんなの絶対に駄目でしょ、危ないよ」

小学六年生なんてね、年齢的には子供だけどその本質はハッキリ言つてエロだからエロ。

六年生ならもうエロい事を考える頭が十分出来上がつてるからね、マジで。そんな輩と俺の銀子ちゃんを同じ部屋に置いておけるわけがない。

でもこれが困つた事にね、銀子ちゃんとはとつても無垢でピュアな子だからね、小学六年生でまさかそんな事はあり得ないとかなんとか思つちやつてるんだよ。

故にこの俺が止めてあげなければならない。それが恋人でもある俺の役目なのだ。

「じゃあなに？ 小学校高学年男子の内弟子はそういう危ない事をするもんなの？」

「うん。断言するけど絶対だね、絶対にエロい事をするから」

俺は大マジで答えてやったね。

だってこれは俺があいを内弟子にするのとは事情が大きく異なる。師匠側に良心と節度があれば問題無いというものではないのだ。いくら銀子ちゃんが注意していても、意に沿わない形でという事だって全然あり得るからね。

小学六年生なんて発育が良い男子だったら身長で銀子ちゃんを上回っている事すらある。一方でただでさえひ弱な銀子ちゃんだ、小学生相手でもフィジカル負けをする可能性は十分にあり得るわけ。

ほらね？ 危険でしょ？ そんな危険は可能性の段階で排除しなければならないよね？

「じゃああんたも同罪よね」

「え？ なんで俺？」

「だって小学校高学年の内弟子は絶対にそういう事をするんでしょ？ ならあんたもじゃない」

「……あ」

そういやそうだ。小学校高学年男子の内弟子ってかつての俺もやんけ。

「そっか。八一も……したんだ」

となれば必然そういう話になる。

悪手に気付いた時にはもう遅い、銀子ちゃんがじとーつとした目をこちらに向けていた。

「エツチなこと、したんだ」

「し、してないしてない。俺は唯一の例外だから」

「私がお風呂入ってる時に覗いたりしたんだ。寝ている間にキスしたりしたんだ。さいてー」

「しししてないしてない!! 神に誓ってそんな事はしてないから!!」

「……してないんだ」

「いつ、いや!! ああ……」

一転してしょんぼりした様子の銀子ちゃん。その姿を前に二の句が継げない俺。

ええちよつと待つてよこれどう答えるのが正解なの!? 最善手が分からないよ!!

「したの? してないの?」

「そりゃあ、あの……ほら、俺は子供の頃から将棋のことしか頭に無かったから……」

そう答えておくしかない。そもそも事実なのだから間違つてはいない。

というかもし俺が子供の頃においたをやらかすような事があった場合、それは銀子ちゃん相手ではなく桂香さん相手なのでは……とか言おうものならビンタされそうなので止めておく。

「ふーん……ま、いいけど」

そう納得する銀子ちゃんだったか、やっぱり心なしか残念そうに見えるのが不思議だ。

「でも、それだったら私が内弟子を取ったとしても同じなんじゃないの？」

「それは……」

まあ、そりやそうなんだけど。

なんせこれは通常の弟子ではなく内弟子の話。子供ながらに将棋の道を目指して親元を離れるのだ、する方を受ける方も生半可な覚悟で出来る事じゃない。

そりやあそんな道を選ぶのは将棋に真剣な子供だけに決まっている。それこそかつての俺や銀子ちゃんみたいに。

「だったら問題無いじゃない。だってあんたは問題を起こさなかったんでしょ？」

「……そ、それは」

まあ、理屈上はそうなる、んだけど。

しかしだね、世の中には理屈で割り切れないものだって沢山あるわけで。

「……………えー」

「なに」

「……………ええー」

理屈で割り切ろうとしてみて、失敗。

俺の口からは地の底を這うようなものつすごい嫌そうな声が出ってしまった。

「なによ、その不満そうな声と顔は」

「だってさあ、仮にその内弟子（創多似）が昔の俺みたいの不埒な思考を持たない純真な将棋少年だったとしても、それでも同居には変わりないわけじゃん？」

「そりやそうね、内弟子だもん」

「てことはさ、まず朝起きたら寝起き姿の銀子ちゃんを見られるわけじゃん？ そんなで朝一番に銀子ちゃんの『おはよう』ボイスを聞けるわけじゃん？ 毎朝を銀子ちゃんと一緒に迎えられるわけじゃん？ そんな超ズルくない？」

「ちよつと、気持ち悪いこと言わないでよ」

「でしょ!! 気持ち悪いでしょ!! そうなんだよ気持ち悪いんだよ!!」

「いやそうじゃなくて、あんたの発想が……」

そんなの絶対に気持ち悪いよね。でも駄目なんだよ、内弟子になつて銀子ちゃんと一緒に生活を送つてたら絶対そういう思考になるに決まつてるんだから。

当初その道を志した時にどれだけ純真な将棋少年だったとしても無駄なんだよ。空銀子の魅力に四六時中当てられていたら絶対そういう思考になっちゃうって。

「お出かけする時には手を繋いじやったりして」

「相手は小学校高学年でしょ？ 手を繋ぐような年齢じゃないと思うけど」

「ご飯は毎日銀子ちゃんの手料理が食べられちゃったりして。これは別に羨ましくないけど」

「ぶちころすぞ貴様」

「そんでお風呂の時間には銀子ちゃんから『一緒に入る？』なんて誘われちゃって!! そのまま一緒にお風呂に入っちゃったりして!!」

「んなことするか」

俺は桂香さんにされたんだよ！ 内弟子なりたての六歳の頃だったけどさ!!

「で、夜は銀子ちゃんのおやすみを聞いて就寝するんだ。しかも同じベッドで」

「しないから。同じベッドで眠ったりなんかしないから」

「そんな毎日なわけじゃん？ 毎日が幸せハッピーライフになるわけじゃん？」

銀子ちゃんと共に朝を目覚めて、夜を眠る。空銀子の存在を感じられる毎日がそこに。

そんな俺が欲しいわ。恋人の俺だってそんな特権を享受出来る環境にはないって

いうのに。

それをたかが弟子の分際で。たかが内弟子の分際で。許されていいはずがないではないか。

「大体内弟子の教育にも良くないよ。そんな恵まれた環境に身を置いたら絶対に将棋なんか手に付かなくなるって」

「内弟子制度全否定ね、それ」

「銀子ちゃんが悪いんだよ。銀子ちゃんが将棋と関係ないところで誘惑してくるから……」

「してない。誘惑してない」

首を横に振る銀子ちゃん。その頬はここまでの話のせいかほんのりと色付いちやつている。

かわいいかわいい、ああ可愛い。率直に言つて空銀子先生が可愛すぎるのがいけない。こんな銀子ちゃんの寝顔を見ていいのは俺だけだし、一緒にいていいのも俺だけだ。

「……にしても、八一」

「なんすか」

「……なんか、あんたつて意外と……」

——肝が小さくない？　とでも言いたげな、目。

「そ、そんなことは……ないよ」

「でも、なんか……」

「そんなことはない。無いから」

思わず顔を逸らす俺。

いやいやそんなまさか、そんなことはない、はずなんだ。

でもなんかこうやって、銀子ちゃんが提示する仮定を想像してみると、なんだか……。

……あつれー？

こう考えてみると？　なんか意外と？　許せることが少ない？　みたいな？

あれ？　あれれ？　おかしいぞ？　だって俺はそんな、銀子ちゃんみたいな狭量な性

格じゃないはずなのに……。

「と、とにかく」

「ねえ、あんたって私の事をとやかく言えないんじゃない？」

「とにかく!!　銀子ちゃんが内弟子を取るのには駄目だ。あまりにも危険が多すぎるか

ら」

兎にも角にも、それが結論である事には変わりない。

これは仕方ない事なんだ。日常の何処に危険が潜んでいるか分からないからね。う

んうん。

「……まあ、そうね。あんたの考えは理解した」

「良かった。分かってくれて嬉しいよ」

「でも、それなら内弟子じゃなくて普通の弟子を取るならどうかしら」

「普通の弟子、か。それなら、まあ……」

普通の弟子。同居なんてしない、普通に将棋を教えるだけの関係だったら問題は無いだろう。

……と言いたいが。ここまでの流れを考えると到底そんな気にはならないのが不思議だ。

「それもどうせ創多みたいな小学生男子なんでしょ？」

「そうね。どっかの誰かが小学生女子ばかり弟子にしちゃったから次も当然そうなるわね」

「ははは」

「はははじゃない」

なんかもう分かっちゃったよ。恐らくこれは天衣の事を指しているんだろうね。

そうなるやっぱり問題無く済むはずがない。案の定銀子ちゃん俺の事を軽く睨みながら「なんか最近知ったんだけど」と続けて。

「どうやらそつちの弟子とも色々あつたみたいね、色々」

「いや、別にそんな事は——」

「遊園地デートとか。私が居ない隙に内弟子の真似事をしたりとか、色々」

「……ハハハ」

なんでそれ知つとんですか。あまりにも地獄耳過ぎやしませんか。

「……いい、一応言つておくとですね。それぞれ色々と複雑怪奇な事情がありまして……」
「この際そこはどうでもいいとして。そうなると私が弟子を取つた場合、同じような事が起こる可能性も十分あるつてことよね？」

「……そ、それは」

それを否定する術は、俺には無い。あるはずが無い。

し、しかし。仮に銀子ちゃんと弟子（創多似）がそんな事になつたらと想像すると――

「……えー、死なす……」

「死なす？」

「うん。死なす……」

えだつてなにあいつ弟子の立場を利用して銀子ちゃんとデートしてんの？ 許せんのだが。

てか同居とか。結局それかい。普通の弟子だつて内弟子と変わらないじゃねーか。

「あ、そういえば。去年の夏、あんたと一緒に福井の実家に行った後、私が三段リーグ終盤戦を戦っていた裏でもなんか色々あつたらしいわね」

「それって……」

福井の実家。銀子ちゃんと一緒に行った俺の実家。忘れもしない、あの日に俺達は想いを交わし合つた。

でその後に（主に天衣方面で）あつた事と言えば、多分あれだろう。以前に女王戦を行つた結婚式会場から招待される形で、近かつた俺の誕生日祝いも兼ねてのディナーを食べた。

でそこで色々あつて。……色々あつて？ なにが契機となつたのか、正直今でもよく分からないんだけどふと気が付いた時、俺は天衣とキスをしていた。今でもビツクリな話である。

——つて、キス？

「は？ 絶対に殺すんだが？」

えちよつと待つて、あいつ俺の銀子ちゃんとキスすんの？

弟子の分際で？ 創多の分際で？ そんなんふざけているにも程がある。

「ハ、ハ、ハ、ハ……」

「八一？」

そこまでいったら完全にアウトでしょ。もう死ぬしかないでしょ梶創多。

ていうかその場合はもうしちやった銀子ちゃんもどうなんだって気さえするんだけど。

いやでも待って待て。そもそもあれは俺の意思じゃなくて完全なる不意打ちだったんだよ。

となるとこの場合は銀子ちゃんが悪いんじゃないかって——って、え、不意打ち？

「ふっぎけんな更に罪深いじゃねーか!! ぶっ殺すぞあのクソガキが!!」

「八一、ステイ」

待てが掛かったけど無視だ。こんなの落ち着いていられるか。

俺の銀子ちゃんに不意を突いてキスするなど。もはや死んだって許されるような所業じゃない。

「待っていてくれ銀子ちゃん。今すぐ創多のやつをボコボコの血祭りにあげてくるから」

ガチでボコのボッコボコだ。無論将棋で。——などではなく、純粹暴力で。

所詮あやつは貧弱な小学生だ。18歳の純粹物理パワーには敵うまい。

「なんの慰めにもならないだろうけど、せめてヤツの首を取って君に捧げ——」

「少し落ち着きなさい。勝手な妄想で首を取ったり捧げたりするんじゃないの」

「……ハッ！」

凶行に及びそうになる寸前で目が覚めた。

そうだったよ。これはあくまで妄想、仮定の話だったね。

「はあ……余りにも恐ろしい妄想だった。なんか金属バットを持って創多の家にカチコミをかける自分の姿が見えたよ」

「あんたねえ……まともに喧嘩もしたこと無いくせに何言ってるの」

「したことあるかどうかなんて関係無い。男にはやらなくちやいけない時があるんだ」

「あつそ……」

銀子ちゃんは呆れたような、でも少し照れているような表情で呟いて。

「それで？ 色々と頭の中で想像してみてくれたようだけど、結論は？」

「結論、内弟子も普通の弟子も絶対駄目。もう小学生男子っていう存在自体がNGだった」

今後、創多には銀子ちゃんの一定範囲以内に近づく事を全面的に禁止しよう。今決めた。

いいや創多だけじゃない。鏡州さんも、全員有罪で極刑だって事がハッキリと分かった。

どうやら俺の周囲は罪深い男しかいないようだ。誠に嘆かわしいことである。
……などと、偉そうに他人を批判している場合じゃない。

真に俺が考えなくちゃならない事は、むしろここから先にある。

「それが結論なのね？」

「うん」

「……そう」

覚悟を決めつつ俺が頷くと、銀子ちゃんはふつと優しく微笑んだ。

「それじゃあ八一、ちよつと鏡を持ってきてくれるかしら」

「……うん。……いや、うん。言いたい事は分かっているんだ、ほんとに……」

自分のツラを見てみるって事ですよね。いやもう本当に分かっているんですよこれが。

「そっか、分かってくれたんだ。わざわざこんな回りくどい話をした甲斐があったわね」

「……はい。分かったと言いますか、分からせられたと言いますか……」

「本当は自主的に察して欲しかったんだけど」

「……サーセン」

銀子ちゃんは優しく微笑んだまま、しかしその目の奥が全然笑っていない。

そりゃそうだ、これはちつとも笑える話じゃない。何故かってさっきの話、あれは俺の場合だとあくまで妄想や仮定上の話でしかなかったんだけど。

しかし、そもそもこれは相手の立場に立ってみましようって話なわけで。

つまりは銀子ちゃんの場合は。これが妄想や仮定ではなく現実だったという事で。

つまり……つまり。この話の中で一番罪深いのは誰であろう俺なのである。

「内弟子、駄目よね？」

「……うん」

「普通の弟子だって、駄目よね？」

「……うん」

「編集者と二人きりで旅行も、勿論駄目よね？」

「……うん」

駄目だね。駄目ですね。

なんだか胸が痛い。それに頭をガツーンと殴られたような気分だ。俺の中で長らく必勝戦術だった『将棋だから』という枕詞、それがガラガラと崩れる音が聞こえた。

だって『将棋の師弟だから小学生と同居しても問題無いよね』とか言われても、俺無理だもん。師弟だからって銀子ちゃんと創多が同居するなんて絶対に耐えられない、四六時中不安と嫉妬に駆られて気が狂っちゃよそんなの。

他の例でも然りだ。俺の身に起こった事は立場を入れ替えて銀子ちゃんにも起こり得る、そう考えたらとてもじゃないけど許容なんて出来ない。

「ようやく気付いたよ。俺の思考だって銀子ちゃんと似たようなものだったんだね」
要するに、これは。自分の恋人に対する執着心、独占欲というものだ。

それがあつた事は別に間違つてはいない。ある種正しい事だとも言えるはず、なんだけど。

「……ねえ、銀子ちゃん」

「なに？」

「なんか、俺が言う事じゃないのは百も承知だけど……よく怒らなかつたね、今まで」

この気持ちをどう処理すればいいか分からず、自ら導火線を踏みにいく俺。

むしろ今は怒りたい。目一杯怒られて叱られて地の底に頭を下げた反省したい気分だった。

「どうかしらね。ちよくちよく怒つてきたような気もするけど」

「それは……」

思い返せば——確かに、確かに銀子ちゃんはよく怒つていた。

そもそも昔からキレやすい子だったし、だから事あるごとに怒るのだろうと思つてた。

「けれど……違つたんだね」

しかし、こうしてこの子の立場に立たされてみてよく分かつた。

怒るのには相応の理由がある。それだけのストレスを与えていたということ。

「なんか……ごめん。特に俺があいを内弟子にして以後、近頃の銀子ちゃんって当社比150%増しで凶暴性が増してるよなあ怖いなあとか思ってたごめん」

「……へえ、随分と失礼な事考えてたのね」

「うん、ごめん……。今思うと穏便に済ませてくれてた方だったんだね……」

独占欲とは諸刃の剣だ、それが先程の例だろう。だって俺はそれを少し想像しただけで、胸の内にドス黒い感情が湧くのを抑えられなかったのに。

銀子ちゃんにとってはそれが現実だったんだ。それなのにストレスの張本人たる俺ときたら何にも気付かず呑気にのほほんとしていたのだ、そりゃ苛立つのも当然だろう。

「本当にごめんよ……俺、俺は……」

俺は項垂れるように頭を垂れた。こうなっては銀子ちゃんの顔も見られない。

自分がされて嫌なことを相手にしてはいけない。そんな当たり前の事が出来ていなかった。昔からずっと一緒にいた弟子として不甲斐ないし、恋人としてはあまりにも立つ瀬が無い。

「どうしよう……俺、どうやって償えばいいかな」

「償う？」

「うん。これまでずっと銀子ちゃんの事を苦しめてきたんだ、今更何をしたって罪滅ぼしにならないかもしれないけど、せめて償いを……」

改めて思うと、今こうして銀子ちゃんが俺の隣にいるのが奇跡みたいだ。だって今日までの俺の罪状を見れば、それこそ破局の理由になったっておかしくないぐらいなのに。

だから償いたい。このまま捨て置いてはいけない。すでに犯してしまった罪状を無かった事には出来ないとしても、せめて反省をしている事を態度で示さなくてはならない。

「弟子の事は……この先もう弟子は取らないと誓うよ。すでに弟子になっているあい達を破門にする事は出来ないけど、接触は最低限度にするから、それでどうか……」

「ちよつとあんたね、そんな重要な事を軽はずみに——」

「いいんだよ。それに弟子の事だけじゃない、今後は女性と対局する機会も必要最小限度に抑えるし、それでも許してくれないってんなら、いつそもう女性と会話する事だつて止める！」

勢いで言い切ってしまったが半分以上は本心だった。

今まで積み重ねた分、これぐらいししないと償いにはならない。これまで沢山銀子ちゃんを苦しめてきた分、今後はそうさせまいと誓いたい。

しかし俺のそんな決意とは裏腹に、銀子ちゃんは至つて平然とした様子で口を開く。

「いいわよそんな償いだなんて、今更だし」

「今更なんて事は……それとも、もしかして、償いも許さないぐらい怒つてること？」

「そうじゃなくて。どれも本当に今更だし……それに、さっきの例の中には私達が付き合う前の出来事だつてあるしね。それなら償う云々もないじゃない」

「違うよ、それは……!」

駄目だよそんな、そんなのはいくらなんでも甘すぎる、優しすぎるよ。

だつて俺だつたら。たとえ銀子ちゃんと付き合う前であつても嫌なことは嫌なのに。

「それに……」

すると銀子ちゃんは、その両手をすつと伸ばして。

俯く俺の顔を優しく包み込んで、そつと持ち上げて視線を合わせた。

「それに、将棋だもん」

「え……?」

「そうでしょ?」

そう言つて柔らかに微笑む。

そこにあるのは、俺がこの世界で一番好きだと思ふ表情。

「対局も。弟子も。棋書も。どれも将棋に必要な事だもんね。だから断らなかつたんでしょ？」

だから、許す。銀子ちゃんの目がそう言っている。

けれど——違う、違うんだよ。その枕詞はもう無敵の戦術じゃないんだ。

将棋だから、じゃない。たとえ将棋であつても通用しない事はあるんだよ。

「今の八一の立場を考えれば断れない事の一つや二つぐらいは当然あるでしょうからね。私も棋士だし、そういう事に文句を言うつもりはないの」

「でも……」

「それにね。結果的にそうなる事があつたとしても、あんたが故意に私を傷付ける真似をするような奴じゃないって事ぐらい、私はちゃんと分かつてるから」

「ぎ、銀子ちゃん……」

聞いている内に自然と目頭が熱くなった。

優しい。あまりにも優しい。なんだこれ。こんなにも優しい銀子ちゃんの事を俺はキレやすい子だとか言っていたのか。愚かにも程があるだろ。

ああそうだ、俺は真実愚かなんだ。愚かな俺はこんなにも優しい銀子ちゃんを何度も傷付けてしまったのに。それなのにこの子はそんな俺の事を許容して、許してくれると言う。

「八一のこと、世界で一番よく分かっているのは私なんだから」

「……………うつ、うわぁぁん！ 銀子ちゃん……………！」

我慢の限界だった。

涙腺の決壊と同時に、俺は押し倒すような勢いで銀子ちゃんの身体に抱き付いた。

「や、八一……………！」

「ああああ、銀子ちゃん、銀子ちゃん……………！」

「んっ……………」

ふわりとした感覚が頬に当たる、そのまま力を入れてぎゅつと抱き締める。

とつても華奢な身体だ。この小さな身体の中には優しさが目一杯詰まっているんだ。

「俺、謝りたくて、君の事を散々苦しめてきたのに、それなのに……………」

「いいのよそんな事は。さつきも言ったけど、全部将棋に絡んだ事だからね。そういう

事はこれから先だって沢山あるだろうし、その度に謝っていたらキリないじゃないの」

「そんな……………でもそれじゃ、それこそこの先何度も銀子ちゃんを苦しめてしまう事に

……………」

「いいのよ。八一、あなたは棋士なんだから」

「銀子ちゃん……………！」

優しさだ、優しみの塊がここにある。

これが理解ある優しい彼女なのか。ありのままの俺を受け入れてくれる全肯定銀子ちゃんだ。

「俺は……俺は駄目な男なのに、なのに……！」

「八一は駄目なんかじゃないよ。八一は生きているだけでえらいんだから」

「銀子ちゃん……！」

「だからね、これから先も弟子を取ったっていいし、新しい棋書を書いたっていいの。勿論女性との対局だって。八一は棋士だもんね」

「銀子ちゃん……でも俺……すっごい情けない事言うようだけど、俺は……！」

「さっきしてみた想像みたいに、私が小学生男子の内弟子を取ったりするのはイヤ？」

「……………」

言葉には出せず、頷く事しか出来なかった。

あまりにも情けない話だつて分かつてる、それでも嫌なものは嫌なんだ。

特に内弟子とか、二人だけでの旅行とかはキツイ。俺が手出し出来ない所で、銀子ちゃんに危険が及びそうな状況を作る事がどうしても許容出来ない。それがたとえ将棋に絡む事だとしても。

「八一はわがままねえ」

「ごめん……本当にごめん……！」

「どれもこれも今のところ予定は無いんだけど……でも、そうね、分かった」

俺の独占欲に満ちた我が儘を聞いて、それでも世界一優しい俺の恋人は、言う。

「八一がそこまで嫌がるなら私は小学生男子の弟子は取らないし、内弟子も取らない。それに棋書も書かないし、当然だけど男の人と一緒に旅行なんてしないから」

「……本当に？」

「うん」

銀子ちゃんはすんなりと頷いた。俺の我が儘を全て受け入れてくれた。

うう……全肯定銀子ちゃん……やさしい……すき……俺の恋人が天使に見えるよお……。

「私は八一が苦しんだり、嫌な気持ちになったりするような事はしないからね」

「銀子ちゃん……」

「けど八一はいいのよ、私は八一に我慢させたくないから。だから弟子も、棋書も、対局も、どれも将棋に必要なことは自由にしていいからね」

「ぎ、銀子ちゃん……!」

ああもう駄目だ、俺もう駄目だよ。

銀子ちゃんが愛おしくて仕方が無い。もうこのままずっと一緒にいたいよ。

弟子の件だって俺と銀子ちゃんがずっと一緒にいればいいんだ。たとえ内弟子だろ

うとも、二人きりじゃなくて俺も一緒に住んでしまえば何も問題は無いんだ。

「そうだそうしよう。もう銀子ちゃんと離れないぞ。優しみ溢れる天使とずっと一緒に——」

「でも」

とそこで——ポツリと。

「会話は」

「……ん？」

「女性との会話は……どうかな」

毒を垂らすように一滴。俺を抱き締めたまま、銀子ちゃんが。

「弟子も、棋書も、対局も、八一みたいに立派な棋士には全部必要な事だね？」

「うん」

「でも、女性との会話はどうかしら。それは必ずしも必要とは言えないんじゃない？
……うん？ どういうことだろう？」

女性と会話するのは、必ずしも必要では……無い、の、かな？

「だってほら、今より一昔前だと将棋って完全に男の世界だったわけでしょ？」

「ああ、確かに。そう言われてみれば、そうかも」

「ね？」

「銀子ちゃんの言う通り、今より一昔前だと将棋というのはほぼ完全に男の世界だった。」

その当時の棋士で、仮に生涯独身だったとしたら女性とは全く会話する機会が無かった人だっていただろう。それでも棋士として成り立っていたのだから、棋士にとって女性との会話は必ずしも必要なものではないと言える。

「だったら、禁止しても問題ないんじゃないかなって」

「禁止……」

「その代わりに私は小学生男子の弟子は絶対に取らないから。それなら平等でしょ？」

確かに。それなら平等だ。

「私に償う気持ち、あるのよね？」

「ある！」

「だったら、どうすればいいの分かるよね？」

囁くように、甘い。銀子ちゃんの甘い甘い声ですぐ耳元から聞こえてくる。

その甘さが俺の脳を完全に溶かしきるまでもなく、もうすでに結論は出ていた。

「分かった、分かったよ、銀子ちゃん!!」

「分かった？」

「うん！俺もう金輪際、銀子ちゃん以外の女性とは一切会話しない!!」

俺は顔を上げてそう宣言した。

するとそこには、全てを蕩けさせる銀子ちゃんの花咲くような笑顔があった。

「正解♡ 良く出来ました、分かってくれて嬉しいな♡」

そして銀子ちゃんの手が。俺の頭を抱えたままヨシヨシと愛でるように撫でてくれた。

ああ、やさしいやさしい……慈愛の女神……大好き……。

「ふふっ、八一はとつてもいい子だね、大好きだよ♡」

「うう……俺も、俺も大好きだよお、銀子ちゃあん……い！」

ああ良かった。間違つてばかりだった俺でも正解を選べたんだ。

もうそれだけで十分だ。俺は俺だけの全肯定銀子ちゃんをぎゅつと抱き締めた。

こうして——俺と銀子ちゃんの間で浮気のラインが決定した。

二度と銀子ちゃんを苦しめたりしないように、今後は銀子ちゃん以外の女性とは一切会話しない。

この日、俺はそう心に固く誓ったのだった。

……そして後日、この日の会話を思い出して。

ああ銀子ちゃんは最初から本気だったんだなあ、その言葉の真意を知るのだった。

短編 天地創造宇宙開闢空銀子

好きな人と会う事が出来ない、という状況。

これは多かれ少なかれストレスの原因になるなあ、と最近の俺は強く実感している。

「へえ、好きな人？」

「うん」

そう、好きな人。

俺の大切な恋人、空銀子。銀子ちゃん。

今ここに銀子ちゃんはいない。ある日突然いなくなってしまったんだ。俺の隣から。

「それから一度も会っていないの？」

「うん……」

去年の暮れ頃のこと、公に休養宣言を残してそのまま彼女は消息を絶った。

そして今に至る。それが世間一般の知る空銀子の現状だろうが、銀子ちゃんの恋人で

ある俺でも実情としては世間一般と大差無かったりする。

要するに突然の休養宣言の真相とか、体調不良が原因らしいが実際のところはどうなのかとか、一番気になるであろう復帰の目途とか、そういった事は俺も何一つ聞かされていない。

「それ、あんたは気にならないの？」

「そりや気になるよ。気になるけどさ……」

さすがに誰も知らないという事は無く、桂香さんや師匠はある程度事情を知っているうだった。

だから知る方法がない訳じゃなかった。俺が本気で知りたいと望めば強引にでも聞き出す方法はあったんだろうけど……でも、そうはしなかった。

だって、銀子ちゃんは必ず帰ってくるから。

そうと心に固く刻んで、俺はあの子の帰りを待つことにしたんだ。

……が。

「……あー、会いたいなあ、銀子ちゃんに」

ぼつりと零れた本音。

弱音にも聞こえるそれを聞き逃がしてはくれなかったのか、すぐに反応が。

「会いたいんだ？」

「そりや会いたいよ……会いたいに決まってるでしょ」

会いたい。そう、会いたいんだ。

俺は銀子ちゃんに会いたい。もう切実に会いたいよ、本当に。

待つと心に誓ったけど、それで会いたいという気持ちまでもが無くなる訳じゃないんだ。

だって俺と銀子ちゃんは恋人同士なんだから。

そうでなくとも、幼い頃からずっと一緒にいた相手なんだから。

「ていうかね、そんなに会いたいんだったら会いに行けばいいじゃないの」

「いやあ……そういう訳にもいかないよ。相応の事情があつての事だろうし」

もう何度も自問自答した回答、俺は自分を納得させるように呟いた。

今、会いに行くのは最善手ではない。以前に桂香さんからは時間が必要だと言われた、暗に今は会うなど言われているようなものだ。

当時は苦々しく飲み込んだ理屈も今なら一応理解は出来る。だって突然連絡も無しに消息不明になるなんて普通じゃない。普通じゃない事が起こったんだから、そこには普通じゃない理由があるのだろう。

「それに会いに行くつたつてさ、そもそも銀子ちゃんが何処にいるのかだつて俺は知らないし」

「でも……向こうだつてあんたと会いたがつているかもしれないじゃない」

「銀子ちゃんか？ それは……どうだろうね」

たとえ離れ離れになっていようとも、想いは同じだといいな、とは思う。

俺と会えないこの状況に、銀子ちゃんも寂しいと感じていて欲しい。とは思うけど。

しかし、じゃあ実際に会いたがっているのか——って考えると、それはなんだか違う気がする。

「違うの？ 恋人と会えるんだから嬉しいんじゃないの？」

「いやそりゃね、きつと内心喜んでくれるとは思うんだよ。でもあの子ってプライドが高い子だからさ、自分で一度決めた事を途中で反故にしたくないと思うんだよね」

銀子ちゃんは自ら離れる決意をした。さつきも言ったけどそれには相当な理由があるはずで、その理由が解消されていないからこそ彼女はまだ帰ってきていないと考えるべきだろう。

となると今はまだ会うべきではないという事であって、そんな状態にもかかわらずあの子が俺と会う事を望んでいるのかというのは甚だ疑問だ。

「それにさ、一度会って解消する寂しさなんてのはきつと一時のもので、またすぐ寂しくなって会いたくなつての繰り返しだよ。それに銀子ちゃんの状態だつて分からないんだ、もしかしたら療養期間内に俺と再会する事が切っ掛けで精神的な負担なんかが増しちゃうかもしれないし」

「ふーん……」

今会えないのならば、会えない理由がある。俺に分かる事はそれぐらいで。だつたら俺がすべき事は。銀子ちゃんを信じてその帰りを待つことだろう。

「だから、待つ。俺は待つって決めたんだ」

「……ほんとに？」

「……うん」

けれども心配そうに尋ねてくる声、俺の脳を揺さぶる。

「……平気そうには見えないけど」

「それは……」

柔らかに響く声。これが本当に難敵だ。

俺の心をいとも容易く解していく、固く誓った決心が揺らぎそうになる。

いやまあそりやね。待つと誓った気持ちは嘘なんかじゃないんだけどさ。

でもこういうのつてさ、結局のところは俺の見栄やプライドみたいなもんじゃん？

そこに本音があるかと言われたら、必ずしもそうじゃないよねつていう。

「だつてえ……そりやあ会いたいじゃん……」

「だーから、そこまで言うならとつとと会いにいけばいいじゃない」

「だから無理だつてえ……でもさーみしい……あーいたーいよお……銀子ちゃん

……」

てかね、待った。待ったから。もう結構待つてるからね。
一ヶ月二ヶ月の話じゃないんだ。待つ期間が長くなればなる程心に積もっていくものがあるんだよ。

だから本音の箱の蓋を開ければこの通り。あーあーあーいたーい。銀子ちゃんに聞いたーい。

建前と本音は違う。ただそれだけの話だ。それに今は本音を隠す必要だってないしね。

「てかさー……会いたいだけならね、まだいいんだけど」

「いいの?」

「いや良くないけど。良くはないんだけどね。でもいいんだ」

会いたい会いたいと本音が叫んでも。

ただ俺だってもう子供じゃない、会えない理由を理解している以上本音を抑える事は出来る。

だから会いたいだけなら。寂しい気持ちと葛藤するだけの日々ならばまだ我慢は出来る。

まだ我慢は出来る……んだけど。

「悪影響っていうのかな……最近はいよいよ実害まで出てきちゃってさ……」

「実害？」

「うん」

実害。

その一つが、これ。

「これって？」

「いやだからさ、それなんだよ。これがもう幻聴なんだよね」

俺は虚空に向けてツツコんだ。

今更言う事でもないが、こんな本音と弱音塗れの話聞かせられる相手なんて一人もいない訳で。

つまりここには誰もいない。俺は一人で、一人つきりでこうも長々と会話をしている訳で。

それは本物ではない偽りの声。俺にだけ聞こえる幻聴。

銀子ちゃんの声がね、聞こえるんだよ。本当に銀子ちゃんの声が聞こえてきちゃうんだよね。

「幻聴、ねえ。そんなに問題なの？」

「そりゃ問題でしょ……だって今の俺って、傍から見たら誰もいないのに一人でぶつぶ

「つ誰かと喋っているヤバい人そのものじゃん……」

脳内銀子ちゃんと会話をしている、とかじゃない。マジでガチで声が聞こえてるからね。だから会話も出来る、俺ぐらいのレベルになると銀子ちゃんの幻聴と会話が出来ちゃうんだよ。

そんな幻聴無視すりゃいいじゃん、って思うだろうけどね。でも大好きな銀子ちゃんボイスで俺に語り掛ける声が聞こえてきたら返事しちゃうでしょそんなの。その結果が冒頭から続く会話という名の独り言である。

「なに？ たとえ幻聴でも私の声が聞けて嬉しくないの？」

「いや嬉しいよ……嬉しいからこそ問題なんだけどね……」

原因はまあ、分かる。去年の暮れからもうずっと銀子ちゃんに会っていないからだろう。

その寂しさに耐えきれず、遂に自らその声を生成して聞く事で幸福感を得るまでになった。どんだけ銀子ちゃんに飢えているんだ俺の脳よ。

「前に将棋盤が目の奥に焼き付いて眠れなくなったりした事とかもあつたけど、あんたって結構精神的な影響が身体に出るわよね」

「あー、あつたあつた、そういや不眠症になつた事もあつたねえ……」

思い返せば不眠に悩んでいたあの時も、銀子ちゃんと一緒なら途端にぐっすりと眠る

事が出来た。

きつと俺の身体はそういうふうになっているんだ。空銀子が特效薬である一方、それが尽きたらたちまちこんな感じになってしまう。

「あの時よりも原因がハッキリしている分、まだマシなんだろうけど……」

幻聴と淀みなく会話をこなしたりと、中々危ない領域に差し掛かってきている俺。

……が、それでもまだ幻聴だけだったら。それならまだ平気というか、まだなんともなるんだよ。

でも最近はまだ幻聴だけじゃ済まなくなってきた。そつちも大きな問題だ。

例えば。ふらつとコンビニにでも出掛けてようとして。

「何を買うの?」

「んー……なんか頭がシャキツとするようなエナジー系飲料でも買おうかなって」

相も変わらず銀子ちゃんの幻聴と会話しながら、ふらふら道を歩いていると。

「八一、もう信号変わってる」

「んー……」

「ちよつと、そんなボーつとしながら歩いてちや危ないわよ」

「んー……なんかさあ、最近ずつとこんな感じで頭が冴えないって……——ツツ

!？」

不意に、それは現れる。

ほんの5m近く、目の先にあつたお店の前。

「ぎ、ぎぎぎ銀子ちゃん!? ど、どうして、こんなところで会えるなんて!!」

いた。そこには銀子ちゃんがいた。

俺が会いたかつた銀子ちゃんが。俺が会いたかつたままの姿でそこに立っていた。

「ああああ銀子ちゃん!! 帰ってきてくれたんだね!!」

もう脇目も降らずに飛び付いた。

俺の心の穴を埋めてくれる唯一の存在、二度と離すまいと強く抱き締めた。

「銀子ちゃん……!! 銀子ちゃん……!!」

「……ねえ、八一……」

「あれ!? でもなんか固い!? どこ触っても銀子ちゃんの身体が固いぞ!?」

「八一、あんたそれ……」

抱き締めた銀子ちゃんの身体が、固い!

どうして!? どこ触っても固い!! 柔らかい部分がどこにもないよ!

「なんで、なんでこんなに身体が固いの!? もしかして銀子ちゃん、入院生活が長引いたせいでおっぱいがなくなっちゃったの!?」

ないの!? おっぱいがないの!?

でもそんな事はどうだっていい!! おっぱいなんか無くたっていいよ!!

「ああもう離さない!! 離さないぞー銀子ちゃん!!」

「…………ちよつと、その人…………」

「…………へ?」

離さないぞー銀子ちゃん!! とか大声で叫んでいたら普通に人を呼ばれた。

そんでお店の責任者らしき方に注意を受けて、正気に戻った俺はぺこぺこ頭を下げた。

「うう…………銀子ちゃん…………絶対いたと思ったのに…………」

「いるわけないでしょ、ばか」

まあ、つまり。これが悪影響の二つ目、幻視である。

ふとした瞬間、視界の中に銀子ちゃんの姿が見える、もうクツキリと見えちゃうんだ本当に。

そして銀子ちゃんに飢え過ぎている俺の脳は不意に現れるそれを幻だと判断出来ない。そのせいで白昼堂々奇行に走る九頭竜八一竜王という将棋界にとって不名誉なエピソードが一つ加わってしまった。

ちなみに俺が銀子ちゃんだと見間違えたのは不二家の前に置いてあるぺこちゃん人

形だった。通りで銀子ちゃんの身体が固いはずである。

「あんたねえ……置物と私を見間違えるなんて頭おかしいんじゃないの?」

「だって……だってえ……」

幻聴に叱られる。それでも銀子ちゃんの声だと思おうと嬉しいなあと感じちゃう俺。頭おかしい、実際もうその通りなんだと思う。自分でもそう思うもんホントに。

「ああ……銀子ちゃん……会いたい……」

「八」……」

幻聴と幻視。それが今、俺の脳みそと身体を確実に蝕んでいる。

これはもう病気と呼んでも差し支えない。今の俺は、途轍もなく深刻な銀子ちゃん欠乏症なんだ。

「こういう時は……」

「こういう時は?」

「……寝よう」

こういう時は寝る。とつと眠ってしまふに限る。

コンビニにも寄らずに帰宅して早々、俺は身支度もそぞろにベッドに潜り込んだ。

「こんな時間から眠ったら生活リズムが狂っちゃうわよ」

「いいんだよ。起きていたって今日はもう何も手に付かなさそうだし、生活リズムなんてとつくに狂ってるようなもんだし」

睡眠、睡眠だ。安らかな睡眠こそが今の俺を癒してくれる。

特に最近の俺は銀子ちゃん欠乏症による悪影響に苛む一方で、身体が銀子ちゃん不足を少しでも補おうとする為か、就寝時にはほぼ必ずと言っていいほど銀子ちゃんが登場する夢を見る。

それで目を覚ました時に「ああやつぱり夢だったか」とガツカリする所までがセットではあるものの、それでも夢の中でなら銀子ちゃんと会う事が出来るのである。

「夢の中にしか癒しが無いだなんて……八一、可哀想に……」

「そう思うんだったら帰ってきてよお……マジでさあ……」

こうして銀子ちゃんの幻聴があれば、一緒に眠っているような気分になれるし。

それで銀子ちゃんの夢を見られたらさ、もう十分幸せを感じられるでしょ？

「……今日も銀子ちゃんに会えますように……」

——将棋の神様よ。どうかどうかお願いします。

——今日もこの俺に、愛しの空銀子ちゃんと会える夢を見させて下さいな。

そんな事を考えながら、俺は眠りについた。



「……んー……」

そして、ふと気が付くと。

「……んあ？ あれ？ なにこれ？」

なんか真つ白い世界にいた。

一面真つ白い視界が遠くまで開けていて、その奥はどこまでも続いているように見える。

そして足元は地面の代わりにふわふわとした綿、てか雲。なんか雲の上にいるみたいな感じだ。

「……ははあん、分かったぞ。さてはこれ夢だな？」

夢か。あるいは天国かのどちらかだろうと俺は早々に結論付けた。

雲の上にある真つ白い世界。小さな子供が想像する天国ってこんな感じかもなあと思ふ。

で、そんな天国に俺がいる、そういう夢。自らが夢を見ていると夢の中で気付く夢、こ

れがいわゆる明晰夢というやつだろうか。

「そう言えば明晰夢ってさ、なんか夢の内容を自分でコントロール出来るとかって聞くよね」

経験した事はないけど聞いた事はある。自分の想像通りにコントロール出来る夢、それは今の俺にとっては喉から手が出る程欲しいものだ。

そりゃ夢つてのは睡眠中に俺の脳が作り出ししている映像な訳で、だったら自分でコントロール出来るつても無理屈は通る。けれども実際にそんな事が可能なのだろうか。ちよつと試してみようか。

「おーい、銀子ちゃん」

という事で、試しに銀子ちゃんの名前を呼んでみた。

「銀子ちゃんに会いたいよー。隠れてないで出てきておくれー」

せめて夢の中ぐらい会わせてくれたっていいじゃないか。

そんな事を考えながら俺は銀子ちゃんの名を呼び続けた。すると――

「――まよえるこひつじよ」

「えっ?」

突如、そんな声が聞こえた。

あれ、でもなんか今の声って、なんか聞き覚えがあるような。

とか思っていたら、すぐ目の前。それまで何も無かった場所に突然それが現れていた。

「——ぎ、銀子ちゃん!？」

「ん」

そう。そこにいたのは銀子ちゃんだった。

いいや違う。これは銀子ちゃんではない。銀子ちゃんんだけど銀子ちゃんじゃなくて。

俺が知っている銀子ちゃんよりも遥かに背丈が低くて、遥かに幼い容姿のこの子は――

――

「……………、子供の頃の、銀子ちゃん、だね?」

「……………」

そこにいたのは幼女、正真正銘完全無欠な幼女だった。

てかこの子の年齢も分かる。きつと四歳だろう。だって俺と初めて出会った時が四歳だから。

要するにここにいるのは幼女だった頃の銀子ちゃん、言わば幼女銀子ちゃんである。

「……………むう」

と唸る幼女銀子ちゃん。可愛い。

あれ、なんだこれ。可愛い。あれあれ、なんかすごい可愛いんだけど。

ちっちゃくて幼女で超かわいい。子供の頃の銀子ちゃんってこんなに可愛いかったっけ？

「ど、どこからどう見ても究極的に可愛いのだが……ッ！　まさしく奇跡の幼女……！」
幼女可愛い、可愛すぎか幼女。ああなんか駄目だ。今は銀子ちゃん成分が欠乏しているせいもあってかとにかく可愛く見えてしまう。

そんな幼女銀子ちゃんだけど、容姿は俺が知っているままだけど服装がちよつと違って、洋服ではなく白地を基調とした薄地の着物みたいな服を着ている。

それで片方の手には木製の杖みたいなものを持っていて、その足元にはなんと雲がふわふわした雲の上に乗っかっている。なんか仙人とか、三蔵法師とかのコスプレをしているみたいな感じだ。

「とにかく銀子ちゃんは小っちゃくても可愛いなあ。欲しいなあこれ、欲しいな欲しいな——！」

「……む——」

どうにかしてこの幼女を現実世界に持って帰って愛でる方法は無いのだろうか。

などど考えていると……。

「ちがう」

「え？」

すると幼女銀子ちゃんは。

その可愛らしいお顔をふるふると左右に振って。

「わたしはぎんこではない」

「え？」

私は銀子ではない？

いやでも、銀子ではないって、そんな事言われても……ねえ？

「銀子ちゃん、だよな？」

「ちがう」

「ええー、うっそだー」

「うそじゃないもん」

「でもでも、どこからどう見たって子供の頃の銀子ちゃんじゃ……」

そのキュート過ぎるお顔も。綺麗な銀髪も。遥か昔に聞き覚えのある声も。

まるで天使と見紛うようなこの幼女が銀子ちゃんじゃなくてなんだと言うのか。何

故か仙人みたいな恰好をしている所を除けば、今でも鮮明に覚えているあの頃の銀子

ちゃんのままだってのに。

「ちがうもん」

それでもこの子は。

自分は銀子じゃないと主張するその子は、もう一度その首を振って。

そして、言った。

「わたしは……かみ」

「神!？」

それは衝撃の告白だった。

かみ!?! 神!?! 神様なのかこの子は!?!

「いや、え、神ってなに!?!」

「かみはかみ。それだけ」

「いやそれだけじゃ分からないよ! 一体神ってどういう……」

まさかの事実。子供の頃から一緒にいたこの幼女の正体は神様だったというのか。

そりゃ幼女の銀子ちゃんは神憑りの可愛いつて話には同歩だけど、それにしたって

「……て、あ、まさか将棋の神様ってこと?」

直感でピンと来た。もしかしてそういう事だろうか。

そういえば寝る前、夢の中で銀子ちゃんと会えるようにと将棋の神様をお願いしたん

だった。

だからこうなったのか。将棋の神様が俺の願いを叶えてくれた、それでまさか銀子ちゃんも幼女でしかも将棋の神様そのものになって現れるってのはビックリだけど、それでも概ね俺が願った通りの夢になっている。

「ちがう」

「え？」

「しよぎの、とかじゃなくて、あらゆるかみ」

「あらゆる神!」

あらゆる神ってなに!? もしかして創造神とかそういう系のアレですか!?

なんてこった。まさかこの世界は唯一神幼女銀子が創り出した一神教の世界だったのか。

「あ、あらゆる神……」

「そう。わたしはかみ、ゆいいつにしてすうこうな存在。すごいえらい」

「……そ、そっか。君がこの世界の……あらゆる神様なんだね？」

「ん。りかいした？」

「……うん」

流されるままに頷いた俺。……けどまあ一応理解はしたよ。

というか、ほら、ね。要するに、これは俺の深層意識みたいなもんが作った夢だからね。

夢に整合性なんかを求めてはいけない。そりや夢なんだからなんでもアリでこんな突拍子も無い展開にもなる、少女銀子ちゃんが神様になる事だつてあり得るだろうさ。

「そつか、神様かあ……この世界を作つた神様がこんな可愛い銀子ちゃんだとは知らなかつたよ」

「だからぎんこじゃないつて」

「うんうん、そうだねそうだね」

たとえこの銀子ちゃんがあらゆる神様であつても、この子がめちゃんこ可愛いことには変わりない。

なので俺は少女銀子ちゃん（神）の頭に手を伸ばして、なでなで。なーでなで。

「むあ」

「なーでなで。なーでなで。ああもう本当にちっちゃくてかわいいなー」

「んにゅ、あたまをなでるでない」

「かわいいなーかわいいなー、なんかもう食べちゃいたくなる可愛さだなー」

「わたしはかみ、ゆいいつにしてすうこうな存在。たべちゃだめ」

「どうやら食べては駄目らしい。とても残念である。」

「そんなことよりも、やいちよ」

すると幼女銀子ちゃん（神）の透き通った瞳が、俺を真っ直ぐに見つめて。

「やいちよ。わたしはおまえを見ていた」

「見ていた？」

「ん。そしてそのなげきを聞いていた。ぎんこに会えなくてさみしいのだろう」

「え、えつと、それは……うん」

素直に頷く俺。不思議と誤魔化すような気分にならなかった。

なんか神様に懺悔している気分……にはならないけど、とにかくこの幼女銀子ちゃん（神）は今の俺の事情を分かっているようだった。

「ずっと見てたけど、なんかかわいそうだった」

「そ、そつすか？」

「うん。ということ、じひをあげる」

「じ、慈悲？」

「ん。わたしはかみだから」

こくりと頷く幼女神様。どうやらこの子は可哀想な俺に慈悲を齎す為に現れたらしい。

え、なんかすごい優しい。こんな神様なら速攻で惚れちやいそうなんだけど。

「やいちはぎんこがないからさみしいんでしょ？」

「うん」

「だから、ぎんこをあげる」

「ええ!？」

思わず飛び上がったしまった。

それぐらい魅力的なワードが聞こえた。だ、だって——銀子ちゃんを!？」

「く、くれるの!？」 銀子ちゃんを!？」

「ん。好きなぎんこをあげる」

「す、好きな銀子ちゃんを!？」

も、貰っちゃっていいんですか!？ 俺の好きな銀子ちゃんを!？」

そんな夢みたいな話があつていいのか。大盤振る舞いにも程があるのでは。

「どれがほしいの?？」

「え、いやでも、どれって言われても……銀子ちゃんは銀子ちゃんだし……」

「どれでも好きなのをえらばいい。たとえば……」

言いながら幼女銀子ちゃん（神）は。その手に持つ杖を高々と上に掲げて。

「いでよー」

と唱えたその瞬間——

ポンっ！ と何かが軽快に弾けるような音が鳴って。

「……………」

すると——そこには。

「……………ん、あれ……………」

見覚えのある人影、自然と吐き出す声が震えた。

「——ぎ、銀子ちゃん、が……………」

いた。そこにいた。

俺がずっと会いたかった相手が。脳が異常を来して幻聴や幻視を見せてしまう程の相手が。

そこには俺が良く知っている姿そのままの銀子ちゃんがいた。

「か、かか、神様、これは……………」

「ぎんこ。これは16歳と2か月ぐらいのそらぎんこ。いちばんプレーンなやつ」

16歳と2か月。銀子ちゃんの誕生日は9月9日で、今年で17歳になる。

となるとこの銀子ちゃんは去年の11月頃の銀子ちゃんという事になる。要するに俺と付き合い始めたあの頃の銀子ちゃん、音信不通となる少し前、俺の記憶に一番色濃く残っている銀子ちゃんという事だ。

「——ぎ、銀子ちゃん!!」

「わっ！　ちょよ、ちょつと八一、いきなりなにを……」

気付けば勝手に身体が動いて勝手に抱き締めていた。

離れ離れになる前、最後にこうしたのはいつだったかもう分からない。体感ではそれぐらい長く感じるぐらい俺は銀子ちゃんの温もりを忘れていた。

それが今、こうして確実に伝わってくる。欲しい。俺はこれがずっと欲しかったんだ。

「……銀子ちゃん……」

「……もう、どうしたってのよ……」

銀子ちゃんがいる。すごい、まさに神の奇跡だ。

「え、てか、神様あの、これ、本当に貰っちゃっていいんですか!？」

「ん。いいけど」

「でも……お高いんでしょう?」

「ただ」

「タダ!？」

タダで?!　無料で銀子ちゃんを一体プレゼント!?

そんなログインボーナスみたいな太っ腹な話がこの世にあつていいのだろうか。

「銀子ちゃんがタダ……無料銀子ちゃん……」

「……なんかよく分からないけど、その言い方はちよつと引つ掛かるんだけど」

「無料銀子ちゃん……無料っていいよね……」

「だからあ……」

よく分からない状況に戸惑っているであろう無料銀子ちゃん、可愛い。欲しい。

この子を持つて帰る事が出来ればもう安心、悪影響を及ぼす禁断症状も落ち着くだろう。

「じゃあやいち、そのぎんこでいいの?」

「と、言いますと……?」

「そのぎんこでいいならいいけど、べつのぎんこでもいい。すきなぎんこをあげると言った」

「てことは……もしかして、プレーンじゃない色々な銀子ちゃんをオーダー出来たり?」

「ん。わたしはなんでもできる。あらゆるかみだから」

どうやらなんでも出来るらしい。あらゆる神たる幼女銀子ちゃん、すごい……。

しかしそうなると途端に欲が湧いてくる。俺は一旦16歳と2か月のプレーン銀子ちゃんから離れると、そそくさと神様の耳元に近寄って。

「じゃ、じゃあ例えば……ごによごによ、な時の銀子ちゃんとかを注文しても?」

「むろん。そんなの造作もない」

そう言つて幼女銀子ちゃんは、もう一度その手に持つ杖を上に掲げて。

「いでよー」

と唱えたその瞬間――

ポンッ！ と何かが軽快に弾けるような音が鳴つて。

「……………う、うう……………」

すると――そこには。

「くう……………こんな格好……………屈辱……………」

「こ、これは……………」

そこにいたのは、銀子ちゃん。

しかしその恰好は。先程のプレーン銀子ちゃんが着ていた学校指定制服ではなくて。

「これは……………デ、デンジャラス……………」

それはあまりにもデンジャラスな恰好だった。

布面積をギリギリまで削減した信頼仕様の装い、野性味あふれる耳と尻尾。

それはまごうことなき獣、獣である。かつてこの世に一度だけ現れたというデンジャ

ラスビースト銀子ちゃんがここに再臨していた。

「は、恥ずか、恥ずかしすぎ……………ッ！」

「凄いです、神様……………本当にどんな銀子ちゃんでもオツケーなんですネ」

いのかもしれないね。

「じゃあめっちゃ言う！　好き！　俺は銀子ちゃんが好き！　銀子ちゃんと結婚したいよー！」

「にや、にやにや……は、はひや、はにやあ……」

限界まで茹だつた後くつたりしちやつたデンジャラス銀子ちゃん。

とつても初心である。このまま好き好き言い続けるだけで気絶しちやいそうなどころも可愛い、この銀子ちゃん（15歳と4か月）は初心でデンジャラスな生き物なのである。

「じゃあやいち、このぎんこにする？」

「……い、いやしかし……最終決定にはもう少し判断材料が欲しいところですね……」

「そう。じゃあちがうぎんこにする？」

「そうですね、それじゃあ次は……」

プレーンも良いけど、デンジャラスも捨てがたい。しかしそれ以外だつてどうか？

他の銀子ちゃんだつて魅力一杯だし、なによりこんな絶好機を逃す手は無い。俺は神様に色々な銀子ちゃんを注文してみる事にした。

「じゃあ次は、中学時代の黒セーラー服を着ている銀子ちゃんです！」

「ん。ちゆうがくせい、くろせーらー」

「その次は、優雅に着物を着ている銀子ちゃんで！」

「ん。きものきてる、なんかの対局のとき」

「その次は、水着を着ている銀子ちゃんで！」

「ん。がっこうしていのやつにしてみた」

すると次々に黒セーラー服とか、着物とか、スク水とか。

「八一？ なんなのこれ？」

「ちよつと、私これから対局なんだけど」

「……つ、なんで八一の前でこんな格好を……」

「お、おお……銀子ちゃんがいつぱい……まさに理想郷……！」

俺のオーダー通りに次々に現れた銀子ちゃんがずらりと。

どれも可愛い、これを眺めているだけでも目の保養になる。なんか地引網みたいなのをバツとぶん投げてここにいる全員を捕獲したい気分だ。

「じゃあ次は……銀子ちゃんが小学生の頃で」

「ん」

「俺にラブラブで、毎日のように好き好きだーい好きって言った頃の銀子ちゃんで！」

「ん、わかった。しょうがくせいで、やいちにラブラブすきすき言ってたころ」

そう言つて少女銀子ちゃん（神）は、もう一度その手に持つ杖を上に掲げて。

「……うん？」

とそこでもてりと可愛らしく小首を傾げた。

「そんなぎんこ、いたっけ？」

「いましたよ!! 絶対いました!! 俺はちゃんと覚えてます!!!」

「んー……そうだっけ？」

むーん、とした顔でしばし悩んでいた幼女銀子ちゃん（神）だったが。

「……ま、いいや」

と軽く流して「いでよー」と唱えた。

すると――

「……八一」

そこにいたのは、その声は。

先程までの銀子ちゃん達よりもちよつとだけ幼い姿、幼い声。

「……やいちい」

「おお、小学生時代の銀子ちゃんだ。それに……」

「やいちい……すき♡ すきすき♡」

「本当に好き好き言ってる！ すごい！ 完璧だ！」

夢にまで見た小学生時代から俺にラブラブの銀子ちゃん、ここに誕生である。

空銀子というただでさえ可愛い女の子が、小学生というただでさえ可愛い存在になって。それで小学生時代には聞いた事も無い「すき♡」を連発してくるっていうね。

こんな奇跡的な存在だっけ呼び出す事だっけ出来るんだよ。そう、あらゆる神様ならね。

「やいちい♡ すーき♡」

「銀子ちゃん！ 俺も好きだよ！」

「やいちい……♡ 嬉しい……♡」

朱に染まった頬を両手で押さえて嬉しがるラブラブ小学生銀子ちゃん。

か、可愛すぎる……こんな銀子ちゃんと一緒にラブラブな小学生時代を送りたかったよマジで。

「神様、銀子ちゃんが大変に可愛いです」

「そう。で、どのぎんこにするのか、決まった？」

どの銀子ちゃんにするのか。神様がこちらを見ながら問い掛けてくる。

そう、俺がこの中から選べるのはただ一人。好きな一人だけを選ばなくてはならない。

「それは……」

プレイン銀子ちゃんも、デンジャラスや各種コスプレ銀子ちゃんもラブラブ小学生銀

子ちゃんも。

どの子も皆素晴らしく可愛くて甲乙付け難いというのが本音なのだが……。

「……はい。決めました」

それでも、一人を選ばなくてはならない。

それならば。ここで俺が選ぶのは――

「俺が欲しいのは……神様!! あなたです!」

「えっ」

これだ! これしかない!

狙うは一番小さい幼女一つ。選んだ俺はこの小さな神様に飛び付いた。

「幼女銀子ちゃん、好きだよー!」

「わっ! かみに、なにをする……!」

そして見事に捕獲成功。

俺の腕の中に幼女銀子ちゃんが。やべえなにこれ、めっちゃ小さくて可愛いんだけど。

「神様! 俺は神様が一番好きです!! 最高に可愛いよお幼女銀子ちゃーん!!」

「な、ならぬ、ならぬ。かみにけそうをしては、ならぬ」

「いやだ!! 俺は神様が好きだ!! 幼女な銀子ちゃんが欲しいよー!!!」

「な、ならぬ、ならぬ……」

俺の腕の中でばたばたと暴れる幼女銀子ちゃん（神）、とっても可愛い。

絶対これが欲しい。もうこれに決めた。ほつぺたにチューしちやおう。ちゅー。

「ちゅー」

「わっ、わわわ、ちゅ、ちゅーしちや、だめ……」

神様のほつぺた、柔らかい。幼女銀子ちゃん、可愛い。

「やあ、やいち、やめ……」

「ああ可愛い可愛いかわいいよお……神様が一番キュートで可愛いよお……」

「だ、だめ。だめだめ、かみにけそうしちや、だめなの……」

このまま持って帰って神棚に飾ろうね。そして毎日めっちゃ可愛がろう。

そうすれば俺は生きていける。銀子ちゃんがない圧倒的寂しさを埋められるだろう。

「むう……」

とか考えていたら。

次第に不機嫌になってきた幼女銀子ちゃん（神）はむーつとほつぺたを膨らませて。

「……てんぱつ」

俺に捕獲されたまま、その手に持つ杖を上に掲げた。

「ギャー……！！」

すると天罰が。

空から降り注いだ神の雷に撃たれて、俺は死んだ。

「……はッ！」

そして、目が覚めた。

「……ゆ、夢？」

いない。逃がさないようガツチリこの腕で捕獲したはずの幼女銀子ちゃんがない。

それどころかここは。天国などではなくて何の変哲もない俺の部屋のベッドの上。

「……ああ、夢か……いやそりゃ夢だよな……」

どうやら先程のは夢だったらしい。

いや分かっていたんだけどね？ 最初にすぐ明晰夢かかって思ってたし。

「にしても……あゝ……」

夢の中とはいえ、神様の天罰を受けて目覚めた俺の全身はもう汗でびっしょり。心臓の鼓動も激しくなったまま治まらない。身体を起こした俺は深く息を吐いた。

「……や、ヤバイ」

脳裏には。さつき見た夢の内容がこれでもかと焼き付いている。

だつて銀子ちゃんが。銀子ちゃんが一杯いて……それで、よ、幼女が、幼女が。

「……夢の中とはいえ、俺……幼女の銀子ちゃんに襲い掛かっちゃったよ……」

これはヤバイ。極めてヤバイ。これだけは本当にヤバイ。

幼女をお持ち帰りしようとしてしまった。幼女を押し倒してほつぺたにチューしてしまった。

これではロリコンの誹りを免れない。ていうか幼女銀子ちゃんなんて四歳なのに。他にも沢山選択肢があつた上で、それで幼女に襲い掛かったというのがヤバさを際立てている。

「……よ、ようじよ」

幼女は幼女。幼女に手を出すなんて以ての外である。

これまで幾度となく小学生相手との関係を危ぶまれてきた俺でも、さすがに4歳の幼女を相手してそういう目で見られた事は無い。

ないはずなのに……でも、幼女が幼女で……十年以上ぶりに目の当たりにした幼女銀

子ちゃん、もう激烈に可愛くて……銀子ちゃんが、銀子ちゃんががが。

「……駄目だ。もう限界だ」

小学生ならまだしも、さすがに相手が幼女となると笑い話では済ませられない。

だからこれはもう限界なのだと、変な見栄を張るような余地も無く自然とそう納得した。

九頭竜八一はもう限界にきている。幻聴と幻視に加えて冷静な判断力も消失している。だから血迷って幼女に襲い掛かってしまったのだと、そう思わなくちゃやってられない。

「……さすがにこれは駄目だ。もう本物の銀子ちゃんに会わなきゃだめだ」

これ以上虚勢を張ったり、ちっぽけなプライドを守っている場合じゃない。

せめて一度、一度だけでも本物の銀子ちゃんに会って、銀子ちゃんエナジーを摂取しないと。

じゃないともう駄目だ。これ以上精神に負荷を掛けては本当に致命的な過ちを犯しかねない。次の過ちは「ああこれ夢で良かったー」じゃ済まない可能性が大いにある。

というか。もしかしたらさっきの夢は、俺の身体が警鐘を鳴らしてくれたのかもしれないね。

ここが限界だって、これ以上我慢し続けては危険だって、それを俺に教える為にあの

小さな神様は現れてくれたのかもしれない。うん、きつとそうだ。

つまりこれは神の導き、神託というやつだ。あーでも本当に幼女銀子ちゃん可愛かったなーもつと一緒に居たかったなー、じゃないじゃない。冷静になれ俺。冷静になつて……えつと、まずは、早急にギブアップ宣言を。

「……あ、もしもし、桂香さん……」

俺は目を覚まして早々、スマホの発信ボタンをタップしたのだった。

短編 可愛い頃の空銀子

「ねえねえ銀子ちゃん見て見てこれ！ ほらこれ、俺達の昔のアルバムだよー」

とか、八一が言ってきたのが先程の事で。

「いやー、この前ちよつとした用事で師匠の家にお邪魔してさー。この家にも久しぶりに来たなー懐かしいなーとか思っていたら偶々これが目に入っちゃって、そしたらなんだか無性に過去を懐かしみたくなっちゃったもんで借りてきたんだよね」

とか言いながら、師匠の家から借りてきたらしい分厚いアルバムを開いたのがついでさつきの事。

「おお、綺麗に整理されているね……こういうところマメだなあ。てかこの頃の師匠と桂香さん、若いなー。これって何年前ぐらいの写真だろ」

とか言いながら、最初の方のページをパラパラとめくり進めて。

そして、真ん中辺りのページに差し掛かった頃。

「か……カワイイツ!!」

そこにいた銀髪幼女を目にして、悶絶し始めたのが今しがたの事である。

アルバム。アルバムとは、写真などを整理して保存する為の冊子。

そこに収められているのは過去に撮られた写真、九頭竜八一と空銀子の過去の姿。

「かわいい！ かわいい!!」

「……………」

それは真剣な顔で将棋を指している最中の姿だったり、ぐっすりお昼寝中な姿だったり。

そういった日常の光景を切り取ったものから、入学や卒業など節目を切り取った記念写真まで、そこには沢山の写真が収められている。

「ねえ見てよこれ！ かわいい!! ここに超可愛い子がいるんだけど!!」

「……………そうね」

で、その中に写る一人の幼女を指差しながら可愛い可愛いとはしゃぐ八一。

「可愛い可愛い!! かわいいーいーいー!!」

……………可愛い可愛いと大はしゃぎな八一。

その顔を見れば明らかだけど、専らその視線は幼い頃の自分自身などではなくその隣

に写る銀髪幼女だけに向いていて。

要するにこいつの目的とは。過去を振り返って懐かしむ事なんかではなくて、幼い頃の空銀子（この私であり八一の恋人）の姿を見て悦に浸りたいというしようもないものだ。

「可愛いな——！ 可愛いな——！」

ま、こいつはロリコンだからね。この病気だけは完治しないのでどうしようもない。

むしろその欲望の矛先を空銀子の子供の頃に向けたのはまだ僥倖だったと言える。これが他所様の子供達なんかに向いていたら大変というかもうそれ事件だからね、八一の裏にあつて隠し切れない暗黒面を受け止めてあげるのも恋人である私の役目なのだ。

「ねえ見て見て！ この銀色の髪の子マジで超かわいいんだけど！」

「そうね」

「ちっちゃい！ 銀子ちゃんちっちゃいよ！ かわいいね！」

「そうねえ」

可愛い、とな。そう何度も褒められたとて、子供の頃の話じゃあねえ。

所詮過去は過去、今を生きるこの私にとつては大して響くものが無い言葉だ。

「ほっぺたが！ もっちもちしてるよ!! かわいいね!!」

「……そうね」

「かわいい！ 銀子ちゃんかわいい!!」

「……………んー」

……………まー、なんだろ。

その、あくまで子供の頃の話で。

「かわいいかわいい！ 銀子ちゃん超可愛い!!」

「……………んう」

……………うー、どうせ子供の頃の話だから。

今現在の私にはあんまり関係無い話なんだけど……………なんか、身体がむずむずする。

「……………ん、んう」

「銀子ちゃん？ どうしたの？」

「……………うるさい、ばか」

「え、俺何も言っていないけど」

ほんとばか。何も言っていないのなら私がむずむずするはずが無いのに。

八一はロリコンなのにバカだから始末に負えない。欠点は一つに絞って欲しいわね。

「あーかわいいなー、この頃の銀子ちゃんってほんとに可愛いよなー」

「……………」

で、そんなバカ八一が可愛い可愛いと連呼する銀髪幼女、写真に写る幼き頃の私なん

だけど。

そりゃあこの私空銀子様の幼き頃の姿なんだから、そんなの可愛いに決まっているでしょ。

……とは思わない。私はそこまで自分を過大評価してないというか、可愛いとは思っていない。

むしろこう思ってしまう。

果たしてこの幼女、八一が言う程に……可愛いのかな、と。

「可愛いなー！」

というのも……写真に写るこの幼女、なんか……むすつとしているのだ。

顔がね、むすつとしてるの。全然笑ってないのよ、この幼女。

「見てよこの写真！　大きなおめめがくりくりだよ！　可愛いねー！」

確かに大きなおめめはくりくりだが、しかしその顔はむすつとしている。

「あ、お昼寝中の写真だ！　小っちゃく丸まっちゃって……かわいいなー!!」

小さく丸まってお昼寝している時も、その顔はなんだかむすつとしている。

「いやーかわいい！　どの銀子ちゃんもほんつとーに可愛いなあー！」

どの写真に写る銀子も、どれもこれもその顔はむすつとしている。

なんとまあこの幼女、カメラに向かってピースをしている時でさえその顔はむすつ

としているのだからもう手の施しようがない。

きつとこの幼女が生きる世界には何一つとして面白いものが存在しないのだろう。とそう思ってしまう程に愛嬌の無い顔ばかりを写真に残している、そんな幼女が幼き頃の私だったりする。

だからこそ、成長した今の私はこう思ってしまうのだ。

果たしてこの幼女、そんなに可愛いのかな？ と。

「ああかわええ……ちっちゃい銀子ちゃんかわええよお……」

「……ねえ八一。これ、そんなに可愛い？」

「可愛い!!」

即答で答える八一。

あ、ちなみに言っておくけど今の私だったらこんな愛嬌の無い写真まみれにはならな
いからね。

成長した私はとつくに営業スマイルつてもんを習得している。ファンとの撮影イベ
ントとかで撮られた写真など、ネットで検索すれば笑顔の私が写る写真などすぐに見つ
かるはずだ。

「でもこの幼女、どの写真を見てもむすーつとした顔ばかりじゃない」

「そこがいいんじゃない!!」

声を大にして力説する八一。

そこがいいのか？ そうなの？ 正直言つて私にはよく分からない感覚の話だ。

私の感覚で言うならこんなむすーつとしたつまらなそうな顔ではなくて、パツと花咲くような笑顔の方が何倍も可愛いと思うんだけど。

「そんなに可愛いかしら……」

「可愛いってば。てかどうして銀子ちゃんがそこに疑問を持つのか、幼い頃の自分だよ？」

「それはそうなんだけど、あんたがあまりに言うから……」

私と八一で見えているものが違い過ぎる、いつそ違うものを見ている気分だ。

私にはどう見ても不愛想な幼女にしか見えなんだけど、私の感覚がおかしいのだから。

「ほらこの顔とか、もう見るからにむすつとしてるじゃない」

「いやいや、このむにーんとしたお顔が最高ですよ。ほつぺたむにむにしたくなる」

「けどねえ、もつと可愛い表情なんていくらでもあるじゃない。それなのにこの幼女つたらむすつとした顔ばかりで……笑顔の写真なんて一枚も無いし……」

「いいんだよそんなの無くつたつて。幼女の頃の銀子ちゃんはこれでいいの」

「子供は愛嬌があった方が可愛いじゃないの。それなのにこの幼女つたらもう愛嬌ゼロ」

で——」

「ちよつと、さすがの銀子ちゃんでもそれ以上悪く言うのは許さないよ」

そんななに？ そんなに怒ること？ ってぐらいに鋭い目付きで私を睨む八一。

対局以外でこいつがこんな険しい表情を私に向けるのは本当に久しぶりなだけで、それが幼女に関係することってのはどうなのか。しかもこの幼女は私だつてのに。

「可愛いじゃん、可愛いでしょ。幼女の銀子ちゃんは最高に可愛いんだよ」

「……………」

「最高に可愛い幼女には愛嬌なんか無くてもいいの。そんなの無くつたつて最高に可愛いんだから」

「……………まあ、あんたがそう言うなら別にそれでいいんだけど」

このアルバムを見たがったのは八一だ。私は幼い頃の自分の姿なんて今更どうでもいい。

それならこの幼女が八一にとって可愛い存在なのだとしたらまあ良いのだろう。少なくとも可愛く思えないよりは良い。というか、もし八一がなんら興味を示さなかったとしたらそれはそれで寂しいし……。

とか思っていたら、そんな気持ちは同様だったのか、私の肯定を得た八一はにこりと笑って。

「その通り！　これはこの幼女と一緒に育ってきた俺だからこそ言える事なんだよね。このむすーつとした顔こそが一番いいよねって思うんだ、だってこれは銀子ちゃんの素の顔なんだから」

「それはまあ、そうだけど」

「でしょ？」

どの写真を見てもむすーつとした顔ばかりしている幼女だが、私だつてなにも年がら年中不機嫌だった訳ではないし、あえて不機嫌な時を狙って撮った写真という訳でもない。

八一の言う通りこれは私の素の顔、素の姿を撮った写真。要するに空銀子というのは普通になっている顔がつまらなそうな顔に見える生き物なのだ。

「会ったばかりの頃は銀子ちゃんつて本当に笑わない子、喜ばない子だなあとか思ってたよ。俺なんかは喜怒哀楽が顔に出やすい方だったから特にさ」

「そうね、あんたは昔から分かりやすい奴だったわね」

「でも次第に分かったんだ。銀子ちゃんにだって嬉しい事は当然あるし喜んでいない訳じゃない、ただそれが顔に出にくいだけなんだって」

「……まあね」

顔に出にくいというか、もつと単純に表情の変化に乏しい子供だったと思う。

というか、正直言うとそのそれは今もだ。三つ子の魂なんとやらで表情の変化に乏しいのは今でも同じ。ポーカーフェイスと呼べば聞こえは良いが、現実には営業スマイル以外でろくに笑わない不愛想な女、それが私。

まあ別にいいんだけどね。今更性根は変えられないし、私に笑顔が似合わないのも分かっているし。

「だからこそ！ 幼女の銀子ちゃんはこのお顔が至高なんだよ！」

「……そっか」

「そうさ！ なんせ俺はこのお顔をずーつと見てきて、この女の子を好きになったんだから」

「……うん」

……それに、八一はこう言ってくれるし。

こんな私を好きになってくれた、八一が、いる。その事実が何よりも私を幸せにしてくれる。

「……八一」

ちよつとだけ身体を隣に傾ける。髪と髪が触れ合う感触がくすぐつたい。

八一が、いる。隣にいる。私を好きだと言ってくれている。幸せ。

「……八一♡」

そう、いるの、隣に、八一が♡ これね、彼氏♡ 私には彼氏がいるの♡ えへへ♡

いいでしょ♡ こんな不愛想な私だけどね、それでも頼れる優しい彼くんがいるの♡

「ほんつとーに可愛いよなあ、このむすーつとしたお顔の幼女銀子ちゃんを目一杯愛でたいよね。目一杯愛でて喜ばせて、むすつとしたお顔に生じる微妙な変化をじっくり観察したいよね」

まあちよつとロリコンだけど。私の頼れる彼くんはかなりロリコン入ってるけど。

「はああ、幼女銀子ちゃんかわええ……結婚したい……」

うーわ、こいつヤバ。前言撤回しようかしら。

「ねえ、せめてもう少しロリコン抑えてくれない？ キモイから。死ぬから」

「ちよ、ちよつと待って、ロリコンって言うけどこれ幼い頃の銀子ちゃんだよ？ 他の誰

かならともかく銀子ちゃんなんだからセーフでしょ」

「セーフなわけない。本当にあんたってどうしてこうもキモく育っちゃったのかしらね、それこそ子供の頃はまだ可愛かったのに」

言いながら視線をアルバムに落とすと、そこには幼い頃の八一がいる。

今よりもまだ輪郭に丸みを残すあどけない表情の少年。……うん、可愛い、確かに可

愛い。

今では全く可愛げのない八一でも子供の頃はそれなりに可愛い。この頃はロリコンじゃなかったのにねーとか思うと一層可愛く見えてきちゃう。

「……確かにね。今では一ミクロンたりとも可愛くない八一でさえ幼い頃はこれなんだもの、そりやまあ私だつて可愛いんでしようね」

「な、なんかトゲのある言い方だけど……でもそう、そうなんだよ。幼い頃は可愛い、これはもう絶対の真理だと思っただよね」

「真理ねえ……」

幼い子供、子犬、子猫、などなど。小さな生き物はそれだけで一定の可愛さがある。

だったら空銀子も然り。そう思つて見てみると……うん、まあ可愛いのかもしい。むすーつとしてるけど。不愛想だけど。

「ああく、可愛いなあ……幼女の銀子ちゃん……」

「……………」

だから八一のこんな反応も仕方ないのかも。

特にこの幼女、空銀子の事が好きなロリコンからしたらもう格好の獲物と言う他無し。

ていうか空銀子の事が好きなロリコンとか、なんか自分で言つてて怖くなつちやつた

んだけど。そんな邪悪な生物この世には存在しないって思いたいけど、とても困った事にすぐ隣にいる。

「かわいい……幼女の頃の銀子ちゃん……かわいい……カワイイ……」

「……………」

こいつは自身が完全アウトな存在で、私の温情でギリ許されている事を理解しているのだろうか。

きつと理解してはいないわね。理解していたら私のすぐ隣でこんな表情はしまい、幼女の写真に夢中で顔が緩みきつっている。キモい。

「かわいい……この頃の銀子ちゃんってほんとかわいい……」

「……………」

それにしても……なんか。

こいつのこういう反応を見ると……なんか……なんか。

「ほんまに……この頃の銀子ちゃんはほんままちっちな天使やで……」

「……………」

……『この頃』？ ……この頃。じゃあ、今は？

さつきからこの頃この頃って言うけど、肝心の今はどうなのよ？ ……と思わずにはいら

れない。

……が。

「……………」

しかし、だ。それを声には出さない。ここでそのような事を八一に問い質したりはしない。

ここで私が「あんたさつきからこの頃の銀子ちゃんは可愛いとか言ってるけど、今はどうなの？」とか聞こうものなら、八一は「今だつて勿論可愛いよ！」つて返してくるに決まっているからね。

さすがにそれぐらひは読める。簡単に読める手をそのまま打ってしまったては、まるで私が八一に可愛いと言われたがっているみたいじゃないの。ねえ？

そんな見え透いた手は打ちたくないし、返答が分かっている誉め言葉なんて嬉しくないから。

「かわいい……幼女銀子ちゃんきやわわ……」

「……………」

にしてもすぐ隣にいる恋人を放置しといて大層ご満悦ですな？ とは思うけど。

ていうかね、今に限らず八一つてなんか私を雑に扱うくせがある。幼い頃から一緒に育ってきた弊害なのか、空銀子ならこれぐらひの扱いでいいよね、みたいな思考がこいつの無意識下に存在している。

良く言えば心安い間柄、悪く言えば配慮が無い。さすがに恋人になつてからはそういう雑な扱いを受ける機会は減つたものの、恋人である事を忘れている時などにはその悪癖が再発する。例えば少女の写真に夢中な今のようにな。

「少女銀子ちゃん……きやわたん……」

「……………」

あーほんと幼い私って可愛いわねえこれならいつそ幼い姿のまま成長しなければ良かったわねえ。

などと当て擦りのようなセリフを吐いたところで今の八一に効きはすまい。それにばつの悪さを感じられるぐらいに敏感であれば、隣にいる恋人の機嫌が悪化している事などすぐに気付けるはずだ。

「少女銀子ちゃん……世界一可愛いようじよ……」

「……………」

ううん、もしかしたらこいつの思考では「幼い頃の銀子ちゃんを可愛いって褒めるのは間接的に今の銀子ちゃんを褒めているのと同じだよね」みたいに思っているのかも。

だとしたらそれは大きな間違いだ。少なくとも私は過去の自分を賞賛されても嬉しくない。過去は過去で今ではないのだから、過去の写真ではなくちゃんと今の私を見て『可愛い』と言つて欲しい。

「……………」

そう、可愛いと言って欲しい。

要するに、言つて欲しいんだけど。

「幼女銀子ちゃん、すき……」

「……ねえ」

「うん？」

「……今は？ さつきから幼女の頃ばつか褒めてるけど、今の私つて可愛くないわけ？」

「ええ？ まつさかあ、そんなの可愛いに決まつてるじゃんか」

言いながら八一が右手を伸ばして私の頭を優しく撫で始める。

まるで幼女をあやすかのような手付きだけど……う、ううむ、まあ悪くはないわね。

「別にお世辞はいらないわよ」

「お世辞なんかじゃないって。今の銀子ちゃんが一番可愛いよ」

「……本当にそう思ってる？」

「思ってる。今の銀子ちゃんが一番可愛い、俺は本当にそう思ってるよ」

「……そ」

八一の右手が、私の頭を、撫でる。撫でる、撫で続ける。んう、きもちいい。

可愛い、だって。一番可愛いんだ。そっか、あつさり白状したわね。ふふん、ちよろ

い男め。

「そりやあ幼女の頃はめちや可愛いけどさ、今の銀子ちゃんの方が更に可愛いんだよ」

「それ、ここまでのあんたの言動を見てると本心だなんて到底思えないんだけど」

「いやいや本心だつて、ほんとに」

「でもあのむすーつとした顔が好きなんですよ？　今の私はあんな仏頂顔しないけど」

「え、そうかな？　わりとそういう顔してるような……痛てて」

八一の尻を掴つてやった。全く、そこは否定するところじゃないから。

「小さい方が可愛いんでしょ？　さつきそう言つてたじゃないの」

「そりや可愛いけどね。だけど幼い頃の銀子ちゃんだったらこんなふうには焼きもち焼い

たりしないし」

「……別に焼きもち焼いてないけど」

「それにー、さつきみたく俺に可愛いって言われたがつたりはしないしー」

「……別に言われたがつてないけど」

「こーんなふうには丸分かりな嘘を吐いたりもしないしねー」

なんだとお？　こやつ、随分と勝手な事を言つてくれるではないか。

「………生意気」

「事実を言つたままでですけどね」

「うわ生意気。あんたはとつても生意気になったわね、幼い頃はもつと素直だったのに」
「素直な打ち方だけじゃ将棋は強くなれないからね。棋士として成長したって事だよ
ね」

「どーだか」

自らの生意気さ加減を棋士としての成長に置き換えてはいけない。その言い分だとプロの棋士は皆が生意気だという事になってしまいうけど、私は違うからそれは正しくない。

こういう減らず口も八一が生意気になった証ね。幼い頃はもつと素直で良い子、絶対的上位者たる姉弟子の言葉に逆らったりなりなんかしなかったのに。

「ていうか、あんたがさつき挙げてた理由って今の私の方が可愛い理由にはならなくな
い？」

「え、どうして？」

「どうしてって……言葉の通りだけど。さつき言ってた可愛い理由って——」

はてなと首を傾げる八一だが、どうしてとはこちらが聞きたい。

だって焼きもちを焼いたりとか、可愛いと言われたがったりとか、丸分かりな嘘を吐いたりとか。

それって可愛い理由なの？ っと思う。自分で言うのもなんだけどむしろ足を引つ

張る要素だと思う。それらが追加されたのが今の私なのだとしたら、幼い頃の自分に可愛さで勝るはずがないじゃないの。

「いやいやそれは違うって銀子ちゃん。ちゃんと可愛い理由になつてるでしょ」

「なつてない。だって丸分かなりな嘘を吐くやつのが可愛いのよ」

「丸わかりだから可愛いじゃん。どう見てもバレバレなのにバレバレな嘘を吐いてまで誤魔化しちゃうところとか可愛いでしょ。いいんだよー銀子ちゃん、俺に可愛いって言われたいのならいつでも言つてあげるからね、素直におねだりすればいいんだよー」

「なめとるのか貴様」

「ほらー！　こういうとことか可愛いよね！　すぐムキになっちゃう銀子ちゃんかわいー」

こ、こいつ……！　なんて生意気な事を言つてくれるぶちころすぞわれほんまに。

と、ムキになつたらそれ即ち可愛い扱いになっちゃうのならそれは八一の思う壺、だからって言い返さなければそれを認めるのと同じ、こうなつては打つ手が無い。

完全に嵌められた。なんて狡猾な手口だ。これが九頭竜八一という男の本性である。

「とまあ冗談は置いといて」

「冗談なのね」

「いや可愛い理由は冗談なんかじゃないよ？　今の銀子ちゃんのそういうところが本当に

可愛いなあって思うんだ。幼い頃の銀子ちゃんは、こう……堂々としてるっていうか、ブレないっていうか、その……なんて言えばいいんだろ」

「生意気？」

「じゃなくて！ ほら、銀子ちゃんって子供の頃から師匠とか他の大人相手でも物怖じしない子だったからさ。一応は年上だった俺相手でも勿論そんな感じで……いつでも泰然としてるっていうか、肝っ玉が据わってるっていうか」

肝っ玉で。それが幼女に使う言葉なのかと問いたいけど、八一が言わんとしている事は分かる。

幼い頃の私は確かにそういう子供だった。私に言わせれば自らを振り返っても生意気としか表現出来ないような幼子だったんだけど、いつも隣にいた八一には違ったように見えていたのかもしれない。

「俺が思うに、あのむすーつとした可愛い顔は肝が据わっていて動じない精神の現れなんだよね」

「……それは分かったけど、で？」

「で、そんな幼女の頃と比べると、今の銀子ちゃんは表情の変化も感情の起伏も大きくなってる訳で」

「……それってつまり、今の私は肝が小さくて精神的に動じるような人間になったって

「とと？」

「いや、あのー……まあ、そう言うとなつちやうなだけどー……」

八一は困つたように一度視線を逸らして。

「でもほら、それつてつまりは俺に対する照れとかそういうのじゃん？ 恥ずかしさとか、そういうので銀子ちゃんは今みたいになつたんだつたら……ねえ？ それつて可愛
いじゃん？」

「……………」

「か、可愛い、じゃん？」

「……………自信無さそうに言わないで欲しいんだけど」

「かわいい、可愛いじゃん！」

ハッキリと言いつつ八一。

「……………むう」

な？ ……なんだか、ちよつと許容し難い事を言われたけど……でも、まあ、一理はある、かな？

昔の私の事を考えると、あの頃は八一を単なる弟弟子としか見ていなかった。だから八一相手に動揺させられる事なんて無かつたし、それが理由なのか四六時中むすつとしていた。

けれどもいつしか八一の事を好きになって、その結果私は単なる姉弟子ではいられなくなつた。幼き故の動じない精神と引き換えに恋を手にしたのだ。

「……あんたの言いたい事は分かつたけど、それが可愛い理由つてのがどうにも……」

「可愛いと思うんだけどなあ、それこそ愛嬌っていうか」

「愛嬌……」

そうして恋をしてしまった結果、私は今みたいな空銀子になつた訳で。

その恋心を誤魔化そうとしたり、自分の気持ちを偽る事だつて何度もあつた。バカで鈍感な八一にムカついてムキになる事だつて……ううん、これは子供の頃からそうだったかもしれないけど。

とにかくそんな感じになつた訳で、それつて愛嬌なの？ と疑問に思つてしまふ。まああの八一がこう言つてるんだし、八一から見れば私の欠点も愛嬌に見えるのかもされないけど。

「それが愛嬌に見えるつて言うなら、あんたも結構変なやつつていうか——つて、ああ、なるほど」

脳内に降つてきた閃きに顔を上げて、すぐ隣にいる八一を一瞥する。

「なこ？」

相変わらずとぼけた顔をしている。

集中していない時とか、八一の気の抜けた時の顔には幼い頃の面影が若干残っている。

真剣な時のキリつと引き締まった顔も好きなんだけど、子供の頃最初に私が好きになったのは……って、そんなのどうでもいいんだけど。

「私の事ばつか言ってるけど、考えてみればあんただってロクなもんじゃないわよねと
思ってる」

「えっ」

「あんたの基準がおかしくなってるってことよ。最初からそつちを疑うべきだったわ」

ようやく分かった。八一って女の趣味がちよつと変わってるんだね。

だから私のちよつとアレな部分が愛嬌に見えるし、むすつと仏頂面の幼女が可愛く見えるのだろう。

九頭竜八一、こいつを一般男性代表みたいにしてはいけない。そもそもロリコンな時点で女の趣味がおかしいに決まってるんだから。

「——つまり、八一の感性が異常で、私の感性が平常なの」

「……ほー、なるほどなるほど。そう言われると否定は出来ないかもですねえ」

すると八一は。私の言葉に然程も動じず大袈裟な仕草でうんうんと頷いて。

「でもさ、だとしたらそれってやっぱり銀子ちゃんのせいでしょ」

「は？ どうして私のせいになるのよ、あんたの女の好みの問題で私には何も関係ないじゃないの」

「いやいやめちやくちや関係あるでしょ！ だって銀子ちゃんがこうだから俺の女性のタイプがそうなったんじゃん！」

「……え？」

私がこうだから、八一の女性のタイプがそうなった？

「……そう、なの？」

「そりやそうでしょ！ むしろそれ以外にどんな理由があるっていうのさ、銀子ちゃんに關係無いどころか原因そのものでしょうよ」

……そう言われてみると。

先程指摘した通り八一の女の趣味がちよつと変わっていると、それが今の私にピッタリ当てはまるってのは偶然にしては出来過ぎている。

それよりはむしろ私に合わせて八一の感性が変化していったって、結果こうなったって考える方が確かに筋は通るのかもしれない。

「そう……かも」

「そうだって。ほらこの写真を見てよ。俺達はこーんなに小さい頃から一緒にいるんだよっ」

八一がアルバムに収められている写真を指差す。そこには小さい八一と小さい私がいた。

小さい八一は六歳頃で小さい私は四歳頃だろうか。その頃から二人一緒にいる。

「俺の人生の中で銀子ちゃんと一緒にいた時間が一番長いんだ。師匠よりも、桂香さんよりも、それこそ俺の実の両親よりも。つてなったらそりゃそんな相手から影響を受けるのは当たり前だと思わない？」

「……そう、だね」

考えてみると不思議な話だ。私と八一は本来なら赤の他人のはずなのに、八一の言う通り実の家族よりも長い時間を一緒にしている。

八一には実の兄弟だっているのに、それよりも制度上の姉と一緒にいた時間の方が長い。それぐらい一緒にいる相手であれば何かしらの影響を受けたとしても不思議はない。確かに八一に言う通りだ。

「だからさ、俺が焼きもち焼きな女の子を好きになったのは……」

「私の……せい？」

「そういうこと。すぐムキになっちゃう女の子を好きになったのも、小さい女の子を好きになったのも銀子ちゃんのせいなんだ」

「私が……」

私が、こうだから。

一緒にいた八一が、こうなってしまったのは私のせいなのか。

「だからさ……責任を取って欲しいな」

「せ、責任？」

「そう、責任」

頷きながら八一が私の肩にそっと手を掛けて、そのままゆっくり体を後ろに倒した。私の上に八一が覆い被さる体勢、こうして下から八一の顔を見るのも何度目だろう。

「てかあんた今ロリコンだつて認めた——」

「銀子ちゃん、いいかい？ 全部君のせいなんだよ。あんなに可愛い幼女と同じ部屋で

一緒に暮らしていたら好きになっちゃうに決まってるじゃんか。だから俺は悪くない。

悪いのは君なんだ」

「それは……うん、ごめんね、八一」

「謝らなくていいから、それよりも責任を取ってよ」

八一の手が私の頬を撫でた。この手の感触は小さな頃からずっと知っている。

昔はお互いの手同士を重ねていたけれど、大きくなつたその手は私を求めることが増えた。この手はもう私と手を繋ぐだけじゃ満足出来ないらしくて。

それほど欲張りになつちやつたのも、私のせいなのだとしたら。

「……銀子ちゃん」

「八」……」

私は、責任……取らないと――

「つてバカおつしやい」

「あつ、ええ!？」

私は不埒な思考に染まろうとする八一を押しつけて身体を起こした。よっこいしよつと。

「ええー、ちよつとお銀子ちゃん、こういうのはムードつてもんがさあ」

「うるさい。あんなふざけたトークにムードなんてないから。つーかあんたのロリコンの罪を私に押し付けないでよね」

ロリコンとは何か。ロリコンとは異常である。

仮に六歳の男の子が当時四歳の女の子を好きになったとして、そのまま二人が成長していけば好意を抱いた相手の年齢も当然上がっていく、そうならばその時々々の相手を好きになるはずだ。

それが健全な人間の正しい感覚であつて、なにも子供のままの姿をずっと好きでいるわけじゃない。もしそんなやつがいたとしたらそれだけで異常なロリコンなのであ

る。

「ううむ……完璧な流れだと思ったのに何が駄目だったんだ……う？」

「ばか。ほんとばか。一回死んだ方がいいんじゃないの？」

あれで完璧とは笑わせる、訳分らない冤罪を被せてきただけじゃないの。

私はそんな流れと勢いだけでコロツといっちゃやうような女じゃないから。なにかとバカでチョロい八一と違って私は身持ちが固い女なんだからね。

……ま、強いて言うなら、すぐそこにあつてチラツと目に入っちゃったこれが、どうにも。

師匠の家から借りてきたこのアルバム、汚したり傷付けたりしちゃったら嫌だし、ね。

「なら銀子ちゃん、後で、後でもう一回チャンスが欲しいです」

「はあ？ チャンスとか意味分からないんだけど変な事言わないでくれない？」

「だってチャンスが、そんな、せっかく今日は銀子ちゃんと一緒なのにつ」

「しつこい。ほんとあんたって根本的にデリカシーつてもんが欠けてるわよねーあーやだよ。八一っていつからこんなになっちゃったのかしら」

「銀子ちゃんー！」

往生際の悪い男をあしらいつつ、ふとアルバムに視線を落としてみると。

そこには光沢フィルムに反射して、今の空銀子の顔が映っていた。

その顔はアルバムの中に沢山あるのと同じ、よく見慣れた表情で。

……もしかして、幼い頃から私が四六時中むすつとした顔をしていたのは、隣にいたこいつに原因の大半があるのでは。と思わずにはいられなかった。

銀子ちゃんを可愛い可愛い×5するだけの話 本編

1. 出会いの話

今年も次第に終わりが近付いて、季節は冬に差し掛かった頃。

俺の帝位戦も恙無く終了して、年の瀬である12月に入った頃の事。

「……ん？」

ふと上を見上げてみる。

すると目の前にあるのは見慣れたマンション、ここ最近何かと訪れる機会の多い場所。

「……ってあれ？　なんでここに居るんだっけ？」

はて——と、俺こと九頭竜八一は首を傾げる。

何故自分がここに居るのか。ここまでどうやって歩いてきたのか。

そんな当たり前の事が思い出せない。というか俺……さつきまで何してたんだっけ？

……駄目だ、どうにも思い出せない。

他の事は何一つ忘れていないと思うんだけど、今日の日の記憶だけが上手く繋がって
くれない。

……うむ、なんだか極軽度の記憶障害にでもなった気分だ。

「……ま、いつか」

対局中ならいざ知らず、考えても分からない事を悩み続けていたって仕方が無い。

すぐに俺はパツと思考を切り替え、足を踏み出してそのマンションへと歩き始める。

何やら頭の中がスッキリしないけど、でもこの状況にあつては大した問題は無い。

だって俺がこのマンションに来る理由なんて考えなくてもおおよそ一つしかないだろ
う。

何故ならここにはあの部屋が——姉弟子が研究用にと購入したあの部屋があるのだ
から。

エントランスを通過して、エレベーターを使用して八階まで。

廊下を進んですぐの所にある801号室。そこは俺と姉弟子が日々研究会を行う部
屋だ。

——そう、真面目な研究会を行う場所だ。

実力を認めた者だけが参加する事を許され、時に互いの研究成果を披露する事だつて
ある、棋士にとってはそりやもう神聖な場所なのである。

……ただまあ、なんというかその……あれだ。

そうして研究会をしている間、誰にも邪魔されず二人つきりになれる場所でもあつて。

ついでに言っちゃうと……ちよつとした逢瀬を楽しむ場所でもある、かな？ なんて。

「……ん？ なんだこれ？」

とその時、俺はある事に気付いた。

その玄関ドアにあるドアプレート。その表示がなにやらおかしな事になっている。本来『801』と書かれているはずのそこには、くつきりとう書かれていたのだ。

『銀子ちゃんを可愛い可愛い×5するだけの部屋』

「……はあ？ 銀子ちゃんを可愛い可愛い×5するだけの部屋？」

思わず声に出して読み上げてしまった。

いやなんだこれ。なんのアピールだ？

そりや姉弟子は可愛いけどさ、そんな事をわざわざ玄関のドアプレートに書くか？

普通。いや普通は書かない、普通じゃなくても絶対に書かない。

「というかこれって……姉弟子が自分でやったって事だよな？　なんせ自分んちの玄関だし。」

「だとするとこれは……。」

「ヤバいな……これは相当にキてるぞ……。」

地獄の三段リーグを勝ち抜いて、めでたくプロ棋士となつて以後。

それが女性初の快挙だとか、そもそもあのビジュアルの持ち主だという事もあつてか、ここ最近世間での空銀子フィーバーは凄い、というかエグい。

元から姉弟子の人気は凄かつたのに今やそこに拍車を掛ける勢い。その熱狂ぶりは昇格の日から三ヶ月近く経つた今でも全く収まらず、プロとしてその需要に応えるかの如く、姉弟子のスケジュールは連日怒涛の取材ラッシュ。

そんな日々が続いたのが災いして、姉弟子もちよつとおかしくなつてしまつたというか、きつと疲れに疲れて頭がパーになつちやつたんだらう。これは恐らくそういう事に違いない。

「姉弟子は抱え込むタイプだからなあ。けどまさかこんな形でストレス発散しちゃうなんて……。」

俺はポケットからこの部屋の鍵を取り出し、鍵穴に差し込んでガチャリとロックを外す。

自分は可愛い。そんな事を玄関ドアでアピールしちゃうぐらいにストレスを溜め込んでいる。

そのストレス発散方法については色々物申したい所はあるけど、とにかく姉弟子がそんな事になっちゃったのならここは俺がなんとかしてあげなくちゃね。

今日は互いの時間の許す限りたつぷりと心ゆくまで将棋を——そして将棋以外の事も楽しもう、へへへ……。

とそんな事を考えながら玄関ドアを開く。

まず目に入る玄関口。そこには小さいサイズのローファーが一足。それは勿論あの子のもので。

そして開きっぱなしの廊下のドアの奥。そこには床にべたりと座ってちよつと頭を俯かせている、そんな小さな背中が。

それは勿論我が姉弟子の、というか……。

あのドアプレートに則って言うのなら、それは可愛い可愛い銀子ちゃんの背中だった。

「……………」

物音一つしない静かな室内。敷きっぱなしになっている布団だけがある殺風景な部屋の中、姉弟子は一向にこちらを振り向かない。

どうやら目の前にある将棋盤——というか将棋アプリを開いたタブレット端末に夢中のようで、まだ俺が来た事に気付いていないようだ。

……ふむ。こうなると、なんか……。

集中しきっている棋士が周りの物音に気付かないというのは、往々にして良くある事だ。

だがそんな背中を見ていると、俺の胸中にはむくむくと悪戯心が湧いてくるではないか。

ここで例えば「おい」とか「姉弟子」とか、そんな声を掛けるのがこれまでの俺。言い換えれば、そこまでしか許されていなかったのがこれまでの俺だ。

けれど今はもう違う。だってあそこに居るのは俺の姉弟子じゃない。

いや姉弟子は姉弟子んだけど、それでもあそこに居るのはもう姉弟子ではなくて……。

あそこに居るのは銀子ちゃん。つまり——俺の『彼女』なのだから。

そう、彼女だ。彼女なのだ。銀子ちゃんはもう俺の彼女、俺のものなのだ、凄い！

なんか『彼女』というキーワードを連呼するだけでテンションが高まる。銀子ちゃんの三段リーグ最終戦、封じ手を開けたあの日からもう結構経ったけど未だに慣れない、そのキーワード。

今では恋人らしい事もいくつかこなしたけど、その度に深く実感する。銀子ちゃんは俺の彼女、これ以上に幸せな事なんて無いよなあ……。

と、話は逸れたが……とにかくあそこに居るのは俺の彼女、空銀子四段なのだ。だとしたら。ちよつとぐらいいはその……羽目を外したつていいはずだね？

なんせ俺は彼氏なわけだし？　ちよつとイタズラするぐらいいは許されるよね？
ねー？

という事で。

俺は盤面に夢中な姉弟子に気付かれないよう、そーつとそーつと近付いていつて……。

「——ぎーんこちゃんっ！」

背後からそれはもう勢いよく、華奢な身体をがばーつと抱きしめてやった。

「なッ!？」

「ん〜、銀子ちゃん〜〜!」

その背中に顔をぐりぐりと擦り付けちやう。ぐりぐり、ぐりぐり。

すると伝わる柔らかい香り。抱きしめたその身体から伝わる心地よい感触と体温。

それらを余す所なく楽しむ……間もなく。

「ちよ、なに、八一!?　バカ、あんたなにしてんのよっ!」

突然のハグに驚いたらしく、姉弟子は手足を乱暴に振ってばたばたと暴れ始める。

これは内心本当に嫌がっている——と、これまでの俺だったらそう思っただろう。

しかし今では違う。互いに想いを交わしあった今ではこの子の本心などお見通しだ。

つまりこの暴れっぷりは単なる照れ隠しなのだ。全く可愛い奴め！ このこのっ！

「離して、離せっ！」

そう、これは照れ隠しだ。銀子ちゃんは今盛大に照れているのだ。

こうして暴れるのはその裏返し。こういうところが可愛い……いい、痛でで。グーが当たったぞ。

なんかかけっこう暴れるな、よーしよーし、いい子だから暴れないでね、どうどう、どうどう。

「離せつつつてんでしょ！ このバカ！」

……そう、これはあくまで照れ隠し……照れ、隠し、で……いで、痛ででで。

あれ？ ちよつと、なんかちよつと暴れ、これ暴れすぎじゃ……痛い、痛いって、てか銀子ちゃん、ちよ、これ抵抗しすぎじゃない!?

「ぎ、銀子ちゃん、ちよつとちよつと、そんなに暴れなくなつたっていいじゃんか」

「八一、あんたねえ！ こ、こういう事はちゃんと、て、手順を守りなさいよ！」

限界まで後ろに振り向いて、姉弟子は俺の事を射抜くような視線でギツと睨む。

俺の拘束を振り解こうと藻掻いた事で、その横顔から見える頬はもう真っ赤だ。

というか、手順？ 手順とは一体何の事だ？ 抱きつくのに何かルールがいるのだろうか。

だって俺達はもう告白もキスも済ませたし、それどころかもうとつくに――

「つて、あれ？ 銀子ちゃん……なんか……変じゃない？」

とそこで俺はようやくその違和感に気付いた。

今日の銀子ちゃんは明らかにおかしい。さっきのドアプレートの件もそうなんだけど、何よりも今その身に着ている服装がおかしかった。というか抱きつく前に気付いた俺。

それは上下共に黒のセーラー服。つまり……銀子ちゃんが中学生の頃に来ていた制服だ。

「どうして中学生の頃の制服なんか来てるの？ コスプレにでも目覚めたの？」

「はあ？ あんた何言ってるの？」

依然として俺に抱き締められながら、銀子ちゃんはまるで不審者を見るような眼を向ける。

……うーん。正直この眼付きもというか、今日の銀子ちゃんはいつもの銀子ちゃんと比べて、少しツンツン度が増しているような気がする。さっきの暴れっぷりがその証拠

だ。

「というかちよつとだけ、本当にちよつとだけだが座っている状態の頭の位置が低いよ
うな。」

「というかぶつちやけた話……ちよつとだけだがその顔付きが……幼く、みえる？ よ
うな？」

「八一」

とその時、後ろから銀子ちゃんの声が聞こえた。

「ん？」

俺は自然に振り返って。

すると背後に居たのは――

「ぎ、銀子ちゃん!？」

そう、そこに居たのは我が姉弟子。というか俺の彼女、可愛い可愛い空銀子ちゃんだ。
まあ銀子ちゃんの声が聞こえたと言っている以上銀子ちゃんが居るに決まっている
のだが、しかしよく考えなくてもこれはおかしい。

だってそれは俺の目の前にも。

こうして抱き締めているこの腕の中にも銀子ちゃんが居る訳で……。

「ぎ、ぎ、銀子ちゃんが二人居る!？」

衝撃のあまり俺は叫んだ。

いやそりや叫ぶわ。だって同じ人間が二人も居るだよ!?

前にも後ろにも同じく銀子ちゃんがいる。なんだこれ怪奇現象か!?

「ど、どど、どういう事!?! どういう事なんだ!?! なんて銀子ちゃんが二人も!?!」

「……それは私が聞きたいんだけど。どうしてここに私が居るわけ? てか何抱き付い

てんの?」

「……え、なんで私がもう一人……」

どうやら状況に混乱しているのは皆同じらしく、俺の言葉に戸惑い気味に返す銀子ちゃん。

そして背後を振り返って、もう一人自分が居る事に気付いたもう一人の銀子ちゃん。ああもう、どっちも銀子ちゃんだから説明し辛い!

と、とりあえず……とりあえず、なんか怖い事になりそうな気がしたから目の前に居る銀子ちゃんに抱きつくのは止めにして、俺は混乱中の頭をどうにか巡らせてみる。

「これって……これってまさかクローン!?! もしかして姉弟子、どっかの研究機関で極秘裏にクローンを造ってたなんて事は……」

「そんな事ある訳ないでしょバカ八ー! 真面目に考えなさい!」

「いやだって真面目に考えたって分かんないよ! なんて銀子ちゃんが二人も……ク

ローンじゃないなら分身？ ドッペルゲンガー？」

「それもないっ！ 大体、全く同じ私が居るって訳じゃないでしょ、見てわかんない？」

「え？ ……あ、ほんとだ……」

ちなみに今、真面目に考えろと言ったのは後ろに居る銀子ちゃんで、見てわかんないのと言ったのは前に居る銀子ちゃんとなる。

まあそれはともかくとして、とにかくこの二人は同じではなくて大きな違いがあった。

後ろに居る銀子ちゃんとは俺にとって見慣れた姿、白のセーラー服を着用している。

白のセーラー、それは銀子ちゃんに通っている高校指定の制服だ。

それを来ているという事はつまり、後ろに居る銀子ちゃんは高校生であって、この俺がよく知っている銀子ちゃんだという事なのだろう。

そして前に居る銀子ちゃん。彼女は先程も言った通り黒のセーラー服を着用している。

黒のセーラー、それは銀子ちゃんが通っていた中学校指定の制服。今では着るはずの無い服だ。

先程聞いた限りではコスプレの類で来ている訳では無いようだし、若干ながら幼く見

える顔付きや僅かに低い頭の位置など、それらを考慮して考えるとこの銀子ちゃんは恐らく……。

「もしかしてこの銀子ちゃんは……中学校の頃の、銀子ちゃん……なのかな？ あ、その、俺の前に居る銀子ちゃんの事だよ？」

「……私は、まあ……中学生だけど」

そう、そこに居たのは中学生の頃の銀子ちゃんだった。

2. 四人の話

黒のセーラー服。

白のセーラー服とは違う、その制服は3年間見てきた俺にとっても懐かしさを感じるもので。

「やっぱり、君は中学生の銀子ちゃんなんだね。通りでちよつと小さくて幼いな思った」

「む」

ちよつと小さくて幼い。

その言葉が気に触ったのだろうか、目の前に居る銀子ちゃんの眉がぴくんと動く。

「私が中学生で悪い？ 何か文句でもあるの？」

「も、文句なんて無いよ。ただ何処となく違和感があつたからさ」

「違和感………ていうか、それじゃあ後ろに居るその私は………察するに高校生、なの？」

「………ええ、そうよ。私は高校生の空銀子。………自分に自己紹介するのってなんか変な

感じ」

お互いに不思議そうな表情で顔を合わせる二人の銀子ちゃん達。

その内俺の後ろに居るのが高校生の銀子ちゃん、俺の前に居るのが中学生の銀子ちゃん。

……ふむ、なるほどな。

二人の銀子ちゃんの違いが分かった事で、このおかしな状況が何となく理解出来てきたぞ。

本来この場にいるのは高校生の銀子ちゃんだけはずだ。それなのに本来居るはずのない中学生の銀子ちゃんまでもが同時に存在しているという事は……これは……読めたっ！

「あ、じゃあくローンとか分身じゃなくて、過去の銀子ちゃんがタイムスリップしてきたって事か。なあんたそういう事か」

「なあんた、つてあんたそれで納得出来るの？」

「ははは、まっさかー」

出来ないっすね。タイムスリップだろうが十分におかしいっすね。はい。

けどクローンも分身もタイムスリップもボツだとすると、もうこの状況を説明する適切な言葉が思い付かないんだよなあ……。

……と俺がそんな事を考えている間にも、次第に二人の銀子ちゃんの様子が変わり始めてくる。その表情、その声色が段々と暗くなり始める。

「タイムスリップだか何だか知らないけど……こんなの普通じゃない、あり得ないわ」
「……ほんとうにどういう事なの？ 意味が分からないんだけど……」

自分が二人居るといふ奇怪極まりない状況、どうやらそれを怖く感じてきてしまったのだろう、二人の顔には共に不安の色が混じっていた。

これはよくない兆候だろう。こんな訳の分からない状況なのに、二人がパニックになっちゃったたらそれこそお終いだ。俺は二人の銀子ちゃんを安心させる為、努めて普段通りの声色で口を開く。

「あのさ。ここに銀子ちゃんが二人居る理由、それは考えても分からないさうだから一旦置いておこう。そんな事よりもとりあえず……」

「……とりあえず、なに？」

そう、とりあえず。

「とりあえず……将棋しない？」

「……そうね」

「……うん」

俺の提案を受けて、二人の銀子ちゃんがゆっくりと頷く。

やっぱりこういう時は兎にも角にも将棋盤に向き合うのが一番。全ての答えは将棋盤の中にある……とまで断言する事は出来ないけど、少なくとも気分は落ち着くからね。

これが将棋指しにとつての正常化バイアスの結果と言つては駄目かもしれないけど、俺達は半ば現実逃避気味に一局指す事にした。

「でも八一、私達三人しか居ないわよ。あんたが2面指しでいい?」

「うん、いいよ。というか中学生の銀子ちゃんつて棋力も中学生の頃と同じなのかな?」

「……それはそうなんじゃない? 何なら私と高校生の私で対局してみる?」

「なるほど、それも面白そうだね。……て、そう言えば2面指しなんて言つたけど、そも

そもこの部屋つてタブレット一つしか無いんじや……」

「あ……」

……と、そんな時だった。

混沌としながらも落ち着いてきたこの状況。それを更にカオスに陥れようとする新たな刺客が。

「ただいまー」

「——はッ!?!」

鈴が鳴るような可憐な声。

それを聞いてすぐ、全身がぞわっと総毛立つような感覚に包まれる。

ただいまーと言つて玄関のドアを開けたその人物が誰か、俺には即座に分かつた。

ここまでの展開で気付くかと思うが、それは銀子ちゃんだ。だつて声が銀子ちゃんだつた。

しかしそれは銀子ちゃんの声じゃない。

ここに居る高校生や中学生の頃の銀子ちゃんの声ではなくて。

より具体的に言うともっと幼い声。今よりももう少しだけトーンの高い声で。

まさかと振り向いた俺の目に映つたのは――

「ら……ランドセルッ!」

思わず叫んでしまった。

だつてだつて、そこに居た三人目の銀子ちゃんの中で、そこには真つ赤なランドセルが。

それは言うまでも無く小学生の証、汚れなきピュアな証であつて、それを背負つている銀子ちゃんという事はつまりつまり――!

「しよ、しよしよ、小学生銀子ちゃん!? スゴいスゴい、本物だ!!」

何が本物なのかよく分からないが、とにかく俺はテンション爆上げだつた。

だつて小学生銀子ちゃんが居るんだよ!? ロリ銀子ちゃんが、ロリ銀子ちゃんがココ

にッ!!

「おいロリコン」

「本物はあんたのロリコンき加減でしょうが」

とそんな言葉が聞こえたような気もしたが、まあ気のせいだろう。生憎と今の俺の耳には高校生や中学生の言葉はもう届かないのだ。

なので俺は玄関までダッシュして駆け寄り、震える手で幼い彼女の両肩をがしつと掴んだ。

「きゃっ!」

「はあああ……、マジモンの、マジモンの小学生銀子ちゃんけ……!」

俺の瞳に映るいたいけな少女。紛うことなき小学生の頃の空銀子ちゃん。

それは言うまでもなく可愛くて可愛い。背丈も随分と小さくて、この子には珍しい口ングヘア―時代の銀子ちゃんがここに居る。

さらさら揺れるロングの銀髪が滅茶苦茶綺麗だ。けどその美しさと相反するかのよう顔付きはとても幼くて……駄目だ、可愛い、可愛すぎる……あ、ヤバい、なんか鼻血出そう。

「え、なに、誰あんた!?!」

「誰って、八一だよ! 分からない?」

「え、やい……ちゅ？」

「そう、九頭竜八一」

「……うそ、八一って……確かに似てるけど……」

別人だと疑っているのか、銀子ちゃんは俺の顔をぺたぺたと触り始める。可愛い。

先程の中学生銀子ちゃん然り、恐らくその年齢の銀子ちゃんはその当時の知識しか持ち合わせていないのだろう。だから当然、小学生の銀子ちゃんが知る俺とはその当時の俺になる。

然程年代に開きのない中学生の銀子ちゃんはこの俺をすぐに九頭竜八一だと分かったようだが、さすがに小学生の頃の銀子ちゃんとはかなり年代の開きがある事もあって、この俺が自分の知っている九頭竜八一と中々重ならないようだ。

「まあいいや。とりあえずこっちはおいで。色々説明しなきゃいけない事があるからね」
「わっ、ちよ、ちよつと……」

俺は小学生銀子ちゃんの下を抱えてぐつと持ち上げる。この軽さが小学生の証だね、少々ランドセルが邪魔だがそれも込みでの小学生なので文句は言えない。

……うーむ、この重量感は……一年前ぐらいのあい達を抱えた感じに近いような気がするな。とするとこの銀子ちゃんは小学4年生ぐらいだろうか。

そして抱っこした事で顔がより一層近付く。

するとよく見える、今よりも若干ふつくらとしたほつぺたに、今と変わらない大きな灰色の瞳。

……改めて思うがこれはヤバい、理性を失いそうな程に可愛い。きつと銀子ちゃん耐性が無く、加えて小学生耐性が無い者ならば即詰みだろう。

だが俺ならギリギリ踏み止まれる。銀子ちゃんと小学生に慣れておいて本当に良かった……。

「ほら銀子ちゃん。ここに居る二人は大きくなつた君自身だよ、ちゃんと挨拶してごらん？」

「ねえ八一。あんたの鍛え上げたロリコンテクを私相手に披露するのはマジで止めてくれない？」

「てな感じでね、生ゴミを見るような目で俺を見てくるこの子が高校生銀子ちゃん。その隣でクズを見るような目をしてるこの子が中学生銀子ちゃん」

「……高校生と、中学生のわたし？ え、なにこれ、どういう事なの？」

「うん、やっぱそういう反応になるよね。つっても俺達にもまださっぱり分からないし、どうやって説明したらいいかなあ……」

混乱した様子の小学生銀子ちゃん。そして刺々しい視線を俺に向けるダブル姉弟子。

その圧力に屈した俺は一旦小学生銀子ちゃんを抱っこから下ろす。そして一人追加

した事でより一層困惑さ加減を増した状況に頭を悩ませる。

世にも稀な銀髪美少女三人が勢揃い。

そしてそれは同一人物の年齢違い、素晴らしくも訳の分からないカオスな状況だ。

というかこうして三人が横に並ぶと、銀子ちゃんの年代の経過というものがよく分かる。身長や顔付きなどの微妙な変化が、そして胸部の変化の無さがありありと分かるではないか。

「ぶちころすぞわれ」

「すいません」

すると俺の思考の読んだらしい高校生の姉弟子から叱責が飛んできた。

さすがは16歳四段だ。この子の読みの力は最近輪を掛けて鋭くなってきたから困る。他の銀子ちゃんからは反応が無い点からも、高校生銀子ちゃんが中学生や小学生とは一味違う事を示唆している。

というか今の叱責は正しくて、先程の考えは本当の事を言う間違っていたりする。

時間の流れは偉大だ。なんののかんの言って実際の所はちゃんと変化している。特にこの俺はそれを身を以て知って――

「ねえ」

「ん？ なにかな、小学生の銀子ちゃん」

「その……あんたは大きくなった八一なのよね？」

「うん。そうだよ。君の知っている九頭竜八一は君と同じく小学生だろうから……そこから6年から8年ぐらい成長した姿がこの俺ってわけ」

「……へー」

すると小学生の銀子ちゃんは半眼になって、俺の頭の中から足の先までをじーつと観察して。

「……か、」

「か？」

「あ、ううん。……なんか、なんか微妙。もうちよつとカツコよく成長出来なかったの

？」

えっ!?

「同歩」

ええ!?! 中学生銀子ちゃんまで!?

「ちよつと待つてよ! それどういう……俺は十分カツコよく成長してるよね? ね!?!」

「……さあね。ロリ道に堕ちなければ少しはマシだったんだけど」

すると高校生の銀子ちゃんまで俺に更なる追い打ちを重ねてくる。き、厳しい……。

まあ本当にカッコよく成長したのかって聞かれると断言は出来ないんだけどさ。けれども高校生の銀子ちゃんとは恋人同士、真正正銘この俺の彼女な訳だし、彼氏にもうちよつと愛のある言葉をくれたっていいのに……のに……。

まあともあれ、だ。なにはともあれ、これで四人揃った事になる。

四人というのは実に座りが良い。さつきまでとは違つてこれで2・2の対局が出来るからね。

だからここはひとまず三人の銀子ちゃん達みんなで将棋をしよう。俺達の間にある問題は将棋が全て解決してくれるはずだ。

あーでもそうだしつきも言ったけどタブレット端末が無いんだよな。これは不便だ。このマンションは将棋会館から近いし、こうなったら安物でいいから盤と駒を買つてくるか……。

……とはならなかった。

何故なら俺の理性を真に殺す存在。それは小学生銀子ちゃんではなかったから。

小学生をも超える最強の刺客、それは別にいた。すでに最初からこの部屋に居ただ。だ。

「……んー」

そんな微かな声が聞こえたのは、部屋の隅で敷きっぱなしになっていた布団。

その毛布がもぞもぞと蠢く。それはどうやら敷きっぱなしではなく使用中だったらしい。

確かによく見るとちよつとだけ毛布が山のように膨らんでいる。けどその膨らみは注視しないと気付けない程に本当に僅かなもので……。

「……むう、うるさい」

「……あ」

お昼寝から目覚めたのか、もぞもぞと。

毛布の中から小さな小さな頭が、美しい銀髪の手が見えて。

「……あ、ああ、ああああ……！」

駄目だ。声が、震える。

その衝撃と言ったら、例えるなら落雷に直撃したようなものか。

……いや。そんなものじゃない。

だって俺にとってこの子とは、この子と出会って受けた衝撃は落雷なんて目じゃない。

「……ぎ、銀子ちゃん……」

「……だれ？」

俺を目にしてこてりと首を傾げる仕草。

その動きだけで、こうして見ているだけでもう吐きそうなくらい可愛い、愛おしい。幼い顔。銀髪。肌がとつても白くて、その全てがあまりにも儂く透き通っている。

その子はおぼけ——ではない。それは妖精か、精霊か、あるいは天使かといったところか。

そこには幼女の頃の銀子ちゃんが。

とびつきりに可愛い可愛い、俺と初めて出会った頃の銀子ちゃんがそこに居た。

「……子供の頃の、私だ……」

「わ、流石に小さいわね……」

「……で？ 八一、感想は？」

「……へブン」

「はっ」

「ここはへブンや……」

高校生と、中学生の頃と、小学生の頃と、そして幼女の頃と。

ここには計四人の銀子ちゃんが居る。そんな世界が何処にある？

そんなものは決まってる。ここはあれだ、間違いなく天国だ。

将棋の神様が住まう世界、天国に招かれたのだと俺はようやく悟ったのだった。

3. 夢の話

今、俺の前には銀子ちゃんが居る。

それも一人じゃない。贅沢にもたつぱり四人分、四人の銀子ちゃんがここに居る。

「……なんだか大変な事になったわね」

そう呟くのは銀子ちゃん。白のセーラー服を着た高校生の銀子ちゃん。

先日見事四段に昇段を果たして、世界初の女性プロ棋士となった銀子ちゃん。

可愛い可愛いこの子は何を隠そうこの俺、九頭竜八一の彼女、そしてお嫁さん（予定）だ。

「ていうか訳分かんないんだけど。なんで私が四人もいるのよ」

そう呟くのは銀子ちゃん。黒のセーラー服を着ている中学生の銀子ちゃん。

俺がつい見間違えてしまった通り、その容姿はぱつと見高校生の銀子ちゃんとよく似ている。

けれども確かな違いが、高校生よりは確かに幼い、そんなとても可愛い銀子ちゃんだ。

「小さい私に大きい私……八一まで大きくなっちゃってるし……」

そう呟くのは銀子ちゃん。制服ではなく私服を着ている小学生の銀子ちゃん。

つまりロリ銀子ちゃんだ。ロリロリな銀子ちゃん、その存在はもはや犯罪的と言える。

こんな言うまでも無い事なのだが、ヤバいぐらいに可愛い銀子ちゃんだ。

「ばか」

そう呟くのは銀子ちゃん。俺の目に焼き付いているあの日と同じ姿の幼女な銀子ちゃん。

それはもう奇跡の存在、おねむから目覚めたばかりでちよつと不機嫌そうな所も可愛い。

身長は俺の半分位しか無い。もはや問答無用で可愛い。尚この頃から口の悪さは健在である。

……とまあこんな感じで。

今、俺の前にはそれぞれ年代の異なる四人の銀子ちゃんが勢揃いしている。

なんと壮観な光景だろう。この場にいるだけで銀子ちゃん成分がモリモリ吸収出来る。

こんな楽園がこの世のものだとは思えない。

つまりここは天国だ。俺は知らない内に天国に辿り着いてしまったらしい。なんてこった。

「えーっと、それじゃまずは将棋の神様に挨拶してこないとね。名人は何処かなーっと」

「は？ 将棋の神様？」

「どうしてここで名人が出てくるのよ」

「八一、ただでさえ訳分らない状況なのに訳わかない事を言わないで」

上から順番に小、中、高と、それぞれの銀子ちゃんにツッコまれる。

「ばかやいち」

そして幼女銀子ちゃんまで。というかこの子さつきからばかとしか言っていないな？

とはいえ確かに。確かにこれ以上訳の分からない事を言っていないかもしれない。

脇道に逸れるのは止めて、そろそろ本題に入らなくてはならないだろう。

「……そうだね、とりあえず銀子ちゃん——」

と口にした途端、都合四人分の「何？」との声がハモリで返ってきた。

ちなみに幼女銀子ちゃんだけは「なに？」と舌つ足らずな喋り方だ。とてもラブリーである。

けど、ううむ……全員銀子ちゃんだから『銀子ちゃん』って呼ぶとそうなっちゃうよね……。

しかしこれではそれぞれの名前が呼び辛い。まずは呼び方を改める必要があるだろう。

ここに居る四人の銀子ちゃんそれぞれの違いと言えば年齢だけ。だとするとここは

「ええと……『銀子ちゃん』って呼ぶと分かりづらくなっちゃうからさ……

高校生の銀子ちゃんを『JK銀子ちゃん』

中学生の銀子ちゃんを『JC銀子ちゃん』

小学生の銀子ちゃんを『JS銀子ちゃん』

幼女の銀子ちゃんを『幼女銀子ちゃん』って呼ぼうと思うんだけど……どうかな？」

「センスない」

「安易すぎ」

「大体最後の幼女銀子ちゃんなんて何のヒネりもないじゃないの」

ボロクソに言われた。トリプル姉弟子ともなると俺への攻撃力も3倍だ。

ちなみに幼女銀子ちゃんは「じえーけー？」と小首を傾げている。めちゃんこ可愛い。

「とにかくくつ、センス無かろうが何だろうかこういうのは分かりやすさが一番だって！

今から君達の事はそう呼ぶからね、ハイ決定！」

「……ま、この際呼び方なんてどうでもいいけど。それで八一、さつきは何を言い掛けた

の? ていうか誰を呼ぼうとしてたのよ」

「あ、うん。高校生の……じゃなくてJK銀子ちゃんに言おうとしたんだけどさ、将棋盤と駒が足りてないから将棋会館まで買いに行かない?」

「え?」

「あと全員分の飲み物とかお菓子も欲しいよね。食事は出前でいいとして、他には……」
「ちよ、ちよつと待ちなさい。そんな事よりも先に考える事があるでしょ」

慌てたように口を挟んだJK銀子ちゃんの言葉に、俺はうん? と眉を顰める。

先に考える事? 将棋盤と駒が足りない問題よりも優先する事が俺達の間にあるのだろうか。

「買い物なんてしてる場合じゃないでしょ。それよりこの状況をどうするのよ」
「この状況って?」

「だから私が四人も居るこの状況。この訳分かんない状況を解決しないと……」

「え、何で? 何を解決する必要があるのさ」

「何をつて……そりゃ八一にとっては私が増えてラッキーかもしれないけどね、こつちはそういう訳にもいかないの。大体私が四人も居るこんな状況を誰かに見られでもしたらどんな騒ぎになるか……」

「大丈夫だって。騒ぎになんてならないよ」

どうもJK銀子ちゃんはまだ混乱しているのか、少々ズレた心配をしちゃっている。事ここに至っては騒ぎとかどうとか、そんな事を心配する必要なんて全くないだろうに。

そりゃあ空銀子が四人も居る姿をマスコミとかに見られたら『浪速の白雪姫は四人姉妹だった!』『みたいなゴシップが上がるかもしれないが、しかしそれはあくまで現実世界の話であって。

「だってこれ、夢でしょ?」

「え? ……夢?」

「うん。ゆめ。だって銀子ちゃんが四人も居るんだよ? こんな夢に決まってるじゃんか」

——そう、これは現実ではなく夢だ。

さすがに目の前にあるこの異常な光景、それをそのまま受け入れる程に俺は馬鹿じゃない。

銀子ちゃんが4人も居る。そんな事は普通に考えればあり得ない話だと一秒で分かる。

そんなあり得ない事が起きている以上、これは俺が見ている夢、という答えになるだろう。むしろこれが夢じゃなくて何だというのか。

「夢なんだから騒ぎも何も無いし、夢なんだからこの状況を解決云々もなににも無いでしょ」

「……それは、そうかもしれないけど……」

これは夢。その事を半分ぐらいいは受け入れ、けれども半分ぐらいいは疑っているのか、JK銀子ちゃんは複雑な表情で口を開く。

「でも八一。これって夢にしてはなんか……随分と現実感があるような気がしない？」

「あ、それ分かる。手触りとかもしつかりあるし、正直これが夢だとは思えないんだけど……」

「ちよつとちよつと、年上の銀子ちゃんズがそんなんでどうするのさ。JS銀子ちゃんこれが夢だつてちゃんと分かるよねー？」

「えつと、まあ……夢、だとは思う、けど……でも、なんか本物っぽい、ような気も……」
さすがは同一人物というべきか、JKもJCもJSも皆同じような思考で複雑な表情となる。

けれどもこれは困ったな。どの銀子ちゃんもこの現実をまだ受け止められていないらしい。

「仕方ないなあ、それじゃあ多数決取りまーす。これが現実だと思う人手を上げてー」

「……………」

そうして俺が挙手を促してみても、案の定そこで上がる手は一つもない。

「それじゃあこれが夢だと思おう人手を上げてー」

「……………」

即座に手を上げた俺に続いて、三人の銀子ちゃんがおずおずと控えめに手を挙げる。まあそりやそうだ。この現実を真に現実だなんて思う人間が居るはずない。

ちなみにそんな中で幼女銀子ちゃんは一人おめめをこしこし擦っていた。まだ眠いのかな？

「はい、多数決の結果これは夢だと決まりました。……反論がある人はいるかな？」

「……………反論は、ないけど……………」

「だよね。だからこれは夢なんだ。確かに銀子ちゃん達の言う通り、ものに触れた感触とか匂いとかありとあらゆる事が本物っぽい気がするけどさ、あくまで本物っぽい夢だつて事なんだよ」

「……………」

ここまで言われるとさすがに応手も無いのか、銀子ちゃん達は沈黙を返してくる。

そう、これは夢なのだ。

俺の前に銀子ちゃんが四人居る。そんな事は現実にはあり得ない。

だからこれは夢。俺が見ているこの光景は所詮仮初めのものでしかないのだ。

だが——それがどうした？

別に俺はこの状況がなんであろうが構わない。そんな事に興味はない。

昼寝中の俺が見ている夢でも。はたまた事故にあつて意識を無くした俺が見ている回想でも。

この際死んでしまった俺が辿り着いた天国であろうとも、別になんだつて構わないのだ。

とにかくこんなリアリティ溢れる夢ならば、俺はもうこつちが現実で一向に構わない。

だつて銀子ちゃんが四人も居るんだし！ 四人の銀子ちゃんですら幸せも四倍だね！

「とにかくさ、これは俺達が見ている夢なんだからきつとその内に覚めるつて」

「……ほんとに？ ほんとに覚めるの？」

「本当だつて、JS銀子ちゃん。だから自分が四人も居る事を怖がつたり不安がつたりする必要なんかないんだ。それよりも思い切つてこの状況を楽しんじゃつた方が得だつて」

「……それは一理あるかもしれないけど。でもそれつて得するのはあんだだけじゃないの？」

JSに続いて口を開いたのはJK銀子ちゃん。さすがにこの子は16歳四段、鋭い所

を突く。

まあ確かに。銀子ちゃんが四人も居るこの状況で得するのつつつたら概ね俺だろうけど。

でも仕方ないよね？ なんせそういう夢を見ちゃってるんだから。これ別に俺悪くないよね？

「ねえ」

するとその時、俺に向けて天使から声が掛かる。

「お、幼女銀子ちゃん、なにかな？」

「お腹すいた」

「おっと。もう夕飯の時間……はまだ早いな、となるとおやつの間か」

「この子のお腹を空かせておくなんて神をも恐れぬ所業だ。とてもそんな真似は出来ない。」

「ちよつと待つてね、すぐに何か買ってきてあげるから。……ほらJK銀子ちゃん、幼女銀子ちゃんもこう言ってる事だしさ、とりあえず将棋盤と駒、買いに行こうよ」

「……そうね。あんたの言う通り、これ以上この状況に悩んでいても仕方無さそうだし」
遂に思考を放棄した……もとい、現実を受け入れる気になつたのか。

はあ、と嘆息したJK銀子ちゃんは、その綺麗な灰色の瞳を俺に向ける。

「けど八一、この夢がいつ覚めるかは分からないじゃない。もし長く掛かったとしたら……例えば今日の夜とかはどうするのよ」

「夜つて夕飯？ それは出前で済ませれば……」

「そうじゃなくて。この部屋、布団とかは二人分しかないじゃないの」

「あ、そう言えばそうだね。こりやすぐに買ってこないと……つて、寝具を3セット分？

当日配送してくれる店あるかなあ……」

「無かつたらあんたが運びなさいよ」

「ええ!? でもそれつてメチャクチャ大変じゃない!?」

思わず声を荒げてしまったが、けれど確かにそんなものを女の子に運ばせる訳にもいかない。なんせ銀子ちゃんはまだでさえ非力だしな。

だが布団に枕、毛布やシーツが3人分となると俺一人で運搬可能な許容量を超過している。ううむ、こりや金に物を言わせてタクシーを数台呼ぶしかないかな……。

とはいえ、JK銀子ちゃんの言う通りだ。この夢からいつ覚めるのかは分からないが、その時まではこの状態のままだという事。

となると銀子ちゃんズがこの部屋で生活する、生活出来る環境を整えなければならぬ。まるで生活感が無かつた以前と比べてちよつとは買い足したものはあるけど、まさか5人で暮らす事になるなんて想定してないし——。

……と、こうしちやいられないな。急いで色々な準備を整えなくちや。

4. JKの話

——こうして。四人の私と八一との共同生活が始まってしまった。

……この字面だけでもう意味が分からないわね、ほんとに……。

私の名前は空銀子。

先日三段リーグで昇段を果たして、四段となったばかりの新米プロ棋士である。

そして八一が勝手に『JK銀子ちゃん』と呼ぶ事にしたらしい私、つまりは高校生の私だ。

そんな私を含む四人の私がここには居て、そしておまけに八一が一人。

……まあね。確かにこんな光景が現実で起こり得る訳がない。多数決で決まった通り、これは私が見ている夢か何かなのだろう。

これが夢だと自覚しながら見ている夢、たしかそれを明晰夢って言うんだっけ？

生憎と私は明晰夢を見た記憶が無いからなんとも言えないんだけど、けれどもこれは明晰夢ともちよつと違うような気がしている。

だってこの夢はあまりにリアルだ、あまりに強い現実感がある。目の前にある全てから伝わる感触、不確かなものではないその鮮明さを感じる度にこれが夢だなんて思えなくなる。

……いやいや、分かっているわよ？ 分かっているんだからね？

さつき八一も言っていたけど、これは夢であって決して現実じゃない。

けど……正直八一の言い分もあやしいというか、今のあいつの思考はなんていうか……。

「ねえ八一」

「ん？ なに、JK銀子ちゃん」

「寝具の話題ついでに聞いておきたいんだけど。あんた今日ここに泊まるのよね？」

「うん、そうだけど」

——だってせっかくの銀子ちゃん四人を逃す手は無いよねっ！

との心の声が聞こえたが今は無視する。今重要なのはそちらではない。

「一応聞くけど……明日は？」

「明日？ 明日も泊まるけど？」

「なら明後日は？」

「そりゃ明後日も泊まるけど？ というかこの先ずつとここに泊まりますけど？」

「でもあんた家にあの小童がいるじゃない。そんな何日も放つといていいわけ？」

「うん、大丈夫大丈夫」

「……ていうかあんた対局の準備はいいの？ そろそろ竜王戦の——」

「うん、そつちも大丈夫大丈夫」

「……大丈夫大丈夫って、どうしてそこまで断言出来るのよ」

「え、だってこれ夢だし」

八一はあつけらかんとした顔で答える。

その答えは確かに間違つてはいない……とは思うんだけど、あまりに訳分からなすぎて全てを夢に丸投げしているだけのようにも聞こえる。

「というかこのバカ、私が四人居る状況に浮かれすぎてまともな思考を失っているんじゃない……。」

「え、ちよつと、ちよつと待って」

とその時、別の私が——中学生の私が、JCの私はその口を開く。

「泊まるってここで？ ここで全員眠るの？ その……八一も!」

「そりやそうでしょJC銀子ちゃん。他にどこで眠るってのさ」

「け、けどつ、ここってこのリビング一部屋しかないじゃない!」

「そりやここワンルームマンションだし。ねえJK銀子ちゃん」

「……なに？　こんな狭い部屋を購入した私が悪いとでも言いたいのか？」

この部屋は八一の言う通りワンルーム、5人で泊まるのにはかなり手狭な造りをして
いる。

けれどもそもそもこの部屋は将棋の研究用に静かな場所が欲しかったから購入した
だけで、なにも住居にするつもりで購入した訳では無い。

今では一応布団が二組あるけど、それでも来客を泊める事は想定していない。とい
うか私を三人泊める事になるなんて想定出来るはずがないでしょ。

「まあ幸いリビングは結構広いからさ。五人が並んで眠るだけのスペースはあるつて」
「それは、それはそうかも知れど……けど、でも、八一が……！」

「俺？　俺がどうしたの？」

「う、べ、別にどうつて事はないけど……！」
「？」

次第に顔が赤くなり始めたJ.Cの私。

だがその一方、八一はその顔にはてなマークを浮かべるだけで。

……こうやって客観視するとよく分かる。我が弟弟子ながらなんと鈍い男なのか。

他人事ながらに……いや、自分の事？　とにかく見ているだけでムカついてくるとい
うか、一発どついでやりたくなる。

勿論私は八一などと違って鈍くない。だからJ Cの私が気にしている事がよく分かる。というか同一人物なのだから簡単に分かる。

あの子は部屋の狭さ云々はどうでもよくて、ただ八一と同じ部屋で眠る事に照れている。あれはそういう表情だ。こうして見るだけであんなに分かりやすいのに、あのバカ八一ときたら。

……ううん。これ、色んな意味であんまりバカに出来た事じゃないわね。え、中学生の私ってあんなに分かりやすいの？ ちよつとヤバくない？

……ま、まあそれは置いておくとして、あの子がそれになつちやう気持ちも分かる。

あの子の具体的な年齢はまだ聞いていないから分からないけど、見た所は中学2年か3年の頃の私だと思う。つまり八一が師匠の家を出て、私も実家に戻った頃の空銀子。

つまりあの子にとって八一と同じ部屋で眠るのはご無沙汰な訳で、それで照れているのだろう。

そもそもそれ以前の問題として。

あの年頃の私は……その、すでに八一の事をもう……すぐくその、心の中で……その、ご、ごによごによ……な、訳で。

となれば一緒にの部屋で眠る事を意識しちゃうのは当然だろう。ただ実際の所、寝てみ

れば意外と気にならないと言うか、むしろ懐かしい感じがして良く眠れたりするんだね。

「ねえ、高校生のわたし」

とその時、小学生の私が私の服の裾をくいくいと引つ張る。

……ん。なんか……確かに八一が言っていた通り、私が私が、つてなるとどうにも分
かり辛い。

いつそ私も別の私の事は『J C 銀子』とか『J S 銀子』とか呼んだ方が良いのかもしれない。

けど自分の事を銀子と呼ぶのもなんかねえ……なんて事を考えていると、未だ会話
中の中学生の私と八一から離れるように、小学生の私は私を連れて部屋の隅へと移動す
る。

「なに、どうしたの？」

「あつちにいる……中学生の私は何をあんなに気にしているの？」

「それは……ってそっか。小学生の私は八一と一緒に寝る事なんて気にならないわよ
ね」

ここに居る小学生の私、その頭にはあれが無い。私が女王のタイトルを獲った時に八
一から貰ったプレゼント、雪の結晶型のブローチが。

となるとこの子は小5か小4ぐらいだろう。まだ……まだ八一と手を繋いだままの私だ。八一が隣に居るのが当たり前の私で、だからこそそれが理解出来ないのだろう。「そうね。中学生の私が気にしているのは……」

……え、なんて説明したらいいのこれ？

だってその気持ちをそのまま言うのは……なんか自分の過去の事のように……相手が私であろうと、いや私だから？ とにかくちよつと恥ずかしい。

「……中学生の私が気にしているのはね。簡単に言えば……思春期のせいなの」「思春期？」

「そうよ。小学生にはまだちよつと分かんないかもしれないけど、あんたももつと大きくなったら自ずと分かるようになるから」

とそんな感じで私は回答をはぐらかした。

すると小学生の私はまるで対局中に長考しているかのような表情になって。

「……大きくなったら？ 年齢が関係あるの？」

「そうよ。ああいう事は年齢が上がるにつれて段々と気になり出しちゃう事なのよ」

「でも、それじゃあ中学生よりも年上の高校生のあなたはどうして気にしてないの？」

「っ!?! そ、それ、は……!?!」

——す、鋭い……!?!

何と鋭い一手を指す小学生だろう。この切れ味は枰創多にも真似出来ないのではないか。

小学生でこれなら将来有望だ、さぞ強い棋士になるに違いない。……なんて、逃避思想まがいの自画自賛はここまでにしておくとして。

……まあ、そう……ね。

まあなんていうか？　今JSの私が口にした言葉はけっこう核心をついているというか？

このワンルームで八一と一緒に寝る。それをこの私はあまり気にはしていない。

だってそれは……それは私と八一はもう……もうそういう関係だから。

だって八一は、八一は私の、その……か、か……かえち？　な、訳だし？

ああもう、未だにこれは慣れない！　なんか恥ずかしい！　もう封じ手を開けて想いを交わしあつたあの日から結構経っているのに、このキーワードだけは未だに慣れないよお……。

「顔がにやけてる」

「に、にやけてないっ！」

JS銀子（もう面倒だからこう呼ぶ）の言葉を私は慌てて否定する。

ていうかこの小学生ちよつと鋭すぎじゃない？　我が事ながらに少し怖くなってき

ただだけ。

それともまさか……私の方に問題か？ 念願叶って四段に到達したこの私が、まさか中学生の私と同じぐらいに分かりやすいなんて事は……いやいや、そんなまさかまさか。

……ま、とにかく。とにかく私が言いたいのは、私とあのバカはもうそういう関係だつて事。

この中で一番年上となるこの私は、八一との関係性だつて当然一番進んでいる訳で。そしてここからが大事なんだけど……。

今ここに居るあの八一。あの八一はこの私が一番良く見知っている九頭竜八一だ。

高校生1年生の私よりも年齢が2つ上、この前の誕生日で18歳になった八一。この私の……こ、恋人である九頭竜八一なのだ。

仮に八一の立場からしてみれば、この私こそが一番見知っている空銀子16歳だという事。

となると当然……ここに居る八一は当然、この私のものだという事になる。

だつてそうでしょ？ だつてもうとづくに私達はそういう関係なんだしっ！

だつたら八一は私のものだ。たとえこの私だけが独占したつてなんの問題も無いはずだ。

……いや、別に違うわよ？ 違うからね？

なにも本気で独占したいだとか言っている訳じゃないし、他の私を警戒しているとか、恋敵のように感じている訳じゃない。

ただあくまでそういう関係なのだから、そこは一応ちゃんとしておきたいというだけで……。

……そして言ってしまうと、問題は多分私の方ではなくて……きつと八一の方にある。

だってそうだろう。私にとっての八一にはなんら変化など無いが、八一にとっては突然この私が3人分も増えた、それも年代が異なる私に出会えたという事になるのだから。

……うん。これはどう考えても危険だ。

それが誰にとつての危険なのか、この私なのかそれとも他の私達なのかはたまた八一にとつてなのかはよく分からないけど……とにかくこれはすごく危険だと思う。

例えば——八一が幼女銀子ちゃんと名付けた私。この頃ならまあ……まあ大丈夫だろう。

この頃の私はなんて言うか、そこまで八一に入れ込んでいないと思うから。というべ

きか、この子はまだ4歳とかそこらで、到底何かしらの想いが芽生える年齢ではない。

そして八一の方も大丈夫。さすがにこの年齢の私に何かしたりはしないだろう。

……いや、しなないと思いたい。

したらぶちころす……では済まされない。そうなたら外側から鍵が掛けられるタイプの病室に長期入院させる必要があるだろう。

けれども八一がJS銀子ちゃんと名付けた私。率直に言つてこの頃からはもう危険だ。

この頃の私はもう多分、八一への……こ、好意が芽生えているつていうかつ！ なんていうかその、要はもう好きになつちやつてるはずなのっ！

……うん、そのはずだ。事が自分の事だけによく分かる。八一が隣にいるのが当たり前だから本人もまだよく分かつていないかもしれないが、その胸の内には大きな気持ちがあるはずだ。

そして八一の方だけ……言いたくないけどこつちもやはり危険だ。

なんせこいつはロリコンだ。小学生は大好物だ。三度の飯より好きはずだ。

こうしてロリコン疑惑を掛ける度に本人は「だから俺はロリコンじゃないですつて！ 大体もう銀子ちゃんと付き合ってるじゃんか！」みたいな感じで否定をしてくる……

が。

しかし私の疑念は尽きない。つい先程JSの私を見て「ランドセルツ!？」と気持ち悪いぐらいにテンションを上げていた八一の姿、あれを私はまだ忘れていない。

そして八一がJC銀子ちゃん名付けた私。この頃についてはもう……言うに及ばず、つて感じ。

そして八一の方も多くを語る必要は無いだろう。当然ながら危険度はMAXだ。

つまりはそんな状況だ。

そんな状態で私は他の三人の私と、そして一人の八一と共同生活を送るという事。

……うん。やっぱり危険だ。どう考えてもこれは危険だ。

さつきも言った通り、別に警戒してるとか恋敵だとかそういうのじゃないんだけど――

いくら相手が私だからって――それでも八一は私のものなんだからね？

5. 初日の話

俺と四人の銀子ちゃん達の共同生活。

まるで夢のような、というかまさしく夢そのものな生活がスタートした。

人間が生活を送るとなれば、必然的に無くてはならないものというのが存在している。

それが衣・食・住の3つだ。けれどJK銀子ちゃんが研究用にと購入したこのワンルームマンションの801号室には、現状その一部が欠けている。

『住』に関しては一応備わっている。さすがにワンルームは狭いが文句は言えない。

そして『食』の部分は出前やコンビニで何とか済ませるとしても『衣』の部分は大変だ。

それぞれの銀子ちゃん達や俺が必要とする服や着替え類がまず必要だし、他にも布団や毛布などの寝具類は現状二人分しか備わっていないし、バスタオルやハンドタオルなども足りていない。

それらは早急に必要となるものだ。まさか銀子ちゃんズを今日フローリングの上で

寝かせる訳にもいくまいし、急いで準備をしなきゃ——
——と思っていたのだが、どうやらそれは杞憂だったようだ。

というのも、この部屋のリビングには押入れが設置されている。当時は殆どゴミ入れのようになっていたその押入れも、姉弟子の三段リーグが終了して俺がこの部屋にちよくちよく訪れるようになって以後、一度綺麗サツパリ大掃除を敢行した。

だから今では本来の機能を取り戻しており、とにかくそんな押入れを一度開けてみた。三人分の寝具を買ってくるとしてこの中に収まるかなあと、確認の為に開けてみてもりだったのだが……。

「……八一、これって……」

「……うん。なんていうか……凄いな」

その光景に唾然とするJK銀子ちゃんと俺。

引き戸を開けた押入れの先、そこはまさかの異次元だ、異次元に繋がっていたのだ。

……何を言っているのか分からないと思うが、これは決して出鱈目な話ではない。

本来なら縦横共に2m程で奥行き1m程の暗い押入れの中、そこはさながらもう一つの部屋、ちょうどリビングと同じぐらいの空間が広がっていた。

そしてその中には必要な『衣』が、つまり銀子ちゃん達や俺が必要とする服や着替え、夜眠る為に必要な寝具やタオル類など諸々が全て揃っていた。

「……わあ、なにこれ凄い……」

「私の制服の替えまであるし……なんだか至れり尽くせりって感じね」

J S 銀子ちゃん、J C 銀子ちゃんの二人も驚きに目を丸くしている。

しかし本当に凄いなこれは……それぞれ身長や体付きが異なる銀子ちゃんズ用にと、あらゆる衣服類が取り揃えられているではないか。

こうなると押入れというより衣装室のようだ。照明が無いのだけはネックだが。ていうかおお、下着まであるし、なんだかこれ程に色々な服が揃っていると眺めているだけで時間が潰せそうだ。……いや、変な意味じゃなくてね？

「……ねえ八一。これ、私が居ない間にあんたが密かに揃えていた代物とかじゃないわよね？」

「さすがに無理があるでしょそれは！ 大体この押入れ、位置的に考えると隣の802号室を完全にブチ抜いているし！」

銀子ちゃんの知らぬ間に隣の部屋を購入して、銀子ちゃんの知らぬ間に押入れを繋げたのだとしたら……それはさすがに冗談では済まない、俺の両手に手錠が掛かってしまう事態だ。

さすがにこの押入れの奥が802号室に繋がっているという事は無く、そうなることは異次元としか表現しようがない訳で……。

そしておかしな事といえば他にもある。

キッチンや洗面所には購入した覚えのない大型家電、冷蔵庫や洗濯機などが設置されていた。

その他にも色々、俺と銀子ちゃん達がこのワンルームで共同生活を送る準備が万全にされていて……つまりはまあ、そういう事なのだろう。

——ああなんて気が利くんだ将棋の神様！ 本当に有り難うございます名人！
……と、いう事で良いのだろう、恐らくは。

だがそんな事を思うと同時、俺と三人の銀子ちゃん達は改めて思った。

これは絶対に現実ではない、間違いなく夢なのだと言強く実感したのだった。

……え、幼女銀子ちゃん？ あの子はこの押入れを見ても特に驚いてはなかったです、はい。

俺達がこの押入れを見てビックリしていたそのすぐ隣で、JK銀子ちゃんからおやつとして貰ったらしいポッキーのチョコ部分だけをペロペロと舐め取っていた。死ぬ程可愛い。

とまあそんな訳で。

ここでの共同生活を送るに当たって、衣・食・住問題はこの通り全て解決された。

だが衣食住というのは生活する上で最低限必要なものであって、豊かな生活を送る為にはそれだけで事足りるというものではない。

俺と銀子ちゃん達が豊かな生活を送ろうとするならば、何は無くともこれだけは絶対に必要な物がある。それは言わずもがな、勿論将棋だ。将棋なくして俺達は生きていけない。

だがこの部屋には将棋盤と駒が無く、あるのは将棋アプリが入ったタブレット端末が一つだけ。

俺とJK銀子ちゃんの二人きりで研究会をするならこれ一つで十分なのだが、そこに銀子ちゃんが三人増えた今となつては到底足りない。というか幼女銀子ちゃんに至つてはまだ年代的にタブレット端末を見た事が無いらしく、使い方をまるで理解していなかったし。

ちなみにそんな幼女銀子ちゃんに一度端末を与えてみた所、画面から将棋アプリを開こうとして色々四苦八苦した挙げ句に諦めたのか、ぼいっとタブレットを捨てちゃった様子はとても可愛らしかった事を明記しておく。

やはり幼女の手には最新電子機器は荷が重い。彼女の為にも現物の将棋盤と駒を買ってこよう。

そう思つて俺はJK銀子ちゃんと一緒に買い物に出掛けた。関西将棋会館まで足を

伸ばして、実物の将棋盤と駒、そしてあの子が好んで持ち歩いていたマグネット式の小さな将棋盤も。

他にもあの子が好みそうな将棋の指南書や解説本など、色々と必要そうなものをこの際奮発して買っちゃう事にした。

「八一、この本なんて良いんじゃない?」

「どれどれ……え、こんなに難しいの読める? あの子4歳だよ?」

「読めるわよ。ていうか私が4歳の頃どうだったかをあんた知ってるでしょ」

「……そうですね。考えてみたらこれくらいは楽勝で読破してたつすね、姉弟子は」

姉弟子は（ここは将棋会館の売店内なので姉弟子と呼ばなきやいけないルールだ）俺と違って漢字に強かったからなあ。幼女の頃は分厚い本をサクサク読んじやうスパー幼女なのだ。

そしてここ関西将棋会館の売店には本以外にも色々なものが売られている。中にはファン向けに棋士達のグッズなどもあって、現在空銀子に関するグッズは完売御礼が続いて生産が追いつかない中、俺に関するグッズはだだ余りだったりする。

……別に? 拗ねてなんかないし? この子に人気で勝てる訳が無い事はもう分かっているし?

けどやっぱりちょっと寂しい、というか虚しい。一向に在庫の減らない俺の扇子が可

哀想だし、一つ買っていつて幼女銀子ちゃんにあげようかな。

そしてあの子を今の段階から棋士・九頭竜八一のファンにする為の英才教育を施すのだ……なんて事を考えていると。

「……ねえ、八一。ちよつとこつち来て」

姉弟子が俺の腕を取って、周囲の人の目を気にしてか売店の隅っこまで移動する。

その顔は不安そうな表情をしていた。一体どうしたんだろう？

「何ですか、姉弟子？」

「あの……さ」

「うん」

「……その、大丈夫なの？ あれは……」

「……え？」

あれ？ あれとは何だ？

と、俺は数秒ほど悩んで。

「——あ、ああ！ うん、まだ大丈夫。全然大丈夫だから心配しないで」

「……そう。なら良いんだけど……」

慌てて取り繕ったような俺の言葉に、JK姉弟子は安心した様子で胸を撫で下ろした。

そうして将棋盤と駒、本などを購入して俺達はマンションに戻ってきた。

八階の801号室、そのドアプレートには相変わらずあの文字が。『銀子ちゃんを可愛い可愛い×5するだけの部屋』と書いてある（これ銀子ちゃんが書いたんだよね？と尋ねたらそんな訳ないでしょと白い目で見られた）

けれどそれがこの夢の目的というか、この夢を見ている意味とはきつとそれなのだろう。ならば俺はもう開き直って、思う存分銀子ちゃんを可愛い可愛いしちゃうつもりだ。

とはいえ、そんな決意を銀子ちゃんに言ったら真っ赤になっちゃうから口にはしないけどさ。

……いや。

「あのさ」

「なに？」

「俺はもう開き直ってね、思う存分銀子ちゃんを可愛い可愛いするつもりだから」

「ひゃ!? な、なに、急になに言ってるのよ、このバカ……♡」

あ、やっぱりすぐ真っ赤になった。そっぽを向いた事で見える横顔が本当にきれいなあ……。

最近はもうむしろ銀子ちゃんの喜びそうな事を沢山声に出してあげて、この子が真っ赤になって照れた顔を見たいなあと思つてしまふ俺が居る。

だがまあそれも仕方が無いというものだ。なんせ銀子ちゃんは可愛すぎるのだから。

そうして部屋に返つてきて早々、俺は少女銀子ちゃんに扇子をプレゼントした。

「はい、これあげる」

「……なにこれ？」

すると少女銀子ちゃんは扇子を受け取つて、バツと開いては閉じ、またバツと開いては閉じ……を三回ぐらい繰り返した後。

「いらない」

なんなら興味を引かなかつたのか、ポイツと投げ捨ててしまった。

「ひ、酷い……酷いよ銀子ちゃん……」

「……私、4歳の頃はまだ扇子なんて使つてなかつたし……」

幼女な自分が仕出かした所業を見てか、JK銀子ちゃんが控えめにフオローを入れ
る。

「じゃあ……JS銀子ちゃん、これ使う？」

「……私？」

今度は小学生の銀子ちゃんに与えてみた。

すると彼女はその扇面に書かれている「九頭竜八一」の名を見て僅かにその目を見開いた。

「これって……ねえ、八一は……八一はプロになったの?」

「え? ってそっか、J S 銀子ちゃん知らないんだね。そうだよ、俺はプロ棋士になったんだ」

「……ふうん、そうなんだ……」

何やら思う所があったのか、J S 銀子ちゃんは俺の事をしげしげと眺める。

そして一応は気に入って貰えたのか、その扇子をポケットにしまい込んだ。

そうして時刻はもう夕食の時間だ。

五人分の料理を作るのは手間だしその能力も無いので、今日の夕食はピザを取った。

計2枚注文したピザを4人の銀子ちゃんズがもしやもしやと食べる様は中々に見ものだった。とかうかばーっと見てたら次々とピザを食われて俺の手元には一切れしか残らなかった。銀子ちゃんズは見かけによらず健啖家なのだ。

食事を終えたらその次は風呂の時間。

当然お風呂は別々に入る事になったんだけど、ただこの中で一人だけ、幼女銀子ちゃんだけは幼女という事もあって一人でお風呂に入るのは難しい。浴槽で溺れちゃった

りでもしたら大変だしね。

幼女の入浴には大人が付き添う必要がある。そしてこの中で大人と言えば……分かるな？

「じゃあ幼女銀子ちゃんは俺と一緒に——」

「どきなさいクズ」

それは実にドスの利いた声だった。

でもだつてー、この中で俺だけは18歳だしー、18歳と言ったらもう大人だしだしー……。

などと言う屁理屈はまるで通じず、JK銀子ちゃんは幼女銀子ちゃんの手を掴むと、俺を無視してすたすたとバスルームへ向かっていった。

そうして浴室にライトが灯り、やがてシャワーの水音が扉ごしに聞こえてくる。

……むう。銀子ちゃんのお風呂……か。裸になった銀子ちゃん、一糸纏わぬ銀子ちゃんのを俺はつついっ想像してしまう。

いやそれどころか、今は幼女銀子ちゃんと一緒に入浴している訳で……こんなの不埒な妄想をしてしまうのを避けられないというものだろう。

お風呂で銀子ちゃんが、銀子ちゃんにそっくりな幼女の世話をあれこれ焼いてあげている。

そんなシーンを想像すると……これはなんというか……若妻？ いや若母？ 感が凄い。これがJKとJCとかなら姉妹感になるんだろうけど、JKと幼女だとそんな感じだ。

……うん、これはいい。『銀子ちゃん』に『妻』とか『母』とかそういうキーワードの合わせは実に良いね。是非この俺も『夫』としてそこに混ざりたいものなのだが……。とそんな妄想をしている内に二人が風呂を上がって、JC、JSの銀子ちゃんと続いて入浴した。

え、俺？ 俺は最初からレディファーストという事でみんなに先を譲ったよ。別に他意は無い。

そうして最後に銀子ちゃん四人分の残り湯を味わうように身体を癒やした。決して他意は無い。

そして風呂を上がったからは各自思い思いに時間を過ごして……。

今日は4人の銀子ちゃんと出会って初日という事もあってか、俺も銀子ちゃんズも何処かよそよそしいというか、落ち着かない雰囲気の中にいた。

唯一そのような空気を気にも留めない存在、幼女銀子ちゃん。この子の唯我独尊さ加減は自分が何人いてもお構いなしといった感じなのだが……。

「ねる」

生憎と幼女なのでおねむの時間が早い。

9時を回った頃にはもう限界が来たのか、俺が敷いてあげた布団にもぐり込んだ。

「どうする？ まだちよつと早いけど、でも……」

「……そうだね。今日はもう俺達も寝ようか。幼女銀子ちゃんが眠っちゃったのに照明を付けたままにしているのも可哀想だしさ」

今日はもうビックリした事が多すぎて、早めに身体を休めたいという気持ちは同じのようだ。

幼女に合わせて夜更しせず、俺も銀子ちゃんズも早めに眠る事にした。

こうして俺と銀子ちゃんズの共同生活、その一日目が終了したのだった。

6. 関係性の話

俺と銀子ちゃんズの共同生活が始まってから、今日で4日目となった。

その間俺はずっとこの部屋に泊まっている。当然4人の銀子ちゃん達も一緒だ。

だがそうになると、この4日間俺は一度も自宅には帰っていないという事になる。そしてその事情を説明する電話の一本すらもいれていない。

4日間も音信不通で連絡無し。となれば俺の家に居る内弟子のあいだって心配するだろう。

そしてついにて言ってしまうと、あいとは別のもう一人の弟子の方、週に2回ある天衣への将棋の指導もこの4日間の内にすっぱかしている。

となれば当然向こうから俺に対する何らかのアクションがあつて然るべきなのだが、しかしこの生活が始まってから俺のスマホは一度も着信音を鳴らしはしない。勿論故障しているわけじゃないよ？

それは何故か。答えは簡単、これが夢だから。

俺達が寝泊まりしているこの部屋。この部屋はもう俺の知っている801号室では

なくて『銀子ちゃんを可愛い可愛い×5するだけの部屋』なのだ。

この部屋で俺がすべき事は銀子ちゃんを可愛い可愛いするだけ。それがこの部屋、ひいてはこの夢の目的であって、だからこそ壊れている訳でもない俺のスマホは着信音を鳴らしはしないのだろう。

という事で、俺は早々にこの日々を夢だと断じている為、銀子ちゃんに関わる以外の事については手を出す事を止めにした。

それが現状の俺のスタンスであり、だからこそちよつと不思議に感じてしまうのだが

「……ほら、ハンカチとティッシュは持ったの？」

「うん、持った」

時刻は朝。JC銀子ちゃんの言葉にJS銀子ちゃんが素直に頷く。

基本的に銀子ちゃんとは自分が認めた相手以外に世話を焼かれるのを嫌う生き物なのだが、さすがにその相手が自分自身とあつては無闇に反発する事はないらしい。

そしてそれは銀子ちゃんズ共通の考え方（同一人間なのだから当たり前だ）な為、同じ部屋に自分が四人居る状況でも無用な対立が生まれたりはしなかった。この数日間ですんなり事も分かってきた。

「仕度は出来たわね。それじゃあ行くわよ。……八一、鍵閉めて」「はいよー。気を付けて行ってらっしゃーい、銀子ちゃんたちー」

そしてJK銀子ちゃんが玄関ドアを開けて、そんな彼女達に俺は片手を振って応える。

そのすぐ隣では幼女銀子ちゃんもちっちゃなおててをふりふりしていた。可愛い。

そう。意外と言うか何と言うか……銀子ちゃん達は朝になったら学校に登校するのだ。

いやまあ彼女達は学生なのだから学校に行くのが当たり前なのかもしれないが、それにしたってわざわざ夢の中で……と感じてしまうのは俺の感覚が間違っているのだろうか。

とにかくそんな訳で、学生の身分である銀子ちゃん達は毎朝8時前には登校している。

すると室内に残るのは学生の身分を持たない者、つまり俺と幼女銀子ちゃんの二人。今から学生達が帰宅する昼過ぎまで、俺とこの子はこの部屋で二人つきりなのだ。……ごくり。

まあ幼女銀子ちゃんは4歳だしね。一人きりでお留守番などさせてはいけないよね。ちゃんと大人が面倒を見なければ。俺は幼女を警戒させないようにっこり笑顔を

作って。

「それじゃあ幼女銀子ちゃん、対局しよっか」

「や」

そっこーでフラれた。辛いつす……。

どうやら今は本を読みたい気分だったらしい。俺との対局を断った幼女銀子ちゃんは、ぺいっと座布団の上に寝そべって、俺が買ってあげた将棋の指南書に目を通し始める。

……ふむ。将棋は断られたけど、これはこれで……はあ、いつ見ても癒やされるなあ。

幼女つてスゴい。ただ眺めているだけでHPとMPがモリモリ回復する。本人としては何も気にせず本を読んでいるだけだろうに、見ているこっちは一日中眺めていたって全く飽きない。

なんせこの幼女は幼女である上、銀子ちゃんでもあるのだ。そんな奇跡的な存在にこの俺が骨抜きにならないはずがないではないか。

「……………んー？」

本を読んでいて疑問に感じる事があったのか、難しそうに眉を顰めたり。時折身体を揺すってみたり、足をぱたぱたさせてみたり……。

そんな幼女の様子を眺めているだけの生活。幼女銀子ちゃんのそばにいるだけの人

生。そんな素晴らしい人生を送れるのなら俺は本望だ——

——なんて事を考えていたら、あつという間に時刻はお昼になっていた。

毎度のように出前を頼み（昼食は蕎麦にした）二人でお昼ごはんを食べ終わった頃。

どうやら幼女銀子ちゃんの体内電池はこの辺で一旦カラになるようで、その瞳がうとうとし始めたらすぐにおねむタイムだ。

「……やいちはそい」

「はいはい」

布団に入るや否や、幼女銀子ちゃんは小さな人差し指ですぐ隣をピツと指差す。

これは一緒に寝て♡ という意味……では無く「お前はそこでじつとしてろ」という命令だ。

最初こそ「まさか俺が布団に入り込むのを警戒しているのか……？」と感じたものだが、どうやらこれはそういう意味ではないらしい。

むしろその逆で「寝ている間は近くにいて」という意味合いのようだ。きつと目が届く範囲に誰かが居ると安心して眠れるのだろう。幼女ならではの習性という訳だ。

だから幼女銀子ちゃんがおねむの間、俺はその命令通りじつとしている（トイレにでも行こうものなら銀子ちゃんはずぐ起きる、そして怒る）

そしてそのぶりちいな寝顔を観察したり、ぶにぶになほっぺたをつんつんしたり……

している内に時刻は2時過ぎとなつて、するとJS銀子ちゃんが帰宅してくる。

そして3時過ぎにはJC銀子ちゃんとJK銀子ちゃんも帰宅して、その頃にはもう充電を完了させた幼女銀子ちゃんも活動を再開する。

そして俺と四人の銀子ちゃんズが揃つたならば、みんなでする事と言えば将棋以外には無い。

「……………」

しんとした静かな空気の中、パチ、パチと駒を指す音だけが聞こえる。

「……………」

劣勢となつている終盤、JC銀子ちゃんが苦しそうに呻く。

「……………」

その正面、JK銀子ちゃんは勝勢を確信してか、ふふん、と得意げな顔。

そしてその将棋盤の両側面にJS銀子ちゃんと幼女銀子ちゃんが座つて、対局中の盤面を食い入るように眺めている。

……それはまるで妖精たちが、将棋の妖精たちが盤上の泉で戯れているかのような光景。

銀髪美少女達と銀髪美幼女が真剣な表情で盤面だけを見つめるその光景は、これまた

一生眺めていても飽きないだろうなあと俺は思いました、まる。

その対局はその後10分程で決着が付いた。勝敗は先程の二人の表情が物語る通りで。

「……ありません」

そう言つてJ C 銀子ちゃんが軽く頭を下げる。

おお、中学生銀子ちゃんが投了した。あの年齢だからもうすでに女流二冠、対女性成績は無敗を誇る『浪速の白雪姫』が女性相手に負けた……！

……てまあ、相手が成長した当の本人なのだから当たり前だけど。というかJ C 銀子ちゃんがJ K 銀子ちゃんに負けるのはこれが初めてじゃなく、初日以降もう何度目かの対局なんだけど。

ともあれ対局or観戦中の銀子ちゃんズ。

そんな彼女達を眺めながら、俺は脳内で密かに彼女達の分析を、言わば「空銀子研究会」なんてものを開催していたりするのだが……。

出会ひの日から4日経つた事もあつてか、それぞれの銀子ちゃんと俺との現状の距離感というものが大体分かつてきた。

まず幼女銀子ちゃん。

この子との距離感は一先程の通り。初日以降色々話を聞いて分かったのだが、どうやらこの子は師匠の家に内弟子として上がりこんでから2ヶ月、つまり子供の時の俺と出会って2ヶ月程経過した段階の空銀子のようだ。

となるとこの子にとって、九頭竜八一とはもう完全に格下の存在。弟、家来、パシリ、小間使い、そんな言葉で表現する相手だと認識しており、それはここに居る18歳の俺に対しても同様だ。

なんせ幼女銀子ちゃんはまだ幼女、自分が知る子供の九頭竜八一と大きくなった九頭竜八一との差異をあまり大事には捉えていないのだろう。俺にとっても懐かしいなあと感じる子供の頃そのままの感じでの俺に接してくる。

この子とはもつと距離を詰めて、膝の上に乗せて可愛がるのが今の俺の目標だ。そして小学生銀子ちゃん。

この子はまだちょっと難しいというか……現状だと少し距離を感じる。

どうやらこの子は小学4年生9歳の段階の空銀子のようだ。小学4年生9歳と言えど、ばあいや天衣が俺に弟子入りした時の年齢で……こちら辺は妙な縁を感じてしまう。

それはともかくとして。その年齢差がネックと言うか……これは想像なのだが、自分の知っている九頭竜八一と18歳のこの俺との差異を一番大きく感じているのがこの子なのかもしれない。

幼女なら気にしない事だつて、小学生ともなればおかしな事だと分かるだろう。そんな事もあつてかまだ俺に対してよそよそしいというか、率直に言つて懐いてくれない。寂しい……。

この子とはもつと距離を詰めて、膝の上に乗せて可愛がるのが今の俺の目標だ。

そして中学生銀子ちゃん。

この子とは然程距離は感じない。ただその代わりと言つてはなんだが……この子からは随分と視線を感じる事がある。ふと気付けばよく俺の事をじつと見ているのだ。

中学生銀子ちゃんは中学3年生14歳の段階の空銀子であり、高校生銀子ちゃんとは1年半程しか離れていない。俺が初めて会つた時に見間違えてしまうのも仕方無しといったものだ。

なまじ1年半という想像しやすい年齢の開きがあるのが理由なのか、自分が知っている九頭竜八一がどう成長しているのか、そんな事が気になつて俺の事をじつと見ているのかもしれない。

勿論俺の目標としてはこの子も膝の上（以下略）

そして高校生銀子ちゃん。

この子との距離感は……まあ相変わらずだ。

そう、相変わらずなのだ。つまり相変わらず恋人同士なのです。えへへ……。

他の銀子ちゃんズとは異なり、この子はすでに膝の上に乗せて可愛がった事がある。だからこの子との目標は……まあ多くは語るまい。

……とそんな事を、こうして銀子ちゃんズを観察しながら考えていた俺なのだが。どうやらそれは相手も同じ事だ。現状を観察していたのは俺だけでは無かったようだ。

その話題が巻き起こったのは夕食の時間。

今日の夕食は出前のお寿司だ。銀子ちゃんが四人もいるこの暮らしにおいて、一番稼ぎのある俺は財布の紐を固くするつもりなど全く無い。というかそもそもこれは夢だしね。

という事で特上寿司をがつつり五人前、折り畳みテーブルの上に計5つの寿司桶が並ぶ。

小学生や幼女も居る事だしとわさびは抜きにしたのだが……それでも握り一つというのは幼女の口にはちよつと大きいかもしれないね、うん。

という事で。俺はマグロの握りを取って箸で半分こにして醤油をつけて……と。

「はい幼女銀子ちゃん、あーん」

「あー」

幼女は小さなお口を大きく開ける。

そして箸を近付けていくと……一口でぱくりっ！

「どう、美味しい？」

「……（くり）」

もぐもぐしながら頷く幼女銀子ちゃん。か、かわええ……。

「JS銀子ちゃんも食べる？ ほら、あーん」

「……いらない」

対して小学生の銀子ちゃんはついつとそっぽを向く。くう、もっとお近付きになりた
い……。

「ならJC銀子ちゃん……は、大丈夫そうだね」

「当たり前でしょ。子供扱いしないで」

中学生の銀子ちゃんは俺にクールな目を向ける。

この子との距離感はあるが、付き合う前の銀子ちゃんとの感覚に近いな。

そして付き合った後の銀子ちゃん、つまりJK銀子ちゃんにはここであーんなどはし
ない。

何故かって？ 下手に「あーん♡」などしちやったら歯止めが利かなくなる恐れがあ
るからだ。

「じゃあもう一度幼女銀子ちゃん、あーん」

「あー」

俺が言えば幼女銀子ちゃんは素直に口を開く。ああもう超かわいい！ 食べちゃいたい！

この子にとって俺は家来のようなものなので、こうして奉仕されるのは当たり前で気にするような事では無いのだろう。そう、だからこれは何も問題ない、何も問題ない……。

「……ちよつと、八一」

するとその時、俺の箸が幼女銀子ちゃんのお口に届く前。

J K 銀子ちゃんがすつと手を伸ばして、幼女を持ち上げて自分の膝の上に避難させた。

「え、あーん駄目？」

「駄目じゃないけど目付きが怖い。そんな不気味な目で小さな私を見ないで」

「ぶ、不気味な目って……」

「ほら、お寿司なら私が取ってあげる。次はどれが食べたいの？」

「うに」

なんら躊躇せず高級食材をオーダーする幼女銀子ちゃん。こういう所はさすがの一

言やで。

そしてJK銀子ちゃんがうに軍艦を取り分け、幼女の小さなお口へと運んでいく。

……おおう。これはこれで……いいね、うん。

この前の風呂場での妄想然り、こういう世話焼き銀子ちゃんは中々見られるものじゃない。

あい達ともうちよつと仲良ければ普段からそんな光景も見られるのかもしれないが、それも中々に難しい現状、こういう貴重な銀子ちゃんはしっかりと目に焼き付けておかなければ……！

「……なによ？ そんなジロジロ見て」

「え？ あ、いや……」

なんて言うか……。

JK銀子ちゃんが自分の膝の上に自分そっくりな幼女を座らせて、ご飯を与えている。

そしてその隣にはこの俺が居る訳で……なんかこれって……これってあれに近いよね？

「なんか、こうしてるとさ……」

「こうしてると？」

「こうしてるとなんか、夫婦、みたいだなんて」

「ば、バカっ！ にや、にやにそんな、夫婦なんて、夫婦なんて……♡」

照れ照れになるJK銀子ちゃん。やっぱり可愛い。

そして口元では小声で「まだ早いわよ……♡」と言うのが聞こえた。

……えへへ。まだ、だって、えへへ……。

……てな感じで、食事中にもかかわらず俺とJK銀子ちゃんがイチャついていると、

「……………」

JCとJSの銀子ちゃんの二人は、俺達の事をなんとも形容し難い複雑な目で見ていた。

特にJC銀子ちゃんの視線は凄い。それは引いているのか、それとも照れているのか。とにかく目の前の光景をどう処理していいのか分からない、そんなスゴい目をしていて。

「……ねえ。前から聞きたかったんだけど……」

そして彼女は恐る恐るその口を開いた。

「……その、高校生の私と八一って……今はどういう関係……なの？」

え、あ、それ聞いちゃうー？

それ聞いちゃうのおー？ 困ったなー！

7. J Cの話

J C 銀子ちゃんは恐る恐るその言葉を口にする。

「…………その、高校生の私と八一って…………今はどういう関係…………なの？」

あ、それ聞いちゃうんだ。

J C 銀子ちゃんそこ気になっちゃうんだー、そっかそっかー。

えー、どうしよ困ったなー。なんて答えればいっかなー、うーん。

「どういう関係って、それは…………ねえ？ J K 銀子ちゃん」

「…………なーに？」

知りませんけど？ みたいな感じの表情をする J K 銀子ちゃん。もとい…………俺の彼女。
女。

うーん困ったなー。つまり俺とこの子はそういう関係なんだけどー、これって言うっちゃっていいのかなー？

他の誰かならともかく、相手は誰であろう銀子ちゃん本人な訳だしなー。

「俺とJK銀子ちゃんの関係……こういうのって話しちゃっていい事なのかな？ どう思う？」

「し、知らないそんな事つ、自分で考えれば？」

「つーんとそっぽを向いちゃう俺の恋人。」

だがその声色は少し弾んでいて、それを暴露するのを決して嫌がっていないのが分かる。

中学生や小学生、あるいは幼女の銀子ちゃん達にとって、高校生の銀子ちゃんの情報というのは自身に関する未来の知識に該当する。

となればここで「君は将来俺と付き合うんだよ。そしてラブラブになって結婚するんだよ」なんて事を話してしまった場合、それを知った事が原因でタイムパドックスが起きちゃう……なんてのはSF小説とかで良くある設定だ。

しかしここに居る銀子ちゃん達はなにもタイムスリップしてきた訳では無く、これは単なる夢。そう、ただ俺が見ている夢でしかないのだ。

だつたら別にー、打ち明けちゃっても問題ないかな？ みたいない？ ていうかぶつちやけ俺と銀子ちゃんが両思いだつて事を過去の銀子ちゃん達に教えてみたいっていうかー？

「……ま。別に隠すような事でもない……よね？」

「……かもね」

言いながらちらつと視線を向ければ、JK銀子ちゃんも俺に視線を合わせてくる。

よし、確認おーけい。この子の許可が出たなら話しちやっても大丈夫だろう。せつかくだと俺は立ち上がって、みんなの見やすい場所に移動する。

「ほら銀子ちゃんも、来て」

「ん……」

するとJK銀子ちゃんも膝の上から幼女を下ろし、すくつと立ち上がって俺の隣に並ぶ。この子なんのかんの言ってノリノリだな。

そして俺は浮ついた気分を落ち着かせる為、一度大きく息を吸って……よしっ！

「えー、実はですね！ 私こと九頭竜八一と空銀子さんは、現在お付き合いをしておりますっ！」

きやー！ 言っちゃったー！

隣ではJK銀子ちゃんもうつすら頬を赤くしているが、照れながらも何処か嬉しそうな顔だ。

「えっ——！」

「お付き合いつて……い！」

さすがにその事実は衝撃的だったのだろう。

驚きのあまり両手で口元を押さえるJ S 銀子ちゃん。そしてJ C 銀子ちゃんに至っては、もう絶句といった感じの表情をしている。

まあそりや驚きだよな、気持ちは分かるようん。だって俺自身ちよつと前までは銀子ちゃんとなんか関係になるなんて思ってたし。

とそんな中幼女銀子ちゃんの表情は……ぬ、これは読めないな。この話を聞いて無反応では無く、おめめを二度三度ぱちくりさせていたのだが……やがていそいそと食事を再開した。お、甘エビを手を取った。本当によく食べる幼女だ、可愛い。

「……え、あ、え……ちよ、ちよつと待って、ちよつと待って、待って待って」

すると冷静さを取戻し……てはいなさそうだが、とにかくJ C 銀子ちゃんが待ったを連発する。棋士としてはいただけない事だがさすがにこの状況でそれを言うては可哀想か。

なんせJ C 銀子ちゃんは中学3年生。年代が一番近い分この話題に過敏に反応してしまうのは仕方無い事なのだろう。彼女は混乱を隠しきれない表情で俺の目をじつと見つめてくる。

「ちよ、ちよつと一旦整理させて。え？ あ、二人は本当に付き合ってるの？」

「うん、そうだよ」

「え、それって、い、いつから!?」

「んーと、付き合い始めたのは9月だから……今からだと約3ヶ月前かな」

「3ヶ月……じゃあなに!? わ、私は、私は高校生になったら、や、八一と付き合うの!?」

「そうだよ。だって俺達はラブラブだからね」

「ら……っ!」

ラ行の頭文字を呟いたまま、JC銀子ちゃんは石像のように硬直してしまふ。

その顔は言うまでもなく真っ赤だ。うーむ、ウブなこの子にこういうセンチティブな話題はまだちよつと早かったのかもかもしれないな。

だが後悔は無い。俺とJK銀子ちゃんがラブラブだという事を知らしめる事。それは他の銀子ちゃんズとの距離を狭めるのにも有効だと思ふから。

その後の銀子ちゃんズの様子はまちまちだ。

JK銀子ちゃんは席に戻って、ちよつと色付いた頬のままぱくぱくとお寿司を食べ
て。

JC銀子ちゃんは顔を真下に俯けたまま、しばらくの間ずつとそうしていた。

JS銀子ちゃんはお寿司を食べながらも、時折俺の方にちらちらその視線を向けてき
て。

幼女銀子ちゃんは早々に食べ終わって俺に食後のお茶を要求した。もしかしくなくてこの部屋で一番偉いのはこの子かもしれない。



——え!?

今、八一はなんて言ったの!?

っ、っ、っ、付き合っている!?

この私が? あの八一と!?

そ、そんなの嘘だ。信じられない。だってそんな事はない。

だって付き合っているという事はつまり、私と八一が恋人同士だという訳で……。

それはつまり、つまり、私のこの想いが一方通行なものではなくて両思いだという事に——

「そうだよ。だって俺達はラブラブだからね」
ら……ッ!

ラ行の頭文字を呟いたまま、それきり私は二の句が継げなくなってしまった。ガツーンと頭をぶん殴られたような衝撃だった。

次第に他の私達や八一が食事を再開する中、この私だけはとても食事どころではない。

だってもう顔が熱くて上げられない。

何も喋れない。

何も聞こえない——

私の名前は空銀子。中学生3年生の14歳。

あの八一が『JC銀子ちゃん』（この呼び方は今でもどうかと思うが……）と呼ぶ空銀子だ。

今『あの八一』と言ったのは、ここに居る八一は私の知る九頭竜八一とは少し異なるから。

あの八一は私が知る八一よりも少し年上。聞けば今はもう18歳になったらしい。とにかくそんな八一と、そして年齢の異なる三人の私と、訳の分からぬまま流されるようにこの部屋で共同生活を送る事になったんだけど……。

思えば最初からおかしかった。

私はふと気が付いた時にはこの部屋に居た。私にとっては見知らぬ部屋なのに、そこに疑問を抱く事なく目の前にあったタブレット端末を手にとって将棋に熱中していた

事……ではなくて。

おかしかったのはその直後、いきなり八一に抱き付かれた事だ。「ぎーンこちゃんっ！」と言つて背後から抱き付かれたあの時、私は突然の事に驚く一方で強い違和感を受けていた。

だつて……八一は私を『姉弟子』と呼ぶから。

もう3年程前から……私の事を『銀子ちゃん』とは呼んでくれなくなつていたから。それなのに、そんな八一が当たり前のように私を「J C銀子ちゃん」と呼ぶこの状況に、今日までずっと不思議な思いを感じていた。

まあ不思議と言えばそもそもこの状況の全てが不思議と言える訳で、私が四人も居るおかしさに比べたらそんなのは些細な事だと、あえてそのおかしさに触れようとはしなかつただけ……。

けど、これは……その呼び方の違いもきつとそういう事、なのかも、しれない。

あの八一にとつて私はもう「姉弟子」じゃない。単なる一門の姉弟関係というだけでなく……もつと、もつと深い関係に……なつて、いる、から？

つまり、それが……。

付き合っているから、つて事……なの!?

——ええ!?! ほんとに!?! ほんとにそんな事があり得るの!?! だつて私と八一だよ

!?

そんなの絶対に信じられない……けど、八一は、ら、ら……ラブラブっ！ だって言うし!! それを高校生の私も否定しないし……!

なら本当に? これは本当な事なの!?! 分からないよ、お願いだから誰か教えてえ! ……はあ、駄目だ。頭の中が熱すぎてまともに考えられない……。

思わず私は食事を片付けたテーブルに突っ伏して両腕で顔を隠す。そんな様子を見てか「おなかいいいの?」と声を掛けられたが……幼女の私よ、悪いけど今はそつとしておいて。

今の私は頭の中がパンパンなのだ。けれどそれも仕方の無い事だろう。私がこんなにも混乱しちやうのはどうしようもない事なのだ。だって……。

だって私は……ずつと八一が好きだった。もう思い出せないくらい、ずつと前から。

私の初恋は九頭竜八一だ。いつも当たり前のように隣に居た男の子の事が、ふと気付いた時にはもう大好きになっていた。心を奪われてしまっていた。

けれども……それは私の方だけ。

八一は私の事をそんなふうには見ていない、想ってはいない。

だって八一が好きなのは将棋だけで、いつも将棋の事だけを考えていて……。

そうしていつからか、八一が隣に居るのが当たり前的事じゃなくなつて。

八一と私が生活する場所も別々になって、顔を合わせる機会も一段と減って。

喪失感を覚える私をよそに八一の様子は変わらなくて、挙げ句に弟子を二人も取つて

……。

だからそう思ったのだ。八一の目に私なんか映っちゃいないんだって。

だから私も将棋に打ち込むしかないと思った。将棋、バカは将棋で見返すしかないのだと、将棋で振り向かせるしかないのだと。

私はそう思っていた。そう思っていたのに――

「……そうじゃなかった、って事、なの？」

八一も私の事も見ていてくれたの？ 私の事を想っていてくれたの？

にわかには信じられないけど、あの二人の様子を見てるとそういう事だとは思えない。

「――JK銀子ちゃん、お風呂湧いたよー」

「んー、分かった。……ほら幼女、来なさい」

ふと耳を澄ませばそんな会話が聞こえた。

その声色は共に柔らかくて、それが空銀子と九頭竜八一の会話だとは思えない。私が知る八一なら「姉弟子、お風呂湧きましたよ」と言うだろう。

まるで子供の頃に戻れたような、あの気安さこそが恋人になった私と八一……なの？

だったらこの私もいずれ八一とそうなれるの？

それとも……これは……夢、だから？

夢だからこそ、私が私にとって都合の良い夢を見ているだけの――

「……………」

駄目だ。これ以上の長考は私の貧弱な頭がパンクしてしまう。

なのでこの悩みはとりあえず置いておく……ことはさすがに出来ない。こんな精神状態のままでは間違いなく寝不足になってしまう。

だからもう一度ちゃんと言話を聞こう。そうだ、それがいいよね。

そうすればこの悩みだってある程度は解決するかもしれないし……。

そして正直に言うと、あの二人の関係について気になる事がまだまだ沢山あったりもする。

というかあの二人もあの二人だ。あんな爆弾発言をしておいてその後は放置だなんて。あんな話を聞かされたこっちの身にもなれというものだ。

高校生の私は幼女の私を連れてお風呂に入っちゃったし、八一は八一で小学生の私の頭を撫でようとして嫌がられているし……ここで私がこんなに頭を悩ませているとも知らずに呑気な奴らめ。

……と、そんな事はどうでもいいわね。とにかく、とにかくもう一度話を聞こう。

そこで問題はどっちから話を聞か、よね……。特に一番気になっている事、八一の気持ちを知りたいというのならそりや当の本人から聞いた方がいいんだらうけど……。

……そ、れは……。なんか、なんか……。耐えられる自信が無いっていうか……。

それになんか、八一相手だと私も熱くなっちゃいそうだし？ うん、そうだよね、冷静に話せるとしたらやっぱり自分自身だよね。

という事で。

「……それで、話ってなに？」

お風呂から上がった後、私は高校生の私をベランダに呼び出した。

8, J CとJ Kの話

「……それで、話ってなに？ 寒いから早くして欲しいんだけど」

高校生の私が二の腕を擦りながらそう口を開く。

その言葉通り12月の夜は確かに寒い。部屋着の上に温かい上着が必要になる程の気温だ。

けれどもこの部屋はワンルームしかなくて、内緒話が出来そうな場所と言ったらここぐらいしか無いんだからしょうがないじゃないの。

「話っていろいろは……」

「うん」

「……その」

……これ聞くの、自分相手でも恥ずかしい。

いや、あるいはもしかしたら……自分相手の方が羞恥度は上かもしれない。

だって目の前には私が、私とほぼ変わらないような顔があつて、その口からそういう

話題を聞くというのは……うう。

「……聞きたいのは……私と八一の関係の事？」

するとまごつく私の様子を見てか、高校生の私……というかJ K銀子が助け船を出してくれた。

きつとこの私が先程の話だけじゃ納得できず、こうして詳しい事を尋ねてくると内心分かつていたのだろう。なんせ自分自身の事だし。

私にとつてもJ K銀子とは自分自身だ。それなのに年齢の違いのせいで私の知らない事を高校生の私だけが知っているというのが癪なのだが……今はそんな事に拗ねていても仕方がない。

「……そうよ。私が聞きたいのはさっきの話」

こちらから呼び出しておいて躊躇うのはさすがに情けないので、私は覚悟を決めた。

「率直に聞きたいんだけど……さっき話していた事は本当の事なの？」

「……ええ、本当よ。私は八一と付き合ってる」

「んひゃあ……！」

なんか口から勝手に変な声が出た。

「ほ、ほんとに!?! ほんとにほんとなの!?!」

「だから本当だって言ってるじゃない」

——ほんとに、本当、なんだ……。

顔が一気にグツグツと熱くなってくる。頭の中がぼーつとしてくる。

や、八一が、あの八一がわたしの恋人……か、か、かえち、八一が私のかえち……かえち……。

「まあ信じられないのも分かるけど。私も色々……そう、色々あったのよ」

「……………」

「……ちよつと、聞いてるの？」

「——はっ！　じゃ、じゃあどっちから!?」

ふと我に返った私は、せつつくような勢いで次なる質問をする。

付き合うというならこれだけは聞いておきたい。どっちから？　どっちからの!?

「どっちって何が」

「だから、どっちから告白したの!？」

「ええ!？　それ、は……それは、秘密」

そう言つてJK銀子は私から視線を背ける。

「どうしてよ！　別にそれぐらい教えてくれたついででしょ!？」

「ええ、だって……そういう事はあんまり人に教えるものじゃないっていうか……」

「同じ自分なんだから良いじゃない！　ケチケチしないでよ!！」

私が声を荒げる一方、J K 銀子は「え〜」とか「でもお〜」とか、否定の言葉を繰り返す。

……が、その雰囲気からは何て言うのか……あんまり拒絶の意思が伝わってこない。……というかこいつ、本当は言いたい気満々なのにさりとて自分から言うのは恥ずかしいから、私があまりに食い下がってくるから仕方無くよ？ みたいな体裁を作りたいだけなのでは……。

「……はあ、しようがないわねえ。あなたは他ならない過去の私だから、特別よ？」

「……それはどうも。で、どっちからなの？」

「それは……」

J K 銀子はこの期に及んで勿体ぶるかのようになり、一拍呼吸を挟んで。

「……その、八一の方から♡」

八一の方から!?

あ、あの八一が、あいつの方から私に告白してきてくれたの!?

と、とてもじゃないけど信じられない……けど、目の前に居る私が、J K 銀子の嬉しそうな表情がそれを本当だと物語っている。

告白して恋人になる。その結果が同じでも告白の先手後手には大きな違いがあると
思う。

だって私が八一に「好きです」と告白してそれに八一が応えたなら、八一は私の想いを受け入れてくれた、みたいな感じになるけど……。

けれどもその逆。八一が先に「好きです」と告白したというのなら……それは、八一の方にもハッキリとした想いがあるという事ではないか。告白したい、と思うくらいには大きな想いがあの八一の心にもあるという事に……。

というか私も女の子として、できれば告白はするよりもされたいなあと思ってたし……。

そんな密かな想いをあの八一が叶えてくれるなんて……いつからあいつはそんな気の利いた事が出来る男になったのか。

「私も知らなかったんだけどお、あいつも結構私に夢中だったっていうか」

「む、夢中って、い、いい、いつぐらいから!? 具体的には!？」

「ええ、どうだろ。でも確か『ずっと』って言ってたから……そのくらい?」

「そのくらい? じゃ分かんない! じゃあ中学生は? 中学生の頃はどのなの!？」

「そんなに詳しくは知らないってばあ、私じゃなくて八一に聞いてよお」

ぐう、それは正論だ……けども。

なんかJK銀子の照れた表情と間延びした声、そしてその余裕が無性にイラつくッ

……!

「じゃ、じゃあ……どんな、の、だったの？」

「どんなのつて？」

「だから……ここ、告白は、どんなの、だった？」

「ええ………どんなつて、それは流石に教えられないよお………」

「教えられないよお♡ とJK銀子はのたまうが、けれどもその内心では「もつと聞いて、もつと聞いてくれたら何でも答えちゃうから♡」と言っている。だってもう顔にそう書いてある。

……なんて分かりやすい女だ。ていうかちよつと待つて、私つて高校生にもなつてこんななの？ 高校生がこんなに分かりやすくていいの？ これつてヤバくない？

「誰にも話さないつて………約束出来る？」

「………うん、するから」

「しよーがないなあ、もう♡ 中学生の私つてば、ほんとにわがままなんだから………」
なんだこいつ。

率直に言つてどつきたい。いや、これが私自身でなければとつくにどついてるだろう。

「告白がどんな感じだったか、よね。えつと、あの時はちょうど私、が——」
とそこで突然様子が変わった。

私が、の先を言おうとした途端、JK銀子の表情がはつとしたように硬直する。

一体どうしたのかしら。さつきまでこれが自分だとは思いたくない、認めたくないぐらしいのふにやふにや顔だったのに。

「——えつと、まあ、その、色々な事があつて……私はその時ちよつと落ち込んでいたの」「それで?」

「ええ。それで……それで、八一が私を……なんていうかその……そう、気晴らしつ! 気晴らしの旅行に連れてつてくれて」

「りよ、旅行? それつて……二人きりで?」

「そうよ、二人きりで」

二人きりでの旅行だと……!?

私はその言葉に畏怖を覚える。だつてこれつてまだ告白する前の段階でしょ? それなのに二人つきりで旅行になつて行つちやうの?

高校生の恋愛ともなるとそんなに進んじやうندらうか。JK銀子恐るべし……! 「その旅行なんだけど……ねえ、行き先は何処だつたと思う?」

「そんなの分かるわけがないでしょ。……関東の方とか?」

「はずれー。正解はね……八一の実家♡」

「じ、じじ実家!」

「そうなのっ！ 八一がね？ どーしても私と一緒に実家に行きたいって言うんだもん

……………」

「は、はわわわ……………」

実家って、実家って！

だつて実家といえは実家だ。そんな場所に二人きりで行くなんて、なんかもう八一のご両親にご挨拶しに行くみたいではないか。

とか八一のやつ、告白するからつて自分の実家に私を連れてくなんて……………なんかそれって、その、想像していた以上にガチじゃない!? 完全に私の事を詰ませに来てない!?

「八一の実家は福井県にあつて、福井駅から電車を乗り継いだ先の……………結構な山奥なの。まあ山奥と言っても景色は綺麗だし空気は澄み渡っているし、人混みなんか全く無いし、私はむしろ都会より好きかも、なんならここに住んじゃおうかしら、みたいに思った場所なんだけど……………」

「そ、それで……………それで?」

「うん。それでね。八一の実家の周りには民家も少ないから灯りが少なくて……………だからその分夜空には星が沢山見えるの! 八一が言うには福井って星空が一番綺麗な県らしくて、それで……………」

その時の記憶を振り返っているのだろうか。

J K 銀子は私には似合わないうっとりとした顔、まるで魔法に掛かっているかのような顔で。

「それで、八一の家が所有している柵田……って言っても分からないわよね。こう、階段状になっている水田って言えばいいのかしら？ とにかくその水面が満点の星空を映して……上にも下にも天の川があつて、まるで宇宙にいるような光景で……宇宙の中で私と八一の二人だけで……」

「……………」

ごくりと息を飲む私の一方、高校生の私は赤くなっている自分の頬を両手でそつと押さえて。

「八一が、とても真剣な目で私を見つめて……それで『ずっと、あなたの事が——』……
て♡」

なにそれ超ロマンチックなんですけど!?

満天の星空の下で告白なんて、女の子なら誰もが一度は憧れるシチュエーションじゃない! あの一八一に、あの将棋バカがそんな素敵な告白をしてくれるだなんて……!

とても信じられない。私の知っている八一と1年半程度しか違わないはずなのに、1年半で人はそんなにも格好良く変わるのだろうか。

そして——それは私もだ。

今もJ K銀子はとても他人には見せられない程にゆるみきつた表情を……。

……けれど、とても幸せそうな表情をしている。

私はこんなにも、こんなにも幸せそうな顔をした自分に見覚えがない。

私は子供の頃から無愛想な人間なのだ。そんな私がこんな表情を、そんなにも幸せを

「……いいなあ」

今の言葉は私の口から勝手に漏れた。

そして自分でもみつともないと感じてしまうぐらい、そりやもう物欲しそうな声色で。

それを聞いてさすがにJ Kも気が引けたのか、ちよつと困つたように視線を逸らす。

「いいな、って言われてもね……あなただつて高校生になれば体験出来るっていうか

……自然とそうなるっていうか……」

「……ほんとに？」

「本当よ。あなたも今まで通り……ううん、今まで以上に努力して将棋に打ち込めば、

きつと……」

それは心からの思いなのだろう。

先程のように浮ついた声じゃなく、澄み渡るように静かながらも力強い声で。

「……きつと八一は見ていてくれる。それに……神様だつて見ていてくれるから」

「……………」

そう言う空銀子の顔はとても穏やかで。

少々癪なんだけど……その表情を見た時、この人は私よりも年上なんだなと実感した。

「……そっか」

「うん。だから頑張りなさい。キツイ事もあるけど、頑張った分良い事だつてあるはずだから」

私、今すごく良いこと言つたんじゃない？

みたいな顔をするJK銀子を見ると、ううむ、なんだか途轍もなく癪な気分なんだけど……。

「……さてと、こんなところで良いかしら？ そろそろ本気で寒くなつてきたし部屋に戻りましょ。なんか幼女が興味深そうにこつちを見てるし」

そう言つてペランダの引き戸を開けようとするJK銀子を前に、私は慌てて待ったを掛ける。

「あ、ちよつと待つて、まだ……もう一つ聞きたい事があるの」

「なに?」

「……その、率直に聞きたいんだけど……あなたと八一はどこまで進んでいるの?」

私がそう尋ねた瞬間、J K銀子の目が大きく見開かれた。

「は、はあ! あんたね、中学生のくせに変な事を気にするんじゃないの!」

「だって気になるじゃない! 他でもない私と八一の事なんだから! たしか付き合つて3ヶ月ぐらいなんですよ? どこまで進んだの!」

「ど、どこつて、別に、そんな……」

何を思い出しているのか、またすぐにJ K銀子の顔が朱に染まり始める。

なんで高校生の私つてこんなにも顔色が分かりやすいのだろう。私は全然そんな事ないよね?

「別に……普通よ、普通。普通のカップルが3ヶ月でするような事を普通にしたんじゃない?」

「だからそれじゃ分からないって。ならそうね……ぎゅつ、つてするのはもうした?」

「ぎゅつ? ハグつて事でいいの?」

「うん。したの?」

「………(くり)」

J K銀子が無言で頷く。

まあそっか、付き合ってるんだからハグぐらいはするよね……。

「なら、なら……キス、は？」

「……………(くくくく)」

「ひやう、き、キス、キスしたんだ……！」

私と八一が……キス、かあ……。

……私もしてみたいな。キスってどんな感じなんだろう。レモンの味がするって本当なのかな。……高校生の私がうらやましい。

けどそっか……高校生のカップルだったらキスぐらいは普通にしちゃうんだ。だったら……。

「なら……なら、その先、は？」

「……なによ、その先って」

「だ、だからあ！」

キスの次。それは勿論あれだ。……あの、あの、お、おしべ、と、めしべ、の、話だ。ていうか高校生なんだし分かるでしょ！ 中学生に言わせようとしなくてよ！

「……その、八一と、こう、二人で……あの、うう……え、え、ち、な事……とか」
「んにゃ……………」

猫みたいな声を出す年上の私。

え、なにこの反応。どっちの反応？

「……………えっちな事……………もうしたの？」

「え、う、うえ、したって言うか、その……………」

「したの？ したのね!!? ちゃんと白状しなさい空銀子!!」

「うえうう……………! し、し、しい……………!」

しい……………と唸っていたJK銀子、彼氏持ちの私のメンタルにも遂に限界が来たよう
で。

「——し、知らないそんな事っ! 私じゃなくて八一に聞いたら!?」

それだけ言い残して、脱兎のごとくりビングに逃げ出してしまった。

9. おしごとの話

——ぼたんっ！

と閉じられた引き戸の前に、ベランダに残る私は呆気にとられる。

「……逃げたわね。年上のくせに……」

なんとも情けない高校生の私の姿に、中学生の私は「……はあ」と大きなため息を吐く。

……まあね。確かに話の内容がアレな事だし、恥ずかしいと思うのはそうなのだろう。とうか尋ねた私だってめちやくちや恥ずかしかったし。

けれどもあの逃げ方は無いわね、うん。

年下との会話で恥ずかしがって逃げの一手では『浪速の白雪姫』の名が泣くというものだ。

「……というか、あそこまで恥ずかしがるような事なのかしら」

どうなのだろう。あのJK銀子の恥じらい様は高校生として、女性として普通の姿なのか。

そりや全く羞恥を抱かないという事は無いとは思うんだけど、年下の、それも自分自身に打ち明ける事すらあそこまで照れてしまう事なのだろうか。

……分からない。なんせ私には経験が無いから。経験がない事は知りようがない。

……ん？ でもそうになると、JK銀子は経験があるからこそ恥ずかしがっているって事……？

「……まあいいか。保留にしよう」

こればかりは想像の域を出ないので、私はこれ以上考えるのを止めにする。

JK銀子の捨て台詞の通り、今度機会があつたら八一の方に聞いてみようかな。案外そういう事は男の方が話しやすいかもしれないし。

「それにしても……色々、凄かったな」

八一の方から、それも実家でのロマンチックさ満点の告白とか、すでにキスしちゃつてる事とか。

高校生の私と18歳の八一は随分と進んでいる。随分と……深い仲になっているらしい。

……いいな。羨ましいな。

私だつて、この私だつて……八一を好きな気持ちは同じだ。それが自分の将来の事とはいえ、羨ましいと思う気持ちは抑えられそうにない。

特に八一が、あの八一が私に恋心を向けてくれたのだと知った今では、尚更——
「……くしゅんっ」

そんな事を考えているとくしゅみやみが出た。

私は思わず両の二の腕を擦る。どうやらベランダに居すぎて身体が冷えたようだ。

「……私も戻ろ」

そうしてベランダの引き戸を開く。

だがその刹那。

先程の出来事を頭の中でもう一度回想して——

——私は高校生になってもああはなるまい。

終始ふにやふにやで弛んだ表情をしていた高校生の私を反面教師として、決してああはなるまいと中学生の私は深く胸に刻んだのだった。



……はあ。全く……。

ほんとに中学生の私にも困ったものね。ていうかほんとに中学生のくせにあんな事……。

ベランダでの会話を一方的に打ち切って。

そうして一足先にリビングに戻って、私はふう、と一息つく。

「あ、JK銀子ちゃん。JC銀子ちゃんとの話は終わったの？」

「……まあね」

「……ん？ どしたの？」

すると将棋盤の前に居た二人。JS銀子と指導対局をしていたらしい八一の顔をじーつと睨んで。

「……ばか」

「え、なにいきなり。俺、何かした？」

「……さあ？ 自分の胸に聞いてみなさい」

そんな八つ当たりをしてから、二人の将棋を邪魔しないよう私は洗面所へと向かって。

どうにも気持ちの置き場に困り、特に理由もなく洗面台で両手をバシヤバシヤと洗う。

「全く中学生のくせに……。え、えつちな事、なんて、中学生が気にする事じゃないでしょ……」

えつちな事なんて中学生にはまだ早い。最低でもあと1年と半年ぐらいは早い。

というか……私が中学生だった頃ってそういう事に興味を持っていたかな？　ううん、そんな事気にしてこなかったと思うんだけど……。

もしかしてあのJ C 銀子は私が中学生だった頃よりも幾分かスれているのではないかと。自分自身の事だけについてそんな考えを抱いてしまう。

……けどまあ、それはそれとして。それでも年齢相応に中学生らしい所もあったけどね。

どっちから告白したとか、どんな告白だとか。そんな事を私が言う度にテンパって、J C 銀子の顔はもう終始真っ赤で……。

私は自分の事を無愛想な人間だと思っていたが、ああいう姿を見ちゃうと少し見方も変わってくるっていうか……まあ言っても中学生だしね、色々と未熟な面が多いという事なのだろう。

それにJ C 銀子のああいう姿を見ると、正直な所ちよつとだけ優越感を抱いてしまう。

告白やキスで真っ赤になるこの頃と比べて、高校生の私は成長してるなあと感じるのだ。

まあさつきはなんていうか？　全体的に見て高校生の余裕っていうか、彼氏持ちの余裕？　みたいなものは示せていたのではないかと思う。

——そう。私は彼氏持ちの高校生、空銀子。

私にはもう恋人がいるのだ。九頭竜八一という……さ、しゃ、しゃいあい！ ……の人が。

幼女や小学生や中学生じゃない、高校生だからこそ、私は八一と想いを交わし合っているのだ。

そして、彼氏持ちであるが故に……私には彼女としての役目がある。

八一にりゆうおうのおしごとがあるように、私にはりゆうおうの彼女のおしごとがあるのだ。

それはとてもとても大事なもので、一日たりとも投げ出す事なんて許されない。

——そう、許されない、んだけど……。

そんな私だけのおしごとに関して、ここ最近はずっと似た問題が発生している。

それは言うまでもなくこの状況だ。八一と私達4人での共同生活を送っている今、中々そのおしごとを果たすべきタイミングが見つからない。

だって他の私達が居る中で八一と恋人らしい事なんて出来ないし……けれどこの部屋はワンルームだからプライベートなんて無いに等しいし……。

この狭い部屋で暮らす今、どうやって八一と二人きりになるか。恋人同士の時間を作るか。

それはこの共同生活が始まった初日からずっと、私と八一が共に長考してきた問題で。

そうして昨日、私達は一つの答えを見つけた。

……あ、ちなみに言っておくけど、これはあくまで八一から言い出した事なんだからね？

まず前提として、基本的にこの部屋では幼女の私を中心にタイムスケジュールが回っている。

食事などもそうなんだけど、特に大事なのが就寝の時間だ。4歳児が眠っているのに照明を点灯していたり、将棋の駒音を鳴らすのも忍びないので、あの子が「寝る」と言って布団に入ったら自然と私達も就寝する流れになった。

だが幼女の私が眠るのは夜9時とかそこらで、高校生の私や八一にとっては些か早い時間だ。

夜に将棋が指せない分は次の日の朝早くに起きて指せば良いとしても、それでも夜9時というのはさすがに早すぎて、布団に入っても中々寝付けない事が多い。

だったらそのタイミングを利用してはどうか？

とそんな事を八一が言いだして――

「……………すうー、くうー……………」

時刻は夜。幼女の寝息が聞こえる暗闇の中、私はそーつと布団から身体を起こす。そしてそーつと立ち上がって、寝ている者を起こさないようそーつと洗面所へと向かう。

これなら寝ている者には気付かれないし、仮にまだ眠っていない者がいたとしても、お手洗いに立ったのだとしか思わないだろう。

「……………」

そうして私は洗面所の壁に寄り掛かって。

そのまま待つ事10分ほど。

「……………ふう。お待たせ、銀子ちゃん」

「遅い」

「ごめんごめん。でも俺達があんまり続けざまに動いちやうと、寝ている銀子ちゃん達を起こしちゃうんじゃないかと思って」

洗面所のドアを開いて八一が姿を見せる。

勿論ながら、八一も私と同じようにこっさり布団から抜け出してきたのだ。

これこそが新四段とタイトルホルダーの頭脳で考え出した秘策中の秘策、夜中の密会。

「銀子ちゃんが沢山居るのは嬉しいんだけど、二人きりになるのが難しいのは困りものだよ。こうでもしないと中々タイミングが……」

「空銀子が沢山居て嬉しいのは八一だけでしょ。私はただ困るだけなんだけど」

「ま、まあまあ、そう言わないでよ。あ、そういえばさつきはＪＣ銀子ちゃんと何を話してたの？ 随分と長い事ペランダに出てたけど」

「それは……」

中学生の私と話していた事。それは主に私と八一との馴れ初めの話……なんだけど。

そんな事をここで言うのはちよつと気恥ずかしいし……となるとここでの応手は一つ。

「……あんたの事よ」

「俺の事？」

「そう。八一がどれだけ私の事を好きなのかっていう話をした」

「えっ！ ちよ、んな事話してたんすか!？」

驚愕に目を見開く八一。

「そうよ、悪い？ ……それとも何？ 私の事好きじゃないの？」

けれど、私が拗ねるようにそう言えば……すぐに八一は顔に微笑を浮かべる。

私が好きな……ちよつと困ったような笑顔を。

「……………ううん。好きだよ。大好きだ」

「っ、……………なら、別にいいじゃない」

「まあね。もう俺達が付き合っている事はみんなに暴露しちゃった訳だし、そうなったら別に何を言ってもいいんだけどさ。……………つと、それよりも銀子ちゃん……………いい？」

「……………ん」

何事かの同意を求めてくる八一の言葉に、私は小さく首を縦に振って応える。

何を言いたいのか、何をしたいのかは聞かなくても分かる。だって私はこのバカの彼女だから。

私が頷くのを目にした途端、すぐにその両手が私の背中に回されて――

「あ……………」

そして八一が、私を抱き締める。

壊れ物を扱うように優しく、それでも力強く。

「……………銀子ちゃん」

「ん、……………」

私の名前を呼ぶ声がすぐ耳元で聞こえる。

密着した身体から八一の体温が伝わってくる。あたたかい。……………うう、ドキドキするよお……………。

「はあ、癒やされる……銀子ちゃんエネルギーがたっぷり補充出来る……」
「……なにそれ、ばか……」

三段リーグが終わって付き合い始めて以降、八一は時々そんな事を言うようになった。

銀子ちゃんエネルギーだとか、銀子ちゃん成分だとか、銀子ちゃんエキスだとか、その時々によって名称は様々なのだが、とにかく私から何かを摂取しているらしくて、それが切れてしまうと八一はダメになっちゃうらしい。

……まあつまりだ。

それを補給させてあげる事、それこそがりゅうおうの彼女のおしごとという訳だ。

だってしようがないでしょ？ 私はこのバカの彼女なんだから。それが私からしか摂取できないというのなら私が与えてやらなくちゃ。

「銀子ちゃんの髪、きれい」

「……ふ、あ」

八一の手が私の髪をさらさらと撫でる。

ああ、くすぐったくて気持ちいい……こんなふにやふにやになっちゃう……。

けれどもこれはしようがない事だ。そう、しようがない事なの……だってこれはおしごとだから、しようがない事だから……。

……と、そんな事を自らに言い聞かせながら、暫く八一と抱き合っていると、

「……あ、そうだ」

ふいに私はあの事が気になった。

「ねえ八一、あれは……」

「大丈夫。大丈夫だよ、銀子ちゃん」

どうやら同じ事を考えていたらしい。口を開きかけた私の先手を取って、八一は大丈夫だよと言いなながら私を抱く腕の力を強める。

八一がそう言う以上私は信じるしかないけど……でも本当に大丈夫なのだろうか。私には分からない事だけについて心配になってしまふ。

「……ま、それならいいけど。何かあつたらちゃんと言いなさいよ」

「うん、分かってる」

それきり、私達はしばし無言になって。

それから何分そうしていただろうか、やがて八一が私を抱く腕の力をふつと弛めた。

「……そろそろ戻る？」

「……もういいの？」

「そりやまだしたいけどさ、他の銀子ちゃんズに気付かれようものなら事が事だし……」

「……そうね」

もうそうなたらそうなたらで、開き直って耳目を気にせずイチャつけば良いのでは？

なんて事を考えたけどさすがに声には出さない。だってそれじゃ私が積極的にイチャつきたがっているようで、なんか恥ずかしいし……。

これは八一からの求めであって、決して私からの求めではない。

……なんだか言い訳っぽく聞こえるかもしれないけど、とにかくそういうものなの。「じゃあ最後に……銀子ちゃん」

そして八一が私から少し身体を離して、その顔を真っ直ぐ私に向けてくる。

じつと見つめる熱い視線。吸い込まれそうなその瞳の意味はもう分かる。八一がしたい事も。

……まあ、これもしようがないっていうか？

だって八一が欲しがっている銀子ちゃんエネルギーなるものは、その……。

……なんていうか、その、要するに経口摂取の方が効率的に補給出来るらしいから？

だから仕方無くなのよ？ ほんとに仕方無く。

そんな言い訳を心に重ねて。

私は目を閉じて首を軽く持ち上げて。

「——んっ」

そうして私は八一と唇を重ねて。

とても熱い、熱い……口付けをした。

……は？　これが正真正銘、りゅうおうの彼女のおしごとなんですけど？

なによ、なんか文句でもあんの？

10. 一週間後の話

早朝。我が家（仮）の食卓には四人の女の子達が揃って席に着く。

その全員が銀髪美少女、全員が銀子ちゃん。朝から目の保養が出来る光景だね。

……いや、ある意味では目に毒な光景かもしれないけど。

「八一、飲み物汲んできて」

「分かった。麦茶でいいよね」

JK銀子ちゃんからのオーダーを受けて俺はキッチンへと向かう。

そして冷蔵庫から麦茶を取り出しコップに注ぐ。その数は勿論5つ分だ。

俺と銀子ちゃんズの共同生活が始まってから、今日で一週間が経過した。

当初はどうなるものかと思ったこの生活もここまで問題なくやってきている。それが人間の適応力というものなのか、一週間も経てばみんなもある程度この不思議な状況に慣れてきたようだ。

とはいえ勿論その不思議さに変わりはない。

よくよく考えてみると「これ夢にしては随分と長くないかな？」とか「夢の中で眠っ

たり、日にちが経つってどういう事なんだろ？」みたいな疑問が浮かんできたりはあるんだけど……。

ま、そんな事どうでもいつか。……って気分になっちゃう。だって考えても分かんないしね。

これは盤の中に答えがある将棋とは違う、きつと答えなんてどこにもない。だから俺達に出来るのはただありのままを受け入れるだけだ。

こと俺にとってはこの部屋のドアプレートに書かれていた文字の通り、ただ銀子ちゃんを可愛い可愛いするだけである。というかあのドアプレート、どうして『×5』なんだろうね？

まあとにかくそんな訳で、今ではもう銀子ちゃん達は普通に日常生活を送っている。そして俺もだ。というか俺の場合この部屋に居るだけで、この空間でただ呼吸をしているだけで幸せになれるってどうか。

特にJK銀子ちゃんと毎夜ごとにイチヤつく術を確立した事で、むしろ今までより充実した日々を送れているような気がする。

なんせ銀子ちゃんと付き合い初めて以降、あの子のスケジュールが多忙過ぎて二人っきりの時間を取るのが大変だったからなあ。

勿論そんな中でも時間を見つけて会っていたんだけど、ここでは毎日一緒に毎日イ

チャつける。これ以上の幸福があるだろうか、いやない。

「八一」

「あ、JK……じゃないか、JC銀子ちゃん、どうしたの?」

とあれこれ考えながら麦茶の用意をしていたら、隣にはJC銀子ちゃんが来ていた。

俺が一瞬見間違えてしまったのは彼女の格好が着替え前、つまり私服だったからだ。中学生と高校生の銀子ちゃんは年が近い為、私服だとパツと見で判断するのが中々難しかったりする。

ともあれそんなJC銀子ちゃんなんだけど、最近この子の様子がちよつと変わってきていて……。

「……(じー)」

「……えつと、なにかな?」

「……(じい〜)」

「……あの、銀子ちゃん?」

なんかこの子すつげー見てくる。とそんな事がここ最近増えたのだ。

決して睨んでくるという訳では無くて、ただじーつと俺の顔を見つめてくるのだ。

一体どうしたんだろう、俺何かしたかな? 自分が知っている九頭竜八一よりも成長

している俺の事が余程気になるのかな?

「……えっと、俺の顔になんか付いてる？」

「目と鼻と口が付いてる」

「いやあのそういうボケじゃなくてさ」

「なに？ 八一の顔はなんか付いてなきや見ちやいけないの？」

「いけないって事は無いんだけど……」

うーむ、なんだろうね、これは。

昔とは違つて今では銀子ちゃんに凝視されても恐怖を感じたりはしないけど、ただこ
うも見つめられるとなんか……ちよつとドキドキしちゃう。

だつてJC銀子ちゃん顔が近いんだもん、というか相変わらず可愛いお顔ですな……
なんて事を考えていると、彼女は俺の手からコップが5つ乗つたお盆を奪い取つた。

「……貸して。運んであげる」

「え、いいよ。俺が運ぶから——」

「いいから貸しなさい」

俺に一切有無を言わず、JC銀子ちゃんはそのままお盆を持ってリビングへと戻つ
ていく。

とこんな感じで、俺の手伝いというか……なにかと親切にしてくれる事も増えた。
そしてそれだけじゃない。

更にはその……不思議な行動というか、謎のアクションを起こしてくる事もあって。以下、最近の俺とJC銀子ちゃん的一幕その一。

「八一」

「ん？ ……て、なに？」

「なにが」

「いやなにがって、これ、なに？」

「だからなにが」

「いやだから、何で俺の頬をつまむの？」

「つまみたいから」

「……そっか」

「うん」

「……うん」

「……(ぶにぶに)」

「……あの、楽しいっすか？」

「別に」

「……」

以下、最近の俺とJC銀子ちゃん的一幕その二。

「八一。手を出して」

「手？」

「うん。手、出して」

「はあ……」

「ふむ……（にぎにぎ）」

「……あの、なにしてるんすか？」

「ツボを押してる」

「ツボ？」

「うん、ツボ。どこか身体で悪い部分はない？ ツボを押して治してあげる」

「あ、じゃあ……って、でも銀子ちゃん、手のひらの何処に何のツボがあるとか知ってるの？」

「知らない」

「……………」

……とまあ、こんな感じで。

これはあくまで一例に過ぎないんだけど、こんな感じで時折俺の頬を軽く抓ってきた

り、あるいは俺の右手を取ってにぎにぎと、ツボでも押すかのように手のひらを揉んできたりと……。

とにかくJ.C.銀子ちゃんとはここ数日で触れ合う機会が一気に増えた。この部屋で出会った頃よりも沢山スキンシップを凶れている。

やはりこの生活に慣れてきて心に余裕が生まれたという事なのだろうか。理由はよく分からないけど嬉しい限りだ。

……ただ、こうしてJ.C.銀子ちゃんと接触する機会が多くなった今。

一方で俺は考えてしまう事がある。それは未だスキンシップを凶れていないあの子の事だ。

その後、朝食を食べ終わって。

身支度を済ませたら、学生の身分である三人の銀子ちゃんはそれぞれの学校に登校していく。

それから暫くは俺と幼女と二人きり。幼女と一緒に将棋を指して、幼女が本を読む姿を眺めて。

そして昼。幼女と一緒に昼飯を食べて、目がしよぼしよぼしてきた幼女を寝かしつけて……。

そして。

「ただいま」

昼の二時過ぎ。玄関ドアが開く音。

学校が終わるのが一番早い小学生の銀子ちゃんがまず帰宅してくる。

「おかえり、JS銀子ちゃん」

いつものように俺はそう声を掛けた。

だが銀子ちゃんはちらつと俺を見て「……ん」と呟くだけで。

それだけですぐに俺から視線を外して、背中から赤いランドセルを下ろす。

うーむ、相変わらずのご様子。まだちよつと打ち解けていないというか、距離を感じるよなあ。

まあ空銀子と言えば誰に対しても距離を作るような性格なただけど、それでも弟弟子であるこの俺に対してはもつと気安くというか、本来ならもつと親密に接してくれるはずなのだ。

このJS銀子ちゃんとの微妙な距離感、その問題は前々から気になっていた。

もはや捨て置く事は出来ない。JS銀子ちゃん懐いてくれない問題に何か手を打たなければ。

せつかく小学生の銀子ちゃんが、今やもう夢の中でしか会う事の出来ないロリ銀子ちゃんがここに居るのに、仲良く出来ないだなんてあまりにもツライ話ではないか。

この時間帯だと幼女はまだ夢の中。よって今から幼女が目を覚ますまで、あるいは中・高の銀子ちゃん達が帰宅するまで、この部屋で俺とJ S銀子ちゃんの二人だけ。

なのでこの機を利用して、俺はもつとJ S銀子ちゃんと親密になろうと考えていた。

「ねえ、銀子ちゃん」

「なに？」

「良かったらさ、俺と少しお話をしない？」

「……………お話？」

怪訝そうな目で俺を見るJ S銀子ちゃん。

ここでいつも通りに「それじゃあ一局指そうか」と言わないのが今日の俺の狙いだ。

今日まで一週間、この子とはもう何度も指導対局をしてはいるのだが、将棋では中々思うように親密度が上がらない。というか銀子ちゃんが盤面に集中してしまい俺の方を見なくなってしまう。

だから今日はまず会話から、しつかり顔と顔を合わせてお話をする所から始めてみたいと思う。

「話ってなに？」

俺の前にちよこんと座ったJ S 銀子ちゃん。

その綺麗な灰色の目を見ながら、俺は世間話をするような気安いノリで口を開く。

「銀子ちゃん。俺達がこの部屋で共同生活を始めてから今日で一週間になるよね」

「そうね」

「だからさ、ここままで何か思った事とか……なにか困っている事とかはないかな？」

「……別に、なにも」

一秒程考えた後、銀子ちゃんはなんともそっけない答えを返してくる。

「そ、そっか。それじゃあ……あ、なら最近の小学校での生活とかはどう？」

「どうって、別に普通だけど」

「ほら、授業で分からない所とかは無いかな？」

「無い」

「……そ、そっか。ならいいんだけどね、うん」

「……うん」

「えつとく……あ、そうだ！ じゃあさ、今何か欲しいものとかは無いかな？ この際だ

から奮発して何でも買ってあげ——」

「それも無い」

「……そ、そっすか」

「……………うん」

やべえ、話が続かねえ……会話のキャッチボールというのをやる気がねえよこの子……。

「……………」

「……………」

そして俺も銀子ちゃんも沈黙してしまい、その場には気まずいような空気が流れる。こうした会話のぎこちなさ、それは子供の頃の俺と銀子ちゃんの間には無かったものだ。

当時との違いは俺が18歳になった事だけだし、やはりそこがこの問題の原因なのだろう。

けどまあそれも仕方無いっちゃ仕方無いよなあ。

仮に俺が小4だとして、本来小2のはずの銀子ちゃんが高校生になったらと考えると……。

……………うん、そうなったら俺だって高校生の銀子ちゃんと普通に接する自信が無い。小学生からしたら高校生なんて殆ど大人みたいなものだし……。

「……………というか銀子ちゃん。もしかしてだけど……俺の事が怖かったりする？」

「……………別に、怖くなんてない」

「そっか、それは良かった。……けど、なんとなく慣れないような感じがあるんだよね？」

「慣れないって言うか……その……」

「まあ気持ちには分かるよ。小学生だった俺がいきなり高校生になってるんだからね。けど単に成長しただけで別人になった訳じゃないんだからさ、その辺はあんまり気にしないで、いつもの銀子ちゃん感じで接してくれて良いんだよ？」

「……そんなことは分かってる」

別人になった訳じゃない。

その言葉が刺さったのか、J S 銀子ちゃんが悩むような表情で俺の事をじつと見つめる。

……ううむ、こうして顔を合わせるとその度に思うんだけど、やっぱり可愛い。小さい銀子ちゃんというのは何故こんなにも可愛いのだろうか。

いや別にね？ 決して大きくなった銀子ちゃんが可愛くないとか言っている訳ではないんだ。ただそれでもJ SにはJ S特有のあどけなさがあるというか、この小ささが俺を狂わせるっていうか……あと銀子ちゃんには見慣れないロングヘアがまたグツと来るっていうか……。

とそんな邪な事を考える俺をよそに、銀子ちゃんは「八一……やいち……」と繰り返

し呟いて。

「……あなた、は、八一」

「うん、八一だよ。俺は九頭竜八一」

「八一……は、今、18歳なんだっけ」

「うん、そうだよ」

「ふーん……」

頷く俺の顔を銀子ちゃんがしげしげと眺める。

「それじゃあ……私が知っている11歳の八一から7年成長した八一なんだ？」

「うん、そうだよ。厳密に言うとな俺は誕生日を迎えているから6年と少しだろうけどね」

「……11歳から6年と少しが経って……それでプロになった八一なのよね？」

「うん、そうだよ」

「で、私と付き合う八一だと」

「んっ!？」

思わず言葉につつかえてしまった。

俺は気を落ち着ける為ごくんとツバを飲み込む。

「っ、付き合う？」

「なによ、私と付き合ってるんじゃないの？」

「え、あ、うん、そう……だね。高校生になった銀子ちゃんと付き合い合ってる、かな」「そうよね。だつて自分から言つてたんだし。……ふーん、私と八一がねえ……」

J S 銀子ちゃんはより興味深そうに、俺の顔をじとーつと半眼で見つめてくる。な、なんだろう。今この子はその頭の中でなにを考えているのだろうか。

もし仮に「なんで八一と？」とか「高校生の私はなんでこんなに冴えない男を選んだの?」みたいな事を考えていたとしたら俺はショックで二、三日程寝込むと思う。

「私とお付き合ひしてるんだ?」

「はい」

「恋人なんだ?」

「はい……」

「私と恋人になって、嬉しかった?」

「……はい。嬉しかったっす……」

「ふーん……」

J S 銀子ちゃんはより一層興味深そうに、ふむふむと頷く。

けどこの流れは……この流れはなんか……。

「で、どっちから?」

「え、な、何がっすか?」

「だから告白。どっちからしたの？」

ああやっぱりだ。この流れは良くないぞ。

これはきつと根掘り葉掘り、あれこれ聞かれてしまうヤツでは……。

11. JSの話

引きつった顔になる俺をよそに、JS銀子ちゃんの追及の手が容赦なく伸びてくる。

「だから告白。どっちからしたの？」

「え、告白？ それは、そうなのはちよつと答え辛いつていうか——」

「言え」

「はい」

俺はノータイムで頷いた。

正直そういう話をするのはちよつと恥ずかしいんだけど……それでもここは答えるしかない。

だつて先程の「言え」という命令口調。あれはまさに子供の頃の俺達の関係性に近い。JS銀子ちゃんが自分の知る九頭竜八一とこの俺を重ねてきている証拠だろう。その流れを止めてはいけない。

だから俺は意を決して答えた。

どっちから告白したかってそりやあ勿論――

「告白は、まあ……俺からです」

「！　へ、へえ……」

一瞬銀子ちゃんのおめめが大きく見開かれる。

そしてすぐ普段通りの顔に戻る……が、口元のにんまりが隠せていない。

「そうなんだ。八一の方から告白してきたんだ」

「そうつす。俺の方から告白させて貰いました」

「……ふーん。あんた、私のことが好きなんだ？」

「うっ、……」

アカン、照れる。年下のこんな小さな女の子相手に好きだとかどうとか、そういう話をするのってなんか凄く恥ずかしいっす……。

……けどっ！　ここはJ S 銀子ちゃんと仲良くなるチャンスだ、今は恥ずかしさを押し殺すっ！

「……うん。そうだよ。俺は銀子ちゃんが好きだ」

「ふっ！　ふ、ふうん……」

ふーん、とJ S 銀子ちゃんは素知らぬ態度だが、その顔はむふんと得意げな顔になっている。

その表情は可愛いんだけど……なんか俺が一方的に好きだと言ってるようでちょっと悔しい。

ちよつと悔しいけど……でもやつぱり可愛い。

「そっか。八一は私の事が好きで、だから自分から告白したんだ？」

「そ、そうっす」

「どれぐらい？」

「え？」

「どれぐらい私の事が好きなの？」

「え、えつとおく、どれくらいかと言うと……」

ど、どれぐらい好きかって聞かれてもなあ。

こーいうのって比較するような話じゃないし、なんて答えりやいいんだ？

「まあその……いつぱい？　好き？　みたいな？」

「いつぱい？」

「うん。いつぱい」

「……ふーん。そうなんだ、へえ……」

別に興味は無いけどね？　みたいな顔をするJS銀子ちゃん。

けれどそれはあくまでフリだ。だってもう声からして嬉しそうだ。こーいう素直

じゃない所は本当に銀子ちゃんだなんて感じがする。

「じゃあいつから?」

「え?」

「だから、私の事。いつから好きだったの?」

「え、えつとおく、いつからかって言うところ……なんか気付いた時にはもう、みたいな感じで……」

「だからそこを詳しく教えろつつってんの」

「はい」

俺はまたもノータイムで頷くしかない。

けれど、うーん、いつから銀子ちゃんを好きだったか、かあ……これは難しい質問だな……。

俺にとってその気持ちをハッキリと自覚したのは結構最近の事だったりするんだけど、けれどもその自覚した時、そのタイミングでもって好きになったのかと言われたらそれは多分違うだろう。

それ以前から俺の内には想いが、銀子ちゃんに対する大きな想いがあった訳で……言わばその想いに名前を付けたのが自覚という事で、その想い自体が生まれたのはもつと前なはずだから……。

「そうだな……中学生のころ——」

「あん？」

「——よりは前だな、うんっ！ 多分絶対にそれよりは前で……」

危うく小学生にキレられそうになったので、俺は慌てて発言に軌道修正を掛ける。

けれど実際、俺が中学生の頃はもうそうなっていたか。あの頃はすでに銀子ちゃんに相応しい男になる為にタイトルを欲していた時期だし……今から考えるとあれはそういう事なのだろう。

となるとその前、小学生の頃だろうか。

俺と銀子ちゃんが一番長く共に居た時間。何処に行くにも手を繋いで何をするのも一緒だった頃。やっぱりこの頃に大きな想いが生まれたのか。

「多分、小学生の頃……かな」

「もつと具体的に教えて」

「え？」

「だって小学生の頃なんて6年間もあるじゃない。もつと細かく分けて」

「え、ええく!?」

「き、厳しい！ 事が自分の年頃に関わる話だけにJS銀子ちゃんは妥協を許してくれない。」

けれど困ったぞ、ぶつちや俺がこの子を好きになった時期なんて分かんないんだよなあ。それぐらい俺にとって空銀子とは自分の隣に居るのが当たり前前の存在だった訳で……。

そして、俺はその当たり前を欲していた。幼い頃の銀子ちゃんに見捨てられないよう必死で将棋の腕を磨いて、その後再び『銀子ちゃん』と呼べるようになるうとまた将棋の腕を磨いて……。

こうして見ると俺の人生は殆ど将棋と空銀子だけで構成されているようなものだ。あまりにも俺の人生に深く食い込み過ぎていて全体像を正確に把握するのは難しい。

それでも無理やり言い切ってしまうなら、俺がこの子の事を好きになったのは多分――

「多分君と――じゃ、なくて、なんだろう、ほんとに子供の頃から好きだったんだと思うよ？」

「子供の頃って？ 小学校低学年ぐらい？」

「う、うん。そうだね。その辺かも」

「……ふん」

ひとまず銀子ちゃんは納得してくれたようで、その口元に小さな笑みが浮かんだ。

つーか、あ、危ねえ……！ 一瞬「君と出会った時」なんつー恥ずかしすぎる言葉を

血迷って口走りそうになってしまった。

さすがにそれは無い……と思うんだけど、俺にとつて空銀子とは出会いからして衝撃だったから、その時から惹かれるものがあつたのかも、なんて事を考えちゃったんだ。

「じゃあ八一。とにかくあんたは小6の頃は間違ひなく私の事が好きだったのね？」

「はい。そうっす……」

「ふうう〜ん……」

ああ、もうなんかJ S銀子ちゃんつてはめちやくちやにんまりとしてるし……。

対して俺はめちやくちやくち恥ずかしいし……いくらこの子と仲良くなる為とはいへ、ちよつと身を切りすぎてしまったような気がする。

でもJ Sの銀子ちゃんに「言え」と言われたら逆らえないよなあ……なんて考えていると。

「……でもそれ、本当に？ 嘘吐いてない？」

ふいにその声のトーンが下がって、銀子ちゃん表情が訝しむようなものに変わつた。

「え、うん、本当だと思うけど」

「でも私の知ってる八一はなんか……あんまりそういう感じじゃないっていうか……私の事を好きだと思っている感じには見えないような……」

「あー、それはそうかもね。というのも俺自身その気持ちを自覚したのは大分遅かったから、確かに君の知っている九頭竜八一はそういう素振りを見せてはいないかもしれないね」

J S 銀子ちゃんは小学4年生。この子を知る俺とは小学6年生の頃の九頭竜八一で、その頃の俺は銀子ちゃんが隣に居るのが当たり前過ぎて……。

なんて言うのかな。好きは好きんだけどそういう相手だとは感じていないっていうか……駄目だ、自分でも上手く表現出来ない。まあなんだ、有り体に言えば俺の精神が未発達だったのだろう。

「自覚、か……それって自分でも自分の気持ちに気付いていないって事？」

「そうそう、そういう事そういう事」

「じゃあ気付いていないだけで、6年生の頃の八一は私が大好きって事なのね？」

「うん」

あれ、いつの間にか「好き」から「大好き」にレベルアップしてる……。

ま、まあ別にいいんだけどね。銀子ちゃんの事が好きなのは事実だし、今更そんな些細な所を気にはしないさ……なんて悠長に構えていると。

「……じゃあ八一、例えば私がこの夢から目覚めたとするでしょ」

「うん」

「それで小6の八一に『私、クラスに好きな男の子が出来たの』って言ってみたら……」
「ちよちよちよちよちよ！ ななななんちゅー事言いだすのきみ！」

銀子ちゃんに好きな男が出来る!? 俺以外の男が、俺以外の男が銀子ちゃんにに!?
ただ駄目だそんな事。そんなの絶対に駄目だ、そんな事を認めてはいけない。

「駄目駄目っ！ 駄目だよ銀子ちゃん！ そんな事は絶対に言っちゃ駄目だから！」

「でも、そうすれば6年生の八一だつてちよつとは自覚したりするかも……」

「自覚する前に俺が死んじゃうから！ 小4の頃の銀子ちゃんに恋人が出来たりでもしたら俺もう即死だからね!」

銀子ちゃんに俺以外の恋人が出来るだなんて……ああ駄目だ、想像しただけで吐きそうになる。

18歳の俺でさえこれなのだ。小6の俺では間違いなく耐えられまい。きっと小4の銀子ちゃんから「私、彼氏が出来たの♡」なんて言われたその日には道頓堀に身を投じているだろう。

「銀子ちゃん。冗談でもそんな事は言っちゃ駄目。君だつて俺の事を殺したくはないだろ？」

「……そんなに？ そんなに嫌なんだ？ 死んじゃうぐらい？」

「そうだよ。死んじゃうぐらいに嫌だから、そんな事は絶対に言っちゃダメ」

「…………ふーん」

至極真面目に念押しに念押しを重ねると、俺のそんな狼狽ぶりが面白かったのか、
「…………ふふっ、情けない顔。ばかやいち」

J Sの銀子ちゃんは俺を見てくすりと笑った。



——こうして話をしてみても、やっと分かった。

この人は間違い無く九頭竜八一なのだ、私はそう強く実感する事が出来た。

私の名前は空銀子。小学4年生の9歳。

あの人が『J S 銀子ちゃん』（この呼び方はよく分からない、J S って何？）と呼ぶ空銀子だ。

今『あの人』と言ったのは、ここに居る八一は私にはどうにも八一のようには見えな
いから。

あの人は私が知る八一より大分年上、18歳になった八一らしいんだけど……正直私
には信じられないっていうか、眉唾な話だと思っていた。

だってあの人は……あの人は私が知っている八一とは全然違うから。

八一本人というよりも、八一の親族のお兄さんだと言われた方が納得できる。だってあの人は私が知っている八一よりも背が高いし、気が利くし、優しいし、面倒見だって良いし……。

それに、それに……な、な、なんていうか……。

なんか、なんか……なんか格好良いしっ!?

……そう、カッコいいのだ。大きく成長した八一は格好良くなっていて、初めて会った時に私は思わず見惚れちゃった。

それが恥ずかしくて、私はつい「なんか微妙。もうちよつとカッコよく成長出来なかったの?」と真逆の事を言ってしまった。

ううん、微妙なのは本当なの。イケメンかって言われると必ずしもそうじゃない感じなんだけど……でも優しい感じの顔で、なんか……なんか凄い私のタイプっていうか、そんな感じなの。分かる?

とにかく私にとつて18歳になった八一とはそんな感じで……だから八一なのに八一のように接する事が出来なかったっていうか……率直に言っっちゃよつと緊張しちゃう。

そんな理由で上手く馴染めなかった事を八一の方も気になっていたのだろう。帰宅

するや否や「少しお話をしない？」と八一に誘われた（こういう気が利く所が良い）

私はそれに頷いて、あれこれと話している内に分かった事があるんだけど……。

……なんていうか。八一はその……けっこう？

……ううん、かなり、かな？　かなり……私の事が好きみたいなのだ。

18歳になった八一と高校生の私が付き合っている事は以前に聞いたから知っていた。

それを聞いた時、私は驚き半分の納得半分といった心境だった。驚き度で言えば多分の隣の座っていた中学生の私の方がびっくりしていたと思う。あの時のJC銀子は本当に顔が固まっていた。

私もびっくりはしたものの、けど私が付き合うとしたら、まあ……まあギリギリの線で？　八一以外はあり得ないかな？　みたいな感じだから、なるべくしてなったのかなとも思った。

むしろ何処その赤髪の男女や黒髪の女に奪われなくて良かった。グツジョブ私、と思つた。

まあそれはともかくとして。

私はこの機を逃さず色々となつていた事を八一に聞いてみた。すると――

「告白は、まあ……俺からです」

告白したのは八一の方からだったりと。

「まあその……いっぱい？ 好き？ みたいな？」

どうやらいっぱい好きなようであつたりと。

「多分、小学生の頃……かな」

それは小学生の頃からであつたりと。

次から次へと、これまで知らなかつた八一の情報が八一本人の口から語られるではないか。

——へ、へえ！ そうなんだ。八一ってば、そんなに私の事が好きなんだあ……！
そつかあそつかあ、あの八一がねえ……あのバカときたらそんなに私の事好きだったんだ……。

だ、だったらもつと早く言ってくればいいのに……そしたら私だって、私だって……♡

……あ、う。なんだろう……なんか口元がむずむずしてくる。ほつぺたがむにむにしちやう。

あう、だ、ダメダメ。こんなにやけただらしのない顔をこの人の前で見せたくない。と、とにかく、とにかく八一は私の事が好き。本人が言うんだから間違いないよね。

私が知っている11歳の八一にはそんな素振りは見えないんだけど、当の本人に言わせればそれはただ自覚していないというだけの事らしくて。

だつたらその自覚を促す手段として『私、クラスに好きな男の子が出来たの』とか言おうとしてみたなら、どうやら八一は死んじやうらしくて……。

そんな話をしている内に……私は思った。

ああ、こいつは確かに八一だ。こいつは私が知っている九頭竜八一に間違いない。だつてほら、だつてこんなに……こんなにかつこ悪いんだもの。

私が他の人を好きになる事を死ぬほど嫌がつて、情けないくらいにあたふたしちやつて……。

「……ふふつ、情けない顔。ばかやいち」

やつぱり八一はこうじゃなくちやね。

成長してちよつとはマシになったみたいだけど、ちやんとかつこ悪くて良かった。

12. 更にJSの話

「……ふふつ、情けない顔。ばかやいち」

私がそう言つて笑うと、

「……はあ、全く……」

この人……じゃないや。

大きくなつた八一もため息を吐きながら困つたような笑みを浮かべる。

「いいかい銀子ちゃん。クラスに好きな男の子が出来たの……とか、そういう俺の心臓に優しくない冗談は絶対に言つちや駄目だからね？」

……ふむ。

確かにそれは冗談だ。小学校のクラスに好きな男の子などいないし出来る予定もない。というかクラスの男子なんて興味が無いから顔も名前もロクに覚えてすらいない。だけど……この冗談を受けてあたふたする八一は見ものだ。イイ感じにかっこ悪くなる。なのでもうちよつとからかつてみようと思う。

「別に冗談なんかじゃないわ。ほんとに好きな相手が出来るともしれないじゃない」
「ちよ、ちよつと銀子ちゃん！」

「いつそ本気で恋人探しをしてみようかな。もちろん……八一以外の」
「んぐつ！」

私の言葉が急所に刺さったのか、八一は苦しそうに呻いて心臓の辺りを押さえる。

ふふつ、八一はもう18歳なのに、私の言葉一つでそんなに取り乱して……なんかかわいい。

……と、私がそんな事を考えていると。

「ふ、ふふふ……」

突然八一が不気味な笑い声を漏らして。

「な、なに？」

「ふふふ……銀子ちゃん、そんな思わせぶりの事を言っちゃってもいいのかな!？」

一転してその顔に不敵な笑みを浮かべた八一からの反撃が飛んできた。

「俺は知ってるんだよ！ 小4の頃の銀子ちゃんはもう九頭竜八一が大好きだって事をね！」

「にやつ!？」

「クラスの男子を好きになるだつてえ!? そんな事出来るはずがないね！ 何故なら君

はもうこの俺にメロメロなんだからさあ！」

「な、にや?! わわ、私が八一にメロメロ!? そ、そんなにやことにやいし!」

慌てすぎて喋り方が変になっちゃった。でも本当に、本当にメロメロなんかじゃないから!

私にとって八一とは子供の頃からずっと一緒にいるだけの相手で、何処に行くのにも手を繋いでいるだけの相手で、これからもずっとそうしていただだけの相手で、ただの弟弟子で……だから好きとかそんなんじゃないやなくて……!

そりゃ八一は私の事を好きなんだろうけど?

というか大好きなんだろうけどね!?

でも別に私は、私はそんな、そんな……!

「べ、別にわたしは、そんなに、八一の事なんて好きにやわけじゃ……!」

「おーつとお、その言い訳は通用しないよ。なんせ俺は当の銀子ちゃん本人から聞いたんだからね」

「え、私から?」

「そうだよ。高校生になったときみ自身から。初——じゃない、前に機会があった時に『いつ位から俺の事が好きだったの?』って聞いたら『子供の頃からずっと♡』って答えてくれたもんね!」

な、なんですつてえ！ 高校生の私めえ、なんという余計な事を言うのだ！

勝手に人の本心を打ち明けないで欲しい。これでは私がもうすでに八一に告白をしちゃっているようなものではないか。

「九頭竜八一の事、とつくに好きなんですよ？ ほらほら、認めちやいなよお？」

「し、知らないそんな事っ！ 私は八一なんて好きじゃないもん！」

「へえ〜？ そうなんだあ〜、好きじゃないの？」

「好きじゃない！」

「ふーん……」

私はふいつとそっぽを向くが、それでも八一は強気な笑みを崩さない。

成長して18歳になった八一はこの私の事を、空銀子という人間の事を知り尽くしている。だからこそ的確に私の弱い部分を付いてくる。

「けど良いのかなあ、そんな事を言っちゃって」

「な、なにが……？」

「それなら……それなら俺だつて銀子ちゃんの事を好きじゃなくなっちゃうかもしれないよ。」

「え……？」

うそ、好きじゃなくなっちゃうの……？

「それどころか……銀子ちゃん以外の子を好きになっちゃうかもね」

「ええ!？」

うそうそ、私以外の女の子を……!？」

「あ、唐突に思い出したぞ。そういや小6の頃はクラスにとても可愛い女子が居たんだよなあ。君の知っている九頭竜八一はもしかしたらその子の事を好きになつたりしちゃうかも……」

「そんなあ!？」

八一の語る話があまりに恐ろしすぎて、私は思わず悲鳴を上げる。

そ、そんな……! 八一が、八一が他の女の子の事を好きになっちゃう……!？」

……や、やだやだあ! そんなの、そんな事になつたらもう立ち直れないよお!

わたしは……わたしはやいちだけなのに……やいぢやないとダメなのに……。

「……うう、そんなのやだあ……!？」

口からは蚊の鳴くような声しか出なかった。

そして目元がじわじわと熱くなって、視界がじんわりと滲んできて……。

「——あ」

するとそんな私の様子を見た八一は「ヤバイ」と言うような表情に変わった。

「じよ、冗談! これ全部冗談だからね!？」 他の子なんて好きになつたりしないからね

!？」

「……ほんと？」

「ほんとほんと！ 九頭竜八一は空銀子ちゃんが大ーい好き！ もうちよー好きだから！ 銀子ちゃん以外なんて考えられない！」

「……それならいい」

危うく泣きそうになつちやつたけど、私はギリギリで涙を抑える事に成功した。

……ふへへえ、だーい好き、だつて。

ちよー好き、だつて。えへへ……嬉しいな。

「少しからかい過ぎちゃったね。ごめん」

「むー……」

八一はぺこりと頭を下げる。本当にひどい話だ。18歳のくせに小学生をからかうだなんて。

もやもやの収まらない私は八一をじつと睨む。するとその睨みに効果があつたのか、「お詫びのしるしに……ほら、おいで」

そう言つて優しい笑顔を浮かべながら、八一は両腕を大きく横に広げた。

……む。なにそれ。

もしかして抱き付いていいよ、つて事？ そんなのでお詫びになるとでも思つてるの

?

「……………」

「……あれ？ どうしたの、こないの？ 銀子ちゃんこれ好きだよね？」

「……別に好きじゃ……って、もしかそれも高校生の私が言つてたの？」

「まあこれは直接聞いた訳じゃないけど。でも反応を見ていれば何となく分かるからね」

「……………むう」

「……どうしよう。カンペキに私の嗜好が読まれてしまっている……。」

「そりゃあ……好きだけど。だって私は八一の事が好きなんだもん。好きな人に抱き付くのが好きだなんてのは当たり前的事でしょ？」

「そう、だからこれは当たり前前の事なの。」

「だから八一が抱き付いて良いよ？ っていうならお言葉に甘えてそうしたい……けど、でも……なんか恥ずかしいような気もするし……。」

「でもでも、もう八一には好きって気持ちバレちゃってる訳だし……それにこれは所詮夢だし……この夢から覚めたらもう18歳の八一に抱き付くなんて数年経たなきゃ無理な訳で……。」

「……うう、えーと、えーとお……えいっ！

と勢いをつけて、私は八一の胸に飛び込んだ。

「おっと」

すると八一が飛び込んできた私を優しく受け止めてくれる。

「ん……」

……あ、大きい……。

18歳になった八一の身体は私が想像していた以上に大きかった。

八一の両腕が私の背中に回される、すると私の全てがすぼりと覆い隠されてしまうぐらいだ。

……あわわわ、八一に包まれてるう……！！

「ん……」

「よしよし、いい子だね」

八一の胸にぐりぐりとおでこを押し付ける。すると八一の手が私の頭に伸びてくる。

そうしてナデナデされちゃうと……あ、大きな手のひら……ふわわあ、気持ちいい……。

「……んー♡」

八一の手が私の髪の毛の奥にまで入ってきて、私の長い髪をブラッシングするみたいに優しく丁寧に梳いてくれて……。

こ、これは……！ これは心地いい……うう、ふにやふにやになっちゃうよお。
 高校生の私はこんなに心地いいのを味わっているのか、ずるい。

「八一、もつとなでろ」

「いいよ。好きなだけなでなでしてあげる」

答える八一の声も嬉しそうだ。まあ当然よね？ だって八一も私の事が好きなんだし。

これは私も嬉しくて八一も嬉しい、win-winの関係というヤツだ。だからお互いに「そろそろ止めようかな？」って気分にはならなくて、その後もしばらく私は八一に抱き付いていた。

……ああ、幸せ。

今日はずっとこのままこうしてたいな……。

……と、私はそう思っていたんだけど……その時玄関の方でガチャリとロックを外す音が。

「あ、JC銀子ちゃんが返ってきたみたいだね」

中学生の私が帰宅したのを切っ掛けにして、八一は私の抱擁を解いた。

ぬう、せつかくの幸せな時間だったのに邪魔者が帰ってきた……と思っていたら、

「……………ふにゆう」

すぐ近くからもそんな声が聞こえた。

どうやら幼女の私もお昼寝から目覚めたらしい。仕方無く私は八一の胸元から離れる事にした。

「おかえり、J C 銀子ちゃん」

「ん」

「おかえり」

「………ただいま」

八一に続いて私も挨拶すると、中学生の私は私だけにはただいまと返してくれた。けれどもその顔は複雑そうな感じだ。かくいう私も自分に挨拶するのはちよつと違和感があつたりする。

「幼女銀子ちゃんも、目が覚めたかな？」

「………（こくり）」

「よし。それじゃあ将棋の時間といこうか。そろそろJ K 銀子ちゃんも帰つてくるだろうし」

「うん」

今は3時過ぎ。みんなが揃い出すこの時間帯から将棋をするのはいつもの流れだ。私もふわふわだった頭の中を将棋モードに切り替える。

今日こそは中学生の私に勝ちたい。相手は自分と同じく空銀子、それも自分より成長している空銀子とあっては分が悪く、実際私の連敗続きなのだが、けれどもこの夢の中で一勝ぐらいはしたいと思っている（ちなみにこれは中学生の私も高校生の私に対して同じような事を考えているらしい）

「……あ、そうだ」

とその時、帰宅したばかりのJ C銀子が何かを思い出したかのようにその口を開く。

「ねえ八」。ちよつと聞きたい事があるんだけど」

「なに？」

「この前——」

と、何かしらを言い掛けたのだが。

「……あ、その……」

そこでまず私を見て、

「……えつと……」

次に幼女の私を見て、

「……ん」

そしてJ C銀子は困惑したように口ごもる。

なんだろう。今の様子を見る限りだと私達の前では話し辛いような事なのかな。

「……八一、ちよつとこつち来なさい」

「あ、うん」

どうやらその読みは正解だったらしい。JC銀子は八一の腕を掴んでベランダへと向かう。

……むう。露骨な程の内緒話の気配だ。何を話すんだろうか、気になる……けど、これ程に内緒話の空気を作り出されてから「私も聞きたい」と言うのはちよつと気が引けるし……。

みたいな感じで私は躊躇していたのだが、しかし幼女の私はそんな空気を物ともしなかつた。

「じえーしー、なんの話をするの？」

「え、と……別に大した話じゃないから」

「たいした話じゃないならわたしもきく」

「駄目よ。幼女にはまだ早い話なの」

「やだ。わたしもきく」

「駄目」

「やだ」

「駄目だつてば」

「やーだ」

中学生の自分相手でも幼女銀子は折れない。さすが私譲りの頑固さだ。……あれ、逆かな？

そしてこの部屋内での幼女の私は立場が強い。八一は元より、他の空銀子達も一番小さい自分自身にはあまり強く出られない（かくいう私もだ）幼女の私にはそうさせる不思議な雰囲気がある。

「……ねえ、これどうすればいい？」

なので結局は根負けしたのか、J C銀子は助けを求めるかのように八一に視線を送った。

「えっと……その話ってどうしても内緒じゃないと駄目な話？」

「……まあ、どうしてもって程ではないけど……」

「なら良いんじゃない、ここで話しても。聞くのは他人じゃなくて同じ銀子ちゃんなんだしさ」

「……そう、ね」

中学生の私はまだ迷っていたようだが、やがて意を決したようだ。

そばにいる私と幼女の私にちらっと視線を向けた後、八一と顔を合わせて。

「八一。あんたは高校生の空銀子と付き合っているのよね？」

「う、うん。そうだけど」

「なら率直に聞きたいんだけど……二人はその、あの、お、おしべとめしべ、みたいな事はその、もう、もうしちやつてるの!?!」

すると八一がギョツとした顔になった。一方でそれを尋ねた中学生の私は顔が赤くなってる。

……おしべとめしべ?

しちやつてる? 何を? 何のこと?

13. よく分からない話

「え、ちよ、なに、なんて?」

思わずといった感じで聞き返す八一。

「だからっ! 八一は高校生の私ともうしちやっつてんのかって聞いてんの!」
キレ気味で聞き直す中学生の私。

「……しちやっつてる?」

そんな中、小学生の私は一人眩き首を傾げる。

……もうしちやってる?

しちやっつてるって、一体何をしちやっつてるの?

というかおしめとめしべってなに? 八一とJK銀子はお花でも育てているの?

「いやちよつと待ってよJC銀子ちゃん! 突然なんでそんな話を!」

「別になんてだっついていいでしょ! いいからとつと答えなさい!」

「てかそれどう考えても小学生と幼女が居る前で話していい内容じゃないっすよね!」

「わ、私もそうは思ったけどつ、でもあんたがここで話せて言ったんじゃない！」
「いや俺だつてまさかそんな話だとは……！」

ヒートアップしていく八一とJC銀子。

そんな二人の会話を聞きながら私は「……ふむ」と思考を巡らせる。

それはJC銀子が聞きたい事で、八一とJK銀子がしちやつてるかもしれない事らしい。

そして小学生や幼女の居る前で話すような事ではないらしくて、おしべとめしべらしい。

……うーん。私の前では話せないとなると、将棋に関わるような事ではないはずだよね。

そして八一と高校生の私は付き合っていて、付き合っている二人が『しちやつてるかもしれない事』となると……おしべとめしべというのは恐らく隠語のようなものだから……。

……あ、分かった。多分これはキスの事だ。

うん、きつとそうね、謎が解けてすつきりした。

「JKの私としちやつたの？ それともまだしちやつてないの？ どうなの!!」

「ど、どうって言われても……！」

「こんなの『はい』か『いいえ』で答えればいいだけじゃない。簡単に答えられるでしょ？」

「いや、あのですね、中々そういう訳にもいかないというか……」

J C 銀子の剣幕の前に八一はたじたじな様子。

八一とJ K 銀子がキスをしちやっっているのかしちやっっていないのか。その事がそんなにも気になるだなんて中学生の私も結構お子様だ。

けれど……うん、確かにちよつと気になる。だってそれは……そ、そういう事は、ほら、私にとつても決して他人事じゃない訳だし？

「……八一。男だつたらバシツと答えなさい」

「つて、J S 銀子ちゃん!？」

「ほら、小学生にも言われてるわよ！ ぐだぐだ言つてないでバシツと答えなさい！」
中学生の自分に便乗して私もうんうんと頷く。

「やいち、ばしつと答えろ」

「よ、幼女銀子ちゃんまで……」

すると幼女の私までもが口を開く。

けれども果たしてこの子は今繰り広げられている話を理解しているのだろうか。付き合うとかキスとかつて4歳の子供でも知ってるのかな？

「い、いや……けど……」

「けどじゃない。言え」

「いや待ってって！　こればっかしは俺の一存じゃ答えられないんだよ。JK銀子ちゃんにも関わる事だからあの子の了解がないと……」

それでもバシツと答ええない、全く潔くない八一はどうか逃げ道を探していたようだけれど、

「高校生の私なら良いって言ってたわよ」

「……え、それ、本当に？　JK銀子ちゃんか？」

続くJC銀子の言葉を受けて、八一はきよとんとした顔になった。

「そうよ。前に一度、JK銀子とは二人だけで今と同じ話をしたから」

「ああ……そういうえばベランダでなにか話していた時があったね」

「うん。したら自分の口からは答え辛いから、その話は八一から聞いてくれて言われたの。だからこうしてあんたに聞いているの」

「そっか、そうなんだ……あの子がOKなら話しちゃってもいいのかなあ……？」

八一は腕を組みながらうーん、と唸る。

「そうだそうだ。言っちゃえ言っちゃえ。高校生の私が良いと言っているなら良いはずだ。」

なんたって同じ空銀子なんだし、そういう情報は共有しておく必要があると思う。

「ほら、早く答えなさい」

「……分かったよ」

お。遂に八一が答える気になったようだ。

一度コホンと咳払いした八一は、私達三人の顔を見ながら言う。

「けどなんて言ったらいいか……そうだな、まず大前提として、俺とJK銀子ちゃんは高校生カップルなんだ。まあ俺は高校に行つてないんだけど年齢としては18歳で高校生に当たるから、とにかく高校生カップルな訳で」

ふんふん、それで？

「高校生カップルともなればね、つまり……自然とそういう関係になっちゃうんだよ。特別に進んでいる訳でも無くて特別に遅れている訳でも無い、世間一般と比較しても至ってノーマルな関係だと俺は思っているけどね」

「……で？」

「え、いやあの……ほら、ここまで言えば何となく分からないかな？ てか分かるよね？」

八一はそう尋ねてくるが、JC銀子は「分からないわよ」と首を横に振る。

そして私も同感だ。今の説明では曖昧過ぎて何が言いたいのかわよく分からない。

高校生カップルだからなに？ だからキスをするの？ しないの？ どっちなの？

「だから……：：：そうだな、あのー、JK銀子ちゃんは高校一年生だつてのは知ってるよね？」

うん。

「でもね。実はJK銀子ちゃんはただの高校一年生じゃないんだ」

ただの高校一年生じゃない？

「あの子はJKだけだただのJKじゃなくて……つまり、まあ、なんていうか……」

そこで八一はまるで言葉にし難い事を言うかのように視線を横に逃して。

そしてちよつと赤くなつた顔で、言った。

「あの子はもう大人の銀子ちゃんでもあるんだ」

……大人の銀子ちゃん？

JK銀子はJKじゃなくて大人らしい。けれどそれが何だと言うのか。

話の流れから察するに、大人だからキスをしちやつてるって事なのだろうか。

むう。ややこしい言い回しというか、煮え切らない言い方だ……と私は思ってたんだ

けど。

「お、おとなあ!?!」

聞こえたその声は見事に裏返っていた。

どうやら中学生の私には八一の言葉の意味が、その真意が私よりハッキリと理解出来たらしい。

その顔が見る見る内に真っ赤になっていく。まるで茹でダコのようなだ。

「おとなって、それって、それって……!」

「ま、まあ……そういう事だね」

「う……そ、それ、ほんとなの!?!」

「……うん。け、けどね!?! さっきも言ったけど俺達は高校生カップルだからそうなるのも自然っていうか、別に俺が急かしたとか我慢できなくなったとかそういう話じゃないんだよ!?!」

八一は何やら早口でまくし立てる。その言葉はどこか言い訳めいて聞こえた。だが今の説明を聞いても私にはよく分からない。

そもそもどうしてJK銀子は大人なの? まだ高校一年生の16歳だよな?

大人って20歳になったらじゃないの? 高校生なのに大人になる方法があるの?

「や、や……やいちの……やいちの不潔……!」

「不潔違うっ! 普通の事なんすよこれは! 付き合っていたらマジで普通の事!」

「……ねえ、ＪＣ銀子」

分らないので尋ねてみる事にした。

八一と言い争い中のＪＣ銀子の服の袖を私はちよんちよんと引つ張る。

「え!?! あ、なに?」

「中学生のあなたは大人なの?」

「は、はあ!?! わ、わわ、私が大人な訳ないでしょう!?! バカじゃないの!?!」

するとももの凄い剣幕で叱られた。でもＪＣ銀子は顔中真つ赤だからまるで怖くない。

でもそっか、中学生は大人じゃないんだ……となるとキスをしていないって事なのか

な?!

「なら八一は大人なの?」

「俺? ……うん、まあ、そうだね。ＪＫ銀子ちゃんと一緒にタイミングで大人になった

んだ」

「一緒にタイミングとか言うな!」

むー? 一緒にタイミング?

八一と私は誕生日が異なるのに、一緒にタイミングで大人になったりするのだろうか。

か。

……とそんな事を悩んでいると。

「あっ」

突然八一がそう呟く。きっと今玄関の方で聞こえた物音に反応しての事だろう。

どうやら話題の中心人物である高校生の私が帰ってきたようだ。

「ただいま」

「お、おかえり銀子ちゃん」

「……つて、なにかあったの?」

いつも通りの様子な幼女。大人の意味がよく分からなくて悩む私。顔中真つ赤の中
学生。

そんな三人の様子を見て、JK銀子は不思議そうな表情でそう尋ねる。

「え? あ、いや別に? 何もないっすよ?」

「……ほんとに?」

「ほ、ほんとにほんとに」

「ふーん……?」

八一の反応は妙に白々しい。目が泳いでいるのが私から見ても分かる。

当然JK銀子もそれを訝しんでいたようだが、けれどすぐに興味無さそうな顔になっ
て。

「まあいいわ。そんな事よりもあんた達、どうして対局をしていないのよ」

「あ、そういうやそうだね。さあみんな、全員揃った事だし将棋の時間だ。ほらほら！」
場の雰囲気を一変させるように、八一が両手をパンパンと叩く。

そうしてその後はいつも通り。みんなで将棋をする流れになったんだけど……。

「……………」

私の正面に座る相手。私と対局中のＪＣ銀子。

私と似たような表情で盤面を見つめる、私以上の鋭い読みの持ち主。

……なんだけど、今日は様子が違う。

ＪＣ銀子の視線は盤面ではなく、少し右の方へと向いていて。

「……………」

「……………」

自らに向けられている視線に気付いたのか、高校生の私が眉を顰める。

「う、……………」

するとＪＣ銀子は即座にすつと視線を逸らす。

けれども先程の話題が尾を引いているのか、その顔はずつと顔が赤いままで。

明らかにその意識は高校生の私へと向いている。まるで対局に集中出来ていないの

が明らかだ。

けど……けれどこの対局も私の負けだった。

くう、こんな見るからに集中を欠いている相手に負けるなんて……。

……と言いたい所なんだけど、実は集中出来ていなかったのは私も同じで。

「……(じー)」

「……あんたまで、なに？」

「……別に」

J K 銀子と視線が重なるや否や、私も中学生の私を真似てすぐに顔の向きを戻す。

……うーん。こうして見てもよく分からない。

私が観察する限りでは、J K 銀子はJ C 銀子と殆ど変わらないように見えるんだけど

……。

けれども中学生の空銀子はまだ子供で、一方高校生の空銀子はもう大人らしい。

たったキス一つでそんなにも人間が変わったりするのだろうか。

なんとも不思議な話だ、よく分からない話だなと私は思った。

14. 大人な話

……ふう、さつきは色々と危なかったな。

J K 銀子ちゃんがグッドなタイムニングで帰宅してくれたから何とか急場を凌げたけど……。

……いや、そうでもないか。もう殆ど俺とあの子の関係を詳らかにしてしまったようなものだ。

「はい、今日の晩飯は天井だよー」

時刻は夜。夕食の時間。折り畳みテーブルの上に出前で注文した特上天丼を5つ並べる。

「ん、いただきます」

すると四人の銀子ちゃんズが同じように手を伸ばして、これまた同じように丼を平らげ始める。

そんな光景をぼーっと眺めながら、ふと俺は昼間の事を考える。

……にしても、今日の昼間は凄かったなあ。

俺の頭に浮かぶのはJ S 銀子ちゃんの姿だ。今日のあの子はマジで究極可愛かった……。

J S 銀子ちゃん、小学生の銀子ちゃんとはこれまでずっと距離を感じていて、それをどうにかしたいなあと前々から思っていたんだけど……。

やっぱり正面からお話ししてみたのが正解だったようだ。最初こそ居心地が悪そうにしていたが、次第にあの子も俺に打ち解けてきてくれた。

「……あ」

とそんな事を考えていると、ちょうどJ S 銀子ちゃんと目が合った。

「……ん」

あ、小さく頷いた。そして口元にはちよつとだけ笑みが浮かんでいる。

前は視線を合わせたらすぐにぷいっと顔を逸らされちゃっていたからなあ。

これは本当に大きな進歩、この子とは今まで通りの気安い関係に戻れたと言っているだろうか。

……いや違うな。今まで通りではないか。

だって今まで通りならあんな事はしないからね。

「……にへへへ」

「……八一。キモいから急に不気味な笑いを浮かべるのは止めて」

「同歩」

叱られた。JKとJCの年上銀子ちゃんズは相変わらず俺に手厳しい。

けど……ああなんかヤバいな、思い出すだけで顔がニヤけちゃう。

だってマジ急接近だよ……今日だけであんなにあの子と近付けるなんてさあ……。

——そう。俺は今日、なんとJS銀子ちゃんをこの手に抱きしめてしまった！

あの子をハグしてしまったのだっ！ あの子をぎゅーっしてしまっただけだ!!

俺が両手を広げたら素直に飛び込んできてさ……あれはもうマジで天使やでえ……。

まあ正直、銀子ちゃんをぎゅーっしてするの自体は何度か経験がある。あるんだけど、

それでもその相手が小学生時代の銀子ちゃんとなると……やっぱし格別っていうかね？

いや別に比較している訳じゃないんだけどさ。ただなんていうか……これはあいや
天衣達にも同じように言える事なんだけど、やっぱ小学生ってのは軽くて、そして小さい
生き物なんだ。

それをこう……ぎゅーっすると……もう言葉では表現出来ない幸福感みたいなもの
がある。更にそれが銀子ちゃんともなれば……ああ、叶う事なら今日はずっとああし

ていたかった……。

けどまあチャンスは幾らでもあるか。また明日にでも頼んでみようかな。

あそうだ。明日からはあの子が帰宅して幼女銀子ちゃんがお昼寝から目覚めるまで、伝統の腰掛け銀スタイルで将棋のお勉強をするというのも良いかもしれないな。あれは色々と捗るし。

「(ど)馳走様」

とその時、早々に天井を食べ終わったJ C 銀子ちゃんが席を立つ。

ただその顔色は相変わらずというか……白い肌が分かりやすく色付いている。

「あ、随分と早いね」

「……まあね」

そう呟くJ C 銀子ちゃんの様子は居心地が悪くて立ち去るような感じだ。

ううむ……間違いないくさっきの話を意識しちやってるよなあ、あの子。食事中もちらちらとJ K 銀子ちゃんの事を見ていたし。

昼間、J S 銀子ちゃんと仲良くなった事までは良かったんだけど、その後が色々……ね。

色々赤裸々に話してしまった。どうにか表現を濁したから幼女や小学生の銀子ちゃんには伝わらずに済んだと思うけど、さすがに中学生の銀子ちゃんにはバレてし

まったようだ。

けど話しちやつて良かったんだよね？ JK銀子ちゃんもOKしたって言うし……。

そしてその後、食事を終えてお風呂に入って。

夜9時になったらもう寝る時間だ。俺達が師匠の家で暮らしていた頃に決められた就寝時間。

幼女銀子ちゃんはこの時間帯にはもう夢の国へ旅立つので、俺達も一緒にお布団に入る。

……ただ、まあ、ね。お布団に入るといつてもすぐに眠る訳では無い。

ここからは大人の時間というか……俺とあの子にとってはむしろここからが本番の時間だ。

「……よし。そーつと……」

そんな呟きは声には出さず、俺は物音立てずに布団から身体を起こす。

いつものようにそつと布団から抜け出して、静かに静かに廊下を歩いて。

そして洗面所のドアをそつと開いて、そこで待つ事数分後――

「……おまたせ」

これまたそつと洗面所のドアが開かれて、JK銀子ちゃんが姿を現した。

見慣れた制服ではない寝間着姿の銀子ちゃん。何処か無防備な感があつてとてもよろしい。

こうして二人して夜に寢床を抜け出す理由は……まあ人目を忍んでイチヤつく為だね。うん。

「銀子ちゃん」

待ちきれなかつた俺はすぐさま両手を広げる。愛しい恋人を優しく迎え入れる。

「ん……」

すると銀子ちゃんはおずおずとしながらも、やがて俺の腕の中に収まってくれる。

ああ、相変わらず柔らかくていい匂いがする……これが俺の恋人……俺だけの銀子ちゃん……。

小学生もカウントすると銀子ちゃんをハグするのは本日二度目だ。こればかりは何度味わつてもまるで味わい尽くした気分にならない、何度でも俺を幸せな心地にしてくれる。

……。そしてそんなJK銀子ちゃんのだが、まあこれは昼間にも言ってしまった通り……。

この子はもう大人だ。大人銀子ちゃんなのだ。

……いやだつてき。だつてだよ？

俺達はもうただの姉弟関係じゃないんだよ？　もうとつくに付き合っているんだよ？

だつたら別に普通の事だよね？　てかむしろ当然の事だよね？　俺なにも間違つてないよね？

俺達が付き合い初めて約3ヶ月。特別早いとは言えない進行速度なはずだ。

……まあ実のところを言うのと、事に及んだのは付き合い初めて結構すぐの事だったので、早いと言えば早いのもかもしれないけど……。

だがその点に関しては言い訳はすまい。

あの時は我慢出来なくなっちゃったんだ。……俺も、銀子ちゃんも。

「……そうだよ？　あれつてなにも俺だけの責任つて訳じゃないよね？」

「なにが？」

「だから……俺と銀子ちゃんの初めての時」

「っ！」

瞬間銀子ちゃんがピクツと身体を硬直させる。

そしてその後、至近距離からじとじとした半眼でこちらを睨んできた。

「急になに言つてんのよ……ばか」

「ごめん。でもなんか急に思い出しちゃって」

「……ていうか、あれは八一の責任じゃないの」

その言葉に、俺も至近距離で首を左右に振る。

「いやいや、俺だけではないでしょ」

「あんたのせいよ。あんたが辛抱できなくなつて襲い掛かってきたんじゃない」

「お、襲うつてそんな人聞きの悪い……あれはお互い同意の上だったじゃないですか」

「私は同意なんてしてない」

「いやしてた」

「してない」

「してたつて」

「してないつてば」

「してた。もう目でしてたもん」

「してないから」

この話をする度、俺達は必ず口論になる。

銀子ちゃんは必ず否定してくるんだけど……さりとして俺もここだけは譲らない。

俺と銀子ちゃんの初体験について、多くを語るつもりは無いけど……でも大まかには今俺達が話した内容がそのまま事実なはずだ。

その日は普通にこの部屋で、普通に研究会をしていて……途中で少し手を止めて休憩して、そしたら自然と互いの距離が近付いてしまつて……。

当初そのつもりは無かつただけど、なんかその場の雰囲気にならされてしまつたというか……なし崩し的にそうなつてしまつたというか。

休憩中に銀子ちゃんと肩が触れ合つて、俺はその小さな肩に手を回した。

そして自然と口付けをした。すると次第に力が抜けたのか、銀子ちゃんが背後に倒れちやつて、そのまま俺も覆い被さるような形になつた。

すぐに身体を起こそうと思つただけど、どうしてか身体が動いてくれなくて、そうして至近距離から見つめ合つていたら、なんか、なんか……。

なんか、銀子ちゃんの唇が。そして潤んだ瞳が「いいよ？」と言つているような気がして。

ふと気が付いた時には俺の手が伸びていた。そこからはもう止まらなかつた。けれどもあれは襲つたとかそういうのではない。

だつて本当に、本当にあの時の銀子ちゃんの表情は「いいよ」と言つていたんだ。

俺には確かにそう見えただ。だからこれは同意の上での出来事なはずなんだ。

「……ケダモノ」

「なっ」

「はあ。まさか幼い頃から一緒だった弟弟子があんなにもケダモノだったなんてね」

「そんな、ケダモノって……大体銀子ちゃんだって嫌がってなかったじゃんか」

「……なに？ 嫌がって欲しかったの？」

「いやいや、そういう事じゃなくてね？ もしそうだったら俺だって躊躇してたっていうか、さすがに銀子ちゃんの嫌がる事は出来ないから……」

「……どうだか」

「ほんとだつてば」

俺は銀子ちゃんの事を宥めようと、その背中をゆっくりと撫でる。

肉付きのないスリムな背中、だけど伝わってくるのはやっぱりパジャマ越しの感覚で……。

先程も言った通り、こうしているだけで幸せな心地になれるってのは事実なんだ。

けれどこれまた先程から言っている通り、俺とこの子はもう男女の関係な訳で……。

だからここから先のスキンシップ、そちら側に進みたいという気持ちを否定する事は出来ない。なんせ俺にはもうそれが許されているのだから。

……まあ、とはいえ、だ。

さすがにこんな場所で、こんな洗面所でそんな真似は出来ないんだけどさ。

ただそれでも俺は未練がましく、銀子ちゃんのパジャマの中に手を滑らせる。

「んっ……」

モデル顔負けの細いウエストに触れると、銀子ちゃんが小さく喉を鳴らした。

せめて、せめてお腹だけね。これより上に行つちやうと俺も止まれなくなつちやうから。

「……（なでなで、なでなで）」

「あ、ちよつと……もう……」

「……（なでなで、なでなで）」

「うう、ん……」

「……（なでなで、なでなで）」

「……八一。お腹撫でてて楽しい？」

「うん、楽しいよ。銀子ちゃん肌スベスベだしさ」

「……そう」

呆れたように息を吐く銀子ちゃん。その滑らかなお腹をひたすら撫で回す。

俺ぐらいの棋士ともなればこの手触りだけでも満足出来るのだ。いや棋士関係ないけど。

……と言うか嘘だけだ。

満足出来るなんてのは欺瞞で、満足しなきゃいけないというのが本音だけだ。

そしてどうやら俺のそんな思考が伝わっていたのだろう。そこで銀子ちゃんが口を開く。

「……ねえ、八一。やつぱりもう——」

その声色が不安そうな響きだったので、その機先を制して俺は口を開いた。

「大丈夫。大丈夫だって」

「けど、前は……」

「本当に大丈夫だから」

「八一……」

銀子ちゃんが言いたい事は分かる。

ここでの生活が始まってから、この子は度々こうして俺の事を心配してくれている。

それは銀子ちゃんが俺の恋人であって、そしてついでにいうと大人だからでもある。

けれどマズイなあ。そろそろこっちの方もなにか手を打たないとなあ。

そろそろ言い逃れるのにも限界がある。それに銀子ちゃんに気苦労を掛けるのも可哀想だ。

とはいえ一体どうすればいいんだろう。これは本当に難しい問題だ。

「……はあ、困ったなあ」

「なにが？ ……て、あ、ちよつと——」

今はなにか次善の策と言うか、2番目の解決策が欲しい所なんだよね。

そりや一番の解決策と言われればさ、ぶつちやけもう答えは分かっているんだけど。

けどなあ、その一手は俺の心の駄目な部分が待ったを掛け続けているっていうか

……。

「……あー、マジでどうしよ」

「ちよつと八一、そつちは……!」

「どーつすかなあ。もう言つちやおうかなあ」

「やいち、て、手が……!」

「でもなあ、それもなあ……」

「んう、や、やいちい……」

「うーん……」

「う、うう、ん……!」

頭の中であーだこーだと。あーでもないこーでもないと考えながら。

俺はしばらくの間、意識せずに銀子ちゃんのお腹の辺りを撫で回し続けていたらしく

て。

「うーん………つて、あれ?」

ふと気付いて目を向けてみると……。

「おやおや？ どうしてか分からないけど銀子ちゃんの顔が随分と赤くなっているぞ？」

「どしたの銀子ちゃん？」

「……この、馬鹿っ！」

「いだっ!？」

そしてガツンと頭突きを食らった。

15. 幼女の話

すつと手が伸びてきて。

「ん」

そしてぱちん、と聞こえる駒音。

「ふーむ」

なるほど、そう来たか。

なら……よし、こうだな。俺もそつと手を伸ばして駒を動かす。

「ん」

するとまた幼女のおててが伸びてきて、持ち上げた駒をぱちんと鳴らす。

「む、やるな……」

あえて俺はそんな眩きを漏らして。

「なら……こつちだ」

金を動かして、銀子ちゃんの攻めを封じるかのように壁を作る。

……と見せかけて、自陣の王を守る囲いの中に一つだけ穴を作り出す。

——さあ気付け！

ほら、君がこの先口癖のように言う頓死が、頓死の一手があるよ！

ほら気付くんだ銀子ちゃん！ ……と、俺のそんな心の声が伝わったのか。

「……あ」

と呟いて、

「……ふふ」

と微笑かに笑った後、幼女銀子ちゃんは俺が願っていた通りの場所に角を打った。

「む、こう来たか。なら……」

「やいち。それもう詰んでる」

「え？ ……あ、ほんとだっ！」

俺は今更盤上の頓死に気付いた……ようなフリをして「あちゃー……」と頭を抱える。

「くそー、俺の負けかあ」

「らくしよう」

「いやー、にしても銀子ちゃんは強いなあ！」

「とーぜん」

ふふん、と無表情ながら得意げになる幼女銀子ちゃん。ほんとに可愛いなあもう！

あまりに可愛いので抱っこしちゃう事にした。よいしょっと。

「わ」

「まだ子供なのにこれだもんなあ！ 本当に凄いなあ銀子ちゃんは！」

「そう？」

「うん、4歳でこれなら将来はプロ棋士間違いなしだね！ ほら、高い高いー！」

「わあ」

俺は少女銀子ちゃんの脇の下を抱えて、彼女を天井近くまでぐいっと持ち上げる。

ああ、少女は軽いなあ。小学生よりも更に軽いなんて……なんて腕に優しい存在なのだろうか。

「ほらほら、高い高いー、高い高いー！」

「わあー」

「ほーらほーら、下げてー、上げてー」

「きやー」

上下に移動を繰り返す度、少女銀子ちゃんもわーきやーと歓声を上げる。

声が殆ど棒読みなので一見分かりにくいのが、これはとても楽しんでくれている。子供の頃からずっと一緒にいた俺には分かる、もし楽しんでいないのなら銀子ちゃんは暴れるはずだからね。

されるがままの銀子ちゃんとはその状況に満足しているという事なのだ。てな訳でもっともつと高い高いをしてあげようね。

「高い高いーい！」

「……八一」

「高い高いーい!!」

「ちよつと、八一」

上げたり下げたりと、腕に優しい幼女銀子ちゃんの事を俺が縦横無尽に振り回している。

「八一。あんたね、なに遊んでんのよ」

俺と幼女の戯れをじつと見つめる灰色の瞳、顰めつ面の銀髪美少女。

先程の対局の観戦者、JK銀子ちゃんからのクレームが入った。

「いや、これは幼女銀子ちゃんを褒めているのであって遊んでいる訳では……」

「何処からどう見たって遊んでんでしようが」

「……あそうだ、銀子ちゃんもやる？」

「やるってなにを？ ……高い高いを？」

「うん」

俺がそう尋ねてみると、JK銀子ちゃんは2、3秒程沈黙して。

「…………え、どっちを？」

「どっち？ いやだから幼女銀子ちゃんを高い高いしたいのかなーって」

「ああ、そっち…………別にいい」

J K 銀子ちゃんはずまらなそうにそっぽを向く。

その仕草を見ると…………うーむ、なんだか選択肢を間違えてしまったような気分だ。

…………て、あ、どっちってまさか…………。

「銀子ちゃん。もしかしてさ…………俺に高い高いをして欲しかったとか？」

「…………別にいいっていつてんでしょ。そんな事よりも対局に戻りなさい」

「あ、それもそうだね」

俺は持ち上げていた幼女銀子ちゃんを座布団の上に下ろして、自分もその対面側へと戻る。

今は午前11時前。俺と幼女銀子ちゃんにとっては毎日恒例の将棋タイムだ。

そして他の銀子ちゃんズにとっては学校で授業を受けている時間帯…………なのだが、この通り今日のJ K 銀子ちゃんは早々と帰宅している。

その理由に関して尋ねてみると、

「てかJ K 銀子ちゃん、今日は随分と学校終わるのが早くないっすか？」

「今日は学校がテスト期間だったから二限目までしかなかったの」

と、言う事らしい。

正直な話、学校の創立記念日を沢山創り出すこの子の言う事が本当かどうかは微妙なところだ。

とはいえそもそも高校に行っていない俺に高校の授業形態の事が分かるはずもないので、そうなのと言われたらそうなのかと納得するしかない。

とにかくそんな訳で、今日は昼間からJK銀子ちゃんが家に居る。

観戦者を一人増やした状態で、俺と幼女はいつものように対局をしていたんだけど……。

「それより八一、さっきの対局はなんなの？ あんたもつと真面目に指しなさいよね」

「そ、それは……」

「あれで指導対局のつもり？ あんなんじゃ幼女の私の為にならないじゃないの」

「……はい。仰る通りです……」

実に痛い所を突かれて俺は頭を垂れる。

確かに先程の対局は指導対局だとしたらダメダメだろう。初心者相手なら将棋の楽しさを知って貰う為にわざと負けたりもするんだけど、幼女銀子ちゃんはもう初心者という段階では無い。

だから四枚落ち、あるいは二枚落ちぐらいでしつかりと指して、ちゃんと負かしてあげた方がこの子の成長に繋がるはずだ。特に銀子ちゃんは子供の頃から負けず嫌いな性格、負けをバネに出来る性格をしているのだから。

そう、そんな事は俺だつて分かっている。

分かつてはいるんだけどさ……でもさあ、だつてさあ……幼女銀子ちゃん可愛いんだもん……。

俺に勝ったら嬉しそうな顔しちやつてさあ……そんなのもつと見たくなるじゃん……？

特にそのむふーつとした顔は俺が子供の頃によく見た覚えのある顔で、この子と対局していると俺も子供の頃に戻ったような気分になる。

というか俺、子供の頃はこの子との対局を殆ど独占していたんだよなあ。今更ながらに思うけどなんとまあ贅沢な環境にいたものだ。

とはいえ今はそれ以上に贅沢な環境を味わっているんだけどね。なんせこの部屋は銀子ちゃんパラダイスだし……なんて事を考えていると。

「……む。さつきはまじめじゃなかったの？」

俺の正面に座る幼女銀子ちゃんがそう言った。

あ、マズいぞこれは。幼女のお顔には見るからに不機嫌度が増しちやつてい

いか。

「い、いや違うよ？ 決して真面目じゃなかったってわけじゃないんだけど……」

「真面目じゃなかったでしょ。ていうかあれで真面目にやってたっつーならプロ失格ね。タイトル返上したほうが良いわよ」

「ぐう……」

俺はどうかか弁明してみるものの……駄目だ。幼女だけならともかくJK銀子ちゃんという観戦者が居る状況では言い逃れが出来ない。

そして案の定、今の話を聞いた幼女銀子ちゃんはぶうとほっぺを膨らませてしまった。

「……まじめじゃなかったのね」

「え、えつと……」

「もっかいやる。つぎは本気でやりなさい」

「いやでも——」

「やれ」

「うっす……」

命令口調の幼女に対して18歳の俺は小さく身を縮こまらせる。

やれと言われてしまった以上は仕方無い。逆らう気なんて俺には毛頭ありはしない。

……にしても本気で、か。

となるとそうだな……やっぱり最初は四枚くらいだろうか。

俺は飛車と角、そして両側の香車計四枚を自陣からひよいひよいつと取り除く。

「ちよつと、なにしてるの」

「えつと、とりあえず四枚落ちから……」

「ばか。平手にきまつてんでしょ」

「い、いやいや、平手はさすがに……」

「うるさい」

俺の反論をピシャッと一言で遮断してしまう幼女銀子ちゃん。

どうやらこの子は駒落ち無し、同じ条件で指したいようだけど……これは困ったな。

いくら相手が銀子ちゃんとはいえ、さすがに4歳児相手にプロが平手というのは手合

違いが過ぎる。それで本気を出すなんて大人げないにも程があるというものだ。

「幼女銀子ちゃん、とりあえずさ、とりあえず一回だけ四枚落ちでやってみない？」

「やだ」

「そこをなんとか、一回、一回だけでも——」

「だまれ」

「……………」

命令通りにしゅんと黙る俺。

この子に逆らってはいけない。それは俺が幼かった頃からのルール、俺の全細胞に焼き付いている絶対的な指示であり、この子の前では俺は言いなりになるしかない。

とはいえどうしたものか……と、俺は助けを求めるかのように視線を横に向けてみる。

「…………ふう」

すると目が合ったJK銀子ちゃんは呆れたように息を吐いて。

「…………いいんじゃない？ とりあえず平手でやってみたら。どうやらその幼女、まだあなたの実力をちゃんと理解していないみたいだし」

「いやでもそれにしたって平手というのは…………」

「わたしがやいちに負けるはずない」

「ほら、当の本人もこう言ってるし」

「そうは言ってもさあ…………」

幼女でも高校生でも、銀子ちゃんという女の子は無茶言ってくれるぜホントに。

幼女銀子ちゃんが俺との対局に自信満々な理由は分かる。この子は俺と出会った頃の空銀子で、当時は銀子ちゃんの方が強かったからだ。対九頭竜八一成績では白星先行が当たり前だった。

更に言えばこの共同生活が始まって以降も。

俺と幼女銀子ちゃんは何度か対局しているけど、その際は先程のように勝ちを譲ってきた。

それは幼女を気持ちよく勝たせてかわゆい顔が見たかったという邪な考えもあるんだけど、それ以上に大きな懸念が一つあったからで……。

「八一。こういう時は一回ガツンとやってやればいいのよ」

「けれど……ていうか銀子ちゃん、幼女の自分に対してちよつと厳しくない？」

「厳しくない。むしろあんたが甘いのよ」

「でも……」

「やいち。早くしろ」

「はい」

早くしろと言われてしまった以上は仕方がない。

俺は取り除いた駒四枚を盤の上に戻し、平手で幼女銀子ちゃんとの対局を始める。

「ん」

幼女銀子ちゃんが七六歩を打ってきた。俺もすぐさま八四歩と打つ。

この対局は平手であり、その上本気でやれとも言われている。隣でプロ棋士JKが観戦と言う名の監視をしている中、下手に手を抜いたりしようものなら即座に看破されて

しまうだろう。

ただ先程も言った通り、この子との対局にはちよつとした懸念があつて……。

だってこの子は幼女銀子ちゃん、幼い頃の空銀子そのものな訳で……だとするとここので俺が勝つたりしようものなら……。

……と、そんな俺の懸念も虚しく、対局自体はあつという間に終了した。

「……………ない」

自陣を悔しそうに見つめながらぼつりと呟く幼女銀子ちゃん。

俺は普通に指して普通にこの子に勝利した。4歳児とプロが平手で指したら普通にそうなる。

「……………」

幼女銀子ちゃんはむつとした顔で盤面をじつと眺めていて……。

とまあここまでは良い。幼女の頃の銀子ちゃんだつて俺に負けた事自体は何度もある。だから負ける事に問題がある訳じゃないんだけど……。

「……………やいち。もう一回」

そう言つて銀子ちゃんはすぐに駒を並べ直す。

この通り、幼女の頃の銀子ちゃんというのは俺に負けたら即りベンジしてくる。先程も言った通りこの子はとても負けず嫌いな性格をしているのだ。

その性格こそが銀子ちゃんの成長、そして俺の成長にも繋がったものだとは思うんだけど、今の俺の懸念とはその性格こそにあつて……。

「……ない。もう一回」

あつという間に2局目が終了。負けた銀子ちゃんは再び駒を並べ直す。

この通り、幼女の頃の銀子ちゃんというのは勝つまでリベンジするのを止めない。この子はめちやくちや負けず嫌いな性格をしているのだ。

そして当時はそれで問題無かった。当時は俺よりも銀子ちゃんの方が強かった訳で、リベンジが成功しないなんて事はあり得なかった。だから当時はそれで良かったんだけど……。

「…………ない。もっかい」

これまたあつという間に3局目が終了。負けた銀子ちゃんは再び駒を並べ直す。

この通り、当時はそれで良かったんだけど……今となつては……さすがに……ね。

さすがにこの状況においては何度リベンジを繰り返そうとも、18歳の竜王を相手に4歳児が平手で勝利する可能性なんて方に一つもないだろう。

それでも銀子ちゃんは諦めない。

何度負けても俺にリベンジを繰り返す。

「……もっかい」

でもやっぱり勝てない。

どうやっても勝機の見えない対局が続いて……。

そして。

「……っ」

駒を打とうとした途中、幼女銀子ちゃんは動かしかけた手を止めた。

恐らく自玉がすでに詰んでいる事に気付いたんだろう。この段階でもう数手先の詰みが読めるこの子の将棋の才は疑う余地のないものなんだけど……これは相手が悪すぎるんじゃない。

……そして。

ここからが俺の一番の懸念なんだけど……。

「……う」

すると微かな呻きが聞こえて。

そのおめめがうるうるしだして、端正なお顔がくしゃつと歪んで。

「……ううう　くー！」

ほらー！ やっぱり泣いちゃったじゃんかー！

16. 更に幼女の話

「……うううゝゝ！」

お顔をくしやつと歪めて唸る幼女。

そのおめめからはぼたぼたと大粒の涙が。

「あああああつ！ な、なな泣かないでっ！ 泣かないで銀子ちゃん!!」

こんな可愛い幼女に、天使のような幼女のお顔に涙なんて似合わない。

俺は慌てて幼女銀子ちゃんのそばに駆け寄り、その頭をよしよしと優しく撫でる。

……が。

「ふええ！ ういいいゝゝ！」

けれど幼女の泣き声は止まらない。むしろ俺が触れた事で勢いを増したような気さ
えもする。

こうなってしまうともう駄目だ。幼い頃の銀子ちゃんというのは一度ぎゃん泣き
モードに入ってしまうと中々泣き止んでくれない。それは誰よりも俺が一番よく知っ

ている。

だからこの子は泣かせちゃいけないかったんだ。俺は幼女の背中をさすさすと擦りながら、八つ当たり気味にJK銀子ちゃんの事を睨む。

「ほら言ったじゃん！ だから平手で普通の勝負なんてしちや駄目だったんだよ！」

「な、なによ、私が悪いっての!?!」

「だってだってっ！ 平手でやったらって勧めてきたのJK銀子ちゃんじゃん！」

俺はこうなるのが薄々分かっていたからこの子との対局では細心の注意を払っていたのに！

「っ、……別に、泣くぐらいなんだってのよ。将棋をやっていたらそれぐらいの悔しさなんて日常茶飯事じゃない」

JK銀子ちゃんはそう言うものの、ちよつとバツが悪そうに顔を背けている。

多分この子、幼い頃の自分が結構な泣き虫だったって事を忘れてたっぽいな。

だが俺は覚えている。この子の涙にいつも手を焼かされてきたのは俺なのだから。

「ふぎゆうく、びいいいい……！」

「銀子ちゃん、いい子だから、いい子だから泣き止んで……！」

「……うゝええ、びやあああ……！」

「あそうだ！ 冷蔵庫にアイスあるよ、アイス食べよつか！ ね！」

「ふえ……っ、い、らないっ！」

全力であやしてみたり、物で釣ってみようと試みるが……やっぱり効果なし。

幼女銀子ちゃんは俺の手をぺいっと払って、涙に濡れた瞳でキツと睨んでくる。

「……う、う〜！ う、ううう〜！」

「ちよつ、ちよつと銀子ちゃん……」

「やいちのばかつ！ ばかあ！」

そして両手をぐーに握って、俺の頭や背中などをぼこぼこ叩いてくる。

あ、これ……なんか可愛い。子供の頃はこの癩癩が怖かったような覚えがあるんだけど、大きくなった今ではこんなまるで痛くない。むしろ愛おしくさえ感じてしまう。

……いや駄目だ、痛い！ 凄く痛い！ 身体は痛くないけど心が痛いっ！

銀子ちゃんの泣き顔をみる度、泣き声を聞く度、俺の胸がズキズキと音を立てて痛む。

これは駄目だ。泣いている銀子ちゃんは駄目だ。どの年代であっても空銀子の涙というのは俺のメンタルにももの凄いダメージを与えてくる。

「ふいいい、うええん……！」

「ぎ、銀子ちゃん……」

だがぎゃん泣きモードの幼女銀子ちゃんを前に、俺はあたふたする事しか出来ず……。

「……ふえ、……く」

そうして暫く泣き続けて。

やがて少し気分が落ち着いてきたのか、銀子ちゃんがぐずぐずと鼻を吸りだす。

「な、泣き止んだ……かな？」

「……ふん」

「あ……」

そしてゆつくりと立ち上がると、ててて……と歩いて俺のそばを離れていく。

そしてリビングの隅っこに小さく丸まって、いそいそと将棋の指南書を読み始める。

「……ぐすつ」

でもその目元は腫れぼったくなっていて、お顔はぶすつとしていて……。

ああ駄目だ、あんなに可哀想で寂しそうな幼女を放っておく事なんて出来ない。

俺は幼女銀子ちゃんのそばへと近付こうとしたのだが……けれど駄目だ。

「……や」

「あつ……」

幼女銀子ちゃんは俺が近付くや否やすぐに立ち上がり、ててて……と距離を取って

しまう。

ぐぐぐ、露骨に避けられている……！

まあそりやそうだよな……この子を泣かせてしまったのは他ならぬ俺な訳だし。……けど、それでも幼女銀子ちゃんをこのままにしておくのは良くないと思う。なので俺は嫌がられるのを承知で、もう一度そのそばへと近付いてみた。だが。

「銀子ちゃん、一緒に——」

「こないで」

銀子ちゃんはハッキリを拒絶の意思を示して。

そして俺を見上げながら、言った。

「……やいち、きらい」

——え？

——今、この子は……なんて？

……嫌い？

うそ、嘘だろ？

俺……銀子ちゃんに嫌われた？

「……銀子ちゃん、に、嫌われた……」

俺の脳がそれを認識した途端、全身からすうっと力が抜けていく。

身体を支えられずに膝が崩れて、そのまま背後へとひっくり返った。

ててて……とまた離れていく幼女の足音を聞きながら、俺はもう立ち上がる事が出来ない。

「……俺、銀子ちゃんに嫌われた……ぎんこちゃんにきらわれちゃった……」

魂が抜けたように呆然と眩く。視界に入る天井がじわりと滲んで見えなくなっていく。

幼女の頃の銀子ちゃん。初めて出会ったその日すぐに俺の心を一発で奪った女の子。

俺はこの子と一緒に居たかったから、この子の特別でありたかったから頑張ってきたのに……。

「なのに、きらわれちゃった……」

……あ、だめだ。俺このまま死ぬかも。

もう身体が動きそうにない。もう何も出来ない。何もしたくないよ。

ああ、何だか目の前が真っ暗になってきた。

俺の人生は幼女に止めを刺されるのか……なんかそれも悪くないな……。

……とそんな考えが過ぎったその時。

「……八一。大丈夫？」

その声は俺に残された最後の希望だった。

俺を殺す存在が銀子ちゃんであるなら、俺を救う存在もまた銀子ちゃんなのだろう。倒れたまま動かない俺を心配してか、JKの銀子ちゃんがこちらに近付いてくる。

「…………ぎ、ぎんこ、ちゃん…………」

俺は最後の気力を振り絞って、どうにか身体を起こして……。

「ぎ、ぎ…………ぎいんこちゃああああん！」

「ちよ、ちよつと——！」

その胸の中へと飛び込んだ。

彼女の背中に両手を回して、ぎゅつと抱き付いたままリビングの床に倒れ込む。

「うぐうう……………！　ぎんこちゃあん……………！」

「…………はいはい、よしよし」

幼女に嫌われて泣きじやくる俺。

その頭を成長した幼女本人、俺の恋人である銀子ちゃんが優しく撫でてくれる。

「ううう……………ぎんこちゃん……………おれ、ぎんこちゃんに嫌われちゃったよお……………」

「あんたねえ、そんな事で泣くんじゃないの」

銀子ちゃんは呆れた声でそう呟く……………が。

いや泣くでしょ。幼女の銀子ちゃんに「嫌い」と言われて平然としていられるはずが

ない。

俺は顔をぐりぐりと擦り付けて、銀子ちゃんの制服のリボンで涙を拭う。やわらかい。

「っ、もう……八一……」

「……銀子ちゃんに嫌われた、死にたい」

「……大丈夫。嫌われてない、嫌われてないから」

「……ほんとに？　ほんとに嫌われてない？」

「ほんとだってば。ちゃんと……ちゃんと八一の事が好きだから」

ちゃんと好き、だって。

うーん、本当かな？　嫌いと言われた直後だけにすぐさま信じる事は出来ない。

「ほんとに？　ほんとに好き？」

「……うん、本当。本当に好きだから」

「どれぐらい好き？　具体的には？」

「え、ええ？　ぐ、具体的につて……だ、だから……その、大好き、だから……」

銀子ちゃんは凄く恥ずかしそうにそう答える。

「……そっか。良かった……」

本当に良かった。その言葉を聞いた事で俺のHPの減少がようやくストップしてく

れた。

ああ危なかった。さつきは危うく意識を手放しかけた、本気で死ぬ所だった。人間なんて幼女の言葉一つで死ぬ。なんと儂い存在なのだろうか。

こうして俺は九死に一生を得た。

しかしこの一件で、幼女に嫌われた事で負ったダメージは甚大で……。

「……………(ぶいっ)」

「ぐっ……………」

お昼ごはんの時間。幼女銀子ちゃんは俺と目を合わせてくれない。

そしてこちらから目を合わせようとすると、ぶいっ顔を背けてしまう。

そんな冷たい態度はお昼寝の時間も同様で。

「……………じえーけー、ちよつと」

「え、私？」

普段は俺のそばで眠るのに、今日はJK銀子ちゃんに引つ付くようにして眠っていた。

俺はカンペキに警戒されてしまっている。というか……………嫌われてしまっている。

「……………はあ、ツライ……………ツラ過ぎる……………」

幼女に嫌われるのがこんなにツライとは。

幼女に避けられて生きるといふのがこんなにも苦しいとは。こんなもん拷問だ、地獄だ。

ていうか幼女の、それも銀子ちゃんに避けられているつてのがマジでキツイ……。

これがそこから出会った見知らぬ幼女ならこんなダメージは負わないだろうけど、いつからか俺はこんなにも銀子ちゃんという存在に弱くなつていたようだ。

「……このままずーっと嫌われたままだったりしたらどうしよう……」

「心配し過ぎだつて、そんな……」

俺が肩を落として落ち込んでいると、JK銀子ちゃんが慰めの言葉をくれる。

だけどその膝下にはすやすやと眠る幼女が引っ付いて……本来ならそこは俺のポジションだったのに……ああ、哀しい。

「案外、昼寝から目覚めたらさつきき事なんて全部忘れているかもしれないわよ？　な
んせこの子は幼女なんだし」

「……銀子ちゃん。本当にそう思う？　自分自身の事なんだから分かるよね？」

「……………」

俺の問いに銀子ちゃんは微妙な目付きと沈黙で返してくる。それがつまり答えだろ
う。

空銀子とは寝て起きたらコロツと機嫌が回復するような簡単な子ではない。むしろ根に持つ時とはことん根に持つとても執念深い子なのだ。

「ただ、それだけじゃない。」

「そりゃ銀子ちゃんは執念深い子なんだけど、決してそれだけじゃなくって……。」

「ただいまー」

2時過ぎ、JS銀子ちゃんが帰宅した。

俺が玄関まで出迎えに行くと、彼女はその灰色の目を軽く見張らせて。

「……八一、どうしたの?」

「え?」

「なんか辛そうな顔してる。なにかあったの?」

「……ほら、この子は俺を心配してくれている。」

「なんて優しい。今も不安そうな表情で俺の顔を覗き込んでいる。なんて可愛い。」

「——銀子ちゃんっ!!」

「わっ!」

「あまりの優しさと可愛さに感極まった俺は、思わず彼女の事を抱きしめた。」

瞬間驚きの声を上げたJS銀子ちゃんも、しかし俺の腕の中で抵抗しようとはしな

い。

「や、やいち……どうしたの？」

「……銀子ちゃん。ちよつとの間だけこのままでいいかな……？」

「えっ!? と、お、う、な、も、もう……仕方ないわね……」

J S 銀子ちゃんはこくりと頷いた後。おずおずと俺の背中に手を回してきて。

「……べ、別に……これくらいなら別に、いつだってさせてあげるけど……？」

え、マジで？ いつだってハグしていいの？ この子サービス精神旺盛過ぎじゃない

？

……いや違う。これが銀子ちゃんなんだ。この子は本来とても優しい子なんだ。俺が苦しんでいる時はいつだって助けてくれる、いつだって抱き締めさせてくれる女の子なんだ。

それが証拠に……それから1時間後の3時過ぎ。

「ただいま」

J C 銀子ちゃんが帰宅する。

俺は再び玄関まで出迎えに行く。すると俺を目にした彼女はJ Sと同じように表情を曇らせて。

「なんかあったの？ 随分と暗い顔してるけど」

……ほら。中学生の銀子ちゃんだつて俺の事を心配してくれる。

やつぱり優しい。今はとにかく銀子ちゃんの優しさに触れたい。癒やされたい。

「——銀子ちゃんっ!!」

「きゃー！」

という事で、俺はまた銀子ちゃんをハグした。

こうして力一杯抱き締めても……中学生の銀子ちゃんだつて抵抗したりはしない。

「ちよ、や、やいち、な、な、なに、なに——！」

「……銀子ちゃん。ちよつとの間だけこのままでいていいかな……？」

「はあ!? え、だつて、なつ、な、わたし、あの、なん、あの……い！」

……なんだかJ.C.銀子ちゃんの言葉はつかえつつかえで要領を得ないな。

でもこの通り、抵抗しないって事は嫌がってはいないって事だよな。うん。

「ああ、銀子ちゃん……」

「や、やいち、わた、わたしっ、わたし——！」

……うーん。なにやら声の上擦っているし、身体がガチガチに固まっているような気もするけど……けどまあ些細な事だろう。

とにかくこの子も優しい。思えば俺がプロになった直後、将棋から逃げ出した俺を連

れ戻しに来てくれたのも中学生の銀子ちゃんだった。俺はこの子に助けられてばかりだ。

やっぱりそうだ。JKは然り、JSでもJCでも、銀子ちゃんとはとても優しい女の子なんだ。

癪癪持ちだつたり執念深かつたり、そういう負の側面は確かにあるけど、それを補つて余りある優しさを持ち合わせている子なのである。

そしてそれは当然——幼女の頃も同じだ。

幼女銀子ちゃんだつて本当はとても優しい幼女。それは誰よりも俺が一番知っている。

だからきつと……ちゃんと謝ればこの子だつてきつと許してくれるはず。

俺が泣かせちゃつたのは事実だけど、俺の事を嫌いになつちやつたのも事実かもしれないけど。

それでもちゃんと仲直りをすれば、銀子ちゃんもきつと分かってくれはるはずだ。これまでのように接してくれるはずだと……そう信じたい。

という訳で、次の日。

「……む」

「……銀子ちゃん、対局しない？」

仲直りの為、俺はいつものように幼女銀子ちゃんを将棋に誘った。

17. 空銀子ちゃん（4歳女の子）の話

「……ふむふむ」

座布団の上に寝そべる女の子。

その子の手元にはいつものとおり、幼女が読むには似つかわしくない厚さの本があります。

この子の名前は空銀子ちゃん。四歳の幼女、将棋が大好きなとてもかわいい幼女です。

その日。いつものように銀子ちゃんが将棋の本を読んでいると……。

「……む」

「……銀子ちゃん、対局しない？」

そうやってきたのは八一くん。銀子ちゃんの弟子である九頭竜八一くんでした。

そう、こいつは弟子なのです。つまり格下なのです。下っぱなのです。家来なのです。

それなのにどうでしょう、この八一くんは随分と大きくなっていきます。自分と同じくらいの背丈だった八一くんがどうしてこんなに大きくなっているのか、銀子ちゃんにはよく分かりません。

そんな八一くんはこの通り、今日も今日とて銀子ちゃんに対局をせがんできたのですが……。

どうやらこの大きい八一くんは銀子ちゃんの事が大好きなようで、この部屋で出会ったその日からしきりに構って構ってと近付いてきます。

銀子ちゃんは正直鬱陶しいなあと思う時もあるのですが……それでもこれは弟弟子です。姉弟子である自分が面倒見てあげなければなりません。

なので銀子ちゃんは昨日まで、ちゃんと八一くんに構ってあげていました。

将棋をしたいと言うなら将棋をしてあげます。

お昼寝の時にはそばに居たいらしいのでそばに居させてあげています。

眠っている時にほったたをぶにするのだから許してあげています。

抱っこするのだから、高い高いするのだから許してあげました。

それなのに。それなのに昨日、衝撃的な事実が判明してしまいます。

なんと八一くんは大きくなって、銀子ちゃんよりも将棋の腕が遥かに上がっていたのです。

昨日までの対局は手加減されていたのです。とても生意気です。絶対に許せません。
「……や」

だから銀子ちゃんはその申し出を拒否しました。

「……ぐう、やっぱ駄目か……」

がつくりと肩を落とす八一くん。ですが八一くんの方も諦める訳にはいきません。

八一くんにとって銀子ちゃんとはそれ程に大切な存在なのです。銀子ちゃんに避けられる度にHPがガンガン減ってしまうので、このままだとまた昨日のように死にかけ
てしまうでしょう。

「……銀子ちゃん。昨日はごめんね」

「……」

「君にはもつとちゃんと今の俺の事を話しておくべきだったね。俺は九頭竜八一なんだけど、君が知っている九頭竜八一そのものじゃなくて……成長って分かるかな？ 大きくなるって意味なんだけど」

「……わかる」

成長とは大きくなる事。銀子ちゃんはそれぐらい分かります。ナメンなど言いたいです。

「銀子ちゃん。今君の目の前に居るこの俺はね、君が知っている6歳の九頭竜八一より

も12年程成長して大きくなった九頭竜八一なんだ」

「……12年」

「そう、12年。12年掛けて成長した分将棋の腕も上がっていて、だから……平手では何百回対局しても今の銀子ちゃんじゃ俺には勝てない。それぐらい成長しちやつたんだ」

「……う」

小さく呻き、しゅんと俯いてしまう銀子ちゃん。

……けど、けどそれぐらいは分かっています。これまたナメンなど言いたいです。

昨日、銀子ちゃんは成長した八一くんと何度も対局したのですが……結果は惨敗でした。

どの手が悪手だったのかとか、どの攻めが悪かったのか分からない位の圧倒的な負けです。自分との実力差さえもよく分からない、とにかく途轍もない差がある事だけ分かりました。

八一くんは銀子ちゃんよりも弱かったはずなのに……いつの間にかこんな事になっています。

それが成長したからなんだ、と言われても銀子ちゃんには到底納得出来ません。

だってこれはズルい、八一くんだけズルいではありませんか。言うならこれは……あ

れです。

「……チート」

「ち、チート!? いやチートって訳じゃ……てか銀子ちゃん、そんな言葉よく知ってるね？」

「しってる。ナメんなし」

「そ、そつか。けどチートかあ……俺がズルした訳じゃないんだけど、でも確かに銀子ちゃんの立場からするとそうなつちやうよなあ……」

うーん、と難しい顔で腕を組む八一くん。

自分が将棋で強くなれたのは他ならないこの子がいたからこそ。この世界で八一くんが一番対局してきたのは銀子ちゃん、銀子ちゃんと共に切磋琢磨してきたから今の自分が居るのです。

そんな銀子ちゃんに自分の実力をズルと言われてしまうのはツライものがあるのですが……けれども今のこの子からしたらそうなってしまうのも致し方ありません。

「……けどね。成長して大きくなるのは決して俺だけじゃないんだ。銀子ちゃん、君だって本当は俺と同じように成長しているんだよ?」

「……わたしも?」

「うん。ほら、昨日お昼寝の時に抱きついていたJK銀子ちゃんがいるでしょ? あの

子が君にとつての12年後の姿、俺と一緒に成長してきた銀子ちゃんなんだ」
「……じえーけー」

ぼつりと呟く銀子ちゃん。

J Kの事は勿論知っています。というかこの部屋には自分の他にJ KとJ CとJ Sと、都合4人分の銀子ちゃんと呼ばれる人が居ます。

みんなよく似ていて紛らわしいです。この辺の理由も銀子ちゃんにはよく分かりません。

ともあれそんな銀子ちゃん達の内、J Kの銀子ちゃんが自分の12年後の姿だそうです。

八一くんの言い分が本当かどうかはよく分かりませんが、言われてみればそんな気もしてきます。

何故ならJ Kの銀子ちゃんは将棋が強いのです。銀子ちゃんが勝てないJ Sの銀子ちゃん、J Sの銀子ちゃんが勝てないJ Cの銀子ちゃん、そのどれもに楽勝で勝つのがJ Kの銀子ちゃんなのです。

「わたしが……わたしがいずれじえーけーみたいになるの？」

「そうだよ。君も成長したらああなるんだ」

「じえーけーはどれぐらい将棋がつよいの？」

「そりやあもの凄く強いよ。この世界で一番、将棋が強い女の子に間違いないだろうね」
「八一よりつよい?」

「どうかな……俺とあの子はまだ公式戦で戦った事が無いからなんとも言えないけど……可能性はあると思うよ。なんせあの子は俺にも出来なかった三段リーグ一期抜けてを成し遂げたんだから」

「ふーん……」

なにやらよく分かりませんが、とにかくJKの銀子ちゃんは将棋がとても強いそうです。

「……そっか。わかった」

すると銀子ちゃんはこくりと頷いて。

「じゃあじえーけーにふくしゅうして貰う」

「え?」

そして。

「……で、私に対局しろと?」

11時半頃、本日も午前授業で早く帰宅したJKの銀子ちゃん。

目の前に居る幼女に向かってそう尋ねると、銀子ちゃんは「ん」と頷き返します。

「じゃーけー、わたしの代わりにやいちをぼこぼこにして」

「……だって。八一、あんた随分と幼女の私に嫌われたわね」

「き、嫌われてないっすよ！ ……嫌われて……ないもん……ないもん……」

昨日癒えたばかりの胸の傷が痛みだしたのか、八一くんは心臓の辺りをぎゅつと押さえ
えます。

一応言っておくと、銀子ちゃんは決して八一くんの事を嫌いになつた訳ではありません
ん。

昨日は嫌いになりましたが、それでも一晩経つて考えを改めました。自分は姉弟子で
八一くんは弟弟子、だったら少し位のおいたは許してあげないと。それが姉弟子の懐の
深さというものです。

そう、自分は姉弟子。慕ってくる弟弟子の事を嫌つたりしたら可哀想だというもので
しょう。

ただなんかムカつくのでもぼこぼこにしたいだけなのです。

「やいちをわたしをナメてる。ムカつく」

「なるほど、その気持ちは分かる気がするわね」

「ちよつと、銀子ちゃん!？」

「でもわたしじゃ勝てないの。だからじえーけー、わたしのかわりに戦って」

銀子ちゃんはJKの自分を見つめて言います。

お互いに灰色の大きな瞳が交わって……そしてJKの銀子ちゃんがやれやれと頷きました。

「……分かったわ。平手で指せって言った私にもちよつとぐらいは責任があるしね。なら八一、とりあえず一局指すわよ、持ち時間10分」

こうしてJKの銀子ちゃんと八一くんの対局が始まりました。

将棋盤を挟んで二人、JKの銀子ちゃんと八一くんの間には緊迫した空気が流れます。

「……ふむ」

序盤の手がお互いさくさくと進んでいく中、ふと八一くんは考えます。

この対局は話の流れ的に言うなら、自分が負けるべき場面でしょう。

自分がJKの銀子ちゃんとの対局に敗れる事で「ほら、言った通りJK銀子ちゃんは強いだろう？ 君もこんなに強くなれるんだよ」みたいな感じで話を纏めます。

そうすれば自分をぼこぼこに出来た幼女銀子ちゃんの鬱憤も晴れて、機嫌もすつかり元通り。

将棋も出来るしだっこともさせてくれるし一緒に昼寝だつてさせてくれる、昨日までの仲良しこよしな関係に戻る事でしょう。

けれど。だからと言って八一くんはここで手を抜く訳にはいきません。

幼女ならともかく、プロになった銀子ちゃんとの対局でわざと負けるなど決して許されません。そんな事したらJK銀子ちゃんにも嫌われてしまうでしょう。それは八一くんが最も恐れる事です。

だから八一くんもこの対局は真剣に戦います。

たとえこの対局で自分が勝利して、幼女銀子ちゃんが更に怒ってしまうのも覚悟の上です。

「……………ふう」

対局はちようと中盤に差し掛かった頃。

ここが勝負の分け目と判断した八一くんは精神を集中させます。

そして誰にも追いつけない、誰も届かない領域まで、一気に思考を加速させる——ッ

「えい」

ペチン☆

「あっ？」

突然頬を張られた衝撃に驚き、思わず八一くんは思考を中断してしまいます。

「えいえい」

「え、ちよ、よ、幼女銀子ちゃん？」

えいえいと、銀子ちゃんは八一くんの頭をぽかすかと叩きます。

「え、ええ？ あ、これ妨害ありなの!？」

「とーぜん」

当たり前です。一体八一くんは何を勘違いしているのでしょうか。

だってこれは銀子ちゃんと八一くんの戦いなのです。あくまで戦っているのはこの自分、JKの自分には対局の席を譲ったに過ぎません。

このムカつく弟弟子の事を自分の手でぽこぼこにしてこそ意味があるのです。

「……どうしよう、JK銀子ちゃん……」

「あんたが撒いた種でしょ、私に振るな。……盤外戦術とでも思って我慢したら？」

「……それもそうだね」

自分はプロ。それもタイトルホルダーたる者、幼女の妨害程度で気を乱してはなりません。

八一くんはまた精神を集中させ、思考を高速回転させていく……のですが。

「……んしょつと」

「ちよ、ちよつと！ 銀子ちゃん!？」

銀子ちゃんは八一くんの正面に回ると、その膝の上にすくとんと腰を下ろします。

こうすると二人の顔が急接近です。銀子ちゃんは首を伸ばして更にお顔を近付けます。

「……やいち」

「ちよつと、銀子ちゃん、顔が近いから……」

「……(じ〜)」

「ぎ、銀子ちゃん……」

銀子ちゃんはじーつと、ただ至近距離から見つめているだけです。

それなのにどうでしょう、八一くんが見るからにキョドっているではありませんか。

成長した八一くんは自分が近付くとこのように挙動不審になる事が多々あります。

6歳の八一くんはこうはならないのにどうしてなのか、銀子ちゃんには謎です。

「く、くう……俺はプロ、俺はプロ棋士……盤外戦術に心を乱される訳には……!」

先程から思考をぐちゃぐちゃに揺さぶられ、見れば盤面は自陣の劣勢となつています。

けれどもまだ負けた訳ではありません。どうかこの窮地を打開しようと、反撃の為

の一手を打つべく駒台にある桂馬に手を伸ばした……までは良かったものの。

「……なんだ。そんな膝の上に座ったりして、もうとつくに仲直り出来ているじゃないの」

「これ、仲直り出来てますかね？ 幼女銀子ちゃんは俺の妨害がしたいだけじゃないかな？」

「だとしても私は嫌いな男の膝の上なんて絶対に乗らないわよ。それに……」

八一くんが盤面に桂馬を打ち付ける直前。

「ここぞとばかりに高校生の銀子ちゃんも盤外戦術を……もとい、ノロケを繰り出します。」

「それに、こうしていると、なんか……」

「なんか？」

「なんか、私達の将来の姿、みたいだなくって♡」

「っ!？」

その言葉に八一くんはハツとします。言われてみればその通りだと思いました。

自分とJK銀子ちゃんの将来の姿。それは……お互いが共にある人生以外にないでしょう。

つまり結婚です。愛しい銀子ちゃんと結婚したとして、するとどうでしょう。今膝の

上に居る幼女銀子ちゃんが我が子のように見えてくるではありませんか。

ある日、自分と妻が将棋を指しています。

しかし我が子はまだ両親の職業や将棋の事を理解しておらず「ねえねえ、ぱぱー、遊んでよー」と対局中にも拘らずかまつてかまつてしてきます。そして自分は「コラコラ、後で遊んであげるから」なんて言つて、その姿を見た妻がふふつと微笑む。

そんな些細な幸せのシーン、今の自分達の姿はまさにそんなシーンではないでしょうか。

ああ、これが幸せなのか……と、八一くんがそんな事をついつい考えてしまったが最後。

「……つて、あれ?」

ふと気付いた時には自分の指先が摘んでいたはずの桂馬の駒がありません。

どうやら知らない間に指からぼろつと零れていたらしく、盤上のおかしな位置に桂馬がいます。

「いただき」

こうして全く無駄な一手となつてしまった桂馬はJKの銀子ちゃんにすぐ取られてしまいました。

「あ、ちよつと待——」

「まっ？」

「……ま、じゃ、ないです、ね。はい……」

待った、と口走りそうになってしまい、八一くんは悔しそうに唇を噛みます。

そして、それから数分後。

「……参りました」

ぺこりと頭を下げる八一くん。

二人の銀子ちゃんの盤外戦術に翻弄された結果、もの見事にボロクソに負けてしまいました。

18. 更に空銀子ちゃん（4歳女の子）の話

「……参りました」

そう言つてぺこりと頭を下げる八一くん。

「……勝つたの？」

その膝の上、銀子ちゃんは対局の終了した将棋盤をじーつと見つめます。

けれどもその盤面にあるのは4歳の銀子ちゃんからしたら高度かつ難解な詰みで、本当に勝てたのかがいまいちよく分かりません。

「勝つたわよ。ほら、ここをこうして、それで角を上げて、で金を下がらせて、それで……ほら、こうすればこれ以上打つ手がないでしょ？」

「……ほんとだ、詰んでる」

JKの自分が説明してくれて、ようやく銀子ちゃんはそれを理解しました。

八一くんの王は確かに詰んでいます。という事はこの対局は銀子ちゃんの勝利です。

「じえーけー、やいちに勝つたんだ……すごい」

「まあね。八一なんて所詮はこんなもんだよ」

幼女の自分からの称賛を受けても、JKの銀子ちゃんは然程喜びません。

むしろ対局相手のあまりに無様な姿が気になったのか、咎めるような視線を向けます。

「あんだね、いくらなんでも動揺し過ぎ。プロになってから公式戦の経験が増えた一方で、昔よりも盤外戦術に弱くなってんじやない？」

「……かもしれないっすね。でもさあ、銀子ちゃんを使った盤外戦術なんて反則だよ……」

ぐうの音も出ない八一くん。

この対局では良い所がまるでありませんでした。二人の銀子ちゃん、幼女と高校生の手のひらで見事に踊らされたような気分です。

「とにかく。注文通り八一の事はぼこぼこにしてあげたわ。これでちよつとはスッキリした？」

「うん。まんぞく」

「そう、それは良かった」

銀子ちゃんは小さなおてででピシッとサムズアップ。JKの銀子ちゃんもそれに応えます。

「やいちも、まいった？」

「……うん。参った、参ったよ。本当に御見逸れました、銀子ちゃん」

「次にまたわたしをナメたらぶちこころすから」

「わ、分かりました……」

別に俺は銀子ちゃんの事をナメてなんかいないんだけどなあ。

と八一くんは思いましたが、ここは兎にも角にも言い訳せずに頷いておきます。

「……ふふつ、よろしい」

こうして銀子ちゃんの機嫌は元通り。その顔には微かな笑みすら浮かんでいます。

さっきまで自分はどうして不機嫌だったのか、昨日の自分はどうして泣いていたのか、もはやそれすらも思い出せません。

「でも幼女。あんたもこれで分かったでしょ？ 今の自分とここに居る八一との実力差が」

「……むう」

思い出しました。昨日、八一くんは自分との対局で手抜きをしていた事が発覚したのです。

それで本気で指せと命じた所、銀子ちゃんは八一くんに平手でぼこぼこにされたのです。

「今のあんたじゃ八一と平手でやったら勝負にすらならないわ。次からは平手は諦めて

ちゃんと駒落ちで戦いなさいよ」

「……駒落ち?」

「そう、駒落ち」

「……やだ」

銀子ちゃんはふいつとそつぽを向きます。

「こら、やだじゃないでしょ」

「やだもん」

「あのねえ。相手はプロなんだし、駒落ちで戦う事は別に恥ずかしい事なんかじゃ——」

「それでもやだ」

J Kの自分からどう言われても、銀子ちゃんはそのだけは譲りません。

むしろJ Kの方が間違っていると言いたげに、銀子ちゃんは強い眼差しで睨み返します。

「じゃーけー」

「な、なに?」

「じゃーけーはやいちと駒落ちで指せるの? わたしはそんなの絶対にやだ」

「む……」

幼女に反論されたJ Kの銀子ちゃんは、ちらつと八一くんの顔を一瞥して。

「……………」

「……銀子ちゃん？」

「……同歩。確かに……それは無理かもね」

これは幼女の言っている事の方が正しい。JKの銀子ちゃんはそう思いました。

何故なら自分と八一くんは対等の相手、対等の存在なのです。たとえ成長してしようと、どれだけ実力差があろうともそれは変わりません。

これはもう理屈では無いのです。幼女であつてもそれが空銀子である限り、九頭竜八一との駒落ち対局など受け入れる事は出来ないのです。

「八一。幼女との駒落ち戦は無理だから諦めて平手でやりなさい。ただし昨日の対局みたいにわざと負けるのも無し」

「え、けどそれじゃあ昨日と同じで、また幼女銀子ちゃんが泣いちゃうんじゃ……」

「かもね。だからそれも込みで頑張りなさい」

「ええー……」

「情けない声出さない。幼女の世話をするつてのはそういう事なのよ。……多分」

幼女の世話をするという事。それは決して幼女に好かれるばかりではありません。

昨日のように時に泣かれ、時に嫌われる事も覚悟して幼女と向き合わなければならぬのです。

……と、子育て経験などまるでないJKの銀子ちゃんがそう語ります。

「ところで」

とその時、銀子ちゃんが口を開きます。

「ん？」

「なにかな、幼女銀子ちゃん」

「ふたりは付き合ってるんでしょ？」

「え!？」

その「え!？」という声はハモっていました。

突然その話題来る!?! と八一くんとJKの銀子ちゃんは共に困惑を隠せません。

しかし幼女が振る話題が突然なのはよくある事なのです。二人の仲睦まじい姿を見ていたら、銀子ちゃんは唐突にそれが気になったのです。二人の仲睦まじい姿を見

「ラブラブなんでしょ？ まえにそういつてた」

「あ、ああ、確かにそう言ったね。けど……」

「ていうかあんた、幼女のくせに付き合うとかラブラブとかの意味分かってんの？」

「わかる。ナメんなし」

お付き合いをする。それは銀子ちゃんのぱとまみたいいな関係になるという事です。

ラブラブもおおよそそれと同じ意味です。銀子ちゃんは賢い子なのでそれぐらい分かります。

そして賢い銀子ちゃんは考えます。

どうやら自分は将来八一くんとぱぼとまみたいな関係になるらしいのです。

……ぶつちやけどても信じられません。率直に言つて「えー」つて感じの気分です。

「どつちからこくつたの?」

「こ、告つた?」

「ん。どつちからなの?」

どつち? と小首を傾げる銀子ちゃん。

その視線の先、八一くんとJKの銀子ちゃんは複雑な表情で顔を見合わせます。

「なんかこれ……前にも同じような事を聞かれた覚えがあるような……」

「……奇遇ね。私もそんな覚えがあるわ」

八一くんはJSの銀子ちゃんと、JKの銀子ちゃんはJCの銀子ちゃんと似たような話をしました。

何故銀子ちゃんという生き物はこれ程までに自分達の恋愛事情に興味津々なのでしょう。八一くんとJKの銀子ちゃんにはよく分かりません。

「で、どつちなの?」

「それは……俺からです」

「やっぱり」

「や、やっぱり？」

「うん。やっぱり」

告白したのは八一くんの方から。銀子ちゃんはそりやそうだろうなと思っ
ていまし
た。

その理由は簡単、自分が八一くんに告白する事なんて想像出来なかつたから
です。

「で、それをじゃーけーは受け入れたんだ」

「受け入れたって言うか、私は……」

「受け入れたんでしょ？」

「……まあ、そうね」

実際は受け入れるまでもなくOKに決まっていたのですが、そうと説明するの
もなん
か恥ずかしいのでJKの銀子ちゃんは頷いておきます。

「……なるほどね」

銀子ちゃんにとつて八一くんとは弟子です。格下です、下っぱです、家来
です。

けれどもそんな八一くんから告白されて、成長した自分はそれを受け入
れた
そうです。

「……えー」

やっぱり気分は、えー、って感じですよ。銀子ちゃんは思わず声に出してしまいました。何故なら銀子ちゃんにとって、八一くんというのはあまり優良物件ではありません。一言で言うなら『将棋が弱くてバカな男の子』です。成長したら将棋が弱い部分は改善されるみたいですが、残念ながらバカな部分は治っていないように見受けられます。八一くんよりもマシな男の子など、もつとイイ男の子などそこらに居るのではないのでしょうか。銀子ちゃんにはそう思えてなりません。

それなのに成長した自分が八一くんを選んだのだとすると……これはきつと……あれです。

「ねえ、じえーけー」

「なに?」

「てごろな男でできようしたの?」

「なっ!?!」

なんて事を言うのかこの幼女は! とJKの銀子ちゃんはびっくり仰天です。けれどもその隣、八一くんにとってはもう驚く所では済みませんでした。

「な、ななな……銀子ちゃん、そうなの!?! 俺って妥協の上の選択だったの!?!」

「ち、違うわよっ! そんな訳ないでしょう!?!」

「でも、わたしがやいちをえらぶ理由なんてそれくらいしか考えられない」

「……そ、そんな……!」

あまりのショックに八一くんは顔面蒼白です。

自分にとつては数年……いや十数年越しの恋を叶えた結果なのに、それも銀子ちゃんにとつては妥協の産物でしかなかったのでしょうか。

だとしたらあまりにも切ない話、昨日に続いてまた泣いてしまいそうです。

「……銀子ちゃん、俺……」

「つて、泣きそうになってんじゃないわよ！ 違うつて言つてんでしょ!」

「ううん。だきようなはず」

「やっぱり……!」

「だから違うつて……ああもう!」

そしてそれはJKの銀子ちゃんにとつても看過できない話です。自分が長年抱き続けてきた恋心が妥協の産物などと言われてはたまりません。

なのでJKの銀子ちゃんは声を大にして言いました。そりやもう大きな声で言いました。

「私は八一の事が好きなの！ ずっとずっと大好きだったの！ だから告白された時は信じられないくらい嬉しかったの！ それが妥協の選択なはずがないでしょう!」

「ぎ、銀子ちゃん……!」

「大体その幼女! 妥協とか適当な事言ってるけどね、あんただってあと10年、いやあと5年もしたら八一の事しか考えられなくなるんだからね!」

「え、うそ……!」

「本当よ! これは全ての空銀子が同じように罹る病気なの! あんたもいずれそうなるんだから覚悟しておきなさい!」

威勢よく自らの恋心をぶち撒けたJKの銀子ちゃんは「ぜー、はー……!」と息を荒げます。

この通り、銀子ちゃんのお口は勢いが付いたらもう閉じられません。勢いのままに色々言ってしまったような気がしますがもはや後の祭りです。

見ればすぐ隣では、八くんがキラキラした目でこちらを見ているではありませんか。

「銀子ちゃん……そんなにも俺の事を……!」

「え、あ、いや、うう……い、今のは——」

今のは勢いで口走っちゃっただけだからっ! と言おうかとも思ったのですが。

「……そうよ!? 何か文句でもあんの!」

真つ赤な顔で逆ギレ気味に答えるJK銀子ちゃん。

それでもやっぱり認める事にしました。だってそれは他ならない本音だからです。それにもう十分恥ずかしい思いをしているので、ここまで来たなら何を言っても同じです。

「……まさか、文句なんてあるはずない。それよりも……凄く嬉しい」
「……あつそ」

「うん。銀子ちゃん……」

そして感激した様子の八一くんはJKの銀子ちゃんに近付いていきます。

「え？ あ、八一？」

「俺も好きだ。大好きだよ、銀子ちゃん」

「ちよ、ちよつと、こんなところで——！」

慌てふためくJKの銀子ちゃんを無視して、八一くんはその身体をぎゅつと抱きしめます。

他の事なんて気になりません。八一くんはもうこの子の事が、こんなにも自分を想ってくれる恋人の事が愛おしくてたまりませんでした。

「八一、幼女が、幼女が見てるから……！」

「大丈夫だって」

「な、何が大丈夫なのよ、もう……」

文句を言いつつも、JKの銀子ちゃんはその腕の中で大人しくしています。子供に見せるものじゃないとは思いますが、この心地よさから逃れる事が出来ないのです。

「……………」

そしてそんな二人を前にして、銀子ちゃんは魂の抜けた顔で呆然としていました。成長した自分と八一くんのハグが衝撃的だったから……ではありません。それよりもなによりも先程の話が衝撃的だったからです。

「わ、わたしは……やいちを……！」

自分は将来、八一くんの事しか考えられない病気に罹ってしまうそうです。

それはなんと……なんという恐ろしい病なのでしょうか。自分がそんな怖い病気に罹ってしまうなんてとても信じたくありません……が、成長した自分が言う事だけに無視する事も出来ません。

「あわわわ……！」

八一くんの事しか考えられない病気。

そんな病気に罹ってしまったら、この先どうやって生きていけばいいのでしょうか。

ちゃんと頭を使って将棋を指せるのでしょうか、銀子ちゃんはなんだか怖くなってきました。

「……うう、やいち」

そして恐怖のあまり、勝手に身体が動きました。

「……あ」

「どうしたの？」

「いや、幼女銀子ちゃんが……」

八一くんがふと足元を見れば、自分の太ももに銀子ちゃんがぎゅつとしがみついています。

「どうしたの？ 幼女銀子ちゃん」

「……わたしも抱きつく」

銀子ちゃんはJKの自分に混じって八一くんを抱き付く事にしました。

こうするとなんだかホツとします。不思議と気持ちが落ち着くのです。

それがどうしてなのか。その気持ちは幼い銀子ちゃんにはよく分かりません。

「……やいち」

八一くんの事しか考えられない病。それは俗に言う恋の病というものです。

どうやら自分は5年後、そんな病気に罹ってしまうらしいので——

——これからはもう少し、もう少しだけやいちに優しくしておこう。

銀子ちゃんはその事を考えたみたいです。

「やいち。わたしに抱きつかれるの、すき？」

「うん、好きだよ」

「そっか。ならもつとしてあげる」

銀子ちゃんは更にぎゅーつと抱きしめます。

「ぎゅー」

「ああ、幼女銀子ちゃん……かわいい」

「……ロリコン」

「い、いやいや。これはロリコンとかそういうのじゃないでしょ」

「……ろりこん？」

ロリコンとは何だろう？ ……と、そんな事を考えながら。

銀子ちゃんはJKの自分と一緒に、しばらくの間八くんにぴたりとくっついていましたとき。

19. 仲直りした幼女との話

「幼女銀子ちゃん！」

俺が元気よくそう声を掛けると、

「なに？」

幼女銀子ちゃんはこてりと小首を傾げる。

この仕草からしてもう可愛い。くりくりなおめめで俺を見上げる表情がめっちゃ可愛い。

これはもう日本一、いやもうこの子は世界一ぷりちいーな幼女だ。絶対に間違いない。

とそんな世界一のぷりちいー銀髪幼女、空銀子ちゃん（4歳女の子）なのだが……。

つい先日、ちよつとした一件から俺はこの子を泣かせてしまった。そしてお前とは会話するのも嫌だというかのように避けられていた、嫌われちゃっていたんだけど……。

それでも、俺達の間にある問題はやっぱり将棋が全て解決してくれた。

「幼女銀子ちゃんとの対局……というかJK銀子ちゃんとの代理対局によって（というか俺がぼこぼこにされる事によって）機嫌も直り、無事に仲直りする事が出来た。本当に良かった。」

「……いやホントに幼女銀子ちゃんと仲直り出来て良かったよマジで……。」

「幼女にぶいっと避けられる、拒絶される辛さといったらもう……本当にシンドかった……。」

「もうこの子に嫌われるような事をするのだけは止めよう。俺はそう強く心に刻んだ。とはいえまあ心配せずともそんな事はもう無いと思うけどね。」

「俺と幼女銀子ちゃんはもうすっかり仲良しこよしな関係に戻ったのだ。だからこの通り、俺がこの子の名前を呼んだらちゃんと返事をしてくれる。」

「幼女銀子ちゃん！」

「なに？」

「幼女銀子ちゃん！」

「なに？」

「かーわーいーいー。」

「もう素直に返事してくれるだけで可愛い。ていうか何をしても可愛い。」

「幼女がちゃんと返事をしてくれるのが嬉しくて、俺はついつい何度も名前を呼んじゃ」

う。

「少女銀子ちゃんっ！」

「なんだってきいてんだろ」

キレられた。

あんまりしつこいと少女銀子ちゃんもキレる。この辺は少女であつてもその身体には空銀子の血が流れている何よりの証だろう。

まあ時々怒らせちゃうのはご愛嬌として……。

それでも確かに、間違いなくこの子とはちゃんと仲直りを済ませた。

そして昨日の一件で少女銀子ちゃんは更に心を開いてくれたのか、仲直りする前よりも距離が縮まったような感じがしている。

例えば今、少女銀子ちゃんは座布団に座つて将棋の本を呼んでいる最中なんだけど……。

こういった読書中に俺が声を掛けた場合、以前までならシカトされたり「うるさい」と言われたりしていたのだが、今では先程の通りちゃんと返事を返してくれる。

いや、それどころか……。

「ねえ少女銀子ちゃん。その本、良かったら俺と一緒に読まない？」

俺がそんなお願いをしてみると、少女銀子ちゃんは再びこteriと首を傾げて。

「本？ やいちも読みたいの？」

「うん。是非と銀子ちゃんと一緒に読みたいな」

「いいよ。ほら」

この通り、簡単にOKしてくれた。

幼女銀子ちゃんはおててに持っていた将棋の本をちよこんと横にずらして、隣に座る俺にも見やすいように角度を付けてくれる。

「みえる？」

「うん、見えるよ。ただ……」

これはこれで悪くないんだけど……ね。

でもさ、やつぱりこんなに分厚い本を幼女に持たせておくなんて駄目だよね、うんうん。

「幼女銀子ちゃん、その本は俺が持つてあげるよ。それで君はこっち」

「わっ」

俺は幼女銀子ちゃんをひょいっと抱え上げ、あぐらを掻いた自分の膝の上に座らせる。

そうして両手をこの子の前に回して、この子が見やすいように本を立ててあげる。

「ね。これならもつと読みやすいでしょ？」

「うん。ひざの上、わるくない」

こくりと頷く幼女銀子ちゃんもにつこり笑顔。

……ではないけど、まあ嫌がってないのなら概ね満足してくれているという事だろう。

俺の膝をお尻の下に敷いて、更には両手が手ぶらになった事もあって快適そうにしている。

これぞ伝統の研究スタイル、腰掛け銀。

それも大変希少な幼女版だ。高校生も良いけど幼女バージョンにはまた違った趣がある。

この通り、俺は幼女銀子ちゃんと腰掛け銀だつて出来るようになったのだ。

「やいち、めくつて」

「うん」

一ページ読み終わる毎に、幼女銀子ちゃんが次を促すように俺の太腿をポンポンと叩く。

改めて思うけど……こうして愛しの銀を膝の上に腰掛けさせる、この充実感たるやもう。

身体が密着する事でその感触を、その体温を余す事なく感じられる。それがまずグッ

ド。

特に今は幼女という事もあって幼女特有の軽さというものを存分に味わえる。最高か。

そして本を読む銀子ちゃんは何ら気にする事なく身体を俺の方へと預けている。そこから伝わる信頼感みたいなものがとても良い。

この子が安心して身体を委ねられる、言わば背もたれに俺がなれているという事実が嬉しい。

「……（くいくいっ）」

ん？ 幼女銀子ちゃんが無言で俺の服の袖を引つ張つてくるぞ？

と思つたら本のある一箇所をピツと指差した。そこに書いてあるのは……。

「えつと、その漢字はげんみつ（厳密）だね。厳密に言うならば、つてのは正確に言うなら、とか、厳しく言うなら、とか、そういう意味かな」

「……別に。しつてたし」

すんとすました顔でそういう4歳の銀子ちゃん。

相変わらずの意地っ張りさんやなあ。『厳密』なんて漢字は4歳なら読めなくて当然なのに。

けれどこの子は知らない読めないとは言わない、そういう意固地な所が可愛い……ん

「ただ、あえてここはちょっとからかってみる。」

「ほんとにいい？ほんとに知ってたあ？」

「ほんとだし。ナメんな」

「じゃあこれは？『戦型』この漢字は読める？」

「せんけい」

「おー、正解」

「これぐらいよゆう」

ふふん、と無表情ながらに胸を張る銀子ちゃん。

さすがは漢字に強いスーパー幼女。小学校で習うような漢字だってお手の物だ。偉いなあ。

偉いので俺はその頭をよしよしと撫でてあげることにした。よしよし、よしよし。

「……………んにゅ、ふう……………」

そうして綺麗な銀髪を梳いてあげると、幼女銀子ちゃんは心地よさそうに目を細める。

その仕草は全年代の銀子ちゃん共通の反応で、度々目にする俺としてはちよつと面白い。まあ同一人物なんだから当然なのかもしれないけど。

「よしよし、よしよし、よしよし」

「んうー……」

「よーしよし、よーしよし」

「……もう。よみにくい……」

幼女銀子ちゃんはそう文句を言うものの、頭の上にある俺の手を振り払おうとはしない。
い。

むしろ俺が片手を使えないのを察してか、自ら次のページをめくり始める。

とこのように、俺と幼女銀子ちゃんは仲直りした事でより一層距離が近付いた。

これぞ怪我の功名、あるいは雨降って地固まるというやつだろうか。

そうしてその後は暫くの間、腰掛け銀スタイルで仲良く読書を楽しんで。

昼の12時頃、出前で注文したお昼ごはんをこれまた仲良く食べて。

そして。

「……ねむい」

時計の針が一時を回った頃。

そろそろ電池が切れる頃、毎度のように幼女銀子ちゃんのおめめがしよぼしよぼしてくる。

という事でお昼寝タイムだ。俺は食器を片付け次第すぐにお布団を敷いてあげる。

「はいどーぞ、幼女銀子ちゃん」

「……ん」

するとお布団の上に横になって、枕の上にぼすんと小さな頭を下ろして。

普段の幼女銀子ちゃんなら、ここで布団のすぐそばを指差して「やいちはこの」と言ってくる。

配下に見張りをさせるかの如く、自分のそばで待機する事を俺に命じてくるのだが

……。

「……………」

しかし今日は違った。

幼女銀子は何事かを考えた後、俺に向かってこう言い放った。

「……………やいちも一緒におひるねする?」

な、なんですとツ!?

いつしよに、一緒にお昼寝ですと!?

「お、俺も一緒に寝てもいいの?」

「とくべつにゆるす」

日頃の行いのおかげなのか、どうやら特別に許されたようだ。やったね!

ならば遠慮なくと、俺は幼女が眠るそのすぐ隣に身体を寝かせた。よっこいせつと

……。

「ここに寝ても大丈夫？ 邪魔にならないかな？」

「ん、だいじょうぶ」

平然と答える少女銀子ちゃんの一方、俺は……ああ駄目だ、なんか緊張する。

だって隣には少女が、少女の頃の銀子ちゃんが無防備にも身体を横にしている……。

「……やいち」

するともぞもぞと動く気配、見れば少女銀子ちゃんがこちらに距離を詰めてくる。

そして、お、俺の腕を取って、ぎゅつと、ぎゅつとしてくるではありませんか！

「ん……」

そのまま少女銀子ちゃんは目を閉じちゃった。

はわわわ、少女が、少女銀子ちゃんが俺の腕を抱きまくらにしながら眠ってるよお

……！

「か、くあわいい……」

あ、いけないいけない。いくら少女が可愛すぎるからといって声を出しちゃ駄目だ。

この子のお昼寝の邪魔をしては本末転倒ではないか。

けどマジで可愛い。十分になつき度が上がった少女銀子ちゃんというのはもう可愛

さMAXだ。この子が見せるあらゆる姿が俺の理性を狂わせる。

「くう……くう……」

幼女銀子ちゃんはすでに夢の中にいるのか、小さな寝息を立てている。

対して俺はとてもしゃないけど眠れそうにない。まあそもそも俺は眠くないんだけどね。

ただ俺も当時は、つまり6歳の頃はこの子と普通にお昼寝したりしてたんだよなあ。

その頃の事はもうあんまりよく覚えてはいないんだけど、それでもこんなふうに緊張したりドキドキしたりはしていなかったと思う。

ただそれは当時の俺が鈍かった、銀子ちゃんとのお昼寝タイムを貴重なものだと思っていなかったからで……なんだか勿体無い。12年後も覚えていられる位にちゃんと味わっておけよ、当時の俺。

とそんな事を考えながら、俺は幼女銀子ちゃんの隣で横になっていたんだけど……。そうして時間が経って、時刻は2時頃。

「ただいまー」

お、JS銀子ちゃんが帰ってきたな。

俺は早速出迎えに行こうとして……気付く。

「あ……これ動けない」

幼女銀子ちゃんが二の腕をガッチリホールドしている為、身体を起こす事が出来ない。そんな事したら幼女も一緒に起こしてしまう。

結果として俺はそのままの姿で寝ている事しか出来なくて……。
「八一、ただい、ま——」

改めてただいまの挨拶をしようとしたJ S 銀子ちゃんだったが。

「お、おかえり……」

「……むう」

幼女と一緒に眠る俺を目にした途端、そのほつぺたをぶくつと膨らませた。
……あれ、もしかして……拗ねてる？

20. 幼女とJSの話

「……むう」

という呟きそのままに、むうつとした表情になるJS銀子ちゃん。

その視線の先にはこの俺と、俺の二の腕に抱き付きながらくうくうと眠る幼女が一人。

「……なにしてるの?」

「え? いや見ての通り、幼女銀子ちゃんを寝かし付けていただけだよ?」

「寝かし付けてたあ?」

小学生のじとーつとした目付きが俺に刺さる。

その視線はどの年齢であつても変わらない、銀子ちゃんが俺を訝しんでいる時の目付きだ。

「なんで寝かし付けていただけなのに八一まで一緒になつて寝ているの?」

「それは……ほら、幼女銀子ちゃんが中々眠ってくれなくてさ。それで色々あやして

いる内にいつの間にかこんな体勢になっちゃって……」

幼女からお昼寝に誘われたので誘われるがままに一緒に寝ていたんです。てへ☆
などとは言えない俺はどうにかそれっぽいな言いつく事を考える。

けど幼女銀子ちゃんの事を寝かし付けていたのは本当だし、全部が嘘って訳じゃないよな？

……とか言うとなんか本当に言い訳くさいな。

「ふーん……」

そして案の定……というべきか、JS銀子ちゃんはその言い訳に納得していない様子だ。

背中からランドセルを下ろして、幼女と一緒に眠る俺を見下ろしながら言う。

「……八一は誰かを寝かし付けていたら、いつの間にか一緒になって寝ちゃうんだ？」

「そ、そう……だね。そういう事もあるかな」

「……そうなんだ」

すると、ぽそりと囁くように。

「……私も、夜とか、眠れない時あるけど」

「え？」

もの凄い小声だったからよく聞こえなかった。今この子はなんて言ったんだ？

「ごめん、今の聞こえなかったんだけど」

「……なんでもない」

「いやけど——」

「なんでもないっ!」

つんとそっぽを向いちやうJS銀子ちゃん。

ああ、なんかこの頑なな感じ……これぞ銀子ちゃんって感じがして痺れるぜ……!

「ていうか前から思っていたんだけど、八一は幼女の私に対して甘いと思う」

「そ、そうかな?」

「うん。絶対そう」

「でも幼女銀子ちゃんはほら、この通り4歳だからさ。甘くなっちゃうのも当然ってい

うか……」

「やっぱり八一ってロリコンなの?」

「んん!」

な、なんですとお!?

今のは聞き捨てならないセリフだぞ!?

「じゃ、JS銀子ちゃん……ど、どうして、どうしてそんな事を言うのかな?」

「JKとJCが言ってた。八一はロリコンだからJSのあんたは特に気を付けなさいっ

て」

あ、あの二人、無垢でピュアな小学生になんて事を教えてやがる……！

ていうかJK銀子ちゃん、彼氏にロリコン疑惑を掛けるのはいい加減に止めて下さい！

「ロリコンって子供が好きって意味なんですよ？ だから八一は幼女の私に対して甘いのか？」

「い、いやいや。それは違うよ。てかそもそもロリコンっていうのはね、一般的には小学生とか中学生ぐらいの年代の女の子が好きで男の事を指すんだ。だから幼女銀子ちゃんみたいな4歳児ってのはむしろロリコンにとっては対象範囲外なんだよ」

小学生相手にロリコンの定義を懇々と語る俺。

するとその熱意が間違っただけで伝わったのか、

「小学生……好きなの？」

そう言いながら、JS銀子ちゃんは俺の隣にすくと三角座りで腰を下ろす。

ちよ、JS銀子ちゃん、その質問の仕方は色々な意味でとても危険だから……。

それになによりその位置で三角座りをするのは、スカートが、スカートの中、危ないですよ？

「ロリコンだから……私の事も好きなの？」

おおーとお、これは更なる難局だな。これには如何なる応手で返すべきか。

ここで「そうだよ」と答えた場合、俺は自らのロリコン疑惑を認める事になる……が、否定すればこの子を好きじゃないと言うのも同義だ。

それならさぞJ S 銀子ちゃんは悲しむだろう。今もちらちらと期待するような目を向けてきてるし。

だつたら……！

「……銀子ちゃん。残念だけど俺はロリコンじゃないんだ……」

「え——」

一瞬ショッキングな顔になった銀子ちゃんだが、

「けどね、君の事は大好きだよ！」

「——！」

続く俺の言葉を受けて、その瞳をハツと大きく見開かせる。

どうだ！ こういう時は変に気取ったりしないで男らしく堂々と想いを伝える！

それが一番有効な一手なのだ。俺はもう学んでいるのだ。他ならない銀子ちゃんへの告白でね！

「……う、うう、や、やいち……！」

りんごのように赤くなったほっぺを押さえるJ Sの銀子ちゃん。

「どうやら効果は抜群のようだな！ 俺にはこの子の胸がキュンって鳴っちゃう音が聞こえたね！」

「……きゅん♡」

ほら、もう自分の口で言っちゃってるし。

「……ばか、ばかやいち。まったく何言ってるのよ……ばか、ばかばか」

そして照れ隠しのようにばかばかと呟くと、

「……もう。しよーがないわね」

おや？ J S 銀子ちゃんが姿勢を変えて俺の方へと近付いてくるぞ？

おやおや？ そして俺の隣へと、幼女が眠る反対側のスペースへとやってきて……。

「……んう」

なんという事でしょう！ そのまま身体を寝かせてしまったではありませんか！

俺の右腕を枕にするような形で。俺にぴたりと密着するような形で。

「ぎ、銀子ちゃん？」

「……なに？」

「なについていうか……ど、どしたの？」

「……別に、どうもしてないけど」

顔がすげー近いっす。J S 銀子ちゃんが何かを喋る度に甘い吐息が俺の首元に掛か

る。

これはアカン。決してロリコンではない俺でも変な気分になってしまいそうだ。

「あ、もしかして眠たい……のかな？」

「ううん、そんな事ないけど」

「でもそれなら……」

「だって八一つてば、相変わらず私の事が大好きみたいだし？ それに私は姉弟子だし？ なら別にこれぐらいは、これぐらいならしてあげても良いかなって言うか……」

言葉こそ素っ気ないながらも、ぴたりと密着してくるこの子の気持ちは明らかで。

J S 銀子ちゃん……この子俺の事大好きやな。

俺の事が大好きなロリロリ銀子ちゃんて、そんなん可愛すぎるて、こんなんもう反則やで。

幼女とは違ってこの子は小学生な分、自分の想いをもう自覚しているのだろう。だからこそ内心恥ずかしがりながらも、その気持ちを押しこんだ事をしちゃう所とか、正直言つて堪らない。

「……ん、なに？」

「あ、いや……」

何となく後ろめたいものを感じて、俺はJ S 銀子ちゃんからそつと視線を逸らす。

だって右腕がさあ……俺の右腕からはJSの重みが、JSの体温が、JSの感触と
いったものが全て赤裸々に伝わってくる訳で……。

「……………(すやすや)」

そして左腕の中では幼女がすやすやとおねむ中。

両手に花ならぬ両手に銀子ちゃん。もはやこの状態で平然としていられる自分を褒
めたい気分だ。

だってこれは王だ、王将だ。俺はもう竜王じゃない、両側に銀将を備える王将となっ
たんだ。

「……………んにゅー……………」

とその時、左側にいる幼女銀子ちゃんが可愛らしい寝言と共に寝返りを打った。

こてんと逆側を向いた事で俺の腕のそばから離れてしまう。うーん、ちよつと寂しい
な。

「ほら幼女銀子ちゃん、こつちこつち」

寂しかったので俺は幼女のほつぺたを優しく突つついてみた。つんつん、つんつん。

「……………こーうー」

すると幼女銀子ちゃんがまた寝返りを打って、俺の方に戻ってきてくれた。

ああ良かった。これで一安心だね……とそんな感じで俺が幼女と戯れていると。

「……………むー」

今度は反対側から可愛い声が聞こえた。

そしてJ S 銀子ちゃんは俺の肩にぐりぐりと額を押し付けてくる。それはまるでこつちを向いてと、私に構つてと言っているかのようで。

「……………やつぱり八一は幼女に甘い」

そして拗ねた声でそう呟く。

これつてまさかJ S 銀子ちゃん、幼女の自分に対してヤキモチ焼いちやつてる？

俺に構つて欲しくて幼女にもヤキモチ焼いちやうとか、え、このJ S 可愛過ぎない？
ヤバない？

ただこれはあまりにも可愛すぎるっていうか……………正直可愛さ加減が強すぎて劇薬に近い。

こんなにも好意を明らかにする9歳の銀子ちゃんと一緒に生活していたとしたら、きつと11歳の俺は将棋なんてまるで手に付かなかつただろう。

そしたら俺は今よりももつと弱くて、そうなると銀子ちゃんの名前を取り戻す事だつて出来なかつた訳で……………うん、中々上手くはいかないね。

何事にも適量というのがあるんだろうなあ、そんな事を思いながら18歳の俺は手を伸ばす。

「J S 銀子ちゃん、幼女銀子ちゃんはまだ眠ってるから静かにね。ほら、いい子いい子」
そしてその頭をよしよしと撫でてあげる。

「む、う……子供扱いして……」

J S 銀子ちゃんはそう言うが、けれど俺の右手には空銀子特攻効果が付与されている、らしい。

なのでこの右手でその頭をいい子いい子してあげれば、この子は素直に受け入れちゃうのだ。

とまあそんな感じで。

俺はその後も右腕に小学生、左腕に幼女のキングスタイルでしばらく横になっていた。

そして幼女が目を覚ますまで、J S 銀子ちゃんとのスキンシップを楽しんでいたんだけど……。

やはり子供同士……と言っては当人は怒るかもしれないけど、幼女と小学生というのはそういうカテゴリーに纏められるのだろう。

だからなのか、先程のようにJ S 銀子ちゃんは幼女の自分に対して対抗心を見せたり、ヤキモチを焼いたりする事がある。

あくまでその感情は俺に対して向けるだけで、さすがに4歳の幼女相手になにか揉め

たりする訳ではない。だから別に全然OKというか、むしろ子供らしくて可愛いなあと
思う位なんだけど。

……ただ、後から考えると。

そんな対抗心こそが、あの出来事の引き金だったのかもしれない。

さてあの出来事とはなんぞや。を語る前に……。

ちよつと話は変わるけど、つい昨日の事、俺が死にかけた事があつたのを覚えている
だろうか。

……そう、幼女銀子ちゃんから「……やいち、きらい」と言われたあれだ。

あの一件を振り返っても明らかのように、言葉というのは実に危険なものだ。

使い方次第によっては凶器にもなり得る。人を死なせる事だつて出来てしまう。

その事を俺は改めて実感した。

どうしてかつて？ そりゃあ実際に俺を殺すような言葉を突き付けられてしまった
からだ。

それは幼女銀子ちゃんが呟いた一言だ。相変わらず俺を殺してくるのはこの子のよ
うだ。

それは次の日の夜。

皆で一緒に晩ごはんを食べ終わってすぐの事。
幼女銀子ちゃんは俺に対してこう言った。

「やいち。おふろはいろ」

21. 風呂の話

俺に向かつて天使が囁く。

けれどそれは悪魔の囁きの如き言葉で。

「やいち。おふろはいろ」

その言葉を聞いた瞬間に俺は一度死んだ。

そしてすぐさま現世に転生を果たして、俺を殺した罪深い幼女に向けてこう答えた。

「うんっ！ そうだね！ お風呂入ろっか！」

「逮捕」

「了解」

何たる迅速な動き、何という見事な意思疎通だ。

俺の答えを聞いた瞬間にJKとJC二人の銀子ちゃんがさつと動き出す。

二人共に片方の腕を掴み、俺はあっという間に両腕を背中で拘束されてしまった。

「ちよ、ちよつと二人共、痛いって！」

「ねえ、このクズどうする？」

「そうね、とりあえずベランダに出しておきましょうか。ここに置いておくと危険だし」
我が姉弟子ながらなんたる酷い言い様だ。まるで人を犯罪者かのように扱うではないか。

俺はただ純粋に少女の望みに応えようとしただけなのに……って二人共目がマジだし！

「二人共待つて待つてっ！ まだセーフでしょ、まだお風呂には入ってないから！」

「馬鹿ね、風呂に入ってからじゃ遅いのよ。犯罪は未然に防ぐものなの」

「ていうかこれ犯罪じゃないし！ 俺は大人として少女のお風呂に付き添うだけで……」

「はいはい、言い訳は署で聞くから」

署つてなにさ、署つて！

「それに、これは少女銀子ちゃんの方から誘ってきた事だよ!? ねえ少女銀子ちゃん？」
このままではベランダと言う名の署に連行されて寒空の下で放置されてしまう。

俺はどうにかこの冤罪を逃れようと、唯一味方になってくれそうな少女に縋った。

「うん。やいちといっしょにお風呂にはいるの」

すると彼女はこくりと頷いて答える。

ああ、やつぱりこの子は俺の天使やで……。

「ほらほら二人共、幼女が、幼女がこう言ってるんだよ？ 他ならない幼女がさあ！」

「幼女幼女言うな。……お風呂なら私が一緒に入ってあげるから、それでいいでしょ？」

俺の代わりに、という意味合いで、JK銀子ちゃんが幼女の自分に向かってそう言う。

「やだ。やいちとお風呂はいる」

しかし幼女銀子ちゃんも折れない。

どんな心境の変化かは分からないけど、とにかくこの子は俺と一緒に風呂に入りた
いようだ。

「ちよつと、わがまま言わないの」

「やだ。やいちと一緒にいるの」

「駄目」

「やだ」

「あのねえ」

「やーだ、はいるの」

高校生の自分から睨まれても一切動じず、幼女銀子ちゃんは「むー」とほっぺを膨ら
ませる。

お、俺と一緒に風呂に入りたくてプンスカしちゃうとか、可愛すぎんだろこの幼女

……!

そして俺も目が覚めた。こんな天使のような子に縋ってはいけない、矢面に立たせてはいけない。むしろこの子の願いは俺が守らなければ。

「JK銀子ちゃん、JC銀子ちゃんもだけど、二人共変な事を気にし過ぎだって。幼女銀子ちゃんはこの通り幼女、まだ4歳の幼女なんだよ？　男親と一緒に風呂に入るのなんか普通の事だって」

「あんたがいつ幼女の私の父親になったのよ」

「い、いやいや、それはものの例えというか……親じゃなくてもこの子にとって、俺と一緒に風呂に入るの普通の事なんだよ。だって俺達、子供の頃は毎日一緒に風呂入ってたじゃん」

「っ、それは、そうだけど……」

俺の発言は一定のダメージを与えたようで、JK銀子ちゃんが言い淀む。

共に清滝師匠の内弟子である俺と銀子ちゃんの関係性はとても深い。俺は6歳、銀子ちゃんは4歳の頃から同じ家の同じ部屋で暮らしてきた訳で、姉弟のような関係と言ってもいい。

そして姉弟である以上当然なのだが、子供の頃は一緒に風呂に入っていた。

だってそれが子供というものだ、子供にとっては一緒にお風呂に入るのなんて当たり

前の事だ。

正確な時期とかはもう覚えてないけど、桂香さんとお風呂に入るのは早々に辞退した俺も銀子ちゃんとは長らく一緒に入浴していたと思う。

そしてここに居る幼女銀子ちゃんとは、まさにそんな子供の頃の銀子ちゃんそのものだ。

だからこの子にとっては九頭竜八一と一緒に風呂に入るのは当たり前前で、変に気にしたりするような事ではないのだろう。

というべきか、そもそもこの子はまだ男の人と一緒に風呂に入る事の意味すら分かっていないに違いない。なんたって4歳の幼女だしね。

「ねー幼女銀子ちゃん。俺と一緒に風呂に入るのなんて普通の事だよねー?」

「うん。じゃーけーでもヤじゃないけど、やっぱやいちじゃないとへんなかんじなの」

「ほーらこう言ってる。いいかい銀子ちゃん、これは自分自身の言葉なのだよ? 君だって4歳の頃は俺と一緒に風呂に入らないと変な感じがする時期があったはずなんだ」

俺がそう言うと、JK銀子ちゃんは「……そんな事は、無いと思うけど……」と弱々しく呟く。

とはいえ幼い自分自身の言葉を否定する事は出来ないのか、その顔には戸惑いの色が

見える。

よしだいぶ弱ってきたぞ、後もうひと押しだ。

「銀子ちゃん、幼女の頃の自分の言葉を無下にするのは駄目だと思うよ？ 自分だって

昔はそうだったのに、それを幼女銀子ちゃんから取り上げちゃうなんて酷くない？」

「……でも、私は4歳だけどあんたは6歳じゃなくて18歳じゃない。幼女の方は気に

しなくてもあんたが変な気を起こしたらどうするのよ」

「ちよ、ちよつとちよつと、さすがにそこは信用してよ……いくら何でも4歳児相手に変な気なんて起こさないってば……」

この子に対して穢れた想いを抱いたとしたら、それはもうロリコン以上のおぞましい何かだ。

当然この俺はそんなおぞましい存在ではない。いや別にロリコンでも無いんだけどね？

というかJK銀子ちゃんや、君は俺の恋人なのだしもうちよつと彼氏の事を信用してくれても良いのでは……などと考えていると、ムツとした顔の幼女が俺のズボンをくいくいと引つ張り出す。

「わたしはやいちと一緒ににおふろにはいるの。じえーけーもじえーしーも手をはなして」

「ほらほら、幼女銀子ちゃんもむくれてきちちゃってるし、この子の為にもお風呂に入らせてよ」

「……どうする？」

「……仕方無いわね」

J Cの自分と目を見合わせた後、J K銀子ちゃんは渋々俺の手を離してくれた。

ふう、ようやく無罪放免だ。俺を含めて、やはり誰しもが幼女には弱いという事なのだろう。

J K銀子ちゃんはまだ少し逡巡していたようだが、やがて俺の目を真っ直ぐ見つめて言った。

「八一、一応信じてるから」

「え、一応なの？ そこはガツツリ信じてくれていい所なんじゃないっすかね？」

「……あの幼女が私じゃなかったらガツツリ信じてあげてもいいんだけど……」

銀子ちゃんじゃなかったら……か。

ふむ、それは確かに一理あるかもしれない。幼女銀子ちゃんとはただの幼女ではない、空銀子というただでさえ可愛い存在が可愛い幼女になった、まさしく奇跡的に可愛い幼女だ。

特に俺にとっては大切な恋人が幼女になった姿なわけで……そういった点から不安

視しちゃうのかもしれないけれど、それでも幼女は幼女、どんなに可愛くてもこの子は幼女という存在だ。

幼女に対する「可愛い」という気持ち、それは言わば父性愛のようなもの。高校生の銀子ちゃんに対する「可愛い」という気持ちとは明確に別物だ。

相手が如何な銀子ちゃんであっても、幼女となればやましい気持ちを抱く事は無い。身も蓋の無い言い方をしちゃうと……要は……あれだ。幼女相手なら俺のドラゴンが目覚める事は無い。

「心配しなくても変な事になんかならないよ、子供とお風呂に入るのなんて普通の事なんだしさ。……さ、それじゃ幼女銀子ちゃん、お風呂入ろつか」

そう言いながら幼女銀子ちゃんの脇の下に手を回してひよいつと抱え上げる。

そうして俺の腕の中にすっぽりと収まった幼女は「ん」と小さく頷く。あらかわいい。当時は俺の方も子供だったから、銀子ちゃんを抱っこしたりとかは出来なかったからなあ。

今になってこの子と接すると当時は見えなかった新たな発見がある。意外とこうして抱っこには素直に応じる所とか、今度他の銀子ちゃん達にも試してみようかな……。……なんて事を考えていると。

「……八一」

「ん？」

俺の名前を呼んだのはJS銀子ちゃんだった。

「……………」

「どしたの？」

「……………」

長らくの沈黙の後。

「ここまで一度も会話に混ざらなかつた小学生の彼女は、意を決したような表情で口を開いた。

「……………私も。私も一緒に風呂に入る」

それを聞いた瞬間に俺はまた死んだ。九頭竜八一は二度死ぬ。

そして再びこの世に転生を果たした。どうやら俺は余程現世に未練があるらしい。具体的に言うときとすぐ間近に迫つた彼女達との混浴とか。

「な、な、じゃえ、JS銀子ちゃん!?! どどど、どうしてっ、どうしてそんな事を…………?!」

とはいえさすがにこれには「そうだね! お風呂入ろつか!」なんて返す事は出来なかつた。

だってこれはあまりにも破壊力が強すぎる。蘇生したばかりの俺でも動揺が隠せない。

同じように衝撃を受けているのか、JCとJKの銀子ちゃん達も「あんた何言ってるのよ!」とか「正気なの!?!」とか口々に叫んでいる。

「だって、さつき八一が言ったじゃない。子供と一緒に風呂に入るのは普通の事なんですよ?」

「そ、そりやそう言ったけどさ……」

「だったらいいじゃない。私だってまだ小学生で子供なんだし、普通の事ですよ?」

「それは……いやけど、そもそもJS銀子ちゃん、俺と一緒に風呂なんて恥ずかしくないの?」

確かに小学生は子供だ。だから例えば低学年の頃なら一緒にお風呂に入る事もあるだろう。

けれどもJS銀子ちゃんは小学4年生だ。小学4年生だったら男女の性別の違いとその意味というものを理解してくる頃合いはずだ。

いくら相手が俺だとはいえ、一緒にお風呂となるとさすがに抵抗があると思うのだが

「……………べつに。恥ずかちきゆにやいっ」

恥ずかしがってるー!!

絶対に恥ずかしがってるよこの子! 真つ赤な顔でそっぽ向いちやってるし! 喋り方だつて銀子ちゃんがマジ照れしてる時特有の赤ちゃんみたいな感じになつてるし!

「……J S 銀子ちゃん、恥ずかしいんだよね?」

「恥ぢゆかしくにやい! 幼女が入るならわたちも一緒にお風呂に入るの!」

キレ気味に言い返すJ S 銀子ちゃん。

ああこの子つてば、また幼女の自分に対して対抗心を燃やしちやってるよ……。

そんな所で張り合つても意味なんて無いのに、当の幼女銀子ちゃんもきよとんとしちやつてる。

「それに私だつて、私だつて八一と一緒に風呂ぐらい全然慣れてるし!? ちよつと前までは一緒にお風呂入つてたし!」

「え? ちよつと前まで? 一緒に……お風呂入つてたつけ?」

「……うん」

J S 銀子ちゃんがすつと頷く……けど、その目は俺の方を向いていない。露骨に逸している。

うーん? この子が言う「ちよつと前」つて……一緒に風呂入つてたかなあ? 当

時の記憶が曖昧で中々思い出せないな……。

「銀子ちゃんが小4だと俺が小6の頃だから……ねえJK銀子ちゃん、この頃ってまだ俺達一緒にお風呂入ってましたっけ？」

「入ってないわよ！ ……入ってないわよね？」

「うん、小4の頃はもう多分……」

JK銀子ちゃんは食って掛かるように否定して、更にJC銀子ちゃんも同意を重ねる。

でもそうだよな、さすがに小6の頃はもう一緒に風呂に入るのは止めていたような気がする。ていうか小6だと、正直何らやましい思いを抱かずお風呂に入るのもう無理だと思っし……。

「……間違えた。一緒にお風呂に入ってたのは1年前頃だったかも」

1年前？

「それだと銀子ちゃんが小3で俺が小5の頃……この頃はまだ……一緒に入ってたんだっけ？」

「……入ってない……はず？」

「入って……ない、ような気がするけど……」

俺もJKもJCもみんな当時の記憶があやふやなのだろう、全員が揃って眉根を寄せ

る。

「……2年前だったかも」

2年前？

となると銀子ちゃんが小2で俺が小4の頃……。

「……一緒に風呂入ってたっけ？」

「……入ってた……かな？」

「……入ってた……可能性はあるわね」

真相は闇の中。もはや思い出せない……が。

銀子ちゃんが小学校低学年の話となると、俺達と一緒に入浴していた可能性は否定出来ない。

「とにかくっ！ ちょっと前までは私も八ーとお風呂に入ってたの！ だから問題無いのー！」

「けれど……それでも今はもう一緒に入っていないんだよね？ それにさつきも言ったけどさ、俺と一緒に風呂に入るのほんとはメチャクチャ恥ずかしいんでしょ？」

「だからはぢゆかちくにやいって！」

J S 銀子ちゃんは相変わらずの口調で答える。

そして、俺の事を強い目付きでキッと睨んで。

「それともなに!? 八一は幼女はセーフでも小学生の私とは一緒に入れないとも言
の!? どっちも子供なのに!」

「む……………」

鋭い一手を打たれて俺は思わず口籠った。

22, 更に風呂の話

「それともなに!? 八一は幼女はセーフでも小学生の私とは一緒に入れないとも言
の!?! どっちも子供なのに!」

J S 銀子ちゃんのそんな言葉を前に、俺は次なる言葉が思い浮かばずにはばし口籠
る。

幼女も小学生もどっちも子供。それは確かに……確かにその通りだと言う他無い。

女の子とは言っても相手は小学生。所詮は小学4年生の9歳、何処からどう見ても子
供だ。

……そう、J S 銀子ちゃんは小学4年生の9歳だ。

そんな小さな子供なんて、18歳になった俺が変に気にするような相手ではないはず
だ。

こうして本人が俺と一緒に風呂に入りたいと言ってるんだ、なら一緒に入ればいい
じゃないか。別ににも問題なんて無い。

……のか!? 本当にそう言い切れるのか!?

だって小学4年生だぞ!?! これってもう十分に危ない年齢じゃないか!?

いやでも待てよ……やっぱり問題無いか?

ふと思いつ出したんだけど、小学4年生と言えば俺と出会った時のあいの年齢（厳密に言うとな進級間近の3年生だったけど）だ。

当時のあいは俺に裸を見られても気にしていなかったし、勿論それを見ちゃった俺だって何も気にしていなかったし……。

そうだ、そう考えれば小4と一緒に風呂に入る事なんて大した問題では無いのかもしれない。

むしろ変に意識し過ぎる方が危険というか、その方が却ってロリコン疑惑が高まるよ
うな。

そして俺は……俺はロリコンじゃないッ!

「……分かったよ」

「え?」

「JS銀子ちゃん。なら一緒に風呂に入ろっか」

だから俺は頷いた。ああ、頷いてやったとも。

当然そこには反響もある。JKとJCの銀子ちゃん二人は即座にギョツとした顔に

なった。

「な、なな、八一、あんたマジで言ってるの!？」

「八一、そ、そんなの、そんな事したら本当に本気で逮捕されるわよ!？」

「二人共、言いたい事はよく分かるよ。けれども信じてくれ、俺はロリコンじゃない。それを今日ここで証明しようと思うんだ」

J S 銀子ちゃんと一緒にお風呂に入って、俺のドラゴンが目覚めなかったらセーフ。

もし目覚めてしまったらアウトだ。その時は大阪府警のお世話になる事だろう。

「そんな……そんなの危険よ! そんな危険な賭けに挑む必要なんてないわ!」

「確かにそうかもね。……でもJK銀子ちゃん、俺はやっぱり棋士なんだ。心が勝負師なんだよ」

「八一……」

たとえロリコンの汚名を確実なものにしてしまう危険性を孕んでいようと、それでも小学生の銀子ちゃんと一緒にお風呂に入りたい。そう思ってしまう俺を一体誰が責められようか。

そんな俺の揺るぎない覚悟を察したのだろう。JK銀子ちゃんもこれまでとは違って不安そうな、あるいは怯えるような表情になった。

「本当に……? ねえ、本当に信じていいの?」

「銀子ちゃん……」

この子の不安は痛い程に分かる。とうか正直に言う俺だって怖い。

仮にもし俺のロリコン疑惑が真実になったとしたら……それはもう大変な事だ。

現在俺には小学生五年生の弟子が二人も居て、更にその片方とは内弟子として一緒に暮らしている訳で、その師匠がマジロリコンともなれば将棋界を揺るがす大事件になってしまうだろう。

……けっど！ それでも大丈夫なはずだ！ 自分を信じろ九頭竜八一！！

お前は絶対にロリコンじゃない。だってこれまであいや天衣、JS研のみんなと触れ合ってきたけど何も問題なんて起きなかったじゃないか。

そうだ、周囲にロリが多くいるからそう見えちゃうだけで、俺の属性は至ってノーマルなんだ。

なんて言ったって俺の恋人は空銀子。俺が好きなのは後にも先にも銀子ちゃんただ一人で——

「ね、ねえやいち、は、早く……早くしてよお。早く……一緒に、お、おふりお……」

「……銀子、ちゃん、ただ一人、なの、に……ぐぐ、ぐ、ぐぐ……」

「……やいちっ？」

駄目だ、可愛いが過ぎる……。顔中もう真っ赤なのに、恥ずかしい気持ちをひた隠し

て俺を急かしてくるJS銀子ちゃんを見ると……! !

心底俺は空銀子という生き物に弱いのだなど実感してしまう。気の強そうな眉毛に長い睫毛、大きな灰色の瞳に美しい銀色の髪……。

俺が見慣れていたはずの、けれども今は慣れない小学生の銀子ちゃんの顔を見ると、先程までの決意がガラガラと音を立てて崩れ始めてしまう。

——どうする? どうすればいい! ?

相手はそんなじよそこの小学4年生じゃない、空銀子(小学4年生の姿)なんだ。

そんなロリロリな銀子ちゃんを前にしても、俺の自制心ならば發揮する事は出来る。彼女に手を出す事は無いというのは120%断言出来る。

けれども俺の意思の及ばぬ部分、俺のドラゴンが目覚めぬか否か。

これは正直言つて100%の断言は出来ない。だって意思が及ばぬ部分だしさあ!

とはいえ一度「入ろうか」と言っておいて「やつぱ無理」というのもなんか情けない……。

……というか、むしろその方がロリコン疑惑を高めてしまいそうな気がするし……。

「や、やいち、早くう……! !」

「はやくしろ、ばかやいち」

「ぐうう……! ! どうすれば……! !」

急かしてくる小学生と幼女の言葉に俺は追い詰められていく。

そしてさも対局の山場に入ったかのように、必死に思考を巡らせていると――

「はっ！」

途端に思い付いた。

俺のロリコン疑惑を闇に封じて、それでいて更に素晴らしい事となる必殺の鬼手を。

「JK……いや、銀子ちゃん」

「なに？」

「銀子ちゃんも一緒にお風呂入らない？」

「ひゃっ!？」

このタイミングでまさか自分に飛び火するとは思っていなかったのだろう。JK銀子ちゃんが驚きのあまりしやつくりになったような声で鳴いた。

「なな、なんで、なんで私があんたと一緒に風呂入んないのよー！」

「だってその方が安心出来るでしょ？俺が幼女や小学生の空銀子と一緒に入浴して変な気を起こさないか、それが不安ならいつそ銀子ちゃんも一緒にお風呂に入っちゃえばいいじゃん」

竜王が走るなら銀の合駒で防げばいい。そんな理論を俺は至極真面目な表情で語る。

だってこの方法カンペキじゃない？この方法なら万が一の事があっても幼女や小

学生の身の安全は守られるし、高校生の銀子ちゃんだって不安な思いをしないで済む。そしてもし仮に俺のドラゴンが目覚めてしまったとしても「これはJK銀子ちゃんに反応してしまったんだよ」という言い訳が立つ。ほら、みんなにとってメリツトがある素晴らしい一手でしょ？

「そうだよ銀子ちゃん、絶対にそれが良いって。君も一緒にお風呂に入ろうよ」「でもっ、だって、私、お風呂なんて……！」

「別に恥ずかしがる事ないでしょ。だって俺達は……恋人同士なんだからっ！」
「んにゅ……！」

そして——そう、この手を成立させる一番大切な要素、俺達は恋人同士であるという事。

恋人だったら一緒にお風呂に入る事だってあるだろう。互いに想いあっているのなら混浴だってイチヤツキの一環になるはずだ。

……という建前が俺にはある。これはJK銀子ちゃん相手に強力な武器となるはずだ。

この状況を逃す手は無い。ここでもなんとしてもJK銀子ちゃんとの混浴を実現させてみせる！

銀子ちゃんと、銀子ちゃんと一緒にお風呂っ！ 幼女や小学生も良いけど、やっぱり

彼女と一緒にお風呂に入ってみたいよね！ ね！

「ねっ！」

「ね！ じゃなくて！ 八一、あんた本気で言ってるの!？」

勿論俺は本気だ。

本気じゃないのにこんなトチ狂った事を銀子ちゃんに対して言えるものか。

「だって銀子ちゃん、俺達は……なんだっけ？」

「え？」

「ほら、俺達の関係ってなんだっけ？」

「そ、それは、こ、こ——」

「……」

「……こ、こいびと……」

「そう！ 恋人なんだよ！ だったら別に良いじゃんか！ 幼女より小学生より、高校

生の銀子ちゃんと一緒に入る事こそが一番自然な形なんだよ！ それが恋人つてもん

でしょー！」

「そ、そう……なの？」

「そうだよ！」

俺は力強く頷いて断言する。

まあ実情は知らないけど……っーか16と18のカップルなら普通一緒に風呂入ったりはしないと思うけど……それでもここは強気で押すべき局面だ。

恋愛話に疎い銀子ちゃんは世のカップルの普通なんて知らないはず。なんのかんの言ってチョロい性格のこの子だったら絶対に押し切れるはずだ。押せっ……押せっ……！

「幼女や小学生の自分だっで一緒なんだし、だったら高校生が躊躇う事なんてないはずだよな?」

「う、ううう……! や、やいち……ほんとに……ほんとに本気、なの?」

「うん。俺は君と一緒に風呂に入りたい」

「……う、に、にゆ……にゆにいにゆ……!」

余程悩んでいるのか、銀子ちゃんは真つ赤な顔で唸りながら両目をぎゅつと瞑る。

だがそれでも先の言葉が、彼氏から突き付けられた一緒にお風呂入りたいです宣言が効いたのか、

「……分かったわ。入ってやろうじゃないの」

やがてそう言い切った。

大分自棄っぱちになっているようにも見えるが、とにかくそう言わせた以上は俺の勝ちだ。

ていうかマジかマジか、マジで銀子ちゃんと一緒に風呂なんて……!

幼女銀子ちゃんの流れからこんな展開になるとはまるで想像していなかった。なんかここに来て一気に緊張がマツハ、心臓がバクバク鳴ってる。

だってだって、JK銀子ちゃんと一緒にお風呂だなんて初めての事だし……。

……あ、いや……シャワーはあつたかな? うん、シャワーはあつたような気がする。けど湯船に浸かった経験はまだないし、たとえば一度経験していたとしてもドキドキしちゃう出来事である事に違いはない。

ただまあそうは言ってもね。俺と銀子ちゃんはもう大人の関係な訳だからね。

互いの裸だって何度も見ているし、初体験に比べたら一緒にお風呂ぐらい大した事なはずだ。

そう、風呂ぐらい大した事ないはず……よしっ!

「……さてと。それじゃあ銀子ちゃん達、お風呂に行こうか」
「ん」

いつも通りの顔で頷く幼女銀子ちゃん。

「……うい」

かなり恥ずかしそうな顔で頷くJS銀子ちゃん。

「……良いわよ。どこからでも掛かってきなさい」

そしてJK銀子ちゃん、この子はどうして喧嘩腰になつているのだろうか。

とにかくそんな三人を連れて、いざお風呂場へと向かおうとした……その時。

「……あ」

「……………」

部屋の隅っこ、むすつとした仏頂面で俺を睨むJC銀子ちゃんが目に入った。

「……………なに？」

「あ、いや、なにして事は無いんだけど……」

考えてみるとこの状況、俺と幼女と小学生と高校生と一緒に風呂に入るとなる……。

それは何と言うか……中学生のこの子だけが仲間外れになっちゃうという事なので
は……………。

「……………ええつと」

「……………どーせならJC銀子ちゃんも一緒にお風呂入らない？ ……とでも言いたいの？」

「い、いやいやっ！ そんな事は無いっすよ！」

俺は慌てて首を振る。

というか鋭いな。確かにふとそんな事を考えてしまったのは事実だ。事実……なん

だけど。

けれどもJ C 銀子ちゃんのお風呂は駄目だ。この子と一緒にお風呂に入ってはいけない。

この子の前ではさすがに俺も反応しない自信が持てない。……いや、そういう言い方で誤魔化すのはよそう、J C 銀子ちゃん相手だと俺のドラゴンは間違い無く反応してしまおうだろう。

だつてJ C 銀子ちゃんは……ねえ？ 見た目がほら、もうなんというか……ねえ？

中学生とは言ってもJ C 銀子ちゃんは中学3年の14歳。その外見は高校1年16歳であるJ K 銀子ちゃんと殆ど違いが無い訳で。

これは俺のドラゴンが反応するのも致し方無いと言うものだ。そもそも銀子ちゃんの身体なんてJ C でもJ K でも大差ないようなもんだし……。

「ぶちころすわよ」

「すいません」

すると瞬時に俺の思考を読んだJ K 銀子ちゃんからのお叱りの言葉が飛んできた。

さすがに俺の恋人は鋭い。というかもうエスパーに片足突っ込んでるような気がする。

とにかくそんな訳で中学生との風呂は厳しい。

それにJ C 銀子ちゃんの方だって、俺と一緒に風呂なんてとても耐えられないだろう。

この子はもう子供だからで済ませられる年齢では無いし、さりとて恋人でも無いのだから。

「じゃ、じゃあ俺達は風呂入ってくるから……」

「……勝手にどうぞ」

それだけ言つて、J C 銀子ちゃんは手に取ったタブレット端末に視線を移す。

……うーん、この子一人だけをのけ者にするみたいでちよつと気がかりなんだけど……。

でもなあ。誘ったら誘つたで何おかしな事言つてんだつて話にもなるしなあ。

本人がどうぞと言っているんだし、別に気にするような事でもないのかな……。

「やーいーち」

「あ、うん。行こっか」

腕の中に居る幼女の早く風呂入るぞオーラがキツくなってきた。

これ以上この子を待たせるのは良くないな。さすがにそろそろ風呂に向かおう。

23. JSと風呂の話

……なんか、大変なことになっちゃった。

な、なんか大変なことになっちゃったっ！ 大変なことになっちゃったよお！

そんな私の心中での悲鳴などいざ知らず、他の皆はすたすたと廊下を歩いていく。

幼女を抱えた八一、それに続いて高校生の私、それに続いて……小学生の私が。

——ど、どど、どうしようどうしようっ！

まだ、まだ何も始まっていないのにつ、それなのに心臓がバクバクしちやつてるよお！
ああもう緊張と恥ずかしさで頭がおかしくなりそうっ！

ど、どうしよう、私どうすればいい!? どうして、どうしてこんな事になっちゃったの!?

……いや、うん。……原因は分かっているの。

悪いのは私だ。だって八一と一緒に風呂に入りたいなんて言ったのは私自身なんだから。

だからこれは私の自業自得、自分で自分の首を絞めたようなものだ。

……でも、でも、……だってさあ……。

だってなんか自分でも知らぬ間についていうか、口を突いたような勢いで言っちゃたんだもんっ！

ていうか八一が悪い、八一が悪いんだもんっ！

八一が幼女の私ばかり構うから、だからなんか……なんか私だってっ！ みたいな気分になっちゃったんだもん！

……だって、だって今だってほら……八一は幼女の私を抱っこしてるしー。

幼女は別に赤ちゃんじゃないんだから普通に歩けるのに、なのに抱っこしてるしー。

「いしよつと……」

そんな八一は幼女を抱えた不格好な体勢のままドアを開いて、洗面所へと足を踏み入れる。

そしてJK銀子と私も続いて、我が家（仮）の洗面所に4人も的人数が揃った。

「……狭いっすね」

「……そうね、狭いわね」

……うん、それには私も同歩。はつきり言ってこの家の洗面所は狭い。

ここは一人で住む用のワンルームマンションって話だし、洗面所を複数人で利用する事なんて想定していないだろう、この狭さに4人というのは明らかに許容量を超えているので、私は少し下がって廊下に出る。

……けど、けど、そんな狭い所でこれから私達がする事といえば……は、はわわわわ……！

「ええっと、それじゃあ……」

置き場に困ったのか、八一は洗面台の上に座らせる形で幼女を下ろして。

「……ど、どうします……かね？」

見るからに困惑した表情でそう言った。

「……………」

そして私もJKの私も共に言い淀む。

さて、洗面所に来たけどここからどうしよう……というのが全員の中の頭にある問題だろう。

目的は入浴だ。けれどもお風呂に入る為には……当然、服を、脱がなくちゃならない訳で。

服を脱ぐという事は……上も下も、パンツも、全部脱いで裸にならなくちゃいけない訳で？

裸になるという事は……そしたら当然、八一には、は、は、裸が見られちゃうという訳で!?

は、は、はだか……はだかに、なるのお!! こ、ここで!! やいちの前で!!

う、ううう!! そんなのむりだよ絶対むりむり死んじやう死んじやうああもうな
んでわたし八一とお風呂入りたいなんて言っちゃったの!?

……はうう、ほんとに無理だよお。

恥ずかし過ぎるよお、今からでもりピングに逃げ出したい……んだけど。

「やいち、お風呂入らないの?」

「勿論入るよ。ただ……」

「……そうね、この狭さだとね」

でも、そんな感じで逃げ腰になっちゃってるのは小学生の私だけで。

幼女の私はいつもと変わらない様子だし、高校生の私だって平然とした顔をしてい
る。ついでに言うとお八一だっていつも通りだ。

だったら……だったら私も逃げられない。私だって幼女やJKと同じ、同じ空銀子な
んだから。ここで私だけ引き下がるなんて情けないもん。

「とりあえず……先に銀子ちゃん達がお風呂に入っちゃいます? その方が——」

「それって、私達が着替えるシーンを見たいからってこと?」

「ち、違う違う！ そんな意図は無いって！」

「……………どーだか」

顔の前でぶんぶんと手を振る八一、対して冷たい目付きを向けるJKの私。

ふ、服を脱ぐシーンを八一に見られるなんて……………そ、そんなのむり、むりむり、まじむり。

「じゃあ……………まず俺が風呂に入っちゃうけど、それでいい？」

「いいけど。ていうか狭いんだからとっとと入っちゃってよね」

という事で、空銀子達の脱衣シーンを目撃されないう八一が先陣を切る事になった。

けどそうなる……………いざ私が服を脱いでお風呂に入ろうとしたらそこに八一が待ち構えているという事になる訳で……………ううむ、それだつて結構恥ずかしい感じなのでは……………。

……………まあ、そもそも一緒にお風呂に入る時点で恥ずかしくない方法なんてないのでは？ と言われたら返す言葉も無いんだけど……………。

……………ん？ ていうか……………八一が先に？

となると……………八一の着替えシーン？ あ、それはちよつと……………なんか興味あるような……………。

「……(じい)」

思わず八一をガン見してしまう私。

「……(じい)」

「……(じつつ)」

「……つつ、」

そしてどうやら同じ考えなのか、幼女の私の目も八一の方に向いていて。

二人の銀子の視線が気になったのだろう、八一は服に手を掛けたままの姿で硬直する。

「……えーと」

きつと八一も脱衣シーンを見られるのは恥ずかしいんだろう、暫し躊躇していたのだが、

「八一、早くして」

「……あの、一旦廊下に出てくれると凄く有り難いのですが……」

「いいから早くしろ」

「はい」

しかしJK銀子の有無を言わせない庄の前に簡単に屈して……そして。

「——ふっ！」

すると八一はバツと服を脱いで。

「はっ！」

サツと腰にタオルを巻いて。

「それじゃお先！」

瞬く間に浴室の中に飛び込んで、そしてボタンとドアが閉められた。

「は、はい……」

すごい。見事だと言う他ない早脱衣の技だった。

その早さにびつくりしてしまつて八一の身体をじっくりと観察する暇さえなかった。

「あのバカ、なにを恥ずかしがつてんだか」

「……………」

「そんなに恥ずかしいんだつたら一緒にお風呂入るなんて言わなきやいいのに」

「……………」

J K 銀子の言葉に私は思わず唸つてしまう。

それは八一に対して言ったんだろうけど……だけど私の胸にも深く刺さつてしまう

言葉だ。

……でもだつてえ、だつて八一が、やいちが……やいちと一緒に良かったんだもん

……。

「さてと。幼女、服は自分で脱げるわよね？」

「ん」

こくりと頷いて、洗面台の上に立った幼女銀子がよちよちと服を脱ぎ始める。

「ふう……」

そして、高校生の私も服を脱ぎ始める。

八一みたいに早脱衣などするはずも無く、衣服を傷めないよう丁寧にゆつくりと。

「……………」

私はその様子を自然と目で追ってしまふ。

一枚一枚脱いでいく度、私と同じ真っ白な地肌が露わになっていった。

「……………」

JKの私、高校生になった私の身体。

足がすらくとしていて、お尻はあんまり大きくなくて、ウエストも細くて、胸も……
そこそこで。

全体的にスリムな感じで、体中が透き通るように白くて……本当にまっしろで。

それはなんだか——

「……………」

「——えっ、あ、な、なんでもない！」

J K 銀子から訝し気な目を向けられて、私は慌てて顔を逸らした。

ていうか、いま、わたし……J K 銀子の事を……きれいだな、なんて思っちゃった。な、なに考えてるの全く。成長した自分自身をきれいだと思うなんてナルシストもいところだ。

「……ふうん？　ま、いいけど」

動転する私の事など然程興味なかったのか、すぐにJ K 銀子は表情を戻して。

そして残っていた下着に手を掛けて、ブラジャーとパンツを脱いで洗濯かごに入れる。

……にしても八一と一緒に入浴だというのに、高校生の私は本当に平然としている。この凶太さというか、肝っ玉の強さみたいなものは正直言って私も見習いたいところだ。

……あるいはそれとも、J K 銀子も心の中では『八一と一緒に風呂なんてむりむりマジ無理恥ずかし過ぎて死んじゃう私死んじゃうってえ！』……とか思っていたりするのかな？

……なんて事を考えていると、裸になったJ K 銀子は同じく裸の幼女の手を取って。

「八一」

『はい？』

「向こう向いてなさい」

——じやなかつたらぶちころすから。

と言外に言い含めるような言葉を告げてからバスルームのドアを開く。

すると少しだけ中が見えた。バスタブに浸かる八一は言い付け通りに顔を横に向けている。

けれどそれは一瞬の事、JKと幼女が中に入ってすぐにドアが閉められた。

そしてシャワーの水音が聞こえてくる。きっと身体を流しているんだろう。

「……す、すごい」

ほんとに、ほんとにお風呂に入っちゃった。

幼女はともかくJKは裸なのに。中には八一が居るのに、ついでに言えば八一も裸なのに……。

せめてタオルで身体を隠すぐらいの慎みはあってもいいじやなかろうか。まさかほんとに恥ずかしくないのかな？　なんかもう度胸がすごい、JK銀子恐るべし……。

「……はっ！」

つて、そんな事に驚いている場合じゃない！

私も、私もお風呂に入らないとっ！　ここで時間を掛けるのは悪手だ、そうしたらより入り辛くなっちゃうに決まってるんだから。

……そうね、お、お風呂、は、入らないと。

入らない……と、と、とおく……うううう……は……入るの！ 私もお風呂入るんだもんっ！

「……は、はいりゆのお……！」

声にならない呻きを漏らしながら、私もしそいそと服を脱いで。

そして、裸になって……、バスルームのドアを、ドアを、ドアををを……！！

「——やいちいっ！」

『な、なに？』

「ぜったいみちや駄目だからね!？」

再三言うけどだったら風呂なんて入らなければ。と私の心の冷静な部分がそんなツツコミを入れてきたけど、もう知ったこっちゃやない。

ここまで来ておいて逃げの一手なんてない。私は覚悟を決めてバスルームのドアを開いた。

「あ、じえーえすきた」

「てかなんで後ろ向いてるの？」

なんでつてそりゃあ、覚悟は決めただけ……でも真正面から入る勇氣は無いって
いうか？

だから……後ろ向きで。しゅんと身体を丸く縮こまらせたまま。

「……う、ううう……！」

でもなんか、なんかこうして後ろを向いていると八一の様子が見れないから……！

はううう、八一の目が、八一の視線が私の背中に刺さってるような気がするよお

……！

「……うう、やいちのばか」

「え、俺何もしてない……」

「うるさいっ！ ばかっ！」

大体ここに八一が居るのがおかしい！ そうだ、お風呂に八一が居るのがおかしいんだっ！

いや一緒に入りたいてって言ったの私だけど！ そりやもう私が言っちゃったんだけどね!?

そんな支離滅裂な思考を頭の中で巡らせながら、シャワーでパパッと身体を流して。

「……ちよつとつめて」

「あ、うん」

八一が横にずれて出来た僅かなスペース、バスタブの中に身体を沈めた。

すると熱々のお湯からじわじわと伝わる心地よい痺れ……を、感じる余裕すらなく。

「……せまい」

「……そうだね。狭いね」

洗面所が狭いならお風呂の中も狭い。だったら当然バスタブの中だって狭い。ていうか狭すぎて、身体が、身体のあちこちがどうやっても当たっちゃうし！

「……むうー、きゆうくつ」

するとその狭さに耐えかねたのか、幼女の私がバスタブを抜け出してイスに腰掛ける。

勿論ながら裸で。見ようと思えばその身体中が隈なく見られちゃうような形で。

……まあ、この子は恥ずかしいとか感じる年頃じゃないから気にする事じゃないと思うけど。

とその時。

「……ん？」

カタン、とそんな微かな物音が洗面所の方から聞こえた……ような気がした。

24. JCと風呂の話

——あ、あいつら、あいつらマジで4人一緒にお風呂入りやがった……！

八一と3人の銀子達が風呂場へと向かった後。

一人リビングに残された私はタブレット端末を片手に持ったまま戦慄する。

え？ え？ なんて？ あいつら正気なの!?

なんで、だって八一と一緒に風呂だよ!?! そんなお風呂、普通入れないわよね!?

いやてか入れたとしても入らないわよね!?! そんなのあり得ないわよね!?!

え、待つて待つて、一度冷静になつて?!

だつてなんで？ なんであの三人は普通にしれつとした顔で風呂場に行けちゃうの

？

これ私の感覚は間違つてないよね？ どつちかつて言うとは異常なのはあつちの方だ

よね？ あいつら絶対頭イカれてるわよね？

……うん。そうだ、そのはずだ。

私は正常、私は至って正常。おかしいのはあいつらのはず、絶対あいつらのはず……」

……だと、思うんだけど。

けれど、そんな正常な思考を有する私はこうしてリビングに一人残されていて。そしてあの異常者4人共は仲良く風呂場に行ってしまった……。

……あ、あわわわ。

今頃、お風呂の中では3人の私と八一が……。

お風呂で、みんなで、は、はだかで、はだかで、はだかではだかで——！

「はだ………かつ」

……やつぱり、みんな裸………なんだよね？

だって………お風呂だもんね？ お風呂っていったら裸で入るものだもんね？

八一と、幼女と、小学生と、高校生の私が、おふろではだか……。

……どうしよう。なんか、なんか無性に風呂場の様子が気になってきちゃった……。

「………そうだ。て、を、洗いに、行こうかな」

そう、手を洗いたいから。なんとなく手を洗いたくなっちゃったからね。

別にバスルームの様子を伺うとかじゃなくて、手を洗う為に洗面所にいくのよ、うん。

誰が聞いている訳でも無いのにそんな言い訳をしながら、私はゆっくりと足を踏み出す。

「そーつと……」

浴室内の異常者共に気付かれないよう、物音立てず静かに洗面所のドアを開いて。

「わっ……」

するとまず目に付いたのはドラム式の洗濯機。その中には四人分の衣服が投げ込まれていた。

八一の服に幼女の服に小学生の服、洗濯かごの中には高校生の私の下着なんかもあつて……。

……うう、なんか生々しい。あいつらここでどうやって、どんな気分で服を脱いだんだろう。

「……くっ、異常者共め……」

そしてすぐ隣に目を向けると、そこには照明の灯ったバスルームのドアが。

そこから聞こえてくる物音。曇りガラス越しに聞こえる異常者共の声。

『……八一。どの私に対してもそうだけど、いやらしい目で見たらここから即座に叩き出すから』

『み、見ないですよ、そんな……俺はただ、ただ普通に風呂に入るだけだつて』
『……どーだか』

聞こえてきたのはそんな会話だった。

今のはJK銀子の声だ。どうやら高校生の私は八一の下心に疑いの目を向けているらしい。

うん、確かにそれはあやしいわね。その点を訝しむ気持ちに關しては私も大いに同感だ。

……同感なんだけど。でも、いやらしい目で見られたくないなら、そもそも一緒に風呂なんて入らなければ良いだけの話なんじゃない？

なんで自分からOKしておいて、更には風呂の中に入ってからそういう事を言うの？
やっぱり高校生の私って馬鹿なのかな？

ていうかこのタイミングで八一をお風呂から叩き出すのは止めて。それだとここに居る私と鉢合わせになつちやうじゃないの。

『やいち。さつきから気になってただけど、なんでタオルまいてるの？』

『え？ いや、あのね、これは……その、このタオルはお互いにとって必要なものなんだよ』

『おたがい？』

『そうだよ、お互いの為にね』

……幼女との会話から察するに、どうやら八一は腰にタオルを巻いているらしい。

全く、何がお互いの為になんだか。……けどそっか、八一はちゃんと隠してるんだ

……なんかちよつとだけ安心したような……。

——つて違う！　なんで私が、私が何を安心しなきゃいけないのよっ！

『はう……あうう……』

『……あんたもタオルで隠せば良いのに』

『な、なにをかくしゆの!?　だからわたちは恥ずかちきゆにやいっていつてりゆでしょ！』

……今の舌足らずな喋り方は小学生の私か。

今の会話から察するにどうやらJ S 銀子は身体を隠すタオル無し、完全なるノーガード戦法で八一との混浴に臨んでいるようだ。

……ん。まあ……どうなんだろ。女の子とはいってもあの子はまだ小学生だしね。

本人の気持ちはともかくとして、傍目からは小4の9歳なら隠す必要もないのかな……。

『……それに、JKの私だってタオルなんか巻いてないじゃない』

——な、なんですって!?　高校生の私もノーガード戦法を!?

高校生にもなってノーガードって、それちよつと気合入りすぎてない!? 大丈夫なの

ていうか今の会話では出なかったけど、まず間違いなく幼女の私もノーガードよね?
となると今この浴室内で、八一だけは腰から下をタオルで隠していて、他三人の空銀子は全員ノーガードで裸体を晒しているって事?

……え、なんかもう率直に言つて怖いんだけど。

とても信じたくないっていうか、この浴室内にいるあいつらを同じ自分だと思いたくない。

いつから空銀子という生物は羞恥心を手放してしまったのか。いつからそんなに攻め攻めな姿勢を取るようになったのか。

『……私はタオルなんて要らないの。それが証拠にあんたみたいに恥ずかしがってないでしょ』

『む……ほんとに恥ずかしくないの?』

『ええ、勿論。高校生の私は小学生のあんたとはぐり抜けてきた修羅場の数が違うのよ』

……なにやら高校生の私が小学生に対して偉そうな事を言っているのが聞こえた。

ぐぐり抜けてきた修羅場だなんて、なにをそんな大げさな事を。大体JK銀子の年齢

なんてこの私と1年半程度しか違わないじゃないの。

……ん？ いや、ちよつと待って？

こ、この場合の、JK銀子が言うくぐり抜けてきた修羅場っていうのは……。

それって、それってまさか、え、え、えつちな事をした経験があるからって事なんじゃ……！

だって、だって高校生の私はもう『大人』な訳だし……大人、おとな……うう。

『そうそう。俺とJK銀子ちゃんはもう恋人同士だからね。恋人同士だったら風呂ぐら

い——』

『こつちみんな』

『はい』

話し掛けた八一の言葉を遮って、JK銀子がドスの利いた声を突き付ける。

……なんだ。やつば見られたくないんじゃない。修羅場がどうか言ってたけど、なんのかんの言ってちゃんと恥ずかしがってんじゃない。

けど、自ら一緒にお風呂に入っておいて、それで自分の身体は隠さなくて、なのに自分の裸体は見せたくないって、なんか色々矛盾してない？

さつきも言っただけどそれなら一緒に風呂なんて入らなければいいじゃないの。重ね重ね思うんだけど高校生の私って絶対に馬鹿になってるよね？

……いいえ。高校生の私だけじゃないわね。

今浴室の中に居る空銀子達、幼女も小学生もみんなおかしい。みんな異常者だ。

そんな恥ずかしい思いをしてまで八一と一緒に風呂に入る必要なんてないのに、私を除く空銀子達はみんな馬鹿ばかりだ。

……と、私はそう思うんだけど……。

……けれど。

『やいち。かみ洗って』

『うん、いいよ。よいしょつと……それじゃあ流すから目をちゃんと閉じてるんだよ』

『ん』

『……八一。幼女が終わったら私の髪も洗って』

『勿論いいよ。JS銀子ちゃんの髪は長いから一人で洗うのは大変そうだしね』

『……うん』

『あそうだ。ならいつそJK銀子ちゃんも——』

『こつちみんな』

『はい。……けど、どうする?』

『……好きにしたら?』

それでも、浴室の中からは相変わらずあいつらの声が聞こえてきて。

『やいち。からだ洗って』

『か!? からだっ、も、ですか?』

『うん。洗って』

『か、からだは……いや、そうだね、よし、分かった……いいよ、幼女銀子ちゃん
ん』

『……や、やいち、私たちも、私たちも……!』

『え、っ、J S銀子ちゃんも? それは……色々大丈夫……なの、です、かね?』

『私を見るな』

『いやでもなんか、一応ご意見を伺っておきたいなあなんて思ってみたりして……』

『ぐだぐだ言うな。……そのくらいあんたの好きにしたらいいんじゃない?』

浴室の中からは相変わらず……八一と三人の私の楽しそうな声が聞こえていて。

その声を聞いているとなんか……なんか。

間違っているのはそっちの方だと、悪手を打ったのはお前だと言われているような気がして。

思わず私は壁に寄り掛かったまま腰を下ろして、三角座りになって膝を抱える。

……わたし、なにしているんだろう。

ドア一枚隔てたそこでは八一と三人の私が、私を除いた空銀子達が楽しそうにしてい

るのに。

それなのに、この私だけがこんな洗面所に一人ぼっちで……。

「……私だって、空銀子なのに」

同じ空銀子同士、違いなんて無いはずなのに。

それなのにこうも立ち位置が違うのは、八一のそばに私だけが居ないのはどうしてなんだろう。

「……私だって、好きなのに……」

私は八一が好き。私だって八一が大好き。

その気持ちは誰にも負けない。それは他の空銀子にだって負けていないはずだ。

それなのに私だけがここに居る。八一と三人の私と一緒に居る中、中学生の私だけがこんな洗面所で小さく丸まっていて。

……なんだか、すごい惨めな気分。

なんで私だけ、こんなさみしい気分にならなきゃいけないんだろ。

一緒にお風呂に入らなかつただけ。至って普通を選択をしただけなのに。そのはずなのに。

じゃあ私はどうすれば良かったの？ みんなと一緒にお風呂に入るのが正解だった？

「……けど、そんなの無理だよお……」

私はもう中学3年生の14歳だ。子供だからセーフで済む幼女や小学4年生とは訳が違う。

けれど、その一方で高校生みたいに毅然とした態度も取れない。だって私は八一と付き合ってるんかいなのに、それなのに一緒に風呂に入るなんて言ったら八一に変な目で見られちゃうもん。

……ああ、どうすれば良かったんだろう。

またこんな事がある度に、私はこんなふうになんか一人でつらい思いをするのかな。……やだな。

他人ならばいざ知らず、同じ空銀子なのになんかこうも違いがあるんだろ……。

……と、私が心中で弱音と愚痴を吐いていると。

また浴室の方から会話が聞こえてきて。

『……にしても。4人だとさすがにバスタブが狭いつすね』

『うん。せまい。4人はむりがある』

『ね。さすがにこの狭さだと意識しなくても手とかが当たっちゃったりするよね』

『八一。それっていやらしい所に触ろうとする為の前フリにしか聞こえないんだけど』

『ち、違いますってっ！ そんなつもりはマジで無いですから！』

……八一のえっち、すけべ。

……って言ってやりたい。仲間外れになっている私には言えない言葉だけど。

『でも改めて思いますけど、こうして三人の銀子ちゃんと一緒にお風呂に入るって、なんか信じられないような経験してますよね』

『……まあね。信じられないっていうより、信じたくないような経験だけど……』

そこでJK銀子は一拍置いて。

『……けど、まあこれは夢だし？ 夢の中なら別にいいんじゃない？』

——ん？

『そ、そうそうっ！ これは夢だから、夢だから八一とお風呂に入ったっていいの！』

……ああ、そっか。

今の言葉を聞いて、私の心中にすんと腑に落ちるものがあつた。

そっかそっか、そういう事か。私と他の銀子との違いが分かったような気がする。

これが夢だから、なんだ。

これが夢だから構わない。夢の中での出来事だから恥ずかしくたつて構わない。

幼女はどうか分らないけど、JSとJ?の私はそう割り切ってるんだ。だから八一と一緒に風呂にも入れちゃうんだ。

なるほどね。そう言われれば確かにその通りだ。

これは夢。所詮は夢。だったらそんな夢の中で何を遠慮する必要があるのだろうか。
……なら、私だって。

決めた。私もそう割り切ってやる。だってもうこんな惨めな思いはしたくないから。

「……見てなさいよ、八一」

私だけにこんなさみしい思いをさせた、その報いを受けさせてあげるから。

25. 呼び出しの話

そして、次の日。

今日は休日。教育機関がお休みな為、午前中から全銀子ちゃんズが勢揃いしている。となれば皆でする事と言えば当然将棋だ。やっぱし休日というのは将棋が捗るね。

「……………むむう」

すぐ隣では幼女銀子ちゃんが可愛く唸っている。その対局相手はJK銀子ちゃんだ。高校生の自分が繰り出す容赦のない攻めを前に、幼女は序盤にして早くも苦戦中である。

……てかJK銀子ちゃんや、もう少し手心を加えてあげても……あまり厳しくし過ぎると幼女銀子ちゃん泣いちゃうからね？ 分かってるよね？

「……………ふう」

そして——お、こちらの対局相手の手が動いた。

どうやら考えが纏まったらしく、桂馬を跳ねさせて一気に攻勢を掛けてくる。

俺の対局相手はJ C 銀子ちゃんだ。

中学3年の銀子ちゃんといえはすでに女流二冠、名実ともに女性NO.1と言える指し手。

空銀子らしい鋭い攻めはこの頃からすでに備わっており、俺も決して気の抜ける相手ではない。

……ただ、そうは言ってもこの子は中学生。俺にとつては過去の銀子ちゃんでもあつて。

今の俺の研究相手でもあるJ K 銀子ちゃん、つまり三段リーグを勝ち抜いて劇的に棋力の上がつた高校1年生新四段の空銀子と比較すると、やはりそこかしこに甘い点が見られる。

なので高校生の銀子ちゃんを知っている俺からすれば油断は出来ぬが勝てぬ相手ではない。現に今の盤面も俺の優勢で進んでいる。

「……ねえ」

するとその時、対局中のJ C 銀子ちゃんが俺に目を合わせて話しかけてきた。

「なこ？」

「あんた今、スマホは持ってる？」

「スマホ？ そりや持つてるけど」

「あつそ。ならいい」

それだけを探ねて、J C 銀子ちゃんはすぐにその視線を盤面へと戻す。

うーん、一体何だったんだろうね？ まさか盤外戦術じゃないだろうし、なんとも謎な質問だ。

その後、俺とJ C 銀子ちゃんの対局が終了した。勝敗は俺の勝ち。

軽く感想戦を済ませるや否や、小学生がこちらにちよちよこと近付いてくる。

「八一、交代」

「うん」

この場には計5人の棋士が居るので対局はローテーション制、余った一人は観戦に回る。

今しがた観戦していたのはJ S 銀子ちゃんで、ローテ順で言うとな次に外れるのは俺の番。なので対局の席を譲って、俺はその場から少し離れる。

そしてJ C 対J Sの対局が始まる。

その隣では先程からJ Kと幼女の対局、というか指導対局が続いていて。

そんな光景をぼーっと眺めながら、俺はふと昨日の出来事を回想する。

——しっかし、昨日はすごかったなあ……。

何が凄かったのかって？ そりゃあ勿論、3人の銀子ちゃんとの混浴だとも。

まあ各々のプライバシーに配慮してあんまり詳細に語る訳にもいかないんだけど……とにかくあの狭い風呂の中に裸の銀子ちゃんが、どっちを向いても裸の銀子ちゃんが居て……うん、すごかったです。

銀子ちゃんの裸、あれはもう一種の芸術品だ。だってあの子ってば本当に肌が白くて、それが水に濡れるともう透き通っているように見える。

同じように濡れた銀髪もキラキラ煌めいて……そんな銀子ちゃんはどうなんっていうか、本当に精霊か何かのように見える程に美しい。

そしてそんな銀子ちゃんが三人も居て……いやもう本当にごちそう様でした。一生ものの記憶として頭に焼き付けておきます、将棋の神様万歳。

……などと考えながら、銀子ちゃんズの対局を観戦中の俺は何となしにスマホを取り出す。

「ん？」

すると通知が一件来ていた。

何だろうと思って見てみると——こ、これは。

「……ふう。ちよつと一息入れようか」

対局中の銀子ちゃんズにも聞こえるように、気持ち大きめの声でそう言いながら立ち上がる。

「おやつでも買いにコンビニまで行ってくるよ。みんな何か食べたいものある？」

「ぷりん」

「アイス」

「甘いチョコ」

「糖分が取れそうなもの全部」

食べたいおやつを尋ねてみると、銀子ちゃんズが思い思いに注文してきた。

と言うか最後のJK銀子ちゃん、あなたもの凄いオーダーの仕方をしますね。さすが最年長の空銀子は権力の使い方が尋常じゃない。

「それじゃちよつと行ってくるね」

そして財布を手にとって、厚めのコートを羽織って靴を履いて。

玄関から外に出ると直後に押し寄せる冷気、冬の冷たい風に吹かれて俺は思わず首を竦めた。

「ふうー、さむ……」

家の中では暖房をガンガンつけているので気にならないが、この通り外はとても寒い。

なんせ12月だしね。……ただこの夢の中ではそこら辺も曖昧というか、なんかもう日にちの感覚が無くなってきているような気がする。

なんせ今の俺の日常といたたら一日中銀子ちゃん達と和気藹々するだけだからなあ。そりや日にちの感覚なんて無くなるよね……などど考えながら廊下を渡ってエレベーターに乗って一階まで。

……は、行かずに。

そのまま八階の廊下でしばらく待つ事、数分。

「お、来たかな」

801号室の玄関ドアが開かれて、そこから姿を現したのは……意外な人物。

「つてあれ、JC銀子ちゃんだったんだ」

「……ん」

それは黒いセーラー服を来ている中学生、JC銀子ちゃんだった。

この子を見て意外な人物だと俺が思った理由、それはつい先程俺のスマホに入っていた通知の内容がこんなものだったからだ。

『ちよつと話したい事があるから外に出て』

それを見て俺はてつきり恋人からの呼び出し、つまりJK銀子ちゃんからのメッセー

ジだと思つて外に出てきたんだけど……。

だが真相はこの通り、ＪＣ銀子ちゃんからの呼び出しだったようだ……て、ああそつか、さっきの対局中に尋ねてきたのはそういう事か。

「どうしたの？　こうして外に呼ぶつて事はみんなの前じゃ話しにくい事があるんだよね？」

「……まあ、ね」

そつぽを向きながら答えるＪＣ銀子ちゃん。その様子は……ううむ、普段とは明らかに違う。

照れ隠しのように髪をそわそわとイジつたり、きよろきよると忙しく周囲を見渡したりと……なんだか随分と落ち着きがないように見える。

「……じゃちよつと……こつち来て」

「あ、え、銀子ちゃん？」

「いいから来い」

そしておもむろに俺の腕を掴むと、有無を言わさぬ勢いでぐいぐい引つ張つていく。

「……よし、……こら辺ならいいかな」

辿り着いたのは角を曲がった廊下の端。通りからは死角になっていてより人目につかない場所。

こんなに周囲を警戒して隠れるなんて相当な念の入れようだな。よっぽど他人に聞かれては困るような話をするつもりなのだろうか。

「……さてと」

そうして銀子ちゃんが俺を見据える。

この子特有の綺麗な灰色の瞳で。射抜くように真っ直ぐ見つめられる。

「……八一」

「うん」

この子特有の綺麗な灰色の瞳で、射抜くように真っ直ぐ……見つめられていたんだけど。

「……あの」

「なに?」

「……えっと」

途端にその瞳がすっと横に逃げ出してしまふ。

……なんだろう。なんか今日のJC銀子ちゃんは全体的に変というか、挙動不審になっっている。

「どしたの?」

「うるさい。ちよっと静かにして」

「いやけど——」

「いいから黙れ」

と思っただらめつちやキレてくるし……。

……ああでも、思えば俺と付き合う前の銀子ちゃんって偶にこんな感じになっていた気がする。

この子の妙に煮え切らない態度には昔つから随分と手を焼かされたもんだぜ……しみじみ。

「……すうー、ふう」

そして銀子ちゃんは一度大きく深呼吸。

それでなにかしらの覚悟を決めたのか、もう一度その力強い眼差しを俺に突き付けてきた。

「ねえ八一。あんたってさ……高校生の私と付き合ってるのよね？」

「う、うん。そうだけど」

「……ラブラブ、なのよね？」

「……まあ、そつすね」

「なら……この私があんたをどう想っているのか、そんな事も分かるって事よね？」

「え？」

それは……それは、どういった趣旨の質問で？

「分かるわよね？」

「えっと、それって、どういう意味で、かな？」

「どうもこうもそのままの意味よ。私が今、あんたの事をどう想っているのか。高校生
の私と付き合ってるんだったらそれぐらい分かるでしょ？」

J C 銀子ちゃんが俺をどう想っているのか。

というのは……いわゆる好きとか嫌いとかかっていう意味で解釈して良いのだろうか。

「分かるのよね？」

「……それは、まあ……」

「なら、当ててみて」

「……えーっと」

それは……そりゃあ一応分かるんだけど、さ。

だって銀子ちゃん……ほら、その……俺の事が好きだと言ってくれている訳じゃ
ん？ 俺の告白を受諾してくれた訳じゃん？

そしてその気持ちはどうやら小学生の頃にはもうあったそうなので、となれば中学生
のJ C 銀子ちゃんだって必然的にそういう事になる。

なるんだけど……けど、これってなんか俺の口からはメツチャ答え辛い話なような

……。

「ほら、言ってみなさいよ」

「……ええつと、J C 銀子ちゃんは」

「うん、私は？」

「……その」

「うん」

「……俺のことが、好き……つすよね？」

……くう、これ自分から言うの本当にハズい。

相手の気持ちを語っているはずなのに、不思議と俺の方から告白をしているかのよう
な気分だ。

そして聞いたJ C 銀子ちゃんもきつと恥ずかしかつたのだろう、すつとその目を横に
背ける。

「……ん。ちゃんと分かってんじゃない」

「そ、そうだね。子供の頃から好きだったつて、高校生の銀子ちゃんが教えてくれたから
」

「……なら、八一はいつから私が好きだった？」

「俺も同じだよ。子供の頃から君が好きだった。……具体的にいつかはちよつと分かん

ないけど」

「……そっか」

安心したように頷くJC銀子ちゃん。その顔色はほんのり桜色に色付いている。

この子は地肌が真っ白なのでちよつとの顔色の変化でも目に見えて分かる。表情こそ素っ気ないが今の言葉に内心とても喜んでいるんだろう。こういうところは本当に可愛いなあと思います。

「……そっか。銀子ちゃん、この話がしたかったから俺を外に呼び出したんだね」

「ううん。ここからが本番」

「え？」

あれ、これまだ前座だったの？

もう俺大分やり切ったというか、告白し終えたような気分でしたんだけど。

「八一。あんたはこの私の気持ちをそこまで分かっちゃってるのよね」

「そう……だね。分かっちゃってるね」

「そこまで分かっちゃってるならさ……」

そこでJC銀子ちゃんは一度言葉を区切って。

「……わたしが今、八一に何をして欲しいか……それは分かる？」

「今……ですか？」

俺がそう呟くと、J C 銀子ちゃんは「……うん」と頷きながら一歩前に近付いてきて。「……今、わたしが八一にして欲しいなあと思ってる事……当ててみて？」

その言葉に、そして何よりもその表情に……俺の心臓がドキッと大きな音を鳴らした。

26. 報いの話

「今、私が八一にしてほしいなあと思ってる事……当ててみて？」

そう言いながら俺を見つめてくる女の子。中学生だった頃の銀子ちゃん。

少しだけ見上げるような形で。その言葉通りになにかをねだるような表情で。

その顔はなんとというか――

「……か、」

「か？」

――かつ、可愛いすぎかつ！

と言いたくなってしまうぐらいに可愛くて。俺は思わずごくりと生唾を飲み込む。

つーか、これはちよつとヤバイ……中学生の銀子ちゃんというのはもう可愛いだけじゃなくて……とても、綺麗なんだ。

その潤んだ瞳にじつと見つめられると頭がクラクラしてくる。何も考えられなくなってしまう。

「えつと……ヒント下さい」

「……冬だから寒い」

「な、なるほど」

寒い、か。だとすると、今この子がして欲しい事というのは……多分これかな？

俺はJ C 銀子ちゃんと密着する程に近付いて、その背中にそつと両手を回した。

「……これですかね？」

「……当たり前」

J C 銀子ちゃんが今、俺にして欲しい事。その正解は抱きしめる、で当たっていたよ
うだ。

ああ良かった。こんな真似してもしも外れていたら大恥を掻く所だった。

「八一、この前も突然抱きしめて来たよね」

「え？ あ、ああ、そうだね。あの時はちよつとシヨッキングな事があったからさ、どう
しても癒やしが欲しくて、つい……」

「……私を抱きしめるの、好きなの？」

「……うん。好きだよ」

俺はすんなりと頷いてしまう。

こんな言葉、この子が知る俺だったら……約一年半前の俺だったら絶対に言えないと

思うけど。

けれども今の俺なら言える、俺は銀子ちゃんを抱きしめるのが好きだ。ああ好きだとも。

髪先が触れ合う程に密着する感覚。銀子ちゃんの身体から伝わる柔らかい感触。ほのかに香る甘い香り。それを好きにならないはずがない。

というかね。この魔力に取り憑かれるのはなにも俺だけじゃくて、男ならきつと誰だつてそうなつちやうはずなんだ。いやまあこの感触を誰にも譲る気はないけど。

「……ん」

小さく喉を鳴らすJ C 銀子ちゃん。

……ああ、なんか、普段この子を抱きしめる時とは異なる胸の高鳴りがしている気がする。

だつてこの子はまだ中学生なのに、こんな事しちゃって良いんだろうか……どきどき……と、俺がやましい気持ちになつちやっていると。

「……ねえ、八一」

ふいにJ C 銀子ちゃんがその口を開いて、

「じゃあさ……今、は？」

「え？」

「だから……今」

そして、更なる難問が出された。

「……いま。こうして八一の腕の中に居る私がして欲しいなつて思う事。……それが、分かる？」

言いながら銀子ちゃんはそつと目を閉じて。

そして……その首を少しだけ上に向かせる。まるで何かをせがむかのように。

その表情は――

「……銀子ちゃん」

これって……あれ、だよな？

何度か見た事あるからもう分かる。要は……キス待ちの表情、だよな？

えつと、つまりJ.C 銀子ちゃんが今俺にして欲しい事つてのは……キス、で、正解だろう。

……いや、けど、これは……中学生の銀子ちゃんにキスをしちゃうつてのは……。

それは……ちよつとマズくないか？

いやマズイつていうか……駄目、だよな？

だつて俺には彼女がいる。恋人がいる。俺は高校生の銀子ちゃんと付き合っているんだ。

なのにこの子とキスをしちゃうのは、それは……あくまで同一人物とはいえ、それでも浮気と認定されて然るべき案件なのではなからうか。

……ただまあそれを言うのと、こうしてハグしてるのもどうなんだって話になっちゃうんだけど。

それでもやっぱりハグとキスは重みが違うような気がする。まして俺の方からするのでは。

「……えっと」

「……どうしたの？」

J C 銀子ちゃんは一度その目を開ける、そして軽く非難するような目付きを向ける。

「あのさ、今J C 銀子ちゃんが何をしたいか、それは分かるっちゃ分かるんだけど……」

「……だけど？」

「その、ここでそれをするのはちょっと……」

「……なに？ 出来ないの？」

「……………」

返答に窮して沈黙してしまう。

……ああ、そういえば……なんか前にもこんな事があったような気がする。

あれは去年のハワイの時だったか。あの時もこんな感じで銀子ちゃんからキスをせがまれて。けれども俺は動く事が出来なくて。

あの時の俺は……この子の気持ちをなにも知らなかった。

いや、というよりも知ろうとしなかったから一步踏み出せなかったというダサイ話なんだけど……それと今の理由は大きく異なる。

「なんかさ……ここでそれをしちゃうと、高校生の銀子ちゃんに悪いような気がするんだ」

「……同じ空銀子なのに？」

「そ、れを言われると……すごく弱いんだけど」

分かってる、この子は銀子ちゃんだ。

JKとJCのどっちかが本物でどっちかが偽物だとか、これはそういう話じゃない。

この子の心はJK銀子ちゃんのそれと同じで、だからこそこうしてキスをねだっている。

きっと恥ずかしい気持ちはあるだろうに、それでもこうして想いを露わにしている。

そんな銀子ちゃんに何もしないというのは……正直に言ってもものすごく心苦しい。

ていうかこれは同じ銀子ちゃんなんだし、だったら他人じゃないしノーカウントだよ

ねっ！

みたいなノリでキスしちゃってもいいのかもしれないけど、でも……。

「……………」

「……………」

「と、いうか……ね？　俺がここでほしいひとキスするような男になっちゃうのって……それはなんというか、JK銀子ちゃんに限らず、君にとってもあまり喜ばしい事じゃないと思うんだ」

「……………」

「でしょ？　だから……………」

「……………」

そして銀子ちゃんは――

中学生の銀子ちゃんは一步下がって、俺の下からゆっくりと離れる。

「……………」

そしてまた目と目が合った。

その表情を見ていると……ああ、なんか……胸を掻き毟りたくなる。

「……………」

「別に謝らなくていいわよ。むしろ……ちよつとだけ見直した」

「そ、そう？」

「うん。『同じ銀子ちゃんならノーカンだよね!』とか言ってサラツとしてくるかと思っ
てたから」

ひい! あ、あつぶねえ……!」

完全に俺の思考を読まれてるし……!」

と、とにかく、とにかく正解を選べたようだ。

俺がほつと胸を撫で下ろしていると、銀子ちゃんが俺から視線を外して801号室の
方を向く。

「あんたに聞きたかったのはそれだけ。用事はもう済んだから」

「……そっか。じゃあ部屋に戻ろうか」

「うん。……あ、そうだ」

そこでJ C銀子ちゃんは何かを思い出したのか、パンと両手を叩いて。

「八一、あんたはちよつとここで待ってて」

「え?」

「部屋を出る前にJ K銀子に言われたの。私の話が終わったら次は自分が八一と会うか
らって」

「あ、そうなの?」

「うん。だから八一はここに居て。すぐにJ K銀子を呼んでくるから」

そう言つてJC銀子ちゃんはすたすたとこの場から立ち去つていく。

「JCとの話が終わったらお次はJKか。……一体なんの話だろう？」

その場に一人となつた俺が首を傾げながら待ち人待つ事数分。

「……お、来たかな？」

ただだつと廊下を駆ける足音が聞こえてきて。

「——八一！」

「おつとつ！」

廊下の角を曲がつてすぐ、俺の視界に飛び込んできたのは白いセーラー服。

何故か分からないけどダツシユしてきたJK銀子ちゃんを俺は慌てて抱き止めた。

「ど、どしたの銀子ちゃん。そんなに走つて……なにか急ぎの用事でもあつたの？」

「……八一」

銀子ちゃんは俺の胸に顔を埋めたまま動かない。

なんだろう、一体どうしたというのか。様子が気になつた俺は自然と彼女の背中を擦

る。

ていうかこの子、今日は休日なのにわざわざ制服を着てきたのか。てかそっぴいやさつ

きのJC銀子ちゃんも黒のセーラー服を着てたな……と、そんな益体もない事を考えて

いると。

「……やいち」

依然として俺と顔を合わせないまま、JK銀子ちゃんは囁くような声で呟いた。

「……キス、して」

「え!？」

き、キス!?! 突然ここですか!?

「……だめ?」

「い、いやまあダメって事は無いけど……」

けど、だ。けど……この子の方からキスを求めてくるのはとても珍しい事だったりする。

というのも基本的に俺達の間でこういうイチチャつきは俺発信というか、俺が要求して銀子ちゃんが応じるという図式が成立している。その理由は簡単、銀子ちゃんが照れ屋さんだから。

銀子ちゃんはシャイな子なので普段はこんな直球でキスを求めてきたりしないんだけど……。

……でも、そんなの些細な事だよね、うん。

いきなりな展開に戸惑う部分はあるものの、とはいえ彼女とのキスを拒む理由なんてなにも無い。

という事で俺はJK銀子ちゃんの、白いセーラー服を着ている彼女の肩にそつと手を当てて。

「それじゃあ……するよ？」

「……うん」

もう片方の手を、俺の胸元に押し付けたままにいる銀子ちゃんの後頭部に回して。

ちゃんとこちらを向かせて、目を閉じていた銀子ちゃんと距離を近づけて――

「――んっ」

そして、俺は銀子ちゃんとキスをした。

恋人とのキスならもう何度もしている。今更恥ずかしがったり躊躇するような事はない。

「ん、う……」

そのまましばらく唇を重ねて。

十分満足した頃合い、互いの顔を離す。

「……はあっ」

すると聞こえる荒っぽい呼吸。

見ればその顔はこれ以上無いというぐらいに真っ赤になっている。

「……きす、しちやった……」

J K 銀子ちゃんがうつとりとした顔になってる。

その表情はなんか……ああ、思い出した。そういうえば始めてキスしたあの時の顔に似ている。

俺とは違って銀子ちゃんはまだキスに慣れていないのかな。こういうウブな所も可愛いよね。

「やいち……」

「ん？ もう一回する？」

そして俺が軽い気持ちでそう尋ねてみると。

「……バカ八一」

……って、あれ？

それまで熱病に罹っていたかのような瞳が、唐突にじとーつとしたものに変わって。

「ほいほいとキスは出来ないとか言っておいて、ちゃんとしてんじやないの。このバカ、どバカ」

「……え？」

……あれれ？

それは……それはつい先程 J C 銀子ちゃんと話した事ではないですか？

それをどうして J K 銀子ちゃんが？ ていうか、それは一体どういう意味で——

「……まだ気付かないの？　ほんとにバカ」

……あれれ？

このJK銀子ちゃんは……ど、どちらさままで？

え？　いやでもだつて、この通りJKの証である白のセーラー服を着て……。

……白のセーラー服を、着ていて？

着ている……だけで？

「……ばか」

それだけ言い残して、顔を真っ赤に染めた銀子ちゃんが走り去っていく。

「い、今のは……」

今のは……JC、銀子ちゃん？

27. 浮気の話

——し、しちやった……！

茫然自失となっている八一に背を向け、私は脱兎の勢いでその場から逃げ出す。だめ。もうむり。これ以上は八一の顔を見ていられる気がしない。

「……はっ、はぁ……！」

即座に801号室の玄関ドアを開いて、そのまま一直線で洗面所まで駆け込んだ。今は誰とも顔を合わせたくない。だって一向に胸のドキドキが収まってくれないし……それに、それにつ、くち、くちびるが……！

「……あ、あつい」

ああ、あつい。唇が、唇が熱いよお……！

わわ、わたし、わたしつてば、ついに八一と、八一と……キス、しちやったんだ……！

ふわわわ、ど、どうしよどうしよ！ と、とんでもないことをしちやったよお！

「……う、うううう……！」

……ほんとうに、ほんとうにしちやった。

あつかった。やわらかかった。心臓がバクバク鳴っておかしくなりそうだった。

レモンの香りとかはよく分かんなかったけど、とにかくすごかった。死んじやうかと思つた。

それに八一の顔がとつても近かった。キスするとあんなに近付いちやうんだ……。

ああもうだめ。今日はもうドキドキが止まってくれる気がしない。洗面台の鏡に映っている私の顔は見事に真つ赤になつちやつてる。

こんな顔、八一に見られちやつたのかな。……見られちやつたんだろうな。

「……やいち」

……私と、中学生の私とキスをしちやつた事……八一はどう思つたかな。

こんな不意打ちみたいな形でしちやつた事については、思う所が無い訳じゃないけど……。

けれど、後悔はない。

だつて、キスしたかつたんだもん。

それはもう結構前から。八一が私の事を好きなんだつて知つてからずっと。

私は八一とキスをしたかつた。もつともつと八一の心に触れてみたかつたんだもん。

ただこれまではそんな事を考えた時、そこで私の自制心というものが待つたを掛けて

いた。

けれどももう割り切った。これは所詮夢だからと割り切っちゃう事にして、今回勝負を掛けてみた。

あらかじめこの洗面所に高校生の私の制服の替えを用意しておいて。

リビングに居る銀子達に気付かれないよう、こっそりと着替えて。

そうして八一の目が、中学生の私と高校生の私を見分けるかに賭けてみたんだけど……。

「……にしてもあのバカ、まるで躊躇う気配がなかったわね……」

結果はこの通り、八一は何ら迷う事なく中学生の私にキスをしてきた。

中学生と高校生を見分ける事も出来ないとは。きっと八一の目玉は飾りか何かなのだろう。

「……やいち。今、どんな事を思ってるかな」

まだ茫然自失のままだろうか。それとも今頃大慌てになっている最中だろうか。

最初に私がキスを求めた時、八一は高校生の私に遠慮してキスをしようとしなかった。

だから誤って私にキスしてしまった今の八一は、きっと心中穏やかじゃないだろうけど……。

「……ふん、いい気味よ」

生憎と私はそんな事知ったこつちやない。

だつてこれはあいつに對する仕返しなんだから。

お風呂の一件で私一人をのけ者にした、さみしい想いをさせた報いを与えただけなのだから。

……ただ、まあ、その。

あとでJK銀子には怒られちゃうかもしれない……けど。



——し、しちやつた……!!

口元を片手で覆いながら、俺はその場に呆然と立ち尽くす。

や……ヤバい。唇が、熱い。

もう慣れた感觸のはずなのに、その事を意識した途端火が付いたかのように熱くなつた。

だつて今俺がキスをしたあの子は、俺の恋人である高校生の銀子ちゃんじゃなくて……。

「……中学生の、銀子ちゃん、だよな……」

そう、あれはJ C 銀子ちゃんだ。今の会話から察するにそうだとしか思えない。

高校の制服である白のセーラー服こそ着ていたものの、その中身はなんとJ C だったのだ。

ただ服装が違うだけ。俺はその違いを見抜く事が出来ず、すんなりと口付けをしてしまった。

「これって、うわ、うわ、うわ………き？」

うわ、うわ、うわわわわ……！

お、俺はなんていう事をつ！ 恋人がいるのに恋人以外の人とキスしちゃったなんて！

なぜ中学生と高校生の違いが分からないんだ！ 俺の目玉は飾りか何かなのか!? 「ぶっぶっ、どうしよ、これ……！」

俺にはJ K 銀子ちゃんという恋人がいる。その上でJ C 銀子ちゃんとキスをしちゃった。

まず考えるべき問題として……果たしてこれは浮気に入るのだろうか？

……入るよなあ、絶対に。

同じ銀子ちゃんだからセーフ！ ……なんて言い訳は通用しないよなあ、あの子には。

実はこれに似た経験は前にもある。約三ヶ月ぐらい前に天衣とキスしちやつた一件だ。

けれどあの時はまだ言い訳の余地があった。あの時は封じ手こそしていたものの、まだ銀子ちゃんと正式にお付き合いする前の出来事だし、何より不意打ちであつて俺自身の意思では無かつた。

しかし今回はどうだ。今はもうJK銀子ちゃんと正式にお付き合いしている。そして見間違えたとはいえ俺自身の意思で口付けをしてしまった。

……うん、アウトですぬ。

「……マジどうしよ。JK銀子ちゃんに内緒にしておく……訳にもいかないよなあ……」

正直言つて……とても気が重い。ぶつちやけ打ち明けたくない、ずっと内緒にしておきたい。

……けど、これを黙っていたらそれこそ銀子ちゃんへの裏切りだろう。あの子に愛想を尽かされる事だけは避けなければならない。だったらやつぱり言うしかない。

……いやでもしかし、浮気をしたなんて言ったらどの道愛想を尽かされてしまうのでは、

だとしたら内緒にしておくのも一案かもしれないねいやでもやっぱりそれは駄目だろよく考えろよいやでも知らない方が幸せという事もあるようなけど銀子ちゃんが銀子ちゃんが銀子ちゃんが――

「……嗚呼、銀子ちゃんが、銀子ちゃんに、銀子ちゃんだから……」

ぶつぶつと訳の分からぬ事を呟きながら、茫然自失状態の俺はふらふらと廊下を歩いて。

力の入らない手で我が家のドアを開けると――

「あ、かえってきた」

おや、幼女銀子ちゃんがてくてくとこちらに近付いてくるではないか。

そして「ん」と呟いて右手をパツと突き出した。一体なんのポーズだろう、かわいいね。

「やいち。ぷりん」

「……プリン？」

「ん。ぷりん」

なんだプリンって。

もしかしてプリン食べたいのかな。なら買ってきてあげ……って、あっ！

「……そうだ。おやつを買ってきてあげるって言うってたね」

そう言えば俺、コンビニへ買い物に行くっていう名目で外に出たんだった。

JC銀子ちゃんにあれこれ翻弄されている内にすっかり忘れてしまっていた。

「ぷりん、買ってきてないの？」

「……うん、ごめん。忘れちゃった」

「……きさま」

怖い。幼女の目付きがめっちゃ怖いです。

プリン一つ買い忘れただけで天使のような少女がどす黒いオーラを放つようになる

とは。

「も、もう一度行ってくるよ。すぐに買ってくるからちよつとだけ待ってて、ね？」

そう言うって俺は脱ぎかけていた靴を履き直す。

「ん、いそいで」

「うん、分かった」

そして幼女銀子ちゃんの言葉に頷いた直後、

「……………はあ」

先程の諸々を思い出して、つい口から大きな溜息を吐いてしまった。

そんな様子を見て気になったのか、幼女がこてりと首を傾げる。

「……やいち。そんなに行きたくないの？」

「あ、ううん、そういう事じゃなくて……そうだ、幼女銀子ちゃんも一緒に行こうか」
「え？」

この重い気分のまま一人でいるのはツライ。

今の俺には幼女の癒やしが必要だ。幼女の穢れなき純心な光で俺の心を浄化して欲しい。

「このままじゃ寒いからね、暖かくしようね。はい、ぐるぐるぐるー」
「わっ、わぁ」

服を取りに行くのが面倒くさかったのでマフラーで代用。厚地のマフラーで幼女銀子ちゃんの身体をぐるぐる巻きにする。ぐるぐるぐるー。

「ぐるぐるぐるーつと……はい出来上がり。うん、蓑虫みたいで可愛いよ」
「みのむし？ それ、ほめてるの？」

「褒めてる褒めてる」

そうして出来上がった蓑虫銀子ちゃんを抱っこして玄関から外に出た。

「どうかな、寒くない？」

「うん。……けどわたし、ついてくなんて一言もいってないんだけど」

「そこを何とか頼むよ。一人じゃ心細いんだ」

「……しようがない。とくべつだからね」

特別に付いてきてくれるようだ。良かった。

なんののかんの言つて銀子ちゃんは優しい。こうして抱っこもさせてくれるし。

……けどなあ。そんな優しい銀子ちゃんの事を裏切っちゃったんだよなあ、俺つてヤツは……。

「……………はあ〜」

「またためいき。さつきからどうしたの？」

相変わらず暗い顔をしてる俺を見て、幼女銀子ちゃんがそう尋ねる。

こんな話、こんな小さい子に話しても仕方無い事だよなあ……とは思いつつも。

「……………うん、実は……………」

俺の胸中には収まりきらない事なのか、自然と口から言葉が漏れ出してしまふ。

「幼女銀子ちゃんさあ、浮気つて分かる？」

「うん。わかる」

「そっか。でね、前にも話したけどさ、君は大きくなったら俺と付き合う事になるんだよ」

「うん。しってる」

コクリと頷く幼女。賢いこの子は浮気の意味とか付き合う事の意味を知っているよ
うだ。

「だったら想像出来るかなあと、俺は懺悔する気分で己が罪状を打ち明けてみる。

「それでね、俺達が付き合いだしたとしてさ」

「うん」

「それで、その時に俺が浮気をしたとしたら……君はどうする？」

「やつぎぎにする」

や、八つ裂きつすか……！

なんともエグい回答だけど、でもなんか正鵠を射ているというか、それはJK銀子
ちゃんのアンサーそのままな気がする。さすがは同一人物だ。

「やいち、うわきしたの？」

「んー……例えばだけどさ、今俺は幼女銀子ちゃんの事を抱っこしてるじゃんか」

「うん。してる」

「これって浮気になったりするかな？」

「……？　なんで？　なんでわたしを抱っこするのがうわきになるの？」

顔にはてなマークを浮かべる幼女銀子ちゃん。かわいい。

「どうやら今の言い方では重要な点が伝わらなかったようだ。肝心なのは浮気相手が

銀子ちゃんなんだけど、けれども銀子ちゃんではないという点で……言葉にするとややこしいな、これ。

「じゃあさ、例えば……俺と幼女銀子ちゃんが付き合っているとしてさ」

「うん」

「そこで俺がJ S 銀子ちゃんの事を抱っこしたら、それは浮気だと感じるんじゃないかな？」

「じゃえーえすのことを？」

「うん」

俺が頷くと、幼女銀子ちゃん「……うーん」と三秒程考えて。

「……別に、うわきじゃないんじゃない？」

「そ、そうかな？ でも幼女銀子ちゃんじゃない子を抱っこしてるんだよ？」

「別にきにしない。そんなことで怒るほどわたしはきよりーりよーじゃない」

きよ、狭量って、この4歳児は本当に難しい言葉を知ってるな。

「……でもそっか。ならJK 銀子ちゃんもそう思ってくれたら良いんだけど……っついてうのはちよつと都合良すぎるかな……はあ……」

「やいち、じゃえーけーのこと怒らせたの？」

「……うん。多分」

「そうなんだ。……うわきしたから？」

「……うん」

「わたしを抱っこして？」

「……まあ、似たような事をしちゃって」

「ふーん……じゃーけーはきょーりよーなの？」

「ど、どうかな……」

銀子ちゃんが狭量かって言われると……うん、コメントし辛いですね、それは。

それに許されたらOKって話でもないよなあ。たとえ許してくれた所で俺がやらなかった事実は消えない訳で、それであの子が心を痛めるかと思うと……ああ、ほんとに胸を抉られる思いだ。

……そして、それだけじゃない。

俺の胸に刺さってるのはJK銀子ちゃんの事だけじゃなく、JC銀子ちゃんの事もあつて。

あの時、中学生の銀子ちゃんに対して俺がキスは出来ないと言つて謝つた時。

その時に一瞬だけ……あの子はとてもさみしそうな顔をした。それが見えちゃつたんだ。

だから結果としてJC銀子ちゃんとキスしちゃつたんだと知つた時。

J K 銀子ちゃんに対して悪く思う一方、J C 銀子ちゃんを悲しませずに済んで良かったと、そんな事を思ってしまった自分も居て。

その事が更に J K 銀子ちゃんに対する罪悪感となっている。今の俺の心境はそんな感じだ。

「……はあ、シンドい」

「やいち。悪いことをしちやつたのならちやんとあやまらなくちやダメ」

「……うん。そうだね」

そんな俺の気持ちを察してくれたのかは分からないけど。

幼女銀子ちゃんが至近距離から俺の目をじっと見つめて言った。

「それでじえーけーがきょーりよーだったら、その時はちやんとやつぎきにされてきなやい」

「……そ、そうっすね……」

「うん。そしたらわたしは骨は拾ってあげるから」

そして、俺の頭をよしよしと撫でてくれた。

そしてその後。付近のコンビニまで行って沢山のおやつを買い込んで。

そうして部屋に戻ってきて早々、おやつ休憩をしている彼女に声を掛けた。

「……JK銀子ちゃん、ちよつと、いいかな？」

「なに？」

「その、ここじゃなんだから……外で」

俺がそう言うと、銀子ちゃんは「……外で？」と嫌そうな目付きを向けてきた。

けれど俺の様子から只事では無い事を察したのだろう、銀子ちゃんは煩わしそうに立ち上がった俺の後を付いてくる。

「……で？ なんの話？」

そうしてベランダに出て早々、つつけんどんな感じの声で言われる。

恐らく外が寒いからだろう、JK銀子ちゃんはすでにちよつと機嫌が悪めだ。

「……えつとですね、大事な話がありました……」

「大事な話？」

「はい。そのですね、実は……」

……つ、言わなくちゃ。

幼女が骨を拾ってくれるんだ。だからここはちゃんと八つ裂きにされないと。

「——ごめんなさいっ！」

真つ向から言い放ちながら、俺はベランダの冷たい床に膝と手のひらと額をくつつける。

その体勢は五体投地、つまり土下座。心からの謝罪にはこの体勢しかない。

「銀子ちゃん、俺は、俺は……！俺は浮気をしてしまいましたっ!!」

そして、己が罪を白状した。

そのまま顔も上げられず、怖くて両目をぎゅっと瞑ったまま。

「……………」

少しの沈黙の後、俺の耳に届いた恋人の声。

「……………ほう?」

それはゾクツとするような声だった。

28. 謝罪の話

「で？ なんの話？」

そう尋ねる私を前にして、八一は先程からずっと硬い表情をしている。

こうしてベランダに出る前から、その表情を見た時から私はもう嫌な予感がしていた。

これはきつと、楽しい話ではないわね。

あんまり聞きたくはないけど、しかし聞かない訳にもいかない。きつとそんな類の話だろう。

「——ごめんなさいっ！」

そして案の定、八一は謝罪の一声と共に土下座の体勢へと移行した。

ほらね、言った通りでしょ？

八一は私に謝るのが目的だったようだ。まったくこのバカ、何をやらかしたんだか。

……と、私はそんな軽い気分でしたから、ろくに身構えぬまま次の言葉を聞く羽目に

なった。

「銀子ちゃん、俺は、俺は……！俺は浮気をしてしまいましたっ!!」

……え？

……うわ、き？ ……つて、なに？

「……ほう？」

そう相槌を返せたのが奇跡だったと思う。

謝罪を受ける立場として、ここは毅然とした態度を貫いていたかった。

けれど駄目だ。身体に力が入らない。

目の前がふつと真っ白になって、膝から崩れ落ちそうになってしまう。

まって。おねがい。止めて。

だって、浮気なんて、そんな。

ここで八一に「他に好きな人が出来たから別れて欲しい」なんて言われたら、私、もう――

「俺、銀子ちゃんと浮気をしてしまったんです！」

銀子ちゃん？

なにそれ。一体どこの女よ。浮気相手なのにすでにちゃん付けだなんて生意気な。
……つてあれ？

銀子ちゃんつて私の名前じゃなかったっけ？

私と浮気？　なにそれどういう事？　もしかしてそもそも私が本命じゃないとか――

……つて、あ。

「……それ、どの銀子の話？」

「……じゃえ、JC銀子ちゃんです」

……ああ、その銀子、か。……なんだ。

気が抜けた。力が抜けた。八一が土下座したまま顔を上げないのを良い事に、私はベランダの柵にぐったりと寄りかかってしまう。

なあんだ、そういう事かあ……そうならそうと早く言つてよね、もう……良かったあ……。

……いや良くはないわね。良くはない。うん、決して良くはないんだけど……。

……でも、良かった。八一の浮気相手が別の銀子だというのは不幸中の幸いだ。

だつてそれなら八一の気持ちは、八一の想いは「空銀子」から動いてないつて事でしょ？

ここで例えば小童とか黒い小童とか、何処ぞの山城桜花とかその辺の名前が出てきた場合、私は意識を保っていられる自信が無かった。失神して倒れていたと思う。

けど……。

「……なるほど。お相手は中学生の私、ねえ」

「はい……」

「……ふうん」

そうかそうか、JC銀子か、やっぱりあの子か。

実のところ、私も前々からあの子はマズいんじゃないかな……とは思っていた。

JCは他の銀子達と比べても危険度MAXだ。なんて事を以前に考えたりしたけど、どうやらその読みは大当たりだったようだ。別にこんな読みが冴えていた所で嬉しくはないんだけど。

「それで？ 浮気というからにはそれなりの事をしたんでしようけど……一体何をしたの？」

「……その」

少しの躊躇の後、八一は言った。

「……き、キス、を」

「……ほう」

……キス、か。なるほどそれで浮気か。

こやつ、私という恋人がいるにもかかわらず、J Cとキスをしおったのか。

私以外の人間の唇に、八一の唇が重なったと……そーかそーか、なるほどなるほど？

……うん。率直に言つてイラつとくるわね。

胸の内からグツグツしたものが湧いてくる、ドス黒い何かが溜まっていくような感じがする。

ていいうかなに？ やっぱりあれなの？ こいつつてロリコンなの？ 空銀子は若ければ若い方が良くても言いたいのか？ そういう事なのねぶちころすぞホンマに？

「八一」

「は、はい！」

「一応聞いておいてあげるけど……その件について何か弁明の余地はあるの？」

「……ええと、ですね……弁明と言うか、あの、言い訳にもならないような事なのですが……」

「はつきり言え」

「はいっ！ はつきり言います！ えーつまりですね、浮気をしてしまったのは確かなのですが、ただその、なんと申しますか、一応どんな成り行きだったのかを説明しますとですね……」

はつきり言う気あんのかこいつ？

と思わせる程にあーだこーだと要領を得ない八一の説明を聞く所によると——
どうやらそれはつい先程の事。JC銀子は私の制服を着て八一の前に現れたらしい。
それで目の前に居る相手を高校生の空銀子だと勘違いしてしまった八一は、JC銀子
からねだられるままにキスしてしまったという事だそうだ。

要約すればこんな簡単な話なのに、八一はこの話をするのにぐだぐだと5分以上も掛
けていた。

「……つまり、あんたはこの私と中学生の私を見間違えたって事よね」

「……はい。その通りです」

相変わらぬの土下座で顔も上げないまま、八一は項垂れるように答える。

「普通中学生と高校生を見間違えるかしら。あんたの目玉は飾りか何かなの？」

「返す言葉もございませぬ……」

八一の声は随分と弱々しくて、その声を聞くだけで深く反省している事が良く分か
る。

たとえここで私から何を言われても、どのような制裁を課されたとしても全てを受け
入れる。きっと八一はそんな覚悟をしているんだろう。

……ただ、そんな八一の覚悟とは裏腹に、私の心中は大きく揺らいできて……。

……うん、難しい局面ね、これは……。

これ……これって私は叱るべき？ やっぱり八一を叱った方が良いのかな？ どうなの？

そりゃあ恋人に浮気をされたというなら、一も二もなく当然そうすべきだろうと私も思う。

けれど話を聞く限りだと、この一件は不可抗力の面もある、八一だけに非がある訳じゃないような気がするし……なんて事を考えてしまう。

というかね？ これは例えば他の女性との不可抗力だったら、それなら不可抗力であろうとも私は多分キレていると思う。

怒りのままに八一の事を八つ裂きになっている……とは思うんだけど。

でも、今回の一件は……この私と、高校生の私と中学生の私を見間違えたって事でしょう？

だとすると八一は、この私にキスをするつもりでJ.Cとしちやっただっていう事な訳で……。

そ、それは……なんていうか、そう考えるとちよつと怒り辛いつていうか……。

「……私から『キスして?』って求められて……それで言われるがままにキスしちゃった

んだ？」

「……はい。そうです。あの時の俺は目の前に居る銀子ちゃん存在に疑問を抱く事すらありませんでした。ただ銀子ちゃんとキスがしたい、それだけしか考えられなかったんです」

……ん、んんー？

「……でも、相手は中学生だったのよね？」

「はい。けど俺がそれに気付いたのはキスし終わつた後の事で……キスしている最中はもう銀子ちゃんの唇に夢中で、銀子ちゃんの事だけしか考えられなくなっていたんです……っ！」

ん、んんんー!?

そ、そんなに!?! そんなになの!?

八一つてば、やいちつてばそんなに私の事が好きなの？ もう……ばか♡

……いや、ばか♡ じゃないわね。浮かれている場合じゃないでしょ私のバカ。

ここは恋人として、そして姉弟子として、八一にビシツと強く言わなければ。

「八一」

「……はい」

「……いいえ、九頭竜八一」

「は、はいッ！」

「……………」

「……………あれ？」

「……八一」

「は、はい！」

「……………ちよつと待つて」

「え？」

ビシツと……………なんて言えばいいんだろ？

フルネームで呼んでみたまでではないものの、そこから先の言葉が何も出てこない。

まず大前提として……………八一は自分が浮気をした事実を隠さないで全て正直に話している。

そしてこの通り謝っている。この冬の寒空の下、ベランダの冷たい床におでこを押し当ててまで謝罪の意を示しているのだ。その気持ちは汲んであげるべきだろう。

そして次なる問題として、やはりその浮気相手が他ならない空銀子だという事。

なんせお相手がこの私自身だという事は、八一の心がブレたという訳でも無いという事で。

私じゃない他の女性に目移りしたとか、心変わりしちやっただってという話でも無い訳で

……。

「……八一。一応聞いておくけど……他の女は居ないわよね？」

「……他の女、というと？」

「だから空銀子以外の他の女よ。私以外の女に手を出したりはしてないわよね？」

「そ、それは勿論！ 俺は銀子ちゃん一筋です！ それだけは絶対に変わりませんッ！」

ほ、ほらあく〜！ こうも言ってるしい〜？

ああだめ、もうなんか顔がにまにましちゃう。こんな弛みきつた顔を見られちゃったら彼氏の浮気に怒る彼女になれない。つくづく八一が土下座の体勢でいてくれて良かったと思う。

けれどこうして心中を吐露する八一を前にして、これ以上私がなんて声を掛けたらいいの？

浮気した事を徹底的に罰すればいいの？ けれどそもそもこれって——

「……浮気、したのよね？」

「……はい」

「……そう」

八一は浮気をしたと言っている。……けれど、そもそもこれって浮気に該当するのかな？

浮気というのは恋人が居るのにもかかわらず、恋人以外の人に手を出す事。だとしたら確かにこれは浮気なんだろうけど、でもその相手が他人じゃなくて自分自身となると……ううむ。

それに例えばなんだけど、もし八一が小学生の私や中学生の私に對してなんら興味を示さなかったとしたら、それはそれで何かさみしいような気もするし……。

あーもう、ほんとにこういう時ってどうすればいいんだろ？ 分からない、正解が知りたい。

こんな事になるなら恋愛事情の書かれた女性誌とかを読んでおくべきだった。世の中の女性達って彼氏が若い頃の自分に手を出したらどのように対処しているんだろ。誰か教えてほしい。

「八一」

「はい」

「……あんたはどうして欲しい？」

「え？」

困った私は八一に聞いちゃう事にした。

私にはこの局面での一手が見えてこない。なのでここは新四段の私よりも段位の高い八一に、天下の竜王様に回答を委ねてみる。

「ほら、言ってみなさい。あんたは私にどうして欲しいのよ」

「そ、それは……俺としてはやっぱり、許して欲しい、かなー……なんて……」

「……なるほどね」

そっか。許す……か。その言葉を聞いてようやく分かった気がする。私はまだ自分の感情の置きどころがよく分かっていないんだ。八一の事を許すも何も、そもそも自分が怒っているのかどうかがよく分からない。

たとえ八一がJCの私と何をしようとも、私が怒っていないのなら許す必要すらない話。「別に私は気にしてないから」と言うだけで終わりの話だ。

やっぱりそこが問題なんだ。そこを真剣に突き詰めなくちゃいけない。

……うーん。JCの私は私以外の女ではあるんだけど……でも一応それは私でもあつて……。

幼女を抱っこしたり、小学生と一緒に風呂に入ったたりするのは気にならなかった訳だし……。

だとするとやっぱりキスが問題なのかな？ ハグはセーフだけどキスはアウト？

それとも年齢が問題？ 幼女や小学生はセーフだけど中学生だからアウト？ あるいは合わせ技？ キスで中学生だからアウトなの？

そして更に言えば、そもそもこれは単なる夢でしかない。だとしたら夢だからセーフ

になる？ それとも夢であつてもアウトになる？

……ああ駄目だ。やっぱり思考が纏まらない。こんな難局新米プロ棋士にはまだ早すぎる。

大体私はまだ八一と付き合つてから三ヶ月程度しか経つてないのに。そんな恋愛初心者に答えを出せというのが無理な話だ。全く八一のやつ、本当に面倒な事をしてくれたわね。

……それとも。

それとも……八一は八一でこの状況に悩んでいる事とかがあるのだろうか。

自分が4人も居る状況での悩みがこの私にしか分からないように、恋人が4人に増えた状況での悩みというのは八一にしか分からない事だ。

あるいは私も八一の立場を経験してみれば、何か分かる事があつたりするのかな——と、そんな事を考えた直後だった。

「——えっ？」

瞬間、目の前が真っ白になって。

「……あ、れ？」

ふと気が付いた時、私は誰も居ない部屋の真ん中に立っていた。

29. JKと不思議な夢の話

将棋会館近くにあるワンルームマンション。

その801号室。今は誰も居ないリビングの真ん中に私は一人で立っている。

「……………あ、れ?」

……………わたし、どうしてここに?

だって、今の今までベランダに居て、それで……………八一から謝罪を受けていたはず……………だよ?

それなのにふと気が付くと、いつの間にかこのリビングへと移動している。

そして土下座していた八一の姿も忽然と消えているし、私以外の三人の銀子達の姿も見えない。

「……………な、なにこれ、どういう事?」

なにかがおかしい。とても理解不能なおかしな事が起きている。

まるで世界が切り替わったかのような、あるいは一時の記憶が欠け落ちたかのような

な。

もしくは幻を見ているのか、それとも白昼夢か。なにせよもう訳が分からない、私の現実はどうなってしまったのだろうか。

……つて、現実？

「……ああ、それとも、これってもしかして……」

私は今、見慣れたこの部屋のリビングに居て、ここに居るはずの三人の銀子達は居ない。

考えてみるとこれって……あのおかしな夢から目覚めて現実の世界に戻った、って事なのかな？

そうだ、そう考えれば辻褄が合う。

空銀子が4人もいる夢。そんなあり得ない夢から遂に私が目覚めたという事なので
は——

「銀子ちゃん」

「え？」

とその時、背後から私の名を呼ぶ声が。

その声、その呼び方は私にとって馴染みのよくあるあいつの声で。

「……八一」

そこに居たのは見慣れた姿、九頭竜八一。

さつきまでベランダの床で土下座をしていたはずの八一が普通に立っていた。

「これって……」

「どしたの銀子ちゃん、そんな呆けた顔して」

「つ、呆けた顔なんてしてないわよ。それより……ねえ八一、他の銀子達は？」

確認の為に私がそんな質問をしてみると、

「他の銀子？ え、なにそれどういう事？」

八一はきよとんとした顔で答える。

その表情はとぼけているような感じには見えないし……うん、これはやっぱり……。

「……ねえ八一。あんた浮気はしてないわよね？」

「う、浮気!? し、してないよそんなの! いきなり何を言うんですか!」

「……そうよね。浮気なんかしてないわよね」

そしてこの通り、八一は浮気もしてないと言う。

「……………ほんとに?」

「本当だってばっ!」

慌てふためく八一をよそに、状況を理解した私は「……はあ」と大きく息を吐き出す。

……ああ、やつぱりそういう事だ。私は遂にあの夢から目覚めたんだ。

ここは元の世界。私が4人も居るはずのない、現実の世界に戻ってきたという事なんだろう。

けど、なんだか随分と唐突な終わり方だ。まあ夢から覚める時なんてのは往々にして唐突なのかもしれないけど、こうなるとなんか――

「……ちよつと、名残惜しい……かな」

「え？」

「ううん、なんでもない」

過去の自分に会えなくなつて悲しい……とまでは言わないけれど。

それでも結構な時間一緒に生活していた訳だし、お別れの挨拶が出来なかつたのは……少し、ちよつとだけ心残りかもしれない。

……と、この時の私はまだ呑気にもそんな事を考えていたんだけど。

「――え!?!」

私がつと瞬きをしたその瞬間だった。

その一瞬の間に、目の前に居たはずの八一の姿は煙のように消え去つてしまった。

「は? え、なにこれ、八一!?!」

え、なにこれなにこれ!? 一体私の目の前でなにが起こってるの!?

だって八一が現れたと思ったら突然に消えちゃったんだけど!? なんなの、あいつ
口棋士を辞めてマジシャンにでも転職したの!?

それともこれって……。

これって、やつぱりまだ私は――

「姉弟子」

「え」

すると再び背後から私の名を呼ぶ声が聞こえた。

その声は聞き覚えがあるんだけど、その呼び方にはちよつとだけ引掛かりがあつて……。

「……や、八一……よね?」

「はい。八一ですけど」

振り向いた私の目に映った人物、そこに居たのは誰あろう九頭竜八一だ。

つい先程突然に現れて突然に姿を消したばかりの八一がまた突然に現れた……と言
いたい所だけど、生憎と私の目は誤魔化せない。

この八一は先程の八一とは……ていうか、私が知っている九頭竜八一とは少し異な

る。

よく見れば背丈もちよつと低いし、顔付きもちよつと幼いし……となるとこれはもしや……。

「……ねえ八一。あんた今何歳？」

「え？ いきなりなんですかその質問は」

「いいから答えなさい」

「……16ですけど」

……なるほど、そういう事ね。

分かった。今ハッキリと分かった。ええ、理解しましたとも。

どうやら私はまだ現実に戻れてはいない、相変わらず夢の中にいるようだ。状況を再認識した私はもう一度大きく嘆息する。

だってこの通り、16歳の八一が目の前に居る。そんな事は夢じゃなきゃあり得ないしね。

でもどうして16歳の八一がここに……って、まさかこれは意趣返しのようなものなのかな？

さつきまで私が4人居た訳だしと、ならばお次は八一が4人になるという事か。さすがは夢の中、もはやなんでもアリなのか。

「……ふーん、そう。あなたは16歳なのね」

「はい。てかそんなの知ってますよね？」

「そうね、知ってる。ちよつと気になっただけ」

にしても16歳なんだ。なんか不思議。

あの夢では高校生の下は中学生だった訳だし、八一の方も中学生なのかなと思っただけだ。

……つて、ああそっか、分かった。これはきつとJC銀子の年齢と対応させているんだ。

JC銀子は中学3年の14歳、だからこの八一はその2歳上の16歳の姿でここに居るんだろう。

……ん？ 16歳？

「……ねえ、16歳の八一」

「なんですか？」

「だったらあなたは……あなたはこの私を見て何か思う事はないの？」

この八一の年齢が16歳なら、同じく16歳であるこの私には見覚えがないはずなんだけど。

「思う事？ ……つてあれ？」

すると八一もそのおかしさに気付いたのだろう。私の顔をまじまじと見つめてくる。

「あれ、姉弟子……なんか、なんか今日はいつもと違いますか？」

「違うってなにが？ 何処が違うと思うの？」

「いや、あの、なにがっていうか……いやけど、俺の気のせいか……？」

自分が知っている空銀子、中学3年14歳の空銀子とは微妙に異なる私の容姿。

その違いに確信が持てないのか、八一は眉を難しそうに顰めながら言った。

「……あ、もしかして化粧でもしたんですか？」

……こいつ、自分が知る14歳の空銀子と16歳になったこの私との違いを化粧で済

ませる気か。

これでハッキリしたわね。八一の目玉はただの飾りだ。多分ビー玉とかで出来ているのだろう。

「ほんとにあんたは一度頓死した方がいいわね」

「えっ」

「けどそっか。考えてみたら八一なんて所詮はそんなもんよね。だから私も散々苦労した訳だし」

九頭竜八一。それは将棋の才能だけはあるものしかしバカで鈍感な男の名前。

それは16歳だろうが18歳だろうが変わらない。子供の頃から八一とはそういう

男なのだ。

……にしても、16歳の頃の八一、か。こうして見るとなんか懐かしいな。

今と比べて幼いのは勿論だけど、全体的な佇まいというか、雰囲気がいさし固いような気がする。

八一って昔っからこうだったっけ？ それともこの時期だけ？ あ、それとも逆に今の八一の雰囲気は柔らかくなっただって事なのかな……。

……とそんな事を考えながら、自然と私は八一の顔に手を伸ばす。

「ちよ、ちよつとなんすか」

すると指先が頬に触れた途端、八一は私を避けるように一歩後ろに下がった。

「……なによ」

「いや、なについて言うか……姉弟子こそ急にどうしたんですか」

見るからに戸惑いの表情になる八一。そしてその姉弟子という呼び方。更には敬語。

幼い頃から一緒に居た相手に対して随分と他人行儀な態度だけど、これがこの八一にとっての普通。この一歩線を引いたような接し方こそ、16歳の八一にとつての空銀子との距離感なのだろう。

この疎遠さに関して、私も当時は寂しく思ったりムカついたりする事もあったんだけど……。

……けれど、だ。

私はもうあの当時とは違う。私はもう八一の気持ちをも、八一の心を知っちゃっている訳で。

「……………ふーん？」

と呟きながら私は一歩近付いて、下から覗き込むように顔をぐつと近付ける。

「な、ちよ、なんすかいきなり！」

すると八一はまた一歩下がる……………が、逃さぬとばかりに私も更に距離を詰めて壁際まで迫る。

「別に？ あんたこそなに慌ててんの？」

「いや、俺は慌ててなんか……………」

「だったら気にする事なんてないでしょ？ 私達は姉弟なんだし」

「きよ、姉弟つつつたって……………」

私に詰め寄られた八一は顎を仰げ反らせる。その視線も左右に落ち着き無く揺れている。

なによこのバカ八一、余程この私に近付かれないのか……………なんて事を考えるはずもなく。

だってこの反応って私を避けてるって事じゃなくて、要は……………照れ隠し？ みたいな

ものでしょ?」

「ねえ八一、そういう事よね?」

「何がですか?」

「だから、こうして……」

「ちよ、姉弟子、なにを……!」

私は両手を伸ばして、慌てふためく八一の両頬を左右からそつと抑え込む。

そうすると手のひらから感じる熱は……うん、あたたかい。八一の顔の表面温度が上昇しているのがありありと分かる。

……あ、これちよつと面白いかも。

16歳の八一は私の事が大好き。そうと知っているこつちは幾らでも強気に出られる。

例えば……ほら。今度は八一の腰の後ろに両手を回してみたりして……。

「……ちよ、あ、あねで——」

この通り……抱き締めちやつたりして?

当時は拒絶されるのが怖くて出来なかったスキンシップだって、今なら簡単に出来ちゃうのだ。

「……あ、あの、あの、あの……!」

驚愕と羞恥と緊張のせいか、声までガチガチに固まる八一。

うん、とても新鮮な反応だ。わたしの知る18歳の八一ならこうはならない。あいつはもう私との触れ合いには慣れちゃってるからね。

まあそれは慣れる程に私達の距離が近付いたって事だし、別に悪い事とは言わないけれど。とにかくこうして私との触れ合いに慣れていない16歳の八一って……なんか、ちよつとかわいいかも。

「……あの、一体、どうしたんですか？ 今日姉弟子は明らかに変ですよ」

「そっ？」

「そうですよ。だって、普段はこんな……抱きついてきたりなんてしないじゃないですか」

「……ふむ」

明らかに困惑している八一を見ると、私の胸中にはむくむくと悪戯心が湧いてくる。

そこで少し見上げるような形で、八一の目をじっと見つめながら、

「……私に抱きつかれるの……きらい？」

そんな意地悪な質問をしてみれば、八一は「え、!?」と露骨な程に動揺してくれる。

「……いや、そりゃ、べつにそんな、きらいって事は、ない、ですけど……」

「そっか。じゃあさ……」

そして、再度意地悪な質問。

「私に抱きつかれるの……すき？」

「そ、れは……」

口籠る八一の顔は明らかに赤くなっていて。

喉がごくりと鳴ったのが分かる。心音が激しくなっているのが伝わってくる。

あれ、これって……落とせるのでは？

もしかして16歳の頃の八一って、私が積極的になれば簡単に落とせるような相手だったのでは？

……って、まあそれもそうか。

私達は元から両思いだった訳だし、それも当然だよね……なんて事を考えた瞬間だった。

「——あれ？」

ふつと体中から伝わる感触が無くなって、

「……あ、消えちゃった……」

またしても煙のように、16歳の八一は忽然と消え去ってしまった。

ああ、惜しかった。あと少しで八一を落とせた、投了させられたと思うんだけど……。「……でも、となるとこの次は……」

さすがにそろそろ展開が読めてきた私は瞬時に思考を巡らせる。

最初に私がよく知る18歳の八一が現れた。そして次に16歳の八一が現れた。

となれば次の八一は恐らくJ S 銀子に対応する年齢なはずだから……。

「小学6年生11歳の八一って事ね。……でも」

そんな事を考える一方、私はふと思った。

もし仮に今……16歳の八一からキスを求められていたら、私は……どうしていただろうか。

それは、それはちよつと……分からない。今の私にはどちらとも断言する事が出来ない。い。

けどそれがあの夢の中での八一の置かれた立場なのだとすると、やっぱりあれは――

「……あの――」

とその時、またしても背後から声が聞こえた。

「っ、」

その声を聞いた途端、私の心拍が一瞬ドクンと跳ねるように上がった。

思えばこの時から兆候はあつただけ……この時の私はまだ油断していた。

この数分後に自分がどうなるかも知らずに……何も考えずに背後を振り返ってしまった。

30. 更にJKと不思議な夢の話

私は今、不思議な夢の中に囚われている。

まず最初に18歳の八一が現れて、その次に16歳の八一が現れて……そして。

「……あのー」

と、背後からそう声が掛けられる。

それは——ああ、やつぱり。それは予想していた通りの声だ。

その声は八一の声。だけどそれは……私にとつてはもう聞き馴染みのある声じゃない。

だってその声は……その少し高い音域の声は、八一が声変わりをする前の声で。

「……八一」

そうして振り返った私の目の映った姿、そこに居たのは勿論八一だ。

その背丈は今よりも大分低め、もう尋ねなくても分かる、これは小学6年生11歳の八一だろう。

けど……これ、この八一って……。

「……あの、あなたは銀子ちゃんのこと……お姉さん、ですか？」

そして続けざまにそんな質問をしてきた。

さすがに先程会った16歳の八一とは違って、11歳の八一は自分の知っている9歳の空銀子と16歳の空銀子を見間違えたりはしないようだ。

だからこそこの私を空銀子とは認識出来ず、空銀子の姉かなにかだと考えたらしい。

……けれど、ううん、私にとつて今はそんな事どうでもよくつて……。

「——小6の八一、ちっちゃい……」

「え？」

その子を見た時、私の第一印象は「ちっちゃい」だった。

だって、だってこの八一ってば、小6の八一ってば私よりも身長が低いんだもん。

目線を斜め下に向けて八一と目が合う、そんな事私の人生において初めての経験だ。

え、ていうか……ね？

ちよつと、ちよつと待つて？

これ、このちっちゃい八一ってき……小6の八一って、なんか、なんか……つ

！

「か、か、かつ……！」

「……か？」

か、かつ……可愛いんですけど!?

あれ? あれれ! 小6の頃の八一ってこんなに可愛い男の子だったっけ!?

もつとなんか、こう、小憎たらしいというか、生意気そうな感じの子供だったような気がしたんだけど、私の記憶違い!?

……ああ、でも、記憶違いなんかじゃない。これはどこからどう見ても私の記憶通りの八一だ。

だとすると私の見方が変わったのだろう。当時はこつちが年下だったから、年下目線で見て生意気な感じに見えていたんだけど、高校生になった今ではそんな所も可愛く見えてくるっていうか……!?

「……ねえ八一。私の事、分かる?」

「えっと、だから、銀子ちゃんのお姉さん、なのかな、って……」

「うん。じゃ、おねえちゃんって呼んでみて」

「え?」

「いいから。ほら」

私は有無を言わさぬ勢いで急かす。

すると小6の八一は私を見上げながら戸惑い気味にその口を開いて。

「お、おねえちゃん……?」

「……………」

——ゾクゾクつとした。

ヤバい。これは危険だ。これ以上進むと私の中にある変な扉が開いてしまう。

ここで引き返すべきだ、これ以上進んではいけない……と、そう分かっているんだけど……それでも私の本能が止まってくれなくて。

「……………」

本能に迫り立てられるがまま、私は小学6年11歳の八一を抱きしめる。ぎゅ。

「えっ、あ、あの……………」

すると慌てた声を出す八一。

わあ、八一ったら恥ずかしがってる。私に抱き締められたら照れちゃって……………かわいい。

「ね、もう一回呼んでみて」

「え、えつと……………おねえちゃん？」

「もう一回」

「……………おねえちゃん」

「今度は銀子おねえちゃんって呼んでみて？」

「ぎ、銀子おねえちゃん……………」

「……………あ」

——あ、あわわわわっ！

こ、これは……………これはヤバイ……………っ！ 銀子お姉ちゃんは、銀子お姉ちゃんは……………！
私は……………そう、私は姉だ。出会った頃から私が姉で八一が弟、それが私達の関係の
つ。

ただ、そうは言っても実際には私よりも八一の方が年上となる。だから八一が私の弟
なのだと言っても、それはあくまで立場上というか、将棋の師弟関係における形式上の
話であって。

けれどこの八一は違う。この八一は正真正銘私よりも年下、小学6年生11歳の八一
で。

そんな八一から、本当に弟みたいな八一から『銀子お姉ちゃん』と呼ばれる破壊力と
きたら……………！

けれど……………ダメ！ 駄目よ銀子っ！

待って空銀子。落ち着いて。あなたはこれ以上この先に進んでは駄目。

いい？ 銀子、あなたの恋人は誰？ あなたの恋人は18歳の八一でしよう？

ねえ知ってる？ こういう小さな男の子が好きな女性をシヨタコンって言うのよ？

銀子、あなたはシヨタコンじゃないでしょう？ あなたは桂香さんとは違うでしょう？

……とそんな感じで、私が内なる空銀子と真剣に話し合いをしている間に。

「……あ、居ない……」

先の二人と同じく、またしても煙のように、11歳の八一は忽然と消え去っていた。

……ああ、残念。せめてもうちよつとだけ、もつとずっと一緒に居たかつただけ……。

「……けど、そうなる……この次は……」

18歳、16歳ときて、11歳の八一が現れたとなると、お次はいよいよ……6歳の八一か。

私が4歳の頃、師匠の家の二階の部屋で出会ったあの……あの男の子が来るのか。

「……ふう」

私は一度大きく呼吸をして気を落ち着ける。

さあ八一、何処からでも掛かってきなさい。……って、なんで私は身構えているんだろ。

「……あの」

——来た。

やっぱり背後からだ。今、私のすぐ後ろには6歳の八一が立っているんだ。その声はともすれば女の子のようにも聞こえる。まさしく6歳の声だ。

——いい？ 銀子、もうさつきみたいに取り乱したりしては駄目だからね。

それが何歳の八一であろうと、あなたが知っているはずの九頭竜八一に違いは無いんだから。

……よしっ！

と覚悟を決めて勢いよく振り返った私の瞳に飛び込んできた男の子は——

「か、可愛いつ!!」

「ふえ？」

え、うそ！ うそうそやだやだなにこれ!? これが、これが6歳の頃の八一なの!? えまってまってだめだめ可愛すぎるっ！ この子ちよつと可愛すぎるんですけど!! だつて超ちつちやいし、おめめとかくりくりしてるし、ああもうなにこれ八一のくせに、八一のくせになんでこんなに可愛いのか!!

「や、や、やややや……!」

「……あの、おねいさん、だれ？」

「どうやら6歳の八一は私の事が誰なのか分からないらしい。けどそんな事どうでもいい。」

「私、今すぐこの子をぎゅーってしたい。ぎゅーって抱きしめてぎゅーってしたいよお！」

「はう……やいちい……」

「うわ、あ、あの……」

抱きしめてぎゅーってしたい。

「なんて思った時には、なんかもう抱きしめてぎゅーってしちゃってた。身体が勝手に動いてた。」

「でも待つて！ 大丈夫だから！ 絶対にここまでだから！ お願いだから私を信じてっ！」

「絶対に手は出さないから!! 桂香さんじゃあるまいし絶対に手なんか出さないからっ!!」

「やいちい……やいちい……」

「わ、あ、あの、あの、おねえさん……？」

でも頼ずりはしちゃう。すりすり、すりすり。

ああ八一のほつぺたが柔らかいよお。もうなんで八一のくせにこんなぷにぷにしてるの？

「よしよし、かわいいね、かわいいね」

「あ、う……」

頭をなでなでしてあげる、すると八一は恥ずかしそうに俯いちやう。

えまってまってどうしよう。この八一はちよつと可愛すぎて駄目だと思う。

ていうかこれってどうするの？ どうすればいいんだろ、どうすればいいのかな？

だって私ね？ わたし……この子をこのままおうちに持つて帰りたい！

おうちに持つて帰って私が育てたいよお……！

「……ううん、きめた。もってかえる」

「え？」

そうね、そうしましょう。

この子はわたしが責任をもつてそだてます。

わたしももうプロ棋士になったんだから、弟子の一人ぐらいとつたつていいよね。

「ね。そうだよね。八一もヒゲ師匠に弟子入りするより、私に弟子入りしたいよね？」

「え、ええと……」

ほら、八一もそうしたいって言ってる。

わーいわーい。うれしいな。わたしにも弟子ができるんだ。それがやいちだなんて最高だよな。

さてと、それじゃあこの子をどうやっておうちにもつてかえろうかな。

あそうだ、ポケットに入るかな。いれてみましょうね。よいしょ、よいしょと――

「――はっ!?!」

ハッと、目が覚めた。

「……あれ、ここは……」

すぐさま肌を感じたのは冬の寒さ。そして視界に映るのはベランダの光景。

そこは私がつい先程まで居た場所、4人の八一と出会う以前に私が居た場所だ。

そしてふとりビングの方を見てみれば、そこには3人の空銀子達の姿があつて。

……ああ、これは。

どうやら私は戻ってきたらしい。私と同じ空銀子が三人も居るこの不思議な夢の中に。

夢から覚めても夢の中に戻るだなんて、もう何がなんだか分からないわね。

……とそんな事を思うと同時に、私は心の中で深く安堵していた。

——それにしても、なんて恐ろしい夢……！

年齢違いの八一が4人。ただそれだけなのに、ただそれだけであれ程までに破壊力があるとは。

最後の方では私もすっかりおかしな事になっていたような気がする。6歳の八一のあまりの可愛さに頭をやられて、知能指数が限界まで底に落ちていたような気がする。

あれは駄目だ。あんなにみつともない自分の姿は二度と思い返したくない。……にしても6歳の八一は……あれは本当に恐ろしい子だった……。

「……銀子ちゃん？」

とその時、足元から声を聞こえた。

するとそこには相変わらず、ずっと土下座の体勢をキープしていたらしい八一の姿があつて。

「あ……」

そんな八一の姿を見た瞬間、胸の辺りがズキンと強く痛んだ。

途端に罪悪感が湧き上がってきた。これ以上見ていられなくて、私は視線を逸らしながら言う。

「八一。もう土下座はいいから、起きて」

「え……いいの？ でも俺——」

「いいから。もういいから。お願い」

私が継るような声色でそう言うと、八一が躊躇いがちにその身体を起こす。

うん、これでいいよね。

これ以上八一が謝る必要なんて無い。この冬の寒空の下で土下座をする必要なんて無い。

だって……だって、八一は良くやっている。

うん、そうだよね。良くやっているよね。八一はすごく頑張っていると思うの。

だって私が先程の夢を見ていた時間、それはほんの10分とかそれぐらいなものだろう。

それなのに。たかだか10分程度の八一達との触れ合いで、私はあんなにもトチ狂ってしまった。我を忘れて醜態を晒してしまった。

その事を思えば……八一はもう一週間以上も空銀子達に囲まれて生活をしている。

それなのに普通にしている、トチ狂わないでいられる八一はすごく頑張っていると思うの。

そう、八一は頑張っているんだ。それでなくとも今はあの問題だってあるのに、きつと八一は私が思う以上に頑張って頑張って今の生活を送っているんだと思うの。そう

でしょ？

「……八一。今回の件は不問にする」

だからそう告げた。今回の浮気は許す事にした。

「……本当に？」

「うん、許してあげる」

「……けど、俺……J C 銀子ちゃんにキスしちゃったんだよ？」

「いいの。いいのよ八一。もういいから」

そう。もういいの。八一はなにも悪くないよ。

だって私も幼い八一に頬ずりしたり、ポケットに入れて持って帰ろうとしたりしちゃったから。

……なんて事は口が裂けても言えないけど、それでも罪深さではおあいこなはずだ。

少なくとも私にはもう八一を糾弾する資格なんて無い。もう何も言う気にならない。というか気まずくて今は顔を合わせられる気がしない。

「ずっと土下座をしていて寒かったでしょ？ もうリビングに戻っていいわよ」

「……うん、分かった」

そう言つて八一は引き戸を開けて。

リビングに足を踏み入れる直前「あれ？」と呟いて私の方へと振り返る。

「銀子ちゃんは戻らないの？」

「……そうね。私は……」

私はまだ、リビングには戻らない。

熱くなった顔を冷ましたいから……ではなく、私にはまだここでやる事があるから。

八一の事は許した。それは良い。

けれどそもそもこの一件、今回の八一の浮気は八一だけの責任で起きた出来事ではない。

だとしたらやっぱり……私はあっちとも話しておく必要があるだろう。

という事で。

「……それで、話ってなに？」

八一が立ち去った直後、私はJC銀子をこのベランダに呼び出した。

31. 再びのJCとJKの話

私の前に立つ私。

中学生の空銀子が二の腕を擦りながら口を開く。

「……それで、話つてなに？ 寒いから早くして欲しいんだけど」

……この台詞、なんだか聞き覚えがあるわね。

ううん、というよりも……正確に言うなら言った覚えのある台詞、かな。

私とJC銀子は前にも一度こうしてペラランダで話し合いをした事がある。あの時は私が呼び出される側だったけど、今回はその立場が逆転した形だ。

「……なんの話で呼び出されたのか、あなたならとつくに見当が付いているんじゃない？」

「……さあ、知らないけど？」

私が軽く牽制してみれば、JC銀子は露骨な程にその視線を逸らす。

けれど内心思い当たる事があるのだろう、その表情はバツが悪そうな顔をしていた。

「さつき、八一から事情は聞いた」

「……………」

「私の制服を着て、高校生のふりをして……それであのバカとキスをしたんだって？」

私がそうと告げた途端、J C銀子がピクツと肩を揺らす。なんとまあ分かりやすい中学生だ。

この反応を見る限り容疑はクロ、で間違いないようね。まあ八一から話を聞いた時点で分かっていた事だし、別に疑っていた訳じゃないけど。

「八一のやつ、J Cと浮気をしちやっただけで、さつきまでここで土下座してたわよ」

「……………」

するとJ C銀子はその顔色を曇らせる。

それはきつと八一への罪悪感からだろう……と、私はそう思っていたんだけど。

「……………」それって？ 私に対して、あなたはなにか言う事があつたりしないの？」

「つ、……………」悪かったとは、思ってる」

J C銀子は目を伏せながらそう呟いた。

……………」あ、ちよつと意外かも。私に対しても悪かったとは思っているんだ、この子って。

なんせ私の事だから「はあ？ J K銀子の事なんて知ったこつちやないわよ頓死しろ」みたいに言ってくるかとも思っていたんだけど。

……ううん、待つて。さすがに私もそこまで傍若無人じゃないわね。うん、今は無し。

私にだって殊勝な一面はちゃんとある。それはこうして中学生の私が証明している通りだ。

「悪かったとは、思っているんだけど、でも……」

「……でも、なに？」

「……………」

中学生の私はそこで押し黙ってしまふ。

けれど私にはこの子が何を言おうとしたのか何となく分かる。「でも、キスしたくなっちゃった」とか「でも、抑えられなかった」とか、恐らくはそんな所だろう。

……この様子だったら、これ以上私が何かを言う必要はないかもね。

J C 銀子があまりにも横柄な態度でいたなら、一発ぐらいどついでおこなうて思ってたんだけど。

はつきり言つて、私は……私はこの子を叱りたい訳じゃない。

こうして偉そうに呼び出しておいて何だけど、最初からそんなつもりは毛頭ないのだ。

だつてもう私は八一を許しちゃつてる訳だし、八一の事を許した以上はJ C 銀子の事

だって許してあげるべきだと思っから。

それに……それにこれは夢だ。所詮は夢の中での出来事ではない訳だし？

夢なんて目が覚めた時には忘れてしまっ、そんな不確かなものでしかない訳で。

そんな夢の世界で浮気がどうか、そんな下らない事に拘泥する程に私は狭量な女じゃないの。

……と、そのように考えるところか……そのように割り切る事にした。

つまりは全てこの夢が悪いんだ。こんな常軌を逸した夢の中で何日も暮らしていて、それでまともな思考を保てというのが無茶な話だ。

高校生の私が幼い八一をおうちに持つて帰りたくなっちゃったように、中学生の私だつて18歳の八一とキスしたくなっちゃうのだろう。

そう、これはもうしょうがない事。きつとどうしようもない事なんだと思う。だから私にはこの子を責める気にはなれない。

「……特に、中学生の私となるとね」

「え？」

私の呟きに反応してJ C銀子が顔を上げる。

その表情は私が毎朝鏡の前で見る私と……高校生の私とほとんど変わらない。

……まあそれでも、さすがに見聞違えたりするのはあのバカだけだと思っけど。とに

かくJ.C銀子は私と年齢が近くて、その近き故に私も色々と考えてしまったりする。

中学3年生。この頃の事はよく覚えている。

歳が近いからつてもそうなんだけど、この頃は私の人生の中で特に辛い時期だったから。

私の中3に上がる前頃、つまり中2の頃の冬に当時16歳だった八一は竜王位を獲得した。

その頃はただでさえ八一と住む場所が別になってしまい寂しさを感じていた時だったのに、そんな中での八一の竜王位の獲得は、なんか……八一が自分とは遠い存在なんだって事を強く感じさせた。

そして私の中3に上がると、今度は八一が将棋の弟子を取る事になる。

私よりも将棋の才能があつて、私よりも年齢が若い女の子を二人も弟子に取つて育てている八一を見ると、なんか……もう、八一は、私に興味が無いのかなつて、そんな気分させられた。

他にもあれやこれやと色々なエピソードがあつたりするんだけど……とにかく中3の頃の私はそのような思いを抱えていた。

勿論今ではそんな事は思わない。八一が竜王位の獲得に拘つた理由も知っているし、八一が私に興味を無くしてなんかいないって分かつてるけど、当時の私はそのように

思っちゃった訳で。

だから私にとつて中3の頃は辛かった。常日頃からストレスを抱えていて、八一への接し方もかなりつんけんしていたと思う。

つまりJ C 銀子とはそんな私だ。そんな辛い時期の真っ只中に居る空銀子だという事。

私はその頃の辛さを誰よりも知っているから……だから、この子には強く当たる気になれない。

だつてこの頃は本当に、本当に寂しかったから。

それなのに、そんな時期に八一が本当は自分の事を好きなんだつて知っちゃったら……。

……うん、そうなつたらやつぱり、自分の気持ちを抑える事なんて出来なくなっちゃうと思う。

「……ま、いいわ。今回の件は不問にしてあげる」

だから私はそう言った。

「えっ!?! ……いい、いいの?」

するとJ C 銀子が大きく見開いた瞳を、それはもう驚愕の目を向けてきた。

……な、なによ。そんな目で見なくなつていいじゃないの。

「ほ、ほんとに？ 怒ってないの？」

「ええ、怒ってないわよ。だって中学生のあなたは中学生だからね」

「……なにそれ、どういう意味？」

「言葉の通りよ。中学生だから特別にってこと」

「……特別？」

そう、この子は私にとって特別な存在だ。なんといってもこの子は空銀子なのだから。

思えば私がこの夢を見始めた直後、他の三人の銀子達に対して警戒だとか、恋敵だとか、そんな言葉の表現を使った事があった。

その時も否定はしたけど今になって改めて思う、その考え方はどう考えても間違いだ。

だってこの子は他ならない自分自身なんだから。それが敵なんかであるはずがない。

むしろ味方のように思っ、私ぐらいは優しくしてあげなくちゃ駄目かなと思う。

「……けどね」

「なに？」

「……あのね、J C 銀子。私の制服を持ち出して八一を惑わせるとか、そういうのは止め

なさい」

だから私がこの子に対して言うべき事があるとしたらきつとこれぐらいだ。

恋愛事に関する先達として、ここだけは指摘しておかなければならないだろう。

「私のフリをしたって、それじゃあ……それじゃああんまり意味無いでしょ？ 結局八

一は自分じゃない別の相手を見ているって事なんだから」

「それは……」

「八一になにかをして欲しいなら、ちゃんと自分自身の言葉で言う事。いいわね？」

私が念押しするようにそう言うと、中学生の私は「えっ？」と面食らったような表情になる。

「……あの、私が、八一に、なにかしてもらっても……いい、いいの？」

「いいけど？」

「え、う、じゃ、じゃあ……たとえばもう一回……き、きす……とか、も？」

「………いいけど？」

……若干の沈黙があつた事は許して欲しい。

きつと私の心も一枚岩では無いんだと思う。でもこれは夢、所詮は夢の中の出来事だから……。

「……ただし、きつきも言ったけど自分の言葉で言いなさいよね。そうじゃなきゃ駄目」

「自分の、言葉……」

私の言葉に続いてオウム返しに呟くと、J C 銀子はしんみりとした顔で首を左右に振った。

「……それは無理だと思う」

「あのねえ。そりや恥ずかしいでしょうけどそれぐらいはちやんと——」

「そうじゃなくて。そういう事じゃなくて……私じゃ駄目だったから」

駄目だった？

「……一度だけね、普通にキスをねだってみたの」

えっ、そうなの!?

「でも、それは高校生の銀子に悪いからって、八一はそう言って私にキスしなかったから

……」

あれ、それはちよつと初耳かも……。

あー、そうなんだ、一度は断ったんだ……。

そっか……なんだ、八一のやつ、けっこう、結構やるじゃない。なんか見直したかも

……。

「ああそっか。それで私の制服を使ったんだ？」

「うん。一度断られていたから、だから……中学生の私の言葉じゃあ駄目だと思う」

……ふむ。

どうやら八一には恋人であるJ Kの私を優先する意思があるらしい。

だからこそ恋人でない自分の言葉では駄目。と、そのようにJ C 銀子は考えているみたいだけど……それはあくまで中学生の私の見解であって。

「……どうかしら。それは違うと思うけど」

「え？」

しかし私の見解は異なる。

高校生の……いや、あのバカの恋人である空銀子が出す見解としては残念ながらノーだ。

「それはね、単にあんたの押しが弱かっただけよ」

「お、押しが弱かった？ ううん、そんな事ない」

「あるわよ。次はもつと本気で攻めなさい」

「本気で攻めたわよっ！」

私の指摘が癪に障ったのだろう、J C 銀子はその声の音量を上げて。

「だつてっ、こう、目を閉じて、首を上げて、こう……『キスして？』って感じの、あの、そんな感じの顔をしてみたんだもん……」

と、そんな事を言ってきた。

愚かにも。恥ずかしげもなく。

「……ああ、ほら、やっぱり……」

……一方、私の方はずっとも恥ずかしい。

あまりにも居た堪れない気分になって、思わず両手で顔を覆ってしまう。

「な、なんなのその反応はっ!？」

「だからキス待ちは駄目だってば……それやってハワイの時に失敗したじゃないの、も

う……」

「は、ハワイ?」

「……ああそうか、あなたはまだハワイのあれは未経験なんだ。けどそれにしたって

……」

お願いだからこの私と同じ失敗を繰り返さないで欲しい。恥ずかしくて死にたくないから。

……というかこの分だこの子、いずれ八一といかがわしいホテルに突撃して大失敗を犯してしまうのではなからうか。そうなる前にアドバイスとかしてあげた方がいいのだろうか。

「……けど、同じ失敗をするなんて……やっぱりあなたは正真正銘空銀子なのね」

「え?」

「なんでもない。それより次はちゃんとあいつの目を見て、それで『キスして?』って

ちやんと言葉に出して言いなさい。たとえ一度駄目でも二度三度と言いなさい。そしてたら絶対に八一は落ちるから」

そして私はきつぱりとそう言い切った。

「……む」

すると何故かJ C 銀子は眉を顰めて、私に対して険のある視線を向けてくる。

「……いいえ、八一はそんな事じゃ落ちない。あいつはそんなに意思の弱い男じゃない」

「ううん、落ちるわ」

「落ちない！」

「落ちるわよ」

「落ちないって!!」

「落ちるって」

「落ちないわよっ!!」

八一の浮気心を言い争うJ Cと私。

ていうかこれ、普通立場が逆じゃない？ なぜ私が恋人を貶してJ Cの方が庇ってる

んだらう。

と、そんな事を思った私と同様、その矛盾に関してはJ C 銀子も気になったらしく、「ていうかJ K、私が言うのもなんだけど、その、もうちよつと彼氏を信用してあげなさい」

いよ」

「言われなくても信用はしてるって」

「でも、だって、あなたは八一の事を、恋人以外の女から『キスして?』って言われたら、それでほしいいとキスしちゃうような男だと思ってるって事でしょ?」

「……といつかね、私は——」

「私は八一をそんな男だなんて思いたくない。だから八一が私にキスしなかった時、寂しかった一方でちよつとホツとしたもん」

そう言うJ.C. 銀子はその気持ちの通りに複雑な表情をしていて。

どうやらこの子は八一を清い男だと、清廉潔白な男だと信じたみたいようだ。

……が。やっぱりこの子はまだ中学生だ。随分と読みが甘い。

生憎と私は高校生なのでそうは思わない。この子よりもちよつとだけ成長している分、八一がどんな人間なのかをより深く理解しているのだ。

「別に私だってね、八一が所構わず誰にでもキスするような男だって言ってる訳じゃない。ただ、それでもあなたにならしてくれるって言うてるの。だってあなたは特別だから」

「特別?」

「そう、だってあいつ……」

無論、八一とて私以外の女にキスをねだられて軽々しくしちやうような男では無いだろう。

ていうか仮にしようものならぶちころすけど。それはマジで八つ裂きにするけど。

……でも、それでも。

「……あいつ、空銀子には弱いから」

それがたとえ中学生でも。まだ恋人にはなっていない時期だとしても。

それが空銀子のお願いなのだとしたら、きつと八一は最終的には断らないと思う。少なくとも私の読みでは九頭竜八一とはそういう男だ。

「……八一は私に弱い……か」

「うん」

「……そっか。ふふつ、そうかもね」

すると中学生の私が苦笑気味に笑った。

あ……なんだか、この子の笑った表情って……初めて見たかもしれない。

基本的に私は無愛想な人間だから、他人にこうした笑顔を見せる事は極端に少ない。

そんな私の事を八一は「だからこそたまに見せてくれる笑顔にグツと来るんだよ」なんて言ってくれたりもしたけど……なるほど確かにその気持ちは分からないでもない。

……って、中学生の自分を見ながら何考えてんだろ、私。

「とにかく、とにかく私が言いたいのはそのだけ。分かったわね？」

「……うん、分かった」

「よし。それじゃあ話は終わり」

さてと、それじゃありビングに戻ろうかな。

長らく外に出ていて身体が冷えちゃった。八一に甘めの紅茶をホットで淹れて貰おう。

そんな事を思いながら私がベランダの引き戸に手を伸ばす。

「あ、ちよつと待って」

するといつかの時と同じように、JC銀子が再び待ったを掛けてきた。

「ねえ、もう一つだけ。せっかくだからJKと話したい事があるの」

「なに？」

「ずつと思っていた事なんだけど……」

するとJC銀子は……中学生の私は、これまた空銀子には珍しい柔らかな笑みを浮かべて。

「……JKさ、将棋、強くなったね」

「え？ あ、ああ、そうね」

「正直びっくりした。私が女性相手にこれだけ戦って一度も勝てないなんて初めてだか

ら」

「そりやまあ……ていうか私だって公式戦で女性相手に負けた事なんて無いからね」

「あ、女性相手に無敗なのは高校生になっても続いているんだ？」

「そんなの当然でしょ？ 現在女流棋戦58連勝、浪速の白雪姫は未だ継続中よ」

「そっか……ねえ、それじゃあさ……」

そこで中学生の私は一度言葉を区切って。

「……もしかしてさ、高校生の私って……」

その先の言葉を。

その先の答えを。この子が何を尋ねたいのか、それは聞かなくても何となく分かった。

だって……私も同じ立場だったら、絶対にそれが気になっちゃうと思うから。けれど。

「……ううん、やっぱいい。なんでもない」

「……いいの？」

「うん。いいや」

この通り、結局J C銀子はその先の言葉を口にしようとはしなかった。

「……そっか、分かった」

その先の答えを尋ねようとしなかった中学生の自分の事が、なんだかちよつとだけ誇らしかった。

3 2. 影響と変化の話

祝ッ!!

……と、言っつていいのだろうか。

それはとても難しい所だけれど……ともあれこうして俺は無罪放免、無事釈放となった。

……うーん。正直言うところの対応は意外だった。

なんせ俺は浮気をしてしまった。J C 銀子ちゃんとキスしてしまったんだ。となれば当然 J K 銀子ちゃんはブチ切れるだろうと、怒りのままに八つ裂きにされるだろうと思っつていた。

勿論悪いのは俺だ。だから如何なる制裁を下されようとも構うまい、全てを受け入れるっ!

……と、そう決意を固めていたんだけど。

しかしそんな覚悟とは裏腹に、銀子ちゃんは驚く程にあっけなく俺の事を許してくれ

た。

最後には寒空の下で土下座をしていた俺の身体を氣遣うような言葉までくれちゃつて……。

まさかあの空銀子があんなにも情け深い対応をしてくれるとは。

これは全くの想定外だ。この点に関して俺の読みは大きく外れる事となった。

付き合い始めてからあの子の心も大分読めるようになってきたなど自負していたんだけど……どうやらまだ甘かったようだ。幾つになっても銀子ちゃんの心というのは読めないね。

「……（そわ、そわ）」

「八一、なにをそわそわしてるの？」

声を掛けてきたのはJS銀子ちゃんだ。俺が買ってきてあげたソフトクリームをペロペロ舐めながらこちらに顔を向けている（かわいい）

その言葉通り、一人リビングに戻ってきた俺は今そわそわしていた。気になってちらちらと視線を向ける先、それは先程まで居たベランダの方向。

何故なら今、そのベランダではJK銀子ちゃんとJC銀子ちゃんがお話し中なのである。

「……ううむ」

俺がリビングに戻ってすぐ、交代のようにJC銀子ちゃんが呼び出された。

呼び出したのは俺の恋人で、呼び出されたのは俺の浮気相手。となるとこれは、ま、まさか、女同士の血で血を洗う戦いが始まるのでは……ッ！

……と、俺は戦慄したものだ……。

「……けど、大丈夫そう……だよな？」

「あの二人の事？」

「うん。JS銀子ちゃんにはどう見える？」

「どうって、普通に会話してるように見えるけど」

うん、俺も同感だ。こうして見た所あの二人は普通に会話をしているようにしか見えない。

JC銀子ちゃんの方はさすがに少し表情が強張っているように見えるものの、対してJK銀子ちゃんの表情は怒っているような感じじゃない。

あくまで普通通りの表情……というか、ちよつと困惑しているようにも見えるな。

「……お」

とその時。JK銀子ちゃんとJC銀子ちゃんが二人共に優しい笑みを浮かべた。

うわ、何があつたのかは知らんけどめっちゃ貴重なシーンを見た気分……。

とか思っていたら引き戸が開かれて、渦中の二人がリビングに戻ってきた。

「ふう、寒かった。八一、温かい紅茶を淹れて」

「私も」

「あ、うん、分かった」

オーダーを受けた俺はすぐにキッチンに向かう。

電気ケトルでお湯を沸かしながら二人の様子を窺ってみるけど……うん、やっぱり普通だな。

あの二人の間に何かしらのわだかまりが残ったようには見えない。二人共至って普段通りだ。というか早速とばかりに対局を始めてるし。

二人の間でどんな言葉が交わされたのかは分からないけど、なにせよ無事に済んで良かった。

こうして、俺とJC銀子ちゃんがキスしちゃった事件は結果として軟着陸に成功した。

そしてこの一件の影響だろうか、銀子ちゃん達の様子にもまた変化があった。

それから二日後の休日。

お昼ごはんを食べ終わって、幼女銀子ちゃんがすやすやお昼寝を始めた頃。

残りのみんなでする事と言えばもちろん将棋……ではなくて。

「……………むう」

三角座りをしながら、むすーとしたお顔になっているのは小学生の銀子ちゃん。

その不満顔の理由は手元にあるタブレット端末が表示する詰将棋アプリの難問……じゃなくて。

「改めて思うけど……やっぱり長いわよね」

「確かに。これは弄り甲斐があるわね」

その背後に座る二人の女性、JCとJK銀子ちゃんズがその理由だ。

二人共に手を伸ばして、小学生の自分が靡かせる長くて綺麗な銀髪をさらさらと撫でる。

「ええっと、こうして、ここを……ん？　ねえJK、三編みってどうやって作るんだっけ

？」

「こうするのよ。ほら、まず3つの房を作って、それで……あれ？　こんな感じじゃなかった？」

「……………むー」

「ちよつとJS、動かないの」

「そうよ。じつとしてなさい」

左右に分けた長髪を更に3つの房に分けて、銀子ちゃんズはちまちまと編み込んでいく。

小学生の自分にヘアアレンジを施そうとする二人の手付きは双方共に覚束ない。……けど、それでも真剣な顔で髪を結っていく。

「んー、なんか上手くいかない……昔桂香さんに教えてもらったはずんだけどな……」
「……もう、人の髪で遊ばないでよね……」

「別に遊んでないわよ。ねえJC?」

「そうそう。ちゃんと結んであげてるんだから」

J S 銀子ちゃんの長い銀髪、それを三編みに結ぼうと奮闘する二人の銀子ちゃん達。

自分の髪をおもちやにされているJ S 銀子ちゃんはむすーっとしているもの、J C とJ K 銀子ちゃんの表情は共に楽しそうで。

その光景はなんとというか……もし銀子ちゃんに姉妹が居たとしたらこんな感じのかな。

「……よし、完成」

「出来たの?」

「ええ、ちゃんと可愛く出来上がったわよ。……ほら八一、三編みのJ S、可愛いでしょ?」

「はい可愛いですとても可愛いです」

三編みJC銀子ちゃん可愛いです。率直に言って素晴らしいです最高です。

「……ほ、ほんと？ほんとに可愛い？」

「うん。めっちゃ可愛いよ」

俺がそう言うとうとJS銀子ちゃんは「……そっか、かわいい……えへへ」と嬉しそうにはにかむ。

ズ。あーもうマジかわです本当に良いものを見せてくれましたねありがとう銀子ちゃん

……ただ、肝心の三編み自体の仕上がりはちよつと不出来だけどね。

「めっちゃ可愛い、だって。ねえ聞いたJK？今の八一のロリコン発言」

「聞いた聞いた。こいつ今みたいなノリでそこら中の小学生に可愛い可愛い言っけて口説いてんのよ」

「んなつ、そんな事してないから！大体『三編みのJS、可愛いでしょ？』って俺に訪ねてきたのはJK銀子ちゃんの方じゃん！」

唐突なロリコン嫌疑に反論する俺。

しかし銀子ちゃんはしれつとした顔で言い返す。

「うそ、私はそんな事言ってないわよ」

「言つたよ！」

「ねえJC、私つてそんな事言つたっけ？」

「えー、言つてないんじゃない？ 八一が勘違いしてるだけだと思うけど」

こ、こいつら……！ 結託して俺を嵌めようとしてやがる……！

そして、そんな二人の表情はよく似ている。二人共に口元が微かに弓形に曲がついて。

とにかくこんな感じで、あの一件からこの二人は随分と仲良くなった……ように見える。

正直俺の考えとしては、あの一件によつて二人が喧嘩してしまうのでは。その後仲直りしたとしても関係がギクシャクしてしまうのでは。

……とそんな事を危惧していた為、むしろ逆に仲良くなるというこの状況にビツクリだ。安堵する気持ちはあれど、少し不思議に感じてしまう。

「ねえ、銀子ちゃん」

「なに？」

その辺の事情が気になったので、俺は直接尋ねてみる事にした。

JK銀子ちゃんがお手洗いから戻ってきた直後、洗面所にて声を掛ける。

「なんかさ、この前から随分とJC銀子ちゃんと仲良くなったんじゃない？」

「え。……………そう見える?」

「うん」

どうやらその変化について自覚は無かったのか。

俺がこくりと頷くと、JK銀子ちゃんは少し考えるように沈黙してから答える。

「……………そう、ね。まあ……………確かにそうかもしれないわね」

「だよ。俺もちよつと驚いててさ、銀子ちゃん的にはどういいう心境の変化?」

「……………別にそんな、心境の変化なんて大げさな話じゃないわよ」

ただ……………と呟きながら、JK銀子ちゃんは神妙な顔になって。

「あの子に関して、ちよつと見方が変わったっていうか……………」

「見方が変わった?」

「うん。……………ほら、なんていうか……………」

中学生の自分自身。それは夢の中だからこそ出会えた非現実的な相手。

それをどう見ているのかはこの子にしか分からない事だろう。銀子ちゃんは自分の

思いを確かめるかのように、ゆっくり言葉を続ける。

「まず第一にね、私とJC銀子って基本的に物事の考え方が同じなの」

「まあそりやそうだろうね。なんせ二人共同空銀子な訳だし」

「うん。まあそれは幼女やJSも同じなんだけど、特にJCとは年齢が近い分、より考え

方が共通してゐるっていうか、あの子が頭の中で考えている事とかも簡単に察しが付いたりするわけ」

「ふむふむ、それで？」

「そうなると思見が食い違ったり言い争いになつたりもしないでしょ？ それに自分の嫌がる事はお互いに分かるからその辺は避けてくれるので、慣れてくるとむしろ他人よりも接しやすいつていうか、気を遣わなくて済むつていうか……」

「なるほど。そういう感覚になるんだ」

俺がその言葉を返すと、JK銀子ちゃんは「うん」と柔らかい笑顔で頷いて。

「だから……なんていうのかな、もしかしたらこういうのが、とも——」
しかしそこでピタつと、まるで石化したかのように口の動きを止めて。

「……………」

「……………どつたの？」

「——別に。なんでもない」

長い沈黙の後、彼女は何事も無かつたかのように口を閉ざした。

……が。銀子ちゃんが何を言おうとしたのか、俺には手に取るように分かるぞ。

この子は今「もしかしたらこういうのが友達つていうのかもね」とか言おうとしたんだ。

けれど「自分自身が友達というのはあまりにも虚しい事なのでは？」と気付いて沈黙したんだ。

……大丈夫だよ、銀子ちゃん。

俺は友達なんて居ないぼっち上等な君の事が大好きだからさ。うん。

「黙りなさい。ぶちころすわよ」

「いや待つてよ銀子ちゃん。黙れもなにも俺今全く声に出してなかったですよね？」

「つべこべ言うな。大体そんなものはね、そもそも私には必要なかったというだけの事なのよ」

な、なんちゆう強がりを言うんやこの子……。

というかそれはもつと大切な、もつと重要な局面で使うべきセリフではないのか。

けどまあこれが銀子ちゃんだ。どこまでもこど……孤高を貫くのが浪速の白雪姫なのである。

「とにかく。私にとってJC銀子はそういう相手、そういう見方をするようにしたの。

だから……確かに前よりは親しくなったのかもね」

「そっか。良かった、なんか安心したよ」

「……安心、ねえ」

すると銀子ちゃんがじろつとした目付きを、探るような視線をこちらに向けてくる。

「なに、もしかしてあんた、あの封じ手のせいで私とJ.C.が喧嘩するかも、とか思ってた？」

「それは、えつと……まあ、そうつすね、その可能性もあるかな、とは」

「ならお生憎様ね。私は過去の私自身と争ったりするような狭量な女じゃないの」

そう言つて銀子ちゃんはふふんと笑う。

狭量な女。それは幼女銀子ちゃんも言つていた言葉だ。正直な話、自分は狭量じゃないわと銀子ちゃんに言われると、俺としては物申したい気分にならないでもないのだが……。

……まあ、いいか。俺は今日九死に一生を得たような身だ。これ以上あえて刺激はすまい。

「それに……さ。ほら、あの子は中学3年の頃の私でしょ？」

「うん、そうだね」

「中3の頃つて言つたら、私に対して八一が色々と意地悪をしていた時期だし」
んなッ!?

「い、意地悪!?!」

「うん。いじわる」

「い、いやいや、俺、銀子ちゃんに意地悪なんてしてないつすよ!」

「してた。だってあの頃の八一って私に対してすごく冷たかったもん」

「そ、そんな事は——」

——そんな事は無いよ！

と、口を突くままに反論しようとしたのだが。

「……いや、でも……意地悪……だったかな？」

「うん。意地悪だった」

「……………」

思わず沈黙してしまふ俺。

ふと考えてみるとそれは……その言い分には心当たりが無い訳でもないような、なんていうか。

俺とこの子は子供の頃からずっと一緒だ。互いの気持ちさえも子供の頃からずっと一緒だった訳なんだけど……そのわりには遠回りをしてしまったなという自覚はある。

特に俺が中学卒業後、師匠の家を出てから今こうして恋人同士になるまで。その間の期間は俺達の距離が一番開いていたとも言える時期な訳で……。

その頃の俺の対応というか、銀子ちゃんへの接し方を振り返ってみると……まあ、なんだ。確かに、ちよつと冷たかった、のかもしれない。

……でもさあ、だってさあ。

あの頃はさあ、あの頃は姉弟子が俺の事を好きだなんて思いもしてなかったし……。むしろその逆かのように思っていたから、あんまりべたべた馴れ馴れしくすると更に嫌われちゃうんじゃないかって、そんな事を考えちゃって足を踏み出す事が出来なかったんだよ……。

……けど、そんな俺の態度を冷たかったと銀子ちゃんが感じていたのなら……確かにそれは、意地悪だったと言うべきかもしれない。

「……………めん」

「別に今更気にしてないわよ。……むしろ、それはJCに言った方がいいんじゃない？」

「……………そうかもね」

「ええ。あの子はそんな時期の私、八一から意地悪されている最中の私なんだから……」

そこで一度言葉を区切って。

「……………ちよつとは優しくしてあげなさいよね」

そう呟いた銀子ちゃんの表情は、意外……と言っては怒られちゃうかもしれないけど。

とにかく、珍しいぐらいに優しくな顔で……思わず俺は見惚れてしまった。

「分かった？」

「……………うん、分かった」

そっか、そうだよな。

確かに冷たくした分、JC銀子ちゃんには優しくしてあげないとな。

「……………」

……………え。けれど、優しくって……………。

果たしてそれはどういった意味での、どういった優しさなのだろうか。

まさかとは思うけど、中学生にはまだ早い意味での優しくって訳じゃ——

「……………八一。今、えつちな事考えたでしょ」

「な、なな何を仰いますやら！ そんな事これっぽちも考えてないですよ！」

「どーだか。……………ま、JCとの接し方についてはあんたの好きにしたらいいわ」

「え、それってどういう——」

「あえて一つ言っておくなら……………別に私は怒ったりしないからね」

そう言っつて銀子ちゃんはまたふふんと笑う。

その表情といい思わせぶりな言葉といい……………なんか随分と銀子ちゃんが大人びて見える。

ていうかこれって……………あれか？ 俺は今、試されているって事なのか？

もしそうだとしたら、ここはビシッと宣言せねばなるまいて。

「……………大丈夫だよ銀子ちゃん。俺はもう君以外の子とキスなんてしたりしないからさ」

「は？ なにそれ。あんたそれでJ.Cの私が可哀想だとは思わないの？」

「ええ!! そうなっちゃうの!! でもじゃあ俺は一体どうすれば……!」

「だからそれはあんたの良識に全部任せるって言うてんでしょ」

りよ、良識って……それはまた随分と曖昧な表現というか、思わせぶりの言葉ではないか。

果たして良識で許される範囲とはどこまでなんだろう。うーん、これは難しい……。

「それより……」

と俺が頭を悩ませていると、そこで銀子ちゃんの様子が変わった。

声のトーンが少し下がって、俺の顔を覗き込むかのように見つめてきて。

「ねえ、八一は、もう——」

心配そうな顔で何事かを言い掛けた、その時。

「なにしてるの？」

「あ……」

「幼女銀子ちゃん、起きたんだね」

洗面所のドアが開かれて、お昼寝から起きた幼女銀子ちゃんがやってきて。

そのタイミングの良さ、あるいは悪さによって、JK銀子ちゃんはその先の言葉を遮られた。

「ふたりとも、対局しよ」

「……そうね。八一、リビングに戻りましょう」

「あ、うん」

そうしてその後はいつもの通り、みんなで将棋を指したんだけど……。

先程の言葉の先。それが銀子ちゃんにとって本当に話したかった事なんだろう。

それは俺がこの日まで避けてきていた、JK銀子ちゃんに心労を掛け続けてきた事。

恋人だからこそそのあの問題。それにいいよ向き合わなければならぬ。

遂にその時が来たのかもしれないと、俺はそんな予感がしていた。

33. 夜の話

「……………すー、すう……………」

「くう……………くう……………」

明かりを落とした真つ暗な室内、隣から聞こえてくるのは静かな寢息が2つ。わざわざ目を開けないでも分かる。それは幼女の私と小学生の私の寢息だ。

二人が眠つたのは布団に入つてすぐの事、本当に寝付きが良いと思う。幼女はまだしもこの時間帯でも眠れる小学生の私が正直言つて羨ましい。

今はまだ夜の9時過ぎ。中学3年生の私にとつては些か早めの就寝時間だ。

私も小学生の頃はこの時間に寝ていたはずんだけど、中学生になつてから実家に戻つた事もあつて就寝時間が遅くなつてしまった。

だからまだ眠くない……………んだけど、このワンルームの部屋では足並みを揃えるしかない。起きていた所で明かりが付けられないので将棋だつて指せないし、結局は眠る他に

そんな中、私は依然として瞼を瞑ったままで。

……まあ、別にね？

あの二人がどこで何をしていようが、それは構わないんだけど……さ。ただ、あいつら……。

この方法なら誰にも気付かれないよね、とでも思ってたのかしら。

「……………むう」

目の前に居るのはとてもかわいい幼女。盤面を睨みながらむすつとした顔になっている幼女だ。

その眉間の皺と、ぎゅつと握られたままのおててが悔しさを表している。

朝。学生銀子ちゃんズの登校を見送って、午前中は幼女銀子ちゃんとの将棋の時間である。

駒落ち戦はこの子がぶいって嫌がっちゃうので平手での対局。以前は勝ちを譲っていたものの、前にJK銀子ちゃんからお叱りを受けて以降は俺も普通に指している。

4歳の幼女と普通に指して、普通に俺が勝つ。そんな対局の繰り返しだ。

「……………むむうー」

可愛らしく唸り続ける幼女銀子ちゃん。

平手での対局を続ける以上、負けっぱなしとなるこの子の機嫌は当然ながら悪化していく。けれど一度ぎゃん泣きさせちゃったあの日以後、まだこの子はぎゃん泣きモードになっっていない。

……が、それでも悔しきはあるはずだ。いつか溜め込んだ思いが爆発しそうでちよつと怖い。その時は全力であやしてあげるしかない。

「……………ない。やいち、もつかい」

負けを認める言葉をぼつりと呟いた後、銀子ちゃんはいそいそと駒を並べ直す。

この通り、幼女銀子ちゃんはどれだけ負けても挑むのをやめない。何度でも、何度でも。

「つぎは勝つ」

ギリツと、射殺さんばかりの目付きで俺を睨んでくる4歳の幼女。

うんうん、やっぱそれでこそ銀子ちゃんだよね。この子は滅茶苦茶可愛いのは勿論なんだけど、それ以上に気が強くて負けず嫌い、それこそが俺が惚れた空銀子という人間なのである。

その心意気と根性に応える為にと、俺も手を抜かずに対局を続けて……。

「はい銀子ちゃん、お昼ごはんだよー」

そうしている内に時間は過ぎて、昼。

「……きょうも勝てなかった。くやしい」

出前で頼んだうな重をもぐもぐと食べながら、幼女銀子ちゃんのお顔は曇り模様。

「元氣出して銀子ちゃん。最後の一局はこれまでよりも良い攻めだったよ」

対局をした後のお昼というのは、基本的に幼女銀子ちゃんの機嫌を直す為の時間となる。

なので俺は自分の食事そっちのけで手を伸ばし、その頭をよしよしと撫でてあげる。

「ほら、いいこいいこ」

「んにゅ、さわるなっ」

けれどもご立腹中でムカムカしている幼女銀子ちゃんは俺の手をぺいっと払う。

「まったく、ちよつとばかりわたしに勝ちつづけているからってえらそうに……」

「いや、あの、一応俺、プロ棋士だからね？」

「そんなの知らない。やいちはどんなやいちでもわたしの弟弟子だもん」

拗ねるようにそう言いながら、ぶくつとほつぺを膨らませる幼女銀子ちゃん。

けれども確かにその通り、俺は弟弟子で銀子ちゃんが姉弟子だ。それは俺がどれだけ

成長しようと、この子が幼女であつても変わらない。

そう、俺は弟弟子なんだ。弟弟子には弟弟子の役目がある。

故に俺は弟弟子の責務として姉弟子のご機嫌を取るべく、お箸でうな重をひよいつと摘んで。

「はい幼女銀子ちゃん、あーん」

「あー」

箸を近付けると、幼女銀子ちゃんはえさを求める雛鳥のように大きく口を開く。

そしてぱくりと食べてもぐもぐ……うむ、しかしこの幼女、可愛すぎか？ ついさつき頭なでなではпейつとしたのに、あーんはしちゃう幼女銀子ちゃん、いやホントに可愛すぎでは？

その後、お昼ごはんを食べ終わって。

いつものようにいつもの如く、電気の切れた幼女銀子ちゃんしばしのお昼寝タイムに入る。

そうして2時頃になれば、幼女と交代するかのように別の銀子ちゃんが帰ってくる。

「ただいまー」

と可憐な声を聞かせてくれる小学生、J S 銀子ちゃんのご帰還だ。

「お帰り、JS銀子ちゃん」

「うん。ただいま」

「どうする？　すぐに対局する？」

早速とばかりに俺がそう尋ねてみると、JS銀子ちゃんは「……………」と何かを考えて。

「……………対局の前に、ちよつと休む」

「休む？」

「ん、休むの」

そう言つて背中からランドセルを下ろすと、すたすたとこちらに近付いてくる。

そして俺の隣にすくと腰を下ろして、そのまま身体を真横に寄り掛からせてきた。

「……………ふう、今日は体育があつて疲れた」

「あれ？　見学しなかつたの？」

「今日は体育館だったから」

「ああ、なるほど」

銀子ちゃんは生まれつき身体の色素が薄く、その為直射日光に弱い。

なので太陽の下で行う体育の授業は基本的に見学勢なのだが、しかし今日は体育館での授業だったので頑張つたみたいだ。

とはいえ体育館であつてもそもそも体力が少ない銀子ちゃんの事、体育の授業というのは他人が思う以上に大変だつただろう。見学するという選択肢だつてあつたはずなのに……。

「苦手な体育の授業を頑張るなんて、銀子ちゃんは偉いねえ。えらいえらい」

うん、銀子ちゃんは偉い。銀子ちゃんは尊い。だからなでなでしてあげようね。

「ん、う……」

幼女よりも少し大きめな頭を撫でると、J S 銀子ちゃんはくすぐつたそうに首を竦める。

「……ねえ、八一。なんだか最近、何かと理由を付けて私の頭を撫でてきてない？」

「え？ それはまあ……けど、銀子ちゃんだつて嫌いじゃないでしょ？」

「ま、まあ、嫌いってことはないけど……」

とかなんとか言つちやつてー。

嫌いどころかほんとは大好きなくせにー。このこのー。

と思つたが口には出さない。そんな事言つたら銀子ちゃんは反発するに決まつてるからね。

意地つ張りで頑固な銀子ちゃんのメンツというものを尊重しつつ、その上でスキンシップを図るのがこの子との上手な付き合い方なのである。

「……八一。今日は運動したから髪が乱れちゃってるかも」

「そっか。じゃあ直してあげるね」

J S 銀子ちゃんご自慢の……かは分からないけど、とにかく綺麗な銀の長髪。

そこには特段乱れなんてないように見えるが、ここでそんな事を言う程に俺はもう野暮じゃない。

この子が何を求めているかを察せれる程には俺も成長したんだ。なので俺は片手を回して、その長髪を手櫛で優しく梳いてあげる。

「ふ、あ……ごゆ……」

するとJ S 銀子ちゃんは目を細めて喉を鳴らす。

この子は特にこれがお気に入り入りのようで、見るからに心地よさそうな顔になる。顎の下を撫でられている時の子猫みたいでめっちゃ可愛い。

サラサラと揺れるロングな銀髪は本当に綺麗で、この髪でヘアアレンジを楽しみたくなっちゃったJ C と J K 銀子ちゃんの気持ち俺も良く分かる。

「さわさわ、さわさわ……」

「……ん、やいち……」

ああ、この手触りの良さはどれだけ触っていても全然飽きないな。さわさわ、さわさわ……。

……とそんな感じで、暫しの間J S 銀子ちゃんとのスキンシップを楽しんだ。

それぞれの銀子ちゃんのスケジュールの都合上、午前中は幼女銀子ちゃんと、そして昼は小学生の銀子ちゃんと二人きりになるケースが多い。

その時間は将棋を指したり、あるいは単にスキンシップを取ったりと、とにかく二人の銀子ちゃんとイチャつく事を俺は毎日の日課としている。

それは俺にとって幸せな日常だ。なんせ幼女銀子ちゃんもJ S 銀子ちゃんもめっちゃかわなのだ。

こんなにも可愛らしくてロリロリな銀子ちゃんと仲良くしている。それが幸せでないはずがない。

この二人のそばにいられるだけで、俺の心はあったかい幸福感で一杯になる。……けれど。

けれど、それでも少しだけ。

俺の心の奥底では、それでもあと少しだけが満たされないような心地が残っていた。

それはどうしてなのか。それはきつとこの二人の銀子ちゃん達の可愛さの質の問題だ。

幼女と小学生が持つ可愛さ。それは純真無垢な可愛さ、穢れなきピュアな可愛さで

あつて。

しかしそれでは足りないものが、ピユアな可愛さからは味わえないものが存在していて。一度それに触れてしまうと、心の奥底ではどうしてもそれを求めてしまうのだ。

つまり、これはこの子達が悪いんじゃない。

この子達では全てが満たされる事のない俺が、俺の方が穢れてしまったという事なんだ。

そして、そんな穢れた俺を満たしてくれる存在と言えば……それはやっぱりあの子だけだ。

——その後。

時間は飛んで……夜。

みんなが寝静まった頃。いつものように俺はひっそりと寢床を抜け出した。

そうしてやってきた洗面所で待つ事数分、いつものようにそのドアが開かれて——

「……八一」

洗面所に来てきたのはJK銀子ちゃん。

俺の満たされない心の隙間を満たしてくれる、とつても大切な恋人だ。

けれど……ああ、これはマズいかもな。

その考えは、こうして彼女と顔を合わせた直後から俺の胸中に生まれていた。

何故なら昨日までとは違って、今日の銀子ちゃんの表情は固く強張っていたから。

……いいや、実のところ予兆はあったんだ。それは以前から感じていた。

これは今日突然にそうなった変化じゃなくて、除々にそうなっていた変化なのだから。

「……ねえ、八一」

「どうしたの？」

「……あの、さ」

「うん」

二人きりでの洗面所の中、銀子ちゃんは中々話を切り出さない。

そして俺もあえて何かを言おうとはしない。なので二人の間でぎこちない会話が続く。

今、銀子ちゃんが何を言いたいのか、どうしたいのかは何となく分かる。

この子の考えとしては、むしろ俺の方から話を切り出して欲しいのだろう。

それが分かっている、けれど俺は何も言わない。ここでその話をする訳にはいかないから。

「…………ふう」

そんな俺の意固地な考えを察したのだろう。銀子ちゃんは呆れたように息を吐いた。それはお互い何を言いたいのか、何を言えないのかが分かり切っているからこそ。

だから銀子ちゃんはただ溜息を吐くだけで、そこから先へは踏み込もうとはしてこない。

……と、俺はそう思っていたんだけど。

その考えは甘かった。どうやら今日の銀子ちゃんはひと味違ったようだ。

「…………ねえ」

銀子ちゃんが一步前に踏み込む。そうやって俺との距離を埋める。

そして少しだけ顔を持ち上げる。そうやって俺との身長差を埋める。

そしてその顔は……ほのかに赤い。きつと次の言葉を言うのが恥ずかしいんだろう。

そんな表情をしているから、この子が次に何を言うのか、俺はもう聞かなくても分かった。

「…………八一。キス、して？」

「…………うん」

そんなの断れる訳が無い。

……けど、この子の方から求めてくるなんて。

分かってる。これは俺の為だ。銀子ちゃんは優しい子だからこうしてキスを求めてくれる。

でもこれは……この様子を見るともう一刻の猶予も無さそうだな……。

とそんな事を考えながら、俺は唇を寄せた。

「んっ……」

微かに喉を鳴らす音。とろけるような感触。

それだけでもう俺は感無量なんだけど、しかし今日はそれだけに留まらなくて。

「ん、……ちゅ」

——なっ、ちよ、銀子ちゃん!?

その唇が動く。触れ合ったままの口を開けて、はむはむと俺の唇を啄むように愛撫してくる。

そうして俺の唇をこじ開けると、そのまま銀子ちゃんの舌が伸びてきて。

「は、ん……ちゅ、ううん……」

銀子ちゃんの熱っぽい舌と俺の舌を重ねたって、そうして互いの唾液までも交わる。

それは以前、俺が誕生日プレゼントとして欲しがった時にはこの子が知らなかったキス。

口の中に舌を入れて絡ませる大人のキス。あるいはデーブキス。

「……はあ、ん……ちゆ、やいち……」

熱い吐息を漏らしながら、銀子ちゃんは舌と舌を絡める行為に没頭する。

ヤバイヤバイ。エロ過ぎる。こんな銀子ちゃんはヤバすぎる、俺の理性に制御が効かなくなる。

これ以上はマズいと思いながらもこの子を味わうのを止められない。ずっとこうしていたい。

そうして一分程唇を重ね合っていただろうか、

「……………ふは、はっ、はあ……………」

やがて銀子ちゃんが唇を離れた。

荒い呼吸を繰り返すその表情は赤く、力が抜けてとろんとしている。多分だけど俺も似たような表情をしているのだろう。

「……………はあ、やいち……………」

そうして普段とは異なる色の混じったその瞳で、俺の目をじっと見つめながら。

「……………ねえ」

そして、言った。

「……………ねえ、……………する？」

銀子ちゃんは、そう言った。

その言葉がなにを意味しているのか、そんなの改めて聞き直すまでもない。

……ああ、銀子ちゃん。とうとう限界が来てしまったのか。

ここまで我慢したのも、ここが我慢の限界だったのも俺の為だろう。つくづく優しい子だ。

だから銀子ちゃんを責める事なんて出来ない。

この子をここまで追い詰めてしまった事、それは他でもない俺のせいなのだから。

34. 命にも関わる話

……うゝ、うゝ、恥ずかしい……。

心の中でそんな泣き言を漏らしてしまう。

少しでも気を抜いたら、膝から崩れてへたり込んでしまひそうになる。

というのが今の私の率直な心境だ。

残念だけど、こういう状況下でそれでも強気で挑める程に私の心は強くない。

だからこうして八一と顔を合わせた時から、すでに私の心臓はドクドクと早鐘を鳴らしていた。

みんなが寝静まった頃合い、毎夜のように布団の中から抜け出して。

そして今、この洗面所には私と八一がいる。ここまではいつも通り、いつもの流れ。

けれど……ここから先はいつもとは違う。いつも通りの流れにはしないつもりだ。

私これから言おうとしている事。あるいはこれからしようとしている事。

それを考えると、恥ずかし過ぎて顔から火が出そうになる。今すぐここから逃げ出し

て布団にもぐり込みたくなっちゃう……んだけど。

でも。それでも。

萎えそうになる心に活を入れて、私は八一の顔をぐつと見据えながら、言う。

「……ねえ、八一」

「どうしたの？」

「……あの、さ」

「うん」

私の言葉に八一は相槌を返すだけ。……やっぱり、何も言つてはこないか。

でも、その理由だつて分かつている。分かつているからこそ今日は……今日こそは、

私が。

今日はそのつもりでここに来た。私はそのつもりで今、八一の前に立っている。

……先に言い訳しておくけれども、私は普段ならこんな事言わないし、こんな事しない。
い。

だって、そんなの……そんなの女性の方から言うなんて恥ずかしいもん。だからこういう事に関しては基本的に八一の方に意思決定を委ねており、当の八一もそれで良しとしている。

けれど……今日は私が言わなくちゃいけない。今日こそは私から切り出さなくては

ならない。

だって八一は優しいから。八一は優し過ぎて、自分からそれを言つてはくれないだろうから。

八一は私を気遣つていて、それが分かっているからこそ、私が……私の方から言わなくちゃね。

「……ねえ」

だって、だってこれは……。

これは、八一の命にも関わることなんだから。

「……八一。キス、して？」

だから言つた。

ええ、言つてやりましたとも。

「……うん」

すると八一はすぐに頷く。……けど、その声には何処か緊張の色があつた。

普段は言わない私からキスを求める言葉、その裏にある意図を何となく察したんだと思う。

「んっ……」

そして私と八一の唇が重なる。

何度触れても熱くて堪らない感触。私の大好きな八一の感触。

この柔らかな触れ合いにこのまま身を委ねていたいけど……今日ばかりはそうもいかない。

キスだけじゃ駄目だ。だってキスなら毎日のようにここできているから。

普段からしている事をしたって、そこに変化は生まれえない。八一の気持ちは動かさせない。

今日はキスだけじゃ駄目なんだ。私はその先へと踏み込まなければならぬ。

……こ、これはっ、これはね!?

これは、普通のキスよりも何倍も何倍もメチャクチャ恥ずかしいキスなんだけど……!?

けどっ、これは八一の為、八一の為なの! 八一の為なら私は……! う、う、え

いっ!

「ん、……ちゅ」

意を決した私は唇をゆっくり動かして、八一の唇を啄むように刺激する。

驚いた八一がその身体を強張らせるのが分かったけど……ここまで来たらもう止まれない。

「は、ん……ちゆ、ううん……」

そうして開いた齒の隙間を舌で突き破って、八一の舌と自分の舌を絡めさせる。

これが大人のキスだ。手を絡ませるのではなく、舌を絡ませるのが大人のキスと言う。(ティープキスとも言おうらしい。私は知らなかったんだけど八一が教えてくれた)

「……はあ、ん……ちゆ、やいち……」

これ、なんで……なんか、すごい、ふしぎ。

舌を、絡ませてる、だけ、なのに……なんでこんな……えつちな気分になるんだろう。

……あう、なんか、きもちいい、よお。もつと、ずつと、このまま……。

……つて、違う違うっ！

しつかりしなさい私！ ここで私が理性を失くしてしまつては意味がない。

むしろその逆、八一の理性を溶かさなくちゃならないんだから。

けれど……八一はまだ我慢しているみたいだ。

私の肩を掴む手にぐつと力が入っている。きつと心の中では強く葛藤しているのだろう。

ていうかこの私がかここまでしてあげてんだからいい加減に手を出しなさいよねこのクズ。

……と、普段ならそう言いたくなつちやうけど、しかしこの場においてはそれも言え

ない。

先程も言ったけどこれは私を氣遣つての我慢、八一は私の為に耐えてくれているんだから。

……もう、仕方無いわね。今日ばかりは特別だ。

優しくして頑固な弟弟子の為、この姉弟子が一肌脱いでやろうじゃないの。

……恥ずかしいけど。

「……はあ、やいちい……」

熱い吐息と共に唇を離して。

「……ねえ」

そして、言った。

「……ねえ、…………する？」

……ああ、言っちゃった。

こんな台詞、恥ずかしい。やだな。はしたない女だっと思われたらどうしよう。

「……銀子ちゃん」

私が行方を求めてくると半ば分かっていたのだろう、八一の顔に驚きの色は無

い。

けれどもさすがにノーリアクションではいられなかったのか、その喉がごくりと大きく動いた。

「……する、つていったつて、でもそんな……こんな洗面所でなんて……ねえ？」

ねえ？　じゃないでしょこのバカ。

する？　つて尋ねたのはこつちなのにに聞き返してきてんの？　バカなの？　死ぬの？

全く我が弟ながら本当に往生際の悪い男だ。こつちはこんなに恥ずかしい思いをしてるんだからとつととYESかはいで答えなさいよね。

ただこの期に及んで「するつて何を？」みたいにとぼけてこなかったのだけは評価する。もしそんな反応が返ってきていたらグーが出ていたと思う。

「……八一は、私としたくないの？」

「そんなつ、それは違うよ！　それは違うけど、ただ、ここでするのはさ……ほら……」
そう言つて八一はちらつと視線を横に向ける。

そつちには洗面所のドアがあつて——その先には廊下が、そしてあの三人が眠るリビングがある。

……八一の言いたい事は分かっている。

こんな洗面所で、こんな状況で、え、え、えつちな事なんて出来ないと言いたいのだらう。

それに関してははっきり言って完全に同歩だ。本当は私だってこんな場所でするのは嫌。

もつと落ち着けるような場所で、他に気を削がれないで八一の事だけを考えていられる場所で……八一と触れ合いたい、心ゆくまで愛し合いたい。

そして何よりこんな場所に変な事をしてたら、あの三人にもバレちゃうかもしれない。

もし私達のそんなシーンをあの三人に目撃されたらと考えると……駄目、想像したくもない。そんなの恥ずかし過ぎて頓死しちゃう。

「……まあ、ね。やっぱりリビングの様子は……どうしても気になっちゃうよね」

「うん。それにどう頑張ってもさ、その……ちよつとはあの……ほら、声が、出ちゃうでしょ?」

「……出来る限り、我慢、するけど?」

「い、いや、それもなんか申し訳無いし……」

申し訳ない。その言葉に今の八一の心情の大部分が詰まっていると思う。

だってここでえつちな事をする場合、より負担が大きいのは間違いない私の方だけ

ら。

それが分かっているからこそ……八一は誘いに乗ってこない。手を出してはこない。だからこれは私と、そしてリビングで眠る三人の私達と、つまり空銀子に遠慮しての選択で。

それが八一の優しさで……だからこそ私は、そんな優しい恋人に対して、言う。

「……だったら、ほら、……手、とか、口、とか、でも……」

「え、っ……！」

この切り返しは予期していなかったのか、八一が驚きに目を剥いた。

そしてぐぐぐと眉根を寄せる。あ、さてはこいつ……ちよつと悩んでいるわね。

「そ、そっか、手とか口……なるほど、その方法は考えてなかったな……」

そう。えつちな事はなにも身体だけではなくて、手とか口とかを使ってする事も出来る。

それも付き合い始めてから八一に教えてもらった事だ。もはや私はキス一つでおろおろあたふたしていたウブな女の子ではない。色々な事を知って大人の女になったのだ。

ただね、大人の女とはいってもね？

勘違いしないで欲しいんだけど、こんな提案するのはスゴく恥ずかしいのよ？

ていうかも頭おかしくなりそうぐらい恥ずかしいんだけどね!

——でも、それでも。

どれだけ恥ずかしくても、それが八一の為だったらしてあげたい。

いいえ、むしろしてあげなくちゃいけない。だって私は八一の恋人なんだから。

ていうか、そもそもの話ね?

どうして私がここまで、これ程に八一とのえっちにこだわっているのかって言うところ……。

それはほら……あれよ、あれ。

ほら、その……男の人の、生理現象ってやつ? その辺の事情なの。ほら、分かるで

しよ?

あのね? この話も以前、付き合い始めてから八一から教えてもらった事なんだけどね?
男の人の、その……下の部分の……なんて言えがいいのかな、あのく……せ、精囊つ

ていうの?

とにかく下に、ほら、その……袋になってる部分があるでしょ? あるわよね?

それでね? そこは、そこは男の人にとってなによりも大事な部分らしくてね?

それで、その袋の部分には、その、球と、あと……せ、せ、い、液が、入ってるんだつ

て。

の。……でもね。でも……男の人が、その袋の中で貯めておける液の量には限界がある。

特に八一みたいな若い男の人はそれが作られるのも早くて、すぐ一杯になっちゃうんだって。

だからそれは定期的に出さないといけないくて。

ずっと貯めておくのは、袋が一杯のままにしておくのは……どうやらとっても辛いらしい。

いいえ、辛いどころか……それは身体にも悪影響を及ぼしてしまう事なんだって。

何事も溜め込み過ぎは毒、これもそういう事なんだよって八一は言ってた。

だから一杯のままにしておく、次第に袋の部分には激痛が走って、それでも出さないと全身に毒が回って、最終的には命の危険に及ぶそうだと。

その話を八一から聞いた時、私は息の仕方も忘れる程の大きな衝撃を受けた。

だってそんな事全然知らなかったから。女性にとつての生理のように、男の人の身体にもそんな事情があるだなんて想像すらしていなかった。

そしてその話を聞いて以降、私はそういう事に対して、ちよつとだけ……。

ほんのちよつとだけだけど、それまでよりも積極的になったと思う。

だって出さないと八一が苦しむんでしょ？ 苦しいどころか八一が死んじゃうんでしよう？

だったらそれは……それは彼女の私がかしてあげなきゃいけない事じゃないの。恥ずかしいとか言ってる場合じゃない。恋人として八一の求めに応えてあげないと。つまりはこれよりゆうおうの彼女のおしごとの一環だ。

なの……なの……だ。

私と八一はここでの共同生活以降、まだ一度もそういう事をしていない。

ワンルームでの生活にはプライベートが無くて、そういう事をするタイミングが全く無い。

午前中ならどうかと前に学校を早退してみた事もあるんだけど、幼女が居るので無理だった。

それは八一にとっても同じで、きつと出すタイミングなんか全くなくて……。

……だから。

だから八一は今とても苦しんでいるはずだ。

袋が一杯になってしまつて、このまま出さなければ命にも危険に及ぶ、そんな状態にあるのだ。

けれども優しい八一は、そんな時でも私の事を気遣つてしまうから……。

だから、だからこそこは私がなんとかしてあげなくやいけないの。

「八一。もう限界でしょう？ これ以上苦しみに耐える必要なんてないから」

「…………いや。あのね、まだ大丈夫だよ？ そこまでキツイって訳じゃ…………」

私があぐつと視線を向けると、八一は逃げるかのようにすつと横に目を逸らす…………が。

大丈夫なんて言葉は嘘だ。八一は今必死で我慢してるんだ。ずっと耐えているんだ。

だってね？ この前…………一月程前かな？ お互いのスケジュールが全然合わない時があつたの。

その時は結局、私と八一が二人きりで会えたのが2週間ぶりぐらいになって…………。

…………そして。2週間ぶりにこの部屋で研究会を開いたら…………八一は即座に飛び掛かってきた。

もう限界だからと、今すぐ出さなきゃ死んじゃうからって、そう言つて私に手を伸ばしてきた。

そ、それで、なんかもう、なんかもうその日はほんとに何度も何度も…………今思い出しても恥ずかしいんだけど、とにかく沢山身体を重ねてしまった。

ま、まあ、そんな思い出はとにかくとして。

2週間でああなつちやうんだつたら、それ以上の日数が経っている今は更にキツイはずだ。

そう、絶対にそのはずだ。八一は平然としているけど本当は一刻を争う事態なはずなんだ。

だから私になんとかしてあげなくちゃ。

私が八一を苦しみから開放してあげなくちゃ！



……てな事をさあー！

きつと銀子ちゃんは考えてるんだよー！！

あーもうどうしよう、どうしよう！！

ほんとにあんな冗談言うんじゃないやなかつたっ！！

35. 思い違いの話

「八一。もう限界でしょう？ これ以上我慢なんてしなくていいから」

銀子ちゃん俺を気遣うような眼差しを、それはもう心底優しげな眼差しを向けてくる。

「……いや。あのね、まだ大丈夫だよ？ そこまでキツイって訳じゃ……」

一方穢れてしまった俺はその真摯な瞳を直視する事が出来ず、明後日の方向に視線を逃がす。

……いや、うん。分かってる。

これは全て俺が招いた事だ。全部全部俺が悪かった事だ。それは勿論分かっているんだ。

だから今、こうして俺が追い詰められているのも自業自得だ。特にその追い詰められ方が俺にとっては悪しからぬものである事も含めると、我が事ながらなんてヒドい話だと思えてきてしまう。

俺の犯した罪。それは銀子ちゃんに対して、他愛もない冗談を言ってしまった事。

そしてその冗談を今日この日まで訂正しようとしなかった事。それに尽きる。

この話を語ると、なんかちよつと生々しい話になつちやうなだけど……。

だから、そうだな。一応最低限の配慮としてアレな部分は『ピー』と伏せ字にする事にしよう。

とにかく、あれは確か……銀子ちゃんと付き合い始めて一月程過ぎた頃だっただろうか。

その頃にははもう……あの、なんて言うかな、その、俺達はもう初『ピー』を済ませていて。

それで……3回、いや、4回目ぐらいかな？　とにかく何回目かの『ピー』を終えて、それ終わりの気だるげな時間、というか……。

……まあつまりはピロートークだ。事件はピロートークの時間に起きた。

空銀子という女の子の特徴の一つとして、あの子は一度とろんつて感じになつちやうと暫くそのままになつちやうつていうか……。

思えば以前、桜ノ宮で撮影会をした時にも兆候は出ていたんだけど……要は甘えんぼうだ。基本的にあの子は『ピー』が終わると、その後暫く甘えんぼう状態になっている。きつと頭の中がとろけちやうなだろう、『ピー』終わりの銀子ちゃんはマタタビの匂い

に当てられた猫みたいになっちゃって、その後元のクールな状態に戻るには結構な時間を要するのだ。

だから『ピー』終わりのピロートーク中、銀子ちゃんは頭の中がぼわぼわになって、その影響で口の方もかなり軽くなっている。

例えばこの時に『いつ頃から俺の事が好きだったの?』とか尋ねてみれば、銀子ちゃんは『子供の頃からずっと♡』と簡単に答えてくれる。

普段なら言ってくれない事もピロートーク中ならすんなりと言ってくれる。それが空銀子ちゃん、とてもチョロくて可愛い俺の大切な恋人だ。

そしてピロートーク中はそんな感じなだけに……頭ゆるゆるな銀子ちゃんにあれこれ言わせようとして、結果的に俺の方もついつい口が軽くなる。

普段よりも会話が軽快になる事もあって、時に有る事無い事も口走ってしまったりする。

そして『ピー』終わりだから俺も浮ついていて、そして銀子ちゃんは先の通り思考能力が低下して……そこら辺の要因が色々絡み合って、それが落とし穴だったのだと思う。

とにかく俺は言ってしまった。

曰く「男つてのはね、『ピー』して『ピー』を出さないと死んじゃう生き物なんだよ」と。

そして銀子ちゃんは答えた。

曰く「……え？ そうなの!？」と。

……いや違うんだっ！ 信じてくれ！

俺は騙すつもりなんて毛頭なかった！ 本当に冗談のつもりだったんだ!!

銀子ちゃんが「なにバカな事言ってるの？」みたいな感じに返してくるかと思っただんだ!!

それなのに、それなのに銀子ちゃんは……俺が適当に吐いた冗談を真に受けてしまった。

男は『ピー』して『ピー』を出さないと袋がパンパンになってとても辛くてやがて死ぬ……なんて、そんな中学生でも信じないような冗談をこの子つてばあっさり信じちゃったんだもんっ！

……いや、それも仕方ない事なんだ。

なんせ銀子ちゃんだ。この子はガンダムという固有名称すら知らなかったような子だ。

空銀子とはそういう女の子、その頭に将棋の知識だけを詰め込んで生きてきた女の子なんだ。男の身体の仕組みなんて何も知らなくて、だから俺が言った冗談をそのまま信じちゃったんだ。

そしてそれ以来……銀子ちゃんは俺の健康状態を心配してくるようになった。

俺と会う度「まだ身体は大丈夫なの？」とか「今日は『ピー』しなくても平気なの？辛くないの？」とか、恥じらいの表情で俺にそんな言葉を掛けてくるようになって……。

そして……そして。俺はそんな銀子ちゃんの思い違いを訂正しようとはせずに。

むしろ……そこにつけ込んでしまった。銀子ちゃんが俺の身を案じてくれるのを良い事に、その後『ピー』の回数を増やしてしまった。それを口実にして『ピー』を何度もしてしまった。

……だつてだつて！ そりや普通そうなっちゃうじゃん！ 男だつたらそうしたいじゃん！

そーだそーだ！ 俺悪くないもん！ 銀子ちゃんがあまりにもウブすぎるのが悪いんだい！！

……いや、はい、分かっています。マジで俺が全部悪いんです。マジで。

そんな日々が続いた結果、俺は銀子ちゃんの思い違いを訂正する事が出来なくて

……。

いつかは気付くだろうと思ってたんだけど、中々そのいつかが訪れなくて……。

……そして、俺と銀子ちゃんはこの不思議な夢を見る事になって。

初日以降度々気に掛けてくれていたんだけど、その後一週間、二週間と日数を重ねて……。

そうして今日、銀子ちゃんに我慢の限界が来た。

八一はきつと辛い思いをしている。八一はきつと苦しい思いをしている。

そんな切なる思いに突き動かされて、こうして自ら『ピー』のお誘いをしてきたという訳だ。

「ぎ、銀子ちゃん。とりあえずさ、今日のところはもういいから……」

「良くないっ！ だって八一、この夢の中ではまだ一度も私と『ピー』してないじゃないっ！」

「いやそうなんだけど、でも別に——」

「私は……私はもうこれ以上、八一に辛い思いをしてほしくないのっ！」

——く、くうう……！

マジで優しい！ 銀子ちゃんってば優しすぎる……んだけど、今はその優しさが胸に

痛いっ！

この通り、銀子ちゃんは本気なのだ。

エロ目的とかでは無く、本気で俺を救う為に、言わば人命救助の為に『ピー』を誘っている。

だからこそ銀子ちゃんは引かない。そこには大切な恋人の命が懸かっているから。

「……銀子ちゃん、ほんとにごめんね」

「八」……」

銀子ちゃんってばただでさえ銀髪美少女なのに、これ程までに純真な女の子で……そんな子を騙していると思うと、途轍もなく罪悪感が湧いてくる。

……だがそんな一面とは別に、俺の心の暗い部分ではこの状況を肯定している面もある。無垢な銀子ちゃんを都合よく騙している事に興奮と情欲を掻き立てられる面も確かに存在していて……。

「別に謝らなくていいわよ。だってそれが、その、男の人の身体の生理現象なんですよ？」

「……いやもうほんとマジでゴメンね……」

俺を見つめる目、その綺麗な灰色の瞳には疑いの色など欠片も混じっていない。

ああもうどうしよう、どうすればいいんだ。銀子ちゃんがあまりにもピュア過ぎてツ

ラ。い。

俺の身を案じてくれているこの子を納得させる方法が思いつかない。けれどもさすがにここで銀子ちゃんと『ピー』するのはちよつと厳しいし……。

いやもうね、一番の解決策は分かっているんだ。

あれは全部ウソだよって、冗談だよって、白状するべきだよってのは分かっているんだけどさあ。

けれどここで全てを白状すると、俺マジで殺されるんじゃないかって気がしちゃって……。

「銀子ちゃん、今日はもう眠くなってきたからさ、ひとまずリビングに戻ろうよ、ね？」
「駄目よ！ そんな事言ったらいつまで経っても同じじゃない！ このまま放っておいたら八一が死んじゃうかもしれないでしょう!？」

「い、いや、さすがに、さすがに『ピー』しなかったぐらいで死ぬ事は——」
「死ぬわよ！ この前『ピー』した時に八一自身がそう言っていたんじゃない!？」

はい、言いました。そんな言葉を口実にして銀子ちゃんと『ピー』しちゃいました。ああ、なんて愚かでバカなんだ俺。まさしく自業自得、身から出た錆としか言いようがない。

そしてこれが自業自得というなら。

きっと俺は美味しい思いをした分苦しまなくてはいけないはずで。だからなのか、それは唐突に現れた。

その時洗面所のドアがバツと開かれて、

「なっ」

「え？」

振り向いた俺達の目に映ったのは。

「八一が死ぬって、どういう事……？」

当然ながら銀髪美少女、しかしその美麗な顔は血の気が引いた蒼白色をしている。

——まさかのJ C 銀子ちゃん、ご登場である。

「じえ、J C 銀子ちゃん!? ど、ど、どうしてここに!？」

「あ、あんたもしかして、私達の会話を盗み聞きしてたの!？」

「違うわよっ! 二人の声が大き過ぎてリビングの方にまで聞こえてんのよ!」

「え、あ、ごめん……うるさかったね……」

「てかさんな事はどうでもいいの! それよりも八一が死ぬってどういう事なの!？」

J C 銀子ちゃんの剣幕は真剣そのものだ。そりゃあ突然俺が死ぬと聞かされたらそ
うもなる。

けれど……ここ、これはマズいぞ! ここは慎重に言葉を選ばないと、これ以上更に手

が負えない事態になつてしまふ気がする……!」

「……えつとね。死ぬつていうのはその」

「J C 銀子! あんたは知らないでしょうけどね、これは男の人特有の症状なの!」

「お、男の人特有の症状!?!」

「いやあの銀子ちゃん、俺が説明するから」

「あんたは黙つてなさい! つまりね! 八一はもう限界なの! ここで『ピー』して『ピー』を出さないとマジで死んじやうの!!」

「ええ!? そんな、嘘でしょう!?!」

「ホントなの! 私も全然知らなかつたんだけど、男の人の身体はそういうふうになつてるの!」

「そ、そんな……!?!」

愕然とした表情になるJ C 銀子ちゃん。

とうるか俺も驚きだ。まさか二人がこれ程迅速に意思疎通を済ませてしまふとはね。その早さの前に俺は口を挟む事すら出来なかつたよ。

そして同一人物だけあつて見事に同じ冗談を真に受けちやつてるし。ああもうこの子可愛い、可愛すぎて俺は泣きたい。

「八一、あんたねえ! どうして、どうしてそういう大事な事をもっと早く言つてくれな

いのよー！」

「……はい。サーセンつした……」

「謝って済む問題じゃないでしょう!?! て、ていうか、それより身体の具合はどうなの!?!」

どうもこうもない。俺はバリバリ健康です。

「言うまでもなく危険よ。八一の身体にはもう限界が来ているはず、一刻の猶予も無いわ」

そんな事ないです。まるでへっっちゃらです。

「だからJC……私達は今日ここで『ピー』しないとイケないの」

「え、て、うい、で、こ、ここで!?! ここで今日で『ピー』なの!?!」

「そうなのっ! じゃないと八一が危ないの! これがりゅうおうの彼女のおしごとなのー!」

「(っ、(っ)で……(っ)で『ピー』を……!」

そんなシーンを想像したのか、愕然としながらも真っ赤な顔になるJC銀子ちゃん。

そんなウブな中学生をよそに、高校生の銀子ちゃんは決意を帯びた目で俺を見て。

「……そうよ。だって私は八一の命を守らないとイケないから。だから……」

改めて、言った。

「……さあ、するわよ。八一」

出来るかこんな状況でっ！ とか。

J C 銀子ちゃんが居る側にするんかい！ とか。

そんなツツコミすら許さない程、今のJ K 銀子ちゃんが全身から発するオーラがもの凄いい。

恐らく元々秘めていた覚悟や緊張、そして中学生の自分に知られてしまった羞恥心など。

それら色々なものが混ざり合って、今の銀子ちゃんのメンタルは天上を突破してしまっている。

俺に有無を言わせない目ヂカラと迫力で以て、銀子ちゃんが一步一步近づいてくる。

「……八一。とつとと服を脱ぎなさい」

「ぎ、銀子ちゃん、ちよつとタンマ……!」

「あなたは横になっただけでいいから。天井のシミの数でも数えてなさい」

「いや、ちよ、待って……!」

つーかそれ男の方が言うセリフだからっ！

あーもう駄目だ！ 今の銀子ちゃんは覚悟が決まり過ぎていて止まってくれない！

かくなる上は……!」

「——とうっ！」

俺は洗面所からダツシユで逃げ出した。

「あ、逃げた！」

「待ちなさいっ！」

そんな二人の声が聞こえたけど無視だ。決して振り向かずにリビングまで逃亡する。

勢いそのままに布団の上にダイブして、頭から毛布にぐるぐると包まった。

「ぐ、ぐぎぎぎ……そりゃあ俺だつて……！」

そりゃあ俺だつてしたいよっ！ 叶うなら銀子ちゃんと『ピー』したいよ！

でもこんな状況では。すぐ隣のリビングで銀子ちゃん達が寝ている状況ではさすが

に……！

「うぐぐううぐ……煩惱退散煩惱退散……！」

毛布に包まりながら呪文を唱える俺。

我が内にある穢れを払うべくと、布団の上で芋虫のようにぐねぐね身を振っている
と、

「……あ、これは……！」

そこで柔らかな感触を2つ見つけた。

勿論俺はすぐにそれを抱き寄せた。今はとにかく煩惱を払わなければならないから

だ。

「……ん、にゅ?」

「……わっ、や、やいち!? ど、どしたの?」

それは幼女銀子ちゃんとJS銀子ちゃんだ。

抱き寄せられた腕の中、幼女と小学生が薄く目を開けて俺を見る。

「……二人共、お願いがあるんだけど」

「……んー?」「お願い?」

「うん。今日は俺と一緒に寝て欲しいんだ」

「いつしよに?」「え……!?!」

寝ぼけ眼で呟く幼女銀子ちゃん。

ハッと目を開けたJC銀子ちゃん。

幼女と小学生の感触はとても柔らかくて、とても良い匂いがして、とてもあたたかくて。

「……駄目かな?」

俺は懇願するようにそう言う。

「……むう、こわい夢でもみたの? まったく、やいちは幾つになってもこどもなんだか

ら……」

すると幼女銀子ちゃんは呆れながらも、するりと手を回してきて。

「う、べ、べつに、一緒に寝るくらい、私は……いい、いいけど!」

一方JS銀子ちゃんは照れながらも、これまたするりと俺の首に手を回してくる。

「二人とも……ありがとう」

そうして幼女と小学生に両側から抱き付かれながら——俺は思った。

——ああ、なんて無垢な生き物なんだ。

これは妖精だ。いや天使だ。あらゆる穢れを寄せ付けない天使の銀子ちゃん達だ。

この子達がそばにいる。それだけで俺の穢れた心の全てが浄化されていく。

この子達のそばにいれば、俺は『ピー』の事なんて考えなくても生きていける。

この子達じゃもう満足出来ないだとか、そんな事を考えた昼間の俺をぶん殴りたい気分だ。

「ありがとう、ありがとう、銀子ちゃん……」

幼女とJSに深々と感謝しながら、俺はそつと瞼を閉じた。

頭の片隅では洗面所の様子が気になったけど……もう知らん、このまま寝ちゃう。

36. 人命救助の話

「……逃げたわね」

「そうね、逃げやがったわね。まったく……」

——あの根性無し。

と、JK銀子が声無き声で呟くのが聞こえた。

はつきり言つて私も同感だ。いくらなんでもあの逃げ方はちよつと格好悪すぎると
思う。

「……けど、どうするの？ JK」

八一がリビングへと逃げ出した後。

こうして洗面所に残された二人、私はJKの私と目を合わせる。

「……八一があの様子じゃあ今日はもう無理。ここは目を改めるしかないわね」

「そっか……目を改めても、その、まだ大丈夫……なんだよね？」

「……男の人にしか分からない事情だから何とも言えないけど……多分」

内心では強く不安を感じているのだろう、そう呟くJK銀子は浮かない表情をしていてた。

そしてその不安は私にも伝染する。だってそれはJK銀子が言う通り、男の人だけが分かる事情で女の私達には到底分からない事情なんだから。

いやそれどころか、私はそもそも……。

「……私、全然知らなかった」

「……JC」

「その、男の人が、その、あの、こう『ピー』をして『ピー』を定期的に出さないと大変な事になっちゃうだなんて、そんなの考えた事すら……」

「……でしょうね。なんせ私だって八一から教えて貰って初めて知ったんだから」

私はその事情を知ってすらいなかった。

男の人特有の生理現象と言うのだろうか、そんな事については全くの無知だった。

本当に自分の不勉強さが恨めしい……のか、それともこれは普通の事なんだろうか。もしかしたら世の女性達も同じ、特に中学生や高校生といった年代では皆同じように知らなくて当然なのかもしれないけれど……でも、それでも。

「なんか私……もつと色々な事への見識を深めておくべきだったかもしれない」

「……それ、八一からこの話を教えて貰った時、全く同じ事を私も思った」

似たような顔を見合わせて、私とJK銀子は互いに「……はあ」と溜息を吐き出す。自分で言うのもなんだけど、空銀子というのは内向的な性格をしている人間だ。

基本的に口数は少ないし、外に出るよりも室内で将棋を指しているのが好きな性格だし、友達とかも居な——じゃなくて、す、少なくて。

あまり他人と関わらない生き方をしている分物事を知らないっていうか、知識の偏りが顕著になっていて自覚はあったんだけど……それがまさかこんな事態を引き起こしてしまうとは。

「……けれど、さ」

「うん」

「そりゃあ、私が無知だったのが一番悪いとは思うけど……でも、八一だって、そういう事情があるなら教えてくれたっていいのに……」

「そうね。あいつがヒドい奴だって事には同步」

「そうだ。八一はヒドい。八一はとても薄情だ。」

そんな大事な話を、子供の頃からずっと一緒に居た私にも教えてくれないだなんて。辛いのに、死んじやう事だってあるのに……そんな事を黙ったままでいるだなんて。

「……八一が師匠の家を出たのも、もしかしてそれが理由だったりするのかな」

「……ひとつの要因ではあるかもね。私が同じ部屋に居たら、八一が一人で『ピー』する

事なんて出来なかつただろうし……」

その言葉に、私はくつと奥歯を噛みしめる。

八一は中学校を卒業するまで、15歳の時までは同じ家の同じ部屋で私と生活をしてきた。

もしもあの頃からすでにそういう状況にあつたのだとしたら。同じ部屋に居る私の視線が邪魔になって、八一が一人で『ピー』を出来なくて苦しんでいたのだとしたら……。

「……だったら、だったらなんでそう言ってくれないのよ、あのバカ……！」

「JK……」

『ピー』が溜まって苦しいなら苦しいって言ってくれば、それなら私だって、て、て、手伝いくらいはしてあげたのに……！」

それなら何でも手伝ってあげた。

どんな事にだって協力してあげたかった。

「……うん、そうだね」

私の心中を吐露する言葉を受けて、JK銀子もしんみりとした顔で頷く。

「……ん？」

……と思っていたら、すぐにきよとんとした顔に変わって。

「……つてあんた、手伝うつて言つても、その、どうやって手伝うのかは知つてんの？」
「え？ う、ゆ、だからその、八一を、え、えつちな気分になさなければいいんでしょ？ だから、こう、あの、し、下着、とか、見せたり、とか……」

「あ、ああ……なるほど。そういう手伝い方も……まあ……アリっちゃアリかもね」
そしてまたJK銀子が頷く。ちよつと赤くなつた顔でふむふむと興味深そうに頷いた。

……ていうか、え、なに？　そういう手伝い以外の手伝い方つてあるの？　そんなのないよね？

「そ、それともまさか、手伝いじゃなくてちゃんと八一と『ピー』をしろつて言いたいの？　けどつ、けどさすがにそれはまだ……！」

「あ、違う違うつ！　別にそういう意味で言つたんじゃやないからつ！　大体あの部屋で八一と『ピー』なんてそんな、そんな事をして師匠や桂香さんにバレたらどうするのよ」
「そ、それは……そう、だね」

確かにあの部屋で『ピー』は色々と厳しい。仮に私と八一がそういう関係になつていたとしても、師匠と桂香さんも一緒に暮らすあの家でそういう事をするのは大いに心理的抵抗がある。

となると私と八一が住処を別にするのは必然だつたのかもしれない。……ちよつと

寂しいけど。

「……いやでも、頑張れば出来ないかな？」

「が、頑張ればって……そもそも中学生のあんたに『ピー』の経験なんてないでしょうに」
「じゃあ経験者の意見としてはどうなの？ ああの部屋で師匠や桂香さんに気付かないよう
う八一と『ピー』するのは無理だと思う？」

「そ、それは……」

私のそんな質問に、JK銀子は顎の下に手を当てながら眉を顰めて。

「ま、まあ確かに、頑張ればなんとか……」

そう呟いた後、ハツとしたように顔を上げた。

「——って、そんな事はどうでもいいの！ と、とにかく、過去の事を後悔していても
しょうがないわ。それより今は現状の問題を考えないと」

た、確かにそれもそうだ。これ以上過ぎ去った昔を嘆いていても仕方がない。

問題は今、今現に『ピー』を出来なくて苦しんでいる18歳の八一の事だ。

「先程から説明している通り、もう八一は限界が近いはずよ。だから一刻も早く『ピー』
しなきゃいけない。ここまではいいわね？」

「ええ、分かっている」

「それでなんだけどね……本当は秘密裏に行おうと思っただけで、でもこうして

J Cに知られちゃった訳だし、私はむしろこれをチャンスだと思ふ事にしたの」
「とうとうと?」

私がそう尋ねると、J C 銀子は至極真面目な表情で口を開いて。

「うん。だからね……J Cにも協力して欲しいの」

「……え?」

——きよ、協力?

え、協力って、協力するって意味……だよな?

……あ、あわわ、あわわわわっ!

それってまさか、まさか、わわ、私とJ K 銀子の二人で、八一と、三人で『ピー』を……!?

えまってまってそれがチャンスなの!?! えだってだってでもそんな三人で『ピー』なんてそんなだって私まだ『ピー』の経験もないのにも八一の命が懸かっているなら私だってでもやっぱし『ピー』は『ピー』は……!-

「……ぴ、ぴい……」

「どうしたのJ C、急に真っ赤になっちゃって……って、あつ、ちが、違うわよ!?! 協力つ

てなにもそんな、あなたにも『ピー』をしろとかそういう意味で言ってるんじゃないから！」

「……え？」

「そうじゃなくて、ほら、私達が洗面所で『ピー』している間、リビングで眠っている幼女や小学生がこつちにこないよう見張っていて欲しいの。鉢合わせになっちゃったら大変でしょ？」

「……あ、ああ、そういう事……」

び、びつくりしたあ……。

そうならそうと先に言つて欲しい。危うく変な事を考えてしまう所だったじゃないの。

……ううん、もうとつくに変な事考えちゃつてたけど。う、うう……！

「……明日の夜、私は八一と『ピー』をする」

「っ、……」

「次は絶対に逃さないわ。どんな手を使ってでも『ピー』に持ち込む、八一の命を救つてみせる」

そう語るJK銀子の瞳は真つ直ぐで、必ずや八一を投了させるといふ決意に満ちていて。

「だからその間の協力を……頼んでいい？」

「……うん、分かった。任せて。八一の命が懸かってるんだもんね」

その決意に押されて私も頷いた。

だってこれは八一を助ける為。言わば人命救助の為の『ピー』なんだから。

……と、ここまでは良かったんだけど。

「……ねえ、JC」

その時ふいにJK銀子が私を見て、私の顔色を伺うかのような表情で口を開く。

「なに？」

「……そういう意味での協力、したい？」

「びいっ!？」

思わず悲鳴を上げる私。

えまってまってそんなだっっていきなりなにこれいきなりなんなのこれどういう質問

!?

「な、な、な、それって……!？」

だってその質問は……そういう意味、なの？

ここで私が『YES』と返したら……私は、ど、ど……どうなっちゃう……のかな？

！
そ、それはやつぱり、ぴ、ぴーいを、わたしとJKとやいちで……そんな、そんな……

「あなたはほら、中学生の私だし……どうしてもって言うなら、その……」

それはまるで悪魔の囁きのようにも聞こえて。

そんなJK銀子の言葉に、この時私は――

「……ほ、保留、で」

そう返すのがやっとだった。

……ともあれ。

こうして八一の命を救う為にと、私はJK銀子と人命救助の協力の約束をした。

その後リビングに戻って寝直して（幼女とJSを抱えて眠る八一の姿を見たら顔を踏んづけたくなった）起きたら次の日の朝、そして昼から夜と時間が進んで……。

……そして、あつという間にその時が訪れた。

「……………ん……………」

「くう、すう……」

夜。幼女達の静かな寝息が聞こえる夜。

真つ暗なりビングで私は布団に入って寝たふりこそしているものの、その瞳は開いたままで。

……だって今日は寝ている場合じゃないからね。というか眠気なんて微塵も感じないし。

それよりもJKとの約束通り、八一の命を救う為にちゃんと役目を果たさなければ。

「……………」

……あ、物音が聞こえた。

……ごそごそと聞こえる衣擦れの音。今日は眠る前に皆の寝場所を記憶していたから分かる、これはJK銀子が布団を抜け出す音だろう。

となるとこの数分後には同じように……ほら。

「……………」

また同じような音が聞こえた。

八一がそーっと廊下を歩いていく足音。そして洗面所のドアが開かれる音。

……うん。二人は予定通り洗面所に入った。ここまでは何も問題無し。

「……………(きよよろきよ)」

ふと気になって、私は両隣で眠っている少女と小学生の様子に目を向けてみる。

「くう、くう……」

「すうー、すうー……」

けれどもこの通りだ。……うん、大丈夫、ちゃんとぐっすり眠っているようね。

よしよし。ここまでは順調だ。この様子なら少女と小学生が洗面所に向かう事はない。なので後はJK銀子が八一の命を救ってあげるだけだ。

「……………」

……そう。だから、あとは、あれだ。

JK銀子が、八一、と、その、あの、洗面所で、その、ぴ、ぴいを、『ピー』を……！

「……………」

思わず弱々しく唸ってしまふ私。

だ、だって、なんか洗面所の様子を想像すると、う、か、顔が熱くなつてきちやうよお

……………！

って、違う違う！ これはそんな、その、なんかえつちな意味でとかじゃないの！

いやするのはえつちな事なのかもだけど、それでも八一の命が懸かっているんだもんっ

！

そう。だからこれは人命救助だ。これは『ピー』じゃなくて人命救助と言うのが正し

いはずだ。

「……人命救助、は」

八一、と、JK銀子の、様子は――

「……こない」

……昨日のように、八一がリビングへ逃げ出してくる気配は……無い。

これはJKの攻め手が実を結んだのだろうか。遂に八一の事を詰ませたのだろうか。

……だ、だとすると。……だとすると？

い、い、今頃、洗面所では八一とJK銀子が、あ、う、え、じ、じ、人命救助を……

!?

「……は、はわわ……」

じ、人命救助って、人命救助って……さ？

あの、こう……やっぱりその、色々な箇所の人命を救助する……んだよね？

まず最初にキ――じゃなくて。

あの、そう、だからその呼吸を、そう、人工呼吸なんかしちやつたりして？

それで、なんだろ、胸を……じゃない。

あの、こう、揉むっていうか、その……心臓マッサージとかも、しちやつて？

……それで、最終的に……あの、こう、えっと、うゝ、ああもう例えが思い付かないっ

!

つまりその、お、おしべと、めしべ、が、こう、くつつく……んだよね!?

「……(ぎくり)」

だ……駄目だ。どうしてもそつちの方に意識が向いてしまう。

これは決して卑猥な事じゃないのに。人の命が懸かっている事なのに。

そう、これはあくまで人命救助なの。だから落ち着いて、落ち着くのよ空銀子——
……と、私が自分の心を宥めていたその時。

『——あ』

「っ!？」

い、今、今微かに何か聞いてこえなかった!?

な、なんか私の声なんだけど、それでもなんか私の声じゃないっていうか……!

凄くあの、あの、なんか、高くて、掠れてて、え、えっちな感じの声が……!

「でもどうして、って、まさか……」

そして私は気付いた。

廊下のドアが半開きになっている。きつと最後に出ていった八一が閉め忘れたのだらう。

『——やつ、あ……』

そして、また。

微かに聞こえるこれは、この声は……！

『——はあ、ん……っ』

——じえ、JK銀子お！ 声が漏れてるよお！ 声がこつちまで聞こえてるつばあ

！

お願いだから、お願いだから人命救助の声のポリュームを抑えてえ！

「……んー？ なにか聞こえる……？」

え!? い、今のはJSの私の声!?

なんで、まさかこの子まだ眠ってなかったの？ それとも眠りが浅くて目が覚め

ちやつた!?

「なんだろ、洗面所の方から……？」

や、ヤバイヤバイ。JS銀子が洗面所を、人命救助の現場を気にし始めちやつてる。

今あの子が洗面所に向かおうものなら、じ、人命が、八一の命が大変な事に……！

か、かくなる上はっ！

「じえ、JSっ！」

「わあっ！ な、なに!？」

私はなりふり構わずその身体に抱き付いた。

抱き枕のようにぎゅつと抱えて、何も知らない小学生をここから逃さないようにする。

「え、JC!? なに、なんのつもり!?」

「……………」

「ちよつと! なんとか言つてよつ!」

私の腕の中でJS銀子はびっくりしている。

まあそりやそうだろう、突然自分に抱き付かれたら誰だつて驚く。というか怖いよね。

ごめんねJS。でもこれしか方法が無いの。私にはこれ以外の選択肢が思い付かない。

「…………JS、お願い」

「な、なに?」

「…………お願いだから、今日は私と一緒に寝て」

だからそう言った。

中学生の空銀子が、小学生の空銀子に対して懇願するかのようにそう言った。

「…………え? なに、JC…………まさか眠れないの?」

「……………うん」

「……………ええー……………」

私がこくりと頷くと、小学生の私は残念なものを見るような目付きになって。

「……………もう。あなたねえ、中学生にもなって一人で眠れないってどういう事なの？」

「……………ごめん」

「はあ、全く……………しょうがないなあ……………」

……………ああ、私、小学生の自分に呆れられている。

一人で夜も眠れない中学生だって思われてる。なんか、もう、泣きたい……………けどつ！
 けどこれは八一の為なんだ！ 八一の命を守る為なら私はどんな屈辱だって耐えて
 みせる……………ツ！

『——ひゃ、あ……………！』

「んっ!？」

「あれ、今なにか……………」

「き、気のせい！ 気のせいだから！ ね、ね？ 早く寝ようね！ ね!？」

「な、なんなの、もう……………」

私は両腕でその頭を包んで、そのままそつと両耳を覆い隠す。

お願いJS銀子。もう目を閉じて。あなたはあのJKの嬌声を聞いてはダメ。

あなたはまだ私やJKとは違う。まだ穢れを知らない無垢な状態の空銀子なのだから。

だからお願い……と、そんな私の切なる願いが天に届いたのだろうか。

「……くう、くう……」

その後暫く経つて、私の腕の中からは小さな寝息が聞こえてきた。

「……ああ、よかった……」

はあ、と肩を撫で下ろす私。

なんかもう、すっごく疲れた気分……。

『——う、あ……ん』

「ひっ！」

……けれど、洗面所からの人命救助の声漏れは依然として続いていて。

『——はあ、や、あ……っ』

「…………うう……！」

……残念ながら。

あるいは当然ながら？ とにかく私はその後も全く眠くはなれなかった。

……そして、翌日の朝。

目覚めて早々私は――

……ううん、違う。間違えた。本当は一晩中一睡も出来なかった。

とにかく差し込む朝日と共に起床して、JK銀子が目を覚ましてすぐに声を掛けた。

「ねえ」

「あ、おはよう」

「うん。それより人命救助は上手くいったの？」

果たして八一の命は救われたのか。

「ん……」

私が開口一番にそれを尋ねると、JK銀子はちよつと恥ずかしそうにその目を横に逸して。

「……ま、まあ、ね♡」

……こいつ、語尾に♡を付けたな。

「……………」

「……な、なに？　なんか目が怖いんだけど」

……どうやら今、私は怖い目をしているらしい。

それはきつと……寝不足だからだろう。うん、きつとそういうことに違いない。

「……なんでもない」

だってほら。この通り私は寝不足だから。

だから「頓死しろ」って、そんな事を言う気力すらも湧いてこなかった。

37. 空銀子たちの話

全身から伝わってくる甘美な感覚。

その温かさや柔らかささも全て、何度味わっても飽きない銀子ちゃんの感触。

「……………」

「え？」

「八一、あんたはちゃんと助かったのよね？」

「っ!？」

突然の話題に喉が詰まってしまった。

た、助かったというの……まさか、あの一件のことを尋ねている……のかな？

「どうなの？」

「えっと、それって……あの話、かな？」

「他になにがあるってのよ。で、どうなの？」

「……………まあ、はい、問題無しです。その件に関してはその、おかげ様でというか……………」

これはきつと『ピー』な話題……というべきか。

要はあれだ、人命救助の現場で戦っていた一人の少女の活躍の事を聞いているのだから。

となるとイエスともノーとも答え辛い俺としては曖昧に言葉を濁すしかない。

「そ。なら良いんだけど」

そう言つて彼女は軽く息を吐いた。

ああ、なんかくすぐつたい感じがする。どうしようもなくドキドキしてしまう。

「……色々と心配掛けてごめんね」

「別にそれは良いんだけど……」

ただ……、とJC銀子ちゃんは呟いて。

「……声、漏れてた」

「え、っ、う、そ、!？」

「ほんと。JKの声がうつすらと」

「……マジすか」

瞬間背筋に冷たいものが走る。顔からさーっと血の気が引いていく。

ま……マジで？ JK銀子ちゃんの声……リビングにまで漏れちゃってたの？

い、一応その点は考慮して、抑え目にしたつもりだったんだけど……。

「……えっち」

「ぐッ！」

「すけべ。へんたい。ケダモノ」

「ぐ、ぐぐ、ぐう……！」

……もはや言い返す言葉もない。

まさか声漏れしていたとは……ああああ、なんか無性に恥ずかしくなってきたっ！

てかそうなると、他の二人にもバレちゃってる可能性も？ え、それってガチ目にヤ

バくない？

……などと戦々恐々としていたら、途端にJC銀子ちゃんがもじもじと身じろぎしだ

した。

「……もういい」

「え、もういいの？」

「うん、だってなんかえっちな事されそうだし」

「し、しないってば、そんなこと……」

取り繕うように俺がそう答えると、

「……ふーん？」

とJC銀子ちゃんは俺の耳元で意味深に呟いて。

「……しないんだ？」

「——な、それは、どういう……」

「べつつにー、しないんだーって思っただけ」

その台詞は恐らく……実にしれっとした顔で言っているのだろう。

角度的に俺からは見えないけど、分かる。銀子ちゃんのからかう心が伝わってくる。

「……ぐぬぬ」

J C 銀子ちゃんめえ……！ こつちが大人の対応を取ればつけ上がりおって……！

こうしている今も俺がどれだけ我慢しとると思っせんじやいっ！ と言ってやりたい気分だ。

というのも……先程からの俺とJ C 銀子ちゃんとの会話、これは超至近距離で行われている。

互いの声が互いの耳元で聞こえる距離。互いの感触すらも伝わる程の至近距離。

まあつまりは抱擁だ。ハグだ。俺は今J C 銀子ちゃんを抱きしめちやつたりしている。

「でも、これはえつちな事じゃないよね？」

「……どーだか」

「どーだかってそんな……それにそもそもこれはJ C 銀子ちゃんか……」

「私はなにも言っていない」

つい先程。俺が風呂に入ろうと洗面所にやって来たたらJ C 銀子ちゃんが付いてきた。

そこで俺が「どしたの？」と尋ねたらJ C 銀子ちゃんは「ん」と呟いて両手を軽く広げた。

それがハグを求める仕草だと理解した俺は、遠慮なくその通りにしてあげたという訳だ。

実はこうした事はここ最近よくあったりする。切っ掛けはやはりあの封じ手事件だろう。

あの日以降、J C 銀子ちゃんはちよくちよく俺に甘えてくるようになった。上手く二人きりになれる機を窺って、こんな感じでハグやら何やらを求めてくる事が多くなった。

俺としてはなんというか、正直いけない事をしているような気がして凄くドキドキする。けど「J C には優しくしてあげなさいよ」ってJ K 銀子ちゃんからお達しを受けている訳だし、これぐらいなら問題ないよね？

……うん、問題ない問題ない。

これはセーフ。これはお互い合意の上だからセーフだよ。うんうん。

「……………」

なのでと俺はそーつと手を動かして、J C 銀子ちゃんの背中を軽く撫でてみる。さわさわ。

「っ、……………」

すると息を呑む気配と共に、J C 銀子ちゃんが身体を固く強張らせたのが分かった。

「…………やっぱりえつちな事してんじやないの。このバカ、クズ」

「おやあ？ この程度でえつちだなんて中学生の銀子ちゃんはウブですなあ」

「な、なんですつてえ…………？」

「この程度のボディタッチ、J K 銀子ちゃんだったら平気な顔で受け入れると思うけどね」

先程からかわれた意趣返しとばかりに、俺は挑発的な言葉を投げつける。

「ぐぬぬ……………」

すると高校生と比較しての言葉が効いたのか、J C 銀子ちゃんが悔しそうに唸った。

…………かと思いきや。

「…………そう」

途端にその声のトーンを変えて。

俺の耳に触れる程の距離まで唇を近づけて、そして言った。

「……じゃあ、さ………いいよ?」

「え?」

「……えっちなこと、しても、いいよ?」

「ええエエエエ!」

し、してもいいって、え、ま、ま、マジで!?

でもそんな、中学生になんてそんな、いやでも本人が良いと言っているなら良いのかな良いんだろわかいかいやけどどしどしさがにそれは――

「……(カプリっ!)」

「ぎゃー!!」

耳がっ! 耳を齧られたッ!

痛みと驚きに俺は抱擁を解いて一步飛び退る。

するとようやくJC銀子ちゃんの表情が、りんごのように真っ赤になっているその顔が見えた。

「嘘に決まってるでしょ! このエロ、エロ八一! とにかく次JKと変なことをする時は声漏れしないように注意しなさいよね! 私が言いたかったのはそれだけ! このバカ!」

そして銀子ちゃんらしくキレイかと思いきや、そのまま洗面所から去っていった。

「い、いたた……めっちゃ本気で嘔まれた……なんか耳たぶに菌型が付いた気がする……」

……けど、嘘か……そうか。

……いや違うよ？ 俺だって嘘だと分かってたからね？ うん、分かってた分かってた……。

「……さてと、お風呂入りますかね」

洗面所に残された俺は頭を切り替えて、ぱっぱと服を脱いで浴室のドアを開く。

けど声漏れしてたつてのは迂闊だったなあ。十分に気を付けていたつもりだったんだけど。

そう言えばここってワンルームマンションだから複数人で住む想定の造りじゃないだろうし、そもそも部屋の壁が薄かったりするのかな……。

……などと考えながら、シャワーでさっと身体を流して。

「……………ふいー」

そして肩まで湯船に浸かって、全身を包む熱々の心地に大きく息を吐き出した。

ああ……いい湯だなあ、極楽極楽……。



ああ……いい湯だなあ、極楽極楽……と。

熱々の湯船に浸かって、一日の疲労を湯に溶かしている真つ最中の九頭竜八一は知らぬ事。

「……よし、それじゃあ始めようかしら」

そう呟いたのは空銀子、高校1年生のJK銀子。

「さ、早く早く」

そして急かすJC。

「……………」

沈黙するJS。

「……ふあ」

そろそろ眠たくなってきたのか小さくあくびをする幼女と。

4人の銀子達が顔を突き合わせるような形でリビングに集まっていた。

「……………では」

この集いの発起人、JK銀子はいざタブレット端末に手を伸ばす――

……とその前に。

何故こうして4人の銀子達が集結しているのか、その理由は今から数分前に遡る。

それは八一が風呂に入つてすぐの事。

顔を赤くしたJ C 銀子がリビングに戻ると、そこへJ K 銀子が近付いてきた。

「ねえJ C、今大丈夫？」

「いいけど、なに？」

「この前のお礼も兼ねて、あなたには特別にあれを見せてあげようと思つてね」

「あれ？」

この前のお礼。それはあの日の夜、八一の人命救助に手を貸した事だろう。

一晩中寝不足にさせてくれた返礼として、J K 銀子は特別な何かを見せてくれると言
う。

けれどもあれとは何だろう。とJ C 銀子は一瞬だけ悩んだが……しかしすぐにピン
ときた。

「……あれつて、まさか……あれ？」

「そ。あれよ」

言葉に出さずとも分かる。同じ空銀子同士通じ合えるものがある。

二人は速やかに意思疎通を済ませ、そして両者共にイイ顔でこくりと頷いた。

こうして二人の銀子は一緒に『あれ』の鑑賞会をする事にした。

丁度今は八一が入浴中でリビングにいない、ここで『あれ』を見るには絶好のタイミングだ。

「ヤッつと……」

J K 銀子は愛用のタブレット端末を取り出す。

その中には彼女ご自慢の逸品、これまでに沢山集めてきたお宝画像が眠っている。

その収集活動は中学生の頃から行っていた事で、だからこそJ C 銀子もその存在を知っていた。

「その中には私が見たことのない写真があるって事だもんね。……なんか楽しみ」

「ふふつ、期待してくれて良いわよ。ここにるのはとっておきのやつばかりだから」

高校生と中学生、二人の銀子の顔には共に笑みが浮かんでいた。

互いにとって互いは自らと同じ嗜好を持つ者、言わば同好の士。好きなものを語り合える相手というのは貴重な存在だ。それが当の自分自身というのは哀しくないのか、とは言ってはいけない。

とにかく同好の士というのは貴重な存在、少なくとも銀子にとってはそうだ。

なんせ銀子は自らの嗜好について、同好の士などこれまで一度たりとも出会った覚えがない。

だがそれもそのはず、そのタブレット端末の中に眠る空銀子のとっておきとは……常人には中々理解出来ないものというか、少々特殊性癖に片足を突っ込んでいるようなもので。

「ほらJK、早く早く」

「急かさないの。全く……」

とはいえ理解され難い嗜好であっても、好きなものは好きなのだからしようがない。

こうして初めて出会えた同好の士二人、銀子達は早速『あれ』を見ようとしたのだが、「なにしてるの?」

「え、あ、幼女……」

その時背後から幼女の銀子に声を掛けられた。

どうやら二人の銀子がリビングの片隅でこそそしているのが気になったようで、小首を傾げる幼女の瞳は興味津々といった感じだ。

「……JK、どうする?」

「……そうね」

これは幼女にはまだ早すぎる代物なのよ。とここで大人の対応を取る事は簡単だ。

けれどもこの幼女とて空銀子。JKとJCが同好の士なのだとしたら、子供の頃の銀子とは将来同好の士になり得る存在と言える訳で。

「……よし。なら幼女。あんたにも見せてあげる。それとJSも呼びましょうか」という訳で、せつかくだからと幼女や小学生も誘って。

空銀子4人で『あれ』の鑑賞会をする事にした。……と言うのが話の流れである。

「まずはどれからいこうかなーつと」

そうして集まった3人の銀子達を前にして、JK銀子が軽快にタブレット端末を操作する。

「みんなでなにをみるの？ 将棋？」

「違うわ。見るのは写真よ」

「写真？ もしかして八一の写真とか？」

「そう。それもとっておきのね」

未だ事情を理解していない幼女の銀子、そして小学生の銀子がきよんとする中。

JKの銀子はふふんと笑いながら、端末内に保存されている秘蔵の画像フォルダを開く。

「……ええと、あなた達が見る事の出来ない最新のがいいから……ほら、これとかはどう？」

そうして画面に表示されたのは――

「あ、いいね……」

「……ん」

それを見て、JCの銀子は軽く頬を染める。

そしてJSの銀子はこくと喉を鳴らす。

「……………」

だがそれを見て幼女の銀子は沈黙するだけで。

「次は……そうね、これとか」

そうして次に表示されたのは――

「これ、中指のラインがすごく綺麗……」

「……………んー?」

それを見て、JCの銀子はまるで評論家の如く感想を述べる。

そしてJSの銀子は身体の内湧き上がってきた不思議な感覚に身震いする。

「……………むう?」

だがそれを見て幼女の銀子は首を傾げるだけで。

「なにこれ。なんで手のしゃしんばつかなの?」

それは手だった。右手だった。九頭竜八一の右手が収められた写真だった。

幼女の銀子はタブレットの画面に自ら手を伸ばし、何度も横にスワイプしてみる……

が、どれだけスワイプしても現れるのは右手の写真だけ。

「ねえ、やいちのしゃしんが見たいんだけど」

「だからこれが八一の写真じゃない」

「そーじゃなくて。もつとやいちがしつかりと写ってるのはないの?」

右手ではなく八一自身を、成長した八一のちゃんとした写真を見てみたい。幼女の銀子は右手のピアップ写真になどさっぱり興味が湧かない。

けれどもその考えはJK銀子やJC銀子にとっては異なるらしく、二人は若かりし頃の自分自身を眺めながらしたり顔で首を振る。

「ま、まだ幼女には分かんないでしょうね。八一はこの右手がいいのに。ねえJC?」

「その通り。八一と言ったら右手、あいつの存在価値の9割はこの右手にあると言ってもいいわ」

「そ、そんなに? それだと八一は右手を除くと殆ど価値が無いつて事になっちゃうんじゃない……」

「実際そんなもんでしょ。ねえJK?」

「そうね。さすがにJCは良く分かってるわね」

同じ性癖を持つ者同士、JKとJCの銀子はうんうんと頷き合う。

九頭竜八一の価値は右手にあり。棋士の真髄とはその利き手に宿るのだと言わんば

かりだ。

「ていうかJS、小学生のあんたにだったらちよつとぐらいは分かるんじゃない？」

「え、分かるって……なにが？」

「だから……ほら、この写真を見ていて何か感じる事はないの？」

「え、ええ？　そ、そう言われても……」

高校生の銀子に促されて、困惑した表情のJS銀子はタブレット端末に視線を移す。

そこに映っているのは右手だ。ただの右手でしかない……が、それは九頭竜八一の右手で。

5本の指、その爪、その指先、そしてその滑らかなフォルムを見ていると……。

「……………う。……………なんか、よく分からない、けど……………なんか、ちよつとドキドキするかも

……………」

どうしてか分からないけど惹き付けられる。JS銀子は思わず自分の頬を押さえた

……………熱い。

どうやらJS銀子は目覚め始めているようだ。JK銀子が「JSは素質があるよう

ね」と眩けば、JC銀子が「同じ空銀子なんだから当たり前でしょ」と冷静なツツコミを入れる。

「ならJS、これは？　この写真のどこが素晴らしいのかは分かる？」

「ん……その、小指が……小指がピン、ってしてる所が……ちよつと可愛い……かも」
「そう！ よく分かつてるじゃない！」

「さすがは私、さすがは小4つて所かしらね。ならほら、こつちとかもどう？」

「あ、うん……」

高校生と中学生と小学生。共通の嗜好を持つ者同士、銀子たちはタブレット端末に表示される右手の写真を和気藹々と鑑賞する。

「……むー」

しかしそのように3人だけ盛り上がられては、少女の銀子としては全く面白くない。

右手がなんだ。右手がどうしたというのだ。そんなの少女にとつては何ら興味の沸かない話だ。

「ねえじえーけー」

「なに？」

「じえーけーはやいちの右手をすきになったの？」

なので少女は話題を変える意味も込めて、率直に思った事を言ってみる。

「……む」

するとJK銀子の眉がピクンと動いた。

38. 更に空銀子たちの話

「じえーけーはやいちの右手をすきになったの？」

その言葉に、JK銀子は「……む」と眉を顰める。

「あのねえ幼女、これは別にそういう事を言っている訳じゃないの」

「そうなの？」

「そう。八一つてのは特に右手がいいよねーつて話をしているだけで、なにも右手だけを好きになったとかそういう話ではないのよ」

JK銀子にとって九頭竜八一の右手とは、あくまで自身の性癖に刺さる要素の一つでしかない。

そのわりには先程存在価値の9割があるとか言っていたりもするのだが、とにかく彼女はそれだけを以て八一に惹かれた訳では無いのだ。

「じゃあどこをすきになったの？」

「えっ？」

「やいちのどこ、すきになったの？」

こてりと首を傾げる4歳の銀子。それは幼女にとって前々から気になっていた事だった。

自分は大きくなったら八一から告白されて恋人同士になる。……らしいのだが、しかして自分は八一のどこら辺の評価して、どういう部分が好きになって恋人となったのか。

八一の良さとは一体何なのか。それを是非とも大きくなった自分自身に聞いてみたかったのだ。

「八一の何処を好きかって、それは……」

「どこなの？」

「だから、その……」

あなたは恋人の何処が好きなの？ それは恋愛トークにおいて鉄板とも言える話題。

その問いになんと答えるべきか、恋愛初心者のJK銀子はしばらく言葉に悩んで

……。

「……八一の何処を好きになったか、ね」

「うん」

「……ほらJC、言ってみなさい」

「え、私が!？」

悩んだJKは年下のJCにバトンタッチ。

「じゃあじえーしー、おしえて?」

「え、と、だからその、つまり、なんだろ、何処が好きっていうか、ええつと……」

「どこなの?」

「だからっ、右手と、あとはこう……なんかこう、全体的っていうか、なんだろ、その……」

八一の事は間違いなく好きだ。

しかしそれを言語化しようとする……どうしてか中々言葉にならない。

突然話題を振られた事もあって、最初テンパっていたJCの銀子ではあったが……しかし。

「あの、その……」

「かっこいいところとか?」

「格好良いところ? ううん、それは違う」

——格好いいところ。

その言葉に対しては即座に冷静になって首を左右に振ってみせた。

「ちがうの?」

「そうね、それは違う……ていうか、八一に格好良いところなんて……ある？」

「え、無いの!？」

驚きの声を上げたのは小学生の銀子だ。

彼女は成長した八一と顔を合わせた時、格好良いなあと心をときめかせてしまった前科がある。

なので八一にも格好良い所ぐらいあるだろう、いやあつて欲しいなと願う立場だったのだが。

「……うーん、けれどあのバカに格好良いところなんて……ねえJK、どう思う?」
「そうねえ……」

年上の銀子達二人は共に悩みの表情で。

二人がこれまで見てきた九頭竜八一。あの弟子に格好良いところなんてあつただろうか。

思い出される記憶といえば、ロリを見ればあつちにフラフラ、巨乳を見ればこつちにフラフラと、そんなダメダメな思い出ばかりで……。

「……無いんじゃない?」

「そうね。無いと思う」

答え、無し。という事で落ち着いた。

ただそれではJ S銀子は納得いかないのか、食って掛かるような勢いで反論する。

「そ、そんな……そんな事はないはずよつ！ そりや確かに八一は普段からちよつと駄目な所は多いけど、それでも探せば格好良い所ぐらいちゃんとおあるはずだもん！」

「……J S、そう思いたい気持ちは分からないでもないけど……でも実際は……ねえ？」

J K

「……うん。格好良い八一、となると……」

4人の空銀子達の中でも一番八一を知る女。

いやそれどころかこの世界で一番八一の事を知る女、J K銀子は再度うーんと頭を悩ませて。

「なら間を取って……稀にはある、という事で」

小学生の夢を壊さぬようと、最終的にそんな形の結論を導き出した。

「稀……なの？」

「稀か、確かにそうね。格好良い八一なんて普段はまず見れないけど、それでもまあ大阪に雪が降るぐらいの頻度では見られるかもしれないわね」

「え、そんなに少な——」

「えー、そんなにある？ 対局が台風で延期になるぐらいの頻度じゃない？」

「ええ！？ でもそれってもう年に一回あるかどうかってレベルじゃ……！」

格好良い九頭竜八一とは年一の代物。その衝撃的な事実にはJS銀子は悲鳴を上げる。けれど一方でJK銀子は成長した分達観しているのか「そんなもんでしょ」とあつさり呟く。

「基本的にね、八一つてのはダメなヤツなの。特に格好良さなんてのは以ての外よ。八一は格好付けようとすればする程にダメさが増すタイプだから」

「ああ、分かる分かる。あくまで普通になっているのがいんだよね。八一つてのはさ」「そうそう。だから格好付けようとしてちゃんと格好付く八一なんて……そんなのはまさしく年一ぐらいでしか見られないでしょうね」

そう語るJK銀子にとって、ここ最近見られた格好付いた八一と言えば……あれだ。今からもう半年近く前、福井県の八一の実家の柵田で告白されたあの日の出来事まで遡る。

なので次見られるのは半年後、その位の期間を開けなければ格好良い八一の姿なんて見られないだろうなあと内心覚悟していた。

「……やいちはだめな男なの?」

「そうね。ダメダメよ、ダメダメ。それは幼女のアンタにだってなんとなく分かるでしょ?」

「ん。やいちはだめだめ、それはわかる」

4 歳児の幼女銀子から見ても、九頭竜八一がおバカでダメダメな奴だという事は分かる。

分かるんだけど……けれどもその場合、自分は将来そんなダメダメな奴と付き合うという事で。

「なら、じえーけーはだめな男がすきななの？」

と尋ねてみると、JK 銀子は「んぐつ」と喉を詰まらせた。

だってその言い方では……それではなんか、自分こそがダメな女に聞こえてしまっていないか。

「……あ、あのね幼女。違うから。そうじゃない、そういう事じゃないから」

「でも、やいちはだめだめなんですよ」

「そ、それはまあ……」

「それでかつこよくもないんですよ？」

「ま、まあそうだけど……」

「でもそんなやいちが好きなんですよ？」

「そ、そうなんだけどつ、でもそれは、それはつまり、なんていうかその……」

幼女が言う言葉に間違いは無い。……が、しかしこのままではマズい。

このままでは幼い頃の自分からダメメンズ好きの烙印を押されてしまう。それは嫌だ。

だからここは絶対に反論しなければ。そう思うJK銀子だったが……またしても回答は控えた。

「確かに八一はダメな男だけど、でもそれだけじゃないのよ。……ほらJC、言つてやりなさい」

「え、また私にパスするの!?! ……ほらJS、今度はあんたが言つてやりなさい」

「ええ!?! 私にまで振るの!?!」

回り回つてお次は小学生の番。

見ればJKとJCは我知らぬとばかりに顔を背けている。この辺は年上故のズルさが出ている。

「て、ていうか別に、別に、私は別に八一の事なんて好きな訳じゃないから……!」

「ウソおつしやい。私が小4の頃なんてもう将棋と八一の事しか頭に無かつたはずよ」

「そ、そんな事ないもんつ! 自分が高校生だからつて勝手な事を言わないでくれる!?!」

「ほらJS、そういう言い訳はいいから。あんたの答えを幼女が待つてんのよ」

「うん。おしえてじえーえす。じえーえすはやいちのどんなところが好きなの?」

「え、ええく!?! そ、それはあく……!」

幼女が向けてくる無垢でピュアな眼差し、誰しもがこれには弱い。

それはJS銀子も例に違わず、彼女はあたふたと落ち着かない様子で視線を彷徨わせ

て。

「だ、だからね？ 八一はほら、あれで結構優しい所はあるから……まあ確かにダメダメだし、あんまし格好良くもないんだけど……でもなんか、そんな所も含めての八一だから、その、八一だからしょうがないっていうか、まあ良いかなっていうか……」

「だめでもいいの？」

「うう……良いって訳じゃないんだけど……でも、でも八一だから良いのっ！ なんか、なんかよく分かんないけどそんな感じなの！」

「よくわかんないの？」

「そうなの、よく分かんないの！ よく分かんないけど八一が良いっていうか、八一のそばに居たくて、なんか八一じゃないとイヤで……」

確かな本心を語っているのだろう、J S 銀子の顔はもう真っ赤だ。

けれどもその言葉はどうにも曖昧で抽象的な表現が多く、まだ4歳の幼女には理解が難しい。

「……つまりそんな感じなのっ！ 分かった!？」

「ううん、よくわかんない」

「だ、だからあっ！」

自分の言葉が上手く伝わらない。

どうしようかと困り果てたJ S 銀子は……未来の自分を真似る事にした。

「だからね、だからそのく……、じゃ、JK! あなたが答えてよっ!」

「えっ、なんで私が——」

「そうそう、中学生や小学生にパスしないで高校生のあんたが答えなさいよね。大体JKは現在進行系で八一と付き合ってるんだから恋人の好きな所ぐらい言えるはずでしょ?」

「ぐっ……!」

痛い所を突かれてJK 銀子が呻いた。

確かにこの4人の中では自分だけ、唯一自分だけが九頭竜八一と恋人関係になっている。

だったらこれはやはり自分が言わなければならない事、JCやJSにパスしてはいけない事だ。

「……仕方無いわね」

JK 銀子は一度こほんと咳払いをして。

「……けどまあ、おおよそJCとJSが言った通りだと思ってくれていいわ」

「うわ、ズルい言い方」

「うるさい中学生。大体ね、私だってあなた達と同じ空銀子なんだから頭の中身は同じ

なの。高校生になったり付き合い始めたからって特別八一への見方が変わったりする訳じゃないんだから」

「そうなの？」

「そうよ。それこそ少女の頃から比べても大して変わってないと思うけどね」

そこで一呼吸置いたJK銀子は、不思議そうに首を傾げる少女の銀子に目を向ける。

「……そう、私はこんなにかつた頃からずっと八一と一緒にいたから、だからあのバカの事はなんでも知っていて……」

自分こそが九頭竜八一の事を一番知っている。

銀子はそのように自負しており、この点に関しては誰にも譲るつもりは無い。正直これに関してはこちらよつとばかり知った気になっている小童共なんて歯牙にも掛けない。

唯一対抗馬が居るとしたら桂香だ。自分や八一にとっての姉のような存在である清滝桂香はそりやもう八一の事を熟知しているだろう。

ただそれでも、桂香よりも自分の方が八一を見てるはずだ。なんせ自分は八一に恋をしていた。だから自分が一番八一の事を見ていたはずで、そんな自分が思う九頭竜八一評こそが一番的を射ているはずだと銀子は考える。

「だから……ねえ、少女」

「なに？」

「あなたにとつての八一つてのはどんな男？」

J K 銀子が幼い自分にそう尋ねてみると、4歳の小さな銀子は「んー……」と数秒唸つて。

「将棋がよわくてバカなおとこのこ」

「それだけ？」

「……けど、やさしいところはある、かも」

その答えにJ K 銀子は「そうね」と頷く。

「将棋が弱いつて所以外は私も完全に同歩。八一はバカだけど優しくて、けど優しいっていつても私以外の誰に対しても優しくするようなヤツだし、さっきから言つてる通り格好良い姿なんて滅多に見られないし……要はダメダメなヤツなのよ」

自分にとつて八一とはそんな男だ。決して悪し様に言っている訳では無い……はずだ。

そのくせ妙に女からモテるのがまたムカつく所ではあるのだが……しかしそれには理由がある。

それはきつと良いところだけを見ているから。八一に惹かれる女共が八一のカッコ悪い部分を知らないから、ダメダメな部分を見てないからだろうと銀子は考える。

「いい幼女？ 私に別に八一の駄目な所やカッコ悪い所が好きないの。むしろ

それは直して欲しいと常々思っているわ……けど」

「けど？」

「ほら、幼女には前に教えたでしょ？ いずれ八一の事しか考えられなくなる病気に罹るって」

「うん、しつてる。こわい」

こくりと首を縦に振る幼女。

未だその病に罹っていない頃の自分を見ながら、高校生の銀子は真面目な表情で言葉を続ける。

「それでその病気に罹ると……八一ならいいかな、って感じになっちゃうの。駄目でも格好悪くても、八一ならしょうがないかな、って気分になっちゃうのよ。さつきJSもそう言っていたでしょ？」

「うん。よくわからなかったけど」

「そうね、だから実際よく分からないのよ。きっとそういう病気なんだと思う」

「……そっかあ。病気ならしかたないね」

病気というなら何も言えない。

幼女銀子が納得したようにそう呟くと、

「ほんとにね。特に私は八一とずっと一緒だったから、その分悪化しちやってるんで

しようね」

J K 銀子も諦め気味の表情で同意する。

見ればJ C 銀子もうんうんと頷いている。

先の通り、空銀子は九頭竜八一の事をこの世界で誰よりも一番知っている。

だからこそ病気に罹ってしまつて……その重篤度具合で言うなら自分に敵う者など居ない。

こんな事で張り合うのもどうかと思うが、とにかく病気の進行度で言えば自分こそが一番なのだ。

それは例えば、棋界を代表する竜王になつて以降の顔しか知らない小童共とは違う。

そしてよそ行きの顔しか見た事の無い何処その女流玉座や山城桜花共とも違う。

なんせ4歳の頃からずっと一緒に居たのだ。自分こそが一番八一の事を深く理解している。

それは例えば、八一がプロになつての初戦、A級棋士に大惨敗してその後行方不明になつたりと。

他にも竜王位防衛後、引退間際の棋士にこれまた大惨敗して自分の膝の上で大泣きしたりと。

他に例を挙げればキリが無い。八一のそういうダメダメで情けない姿は銀子だけが

知っている。

そして、銀子はそういう無様な八一を見て決して失望したりはしない。だって八一はそういう情けない奴だと子供の頃から知っているから。

……いや、それどころか――

……そんな所すら愛おしいなど、そこまで思ってしまう程には病気が悪化しているのだ。

「ねえじえーけー、その病氣、なおすほうほうはないの？」

「治す、か……それはとても難しいわね……」

「難しいってか、無理じゃない？ そんな生半可なものじゃないでしょ、これって」

「……ていうか、これは治しちゃいけないものなんじゃ……」

……と、4人の銀子達が語り合っていると。

「……ふう、サッパリしたー」

「あ、八一……」

風呂から上がって、着替えを済ませた寝間着姿の八一がリビングに戻ってきた。

「あれ、どしたの？ みんなして集まっちゃって」

「ううん、別に？」

素知らぬ顔で答えながら、JK銀子はタブレット端末をそそくさつと背後に隠す。

まさか4人の銀子達でフェチ画像の鑑賞会をしていたなどとは言えない。更に八一への恋愛論を語っていたなど当の本人には絶対に言えない。

「さ、それじゃお開きにしましょうか」

「そうね。中々良いものが見られたわ」

「え、なに、みんなで映画でも見てたの？ だったら俺にも見させてよ」

「駄目よ。これはあんたが見て楽しいと思えるようなものじゃないの」

こうして空銀子達の集いは解散する運びとなったのだが……。

「……むう」

すると即座にJS銀子が立ち上がって、ムツとした顔のまま八一の下へ近付いていく。

「……八一！」

「は、はい！」

そしてその顔をぐつと睨みながら、場違いな程の大声で言った。

「もうちよつと格好良くなりなさいっ！」

「え、ええ!? い、いきなりどうしたの?」

「さすがに年一は辛い! だからせめて月一、月一ぐらいで格好良くなつてっ! お願
い!」

「え、あ、うん、が、がんばります……?」

なんの事かよく分からなかったが、八一はとりあえず同意しておいた。

すると幼女銀子もてくてくと近付いてきて、不思議そうな顔で八一の右手をきゅつと
掴んだ。

「……んー?」

「幼女銀子ちゃん、どうしたの?」

「……じい」

「えつと……」

「……(ぺちぺち)」

「あの……」

その右手をじっくりと見つめてみたり、手の甲をぺちぺちと叩いてみたり。

けれどもそれはやはりただの右手。その魅力は未だ幼女には理解し難いもの。

「……むーん、やっぱりよくわかんない」

「何が分からないの?」

「やいちの良さ」

「え!？」

「むう、もうねむい、ねる」

八一が思わずドキリとする言葉を残して、おねむになった少女はお布団の方へ歩いていく。

「ええつと……これ、どういうことなんです?」

「もつと精進しなさいって事よ。ねえJK?」

「そうそう。年若い銀子達はピユアなんだから、せいぜい失望されないようにしなさいよね」

「ええー……」

困惑顔の八一をよそに、JCとJKの銀子は茶目つ気のある顔で微笑み合った。

39. 空銀子VS空銀子の話

——しん、と静まり返った空気。

集中した棋士達が作り出す対局の場の空気、その静けさを引き裂くように。

「……………ううう!!」

と、可愛らしい唸り声が聞こえて。

「ふええ！ ういいいい、〜！」

すぐに甲高い幼女の泣き声に切り替わる。

こうして聞くとあれだね、可愛らしい幼女というのはその泣き声ですらも可愛いね。

ああ、将棋を指しながら耳にする幼女の泣き声というのも中々乙なものだなあ……。

「ふぎゆう〜、びいいいい〜〜！」

……………なんて、現実逃避気味に浸ってる場合じゃないだろ俺のバカっ！

あああああつ！ た、大変だつ！ 幼女銀子ちゃん、幼女銀子ちゃんが泣いちゃつ

たっ！

「ううええ、びやあああ〜……………！」

その可愛らしいお顔をくしゃつと歪めて、おめめから大粒の涙を流す幼女。

なんてこった、またこの子が泣き出したら止まらないぎゃん泣きモードになってしまった。

以前に一度ぎゃん泣きして以降、ここ最近はこうして泣く機会も無かったというのに……。

「……ふええ、づいええん……」

そして幼女銀子ちゃんは大泣きしながら対局の席を立ち上がって。

そしてよちよちと近付いてくる。

幼女銀子ちゃんがよちよちと……俺の下に。

「……やいち、いゝ……!」

「幼女銀子ちゃん……よしよし、いい子だね」

「うええ、ひつく……」

俺の胸元でえんえんと啜り泣く幼女銀子ちゃん。

ああなんて切ない姿、なんて可哀想な幼女。堪らず俺はその身体をぎゅつと抱きしめちゃう。

こうして俺に泣きつく姿が示す通り、今回この可愛い幼女を泣かせちゃったのは俺ではない。

今回の犯人は俺じゃなくて、先程幼女銀子ちゃんが座っていた席の対面に座る人物――

「……………」

ちよつとバツが悪そうな顔で沈黙する高校生、JK銀子ちゃんによる犯行だ。

「あーあー、泣ーかせたー」

「うるさい小学生」

「あーあー、幼女かわいそー」

「うるさい中学生。あんた達は自分の対局に集中しなさいよね」

「ていわれてもね。そんな泣き声を響かせられたら集中力だつて切れちゃうわよ」

「そうそう。周りの迷惑も考えてよね」

幼女を泣かせた犯人に対し、JSとJCの銀子ちゃん達から非難の声が飛ぶ。

……が、JK銀子ちゃんを取り合わない。歯牙にも掛けぬとばかりにつーんと素知らぬ顔だ。

今回の幼女銀子ちゃんぎゃん泣き事件。

その切っ掛けはとて些細な事……というか、まあ言っちゃうと将棋である。

今日は休日という事もあって午前中からみんなで将棋を指していた。そうして対局ローテーションが幼女対JKの組み合わせになって……事件はその対局、というか指導

対局の時に起こった。

元々空銀子の指導対局というのは少し厳しめ……というか、ぶっちゃけかなり厳しめだ。

その厳しきこそが『浪速の白雪姫』による指導対局の特徴で、厳しさの中にもほんの僅かな厳しさが見え隠れする、そんな激辛さ加減に虜となる者が後を絶たない。

指導調教とも呼ばれるそれは世の将棋ファン達には大人気を博しているんだけど……どうやらその厳しきは幼女にはあまり適さなかったようだ。

J K銀子ちゃんつてば、序盤から幼女の悪手を問答無用でピシバシ咎めていくんだもんなあ。あれは泣くよ、小学生ぐらいなら余裕で泣くと思う。

とはいえ幼女銀子ちゃんは今日までに何度もJ K銀子ちゃんと対局している。だからその厳しきは身を以て知っているはずんだけど……今日に限って泣いちゃったのはどうしてか、今日は特別に厳しかったりしたのだろうか。

あるいはそれとも……これまで負け続きの鬱憤が溜まりに溜まって、という事かもしれない。

元々この中で一番年下の幼女銀子ちゃんは基本的に誰と対局しても負ける。相手が実力上位なのだから仕方無いと受け入れつつも、それでもやっぱり溜まっていく感情はあるはずで。

それがついに今日弾けてしまったのか、とにかくこうして幼女銀子ちゃんはぎゃん泣きモードになってしまったという訳だ。

「……ふえ、ふえつく、えつぐ……」

「よしよし、よしよし……」

「びい、やいちい……」

「よーしよし、いい子だからね……」

ああ駄目だ、泣いている幼女銀子ちゃんを見ると俺もツライ。メンタルがガンガン削られる。

空銀子の顔に涙なんて似合わないのだ。よーしよし、いい子だから泣き止もうねー。

「……ていうかJK銀子ちゃん、相手は幼女なんだからもっと優しくしてあげなきゃ……」

泣きじゃくる幼女の頭を撫でながら、俺は犯人の事をやんわりと嗜めてみる。

「……うるさい」

しかし犯人も……ていうかJK銀子ちゃんも負けじとこちらを睨み返してくる。

「なに？ 私が悪いとでも言いたいのか？」

「悪いとまでは言わないけどさあ、もうちよつと手心を加えてあげても——」

「言つとくけど私はいつも通りに指しただけよ。負けた悔しさで泣くのは勝手だけだね、それを勝った方のせいにするのはお門違いじゃない？」

「それは……」

それは……確かにその通りかもしれない。

J K 銀子ちゃんが何か酷い事をしたというならともかく、これはただ単に将棋を指しただけ。

それがちよつと厳しめだとしても、単に将棋を指して実力通りに勝つただけならば、確かにJ K 銀子ちゃんを責めるのは間違いだらう。

だって将棋に負けるのは弱いから。だつたらこれは幼女銀子ちゃん自身の責任だ。自らその涙を拭って、負けた悔しさを受け止めて成長するしかない。

……と、いうのが正論ではあるんだけど。

しかし正論が人を納得させるとは限らない。特にその相手が幼女であつては尚更。

「……う、ぐすつ……」

やがてぎゃん泣きモードが終了して、ぐずぐずと鼻を吸りだした頃。

「……むむう……」

幼女は涙の代わりに怨嗟の呻きを漏らし始める。

その感情は恨みと——そして怒り。

「…………ぐににいく……………」

「…………なに？」

ギリツと鋭い目付きを向ける幼女、対してクールな目付きを返す高校生。

二人の視線の中間でバチバチと火花が散る、そんな光景が俺の目には確かに見えた。

俺が知る限り、空銀子という生き物は泣かされた恨みを決して忘れることはない。

負けた悔しさと泣かされた事への恨みは別、やられたらやり返さなければならぬ。

そしてその恨みの対象に関しては、どうやら成長した自分自身であつてもお構い無し

なように。

「…………むう」

その後、幼女銀子ちゃんは自分の対局もそっちのけでJK銀子ちゃんの事を睨み続け

てきた。

そんな様子はその後お昼まで続いて。

「…………むむうう……………」

「…………JK、睨まれてるけど……………いいの？」

「いいのよ。別に気にならないから」

ぶすーつとした顔で憎き高校生を睨む幼女。

だがそんな視線などまるで意に介さず、JK銀子ちゃんはずくずくとお昼ごはんを食べ続ける。

「……むむむうう……」

そして幼女の恨みはお腹が満腹になっても一向に晴れる事は無く。

それは昼寝の時間でさえも。

「……むにやむにや、……じえーけー、ぜつたいゆるすまじ……むにやむにや」

この通り、おねむ中の寝言ですらJK銀子ちゃんへの恨み節を吐き出す始末。

この尋常ならざる執念深さ、それこそが空銀子という棋士の棋力を鍛え上げてきた根幹。

幼女の頃から、いいや生まれた頃から備わっている銀子ちゃんのメンタリテイなのである。

そしてお昼寝が終わって、午後の将棋の時間。

「むう……」

案の定というべきか、おねむから目覚めてもその恨みが晴れる事はなかったらしい。

幼女の目付きはお昼寝前と変わらず鋭いまま、相変わらず高校生の自分へと刺さって
いて。

「むむうく……」

「なあに？ そんなの悔しいならもう一局やる？ 私なら幾らでも付き合つてあげるわ

よ」

その眼光を平然とした顔で受け止めながら、JK銀子ちゃんがそう口にする。

将棋の悔しきは将棋で晴らすしかない。それを深く理解しているからこそその「幾らでも付き合つてあげる」という言葉。その言葉はきつとひたすらに厳しい銀子ちゃんなり
の優しさなのだろう。

「……やる」

その優しさに気付いたのかどうか、とにかく幼女銀子ちゃんがこくりと頷く。

そして対局の席に座つて、再び幼女対JKの対局が始まった。

「……むむむ」

とはいえそれは年齢差にして約12歳。干支が一回りする程の戦力差がある訳で。

特にその相手が成長した自分自身とあつては、年若い方が勝つ可能性は限りなく低い
だろう。

そして二人の対局は実力差通りに進んで……数十分後に決着が付いた。

「……む、むうく……」

「……幼女。この局面はもう詰んでるって、あんたならそれぐらい分かるでしょ？」

「……………うう」

がつくりと俯いて呻く幼女。その小さくなっちゃった姿が勝敗を如実に表している。まあそりやそうなるよね。なんせJK銀子ちゃんってばマジで手加減無しだから……………。

「……………まけた」

「どうする？ もう一局やる？」

相変わらずの厳しさで幼女をあつさりと負かしたJK銀子ちゃんは、これまた相変わらずの平然とした顔でリベンジするか？ と問い掛ける。

「……………」

けれど幼女銀子ちゃんは答える事が出来ない。

恐らくどれだけ戦ってもこれは勝てる相手じゃないと分かっている。高校生の自分との実力差を正しく理解しているんだろう。

それはもう仕方ない事と言える。なんせこの子はまだ4歳の幼女なのだから。

「やるの？ やらないの？」

「……………」

自分には勝てる相手じゃない。

それは分かっているんだけど……………それでもどうにかして鬱憤だけは晴らしたい。

いつかの時と同じように、どうやら幼女銀子ちゃんはそんな事を考えたらしく。
「……………」

そして対局席からすくつと立ち上がる。

それはいつかの時と同じ手法……代理対局。

「……………じえーえす」

「な、なに？」

「じえーけーにふくしゅうして」

「え、私が!？」

驚きに眼を見張るJS銀子ちゃん。

今回幼女が白羽の矢を立てたのは小学生の自分、幼女から5年程成長した9歳の銀子ちゃんだ。

「じえーえすだって、これまでじえーけーには負けっぱなしでしょ？」

「そ、それはそうだけど……………」

「くやしくないの？ ふくしゅうしないの？」

「うっ、それ、は……………」

その言葉にJS銀子ちゃんは表情を曇らせる。

確かにJS銀子ちゃんだって立場的には幼女銀子ちゃんとそう変わらない。これま

でJK銀子ちゃんとの対局では散々に負かされている。

JS銀子ちゃんは幼女よりも年齢が上な精神的に成長しているので、高校生の自分に負けたからって泣いたりはしないんだらうけど……。

「じえーえす、このままでいいの？」

「……そう、ね。このままで良いはずが無いわね」

とはいえそこは空銀子。幼女であつても小学生であつてもその精神性は変わらない。その根っこには超負けず嫌いな一面がある。それが銀子ちゃんという生き物だ。

「……分かったわ。幼女、私が戦つてあげる」

そう言つてJS銀子ちゃんは頷き、幼女の代わりに対局席に座つた。

「勝負よJK！」

「へえ、幼女の次は小学生つてわけ？ ま、私は誰が相手でも構わないけど」

JK銀子ちゃん是不敵な笑みで頷き、そして小学生対高校生の対局が始まつた。

序盤の進みを見る限り……うん、やっぱり幼女銀子ちゃんよりは形になっているな。

「負けないっ……！」

「ふふっ、まあ幼女よりは歯応えがありそうね」

真剣な表情で盤を睨む小学生、一方余裕綽々の態度を崩さない高校生。

JS銀子ちゃんは小学4年の9歳。この歳ならずで奨励会に入会していた頃なは

ずだ。

となればその棋力は一廉のもの。決して軽視出来るものではない……はずなただ。

しかし対局相手のJK銀子ちゃんは16歳四段。押しも押されもせぬ本物のプロ棋士。

そんな相手に勝とうというならば……それはやはり奇跡でも起こらない限り難しいだろう。

……が、それでもまだ分からないっ！

将棋というのは必ずしも実力上位の者が勝つ訳じゃない。むしろ実力下位の者であつても3局あれば1局ぐらいは勝てちゃったりもする、それが将棋というゲームの奥深さなんだ。

ならJS銀子ちゃんがJK銀子ちゃんに勝利する可能性だつてある、決してゼロではないはずだ。

——だから頑張れJS銀子ちゃん、頑張れっ！

幼女の思いを背負つて戦うんだ！ 君が高校生の銀子ちゃんを倒すんだ！

……と、心の中でそんな応援をしていた俺の期待も虚しく。

「……………きゆう」

と鳴くJ S 銀子ちゃん。奇跡……起こらずっ！

対局は実力通りに進んで、なんの波乱もなくJ K 銀子ちゃんが勝利した。

「まだまだ読みが浅いわね。もっと局面局面で真剣に考える癖を付けなさい」

「うう……JK、やつぱり強い……」

「むむう、じえーけーめえ……！」

J Sと幼女が悔しげな視線で見つめる相手。

それは最強の女王、空銀子。長らく女流棋界の頂点に君臨し続けているラスボスの如き存在。

あらゆる挑戦者をなぎ倒していく、それはまさに今の女流棋界と同じ構造で。

そんなラスボスに勝てる可能性があるとしたら、それは多分——

「……よし」

幼女銀子ちゃんはまた立ち上がって。

てくてくと向かった先。それはこの対局を遠目から観戦していたあの子の下。

そう、女流棋界のラスボス相手に勝てる可能性があるとしたら。

それはきつと、同じく女流棋界のラスボスであるあの子ただ一人だけだろう。

「……じえーしー」

「……………」

「じえーしー、おねがい、かたきを討って」

40. 更に空銀子VS空銀子の話

——『空銀子』

それは女流棋界に燦々と輝く名前。

これまであらゆる挑戦者をなぎ倒してきた、まさしくラスボスの如き名前。

今日もそんなラスボスに挑んだ若き幼女が、次いで小学生が無残にも敗れた。

そして次に白羽の矢が立ったのは——

「じえーしー、おねがい、かたきを討って」

「……………」

縫るような幼女の声。

幼い頃の自分の言葉をJC銀子ちゃんは表情も変えずに受け止める。

多分だけど、展開的に次は自分にお鉢が回ってくると彼女も分かっていたのだろう。

「……………ふう」

相手がどれだけ強大であろうと挑む事を止めない、それが空銀子という棋士の生き様。

故にJ C銀子ちゃんは小さく息を吐くと、意を決したように立ち上がった。

「……分かった」

そして向かうは——ラスボスが待つ玉座。

「……次は私が相手よ、J K」

「そう、いよいよ中学生ってわけね。ま、誰が相手でも結果は同じだと思うけど」

力強い眼差しを向ける挑戦者。対して不敵な笑みを崩さないラスボス銀子ちゃん。

二人の力量差はその表情が物語る通り。幼女や小学生と同様、中学生の銀子ちゃんであつても高校生相手にはこれまで連敗続きなんだけど……。

「……今日こそはJ Kに勝つツ！」

力の籠もった宣言一つ。

そして力の籠もった指先で角道を開けて、J C対J Kの対局が始まる。

相手は女流棋界のラスボス、今や世界初の女性プロ棋士にまでなつてしまつた高校生の銀子ちゃんな訳だけど、それでも唯一勝つ可能性があったらやつぱりJ C銀子ちゃんだろう。

J C銀子ちゃんは中学3年生の14歳。この頃なら段位は二段だつたはず。J K銀子ちゃんとは1年半程度の年齢差があるものの……逆に言えばその程度の年齢差しかないとも言える。

そもそも将棋というのは年齢差で相手を分けるゲームじゃない。成人にもなっていない俺と引退間近の蔵王先生が対局する事もあるように、勝負の場では年齢差など一切考慮されない。

J C 銀子ちゃんも奨励会では自分より年上の相手と何度も戦ってきているはずで、一年半程度の年齢差など言い訳にならない事は百も承知だろう。

……と、いうのが一般論ではあるんだけど。

しかしそれはあくまで普通の対局の場合、普通の世界での一般論であつて。

「……………」

対局が中盤に差し掛かった頃合い、J C 銀子ちゃんの表情が曇り出す。

ここまですく食らい付いて来ていたけど……どうやら差がはじめてきたようだ。

先程の年齢差など言い訳にならない理論。その考え方はしかしこの二人の対局に限って言うなら当て嵌まらないと言わざるを得ない。

なんせ相手は他人ではなく自分自身。となれば年若い方にとって年齢差というのがそのまま不利な要素になるのは間違いない。棋力が衰えてくる老齢ならまだしも、未成年の銀子ちゃんはまだ成長期の真っ只中にある訳だしね。

そしてなにより……年齢が違うという事は、その分知識量に差があるという事でもある。

将棋の世界は日進月歩だ。この1年半の間に生まれた新たな研究、コンピュータ発の
新手など、そういつたJK銀子ちゃんには知っているけどJC銀子ちゃんには知り得ない
知識というものが存在している。

その知識があるかないか、この差は凄く大きい。知識というのは大きな武器だ、特に
銀子ちゃんのような研究熱心な子にとっては尚更。

そしてJK銀子ちゃんつてば、そういう所をマジで容赦なく突いてくるから……。

「……………」

時は進んで——最終盤。

自玉が包围された盤面を悔しげな表情で見つめながら、ぐつと息を飲み込んで。

「……………負けました」

JC銀子ちゃんが小さく頭を下げた。

ああ、ラスボス銀子ちゃん相手に十分健闘はしたものの……やはり力及ばなかった
か。

ただ先程も言つた通り、この結果はもうしょうがない事だ。なんせ本来なら成長した
自分との対局なんて成立し得ない訳だし。

……けれど、だ。

こうしてJC銀子ちゃんまでもがラスボスの前に敗れ去つたとすると、これは……。

「…………ふふふ」

……全く、しょうがないなあ。

これはいいよよ、俺の出番ってことかな？

「JK、もう一戦よつ！」

「良いわよ。何度でも掛かってきなさい」

……つて、ありや？

JKとJK銀子ちゃん二人はまたすぐに対局を始めてしまった。あれれ？ 俺の出番は？

「ね、ねえねえ、次は俺の番じゃないの？」

思わず俺は観戦中のJS銀子ちゃんの肩を叩く。

すると小学生は「……は？」と言いたげな目を俺に向けてきた。

「八一？ なんで八一の出番なの？」

「だってJK銀子ちゃんまで敗れた訳で、そうなると順番的に次は俺なんじゃないかなーと……」

「あのねえ。八一がJKに勝ったとしても私達の勝利にならないじゃないの。JKの事は私達で倒さなくちゃいけないの、それぐらい分かるでしょ？」

「……そ、そつすか」

……どうやら最初から俺はお呼びびやなかったらしい。かなしい。

「じえーしい、つぎこそはじえーけーをぼこぼこにして……」

「JC、頑張つて……」

遠巻きから見つめる少女と小学生の声援を受け、中学生はラスボスと死闘を繰り広げる。

元はと言えば少女のぎゃん泣き事件から始まったこの因縁も、今ではラスボスJK対その他銀子ちゃんズという構図になっている。

憎きJK相手になんとか一矢報いてくれと、少女と小学生の視線も盤面に釘付けだ。

「ねえやいち。じえーしい、つぎは勝てそう?」

「どうか……JC銀子ちゃんも頑張つてはいるんだけど、なんせ相手が相手だから……」

元々銀子ちゃんって格下の女性相手には本当に取り零しをしない子だからなあ。それは対女流成績無敗という前人未到の偉業が物語っている。

いくら相手が女流でも58戦も無敗というのはプロ棋士でもビックリな記録だったりする。……という言い方もおかしいか、もうJK銀子ちゃんだって立派なプロ棋士な訳だしね。

「このままじゃ……JCでも勝てない？」

「……そうだね。ちよつと難しいかな……」

とにかくJK銀子ちゃんというのはそれ程に強い存在な訳で、そんな相手に勝つとなると……。

「……むう。だったら……」

「だったら？」

「……だったら、えんごしやげきするしかない」

援護射撃。

そう呟いた少女はてくてくとラスボスのそばに近付いていつて。

「……ばか」

と可愛らしく一言。

それが少女による援護射撃。

罵倒を浴びせて相手のメンタルを揺らがせる、つまりは盤外戦術だ。

「ばーか」

「……む」

「ばーか。じえーけーのばーか」

幼女銀子ちゃんはラスボスに向かって次々と悪口を浴びせる。

そういうえばこういう悪口攻撃での盤外戦術、俺達も子供の頃にお互いやりあったっけなあ。

極めて幼稚な手ではあるものの、相手の集中力を乱すという意味では結構効果的だったりする。

だが。

「……ふつ、いかにも子供が考えそうな手ね」

J K 銀子ちゃんは鼻で笑っただけ。

その表情もその思考もその打ち筋も、彼女の全ては微塵も揺らぐ心配が無い。

「ばーか」

「あーほ」

「どじ」

「まぬけ」

「はいはい。もう少し罵倒のセンスを磨く事ね」

幼女による盤外戦術、罵倒の雨をラスボス銀子ちゃんは軽くあしらう。

先程も言った通り、この悪口攻撃というのは俺達が子供の頃にやりあった番外戦術であって。

つまりJ K 銀子ちゃんにとってはすでに一通り経験済みだという事。故に幼女がど

れだけ悪口を並べようとも、今更その程度の攻撃で新四段の強靱なメンタルが揺らぐことなんて――

「ひんにゆう」

「っ！」

……あ、揺らいだ。

今JK銀子ちゃんの指先がピクって動いたぞ、ピクって。

「ひんにゆう、ひんにゆう」

「……………（イラッ）」

「やーいやーい、ひんにゆうひんにゆう」

効果アリと見たのか、ここぞとばかりにその控えめな胸元を小馬鹿にしてくる少女。

「……………くう、ぬ、ぬう……………」

すげー効いてる。JK銀子ちゃんのこめかみにはくつきりと怒りマークが浮かんでいる。駒を掴む指がブルブルと震えちやってる。

しつかしまあなんとという命知らずな少女だ。あの銀子ちゃんに対して貧乳煽りをするだなんて。

……てかね、うん、あれだよ？

別にそのね、銀子ちゃんの控えめで慎ましやかなお胸……俺は好きだけどね？

「ひんにゆう。ひんにゆう……むぐ」

とそこで幼女のお口を封じる手が。

その悪口攻撃にストップを掛けたのは味方であるはずのJS銀子ちゃんだった。

「……幼女。それ以上は駄目」

「なんで？」

「それは……その言葉は自爆魔法だから」

「じばくまほう？」

……さすがに小学生はよく分かっている。

高校生の自分への悪口、それは後々全てが自分自身に跳ね返ってきてしまうのだ。

……あとその悪口はね、挑戦者のJC銀子ちゃんのメンタルにもダメージ与えちゃうから……。確かにJK銀子ちゃんには効いていたけど、一方でJC銀子ちゃんの眉もピクピクしちやつてたから……。

「幼女。その悪口はこれ以降禁止で」

「……でもじえーえす、じえーけーを倒すためにはじえーしいをえんごしないと……」

「……うん、それは分かっている」

あまりにも危険過ぎる貧乳煽りはNGとして、外部からラスボスを攻撃する他の盤外戦術。

J S 銀子ちゃんは眉を顰めながら「うーん……」としばし唸っていたのだが。

「……あ、そうだ。幼女、耳貸して」

「みみ？」

何らかの方法を思いついたのか、幼女の小さな耳元に口を寄せてごによごによと内緒話。

「(ご)というのはどう？ ……(ご)によ(ご)によ」

「……ふむふむ」

「(ご)によ(ご)によ、(ご)によ(ご)によ……」

「ふむふむ……えっ」

すると幼女銀子ちゃんはくりくりなおめめを大きく見開いた。

「どう？ 出来る？」

「……それ、ほんとにこうかあるの？」

「ある。絶対にJKには効くはずだから」

「……なら、じえーえすがやったら」

「わっ、私がやるより幼女の方が効くのよ」

「……そうなの？」

「そうなの」

「ふーん……」

それはまだ4歳児には難しい話なのか、不思議そうな顔をしていた幼女銀子ちゃんだったが、

「……ん。わかった。ならやってみる」

やがてこくりと頷いた。

そしてすくつと立ち上がって、もう一度ラスボスが待つ玉座のそばに……。

「……ん？」

……ではなく、今度は俺の方に近付いてきた。

「やいち」

「どうしたの？」

「……むう」

そこで少し口を真横に結んで、躊躇うような様子を見せる幼女。

何事に対しても物怖じしないこの子にしては珍しい反応だ。はてさて、一体幼女銀子ちゃんは如何なる盤外戦術を繰り出すつもりなのか。

「……やいち」

幼女は俺の目を真っ直ぐ見つめて。

その綺麗な瞳を輝かせながら、俺に対してこんな事を言ってきた。

「……やいち、けっこんしよう？」

——えっ!?

「えッ!?!」

「はあ!?!」

驚愕に叫ぶ二人の銀子ちゃんの声が聞こえた。

ような気がしたけどそんな事どうでもいい。

えっ! ま、マ!?! 俺、幼女から逆プロポーズされちゃった!?!

だってそんな、幼女銀子ちゃんは4歳なのに! 4歳の銀子ちゃんが逆プロポーズなんて!!

マジかマジでか!! なんてことだ、結婚なんて、そんな事があってもいいのだろうか!?!

しかし逆プロポーズされてしまったのなら、兎にも角にもここで俺が返す言葉は一つしかない。

「うんそうだねっ！ 結婚しよう！ 幼女銀子ちゃんっ!!」

という事で、俺こと九頭竜八一と幼女銀子ちゃんはこの度結婚する事となりました。

まだまだ至らないところも沢山ある二人ではありますが、今後の人生をお互いに支え合つて二人で歩いていこうと思います。これからも皆様にはご指導ご鞭撻のほど宜しくお願いします。

「銀子ちゃん、おいで!!」

「ん。……やいちっ」

「くう！ 幼女銀子ちゃん……っ！」

俺の胸に飛び込んできた幼女……じゃないな、お嫁さんの事を優しく受け止める。

ああなんて軽い、なんて柔らかい。これがお嫁さんの温もりなのか……なんて愛おしい。

なんか対局席の方から「結婚しよう、じゃないでしょ!」とか「あんたフザケてんの!」とか聞こえるような気もするけど……どうでもいいね。

けれどまさかまさかだ。まさかこの俺が幼女銀子ちゃんと結婚する事になるなんて。あれだけ色々な人からロリコンロリコンと揶揄されてきた俺だけど、こうなつてしまつてはもうその疑念は払拭出来そうにない。まあそんな事どーでもいいんだけどね。

嗚呼、幼女と結婚、幼女銀子ちゃんと結婚……。

ていうかき、なんか……ウエディングドレスを着た4歳の幼女って……想像するとなんか背徳的な感じがしちゃうね……。

「や、やいちいつー！」

すると声を上げたのはJ S 銀子ちゃん。

てててーとこちらに近付いてきて、続けざまに小学生からも更なるアプローチが。

「や、やいち！ わわ、わっ、わたちも、わたちもやいちと結婚すりゅー！」

「うんいいよ!!」

こんなん即答したわ。勿論J S 銀子ちゃんも結婚しようねっ!! ね!!!

顔真つ赤にしながら逆プロポーズしてくるJ S 銀子ちゃん可愛すぎか。ヤバかわ。

かわいい幼女とかわいいJ S、二人と結婚する事になっちゃったけど問題は無い。

はーマジ、C級1組に昇級しといて良かったわー。

「つと、こうしちやいられないな。二人共、今すぐ役所に婚姻届を出しに行こうね」

「えっ、今から行くの?」

「そうだよ。一秒でも早く結婚したいからね」

こういうのは早ければ早い程に良い。今は一刻も早く既成事実を作りたい。婚姻届は重婚という形で提出するとして……結婚式はどうしようかな。

やっぱり結婚式といったら6月だよね……という意見もあるだろうが、しかし何事も

早いに越した事はない。だから今週中にでも……いや、いつそ明日にでも結婚式を執り行いたい。

予約を入れた翌日に結婚式を挙げたい、そんな希望を叶えてくれる式場はないだろうか。探せばあるかもしれないね。よし、なら日本全国の式場を当たってみようか。それで駄目なら次は海外だ。さあーって忙しくなってきたぞー！

……え？ 対局？

いやもうそれどころじゃないっしょ。

J CとJ Kの戦いよりもJ Sと幼女との幸せな未来の方が大事に決まっている。

「じゃあJ K銀子ちゃん達、俺は幼女とJ S銀子ちゃんのウエディングドレスと式場選
びに行ってくるから、二人はそのまま対局を続けててね」

「……ッ！」

「さ、二人とも」

「ん」「うん……やいち……」

途中で何か尖った音が聞こえたけど、そんなものは無視して俺は幼女と小学生の手を取った。

「そうして二人をエスコートしながら、俺達はリビングを後にする——

「っ、この、どバカ！」

「いだあつー！」

瞬間、無粋な乱入者が。

J K 銀子ちゃんが力一杯投げつけた扇子が俺の後頭部にスパーンツ！ とヒットした。

「い、痛いで……」

「やいち、だいじょうぶ？」

「こらっ！ そのバカ八一！」

そしてすぐにあの二人が、対局席から離れた二人がこちらにドシドシと詰め寄ってくる。

「あんたねえ！ 幼女と小学生相手に何しようとしてんのよー！」

「ちよつと銀子ちゃん、まだ対局途中——」

「対局なんてしていられる訳が無いでしょ!? け、け、結婚とか——！」

「あーあー、J C 銀子ちゃんまで……」

余程の衝撃だったのか、J K はおろかJ C 銀子ちゃんまでもが対局そつちのけになっちゃってる。

「もー、こんなの冗談じゃーん。ただの盤外戦術じゃーん」

「ば、盤外戦術？」

「そのとおり。これは高度なばんがいせんじゅつ。ねーやいちー?」
「ねー幼女銀子ちゃーん?」

してやったりという顔で頷き合う俺と幼女銀子ちゃん。ねー、かわいいねー。

そう、これはあくまで盤外戦術。結婚をダシにしてJK銀子ちゃんのメンタルを揺らす一手。

つまり先程の話は単にこの子達の盤外戦術に付き合っただけだ。……ホントだよ?」

「しかしまあ効果の程は凄いいけど、この盤外戦術も駄目みたいだね」

「だめ? どうして?」

「だってほら、これJK銀子ちゃんだけじゃなくてJC銀子ちゃんにも効いちやつてるじゃん」

「あー」

「そうよJCっ! これはJCの事を援護する為の盤外戦術だったのに、あなたが取り乱したりしちや意味がないじゃないの!」

「そ、そんな事言われたって! だって、八一が、やいちが……!」

小学生の言葉に反論出来ず、口をパクパクとさせるJC銀子ちゃん。

やはり双方共に同じ空銀子となると、片方だけに効く盤外戦術というのは難しい。

二人共に弱点というか、心を揺らしてしまふ理由は同じようなものだからね。

「けど……こうして二人共に席を立った訳だし、これはもう試合放棄、対局続行不可能で事で両者共に負け扱いでいいよね？」

俺がその声を掛けると、JKとJC銀子ちゃんは「むっ……」と顔を顰める。

「となるとこれは対局が続行不可能になった状況を作り出した人物、つまり幼女銀子ちゃんの勝ちつて事でいいよね？」

「あ、そうだね。私もそう思う。ほら、幼女の勝ちだつて、良かったね幼女」

「やったあ」

両のおててを真上に上げて喜びを露わにする幼女銀子ちゃん。かわいい。

「……て事でいいよね？」

「……はあ。好きにしたら？」

大きく溜息を吐いた後、JK銀子ちゃんはつまらなそうな顔でそう答える。

こうして、数多の女流棋士達を返り討ちにしてきたラスボスJKの牙城は崩された。

「ふふん」

と得意げにする4歳児。

幼女銀子ちゃんの手によってラスボス銀子ちゃんは倒されたのであった。

めでたしめでたし……。

……と、そんな事をして。

五人で仲良く楽しく過ごした休日とか。

今ここに四人の銀子ちゃん達が居る日常。

その日常に慣れきってしまった俺達は、そんな一日一日を当たり前のように過ごして
いたのだが。

しかしこれは当たり前前ものではない。

だってこれは……これは、一時の夢の中での出来事でしかないのだから。

とかく夢というのは荒唐無稽なもので。

そして次第に移り変わっていくもので。

だからこそ、それが近付いていた。

新たな出会いと——そして、別れが。

4 1. とある日の話

その日、俺達はいつものように過ごしていた。

「…………ふぁ」

聞こえたのは誰かが小さく欠伸をする声。

朝。ワンルールの部屋に敷かれた五枚の布団から俺と銀子ちゃんが目を覚ます。

「おはよう、銀子ちゃん」

「……………」

「…………ん」

「…………おはよ」

「…………んにゅ」

俺がおはようと挨拶をしてみれば、各銀子ちゃんが思い思いの返事をくれる。

ちなみに沈黙で返したのがJK銀子ちゃん、
「ん」と一言だけくれたのがJC銀子ちゃん。

おはよと言ってくれたのがJ S 銀子ちゃん、んにゆと可愛く鳴いたのが幼女銀子ちゃんだ。

銀子ちゃんという生き物は朝に弱く、どの年頃の子も起きたばっかはこの感じだ。それはとづくに分かっている事なので朝っぱらは塩対応を受けても特に気にしない。

とうか……起き抜けで眠そうにしている銀子ちゃんは全体的に隙だらけだ。しかもパジャマを着ている訳で、パジャマ姿のままほけーつと油断しきっている銀子ちゃんが四人も居て……ううむ、朝から目の保養になる光景だ。

「ほら、銀子ちゃん達。起きたら布団を畳んで」

「んー……」

まだ頭がシャキつとしていないのか、生返事のままによちよちと動き始める銀子ちゃんズ。

ちなみに現在時刻はまだ五時を過ぎた頃。随分と早起きな時間だけどこれには理由がある。

普段から俺達は就寝が早い。幼女銀子ちゃんに合わせて全員が夜九時過ぎには眠るので、その分次の日の朝早くに起きて将棋をするという生活リズムになっているんだ。

なので朝五時過ぎには目を覚まして、布団を片付けたら顔を洗ったりと朝の支度を済ませて。

そこからは暫し将棋の時間。朝っぱらは俺も含めて頭の回転が鈍めな分、普段ならしないようなポカをやらかしがちなんだけど……まあ、そういう悪手を打つのも将棋の醍醐味だろう。

とにかくそうして皆で将棋をして。

そして六時半ぐらいになったら朝ごはんの支度に掛かる。

「ふう、お腹すいた」

「八一、お湯沸いたけど」

「あ、うん。これ、味噌汁」

「幼女、あんたは食器並べて」

「ん」

まあ支度とは言っても、インスタント食品や出来合いのものを準備するだけなんだけどね。

さすがに朝は出前が取れない、けれど料理をするような甲斐性のある者も存在しないので、朝ごはんだけはどうしてもスーパーで買った惣菜やレンジでチンなどがメニューとなる。

「いただきます」

全員の声が綺麗にハモった。そしてすぐにそれぞれの箸が動き始める。

今日の朝ごはんはコンビニ惣菜の焼き魚とインスタントの味噌汁、白米、そして沢庵。俺はともかく銀子ちゃん達には、特に小学生や幼女の銀子ちゃんには惣菜ではなくもつとちゃんとしたものを食べさせてあげたいという気持ちが無いでもないのだが……。

でもこればつかしは難しい。ここには桂香さんもないしね。ああ、思えば毎日朝っぱらから料理をしてくれていた桂香さんという人はかくも偉大なお方だったのだなあ。ともあれ朝食を食べ終わって、その後の片付けは毎日必ず俺の仕事となっている。

というのもJ S、J C、J Kの銀子ちゃん達には学業があるからね。彼女達は学校に登校する為の支度をしなければならぬ。そして幼女のおててに水仕事などはさせられない。

故に俺が食器を洗っている中、学生銀子ちゃん達が慌ただしく身支度を行う物音が――

「……つて、ありや?」

おかしいな。銀子ちゃん達が慌ただしく身支度を行う物音が聞こえてこないぞ?」

この時間帯は色々と混み合う洗面所の方から姦しい声が聞こえてくるのがいつもの流れなのに。

「あれ、銀子ちゃん……つて、どうしたの、みんなして丸まっちゃつて」

「……んー」

皿洗いを済ませてリビングに戻ると、そこには想像通りの姿があった。

食後の休憩とばかりにまったりしている幼女銀子ちゃん。そんな幼女銀子ちゃんを抱き抱えながらまったりするJK銀子ちゃん。

そしてそんなJK銀子ちゃんのそばに身を寄せるJCとJS銀子ちゃんと、皆同じような格好でまったりしちやつてるではないか。

「ねえ銀子ちゃん達、学校行かないの？」

「うん、行かない」

「え、どうしてさ。学校で何かあったの？」

「別にそういう訳じゃないけど……今日はサボりたい気分なの」

「サボりたい気分ってそんな……てか、JC銀子ちゃんとJS銀子ちゃんも？」

確認の為に俺が尋ねてみると、JCとJS銀子ちゃんは同時にこくりと頷く。

しかしサボりたい気分とは。それだけで休もうだなんて何とも強気な欠席理由である。

まあ銀子ちゃんは皆勤賞を狙っているような真面目な生徒ではないし、むしろ将棋の予定と被った日には軽率に学校の創立記念日を捏造しちゃうような子ではあるのだが。

「でも、どうして今日に限ってそんな……」

「なに？ 悪いの？」

「いや別に悪いとまでは言わないけどさ……」

J K 銀子ちゃんにじろりと睨まれ、その圧に押された俺はすつと視線を外す。

勿論サボりは良くない。良くないとは思うんだけど……しかし当の俺自身が中卒の身なので、こういう事に関してあまり強く言える立場に無い。

しかし高校生のJ K 銀子ちゃんとはもかく、義務教育段階のJ SとJ C 銀子ちゃんはちゃんと学校に行っておいた方がいいと思うんだけど……。

「ていうか思ったんだけど、なんで夢の中なのにわざわざ学校に行かなきゃならないわけ？」

「えっ?! それ今更言うの!?!」

それは俺だつてもうずっと前から不思議に思っていた事なんですけどっ!?

どうして銀子ちゃん達は夢の中だというのに毎日毎日学校に行くのだろう。銀子ちゃんってそんなに学校が好きなのだったっけ？

と不思議に感じていたものだが、まさか銀子ちゃん本人からそんな言葉を聞く事になるとは。

「ま、そういう訳だから。今日は学校に行かないでここでゆっくりする。ねえJ C?」

「ええ。もう決めたから。ねえJ S?」

「うん。駄目って言っても駄目だから」

という事で、今日の銀子ちゃん達は全員が学校をサボる運びとなった。

とうか冒頭で「いつものように過ごしていた」とか言っちゃったのに、いきなりいつもの違う流れになってしまった。本当に銀子ちゃんの身勝手さには困ったものである。

……ただ、もしかしたら……。

もしかしたらだけど、銀子ちゃん達には何となく予感があったのかもしれない。

今日だけはみんな一緒に居たい。

そうするべきだという、そんな予感が。

さて、そんな流れで今日は平日なのに全銀子ちゃんズと一緒に過ごす事になった訳だけど。

まあそうは言っても普段から休日は全員一緒に居る事だしね、それと大きな違いはない。

「ねえ、平日の午前中って普段は何してんの？」

「別に休日と大差無いよ。この時間帯はいつも幼女銀子ちゃんと一緒に将棋。ねえ？」
「うん」

J C 銀子ちゃんからの質問に俺が答え、幼女銀子ちゃんが相槌を打つ。

俺と銀子ちゃんが一緒に居て時間を過ごすとなったら、何をできるかなんて言うまでもない。

ここで将棋以外の選択肢を、例えばタブレット端末で映画を見て楽しんだりとか、一緒にしておくべきをする選択肢とかだつてあるにはある。あるにはあるんだけど……。

……けれど、それでも選ぶのは将棋だ。

俺達が一番楽しいと感じる事、一番心で通じ合えるのは将棋以外にないのだから。

「……………」

故にこの日もいつものように。いつも通り俺達は皆で将棋を打つ。

静かで緊張感のある独特な空気の中、それぞれの指が駒を打つ音がパチンと響く。

「うーん……………」

悩みの声を上げたのはJ S 銀子ちゃんか、それともJ C 銀子ちゃんだろうか。

どの銀子ちゃんも変わらず、将棋盤に向き合う時はとても真摯な表情をしている。やっぱりこの子はこうしている時が一番綺麗だなと思う。

そんな彼女達の真剣さに負けないように、俺も盤面に集中して……。

そして、数時間後。

「……よし、そろそろいい時間だね」

午前中の将棋タイムは終了。となればお次はお昼ごはんの時間だ。

朝とは違って、お昼はちゃんとした料理を出前で注文する事になっている。銀子ちゃんズには少しでも美味しいものを食べて貰いたいからね。

「ねえ八一、今日の出前は何にするの？」

「そうだなあ……お寿司はこの前食べたし……JS銀子ちゃんは何が食べたいものある？」

「ん〜と……中華とか」

ふむ……中華ときたか。

俺としては文句無いんだけど……しかし中華料理にソースはマッチするのだろうか。

我が家の姫達はあらゆるものにソースをかけたがるのでつついそん心配をしてみよう

ともあれその後注文した出前が届いて。

「いただきます」

皆で美味しい中華料理に舌鼓を打って。

「……ふう、ごちそうさん。どうだったJ S 銀子ちゃん、美味しかった？」

「うん、美味しかった」

「そうね、中華も中々悪くなかったわ」

J S 銀子ちゃんに続いてJ K 銀子ちゃんも頷く。

どうやら中華も好評なようで一安心だ。まあこの子達の場合、ソースかけさせときや大概のものには美味しいって言うんだけどね。

さて食事を終えたら勿論将棋の時間。

……ではなく、昼食後はしばしの休憩タイムだ。

何事も根を詰めすぎるのは良くないからね。食後は適度にリラックスしないと。

「やーいーち」

「あ、うん。ちよつと待つてね。すぐに敷いてあげるから」

俺のズボンをくいっくいっといつと引つ張る幼女。そのおめめはとろんとしている。

この通り、昼食後というのは幼女銀子ちゃんがおねむになる時間帯でもあるからね。何よりもまずはこの子の為にお布団を敷いてあげなければ……。

……と、なるのがいつもの流れなのだが。

しかし、この日はそうならなかった。

その時――

ピンポン、と。

「え？」

玄関のチャイムが鳴る音がした。

という事は……誰が訪ねてきたという事だ。

「あれ……誰だろう？」

謎の来客に思わず首を傾げる俺。

そして俺だけじゃなく、ふと見れば銀子ちゃん達も皆不思議そうな顔をしていた。

「……でまあ？」

「出前はないでしょ。さっきお昼ごはん食べたばつかじゃないの」

ここでの共同生活が始まって以降、俺達が暮らすこの801号室を訪れる人といえば全員が出前の配達員なのだが、しかし今玄関ドアの前に立つのは出前の配達員ではないだろう。

今日は中華以外を注文した覚えは無いし、それにもし仮にこれが出前だとしたら、直接この部屋のチャイムを鳴らす前に一階のエントランスからコールをしてくるはずだ。

それに食器の回収は翌日以降のはずだし……そもそもここ最近は使い捨ての食器ば

かりだったから回収にも来ないはずだし……。

……とか考えていたら、もう一度ピンポンとチャイムが鳴らされた。

「八一、見てきて」

「……うん」

J K 銀子ちゃんに背を押されて、立ち上がった俺は恐る恐る玄関まで歩いていく。

……って、なんで恐る恐るなんだろう。

ただ単に接客対応をするだけだったのに。

けれど、なんか……。

なんか、上手くは言えないんだけど……この来客からは不思議な感じがするんだ。

それが直感なのか虫の知らせなのか、はたまた棋士としての第六感なのかは分からないけど……とにかく妙な胸騒ぎがする。

……とか思っていたら。

どうやらその胸騒ぎは正解だったらしくて。

その時……ガチャガチャ、と。

鍵穴に鍵を差し込む音が。

「えっ」

そして直後、ガチャリとロックが外される。

勿論俺が開けた訳じゃない。玄関ドアの反対側から誰かがこの部屋の鍵を開けた。

——まさか、この部屋の鍵を持っている!?

え、だれだれ怖い怖いっ! 一体誰が訪ねてきたっていうんだ!?

だって俺達の他にこの部屋の鍵を持っている人なんて……あ、銀子ちゃんのご両親とか?

それなら可能性はあるか? 銀子ちゃんから直接聞いた訳じゃないけど、ご両親にな

ら合鍵を渡していても不思議じゃないような——

——などと考えていたのは一瞬の事。

すぐに玄関ドアが開かれて、

……って、このひと、は。

「……な」

驚愕する俺を見て、

「……ふ、ふっ」

いたずらが成功した子供ののように、その子は得意げに微笑む。

その表情も。

その容姿も。

その見惚れる程に綺麗な銀髪も。

俺はその子の全てを知っている。

決して見間違えるはずの無い姿……なのだが。

……けれど、この子の事は——知らない。

「……ぎ、銀子ちゃん……」

そこには銀子ちゃんが。

全てを知っているはずの俺が知らない、五人目の空銀子がそこに居た。

4 2. 5人目の話

自ら鍵を開けて、玄関のドアを開いて入ってきた女性。

その姿は紛れもなく――

「……ぎ、銀子ちゃん……」

その美しい銀髪も、そして端正な顔立ちも。

決して見間違えるはずがない。そこにいたのはどこからどう見ても銀子ちゃんだ。

……けど。

この子の姿には……俺は見覚えが無い。

というかこの部屋内にはすでに4人の銀子ちゃんが居る訳で、となるとこれって――

「げ、5人目……!」

俺の後ろでJK銀子ちゃんが驚愕の声を上げた。

いや、驚いているのは彼女だけじゃない。俺も含めてここに居る全員が同じ心境だろう。先程までおねむだった幼女銀子ちゃんですらもびっくりして目を丸くしちゃってるし。

この場で唯一平然としているのは、5人目であるその銀子ちゃんただ一人だけ。

そんな彼女は玄関で靴を脱いで、リビングに入ってすぐに俺達一同を軽く見渡した。

「……なによ。そんなに呆けた顔しちゃって」

いやいや、呆けた顔もするでしょ。

この事態に驚く事のない人間がいたとしたらそっちの方にビックリだよ。

「八一」

「え？」

「そんなに驚いた？」

「……あ。いや、えっと……」

その銀子ちゃんから声を掛けられて、ハツとした俺はしどろもどろになりながら口を開く。

「その……うん。正直かなりびっくりしたっていうか……まさかここにきて5人目が現れるとは思ってなかったからさ……」

そう、この銀子ちゃんは5人目だ。まさかまさかの5人目銀子ちゃん登場である。

なんという事でしょう、すでに4人も居る銀子ちゃんが更に増えてしまうとは。もはや銀子ちゃんというのはポケットを叩けば簡単に増えるような存在なのかもしれない。けれどもこの801号室に、この幸せ空間に更にもう一人銀子ちゃんを追加してしまっただなんて。

俺はその内に銀子ちゃん成分の過剰摂取でぶっ倒れてしまうのではなからうか。

……なんてバカな事を考えていた一方、なるほどなと納得するような思いもあった。

「……でもそつか。やっぱり5人居たんだね」

「やっぱり?」

「うん。そこがずっと気になっていたからさ」

そう。実のところ、その点に関しては俺も前から気になつてはいたんだ。

それはこの部屋の玄関ドアにあるドアプレート。初めてこの部屋を訪れた時からずっと、そこには『銀子ちゃんを可愛い可愛い×5するだけの部屋』と書かれていた。

銀子ちゃんを可愛い可愛いするのはまあいいとして、この『×5』というのは何なのか。この部屋内には4人の銀子ちゃんが居るのだから『×4』というのが正しい表記ではないのか。

と、あのドアを見る度にそんな疑問を抱いてはいたんだけど……。

……けれどもそうじゃなかった。あの表記は間違つていなかったんだ。

ドアプレートにある『×5』という字の如く、ここに銀子ちゃんは5人居たんだ。
「ふーん……」

そしてそんな5人目の銀子ちゃん。

今この場合は仮名として『5人目銀子ちゃん』と表現しておくけど……。

とにかくそんな5人目銀子ちゃんがこちらに顔を向ける。そしてなにか観察するかのよう、興味深そうにじろじろと俺の顔を見てくる。

「……ど、どしたの?」

「……ううん、なんでもない。なんかあんまり変わってないんだなーって思ってた」

「え?」

「ところで八一」

すると5人目銀子ちゃんは軽く笑って、俺を試すかのようにこんな事を言ってきた。

「ねえ、私を見てなにか気になる事はない?」

「……気になる事、つすか」

「ええ。一番気になる事を言ってみなさい」

……気になる事なんて、そんなの挙げようと思えば山のようにあるけど。

けれども一番に気になる事といえば……それはやっぱりあれだろう。

「……強いて言うなら、その……年齢が気になる……かな」

……言ってから思ったけど、これって女性には尋ねちゃいけない話題だとか言うよね。

年齢の話題がこの子の地雷だったらどうしよう。ぶちころされてしまうのでは……なんて思っただけど、どうやら杞憂だったようで、5人目銀子ちゃんは軽く笑みを浮かべたまま言う。

「そうね。私の年齢、いくつだと思う？」

「……そうっすねえ……」

うーん、幾つだろうなあ。俺は腕を組みながら年齢不詳なその顔をじつと見つめる。

5人目銀子ちゃんの年齢、それはこの子が玄関から入ってきた当初から気になっていた。だつてこの子は俺が見た事の無い、幼い頃からずっと一緒だった俺の記憶に無い空銀

子だから。

年頃で言えばJK銀子ちゃんと、つまり高校生の銀子ちゃんと一番近いように見える。

ただやっぱり違う部分はある。身長がちよつとだけ違っていたり、その銀髪が少し長めだったり、表情から少しあどけなさが抜けていたり。

特にその立ち振舞いから伝わる雰囲気……とでも言えばいいのか。それはやっぱり

J K 銀子ちゃんとは違って……より大人びているというか、より力強さが増しているような印象を受ける。

そして4人の銀子ちゃんズの流れも考慮すると、この5人目銀子ちゃんの年齢はおそらく……。

「……18歳〜20歳、ぐらいかな？ とにかく高校生よりも年齢が上の銀子ちゃん、だよね？」

「正解。さすがにそれくらいは分かるわよね」

俺が出した答えに5人目銀子ちゃんは少し嬉しそうな顔で頷く。

やっぱり正解か。この子はここにいる5人の銀子ちゃんズの中でも一番年上な銀子ちゃんだ。

俺が知っている銀子ちゃんというのは高校一年生16歳の銀子ちゃんなので……この5人目銀子ちゃんは俺がまだ出会ったことのない銀子ちゃん、未来の銀子ちゃんだという訳だ。

「……へえ、これが数年経った私か……」

「確かにJKと似てるけど……1年か2年ぐらいは経っているように見えるわね」

「うん、私にもそう見える。JKが更に大人っぽくなったような感じ」

「じえーけーより大人なの？」

成長した自分の姿に興味津々、四人の銀子ちゃんズが口々に言う。

勿論俺も興味津々だ。銀子ちゃんズに混じってじろじろと不躰な程に観察しちゃう。

まあ過去の銀子ちゃんが居る以上、未来の銀子ちゃんが居るつても考えられる話ではあつただけど……けど、そうか、これが16歳から数年成長した銀子ちゃんの姿なのか。

……うん、可愛い。

可愛いです。俺の目を惹き付けて止まないその可愛さは衰え知らずのようで何よりです。

そして髪が伸びた事もあつてより大人びた印象を受ける。というべきか……綺麗になつた、と言えがいいのかな、とにかくその美貌は全体的に一つレベルが上がつた印象だ。

……ただその代わりと言つてはなんだが、胸部装甲の方は据え置きのようなだ。はあ……。

……いやまだ分からないぞ！ 諦めるな俺！ 希望を捨てるのには早すぎるツ！

何も直接触つて確認した訳でも無いんだし、服のせいで分かりづらいだけで、その下には成長した膨らみが隠れている可能性だつてあるじゃないか。

ていうかあれだ。実は銀子ちゃんつて着痩せするタイプなんだよね。うんうん。尚

そんな事は無いだろうという反論は一切受け付けない。

「八一。あんたね、初対面の場で下らない事考えてるんじゃないの」

「すみません」

すると俺の思考を読んだらしい5人目銀子ちゃんからの叱責が飛んできた。

どうやらこの子は読みの力も順当に成長しているようだ。現段階でこれだと将来的には俺の思考の全てが筒抜けになってしまうのでは、とそんな危惧すら抱いてしまう。

「と、とりあえずさ、こうして5人目の銀子ちゃんと会えた事だし……」

「なに？」

「とりあえず……将棋しない？」

「あ、そうね。早速対局といきましようか。成長した私の棋力を見てみたいし」

とりあえず将棋。そんな俺の提案に即座に頷いたのはJK銀子ちゃんだ。

この子にとつては数年後の自分の姿。自分がプロの世界で戦ってどれぐらい成長したのか、それは何よりも知りたい事だろう。

てか正直言つて俺もめっちゃめっちゃ気になる。5人目銀子ちゃんとは是非とも将棋盤を挟んでじっくりと語り合いたい。欲を言うなら8時間ぐらいの持ち時間で。

……と、俺達はそう思っていたんだけど。

「悪いけど将棋はパス。そんな時間も無いしね」

「え？ 時間って……5人目銀子ちゃん、これから用事でもあるの？」

「そういう訳じゃないけど。でも……」

すると5人目銀子ちゃんは。

変わらない表情で、なんでもない事を言うかのような口ぶり……言った。

「盤の上に銀は5枚も乗らないでしょ？」

「それ、は……」

それは、その通りだ。

自陣にある2枚と相手が持つ2枚、将棋盤の上にある銀将はその4枚だけ。

けど、それって、どういう意味で――

「ところで」

「え？」

「その『5人目銀子ちゃん』っていう呼び方は止めてくれない？ この私が5人目とかって呼ばれる筋合いは無いんだけど」

「……あ、それもそうだね」

そう言われて俺も頷く。

5人目というのは単に登場した順番、それも俺達から見るといいう話であって、なにも

この子が本来有している要素や属性などではない。

そんなもので呼ぶのは失礼に当たるだろう。だって銀子ちゃんが一番だ、どんな銀子ちゃんであつても一番の存在な訳だしね。

「となるとそうだなあ、えつと……」

ではではなんてお呼びしましょうかね……。

……とまで考えて、そこで俺は首を傾げる。

「……あれ？」

……えつと、この子の呼び名つて……なんて呼べばいいんだろうね？

まだ出会つて数分という事もあつて、この子を指し示す特徴的な要素が思い浮かばない。

「……あの。なんて呼べばいいつすかね？」

「そうねえ、なら私の事は………あ」

とそこで5人目銀子ちゃん(仮名)は何かを思い付いたのか、ふつと口元を緩ませて。

「………そうだ。八一、当ててみなさい」

「当てる？」

「そうよ。ほら、その……」

そう呟きながらすぐ近くに居た女の子、幼女銀子ちゃんの事をピツと指差す。

「わたし？」

「そう、そこに居る一番小さな私。それは幼女銀子なんでしょ？」

「うん、そうだけど」

「それで……次がJ S銀子、その次がJ C銀子、更にJ K銀子と成長してきて……」

5人目銀子ちゃんは順々にそれぞれの銀子ちゃんを指差していく。

それは空銀子のこれまでの歩み。幼女の頃、小学生の頃、中学生の頃、高校生の頃と
きざて——

——そして。ここに居る空銀子。

そのどれよりも成長した最後の5人目。

「……そして私。この私は〃なに〃銀子だと思おう？」

「……〃なに〃銀子ちゃん、か。ですか……」

ふーむ、と俺は腕を組んで眉を顰める。

5人目銀子ちゃんを例えるのに適切な言葉とは。

幼女、J S、J C、J Kと来たならお次は……。

「……J D銀子ちゃん？」

「はずれ」

「だよなあ……」

自分から答えておいてなんだけど、今のは間違っているだろうなと思つてた。

J D、つまり女子で大学生の銀子ちゃん。というのはさすがにあり得ない未来だろう。

一応銀子ちゃんがつ通っている高校は大学付属なんだけど、それでもプロ棋士になつたこの子が大学に進学するとは考え難い。というか大学まで行く気は無いって本人から直接聞いた事あるし。

「……でも、だとするとなんだろうな……進学してないなら高卒銀子ちゃんとか？」

「……一応間違つてはいないけど、それじゃとても正解は出せないわね」

「なら……そうだ、銀子ちゃんズは分かる？」

アンサーが浮かばなかった俺は回答権を他の四人の銀子ちゃんズに委ねてみる。

すると四人はそれぞれ一度目を見合わせて、口々に回答し始める。

「えつと……社会人銀子、とか」

「はずれ」

「じゃあ……はたち銀子？」

「それもはずれ」

「だつたら成人銀子とか」

「あんだ達ね、一度年齢から離れなさい」

「老けぎんこ」

「つ、……その幼女。あんたは幼女だから今のは聞き逃してあげる」

何とも恐ろしい回答をする幼女銀子ちゃん。この子は自分相手にも容赦ねえな。

いやほんと、5人目銀子ちゃんが幼女への寛容さを持ち合わせている子で良かった。もし俺が『老け銀子ちゃん』なんて呼ぼうものならその瞬間に八つ裂きにされる事間違いないだろう。

けれど、うーん……5人目銀子ちゃんの正体は他の銀子ちゃんズにも分からないようだ。

社会人でも二十歳でも成人でも駄目なら、この銀子ちゃんの事は何と呼べばいいんだろう？

「八一。あんた本当に分かんないの？」

「ええつと……考えてはいるんだけど……」

俺がそんなふう言葉に濁すと、ふいに5人目銀子ちゃんは切なげにその目を細めて、

「……そつか、なんか残念」

「え……」

とても憂いを帯びた表情になって、流し目に俺の事をちらっと見てくる。

「……そりゃあね。そりゃあこの私はあるが知らない銀子になるわけけど」
「……う」

「でも、それでも八一ならすぐに分かってくれると思ってたのに。……なんか、さみしいな」

「ぐうっ……!」

思わず俺は心臓の辺りを押さえる。て、的確に俺の心を抉る言葉を……ッ!

しかしこの子の言う通りだ、たとえ成長して見知らぬ姿とはいえ、これでは俺が銀子ちゃんの事を理解していないも同義ではないか。

俺はこの子の恋人なのに。それなのにこんなに悲しい顔をさせてしまったなんて……。

……とか思っていたら、5人目銀子ちゃんはすぐにその表情を戻して。

「……ふふっ、なんてね」

あ、単にからかわれていただけみたいだ。

けどその態度や表情といい、5人目銀子ちゃんはやっぱり大人っぽさが増している気がする。

これまで銀子ちゃんからは感じた事のなかったその雰囲気、俺はどうにもむず痒いような、妙にドキドキした気分になってしまう。

「どう？ 私の呼び名の答えは分かった？ それとも降参する？」

「……はい。降参です」

「しようがないわね。じゃあ答えを教えてあげる」

すると五人目銀子ちゃんは口元を綻ばせて。

一步そばへと近付いて、その顔を俺の顔ぎりぎりまで近付けてきて……。

「私は——」

その言葉を耳にする寸前——

——もしかしてだけど、この子は自らの口でその答えを言いたかったのではないだろうか。

俺はふとそんな事を思った。

先程のクイズはあくまでフリで、むしろ答えが出ないのを期待していたんじゃないか。

この子の表情がそれを物語っている。だってとても嬉しそうな顔をしているから。

それはひと目で心を奪われてしまうような……。

本当に可愛い可愛い微笑みだった。

「私は……」九頭竜「銀子」

え、それって——

とその瞬間に時間がきた。

全てが終わる時間になって——視界一杯が白い光に包まれた。

43. これからの話

——ちゅんちゅん、ちゅんちゅん。

「……ん」

遠くから聞こえるスズメの鳴き声。

その軽やかな響きに意識を揺さぶられて俺は目を覚ました。

「……あ、れ？」

目に入ったのは見慣れた天井。

そして馴染んだ布団と毛布の感触。

朝。俺はいつものように目を覚まして。

ふと隣を見てみれば、そこには勿論——

「JK銀子、ちゃん……」

麗しきご尊顔で眠る我が姉弟子……というか、俺の恋人であるJK銀子ちゃんがいた。

布団は横に二枚並べているのに、銀子ちゃんは完全に俺の布団の中へと入り込んでき

ている。

そして自分の毛布があるにもかかわらず半分以上俺の毛布を奪い取っている。こういうお茶目な所がこの子は可愛いのである。

……けれど。

さつきまで、俺は――

だとすると、これは……まさか。

隣で眠るJKを起こさないようゆっくりと身体を起こして、周囲に目を向けてみる。視界に映る景色はつい先程までと変わらない、関西将棋会館近くにあるワンルームマンション、将棋の研究を行う場所として銀子ちゃんが購入した801号室のリビングの景色だ。

「……あ」

けれど今、この部屋にある布団は二枚だけ。

ここにあるはずの残り三枚の布団は何処にも敷かれていない。

そして当然ながら……この部屋で眠っているはずのあの子達の姿も無くて。

幼女銀子ちゃんも。

JS銀子ちゃんも。

JC銀子ちゃんも。

何処にも居なかった。

「……これは」

——どっちが夢だ？

なんて、そんな馬鹿げた事を考えそうになって。

「……はは。どっちがなんて、そんなの」

すぐに俺は自嘲気味に首を振った。

そんなの考えるまでもない。疑う余地も無くあつちが夢に決まっている。

つまり……こつちが現実で。

どうやら俺は、ようやく夢から覚めたみたいだ。

「……ああ、そうだよな。あれは夢だもんな」

そう、あれは夢だ。

この部屋に銀子ちゃんやんが4人も居る。そんな事は現実なら絶対に起こり得ない。

だからあれは夢だ。それは誰よりも一番にこの俺が断言した事だったじゃないか。

そして今、俺は長い長い夢から目覚めて現実の世界に戻ってきた。

これはそういう事だろう。だから……。

だからもう、4歳の幼女の銀子ちゃんに会う事は出来ない。

奇跡のように可愛いあの子を抱っこしてあげるとはもう出来ない。

だからもう、9歳の小学生の銀子ちゃんに会う事は出来ない。

ロリロリで可愛いあの子の長い銀髪を梳いてあげるとはもう出来ない。

だからもう、14歳の中学生の銀子ちゃんに会う事は出来ない。

意地っ張りで可愛いあの子を抱きしめてあげるとはもう出来ない。

夢はいつか必ず覚める。

そんなの最初から分かっていた事だ。別に忘れていたってわけじゃない。

だからこそこうして夢から覚めた今、俺としては「ああ、ようやく終わったのか」と、

そんな達観したような心境でいる。

……ごめん嘘。ちよつと強がってみた。

本当は結構辛い。……ていうか、結構どころか滅茶苦茶ツライ。

なんか胸の中心がごっそりと抉られたような感じがする。全身を襲う喪失感がもの凄いい。

ええー、だって、だってさあ……。

だってそんな、こんなのいくらなんでもいきなり過ぎるって……。

そりゃあ夢から覚める時なんてのは、こんな感じで突然なのかもしれないけどさあ。

でも、だって、俺があの子達とどれだけの時間を一緒に居たと思ってるんだよ……。

目が覚めるにしたって、せめてお別れの言葉くらい言わせてくれたっていいじゃん……。

「……あ、ヤバイ」

目の周りがじわつときた。

なんか俺もう泣くかもしれない。ダメだ、ちよつと辛すぎるよ。

ああ、銀子ちゃん達に会いたい。もう一度だけでいいから会いたい。……会いたい。

「……ん、やいちゅ？」

とその時、すぐ隣から声が聞こえた。

どうやら眠っていたJK……じゃないな、銀子ちゃんが目を覚ましたようだ。

「ふあ……」

布団の中から身体を起こして、口元を手で隠しながら小さな欠伸。

そうだ、俺にはまだこの子が居たじゃないか。誰よりも大切な、誰よりも愛しい恋人が。

「……銀子ちゃん、おはよう」

「……おはよ」

寝起き故の低テンション、ぼんやりとした表情で挨拶を返してくる銀子ちゃん。

……てか、そういうえばこの状況って。

こうやってこの子と一緒にこの部屋で目覚めるって事は、昨日の俺達はここで何を……。

……あーだめだ、なんか全然思い出せない。

あまりに長い夢を見すぎたせいか、現実の記憶が頭の片隅に追いやられてしまったようだ。

けれどもまあ想像は付く。おそらく俺達にとってはよくある流れ、昨日はここで研究会をしてそのままこの部屋に泊まったって事だろう。

とにかくこれは僥倖だ。銀子ちゃんがそばにいてくれて本当によかった。

よし。なら目覚めて早々だけと慰めて貰おう。膝まくらをして頭をよしよしと撫でて貰おう。

今日は一日中銀子ちゃんにくつついて甘えさせて貰おう。もうそう決めた。じゃないと俺の胸に開いた大穴は、このツラすぎる気持ちには到底拭える気がしないから。

とそんな事を考えながら、俺は銀子ちゃんに手を伸ばそうとしたんだけど。

「……あ」

そこには雪原のように白く輝く、そして雪原よりも艶めかしい魅惑的な景色があつ

て。

その美しさに惹かれた俺の目は自然とそちらへ向いてしまう。

「っ、……ばか」

すると銀子ちゃんも照れた様子で、そそくさと自分の身体を毛布で隠した。

「朝から何考えてんのよ。バカやいち」

「い、いやいや、何も考えてないって。ただそつちに目がいくのは自然な事っていうかね？」

「はいはい」

毎度の言い訳に食傷気味だったのか、銀子ちゃんはどうでもよさそうに答える。

そして「んゝ……」と両腕を前に伸ばした後、小首を傾げながら俺の事を見た。

「それで？」

「え？」

「こうして一晩経った訳だけど……なにか思い付いた事はあった？」

「……ん？ 思い付いた事？」

「先に言っておくけどね、昨日あんたが言ってたような事は全部まとめてボツだからもつとまともなものにしないよね」

「……んん？ 昨日俺が言ってた事？」

……あれ、銀子ちゃんは一体なんの話をしているんだろうか。

俺は昨日の記憶を思い返してみる……が、やっぱり駄目だ。思い出せない。

あの夢を見ていた影響だろう、俺の頭の中で昨日の記憶が迷子になってしまっている。

「……あのさ」

「なに？」

「ごめん。それ、なんの話だっけ？」

俺は正直にそう尋ねてみた。

すると銀子ちゃんはバカを見るような目をしながら「……は？」と呟いて。

「八一、あんたまさかド忘れしたの？」

「うん。まるつきり全然思い出せない」

「……あつそ。なら忘れたままでもいいさ。別に私にとってはなににも不都合はないから」

そしてつんとそっぽを向いちゃう。相変わらずクールで姉弟子らしい物言いだ。

けれどそれじゃ俺としては不都合がある。何の話かは分からないけど、忘れたままではいるのは脳みその奥がムズムズしてしまう。

「銀子ちゃん。意地悪しないで教えてよ」

「意地悪なんてしてない。つい昨日の事なのにド忘れするあんたが悪い」

そ、それは仰る通りで……。

「それはごめんって。だけど本当に本当に思い出せないんだ。だからお願い、銀子ちゃん」

「……はあ」

すると銀子ちゃんは呆れたように嘆息して。

困っているような悩んでいるような、なんとも複雑そうな表情をしながら、言った。

「……ご褒美の事よ」

「……ご、ご褒美……ですか？」

ご褒美って……え、なんのご褒美だ？

まさかとは思うが夜のご褒美の話なのか？ ならば是非とも中学生の頃の制服で――

「タイトル」

「え？」

「竜王のタイトル。三期防衛をしたご褒美が欲しいってあんたの方から言ってきたんじゃないの」

「……あー」

……あー。

ああそうだ、思い出した思い出した。

竜王のタイトル。

その言葉を聞いた瞬間、頭の中がぶわつと一気にクリアになった。

あれは……今からだと2ヶ月程前になるのか。

10月頃から竜王戦が、俺にとつて3期目の戴冠が懸かった竜王戦が始まった。

そしてつい先日、12月の上旬に竜王戦第6局目が行われて、接戦の末に俺が勝利を挙げた。

それで計4勝目。挑戦者を退けた俺が竜王のタイトルを三度この手に掴んだ。

そして。俺の竜王位防衛のお祝いとして、地元に戻ってきてすぐ清滝一門のみんなで簡単な祝勝会を開く事になったんだけど……その時どうしても都合が合わず、銀子ちゃんだけは参加する事が出来なかった。

だからその後日。俺と銀子ちゃんはお互い予定の合う日を調整して、みんなに内緒で二人だけの祝勝会を行う事にした。それが昨日の事だ。

そして色々といちゃつく中で俺は「タイトル防衛のご褒美ちよーだい？」とおねだりしてみた。

銀子ちゃんは「しようがないわねえ」と頷いて「じゃあ何が欲しいの?」と尋ねてきた。

そこで俺は色々と提案してみたんだけど……あんまりピンと来るものがなかった。

「ご褒美ちよーだい?」とは言ってみたものの、正直言つて銀子ちゃんがOKしてくれるとは思つてなかったの、肝心の中身を考えていなかった。

そして結局俺は「一晩じっくり考えてみる」と、そう言つて昨日は眠りに就いたのだつた。

「思い出した?」

「うん、思い出した。全部完璧に思い出しました。そういやあそんな事言つてたね、昨日の俺」

「そうだそうだ、そうだった。あの夢を見る直前、つまり現実の昨日はそんな感じの流れだった。」

率直に言つて昨日の俺は浮かれていた。それはもう浮かれきつた浮かれポンチになつていた。

だつて銀子ちゃんと二人だけでの祝勝会なんて、そんなの絶対テンション上がるじゃん? それにタイトルも防衛したんだし、ちよつとぐらい羽目を外しちゃつてもいい

じゃんいいじゃん？

……とそんな考えの下に浮かれた結果、年下の恋人に対しておねだりしちやつたという訳だ。

「……でも銀子ちゃんさあ、ご褒美なんてよくOKしてくれる気になったね」

「……それ、あんたが言うの？」

「え、どういう事？」

「どうもこうも……」

銀子ちゃんは白けた目をこちらに向けて。

『あーご褒美欲しいな欲しいなー銀子ちゃんお願いお願いー』……って、何度も何度もしつっこくせつついて来たのはどこの誰だと思ってるのよ」

「……え、ええつとお……誰ですかね？ そんな物欲しがりなタイトルホルダーいるのかな？」

大いにとぼけてみせる俺。

すると呆れた顔をしていた銀子ちゃんも、やがて「……はあ」と嘆息して。

「……でもまあ、めでたい事なのは確かだし？ それに……私はあんたの彼女な訳だし？」

一転してちよつと拗ねたような表情で、ちよつと赤くなつた顔で言う。

「頑張ったご褒美に、一つぐらいはお願いを聞いてあげる」

「ご褒美っ！ お願いっ！」

これは問答無用でテンションが高まる言葉だ。

それにしてもよくぞ銀子ちゃんからその言葉を引き出した。昨日の俺、マジでグツジヨブ。

「……ま、そういうわけだから……とにかくとつとお願いを一つ決めなさいよね」

「そこなんだよなあ……昨日も色々考えてはみたんだけど、いざご褒美つてなると中々これだ！ つてものが思い付かなくて……」

「さつきも言ったけどね、昨日あんたが欲しがったようなご褒美は全部ボツよ。二人で世界一周旅行がしたいー、とか、誰も居ない無人島に二人きりで住みたいー、とかは絶対にノーだから」

……昨日の俺、そんなもんをお願いしたのか。

確かにそりゃあボツだ。大体無人島なんかに住んでなにをするってんだ？

「けど無人島はともかく、二人で世界一周旅行ってのはわりかしアリだと思うんだけど」「イヤよ。世界一周なんて興味ないし、なにより私そんなに暇じゃないもの」

「そ、そつすか……」

面と向かってこうまでハッキリと拒否されるとちよつと悲しい。

世界一周旅行、銀子ちゃんと二人で世界各地を旅行するのって結構楽しそうなんだけどなあ。

「……でも確かにそうだね。スケジュールの都合上難しいってのはあるか」

「そういう事。ご褒美とはいっても実現困難なものは当然NGよ。他にも宇宙旅行がしたいとか、月に行きたいだとか、挙句の果てには……」

するとまた銀子ちゃんは呆れた表情になつて。

大層呆れ返つた表情で、言つた。

「銀子ちゃんがいっぱい欲しい、とか」

「……え？」

銀子ちゃんが……いっぱい？

あれれ？ そのキーワードは、なんか……聞き覚えがあるような気がするぞ？

「俺……そんなこと言つたっけ？」

「うん、思いつきり言つてたけど」

「……そっか」

銀子ちゃんが、いっぱい。

どうやら昨日の俺は……そんな事を銀子ちゃんにお願いしてみたらしい。

「……ちなみにそれ聞いた時どう思った？」

「こいつ酔っ払ってんのか？　って思った」

「な、なるほど……」

別に酔ってたわけじゃないんだけど。そもそもお酒が飲める年齢じゃないし。

けれど……うん、そうだ。思えば確かに俺は昨日銀子ちゃんにそんな事を言っていた。
た。

「ご褒美に何が欲しいの？」と聞かれて、冗談のつもりで「銀子ちゃんがいっぱい欲しいですっ！」って答えたんだ。

「……そっか、そういう事か」

「なにが？」

「何がっていうか……うん、なんだか色々腑に落ちたよ」

つい先程まで俺が見ていた夢。

4人の銀子ちゃん達とこの部屋で仲良く楽しく過ごしていたあの夢。

あれは俺がそう願ったから。

俺自身がそれを欲しがったからだだったんだ。

きつと竜王のタイトルを防衛したご褒美として、将棋の神様がプレゼントしてくれた

んだろう。

「……銀子ちゃん、俺知らなかったよ。名人って随分と気前が良い人だったんだね」

「は？ 名人？」

「ううん、なんでもない」

でもそつか。そういう事なら納得だ。

随分と俺にとって都合の良い夢だったけど、当の俺自身が願ったんだからそりゃそうもなる。

……有難うございます、名人。

本当に幸せな心地になれた最高の夢でした。今度菓子折りでも持って改めて挨拶しに行きます。

……と、心中で将棋の神様に謝意を述べる一方、俺はある事を心に固く誓った。

よし決めたぞ。だったら次からは毎回このお願いをしようじゃないか。

次にまたタイトルが取れたらその度に必ず「もっかい銀子ちゃんがいつぱい欲しいですっ！」と将棋の神様におねだりする事にしよう。

その次もその次も。タイトルが取れたら必ずこのお願いでいく事にしよう。

何度でも何度でも。この手でタイトルを勝ち取つてもう一度あの子達に会いに行こう。

絶対にそうしよう。なんかかつて無い程にタイトル獲得のモチベが高まってきた
ぜえ…………!!

「…………あ、そうだ」

そしてそれと同時に、頭の中にとてもナイスなアイデアがすくと下りてきた。

竜王位防衛のご褒美。将棋の神様じゃない、銀子ちゃんへのおねだりの内容。

実現可能なものと言うならあれが欲しい。俺にとってあれ以上のご褒美は無いだろ
う。

「銀子ちゃん」

「なに？」

その名前を呼んで、俺と目が合う。

ここに居るのは空銀子ちゃん。俺の恋人。

俺の人生はこの子と共にあった。だから俺はこの子の事なら全てを知っている。

そんな中で見た、あの不思議な夢。

あの夢は空銀子という女の子の魅力を改めて振り返る良い機会だったと今では思う。

幼女の頃から可愛くて。

小学生の頃も可愛くて。

中学生の頃も可愛くて。

高校生の今も可愛くて。

そして……その先だってももちろん可愛い。

俺はその事をあの夢の中で……最後に出会えたあの子に教えてもらった。
だからもう一度会いたい。

数年成長した姿のあの子に。

殆ど話す事の出来なかった、5人目のあの子に。

九頭竜銀子ちゃんに会いたいな。

……と、俺はそんなお願いをしてみる事にした。

おまけの話

おまけの話 J C 銀子のその後

「……んっ」

ずっと遠くにあつた意識が覚醒していく。

そして——私は目を覚ます。

「……………」

目を……覚ます？

「……あ、れ」

……ここ、何処だろう。

身体を起こして辺りを見回して、私はまず最初にそんな事を考えてしまった。

けれど……そんなのおかしな話だ。

だつてこのベッドも、この部屋の景色も全て、私には見覚えがあると言うのに。

私がかうして目覚める場所なんて、自分の家の自分の部屋以外にはあり得ないのに。

それに……そもそも、私はあの部屋の事なんてなにも知らない。

あの時みんなと一緒に居た部屋、あんな小さなワンルールの一室に見覚えなんて無い。

あの場所には、関西将棋会館近くにあるワンルームマンションには行った事すらも無いのに。

だから。

「……そっか。終わったんだ」

そう。私はようやく夢を見終わった。

だから……これが私の現実だ。

朝。実家にある自分の部屋のベッドの上で目を覚ます。そんな当たり前の日常。勿論ここには八一なんて居ないし、年齢の違う三人の自分達なんて居るはずが――

「……………」

その時、きゅつと胸の奥が痛んだ。

私は思わず心臓の辺りを押さえる。

この部屋には私だけしか居ない。

そうと認識した途端、不意に寂しさを……心の中に埋めようのない空白を感じてし

まった。

こんな経験は初めてだ。

ただ一晩眠って、夢を見ただけなのに。

それで朝起きたら寂しさを感じるだなんて。

こんなに寂しく感じるのは……あまりにも長くあの夢を見すぎたせいだろうか。

それとも……あの夢が、あまりにも――

「……………ふふっ」

あの夢の日々を思い出して。

すると、自然に私の口から笑みが溢れた。

「……………へんな夢」



私の名前は空銀子。中学3年生の14歳。

当たり前だけどJ C 銀子なんていう名前じゃないから。至って普通の空銀子そのも

のだ。

そんな私は今日……というか。あるいは昨日からというべきか……。

とにかく昨晩から今朝に掛けて、体感的には一ヶ月を優に超える程に長い長い夢を見ていた。

考えれば考える程に不思議な夢だった。

八一がいるのはまあいいとしても、なんでか知らないけど私が四人も居るし。

幼女の頃や小学生の頃だけならともかく、高校生や更にその先の未来の私まで居たし。

それに夢だつてのに強烈な現実感があつた。

触れられたり、抱き締められたりすると、その感触や温かさがしつかりと感じられた。

そのせいなのか、なんか……なんか、色々としちゃいけないような事をしちやつたし

……。

けれど……とかく夢とは。

夢というのは荒唐無稽なもので。そして次第に移り変わっていくもので。

そして……なによりも夢なんて、目が覚めたらすぐに忘れてしまうようなもので。

だから私も先程見た夢、自分が四人も居る変な夢なんてのはその後すぐに忘れてしまった。

ベッドから出て着替えを済ませて、朝ごはんを食べている時にはもう夢の記憶なんてあやふやになっていたと思うし、その日の終わりにはもう殆ど忘れてしまっていたと思

う。

そしてその後、一週間も時間が経てば思い出す事すらも無くなった。

その程度の話だ。夢なんて所詮はその程度、記憶にすら残らないような泡沫の出来事。

以上が、あの不思議な夢を見た事についての私の後日談のようなものだ。

要は次の日にはもう忘れていたっていう、ただそれだけの話。当たり前の話なんだけどね。

なのでここからは私の日常を歩むだけだ。

ここからは目の前にある現実を生きるだけで、もはや夢の出番なんて無い。

……と、そう思ってたんだけど。

しかし、そうじゃなかった。

やっぱりあの夢は不思議な夢だ。他とはちよつと毛色の違う特別な夢だったんだと思ふ。

というのも……それから暫く経った後、私は唐突にあの夢の記憶を思い出す機会があつたから。

とつくのとうに忘れていたはずのあの夢を。

あの時に出会った彼女達を……ふいに思い出す事になった、そんな出来事があったのだ。

それは……私があの夢を見てから数ヶ月後。

季節は——秋。

場所は——ハワイ。

……そう、ハワイだ。私は今ハワイに居る。

どうしてこの私が太平洋にぼつんと浮かぶハワイ諸島にやって来たのか。

それは私自身が理由ではなくて、私の弟子である九頭竜八一に関連している。

八一の所有する竜王のタイトル。その防衛を懸けた竜王戦第一局。

挑戦者であるあの名人と、竜王である八一が初めて戦う事になった歴史的な一戦。

その対局場として選ばれたのがこのハワイだ。約五年ぶりの海外対局となるらしい。

そしてその対局の大盤解説の聞き手役として私は呼ばれた。つまりはお仕事の一回つてこと。

最初にこの話を受けた時、率直に言って面倒な仕事が入ったなあ、と思った。

だってハワイなんて、大して興味が無い私にとってはただ遠くて暑いだけの場所だ

し。

そもそもなんでこの私が八一の対局なんかの大盤解説に……なんて事を考えてしま
う。

けれど……まあ、その……ね？

ほら、それでもお仕事だからね。うん。

お仕事だから仕方ないの。仕方なく私もハワイまで同行して……八一を応援してあ
げないと。

だから私はハワイにやって来た。八一と一緒に。

関西国際空港から直行便、約九時間のフライトを終えてホノルルの空港に到着して。

ホテル御用達のプライベートビーチを満喫して、その後ホテルの会場で前夜祭を行っ
て。

そして――

竜王戦第一局が始まって。

午後六時を過ぎた頃、一日目の対局は名人が封じ手を行った時点で指し掛けとなっ
て。

……そして。

「……んっ！」

バシヤンっ！

と水音を立てながら顔を上げる。

「…………ふう」

水中の世界から抜け出して、閉じていた口を開いて大きく一呼吸。

身体中を流れていく水の感触。髪の毛や頬を伝ってぼたぼたと落ちていく水滴の感触。

……うん。その、素直に気持ちいい。やっぱり入って正解だったかな。

プールの授業なんて殆ど休んでいたけど、こうして海を泳いでみると中々悪くない。

それに水温があんまり冷たくなくて良かった。さすがはハワイ、常夏の島。

私は今、ハワイの海を泳いでいた。それも月明かり照らす夜の海、ナイトビーチだ。

昼間は日差しのせいで入れなかったから、日が落ちるこの時間まで待つて海に入る事にした。

だつてほら、せつかくハワイまで来たのに一度も海に入らないなんて……ちよつと残念だし。

とはいえ大盤解説の聞き手役の仕事を終えて、今の時刻はもう夜の10時過ぎ。

大阪なら補導されるような時間だ。そんな時間に中学生の女が一人で海に入るなんて、いくらホテル備え付けのプライベートビーチだからって少々不用心な行為だとも思おう。

そもそも私は海なんて別に好きじゃない。

体質のせいでしょうか。日が落ちた後じゃないと入れないし、泳ぐのだって疲れるだけだし。

だから普段の私だったら、こんな不用心で疲れるような真似はしなかったと思う。

それなのに。海に入る予定なんて無かったのに。

ふと気付いたら自然と私の足がビーチに向かって歩いていたのはどうしてか。

それは……先程も言った通り、せっかくのハワイの海を惜しんだからなのか。

それとも……。

「……はあ」

自然と、胸元に手を置く。

なんだか息が重い。心臓が何かに縛られているような、とても窮屈な感じがする。

もしかしたら、私はいま……少し、情緒が不安定になっているのかもしれない。

「だって……八一、が」

竜王戦第一局、八一の対局を間近で見て。

あの八一が。将棋の最高位タイトルである竜王の防衛を懸けて、あの名人と戦う姿を見て。

対局席の上座に座っていた、八一が。

あんなに遠いところに、八一が――

「……って、あれ？」

あんなに遠いところに、八一が……居る？

よく見ると砂浜の先、こちらに向かって歩いてくる人影があった。

暗くて見づらいけど、あれはもしかして……。

「……八一？」

「えっ？ あね……でし？ ですか……？」

見間違いじゃなかった。

そこには本当に八一が居た。

対局中に着ていた着物を脱いで、ラフなTシャツとパーカーに着替えた格好で。

てかこいつ……なんでこんな所に居るの？

あんたさあ、ついさつきまであの名人とタイトルを懸けて戦ってたんでしょ？
だったらもう今日はすぐに部屋に戻って、とつと眠って少しでも頭を休ませなさい
よね。

初戦の夜に竜王がこんな所をほつつき歩いていいと思ってるの？ バカなの？
……とかとか。

そんな文句を言ってるやろうとしたんだけど……でも、言えなかった。
だって、なんか、八一の視線が……なんか、分かりやすく私の胸元に……。

そう言えば、今更だけど私は水着で――

「……えっち」

「だ、だって仕方ないでしょそっちが水着なんだもん！ どうしたって見ちやうでしよ
!？」

慌てた様子で顔を背ける八一。

……やっぱり見てたんだ。すけべ。正直に言えば良いつてもんじやないんだからね。

「け、けど……なんでこんな夜中に泳いでるんです？」

「昼間は日焼けしちゃうもの」

「ああ……姉弟子はそうでしたよね」

「八一こそ、こんな時間に何してたの？」

「え？ いや、俺は……」

「覗きっ」

「違いますよッ!!」

ふむ、覗きではない……と。

けど、それならこのすけべ竜王は一体何をしにビーチまでやって来たのか。

ま、まさか人目に付きにくい時間を選んで、覗きよりもっと過激な事をするつもりじゃ……!

……なんて、そんなの聞かなくても分かるけど。

恐らくはこのままじゃ眠れないなど感じて、対局の熱を冷ましに来たのだろう。

ただでさえタイトルを懸けた一戦な上、今日は八一が初めて名人と盤を挟んだ日。緊張とかプレッシャーとか色々あったんだと思う。

……ん。だったら……そうね。

ここは姉弟子として、手間の掛かる弟弟子に付き合っただよあげるべき……だよね。

私はホテル備え付けの水道で身体を流して、タオルで肌を拭いた後、八一に向かつて言った。

「まあいいわ。ちようど泳ぐのにも飽きて街を歩きたかったから、ついて来なさい」

そんな流れで、私は八一と一緒に近辺を散策する事にした。

夜は少し肌寒く、私は水着のままだったけど……八一が上に羽織るパーカーを貸してくれた。

さすがは観光地だけあって、ホノルルの街はこんな夜遅い時間でも賑わっていた。

外国人が多くて、一人では心細くて歩く気にならない場所だけど……でも、二人なら。

「……………」

「あ……………」

すると……………どちらからだったか。

自然と私達は、手を繋ぎ合っていた。

子供の頃のように、迷子にならないように。離れ離れにならないように。

手を繋いだまま、ホノルルの街を歩いて。

手を繋いだまま、とろけるような甘さのアイスを食べる。

握り合っている、この手の中にある感触。

八一の右手の指と手のひらの感触。それがなんだか懐かしくて。

私は……………これが欲しい。

もう一度これを取り戻したい。この手の中にある大事なものを。

……………けれど、この手を離して八一は先に行っちゃって。

私はその後についていくのが精一杯で。全然追い付く事なんか出来なくて。

……でも、今は。

いまは、八一が……近い。

こんなと一緒に居るの、いつ以来かな。

こうしているだけで、私は――

……そして。

ぶらぶらとホノルルの街を散策して12時近く、私達はホテルまで戻ってきた。

「姉弟子、パーカー返して下さい」

「やだ」

「えー……」

エレベーターを上がって私の部屋の前。八一の言葉に私はすぐさま拒否を返す。

「そういうえば姉弟子、誰かと同部屋なんですか?」

「私は個室。奨励会員だから誰かと一緒にいいって言っただけで、タイトル保持者ついでとで気を遣われたみたい。どうしてそんなこと聞くの?」

「へ? いや……あいは桂香さんと二人部屋だって言ってたから、姉弟子も誰かと同室

なのかなと思って」

「……………こんな時でも小学生のことばかり」

「は？ こんな時って？」

「ばーかばーか。ロリコンキング」

「だからロリコンじゃねーし！」

この時、私は――

……………なんて言ったらいいんだろう。なんか……………こう、ふわふわした感じ、というか。

心はドキドキしてるのに頭はぼおつとしている、そんな地に足のつかない妙な心地だった。

だって、久し振りに長い時間八一と一緒に居て。

すぐ隣に八一が居てくれて。

八一の手のひらの感触があつて。

……………八一が、好きで。

好きで、好きで……………大好きだから。

「証拠は？」

「はあ？」

その気持ち止まらなくなつて。

心の中から溢れちゃったから……こんな事をしちゃったのかもしれない。

「……信じて欲しかったら証拠を見せて」

そう言つて……私は。

爪先立ちになつて。

くつと顎を持ち上げて。

そして……口元を少しだけ突き出して。

何かをせがむかのように、瞼を閉じる――

――と、その時だった。

その時突然、私の脳内に……その声は届いた。

『――キス待ちは駄目っ!』

――え?

私は閉じ掛けていた瞼を開く。

すると……なんて言つたらいいのか、まるで時間が止まったような感覚がして。

私の脳内ビジョン……と言えいいのか、それともただ単に妄想と言えいいのか。

とにかく私にだけ見える感じで……私の隣に懐かしき彼女が立っていた。

『じゃ、JK銀子!』

その姿は忘れもしない。

中学3年生の今から一年程度成長した私、高校一年生になった私がそこに居るではないか。

いや勿論実際にJK銀子ここに居るわけじゃないんだけど、でも居るのだ。私の目にはくつきりとその姿が映っていて、そんなJK銀子は必死な顔で私に訴え掛けている。

『駄目よJC! キス待ちじゃ駄目なのっ!』

『え、駄目って……』

『ちゃんと言葉にしないと八一には伝わらない! 前に教えてあげたでしょう、キス待ちじゃあ私と同じ失敗をする事になるわよ!』

『あ……』

私はハツと目を見開く。

そうだ、そう言えば……あの夢の中で、JK銀子からそんな話を聞いたような気がする。

あのワンルームの部屋のベランダで。呼び出しを受けた私はJK銀子と二人きりで

話し合った。

そこで聞いた。

キス待ちでは駄目なのだと。

ハワイでそれをやって自分は失敗したのだと。

『……そっか。そうだったわね』

『思い出してくれた？』

『……うん』

J K 銀子は確かにそう言っていた。

その時の記憶を。もうとっくに忘れていたはずのあの不思議な夢の記憶を。

それを私はこの土壇場で思い出したというのか。

それとも……。

これはもしかして……J Kがおせっかいを焼きに来てくれたって事なのかな？

……うん、きつとそうね。

ここはそういう事にしておこう。だってほら、その方が夢があると思うから。

『……ふふっ、ありがとう、J K』

自分と同じ失敗をさせない為に、一番大事な事をわざわざ伝えに来てくれたんだね。

私の隣に立つ、高校生になった私の姿は……なんだか私の守護霊のようでも心

強い。

……と、そこで思考が現実に戻ってきた。

J K 銀子との会話が、一瞬にも満たない時間で行われた私の脳内会議が終わって。

「……そっか」

「ん？」

キス待ちじゃあ駄目。

それでは八一には伝わらない。

そうね、伝えたい事はちゃんと言葉にしないと。

「……八一、キスして？」

という事で、ちゃんと言葉にしてみた。

うんうん。これでいいよね。これで問題なし。

隣を見れば……ほら、J K 銀子もそれで良しと笑顔でサムズアップをしてくれている。
ちゃんと言葉にした事だし、これでJ Kの二の舞を演じる事はないだろう。良かった

良かった。

……あれ？

「え」

「え」

私と八一の眩きがハモった。

あれ？ わたし今……なんて言った？

おまけの話 J C 銀子のその後②

「……八一、キスして？」

……とか、聞こえた。

その言葉の後、数瞬の空白が生まれて。

「え」

「え」

そして私と八一の眩きがハモった。

あれ？

わたしは今、何を言っ——

「……………え、キ、キっ、て…………」

「…………う、え？」

「…………あ、う、あ、え、でも、あね、あねでし、で、それ、一体、どういう…………つ！」
真つ赤な顔で、口をパクパクときせて。

言葉に詰まりながら、八一はこれ以上無いというぐらゐに驚愕の表情になっている。

「…………うん？」

一方で私は未だにぼかんとしている。

は？ ていうかなんなの八一のその顔は？

ていうか、え？ キスって？ キスってなに？ キスして？ ってなあに？

キスして？ って、なんだろ？ きす、して、…………って…………なに？ ……な、なにい

!?

え!? ウソウソなんでなんで!?

なんで!? なんでそんな事言っちゃたの!?

なんでここでそんな「八一、キスして？」なんて言っちゃったのわたしは!?

だつてそんなの、そんなの駄目じゃんっ!

そんなの絶対一番言っちゃ駄目なやつじゃん!

それ言ったら、それ言っちゃたらもう私の気持ちぐバラバラになっちゃうじゃんっ

!!

「あ……あね、でし……」

「っっ！」

「今、いま……キスして、って……おれに……」

「ち、ちが、今のは、今のはあ……!!」

耳を疑うような言葉を再確認する八一と、あまりの失言に動転して半泣きになる私。

さっきの言葉はバツチリ聞かれてしまっている。言い間違いでは済ませられそうにない。

ああもうなんで!? なんでわたしは八一に対して「キスして?」なんて言っちゃうの!?

そんなド直球な言葉、言えるもんならとつくに言ってるわよっ! それが言えないからこそそのキス待ち戦法じゃない!!

大体私と八一は付き合ってもいないのに、それなのに突然「キスして?」なんて言ったら、なんかもう私頭おかしい女みたいじゃない!!

ていうかちよつとお! JK 銀子おっ!!

これあんたのせいでしょ!? あんたが私を唆したんでしょう!?
だつたらあんたが責任取りなさいよお!!

『……………』

しかし隣りにいるJK銀子は無反応。

まるで回線が切れているみたいに、JKは微笑んだままの格好で微動だにしない。

分かった……今分かった!!

こいつは私の守護霊なんかじゃない！ こいつはただの悪霊だつ!!

「……姉弟子、おれは……」

「あ、う、や、いち……」

八一の表情が。八一の……目が。

私を真っ直ぐ見つめてくるその瞳が、何を言おうとしているのか……わ、分からない。

うう、八一の考えが読めないよお。

ど、どど、どうしよう、どうしよう……!!

もし、もしここで八一から、姉弟子とキスするなんて無理ですって断られたら……。

……そしたら、わたし、もう、立ち直れない。

そのままの足でビーチに向かって、海に身を投げて熱帯魚の餌になっちゃおうと思う。

「おれ、は……」

「や、……やいち」

……やだ。八一の答えを聞くのが怖い。

いつそこから走って逃げる？ ううんそれじゃただ問題を先送りにするだけだ。

だったらもう八一を殺して私も死ぬ!? それしか手は残されていないの!?

どうする……どうすればいい!?

私はまるで対局の最終盤に匹敵する程の極限の集中力を発揮して――

「しよ、勝利のおまじないっ!!」

瞬時に閃き、そう叫んだ。

「え、しよ、勝利のおまじない!?」

「そう!! これは勝利のおまじないなの!!」

これはキスじゃなくて、勝利のおまじないだ。……と、そういう話にする事にした。

決して他意など無い、ただのおまじないだという事にすればセーフだ。……セーフで

しよ?

「え、て、おまじないって、キスがですか!? そんなおまじない聞いた事ないですけど――

――

「は、ハワイに伝わる言い伝えなのっ! カメハメハ大王がそう言ったのよ!!」

「カメハメハ大王がそう言ったんすか!?!」

「そ、そうよ！ 観光案内に書いてあったの！ カメハメハ大王は恋人のキスがあったおかげで、そのおまじないのおかげでハワイ全土を実効支配する事が出来たんだって！」

「そ、そんなんすか……凄いつすね、さすがはカメハメハ大王……」
知らないけど。

ハワイに伝わるおまじないなんて、そんなの見た事も聞いた事も無いけど。
随分と無茶苦茶な事を言っちゃったけど……なんとか誤魔化した……かな？

「そっか。おまじない……か」

そう言つて頷く八一。

うん、大丈夫そう。どうやらカメハメハ大王に責任を被せた事で八一は納得してくれ
たようだ。

「……ごめん。本当はこんな事、こういう時に言うのは駄目なのに……」

「あ、いやつ、別に、それは気にしてないからいいんですけど……」

私の謝罪に八一は軽く首を振る。

……けど、そう言う八一自身がそれを意識している事はさつきから伝わってきてい
た。

今は竜王戦第一局の途中、封じ手をして一日目と二日目の合間。

そういう時に勝利とかどうとか、対局に関わる事は心を乱す要素になるから言うべきでは無い。

それは棋士にとって暗黙の了解のようなもので、勿論私だってちゃんと分かってはいただけけど……ごめんね八一。今の私にはそういう事に気を回していられるだけの余裕が無かったの。

「……でも、いいんですか……ね？ その、おまじないって……」

「……なに？ 駄目なの？」

「いやっ、駄目っていうかその、むしろ俺よりも姉弟子の方がいいのかな、って……」

「……っ」

——ここだっ！

ここは攻めあるのみ！ 攻めるのよJ C!!

……と、私の脳内でJ Kの声が……否、悪霊の声が聞こえて。

その声に押されたわけじゃないけど……私はなけなしの勇気を振り絞って勝負手を放った。

「……い、い、けどっ」

「ッ……!!」

私の答えを聞いて、八一がごくんと喉を鳴らしたのが分かった。

「……………」

……………ああ、もう、だめ。

もう八一の顔をまともに見られない。

だって、だってもう恥ずかしすぎる。自分からキスの許可をあげちゃうだなんて。

ああ、顔が熱い、頭の中が熱いよお。きつともう顔中真っ赤になっちゃってると思う。

……………でも、私だって、なにも勝機も無しに勝負手を放ったわけじゃない。

さつき頭の中に届いた悪霊の声。その声のおかげで私はあの夢の記憶をまた思い出した。

あの夢は……………あくまでただの夢だったのか。

それとも……………一種の予知夢のようなものなのか。

それは分からないけど……………でも。

あの夢の中で、18歳の八一は言ってくれた。

私の事が、好きだって。そう言ってくれたから。

その言葉を……………あの夢を、私は信じたい。

「あ、姉弟子……………」

そして、八一の瞳が……私を見つめるその瞳が、どんどん熱を帯びていく。
「……いい、いいん……ですか?」

もしかしたら、私と同じくらいに八一の方もすでに余裕が無いのかもしれない。
そう思ってしまう程、八一は真剣な顔付きで真っ直ぐに私だけを見ていて。

「……うん。いいけど」

「まつ、マジですか? だって、キスですよ?」

「……でも、おまじない、だから」

「おまじないなら……オツケーですか?」

「……うん、おまじない、だもん」

「……ほんとに、いいの?」

……何度も確認するなっ! このバカっ!!

あまりの気恥ずかしさに耐えきれず、私は目を半眼にして八一を睨む。

「……いいって言ってるのが聞こえないの?」

「う……いや、でも……」

「それとも……おまじない……いらない?」

私がそう言うと、八一が「ツ……!」と息を詰まらせた。

少々拗ねるような言い方になってしまった、その言葉が決定打となったのか。

「……いります」

言った。

八一が、そう言った。

「……姉弟子のおまじない、欲しいです」

「う……」

ほ、欲しい、って、言った……！

八一が、私のおまじない、を……！ 私、の、き、き、き、きす、を……！

「いいんですよ？ おまじないなら……」

「……うん。おまじないなら……いいけど」

「……じゃあ」

八一が、一歩前に足を踏み出す。

そして……あつ、八一の手が、私の肩を支えるように優しく掴んで――

「……姉弟子」

は、はわわわ……っ！

ち、近い、八一の顔が近いよお……！ 喋るだけで息がかかっちゃいそう……！

「…………おまじない、しますよ?」

「うん…………」

そしてもう片方の手が、私の顎を持ち上げて。

目と…………目が、合う。

「きれいだ…………」

「ばか…………」

八一の顔が、近付いて。

それで…………つて、あ…………——

——触れていたのは、何秒くらいだっただろう。

とにかく、その感触は。

熱くて。…………とつても熱い感触を残して。

そして…………触れ合っていた箇所が離れた。

「…………これで、いいんですよね?」

「…………うん」

……しちやった。

……やいちと、おまじない、しちやった。

すごく、すごくドキドキしてる。

鼓動が激しすぎて心臓が壊れちやいそう。

ついに、八一としちやった。

私の唇が、八一の唇と触れ合った。

……キスを、しちやった。

「……やいち」

「……なに？」

「……いまの、ファーストキスだから」

「っー」

私の初めてのキス。初めて八一としたキス。

なんか夢の中でしちやったような気もするけど……あれはあくまで夢だからノーカ
ンだ。

「私の初めてを使っておまじないをしてあげたんだから……これで負けたら承知しない
からね」

「……うん。分かってる」

「……明日、頑張りなさいよ」

「……うん」

明日の戦いの事を思い出したのか、赤く染まっていた八一の顔が真剣なものに変わる。

「分かってる。……明日は絶対に勝つから」

「……ん」

よ、良かった……。これで無事どうにか話を丸く収められそうだ。

今この場において一番優先するべき事、それは言うまでもなく八一の明日の対局だ。

さっきのキスは一応勝利のおまじないという体裁なのに、それに動揺しちゃって八一の将棋に悪影響でも出ちゃったら目も当てられないからね。

でもこの様子なら大丈夫だろう。このおまじないをプラスの方向に生かしてくれるはずだ。

「……じゃ、そろそろ寝た方がいいわ。もう12時を過ぎちゃってるし」

「ですね。……あ、けど姉弟子、その前に……」

「なに？」

そこで八一はビシッと姿勢を正して。

「……ひとつ、姉弟子に言いたい事があります」

……言いたい事？

「でも、今は言いません。今はまだ……こんな状況じゃこれを言うべきじゃないと思うから」

こんな状況、つて……。

「本当は今すぐにも言いたいけど……この竜王戦が終わったら、その時に改めて言います」

「つ………」

八一が私に言いたい事。今は言えない事。

それがどんな話なのか……私にはなんとなく想像が付いてしまった。

だってそれは……私だって、似たような想いをずっと抱いていたから。

「……なにそれ。そんなに大事な話なの？」

「はい。すごく大事な話です。さっきのおまじないをしたら無性に言いたくなりまして」

「……ふーん」

「でも、今は言えません。どつちの答えを貰っても明日の対局にもこの凄く影響が出ちゃうような気がするし、だからこそ今これを言うのはちよつとズルいような気もしちゃつて……」

どっちの答えというのはつまり、その話が私に二択を突き付けるものだという事。

そしてズルいというのは、明日の対局への影響を私が心配しちゃうから。そのせいで二択を本心から選択出来なくなるかも、という意味だろう。

ここままでヒントがあれば、その手を読むのは棋士じゃなくてもそう難しい話じゃない。

「だから……もう少しだけ、待っていて下さい」

「……竜王戦が終わるまで待てばいいの？」

「はい。そうしてくれると助かります」

「……うん、分かった」

……正直、今すぐにでも聞きたいけど。

でも、待てと言われたら待つ。こんな状況でその言葉を急かす程に私も鬼ではない。

それに聞いた限りだと、突然おまじないとかい出した私にも原因がありそうだし

……ね。

「じゃあ……そろそろ部屋に戻りますね」

「うん」

「……おやすみなさい、姉弟子」

「……うん。おやすみ、八一」

そして、ゆっくりと一步下がって。

名残り惜しそうにしながら……八一は立ち去っていった。

「……………はふう」

そして残されたのは私一人。

八一の姿が見えなくなった瞬間に緊張の糸が切れたのか、口から情けない声が漏れた。

「……………し、しちやった」

まだ、唇が熱い。

「……………や、や、やいちと、やいちと、きす、きす、きすしちやった……………！」

ドキドキが、止まらない……………っ！

「そ、それに、八一が言いたそうにしていた言葉って、あれって、あれって……………!!」

あれはっ、こ、こ、告白っ、なのでは?!

違うかな?! ううんあつてるよね?! あの感じはぜったい告白してくる感じだよね

!?

「あわわ……………! どうしよ、どうしよ……………っ!」

わ、わわわ! わたし、わたしっ!

こ、告白されちゃうっ?! 遂に、遂にやいちから告白されちゃうよお……!!
……などと、そんな感じで。

部屋にも入らず、廊下の真ん中で私がおろおろあたふた取り乱している。

「……ん?」

その時、もくもくもく、と。

まるで煙が立ち上がるような感じで。

「あ、JK……」

私のすぐ隣、私にだけ見える感じで再びJK銀子が現れて。

『……ふっふっ』

そして、JKは私に向かって軽やかにウインクをしてみせた。

『……ね? 言った通りでしょ?』

うわっ! ドヤ顔ウザい!

もうJKは出てこなくていいから自分の世界に帰りなさいよね! 悪霊退散つ!!

……ちなみに、その後。

私と八一がキスをしちゃったその翌日。

昨日の封じ手が解かれて、竜王戦第一局二日目の対局が始まったんだけど……。
その結果は……八一の勝ち。

なんとあいつ、初戦で名人に勝っちゃった。

中継で見えていたけど、対局中の八一の様子は一日目とは丸つきり違っていった。

なんかこう……鬼気迫るものがあるっていうか、この対局はなんとしても絶対に勝つ!!
っていう意志がその姿勢から如実に伝わってきた。

これがハワイに伝わるおまじないの効果なのか。

それはカメハメハ大王に聞かないと分からないけど……でもなんか、これって……。

なんかよく分かんないけど……歴史の流れが大きく変わってしまったような、そんな気が——

……するような、しないような。

いずれにせよ私は知らない。私はなにも知らないからなにも関係ない。
文句ならあの女に言っつて。

あの時、呪いの言葉で私を唆してくれた悪霊、JK銀子に言っつて欲しい。

あいつが全ての諸悪の根源だから。

……ただ、まあ……その。

……ちよつとだけ、感謝はしてるけど。

おまけの話 J C 銀子のその後③

——会いたい。

あの子に、会いたい。

「……はあ」

思わず溜め息が出た。

別に憂鬱だからってわけじゃないんだけど、どうにも胸が苦しいというか、重い。

胸の奥で大きな感情が渦を巻いて唸りを上げているような、そんな感じがする。

というのも……あの子に会いたいから。

会いたい、会いたい……と、ここ最近の俺はそんな事ばかりを考えてしまっている。

まるで恋煩いにも似た想い。……というか、ぶっちゃけるとそのものだったりする。

きつかけはあの一件。ハワイの地でとあるおまじないを貰ったのが契機だった。

あの日までは普通に接していて、それなのにあのおまじないがきつかけですぐそうなるだなんて、我が事ながらなんて分かりやすいというか、なんて現金な話だとは思うけ

ど。

でも、なっちゃったんだからしょうがない。

自分の気持ちに嘘はつけない。この想いから目を逸らす事は出来ない。特に今ではもう。あの時に約束した期限はすでに来ているわけで――

――と、そんな事を考えていた時だった。

「あつ……」

黒のセーラー服。

見慣れたその制服姿を、特徴的なその格好を視界の端に捉えた。

「っー」

俺は慌てて駆け出す。

見つけた。ようやく見つけた。

関西将棋会館からの帰り道の途中、探していた相手はそこにいた。

「姉弟子っー！」

張り上げた俺の声が届いたのだろうか、

「……なに？」

立ち止まった彼女は振り返って、俺と目が合う。

っ、……か、かわいい。

こうして久し振りに顔を合わせた姉弟子はいつにも増して可愛く見えた。

これはあのおまじないによつて俺の心境が変化した影響だろうか。内にある動揺を気取られるのが恥ずかしくて、努めて平然を装いながら口を開く。

「なに、じゃないでしょう。探しましたよ。どうして先に帰っちゃうんですか、この時間ならまだ棋士室に残っていると思つたのに」

「……べつと」

つんと顔を横に背ける仕草、相変わらずのそつけない態度。

実に姉弟子らしい淡白な態度に、俺としては少々感心したような気分になつてしまふ。

こうして平然としているのは凄い事だ。俺には中々真似出来そうにない。俺は今も、こうして姉弟子の顔を見る度にハワイの一件を思い出して、視線が自然と唇の方に向かつてしまふ。

「今日は棋士室に人が多かつたから帰る事にしたつてだけ。それで、なんか用事でもあるの？」

「あります。……姉弟子、よければこのあと少し付き合つてくれませんか？」

俺がそう言うど、

「……付き合う？」

姉弟子は警戒するかのように顔付きを変えた。

「はい。……その、話したい事があるんです」

「……そう」

俺が何を言いたいのか。

自分が何を言われるのか。

恐らくはすでに察しているのだろう。姉弟子の神妙な表情がそれを物語っている。

それは竜王戦第一局。ハワイの地で約束した事。

あの時、ホノルルのホテルの部屋の前で……俺と姉弟子は勝利のおまじないをして。

俺が言いたくなった言葉を、この胸の内に湧いた感情を……けれど、対局への影響を

考慮して竜王戦が終了するまでは心に封じておく事にした。

そして先日、竜王戦は終了した。

激闘の末に俺はタイトル防衛を果たした。

これでこの子の隣に立つものにもなんとか格好が付いたはずだ。

だから……俺は姉弟子に言うつもりだ。

この子に対する自分の気持ち。自分の心を。ありのままを真つ直ぐに伝えようと

思っていた。

……だが。

「……今日は、駄目」

「えっ」

「今日はこのあと用事があるの。だから駄目」

そう言つて姉弟子は顔を背ける。

その横顔から見える瞳は弱々しく揺れていた。

それは……後ろめたさで、だろうか。

「用事つてなんですか？」

「……別に、なんでもいいでしょ」

歯切れ悪く答えるその様子も、俺と目を合わせようとしないその様子も。

今の姉弟子からは拒絶の意思が……俺とは話したくないという意思が伝わってきていて。

「なんでもつて……このあとなんてもう家に帰るだけですよね？ だったら——」

「とにかくっ！ その話はまた今度！」

「あつ、ちよ……！」

そして、一方的に会話を打ち切った姉弟子は走り去ってしまった。

突然の事に付いて行けず、俺は片手を伸ばしたままの虚しい格好で硬直する。

「姉弟子……」



マズい。

そろそろ限界が近い。

もう有耶無耶にするのにも無理が来ている。

「……はあ、はっ、はあ……」

呼吸が苦しくなってきた足を止める。

ちよっと走っただけですぐ息が上がる自分の身体を情けなく思いつつ、私は背後を振り返る。

「……来てない、か」

そこに八一の姿は、無い。

一方的に会話を打ち切り逃げ出した私を見て、八一は追いかけては来なかったようだ。

それにひとまず安堵する一方、私は一体何をしているんだろうという自己嫌悪の念もある。

というのも、実は……。

……ここ最近、私は八一と顔を合わせる事を控えている。

ううん、控えているなんてレベルじゃない。さつきみたく露骨な程に避けてしまっている。

……要は、逃げています。

「……………はあ」

家に帰る道を歩きながら、思わずため息。

憂鬱だ。こんな事をしてたって……逃げたって意味なんて無い事は明らかなのに。

間違った事をしてるって分かってるのに。そうと気付いているのに変える事が出来ない。

だつて……八一を、避けるなんて。

そりゃあね？ そりゃあ喧嘩した時なんかは八一を避けたりシカトしたりする事はあつたけど。そんなのもうお互い慣れっこなんだけど……でも今回はそういう話じゃない。

だって今は別に八一と喧嘩なんてしてないし。弟子との関係は悪化しているわけじゃない。

……というか、なんというか。

今はむしろその対極とも言える状態にあるかもしれないというか、その……その。

つまり関係は一応良好で、その上で今はある種の転換期というか、今後の私と八一の関係が大きく変わるかもしれない最も重要な時期だと言うのに。

それなのに。なのに私はこうして……八一と向き合うのを避けている。

今日は用事があるから駄目、なんて……そんな分かりやすい嘘を吐いてまで。

あの日に言おうとしていた言葉を。

ハワイの夜に約束して、竜王戦が終わった今遂にその時期が来た……あれを。

八一が私に言おうとしている言葉。その想いと向き合うのを拒んでいるのだ。

「……どうしたらいいんだろう。本当は……すごく嬉しいはずなのに」

つい弱音が……というか、本音が漏れる。

八一が言おうとしている言葉。それが私の想像通りの内容なら、最高に嬉しいはずなのに。

だってそれは私が長年心待ちにしていた言葉だ。ずっとずっと八一に言っただけ欲しかった言葉で、それを聞いたらきつと天に昇る程に嬉しくなっちゃうに決まっているの

に。

「……うう」

……だ、だつてっ！

だつて八一が私に言おうとしている事つて、あれはきつと……！

「……うう、うう~~~~~っ!!」

あ、あれは、こつ、告白、だよね!?

そ、そうでしょ!? 絶対に告白でしょ!? わたし間違つてないよね!?

「……うん。そのはず、そのはずだもん。あれは間違いなく告白してくる雰囲気だった」
 ハワイの夜。ホテルの部屋の前で私と八一はキ、……というか、勝利のおまじないを
 して。

その時に八一が何かを言おうとして、しかし対局への影響を考慮して保留にした言
 葉。

あの状況で言う事があるとしたら、それはもう「貴方が好きです」以外には無いだろ
 う。

……無いよね? そうよね?

あそこで「次の研究会についてなんだけどき」とかさすがの八一でも言わないよね?

そんな事言い出したらすすがにぶちころす。バカで大バカで将棋バカな八一でもそこまで空気の読めない男だとは思いたくない。

「竜王戦が終わるまで待つてくれ、つて言うからには……それだけ大事な話だつて事だもんね」

仮に将棋に関わる話なら、竜王戦終了時と言わずとも第一局が終了した時点で言えたはずだ。

その他の話題に関しても同じ理屈が通る。わざわざ数ヶ月も待たせる程の言葉なんて、そんなのもう告白ぐらいしか思い付かない。そうでしょ？

……うん、そうだ。そのはずだ。

これは正しい思考だ。決して私の願望に引つ張られた都合の良い妄想とかではないはずだ。

多分あのおまじないがきつかけになって、八一は私に告白したい気分になったんだ。うん。

「……………うん」

それはつまり。

八一が、私を、す、す、しゆき、つて事で!?

そ、それでつ、ついでに言つちやうとね!?

私も、わたしだってね!? 八一の事がしゅ、しゅしゅ、ちゅき……だからね!?

……わたしも、だから。

「……私も、好き……なのに」

……だからこそ。

そんな時に私は何をやっているんだろう。

なんで私は逃げているんだろう。という……自己嫌悪の念が心を抉る。

「……告白を避けるなんて。八一と向き合わないなんて、そんなの……駄目に決まっているのに」

そんなの絶対だめに決まっている……けど。

これは言い訳にしかないけど、私だってなにも理由なく八一を避けている訳じゃない。

八一からの告白を。

ずっと大好きだった初恋の相手からの告白を拒むほどの理由が。

ずっと一緒に居た男の子と向き合えない理由が、……一応、あるにはあるんだけど。

……けれど、これは……。

今、私の頭を大いに悩ませてくれているこの問題は……一体どう解決したらいいのか。

この問題に気付いてからずっと、ずっとずーっと考えているんだけど、一向に答えが出せない。

「……こんな事、直接八一に言うわけにもいかないし……」

それでは駄目だ。

それでは意味がなくなってしまうし……それはなんか……ちよつと、さすがに。

だってこれはとても自分勝手な話だから、それを八一に伝えるというのは気が引けてしまう。

これはあくまで私が――

……というか、実際には八一が解決してくれないといけない問題なんだけど。

……でも、そんなのどうすればいいんだろう。

「……………はあ」

答えが、見えない。

私は痛み始めた額を押さえて、ここ最近増えた大きなため息をまた吐き出した。

と、こんな感じで。

とある難題に頭を悩ませる私が意中の相手避け続ける一方で。

しかし相手の方も引くことは無い。

相手だつて本気だ。あらゆる手段を使って私と接触してくるのを止めなくて。

それから一週間後の事だった。

「姉弟子」

「っ！」

再び関西将棋会館からの帰り道。

まさかのタイミニングでその声が聞こえて、私はビクツと肩を跳ね上げた。

「や、八一……」

曲がり角の陰、そこにいたのは八一だ。

今はちよつと会いたくない相手、我が弟弟子である九頭竜八一が待ち構えていた。

……私の家のすぐそばで。

「……あんた、まさか……ここで張ってたの？」

「はっ」

当然のように頷く八一。

……こゝ、こいつ。まさか私に会う為に家の前で待ち伏せしてくるとは。

将棋会館内では相変わらず私が避け続けているって事情はあるけど、それでもこうまで強引な手を使ってくるだなんて。一歩間違えればストーカーだという事を分かっているのだろうか。

「だって姉弟子、電話にも出ないし、LINEだってずっと既読スルーじゃないですか」
「……そうだったけ？」

私がつつとぼけた返事をする、即座に八一から「そうですよ」と突っ込まれる。

……確かにそうだったかもしれない。ここ最近の私は本当に態度が露骨だったみたいだ。

「今日だって一緒に帰りましようって連絡を朝から入れてたのに、全然返してくれないし……」

「……それで、待ち伏せをしたって？」

「はい。仕方なくですよ、仕方なく」

「仕方なく、ねえ……」

それはストーカーの言い分なのでは……という話は置いていて。

仕方なくで待ち伏せをしちゃう程、今の八一はとても意気込んでいるのだろう。

絶対に私を逃さないという意思を感じる。この包囲陣はそう簡単には掻い潜れそうにない。

「……で？　なんか用事でもあるの？」

「勿論ありますよ。てかもうずっと前から言ってますよね？　姉弟子と話がしたいって」

「……………」

——話がしたい。

その言葉を聞いて私の心が臆したのか、反射的に一步下がって八一から距離を取る。

「……はなし？」

「はい。ホノルルのホテルで約束した話です」

「……私、今日はもう疲れたから……その話は今度にして欲しいんだけど」

「いやです。姉弟子そんな事言つてまた逃げちゃうじゃないですか」

「別に逃げたりなんかしないわよ。とにかくその話はまた今度に——」

言いながら身体の向きを変えて。

口では逃げないと言いながら、性懲りもなく逃げようとする私の機先を制するよう
に、

「銀子ちゃんっ！」

八一の手が、私の手を捕らえた。

「っ、……離して」

「……銀子ちゃん」

その右手を。

私を逃すまいと掴んできたその手を、ここで振り解く事は出来なかった。

だって……八一の目が。

私を見つめる瞳が……不安げに揺れていて。

「俺の話を聞いてくれるって……そう言ってくれたじゃないですか」

「……言った、けど」

そうだ。私は確かにそう言った。

竜王戦が終了するまで待つと。終わったら話を聞いてあげるって八一と約束した。

だから私は、逃げちゃダメなのに――

「……ふう」

すると八一は掴んでいた私の手をゆっくりと離して、一度大きく息を吐いた。

それで気を落ち着けたというか、何かしらの心構えをしたのだろう。

先程覗かせた胸中の不安を隠した表情で、こちらを気を遣うような優しい表情で私を見た。

「……姉弟子」

「……なに？」

「俺が姉弟子に何を言いたいのか、もうなんとなく察しているんですよ？」

「だから避けるんですよ？ 俺からそういう話は聞きたくないから」

「別に、そういう訳じゃ……」

「けど姉弟子は気にしなくていいですから。別に俺は、断られるのは覚悟して——」

「ちつ、違う！ そうじゃない、そういう事じゃないの!!」

八一が言い掛けた言葉を慌てて否定する。

そんなつ、それは違う！ 私はそんなつもりで八一を避けているわけじゃないっ！

断るつもりなんて一ミリたりとも無いのに………だけど、八一の立場からしてみれば、確かにそのように見えてしまうかもしれない。

「そうじゃない………そうじゃないの」

「そうじゃないって………でも、だったらどういうつもりなんですか？」

「それは………」

ああもう、どうしよう。どうすればいい？

「ここで私は何を言えればいい？」

「………分かった。けどその話をする前に一つ、先に私の話を聞いて欲しいんだけど」

「いいですけど………なんですか？」

「……実はね」

「はい」

私では解決出来ないこの問題を。これを八一に察して貰う為には……。

とにかく話の核心はひた隠しにして、それとなく遠回りに伝えられるような言葉で……。

「……あのさ」

私は——話を切り出した。

「……八一、さ」

「はい」

「……両親って、大事じゃない？」

「は？」

「両親よ。父親と母親って大切でしょ？」

「え、あ、まあ、そりゃそうっすね」

突然の話題に面食らったのか、戸惑いがちに頷く八一。

そう、両親は大事だ。父母という存在はなによりも大切にしなければならない。

「だったらさ」

「はい」

「ほら、たまには……実家に、帰省したくなったりはしないの?」

「えつ、……帰省ですか?」

「うん。たまには生まれ故郷に帰ってき、大切な両親に会おうのつてとても大事な事でしょう?」

「まあ、そりゃあ大事かもしれないね」

「でしょ? ならあんたは帰省しないの?」

「俺は……まあ、そうですね、今のところ帰省をする予定は無いですけど」

「は? なんで?」

「なんでこいつ実家に帰省しないの? 意味分かんないんだけど。」

「あんた両親が大事じゃないの? 久々に顔を見せようかなって思わないわけ?」

「思わないわけじゃないけど……でも……」

「でも、なによ」

「いやほら、ついこの前の竜王戦の前夜祭で両親とは会ったばかりなんですよ。姉弟子も会場に居ましたよね?」

「あ………そういえば、そうね」

「はい。両親や兄弟とはあの時に会ったし、だから俺としてはしばらく帰省はいいかな、ってこういう気分になってるというか……」

そうだった。

竜王戦第四局。旅館『ひな鶴』で行われた対局の際に八一はご両親達と会っている。となれば確かに帰省という気分にはならないのかもしれない。作戦失敗だ。

「……で、帰省がどうしたんですか？」

「いや、あの……」

「姉弟子の話はそれで終わりですか？」

「う、えつと、えつと……！」

「終わりなら……次は俺の番ですよ」

手順が途切れて動揺する私をよそに、攻めの番が回ってきた八一は表情を変える。

「……ま、まずいつ、このままじゃ……！」

「姉弟子、俺は」

「待って、八一、待ってっ！」

「待てないよ！ 銀子ちゃんっ、俺は——！」

「分かってるっ！」

分かってる。言われなくても分かってる。

ここまで来て八一の想いと向き合わないなんて。そんなのあまりにも不誠実だ。

それが理由で嫌われちゃってもおかしくない。それ程の事をしてるってちゃんと分

かってる。

けれど……っ！

「違うの！ 私は、私は……！ 別につ、八一を避けるつもりなんかなくて、八一が言おうとしている事を拒みたいわけじゃないの！」

「っ、だったら——」

「けどっ！ でも……だから、そのっ！」

ああもう駄目だっ！

もっと核心的な事を言うしかないっ！

「っ、つまり……っつまりねっ!! し、シチュエーションにもこだわって欲しいの!!」

「し……ちゅ、えーしよん？」

私の返しを予期していなかったのか、八一は間の抜けた顔になった。

そう。原因はシチュエーション。私の頭を悩ませる問題とはシチュエーションなのだ。

別に私は八一に帰省して欲しいわけじゃない。

そうじゃなくて、本当に大事なものは……私が求めるものはもっと別のところにある。

ふと、脳裏の奥で。

私によく似た、ちよつとだけ成長したあの顔と。
そして……私がまだ見たことの無い、満天の星空の景色が見えたような気がした。

おまけの話 J C 銀子のその後④

「……姉弟子、シチュエーションというど？」

そんな八一の問い掛けに、

「シチュエーションはシチュエーションよ！ 要はその……つまりはTPOっていうか！」

私は捲し立てるように答える。

シチュエーション。TPO。時と場所と場合を意識した行動を取る事。

それこそが私の頭を悩ませる難題。私がどうしても八一に求めてしまおうとても大事な事。

「……TPOにこだわれ、って事ですか？」

「そうっ！ そうなの！ そういうのってやっぱり大切でしょ!？」

「そりやまあ……」

「ほら、なんていうの？ 八一が今言おうとしている話ってね、そういうのはそういう話をするのに適した場所っていうか、そういう感じの雰囲気っていうか、なんか、なんかそういう感じのあれってあるでしょ!？」

「……………あ、あ〜」

とそこで納得顔になった八一は大きく頷く。

随分と曖昧で要領を得ない言い方になってしまったけど、それでもどうやら八一は私の言いたい事を理解してくれたようだ。

「……………な、なるほど。そういう事ですか」

「……………そう。分かってくれた？」

「はい。つまり姉弟子が言いたいのは……………あれですよね？ こういう話をするなら……………なんだろう、例えば学校で言うなら校舎裏とか、あとは屋上に呼び出したりとか、はたまた校庭にある伝説の桜の木の下で、的な」

「う、うん。まあ、そんな感じ」

校舎裏。屋上。校庭にある伝説の桜の木の下。

八一が挙げたのはどれも定番中の定番、そういう話をするのにはお決まりの場所だ。

「つまり姉弟子は……………そういうイイ感じなシチュエーションで、俺からの話を聞きたい、と」

「……うん」

「それで今まで俺を避けていたんですね。そういうシチュエーションじゃなかったから」

「……うん」

「そっか。そうだったんですね……」

今日まで私が避け続けてきた理由。それが断りたいからじゃないと知って安心したのだろう。

八一は肩の力が抜けた表情で周囲を見渡すと、自省するかのように首を振った。

「……確かに。こういう話はこういう場所でするもんじゃないですね」

「……うん。ここ、家のすぐそばだし……もしかしたら家族が出てくるかもしれない……」

「言われてみれば俺、言うんだ言うんだ、っていう気持ちだけが先走っちゃって……そういう所にまで頭が回ってませんでした。すみません」

そう言つて八一は頭を下げる。

それを見たらワガママを言っている自分が悪いような気になって、私も顔の向きを下に俯ける。

「……私こそ、ごめん。ちゃんと言わなくて。なんかこういう事って、こっちから要求し

ていい事じゃないような気がしちやって……」

「いいんですよ。今回は俺がマジで気が利かなかったってだけですから」

そして八一は頭を上げた。

その顔は先程までと違ってスッキリした顔に、悩みが消えた晴れやかな顔になっていた。

「じゃあ姉弟子。今度改めてデー……ってというか、あの……食事にでも誘いますね」

「食事？」

「はい。ほら、夜景の見える高級レストランとか。そういうイイ感じのシチュエーションでなら、この話をしてオツケーって事ですよね？」

「……うん、うん。まあ、そうなんだけど」

八一の言う事は間違っではない。

けれど……それは。私は曖昧に返事をしながらも視線をそつと横に逸らす。

だめ。八一。それは違うの。

それが悪いシチュエーションだって言うつもりは無いけど……でも、それじゃあ駄目。

「夜景の見えるレストランもいいけど……」

この問題はここからが難しいところだ。

果たして八一は気付いてくれるだろうか。私の想いを察してくれるだろうか。だって私が求める最高のシチュエーションとは。

それは……ただ一つだけ。答えはあれしかないと最初から決まっているのだから。でも、どうせならもつと特別な場所がいいな」

「もつと特別な場所、ですか？」

「うん。だってほら、一生に一度の事だし」

「そうですね……って、一生に一度の事？ それは別に……そうとは限らないんじゃない？」

「……ううん」

私はゆっくりと首を左右に振る。
これは一生に一度の事では無くて、この先の人生で経験する可能性は幾らだつてある。

それは確かに八一の言う通りだけど……けれどもそれは違う。私はそうは思わない。

「……私は、一生に一度でいい」

「え……」

「八一が言おうとしている言葉が、私の想像通りなら……それなら、私はこの一回だけでいい」

「姉弟子……」

言葉の意味を理解したのか、八一は口元を手で押さえながら顔を伏せた。

その顔は……ちよつと赤くなつて、ようにも見えた。

「……それ、本当ですか？」

「うん。本当」

そう。私は一生に一度きりでいい。心の底から本気でそう思っている。

男の人から告白されるのなんて、そんなの八一からの一度だけでいいから………だから。

「だからね？ だからその一回だけは……永遠に記憶に残るようなロマンチックなのがいいの」

「ロマンチック、ですか」

「うん。ロマンチック。すごく、すごくロマンチックなのがいい」

「な、なるほど……」

私がこの告白にこだわる意味を、シチュエーションを重視する理由を分かってくれたようだ。

八一は「すごくロマンチックか……」と呟き、顎の下に手を置いて思案げな顔になる。

……ど、どうかな？

事によってはこれで通じたかもしれない、察してくれたかもしれないけど、どうだ—
!?

「ロマンチック……ロマンチック……」

「……うん。ロマンチック」

「……あ、なら神戸はどうです？　神戸の夜景は凄く綺麗だとかって聞いた事ありませんけど」

「こ、神戸？」

「はい。神戸」

「神戸、かあ……、まあ、そうね、神戸もシチュエーション的に悪くは無いんだけど……」
悪くはないと言いながらも、私は心の中でがっくりと肩を落とした。

駄目だ。全然伝わってない。幼い頃から一緒に居た相手でも以心伝心とはいかないようだ。

となれば……もう少しヒントを出すしかないか。

「神戸も悪くは無いんだけど、出来る事ならもつともつと思いいに残る場所がいいな」
「もつと思いいに残る場所……」

「ほら、私が行った事の無い場所とか」

「姉弟子が行った事の無い場所ですか。それなら……いつそ海外とかって手もありますけど」

「ううん、そんなに遠くじゃなくていいから。もつと近場でいいから。あ、いや、あんまり近いかって言ったらそれも微妙なんだけど、だから、そうね……中部地方辺りなんかいいかもね」

「え、中部地方？」

「うん。中部地方」

「中部地方つすか。中部地方だと……やつぱ名古屋ですかね？ テレビ塔の展望台とか？」

「………はあ」

……駄目だ。マジで伝わらない。

これは八一の頭が悪いからなのか。それとも私の伝え方が悪いからなのか。いずれにせよ……こうなったらもうド直球なヒントを出すしかない。

「………実家は？」

「は？」

「ほら、八一の実家の方とかはどう？ あんたの実家の近くにロマンチックな場所はないの？」

ここまで言えばさすがに気付くだろう。

八一の実家にあるロマンチックなシチュエーションなんてあれしかないはずだからね。

……とか言つて、私が実際にその事を知っているってわけじゃないんだけど。

なんせ私も又聞きというか、あいつから聞いたただけだから――

「……え、俺の実家ですか？」

「うん」

「……いやいやいや。俺の実家の近くにロマンチックな場所なんてありませんよ」

「なあっ!? あっさり否定された!」

私が求める場所は、最高のシチュエーションは八一の実家にしか無いはずなのにっ!!
「そ、そんな事ないっ! ちゃんと考えてみて!」

「いや、あの……姉弟子は知らないかもですけど、うちの实家つて超が付く程のど田舎ですし、周囲にあるのなんてマジで田んぼだけですし、とてもじゃないけどロマンチックな場所なんて……」

「あるわよっ! 田舎でも、いや田舎だからこそそのロマンチックさつてのがあるのよ!」

「田舎だからこそそのロマンチックさ? ええ、そんなもん俺の実家にあつたかなあ

……?」

あるっ！ 絶対にあるから！ 思い出して！！

……と、そんな思いが通じたのか。難しい顔をしながらうーんと唸っていた八一は、

「……………あ」

と呟き、瞬間その目を大きく見開いた。

「……………あ、ああっ！！ え、あ、俺の実家にあるロマンチックってそういう事!？」

「……………ん」

そう、そういう事だ。多分。

良かった。この反応はどうやら思い出してくれたようだ。……………ほんとに良かった。

結果的にかんりのヒントを出しちやっただけど、その点については目を瞑るとしよう。

「なるほど。俺の実家にあるロマンチックか、確かに一つだけ良いのがありましたね」

「でしょ?」

「はい。……………あれ? けどこの話って姉弟子にした事ありましたっけ?」

「う、うん。子供の頃に聞いた気がする」

嘘だけだ。

子供の頃にその話を聞いたかどうかなんてもう覚えてないけど。

「小さい頃にそれを聞いて……いいなあ、って思ったの。もし私にそういう機会があったら、その時は八一が言ってくれたシチュエーションを体験してみたいなって、昔からずっとそう思ってた……」

「……そっか。そうだったんですね」

……これも嘘だけだ。

そのシチュエーションを体験してみたいなって、子供の頃からずっと思っていた訳じゃないけど。

……けれど。けれどね？

子供の頃からは無いけど、それを体験したいなって思ってるのは本当だから。

私はその話を聞いたのは子供の頃じゃなくて、本当は数ヶ月前に見たとある夢の中の事。

そう。あの不思議な夢の世界で。

私はJK銀子から、その話について聞かされた。

——曰く、JKは八一と二人きりで八一の実家に旅行をしたと。

——曰く、JKは八一の家が所有する棚田で八一から告白されたのだと。

——曰く、その告白は満天の星空に包まれた超超超ロマンチックな告白だったと。

そんな話を聞いて私は思った。

私もそんな告白をされてみたい。八一から告白される時は同じシチュエーションが良い。

だって、その話をしていた時のJK銀子が……本当に、本当に幸せそうな顔だったから。

本当に本当に嬉しそうで……だから私も、あんな表情になれるような体験を試してみたい。

……て思うでしょ？ 普通はそう思うわよね？

せつかくの一生に一度の機会なんだし、ロマンチックな方が良いに決まってるでしょ？

それにね？ それにね!!

これは万が一の話だけだね？ もし今後またJKと会う機会があったらどうするの!?

JKが体験した告白を私は体験してないって、そんな事が知られたらどうなると思う!?

そんなの絶対面倒な事になる！ あいつからとやかく言われるに決まってるっ!!

JKから「え？ まさかJCはあの超ロマンチックな告白を体験してないの？ カワ

イソ……」みたいな事を言われるに決まってるんだからっ!!

そんなの嫌!! 今後一生JKからマウントを取られ続ける人生なんて絶対にイヤ!!
……なんて、そんな事を考えちゃった。

竜王戦が終了して、いざ告白が間近に迫った時。そういえばとJK銀子の話を思い出して。

告白されるなら私もあのシチュエーションがいいな、ううんそうじゃなきや駄目だ!
……って、そんな事を考えてしまい、その所為で今日まで八一と向き合えなかつたという訳だ。

「……分かりました。そういう事なら今度一緒に俺の実家に行きま………あ」

「なに?」

「……いや、でもなあ………」

とそこで八一は語気を弱くして、困ったようにぽりぽりと頭を掻く。

「……考えてみたらあれって色々な条件が重ならないと見られないし、时期的なものもあるし、そもそも今の田んぼの状態の事もあるし………」

「え? まさか……無理なの?」

「無理とは言わないですけど……一度実家に確認を取ってみて、それから準備してだから……どう頑張っても今すぐにはいきませんか?」

「そうなんだ。別にいいよ。時間が掛かってても」

時間が掛かるだけなら問題無い。

元々要求をしているのはこっちだ、だったら待つぐらいはする。

最高にロマンチックなシチュエーションが完成するのを楽しみに待とうじゃないの。
ええ。

「……でも、多分……結構な時間が掛かっちゃいますよ。それでもいいんですか？」

「うん。いいよ。半年でも一年でも、何年だって私は待つから」

「そんなに待っててくれるんですか？」

「当然でしょ。これは私が言い出した事だしね」

J K が体験した告白を私も体験出来るのなら、たとえ何年だって待ちますとも。

それに高校一年生の J K が体験した事なら、どれだけ長くても一年以内のはずだし
ね。

「……そっか。待っててくれるんですね」

「うん」

良かった。これでなんとかなりそうだ。私はほっと肩を撫で下ろす。

こっちの思惑を八一は理解してくれた。だから後は待つだけで大丈夫だ。

……と、私はそう考えていたんだけど。

「そっかそっか。姉弟子は待つてくれる……」

八一は独り言のようにそう呟いて。

「……ねえ、姉弟子」

「なに？」

そして、まさかの反撃の一手を打ってきた。

「……俺の方がそんなに待つてないです。つて言ったら……どうします？」

「っ!!」

——えっ!?

や、八一の方が待つてないの!?

そ、それは……ちよつと、予想外、かも。

「……え。やいち、待つてない、の？」

「待つてないです。つーかむしろ姉弟子がどうしてそんなに待つてるのが分からないです」

「う……!」

私が一年近くも待つてる理由。それはきつと、私がそれを望んでいる立場だからだ。

そのシチュを準備するのに時間が掛かると言うなら、待つ。それだけの当たり前の話だ。

あるいは……私は告白される側だから、という理由もあるかもしれない。

告白される側だから、待てる。相手の準備が整うまで受け身になる事が出来る。けれども八一は告白する側だ。

八一は前々から私に告白しようと意気込んでいたわけで、ついでに言えば私の返答だつて八一の立場ではまだ分からない状態なわけで。

それなのに、そんな状態であと一年近くも待てと言われるのは、確かに辛いかもしれない。

「それに……待っていたら姉弟子の気持ちだつて変わっちゃうかもしれないじゃないですか」

「か、変わらないわよっ!」

咄嗟に私は声を張り上げて否定する。

私の気持ちが変わる? 無い無い、そんな事は絶対に無い。

いつ、どんな告白をされようとも私の答えはYESしかない。それ以外の返事はあり得ない。

「あり得ないから。私の気持ちが変わるなんて絶対にあり得ないからっ!」

「ぜ、絶対に?」

「そうよっ! 私の気持ちは絶対だから、だから……待ったつて大丈夫だから……」

「っ……………！」

八一が小さく息を飲んだ。

「……………だ、大丈夫、つてのは……………」

「……………だから、その、だいじょうぶ、だから……………」

「……………そ、そっか」

「……………うん」

「…………………………」

「…………………………」

そして……………お互いに沈黙。

……………あう、う、うううう！……………は、恥ずかしいよお。

なんか……………なんかもう、ほとんど答えを言っちゃったような気がする。

「……………姉弟子、顔が真っ赤です」

「う、うううるさいバカっ！ そんなの仕方ないでしょう!? 文句あんの!?」

「文句なんて無いです。というか……………めっちゃかわいいです」

「っ!!…………………………っ!!」

かっ！ かわいいっ、とか！

い、……………言わないでっばあ……………。

「……分かりました。姉弟子がそう言ってくれるなら俺も覚悟を決めて待ちます」
「……ん」

「いつか準備が出来たら一緒に俺の実家に行きましょう。その時に大事な事を言いますから」

「……うん」

……やっぱり、八一は優しい。

恥ずかしがりの私はほそりと小声で「……ありがとう」と伝えた。

すると八一は「いいんですよ」と笑ってくれた。……八一、ありがとう。

こうして八一は納得してくれた。

私のお願いを聞き入れる形で、告白するのを一旦待つ事に了承してくれた。

「……ただ」

——ただ、しかし。

それでもこの男はやはり竜王だった。

未だ奨励会員の私の一枚上をいく策士だった。

「一つだけ、条件があります」

「条件？」

「はい」

私のお願いを聞き入れた上で。

その上で八一は更なる応手を放ってきた。

「それを待つ代わりにと言つてはなんですが……もう一度、勝利のおまじないが欲しいです」

「なあっ!?!」

なっ! なんですとお!?

勝利のおまじないをくれつて、て、それつて、き、きき、キスしろつてこと!?

「ロマンチックなシチュエーションが整うまで俺は待ちます。でもあれの準備には結構な時間が掛かりますから、その期間を乗り切る為にも姉弟子からの勝利のおまじないが欲しいです」

「な、なな、な……!」

「それに今週末には俺も対局がありますから、その勝守りつて意味でもお願いしたいなと」

ハワイの地に伝わる（という設定の）勝利のおまじない。キスをする事。

八一はそれが欲しいと言っている。冗談とかではない至極真面目な表情でそう言っている。

「勝利のおまじないなら良いよって、姉弟子そう言っていましたよね？」

「そ、そりやあそう言ったけど……っ！」

「だったとしてもいいですよね？ 前にも一度してくれたわけだし」

「う、うう、う、く……っ！」

き、キス……するの!?! しないと駄目!?!

でもでも、八一を待たせる以上は私も譲歩する必要があるのかも……ああでもでもでも……

「……姉弟子」

「あつ……！」

動転する私の隙を突いて八一が近付いてきた。

そしてあつという間に私の手を掴む。

「や、やいち……」

ああ、もう逃げられない。

するならするでもう覚悟を決めて、しないならしないでちゃんと断らなければ。

ど、どど、どうしようどうしよう——!?!

……と。そんな混乱した思考のせいだったのか。

ここで私がその程度の事を悩んでしまったのが失敗だったのだろうか。
「…………あれ？」

その時スツと頭が冷えたような感じがして。

まるで時間が止まったような感覚がして。

『待ちなさい。焦っては駄目よ、JC』

「んなっ…………！」

そして脳の奥から聞こえた、その声は!?

その声はまさか……………!

『じゃ、JK銀子!?!』

『そうよ。久し振りね、JC』

また来た! 悪霊が!!

おまけの話 J C 銀子のその後⑤

それは忘れもしない声。

あの不思議な夢の世界で聞いた声、同じ部屋で一緒に生活して毎日聞いていたその声は……！

『じゃえ、J K 銀子!?!』

『そうよ。久し振りね、J C』

居た。あいつが居た。

私を救う守護霊のような顔をして、本当は呪いの言葉で私を誑かす悪霊、J K 銀子がそこに居た。

……ううん、違った。

今回はなんとそれだけじゃなくて。

『J C、顔真つ赤』

『なあっ！ あんたはJ S!?!』

『むう。じえーしーってばゆうじゆうふだん』

『まさか幼女まで!?!』

あ、あああ悪霊が増えたっ!?

なんと私に降り掛かる呪いの量が増加していた。小学生の頃の私であるJS銀子、そして幼女の頃の私である幼女銀子までもがそこに居た。

いや勿論現実はこの三人が居るわけじゃないんだけど、私にだけ見える脳内ビジョンの中、懐かしきあの三人の私達が勢揃いしているではないか。

『JC、久し振りね』

『じえーしー、ひさしぶり』

『あ、うん、久し振り……って、挨拶なんてどうでもいいのよっ!』

思わずノリツツコミをしてしまう程、今の私は大いに混乱していた。

けどそれも仕方ない事だと思ふ。だって急にこいつらが、悪霊がやって来たんだから。

前回の一件から考えるに、こいつら悪霊がやって来たって事はきつと確な目に会わない。すでにそんな予感がひしひしとしていた。

『一体なんなのあんた達は!?! またこんな突然に、それもJKだけじゃなくてJSと幼女まで……今度はなんの用だっの!?!』

『なんの用もなにも、J C が悩んでいる様子だったからアドバイスしに来てあげたんじゃない。J S と幼女が居るのはおまけみたいなものだから気にしなくていいわ』

要らないから。アドバイスとか本当に要らないから。

悪霊共は今すぐにでも成仏して欲しい。大体おまけてなによ、おまけて。

……とか思っていたら、まるでそんな思考を見透かしたかのようにJ K 銀子が続けて言う。

『アドバイスなんて必要無い……とかなんとか、どうせそんな事を考えてるんでしょ？』

『っ、……そうよ。アドバイスなんて要らないわよ。あとついでにおまけも要らない』

『そう。まああんたならそう言うと思っただけ』

私が強めの口調で拒否してもJ K は動じず、むしろ呆れたようにやれやれと首を振る。

むう、なんというムカつく仕草だ。J K は高校生で私よりも年上だからか、まるで先達者の余裕を見せつけるかのように振る舞ってくる。率直に言ってもムカつく。

そもそもこの状況は一体なんだ。

もはやこれは私があの夢の記憶を思い出したとかそういう話じゃなくなってきた。これは白昼夢というものなのか。私は起きているまま夢を見ているのか、それともま

さか本当に私の頭は呪われてしまったというのか。

『JC、その不満そうな顔は止めなさい』

『私が不満そうにしてるって分かってるなら、早々にお引取り願いたいんだけど』

「……はあ。まったく、何も分かってないようだから言っただけだね。ここであんたがどちらの選択をするか、それはとても重要な事なのよ』

『え……?』

J Kの言葉を聞いて私は瞠目する。

ここでの選択とは。それは先程まで八一としていた会話の事に違いない。

ロマンチックなシチュエーションが整うまで、八一は告白するのを待つ事になって。

けれどもその代わりに、もう一度勝利のおまじないをして欲しいと言ってきて。

つまりここで八一と勝利のおまじないをするか、しないか。選択というのはその二択の事だろう。

でも……これがそんなに重要な選択なの？

正直言つて私はそうとは思えないんだけど……けれど、J K銀子の、瞳が。

『この選択はとても重要よ、JC。ここでの選択はあなたの今後を大きく分ける事になる』

『……そうなの?』

『ええそうよ。けれどもJ Cはそんな事を全く分かってなさそうだったから、仕方無くこうしてわざわざ伝えに来てあげたってわけ』

『JK……』

そこにはからかいの色なんて無い、JK銀子の瞳は真っ直ぐに私を貫いていて。

その威に押された私は少し冷静になった。少し冷静になって考えてみて……。

『……いやでもおかしくない？ どうしてそんな事をJKが知ってるの？』

『そりゃ私は高校生だもの。高校生つてのは何でも知っている存在なのよ』

『何でもって何よ。それにこんな話はあの夢の中でもしなかったよね？ それなのにどうしてJK達の声が私の頭に聞こえるの？ あんた達って本当に悪霊なの？』

『まあその辺の事は深くは考えない事ね。詳しくは将棋の神様にでも聞きなさい』

なんだそりゃ。はぐらかすにしてももうちょっとマシな言い訳があると思う。

『てかさんな事はどうでもいいのよ』

『いやどうでもよくはないでしょ』

『どうでもいいの。それよりも大事なものはJ C、あんたがここでどんな選択をするかってこと』

『む……』

それは……そうなのだろうか。

思えば前にJK銀子が現れた時、あれは確かに私の人生において最重要とも言える局面だった。

その事を考えたら……今回のJKの忠告にも素直に従っておいの方が得策なのかもしれない。

『……でもJK、どうしてここでの選択がそんなにも重要なのか。ここで八一とおまじないをしちやったら……なにか問題でも起きるって言うわけ?』

『問題っていうか……ねえJC、あなたは結局どちらの選択肢を選ぶつもりなの?』
『そ、それは……』

ここでキスをするか。しないか。

その答えに私が口籠っていると、JKの両脇に居る興味津々な二つの視線がこちらを見てくる。

『JC、どっちなの?』

『……う』

『どうなの? やいちときすすするの?』

『……う』

『どうしたの?』

『じえーしー、こたえは?』

「……………ね、ねえJK。JSと幼女まで居るとなんだか無性に恥ずかしいんだけど」

『恥ずかしかつてないで答えなさい。ほら、あんたはどっちを選ぶのよ?』

どっちつて、それは……………。

……………それは、その……………ねえ?

『……………まあ、してもいいかな、とは』

長考の末に私はほそりと答えた。

するとJS銀子はわあつと驚き顔になって、幼女銀子はその目をちよつとだけ大きくした。

『わわつ、JC、八一とキスするんだ……………!』

『な、なによ!?! 別にしたっていいでしょ!?!』

『じえーしーはきすしてもいいの?』

『い、いいいいのよつ! どうせもう一回はしちゃったんだから二度目だつていいの!!』

そうだ。私はもうこの年下の二人とは違う。

私はもう初心な女子供ではなくて、れつきとしたキス経験者なんだから。

八一とキスするのは初めてじゃないんだし、だったらしちやつても良いはずでしょ?

『それに今回は私が悪いっていうか、私の都合で八一の告白を待たせる事になってるん

だし、それならキスの一つぐらいしてあげたっていいでしょ!? そう思うわよね!』

『ま、まあ、そうかもね』

『うん。そうおもう』

私の必死な雰囲気にも飲まれたのか、JSと幼女はやや控えめに同意する。

でもこれは間違っていないはずだ。今日にでもしようとしていた告白を待つ事になった八一だつて大変なんだから、それぐらいのお返しはしてあげるべきではないか。

『……いいえ。それはどうかしら』

『え……』

しかしそこでJK銀子が反対の意を示した。

この反応は正直言つて予想外だった。JKなら真つ先に賛成してくれると思つてたのに。

『えつ、てことはまさか……この局面でキスの選択をするのは間違いなの? ここはあえて拒否するのが正答だつて言うの?』

まさか私は頓死する寸前だったというのか。

困惑する私がそう尋ねると、

『うーん……間違いとか正解とか、そういう話じゃないんだけど……』

JK銀子は複雑そうに眉を顰めて。

そして人差し指をピンと真っ直ぐ立てて。

『いいい？ J C 銀子』

『な……なに？』

大事な事を伝えるように。

幼い子供に諭すかのように……JK銀子は大事な事を私に教えてくれた。

『ここでキスをする……八一は盛るわよ』

『さ、盛る!?!』

『そう、盛る。八一は盛りが付くの。あいつは私とキスをすると獣になっちゃうのよ』

や、八一が盛る!?!

八一が獣になる……だと!?!

『え、それって、それってあの、男は全員オオカミだとか、そういう類の話ってこと!?!』

『そうよ。まさにそういう類の話』

や、八一がオオカミになっちゃう!?! でもそんなつ、あの八一が!?!

だって、だって年がら年中将棋の事しか考えていない将棋バカの八一が、私とのキスがきつかけで盛ってオオカミになっちゃうだなんて……そ、そんな事が……あり得るの

!?!

『ていうかJK、ここには幼女や小学生もいるんだからそういう話はちよつと……』

『そんな悠長な事を言ってる場合じゃないのよ。いいことJ.C、もしここであんたが八一とのキスを受け入れたら、どうしたら……』

『……受け入れたら、どうなるの?』

『その場合、この一回だけじゃ済まないわ。盛りの付いたあいつは事あるごとにキスを要求してくるようになるでしょうね』

『こ、事あることに!?!』

『ええ。きつと勝利のおまじないっていう名目で対局がある度にキスを求めてくるわよ』

『た、対局の度に!?!』

そんなつ、それじゃ順位戦とか各種棋戦やらを戦う度に私はあいつとキスをする羽目に――

『それだけじゃないわ。私の読み通りならあいつは色々と理屈を付けて、最終的にはあなたの対局の際にもおまじないをしようとするでしょうね』

『わ、私の対局の際にも!?!』

あまりの衝撃に声の上擦ってしまう私。

そ、そんな……! そんなに何度も八一とキスをする羽目になっちゃうの!?!

八一はプロ棋士として、私は奨励会員として、それぞれ異なる対局スケジュールがあ

るのに。

その上でお互いの対局の度に勝利のおまじないをするなんて、そ、そんなの、そんなの……！

『は、はわわわ……っ！』

『盛りの付くつてのはそういう事よ。そして八一が盛ったらもうそれが最後、あんたは抵抗する事なんて出来なくなる』

『て、抵抗……できないの？』

『ムリね。全てはあいつの言うがまま、されるがままになっちゃうと思いなさい』

全てが八一の言うがまま。されるがまま。

まるで実体験を語っているかのように、JK銀子の言葉にはとても含蓄があつて。

『そうならない為には……最初が肝心なのよ』

『最初……』

『そう、最初。まああんたにとってこれは最初じゃなくて二度目だろうけど、でも八一が盛っていない今ならまだ間に合うはずよ』

『あ、そつか……だからJKはこのタイミングでアドバイスを……』

『そういう事。ここでの選択は本当に重要よ。ここでちゃんと節度ある対応を取らないと、その後はズルズルと行っちゃう事になるわよ』

『な、なるほど……』

J K 銀子の言いたい事がようやく分かった。

ちゃんと節度ある対応を取る事。時には毅然とした態度を貫く事。

相手が八一だからって何でもかんでも受け入れるのではなく、そういう姿勢が大事だつて事だ。

八一を盛りの付いた獣にしない為には、きちんと躰をしなければならぬ。

だからこそ、盛りが付く瀬戸際であるここでの選択肢が重要になるって事なんだ。

『……そっか、分かったわ。J K』

『ええ。くれぐれも気をつけるように』

『……うん』

私は真面目な表情で頷く。

盛りの付いた八一なんて、正直私には全く想像出来ない姿なんだけど……。

……でも、私よりも年上のJ K 銀子が言うなら、きつとそれは正しい事なんだろう。

だとしたらこれは貴重なアドバイスだ。まさしく金言だ。

ごめんねJ K、そしてJ S と幼女も、悪霊なんて言つて悪かったね。……ありがとう。

……と、そんな謝意が伝わったのか。

J K は去り際にぼそつと一言。

『……ま。とはいえそうなたちやうのも……それはそれでつて感じだろうけど』
『え……』

とそこで三人の姿は煙のようにぼんと消えた。

以上、時間にしたらほんの一瞬の事、私の白昼夢みたいな脳内会議はここで終了。

——そして。

「……姉弟子。いいですよね？」

そして、八一が動き出す。

私の肩を抱いて、その顔を近付けて——

「あ……」

「おまじない、しますよ？」

キスを求める八一の目が、私を捉える。

熱っぽいその目を、私もじつと見つめ返して。

——最初が肝心だ。

——節度ある対応を。毅然とした対応を。

先程のJKがくれた貴重な金言を。

私は何度も頭の中で思い返しながら、そこで私の口が唱えた言葉とは――

「……うん。いいけど♡」

……言い訳は、しない。

だって、やいちに、盛られたかつたんだもん。

やいちに……女の子として、見られたいんだもん。

だって八一って、八一って小学生か巨乳にしか興味を示さないようなやつなのに。

それなのに、私相手に、欲情する八一なんて、そんなの……そんなの、う、うれしい、もん。

「……銀子ちゃん」

「ん♡」

すると……あ、やいちが近付いてきて……。

ああ……やいち……♡

やいちの唇……柔らかいよお……♡

――ふと、視界の隅っこで。

まだ去ってなかったのか、やれやれといった感じで首を振るJK銀子の姿が見えた……けど。

知らない。もう無視する。

一切なにも見なかった事にする。

所詮私は……ううん、私達は、どうせ同じ空銀子なのだから。

ちなみに。

ちよつとした後日談だけど、その後はまさにJK銀子の言う通りになった。

八一は対局がある度に「姉弟子、今日も勝利のおまじないが欲しいです」とか言ってきて。

そして私はその都度それに応じた。恥じらいながらも何度も何度もキスをしちやつた。

というかなんかも途中からキスするのが対局前のルーティンのようになってしまった。て、対局への影響を考慮したら止めようにも止められなくなってしまうた。

その挙句に私の対局の際にも「姉弟子にもおまじないをしてあげますよ」とか言ってきて。

そして私はその都度おまじないを貰った。これも途中からルーティンのように以下略。

八一の実家の準備が出来るまで。

肝心の棚田の状態が、ロマンチックなシチュエーションが完成するまで。

対局の度に何度も何度も勝利のおまじないを繰り返す、そんな私と八一の関係は……。

……うん、なんていうか。その、ね？

その、ちよびつとだけ風紀を逸脱した関係だったけどね？

でもそれはそれで、って感じだった。ほんとにJKの言う通りだった。

おまけの話 JS銀子のその後

「……………んっ」

遠くにあった意識が覚醒していく。

そして——私は目を覚ます。

「……………んー」

身体を起こして、目をこしこしと擦って。

目覚めたばかりの私の頭の中、ぼんやりとした記憶の中に残っている映像。

それは……………久々に見たあの三人の顔。

「……………また、あの夢……………」

——そう。また、だ。

また、あの夢を。私は久々にあの夢を見た。

それはとつても不思議な夢。

私と、幼女の私と、中学生の私と、高校生の私が居て。そして18歳の八一も居て。

皆で一緒に狭いワンルールの一部屋で生活する、夢とは思えないような不思議な夢。今回見た夢は以前見たのとは違って、J C 銀子を中心になっている形の夢だった。

場所もあのワンルールの部屋じゃなくて、私の実家のすぐそばにある路地が舞台だった。

そこでJ C 銀子と八一が会話をしている、それを背後から眺めているような形式の夢だった。

二人の話の内容は所々意味がよく分からない部分もあったけど、大まかに言えばJ C は八一とキスをするかしないかで悩んでいて、私と幼女とJ Kがその相談に乗ってあげる……みたいな感じの夢だった。

……で、最終的にJ C 銀子はキスしてた。

J K 銀子からの忠告も無視して、普通に八一とキスしちゃってた。なんだあいつ。

あのシーンを見ていた時のJ K 銀子の「やれやれ……」といった感じの表情が忘れられない。若かりし頃の己に呆れるJ Kを見て、それより若い私もなんとも言えない気分になってしまった。

「…………ふあ」

つと、あくびが出ちゃった。

起きたばっかの身体は気だるい。私は両手を上に上げてうーん、と伸びをする。

にしても久々に見たなあ、あの夢。

今回の夢も以前の夢と同じように、またすぐに忘れちゃうのかな。

と、そんな事を考えながらはしごを伝つて二段ベッドの上段から下りる。

「……それにしても、J C 銀子って……」

今だから言うけど、ハッキリ言つてあの夢で見たJ C 銀子はかなりヒドかった。

もうね、丸分かりだったから。八一とキスがしたいつて、そう顔に書いてあつたもん。

J C 銀子はかなり早めの段階でそういう顔になつてたから。

私の読み通りならJ C があーだこーだと悩んでたのはあくまで見せかけだけで、心内では最初から選択肢なんて無かつたと思う。

「あれが中学生の私かあ……」

朝っぱらから切ない気分になる夢を見た。なんか溜め息を吐きたい気分だ。

まあね？ 言つてもあれは所詮夢だしね？ 夢の内容に一々文句を付けたつてしよ

うがないつてのは分かつてるけどさあ。

にしてもあれは……あれはヒドい。私はあれが中学生の自分だなんて絶対に認めないから。

「大体中学生になつてまでキスとかどうとか、そんな子供みたいな事を——」
とその時。

部屋のドアがガチャツと開いて。

「あ、銀子ちゃん、おはよ」

「あつ……」

部屋に入ってきたのは八一だ。八一が居た。

勿論18歳のとかじゃなくて、私がよく知っている小学6年生11歳の八一が。どうやら私よりも先に起きていて、今はお手洗いから戻ってきたようだ。

「……む」

八一が、居る。

私の目の前に。

「……むむ」

……あ、マズい。

なんか、八一の顔を見てると。

なんかっ、さつき見せつけられたあの光景を思い出しちゃうっていうか……っ！

「む、むむ、む……っ！」

「ん？ どしたの？」

「むうう……っ！」

やいちと。

わたしが、キスを。

キスを、きす、を、をををを……!!

「……っ、八一のバカっ!」

「ええ!? いきなりなんで!?!」

「うるさいバカっ! 八一のすけべっ!」

「だからなんで!?!」



私の名前は空銀子。小学4年生の9歳。

当然だけどJ S 銀子なんて名前じゃないから。まあそんなの言うまでもない事だけ
ど。

さて。そんな私が今日見た夢。J C 銀子が八一とキスをするとかしないとか、どうと
か。

そんなの私にとっては関係ない話だ。どうだっといういいような話だ。きつとまたすぐ

に忘れちゃうんだろうけど、別に惜しいとも思わない。

振り返れば以前の夢からしてそうだった。もう殆ど内容なんて覚えていないけど、覚えていないって事はきつとそういう事だ。私にとってはどうでもいい夢だって事なんだろう。

まあ、夢なんてのはそんなものよね。

どんな内容でも記憶には残らないし、それが私の現実に影響を与える事なんて無い。夢はあくまで夢。空想や妄想と変わらないものなんだって、この時の私はそう思っていた。

……けれど、それは違った。

やっぱりあれは本当に不思議な夢だった。他とは違う特別な夢なんだって思い知らされた。

というのも……それから先の話になるんだけど、私はまたあの不思議な夢を見た。

そしてその夢が、ただの夢でしかないものが結果的に私の現実に大きな影響を与えた。

もう一度、あの部屋を訪れる機会が。

もう一度あの面々と再会をする、そんな現実が私を待ち受けていた。

それは——約2年後の事。

そう。2年後だ。

なんとここで2年も時間が飛ぶ。

2年経って、私が小学6年生になって、始業式から2ヶ月近くが経過した頃の事——

「負けました」

そう言つて、私の対面に座る女性が——

美しい着物を着て上座に座る女王《荊姫》が、花立薊女流二冠が深く頭を下げた。

……ううん、違う。

もう花立さんは女王じゃないし、女流二冠でもなくなった。

彼女が所持していた女王のタイトルは、たった今私が奪い取ったから。

第7期・マイナビ女子オープン女王戦。

約1年前になる小学5年生の夏頃、私は初めてこの女流棋戦に出場した。

チャレンジマッチを通過して本戦も突破して、今年の4月から遂に番勝負が始まっ

た。

そして第三局目。天満橋にある超高級ホテルの一室で行われた対局で私が勝利した。

この時点で花立さんの失冠が決定。三勝目を挙げた私が女王のタイトルを奪取する事となった。

私は、女流のタイトルホルダーになった。

花立さんが投了した直後、部屋の中に報道や将棋関係者の人達が雪崩込むように入ってきた。

……すごい。

その光景に私は思わず息を呑む。

無数のシャッター音が聞こえる。

無数のフラッシュが私だけを照らす。

新たな女王となった私を。最年少で女流のタイトルを勝ち取った私を称えるかのよう。

「こっちに視線くださいー！」

「今のお気持ちは!？」

「ストレートで奪取できると思っていましたか!？」

記者達の質問攻めに答えながら、女王になったばかりの私はその光景の虜となっていた。

——すごい！　これが、タイトルホルダーだけが見られる景色なんだ……！！

眩いフラッシュに照らされて世界が輝いている。そんな眩しい世界の中心にこの私
が居る。

単独記者会見の会場に移動するよう言われた私が席を立ち上がると、床に座っていた
将棋関係者の全員が私に向かって頭を下げる。

そしてそんな部屋の隅っこには、同じように頭を下げている八一の姿もあって。

その姿が、その光景が……今の私にはなんだか無性に心地良く感じた。

——どう？ 八一、私だってすごいでしょ？ 見直した？

そんなセリフを言ってやりたかった。きつと悔しがらう八一の顔を見てみた
かった。

この時の私の頭の中はそんな感じだった。

女王のタイトルを獲得して。小学生にして女流棋界の頂点に立つて。

タイトルホルダーだけが見られる景色に、その熱に当てられて……ようするに浮かれ
ていた。

そしてその後、記者会見を終えて。

私は浮かれ気分のまま、ホテルの部屋に戻って。

対局の疲れがあったんだろう、その日はすぐにベッドに入って眠りに落ちて。

そして――

「……あれ？」

ふと、気付く。

いつの間にか、見知らぬ部屋の見知らぬ玄関口の前に私は立っていた。

「……ううん、違う。ここは……！」

この玄関には、見覚えがある。

この廊下には……見覚えがあるっ！

私にとってここは見知らぬ場所なはずなのに、それでも記憶に残っている。

ここはとあるワンルームマンションの一室。五人で生活するには狭すぎる801号室。

「つてことは……これってまた……夢、だよな？」

……だよな？ ……うん、そのはずだ。

だって、女王戦を終えてホテルに戻って眠ったはずの私がかんな所に移動してるわけがない。そんなのドッキリにしても壮大過ぎる。

となればこれは現実じゃなくて、疲れ果てて眠った私が見ている夢という事なのだろ

う。それ以外にこの状況を説明する方法は無いはずだ。

「てことは、まさか……」

これがあの夢と同じだったら。

再び、この部屋に招かれたというのなら。

玄関を上がって、恐る恐るといった感じで廊下のドアを開けると、そこには――

「……来たわね」

「っ、……JK銀子……」

……居た。やっぱり居た。

懐かしさを覚えるリビングの中には、高校1年生になったららしい私の姿が。

「久し振りね、JS」

「じえーえす、ひさしぶり」

「JCと幼女も……うん、久し振り」

そして、中学3年生の私と4歳の私も居た。

以前この部屋で一緒に生活した彼女達が、年齢違いの三人の私達がまた勢揃いしていた。

「……って、あれ？ 八一は？」

「八一は居ないわよ。今回はあいつ抜き」

「あ、そうなんだ……」

……なんだ。八一は居ないんだ。つまらないの。

せつかくの夢なんだし、私としては銀子達よりも18歳の八一に会いたかったんだけど。

「……JS、そんなあからさまにガツカリするんじゃないの」

「べ、別にガツカリなんてしてないっ！」

慌てて言い返す。どうやら気持ちが悪く表情に出ちゃってたらしい。反省。

私はコホンと咳払いをしてから、率直に気になった質問をJK銀子に投げ掛ける。

「ねえ、ところで今回は一体なんの為にこうして集まったの？ まさかまたここで共同生活をするって事なの？ それも八一抜きで」

「ううん、今回はそういう事じゃないわ。今回はあんたに大事な話があるのよ」

「はなし？ 話ってなに？ ていうかあれから2年経ったのどうして三人は成長してないの？ 私は小6になったのに三人はあの時のままじゃない、なんで？」

「そんな細かい事は気にしなくていいの。大体私達まで成長しちゃったらJC銀子が私と同じJK銀子になっちゃうでしょ？ そんなのややこしくてしょうがないじゃないの」

「そ、そんな理由で？」

「そうよ。てかそういう細かい事は気にすんなって言ってんでしょ。……それよりも」
そこでJK銀子は一度言葉を区切ると、

「……JS、ううん、空銀子」

「な……なに？」

改まって私の名前を呼ぶ。

その声色はとても澄んでいて、思わず私は自然と姿勢を正す。

するとJKは……高校生の私は、柔らかい笑みを浮かべながら、言った。

「……ま、とりあえずは女王のタイトル獲得おめでとう。と言っておくわ」

「あ……うん」

言われたのは称賛の言葉。

突然のおめでとうに私が面食らっていると、すぐにJCと幼女からも同じ言葉が掛けられる。

「そうね。それは一応めでたい事だからね。おめでとう、JS」

「じえーえす、おめでと」

「……うん、ありがと」

三人からのおめでとうに、ちよっぴり恥ずかしくなった私は小声になる。

な、なんだろう。これ。まさか今回は私の女王戴冠のお祝いの為に集まったって事なの？

「今回はJSがタイトルを獲ったからね、そのおかげでこの部屋を使用する許可が出たのよ。そういう意味でも良くやってくれたわね、やっぱこのの方が落ち着くし」

「そ、そうなんだ……」

「どうやら私が女王のタイトルを獲ったからこの部屋に来られたらしい。もう意味が分からない。」

「ね。お祝いならケーキたべたい」

「あ、いいね幼女。私も食べたい。ねえJC、お祝いのケーキとか用意してないの？」

「無いわよそんなもの。ていうかこれは別にあなたのお祝いの為に集まったわけじゃないから」

「えっ、そうなの？」

「なあんだ、けーきないんだ」

これは女王戴冠のお祝いではない。JCの言葉にきよとんとなる私。

そしてお祝いのケーキが無いと知って不満そうな顔になった幼女をよそに。

「そう、これはお祝いなんかじゃなくて……まあ、私が小6で女王のタイトルを獲るってのは最初から分かった事だけど、結果的には良いタイミグだったって事かしら。」

ねえJK」

「……………そうね」

私達よりも年上の二人、JC銀子とJK銀子は。

私と幼女とは違ってここから先の未来を知っている二人は……………共に深刻な表情を浮かべていて。

「……………はあ。女王戴冠……………か。なんか色々と思いつちやうわね、JC」

「……………うん、思いつち出す。思いつち出したくもない事を沢山思いつちやうよね、JK……………」

二人は暗い顔を見合わせると「……………はあ」と重苦しい溜め息を重ねて吐き出す。

……………な、なんか、なんか。

なんかJKとJCは……………まるで底なしの闇を覗いたかのような表情をしている。怖い。

「……………なに？　せつかく女王のタイトルを獲得したつてのに……………二人は嫌な思いつちでもあるの？」

「……………嫌な思いつちとか、そんなヌルい話じゃないのよ、これは。……………ねえJK？」

「……………そうね。ここから……………」

そしてJK銀子は……………言った。

私に待ち受ける未来を。

空銀子の運命を。

「ここからが……本当の地獄なのよ」

おまけの話 JS銀子のその後②

深刻な顔をしたJK銀子が、言う。

「ここからが……本当の地獄なのよ」

その声色は本当に重々しくて。

まるで聞く者全てを震撼させるような底知れない圧を放っていて。

「じ……地獄？」

「ええ、地獄。あれはまさしく地獄と呼ぶに相応しいものだったわ。……ねえJC？」

「……そうね」

そして、そんなJKと同じ地獄を見てきたらしい中学生、JC銀子も同じように呟く。
「空銀子は小6の時に女王のタイトルを獲得する。それはまあ喜ばしい事なんだけど、でも……それが切っ掛けになってここから地獄のような日々が始まってしまふのよ」

「な……」

じ、地獄って……っ！

J KとJ Cから突き付けられた言葉、聞き流す事は出来ないその言葉に私は身震いする。

J K銀子とJ C銀子。この二人は私よりも成長している未来の私だ。

そんな二人が身を以て経験したのであろう、地獄とまで呼ぶ程の日々とは一体。

女王のタイトルを獲得したこの先、私の人生に何が待ち受けているって言うの!?

「地獄って……それってあの、タイトルホルダーの責務とかプレッシャーとか、そういう話?」

「いいえ違うわ。そんなのはどうでもいいの」

「どうでもよくはないんじゃない?」

「どうでもいいのよ。確かにプレッシャーとかはあるけど、そういうのを過度に重く感じるのは最初の頃だけで次第に慣れてくるから。だからそんなのはどうでもよくって……」

女王の冠を獲得した事で私が背負う使命、責任、義務、プレッシャー。

棋士ならば大事にしなければならぬであろうそれらをどうでもいいとまで言い切って。

「そんなのよりもっと大事なものを……あんたはこの先、一番大事なものを失ってしま
うのよ」

「一番大事なものを……失う?」

「そう」

もつと大事なものを、一番大事なものを知っているJK銀子は実に真剣な表情で。

未だ地獄の過酷さを知らない私に対して……空銀子が歩む未来を告げた。

「あんたはここから先……約5年近くもの間、八一と疎遠になってしまうのよ」

「え……」

その言葉は最初、私の頭の中にすんなりとは入ってこなかった。

え? 5年近くもの間、八一と疎遠になる?

………なんで?

「ねえJK。どうして私と八一が疎遠になるの?」

「どうしてって言われると……ねえ?」

「……そうね。どうしてかって言うそれはちよつと答え辛いんだけど……」

一体なぜ私と八一が疎遠になるのか。

当然のような質問を返すと、JKとJCは難しい表情になって目を合わせ合う。

「なにそれ。なんで答え辛いのか?」

「それは……多分だけだね、この問題はどちらかというとう八一の方に要因があると思うのよ。だからどうしてなのかって肝心なところは八一に聞くべきだと思うんだけど」

……でも、そうなっちゃうのは事実だから」

「八一の方って……私がタイトルを獲った事が関係してるの？ 私が女王になった事が……」

「どうかしらね。それも関係あると言えればあるかもしれないけど……」

疎遠になった理由に関して、JK銀子もハッキリとした事は言えないのか。

多少言葉を濁していた様子だったが、それでも私を見る目は真っ直ぐで。

「とにかくね。とにかく……女王を獲った次の日から、八一が素っ気無い感じになるの」「そ、素っ気無い?」

「そう、素っ気無い。八一が素っ気無くなって……それがこの先ずっと5年近くも続くってわけ」

「……はあ」

八一が、素っ気なくなる。

それが5年近くも続く。だから疎遠になる。

……まあ、一応話は分かったけど……でも。

「……それって、そんなに地獄なの?」

「はあ!? 地獄に決まってるじゃない!!」

「JS!! あんたねえ、ちよつと危機意識が足りなすぎるわよ!!」

なんかもの凄い剣幕で怒られた。

私はまだ危機意識が足りないのか。そう言われるとどうなのかな……うーん。

「でもねえ……素っ気無くなるって言っても、別に今だって似たようなものだと思うんだけど」

「違うから。全然違うから」

「JS、あんたにとつては今までずっと当たり前だったから分からないのよ。でもね、ちよつとの変化で全然違うものになっちゃうんだってすぐに分かるはずだから」

「……ふーん。素っ気無い八一ねえ……」

今とは違う八一。素っ気無い八一。果たしてそれはどんな八一なのか。

私と八一は姉弟みたいな関係だけど、とはいえ特別に仲が良いっていう訳ではない。よくケンカだつてするし、仲直りするまでにはそれこそ素っ気無い感じになる事だつて日常茶飯事だ。

だからこそ、それが地獄だと言われてもいまいちピンと来ないんだけど……ただ、このJKとJCの真剣さ加減を見てしまうと、多少は意識した方がいいかもしれないという気分にはなってくる。

「素っ気無い八一っていうより、よそよそしい八一って言った方が正しいかもね」

「よそよそしい八一って……なんか尚更そんなのが地獄だとは感じないんだけど……で

もまあ話は分かった。とにかく八一が今と違う感じになって、それが長らく続くと」

「そういう事。その過酷さは今のあんたには分からないでしょうけど……想像を絶するものよ」

「……そう、なんだ」

「そうよ。まあでも安心しなさい、そうならない為にこうして集まってあげたんだから」
「ああ、そういう事……」

そっか。ここにJK達が居る理由が、私がこの夢を見ている理由がようやく分かった。

この先5年近くもの間八一と疎遠になる日々。その地獄の過酷さ知るJKとJC銀子が、いまいち危機感の足りないこの私に警告とアドバイスをしに来てくれたって事なんだろう。

「JS、あんただって八一と疎遠になるなんてイヤでしょ？」

「う、うん。そりゃまあ……でもJK、じゃあ私はどうすればいいの？」

ここから先、地獄に堕ちない方法とは。

私がそれを尋ねると、一転してJK銀子は眉毛を八の字に曲げた悩みの表情になった。

「そこなのよねえ……そこがなによりも難しいところって言うか……ねえJC？」

「そうねえ……ここが分岐点だつて事は分かるんだけど、問題はじゃあどうすれば良かったのか、つて事なのよねえ……」

そしてJC銀子も。私が将棋盤の前で長考している時のような表情になって首を傾げる。

どうやら二人共に問題は理解しているものの、その解決策を知っている訳ではないらしい。話に付いてこれず今はあくびをしちやつてる幼女銀子も含めて、なんだか微妙に役立たない面々だ。

「とにかく。さつきも言ったけど女王を獲った次の日から、つまり明日から八一が素っ気無い感じに、よそよそしい感じに変わるわけ」

「うん。それは分かったけど」

「で、これは私の読みだけど……そこで肝心なのは八一じゃなくてJS、あんたの対応の方なの」

私の対応？

「素っ気無い八一の態度に合わせて、あんたの方も八一に冷たくしたりはしない事。それやるとマジであいつとの関係性が拗れてそのまま5年コースになっちゃうから。ほんとに」

「そうね。JS、とにかくあんたは素直になる事が大事だと思う。素っ気無い八一の態

度がムカつくからって、そこであんたが心にも無い事を八一に言ったりしたら致命傷になりかねないわよ」

「……むう」

聞こえてきた言葉はどうにも納得のいかない話ばかりだ。思わず私は不満げに唸る。

八一が素つ気無くなる。けれどもそれに合わせて私が冷たくしたりするのは駄目。

八一の態度にムカついたからって、そこで私が心にもない事を言つては駄目。

随分と禁止事項が多い上、原因は八一にあるのに私の方が我慢してばかりではないか。

「それとね、明日からあいつがあんたの事を『姉弟子』って呼んでくるようになるんだけど、あれも止めさせた方がいいわね」

「ふーん……他には？」

「他には……っていうか、正直一番手っ取り早いのはもう好きだつて伝えちゃう事なんだけど」

「なっ！」

「す、好きい!? なにを、なんで!?

「そ、そそそんなの言えるわけないし? ぜんぜんなにも手っ取り早くなんてないし!?

「い、いきなり何を言うの!! そんなの、そんなの言うわけないでしょ!! ていうか私は

そもそも八一のことが好きなわけじゃ……!」

「J S、そういうのいいから。そういうの本当に要らないから、それも今すぐ止めた方がいいわよ」

「いつそききすしてみたら?」

「き、キスなんてしないっ!」

き、きききキスって! キスってっ!

この幼女は突然なんてことを言い出すんだっ!

「三人共、そういうのはやめて。そういうのはしないから」

「そう。なら別に強制はしないけど……でも、分かっていた事だけ……なんか小学生の頃の私って面倒くさい性格してるわよね」

「そうね。……ただ言っとくけどJ C、私から見ればあんたも大差無いわよ」

「はあ!? ここで私に振る!」

「だって実際そうだし。この前まではあんたの問題に色々手を焼かされたわけだし」

「手を焼いてなんて頼んでないし! それに小学生の頃も中学生の頃も面倒くさいならそれはもう空銀子の性分よ! 高校生のJ Kだって同じよ!」

「私は違うわよ。あんた達と一緒にしないで」

「一緒よ!」

「ちよつと二人共、ケンカしないでよ……」

J CもJ Kも、恥ずかしいから止めて欲しい。

自らの面倒くささで自分同士が言い争う光景などとても見ていたくはない。

「大体あんた達は……つて、あ……」

とそこでJ Kがハツとしたように顔を上げて、直後私の方を見た。

「どうやらもう時間みたいね」

「時間？」

「J S、現実のあんたが目覚める時間よ」

「えっ、そうなの？」

どうしてそれがJ K銀子に分かるのか。

という疑問は置いておくとして、眠っている現実の私が目覚める時間になったらしい。

それが意味する事は一つ。この不思議な夢は終わりの時間を迎えたという事だ。

「でも……なんだか今回の夢は前回に比べて随分と短くない？」

「そうね。前回の夢は女王じゃなくて竜王のタイトルだったから、将棋界最高峰のタイトルだけあってその分長かったんでしょね」

「はあ……」

どうやら前回の夢は竜王のタイトルだったからその分長くて、今回の夢は女王のタイトルだから相応に短くなったらしい。なんのこっちゃ。

「とにかくっ！ いいわねJS！ 私達がさつき教えた事を絶対に忘れるんじゃないわよー！」

「う、うん……分かったって……」

真剣な顔で訴えてくるJK銀子の忠告に頷いたのと同時に。

視界一杯が白い光に包まれて、そして――

「……ん」

――そして、私は目を覚ました。

女王戦第三局目が行われたホテルの客室、一番高級な部屋らしい私の部屋のベッドの上。

「……まただ。またあの変な夢……」

起きて早々、ぼつりと呟く。

年齢違いの私が出てくる不思議な夢。時折見るあの夢を今日も見ることになった。

なんか今回の夢はあんまり楽しくなかった。

八一には会えなかつたし、JK達からあれこれとやかく言われるだけの内容だった。

「つて、あ、そうだ……」

あれこれとやかく、じゃない。

私が地獄を見ないようにと、JK銀子達から忠告を受けていたんだつた。危ない危ない。

「……けど、あれつて本当なのかな」

とはいえ、私が見たのは所詮は夢でしかない。

夢の中で言われた事をそのまま素直に信じるなんてナンセンスだとは思うけど……。

「……でも、まあ……一応……ね」

ほら、予知夢という言葉もある事だしね？

念には念を入れてというか……八一と5年近くも疎遠になるのは、ちよつと、イヤだし。

「えつと、かみ、紙……」

私はすぐにベッドから出て、化粧台の引き出しからメモ用紙とペンを取り出して。

夢の内容を覚えている内に重要そうな事を書き残しておく事にした。

かきかきつと……よし、これで大丈夫だよ。

そしてその後、朝の身支度を済ませて時刻は朝食の時間。ホテルの朝食会場に行くと、八一が隅っこの方の席に一人で座ってご飯を食べていた。

「あつ……」

「ん」

おはようの挨拶をするよりも早く、私は当然のように八一の前の席に腰を下ろす。てかこいつ、なんで先に食べ始めちゃうの？

普通私に来るのを待ってから一緒に「いただきます」をするのがルールってもんじゃないの？

家では毎朝そうしてらつてのに。抜け駆けされたみたいでなんかムカつく。

……とか思っていたら。

八一は周囲を見渡すと、背筋を伸ばして真面目な表情になって、言った。

「おはようございます。姉弟子」

「……っ」

その言葉を聞いた瞬間、全身がゾクつとした。

——姉弟子。

……本当に、そう呼ばれた。あの夢の中でJK達から言われていた通りだ。

八一は私を「銀子ちゃん」とは呼ばずに「姉弟子」と呼んできた。

姉弟子なんて、これまで八一からそんな呼び方で呼ばれた事は一度だつて無いのに。

昨日までは銀子ちゃんつて呼んでいたのに……今日になつて突然そう呼ばれた。

「……なに、その呼び方」

「なにつて……姉弟子はもう女王ですから。弁えた方が良いと思ひまして」

「……ふうん」

弁える。タイトルを獲得した私に対して、奨励会員という立場の八一は弁えて敬語を使う。

同じ一門の中での弟弟子という立場を弁えて、姉弟子である私の事を姉弟子と呼ぶ。

それは確かに立場を弁えている、確かに正しい事なんだろう……けど、その正しさを理由にして距離を取られている、私にはそんな気がした。

「……敬語、使うんだ」

「はっ」

「……ふーん」

……なるほど。JKとJCが『違う』と言っていた意味が分かった。

ちよつと呼び方と口調を変えただけ。それだけの変化なんだけど……でも、違う。

肌に触れる空気が、距離感が違う。昨日までと違って……八一が遠くにいるような気がする。

「……これが、5年近く?」

「え?」

八一とのこんな距離感が、これからあと5年近くも続くって言うの?

それは確かに……JK達の言う通り、地獄……。

……とまで言うのは大げさだと思うけど、確かにちよつと辛い事かもしれない。

だったら……うん、手を打つべきだ。

幸い私は今朝見たあの夢の中で、JK銀子達からこうなった時の対処法を授けられている。

まずはこの『姉弟子』という呼び方だ。これは止めさせた方がいいって言ってたよね。

「八一」

「なんですか?」

「その敬語、気持ち悪いから止めて。あとさっきの姉弟子っていう呼び方も止めて」

だから私は忠告通り、八一にそう言った。

「え……いい、いや、それは……」

けれども八一は。

周囲を気にするように、きよろきよろと落ち着きなく視線を左右に揺らして。

「……いや、駄目ですよ」

「は？　なんでよ」

「だって姉弟子は姉弟子なんだから……そこはやっぱりちゃんとしなないと」

「なにそれ。今までちゃんとなんてしてこなかったじゃないの」

「だからこそ、ですよ。だからこそこれからはちゃんと立場を弁えて、礼儀正しくしなないと」

八一は頷かない。

私のお願いに「分かったよ、銀子ちゃん」とは言ってくれなくて。

……なんなの、こいつ。

率直に言つてムカつく。だって意味が分かんないんだもん。

なんでこんな事に意固地になるの？　そんなに私に対して敬意を払いたいっての？

……そんなに、私と、距離を取りたいの？

「今まで通りで良いって、この私がそう言ってるのよ。あんたは姉弟子の命令に逆らう

「気？」

「いや、それは……」

「分かったらとつとと口調を元に戻せ。ほら」

「だから駄目ですって。周囲の目もあるし……」

周囲の目？ なにそれ？

なんで八一は私よりも周囲の目を優先するの？ 私の気持ちはどうでもいいっての？

「八一。いい加減にしないと怒るわよ」

「……姉弟子、そんなわがまま言わないで……」

「ッ……！」

わがまま!? わがままってなに!?

なんでそんなふうにするの!? 私は、私はただ八一と一緒に——!!

そこでふと、あの夢の中でJK銀子達から聞いた忠告が頭を掠めた。

八一から素っ気無くされても、それに合わせて私の方も冷たくしては駄目だと。

八一の事がムカつくからって、それで私が心にも無い事を言っっては駄目なのだ。

………無理っ!!

だってっ、だってムカつくもんっ!!

「もういいっ!!」

「あっ……………」

私は勢いよく席から立った。

もう朝ごはんなんてどうでもいい! こんな所になんて一秒たりとも居たくない!

もう知らないっ! こんなやつ!

八一なんて…………もう好きじゃないっ!!



「もういいっ!!」

「あっ……………」

勢いよく席を立ち上がって、消えていく銀子の後ろ姿を見つめながら。

「……………銀子、ちゃん」

席に残された八一は、椅子の横に隠していた紙袋に手を伸ばす。

お祝いとしてあの子に渡そうと思っていたプレゼントの包みを…………ぎゅつと握りしめた。

おまけの話 JS銀子のその後③

「……………はあ」

気だるい。

疲れた。身体が重い。

「……………はああ」

肩を落として、大きな溜め息。

全身に残る倦怠感が晴れない。嫌になる程の重苦しさが胸の内にずっと渦巻いていく。

あれから、一ヶ月。

女流棋界最高峰のタイトル、女王の冠を獲得してから早一月後。

栄えあるタイトルを獲得した事によって、私のスケジュールは一気に忙しくなった。

それは例えば記者会見とか。

他にも大阪府知事への表敬訪問とか。

雑誌の取材とか、テレビ出演とか。とかとか。

そういった予定が、将棋盤と向き合わない予定が一気に増えて私の日常を圧迫して行く。

これまでは小学校と将棋会館を往復するだけだった私の日常に、タイトルを獲得してからは色々な場所に呼び出される機会が激増した。

公の場に立つ責任あるお仕事。それはタイトルホルダーの責務の一つなのだろう。

だからやらなくちゃいけない。私は自らにそう言い聞かせて全ての予定をこなしてきた。

……けれど。それでも、やっぱり疲労が溜まっていくのはどうしようもない。

毎日毎日本当に忙しくて疲れるし、どの仕事もあんまり楽しくないから心も踊らない。一人きりでの予定ばかりで気分も沈んでいく。

それが今の私の日常、女王のタイトルを獲得してから変わった今の日常だ。

だから今の私は気だるくて、疲れていて、身体が重くて倦怠感が晴れないってわけ。

これは仕方のない事だ。タイトルホルダーになった以上どうしようもない事なんだけど……あるいはそうやって受け入れるしかないからこそ、心の内に溜まっていくばかりなのかもしれない。

……そして。

今はそれ以上に……それよりも大きな問題が私の心を縦横無尽に荒らしている。日常の忙しさもそうなんだけど、それ以上に重くのしかかる——この現実が。

「姉弟子、おはようございます」

朝。私が目を覚ますと、まず耳にするのは八一のそんなセリフだ。

「……………ん」

それに返すのは無愛想な返事一つ。

私は基本的に朝が弱くて、起きてすぐは頭の中がぼんやりしてるから八一の相手をするのが億劫だったのもあるんだけど……でも、これはそれだけが理由じゃない。

八一から「姉弟子、おはようございます」と言われる度、胸の奥がきゅってなる。

一ヶ月前には「銀子ちゃん、おはよ」って言うてくれていたはずなのに……今は、もう。

よりもよって朝っぱらから毎日不快な気分にならせてくれる。まったくふざけた弟子だ。

「姉弟子、行きましよう」

「ん」

その後、一緒に家を出て学校に登校する。

小学生の私が向かうのは小学校で、中学生の八一は向かうのは中学校だ。

だから私達は途中で通学路が別々になるので、その途中までは毎日一緒に登校している。

……けれど、今は。

一ヶ月前までとは違って、今ではもう私達は手を繋いでいない。

八一も。私も。これまでは繋いでいた手を自然と離して、それが普通のように歩いていた。

この手は繋いでいなきや駄目だって。そうじゃないと破門だって。

私達は子供の頃に師匠からそう言われたはずなんだけど……でも、こうしてその手を離した。

まあ、ね。もうそんな子供じみた言い付けを気にするような年齢ではないって事はあ
る。

だから手を離して歩く私と八一を見ても師匠は何も言っただけ。これが原因で
破門にされるなんて事はもうないだろう。

でも……破門にならないのならいいのかって言えばそうじゃなくて。

これまでずっと繋いでいた手を離れた。そういう目に見えた分かりやすい変化は、私と八一との関係性が大きく変わったって事を如実に伝えてきて。

私は、これを……この変化を、受け入れなきゃならないのだろうか。

「姉弟子、対局しませんか?」

「……いいけど」

学校から帰宅すると八一から対局に誘われた。私は頷いて将棋盤の前に座る。

こういう流れはこれまで通りというか、別に私は避けられたりしている訳ではないんだけど。

ある意味これが普通なんだろうけど……でも。

「……」

「……」

対局中は一言も喋らない。

それは別におかしな事じゃないけど。でも……やっぱり今の空気は前までとは違う。

前までの対局は、もつと。

八一と一緒に打つ将棋は、もつと——

「……姉弟子、もう一局いきましようか」

「……ん」

……八一は八一で切り替えが早いというか、図太いというか、なんと言うか。

一月前までは当たり前のように「銀子ちゃん」って呼んでいた私の事を、こいつは今どんな心境で「姉弟子」って呼んでいるんだろう。

八一は八一で思う事があつたりするのか……それとも案外なんとも思つてはいないのか。

私は八一から「姉弟子」って言われる度、どう返せばいいのか分からなくなる。

姉弟子らしく振る舞う事を意識してしまつて、結果八一への当たりがキツくなつてしまふ。

「……………」

「……あの、姉弟子」

「……なに？」

「……いえ、なんでもない、です」

言葉を交わしても、視線までは交わらない。

八一は何かを言い掛けたが、私の反応を見て諦めたように視線を戻す。

私と八一は姉弟だ。お互いに小さい頃からこの部屋でずっと一緒に育つてきた。

それなのにどうしてこんなにも会話がぎこちなくなるんだろう。どうしてこんなにもよそよそしい雰囲気になっちゃうんだろうか。

「姉弟子、電気消しますよ？」

「……………」

夜。すでに二段ベッドの中に入っている私は返事をしない。
気にせず八一が照明のスイッチを押して、部屋の中が暗闇に包まれる。

「……………はあ」

溜め息が漏れる。疲れた。今日も一日疲れた。

今日は小学校に行つて帰つてきただけだけど、それでも私は十分に疲れた。

今の八一と一緒にいるのは落ち着かない。ずっと気が晴れない。つまらない。

こういう時はとつと眠るに限る。だから私はすぐに瞼を閉じた。

すると……脳裏に思い出されるのは、ついこないだ見た不思議な夢の記憶。

全部、JK銀子達の言っていた通りだった。

八一が素つ気無くなって、それに釣られるように私の態度も素つ気無くなって。

そうならないようにとJK達から忠告を受けていたけど、私はそれを活かす事が出来なかった。

この先もJK銀子の言う通りになるのかな。

私と八一はこんな感じなままで、こんなのが、あと5年近くも続くのかな。

だつたら私も変わらないといけないのかな。これに慣れないといけないのかな。

そんな事を考えたら……。

「……………」

また胸の奥がきゅつと痛くなつて、目尻がじわりと濡れた。



「……………あれ？」

ふと、気付く。

すると私はいつの間にか、見知らぬ部屋の見知らぬ玄関口に立っていた。

「……………つてちよつと、これって」

これ、この前の流れと全く同じじゃないの。

この見覚えがある玄関口も、同じく見覚えのよくある廊下も、その先の光景も。

ここがあの場所だって事を示している。あのワンルームマンションの801号室
だつて事を。

「まさかまたこの夢なの？　なんだか最近頻度が増してきてない？」

急な展開に思わずばやきを入れる私。

この夢はつい先日、私が女王のタイトルを獲得した日の夜に見たばっかだ。

まあ夢の内容なんてのは偶然の産物、誰が何を決めているってわけじゃないんだろう
けどさあ。

けれど……それでもどうしてか恣意的なものを感じてしまうのは私だけだろうか。

「まったく、今回はなんの用事なんだか……」

言いながら私は玄関を上がって。

もはや慣れた感じで廊下のドアを開けると、そこには――

「……来たわね」

「うん。来たけど」

ほーら、やっぱり居た。

背丈が大きくなって白いセーラー服を着た私、高校生のJK銀子がそこに居て。

「久しぶりね、J S」

「じえーえす、ひさしぶり」

「JCと幼女も……本当に前回と全く同じね」

そして勿論JC銀子と幼女銀子も。

もはやお決まりのような流れ、年齢違いの三人の私がまたまた勢揃いしていた。

「それで？　今回は一体なんの用なの？」

「なんの用じゃないわよ、JS」

私が軽い調子で尋ねてみると、JKは険しい表情と重々しい声を返してきた。

そして、(ごごごごご)……！　と、そんな感じの効果音が鳴りそうな仁王立ちのポーズ。

この様子を見る限り、どうやらJK銀子は今すぐぶる機嫌が悪いようだ。一体なぜ。

「あんたねえ、この前私達が教えてあげた事を聞いてなかったの？　あれほど忠告して

あげたのに結局八一とギクシヤクしてんじゃないのよ」

「っ、……まさか、今回はそれが目的？」

「その通り。今回はあんたに文句とダメ出しを言いに来たのよ」

来なくていい。マジで来なくていいから。

ダメ出しなんていらなから帰って欲しい。ほんとに心の底からお帰り願いたい。

「……ていうかさ、どうしてJK達がそんな事を知っているわけ？」

「そんな事って？」

「だから……あのあと、私と八一が、その、あんまし上手くいってないって……」

「そりゃ知ってるわよ。ついさっきまでここでJC達と一緒に全部見てたからね」
見てたってなんだ。見てたって。

「JSがあまりにもぐじぐじうだうだしてゐるから、仕方なくもう一度集まってあげたのよ。今回は誰もタイトルも獲ってないし、本来ならこの場所には来ちゃいけないはずなんだからね」

じゃあなんで来てゐるんだ。

相変わらずJKの言葉は意味不明だ。私は早くも頭が痛くなってきた。

「てかそんな事はどうでもいいの」

「どうでもよくはないと思うけど」

「どうでもいいのよ。……そんな事よりも問題はあんたの事よ。JS」

そしてJK銀子は改めて私を見た。

まるで呆れ果てたかのような、あるいはダメな子を見るかのような表情で。

「あれだけ念入りに忠告したつてのに、結局は同じ過ちを犯しちゃってるんだから」

「……………」

詰るような、咎めるような目付きから逃げるように私は顔を横に背ける。

私が今体験している事、JK達と同じ過ち。それを回避するようにとJK達からあれこれ忠告を受けていたけど……私にはその忠告を役立てる事が出来なかった。

「ねえJS、あんたこのままでもいいわけ？」

「いいも何も、私は……」

「言った通り、八一との関係が悪化して辛い思いをしてるんでしょ？」

「……別に、辛くなんて……」

「それがこれから5年近くも、高校一年の夏頃まで続くかもしれないけど、それでいいわけ？」

「っ……！」

思わず息を飲み込む。

言い返そうにも言い返せなくて……私は小さく頭を振った。

今の日常が続く。一気に遠くなった八一との距離感があと5年近くも続く。

そんなの……そんなの、絶対にいや。

そんなの……もう地獄だ。

「JS。女王を獲った次の日から八一が素っ気無くなるって、そう教えといたわよね？」

「そりゃあ聞いてたけど……」

「その時に大事なのはあんたの対応だって、そうも教えといたわよね？ 八一の態度に合わせてあんたの方まで素っ気なくなっちゃ駄目だって、そう忠告しといたわよね？」

「……そ、そうだけどお……！」

確かに忠告はされてた。

されてたけど……でも、だって……だってっ！

だってあれは八一が悪い！ 八一の態度がムカつくから、ムカつく八一が悪いんだも
んっ！

「J S。素直になるのが大事だって、そう言わなかったっけ？」

「だ、だって、八一が……！」

「それに『姉弟子』って呼ばせるのも良くないから止めさせるとも言ったわよね？」

「それは止めろって言ったもん！ けれど八一のバカが言っても聞かなくて……！」

「そこが甘いつての。言っても聞かないならぶん殴ってでも言う事聞かせるのよ。そう
しないで逃げ出した時点であんたの負けね」

「む、む、むううくく……！」

た、確かに逃げ出したけどお……！！

あの時、朝食の場で先に席を立ったのは私の方だけど……けど、だってえ……！！

「八一の事が好きだって、そう伝えちゃうのが一番手っ取り早い方法だとも教えたはず
だけ」

「そつ、……それは無理。だって、私はもう八一の事なんて好きじゃないから」

「J S……そういうのはいらなくて、そうとも教えてあげたわよね？」

「……うう」

私は八一の事なんて好きじゃない。

本当にそうだったら……八一から素っ気無くされてもあんなに気分が重くはならないはずで。

そうやって自分の心を偽るのは良くないって、JK銀子はそう言いたいのだろう。

それは分かっているんだけど……でも。

「JSまで地獄を見ないように、せっかく私達が気を利かせてあげたのに……ねえ

JC?」

「ほんとにね。小学生の私がいかに愚かだとは思わなかったわ」

「な、なによ……私が悪いっての?」

「それ以外になにがあるのよ。私達が忠告してあげた事を何一つ活かしてないんだから。このバカ、バカ小学生、バカ銀子」

「っ、な、なによお!」

ああもう! なにか自分自身から罵倒されるとすっごいムカつくつ!

頭がカツとなった私が食って掛かるように言い返そうとした、その時。

「ううん。ちがう」

「え……」

そこで声を上げたのは幼女銀子だ。

私達の言い合いをただ傍観していた幼女は、唐突にできてくと私の方に近付いてきた。

「ん」

そして、手をパーにして前に出す。

「な、なに？」

「しゃがんで」

……え？　しゃがむの？　私が？

「じえーえす、しゃがんで」

「……はあ」

言われるがまま、私は腰を落として幼女と視線の高さを合わせる。

すると幼女の手が、小さな小さな手のひらが私の頭の上にぽんと乗せられた。

「じえーえすは悪くない」

「あ……」

「よしよし」

「ちよ、幼女……」

そして頭をなでなで。

ちつちやな手が私の頭を撫でる。

「じえーえすは悪くないよ。よしよし」

じえーえすは悪くない。幼女の眩く言葉が私の荒んだ心を癒やしてくれる。

ああ……幼女優しい。大きくなつて薄汚れてしまったJK銀子達とは違つて、子供の頃の私はこんなにも優しさに溢れていたんだ。

けれど……幼女に慰められるというのは。小学6年生11歳の私が、4歳の幼女に気を遣われちやつてるつてのはどうなんだろう。

「じえーけー、じえーしーも、あんまりじえーえすをいじめちゃだめ」

「別にいじめてるわけじゃないわよ。ただその小学生があまりにもおバカだから……」

「ううん、ちがう」

そこで幼女銀子は首を大きく左右に振つて。

「じえーえすはわるくない。悪いのはやいち」

「そ、そうっ！ そうだもん!! 今幼女が凄く良いこと言つたっ！」

その言葉に乗じて私は声を荒げた。

そうだ。今の幼女の言葉こそが正しい。私は立ち上がつてJKとJCを睨み返す。

「私は悪くない！ 悪いのは全部八一の方なんだから!!」

そう、私は悪くない。私は断じて悪くない。

悪いのは八一だ。あのバカが、あのバカ八一が馬鹿すぎるからこんな事になっちゃったんだ。

「わたしは悪くないもん……！　だって、だって八一のやつが、突然あんな……！」

「JS……」

「あいつが悪いんだもんっ！　あいつがいきなり、人が変わったように他人行儀になったり、姉弟子とかって呼んできたり……あいつが、あいつが意地悪してくるんだもん……！」

「ちよ、ちよつとJS……泣くんじゃないの」

「泣いてないっ！」

言いながら私は目元を「ごしごし」と拭う。

別に泣いてなんかないっ、ただちよつと……目元が熱くなってきただけだもん。

「けれど……そうね」

すると涙混じりの訴えが響いたのか、JC銀子が口を開く。

「幼女やJSが言う事も確かなのよね。JSに悪い点が全く無かったとまでは言わないけど……」

そう言つてJCが隣に視線を向けると、JK銀子も「……はあ」と息を吐いて。

「……まあね。確かに……どつちがって言うなら悪いのは断然八一の方よね」

「でしょ!?! そうでしょ!?!」

そうだ。今回の問題は私が悪いんじゃない。だって私はなにも変わってない。

ただ女王のタイトルを獲っただけで、私のスタンスはあくまでこれまで通りなはずだ。

変わったのは私じゃなくて八一の方だ。あいつが急に敬語を使いだしたり、姉弟子と呼ぶようになったり、私から一定の距離と取ろうとするからこんな事になったんだ。

変わっちゃったのは八一の方。だから悪いのだって……八一の方なんだから。

「正直、あの時の八一の変わりようは今思い出しても頭にくるレベルよね」

「同歩。あれは完全にケンカ売ってたわよね。なのに当時の私ったら八一から敬語を使われたり、姉弟子って呼ばれるのにちよつと気分が良くなっちゃってたのが更にムカつく」

「それ分かる。ホントにあいつは私を苛立たせるのが得意っていうか、なんていうか……」

「いつそJSには八一相手に素直になれとかそんな優しい事を言わないで、出会い頭にグープンかましてポコポコにしてやりなさいって教えといたほうが良かったかもね」

「確かにそつちが正解だったわね。八一に対して甘い態度を取ったのが失敗だったか……」

……な、なんかJKとJCが盛り上がってる。

よっぽど八一への恨み辛みが溜まっているのだろうか。二人共目付きが怖い。

まあなにはともあれ。私だけが悪いわけじゃないってJK達も納得してくれたよう
だ。

そもそも私達は同じ空銀子なんだし、思考の果てが行き着く先は同じなんだろうけ
ど。

「でもJK、だとしてもどうする？　こうなるとJS相手にアドバイスを追加したとこ
ろで……」

「そう、ね。問題の大元は別、このままじゃ埒が明かないってのも事実……か」

JKは私を見ながら噛みしめるように呟いて。

「……仕方ないわね。ちよつと待ってなさい」

「え……JK?」

そのままJKは私達に背を向けた。

そしてすたすたと廊下を歩いて、玄関ドアを開いてこの部屋から出ていった。

「……ねえJC。JKは何処に行ったの?」

「さあ……?」

「ごんぴにかな?」

「ええ？ このタイミングで突然コンビ二行く？」

展開に付いていけない私とJCと幼女が顔を合わせながら首を傾げる事、数分。

「……あ、帰ってきた」

再び玄関ドアを開く音が聞こえて。

「ほら、とつとと来なさいよ」

次いで聞こえたのは。

JKの声と……もう一つ。

「い、痛い、ちよ、痛いって銀子ちゃん……！」

って、あ……あの声は——！

それを聞いた途端、私の全身が表現しようのない熱っぽさに包まれた。

懐かしさを覚えるその声は……私が知っているのより数年間成長したあのバカの声。

「お待たせ。元凶を連れて来たわよ」

「元凶ってなにが……って——んん？」

玄関から歩いてきたのは八一と銀子だった。

JK銀子に耳を引っ張られながら、大きく成長した18歳の八一が私達の前に現れた。

おまけの話 JS銀子のその後④

「ほら、とつとと来なさいよ」

「い、痛い、ちよ、痛いつて銀子ちゃん……い」

JK銀子に耳を引つ張られて連行されて来た男。

「お待たせ。元凶を連れて来たわよ」

「元凶つてなにが……つて——んん？」

その声は、その姿は紛れもなく——

「あ……い」

——八一だ、八一だっ！

あの時あの夢の中で出会った八一が、成長して18歳になった八一とまた会えたつ！
とそんな感じで、望外の驚きと喜びに私が声を上げるよりも先に。

「ああっ!! ああああっ!!!」

その数倍もの驚きと声のポリウムで。

リビングに勢揃いする私達を見た八一は、驚愕に目を見開きながら、叫んだ。

「あああああつ！ ああああ会いたかったよおようじよぎんこちやーんつつつ
!!!」

そしてすぐさま低空ダイブ。ぴよーんといった感じで対象に飛び付いた。

真つ先に。幼女銀子に向かって。

「むぎゅ」

「幼女銀子ちゃんだー！ 幼女銀子ちゃんだあ!! 幼女銀子ちゃんだー!!!」

両腕でガシツと幼女をホルルドしながら、感涙せんばかりに感激する八一。

そして「わーいわーいっ！」と喜びの声を上げながら地面をころころ転がり回る、その姿を見ていたら、なんか……なんか。

先程私の胸に湧いた感情が……この八一に会えた喜びがどんどん薄れていく……
ような。

「やいち、ひさしぶりだね」

「ほんとに久し振りだねえ幼女銀子ちゃんつ！ こうして君とまた会える日が来るなんて!! ああ嬉しい嬉しい!! 超嬉しいっ!!」

「そんなにうれしいの？」

「そりや嬉しいよ！ 皆とは突然お別れになっちゃったから俺もう寂しくて寂しくて……！ 幼女銀子ちゃんは大丈夫だった？ 俺がいない間元気にしてた!? いい子にしてた!」

「うん。してたよ」

「そーかそーかあ!! よーしよし銀子ちゃんはいいい子だねえ可愛いねえ可愛いねえ!!」

「むう、やいち、ちよつとくるしい。はなせ」

「やだーっ!! はなさなーい!!」

会えなかった時間を埋めるかのように、八一は幼女との濃い目のスキンシップに没頭する。

頭をなでなでしたり、ほっぺをむにむにしたり、全身で包み込むかのようにぎゅーしたり。こうして再会出来たのがよっぽど嬉しかったのか、八一はこれ以上無いぐらいに幼女銀子を愛おしんでいた。

その光景を微笑ましく感じるか、あるいは別の何かを感じるかは人それぞれだろう。

「……チツ」

「いてっ」

生憎と私は後者だった。

その姿にイラッと来た私は思わず八一の背中に蹴りを入れた。

「八一、私も居るんだけど」

「はッ！ そうだった!! 幼女銀子ちゃんとまた出会えた感動でつい我を忘れちゃった!」

八一は幼女から手を離して起き上がる。

そして相変わらずの嬉しそうな顔で私を見た。

「JS銀子ちゃんも、久し振りだね!!」

「ん……」

「JS銀子ちゃんっ!!」

挨拶もそこそこに、八一は幼女にしていたのと同じように手を伸ばしてくる。

ぐるっと私の背中まで手を回して、なんの許可も無しに勝手に抱き付いてきた。

「ああ、JS銀子ちゃん……!」

「……むう」

……むー。

てかさー、なんで私は幼女の次なわけー?

なんかムカつくー。せっかく18歳の八一と会えたのに嬉しさが半減するっていうかー。

……とか思ってたんだけど。

「ああああ……本物のJ S 銀子ちゃんだあ……ほんとうに会いたかったよお……」

「八一……」

けれど八一の感極まった声を聞いていたら、ムカツとしていた気持ちはすぐに消えちやつて。

仕方ないので私も八一の背中に手を回した。あくまで仕方なくだからね？ 仕方なく。

「八一、そんなに私と会いたかったの？」

「会いたかったよ。次のタイトル戦がもう待ち遠しくてしょうがなかったんだから」

「……そっか」

「うん。そういえばJ S 銀子ちゃんはちよつと背が伸びたね？」

「私は6年生になったから。今回はなんでか知らないけど私だけはちよつと成長してるの」

「そうなんだ。まあでも6年生ならJ S 銀子ちゃんには違いないって事だよね」

言いながら八一の手が私の頭を優しく撫でる。

んう……き、気持ちいい。それに八一の腕が、八一の温もりが……あう、あたたかい。

だ、だめだ、ドキドキしちゃう。だって八一とこんな近付くのとて久し振りなんだもん。

にしても全く……18歳の八一はこんなに私の事が好きだったのに、どうしてあいつは……。

「ああJ S 銀子ちゃん、J S 銀子ちゃん……!」

「ちよ、ちよつと、八一……!」

八一が自分の頬を私の頬に押し当ててきた。そしてすりすり頬ずりしてくる。

ふわふわわっ! ほっぺとほっぺが! や、八一つたらなんて積極的な……!

……てな感じで。

私と八一がイチャイチャしていると。

「……………私は?」

ボソツと、それでもしつかり聞こえる程度の声で呟いたのはJ C 銀子だった。

どうやら痺れを切らしたらしい。やっぱりどの銀子も考える事は同じなのか。

「あ、うん」

すると八一は私から手を離して、J C 銀子の方に向き直る。

「J C 銀子ちゃんも久し振りだね」

「……なんか年齢が上がるにつれて再会のテンションが下がってきてきてない?」

「そ、そんな事無いよ! J C 銀子ちゃんに会えた嬉しさだって他の子達と変わらな

いって!」

慌てて否定する八一の一方、J C 銀子は「……………どうかしらね」と拗ねたように呟いて。

「……………だったら、他の銀子達にしたみたいに私にもするべき事があるんじゃない？」

「え、あ……………そうだね、では遠慮なく……………」

テンションが下がっているというよりも、J C 相手には多少なりとも気兼ねするのだろうか。

八一はおずおずといった感じで手を伸ばして、J C の事をそつと抱きしめた。

「……………ん」

J C 銀子は身動きせず抱擁を受け入れる。

さも不機嫌そうに目を瞑っているけど、その表情には隠しきれない嬉しさがにじみ出ている。

でも、いいのかな……………確かJ C 銀子ってこの前……………色々あったような、無かったような。

すると似たような事を思ったのだろう、その光景を見ていたJ K 銀子が口を開く。

「うわ。J C、あんたそれ浮気よ、浮気」

「浮気じゃないわよっ！ これは夢だし、そもそも同一人物なんだからセーフなのっ！」

「そうだよ!! 大体ハグなんて欧米じゃあ挨拶みたいなものだって言うし!!」

「八一、あんたまで便乗するんじゃない……………ほら、感動の再会はもういいでしょ？ そ

ろそろ本題に入りたいから二人共離れなさい」

「はい」

そして、JC銀子から離れた八一は。

「つてか本題つてなに？ 俺にも聞いてないんだけど……あ、将棋すんの？」

未だ事情を知らない八一はお気楽に咳く……が。

「違う」

そんなお気楽八一の顔を、JK銀子は射抜くような鋭い視線で見つめた。

「今日はね、元はと言えばJSにダメ出しと文句を言う為に集まったんだけど」

「ダメ出しと文句？ JS銀子ちゃんに？」

「ええ。でもね、やっぱり問題の大元はあんたに原因があるつて事が判明したの」

「え、俺が原因？」

「そうよ。だからこうして連れてきたつてわけ。八一……あんたの罪を裁く為にね」

JKは脅すような硬い声色でそう告げた。

すると八一も「お、俺の罪？」と、それまで浮かれきっていた表情を僅かに強張らせる。

そう。今回はなにも八一とイチヤつく為に集まったわけじゃない。

いやまあ私は別にそれでもいいんだけど、他の銀子達にとってはそうもいかないよう

だ。

特にその罪科の重さを知る人物、JK銀子の迫力はいつにも増して強く、罪深き罪人を必ず追い詰めてやるという気概に満ちていて。

「八一。これから裁くあなたの罪……自分自身で思い当たる事はあるかしら」

「……いや、ごめん。全然分かんない」

「ヒント1。あなたがやらかしたのは今からだと4年と半年ちよつと前の事ね」

「4年と半年前？ ……えつと、それだけのヒントじゃちよつと……」

「じゃあヒント2。私が初めてタイトルを獲得した時の事よ」

「銀子ちゃんが初めて獲得したタイトルって事は……女王戦の時ってこと？」

最初はピンと来なかったのか、ふむふむと聞いていた八一も、

「そ。私が女王のタイトルを獲得して、一晚経った次の日からどうなったか……覚えてるっ。」

「……ええつと。覚えてるかとか聞かれると、覚えてるよーな覚えてないよーな……」

「あの日からあなたは私の事を『姉弟子』って呼ぶようになったんだけど、覚えてない？」

「……う。それ、は……」

次第に顔の角度を下向きに、JKと視線を合わせられないのか徐々に俯き始めて。

「それで私相手に敬語で話すようになって……あの日から随分とよそよそしくなった

わよね」

「……そうだったっけ？」

「そうだった。まああなたにとっては記憶にも残らない程度の事だったのかもしれないけど」

「……いや、あの、そういうわけでは……」

だんだんと声のボリュームも下がってきて、なんだか顔色も暗くなってきた。

「自然と手も繋がなくなっていて……そんな関係が今年の7月頃までずっと続いたわよね」

「……………」

「その件に関してが今回の議題ってわけ。あんたがあの時……って、ちよつと八一、聞いてるっ。」

「……………あ。聞いてまあす……………」

最終的に八一は膝を折って腰を下ろして、頭を抱えてしやがみ込んでしまった。

その姿は己が罪状に苦しむ罪人の姿そのもの。どうやら大いに心当たりがあるみたいだ。

「ああああ……………マジかあ、その話かあ……………」

そしてそれは……………どうやら八一にとっては触れられたくない部分なのか。

その声色は重苦しく、その表情は言わずもがな。八一のテンションは一気に下落して

いた。ついさつき幼女に抱きついて床を転がり回っていたのが嘘のようだ。

「まさしくその話よ。私があんたに何を言いたいのか、言われなくても分かるわよね?」
「まあ、その……はい。あれですか、当時の怒りがぶり返したとかそういう話ですかね」
「そうね、それも込みかも。元々はJSの問題について話すだけのつもりだったけど、色々昔を思い出して私自身もイラついてんのかもね」

「それについては私も同歩。なんせあの時の八一の態度はほんとにムカつく感じだったし」

「じゃえ、JC銀子ちゃんまで……」

小さく蹲る八一の前、ズーンといった感じで圧を放つJK銀子とJC銀子。

この両名は私が今絶賛体験中の地獄を数年単位で経験してきた猛者達だ。だからこの件について思う事は、その胸の内にある感情は私よりも遥かに重くてドロドロとしたものに違いない。

「で、でもさ。ムカつく態度って言ってもさ、ちゃんと敬語は使ってましたよね?」

「だからその敬語がムカつくって言うてんの。幼い頃からずっと一緒に育ってきた相手に突然他人行儀になったりして。なんなの? バカなの? ふざけてんの?」

「ぐうう……!」

JKの言い分が急に刺さったのか、八一は心臓の辺りを押さえて苦しそうに呻く。

「で、でもさでもさ、あれは俺だけじゃなくて銀子ちゃんの状態もじゃない？ 銀子ちゃんだって俺から敬語で話しかけられた時はちよつと気分良さそうにしてたじゃん？」

「はあくく!? なに!? 私が悪いっての!? 私達の仲が拗れたのはあんたが唐突に敬語を使いだしたり姉弟子とかって呼び出したり、それまでの態度を急変させたのが一番の原因じゃないのよ！ ねえJC!？」

「そうよそうよ！ そりゃあ私も念願のタイトルを獲得してちよつと浮かれてたところはあるけど、でもタイトルを獲得したんだから浮かれるのなんて当然でしょ!? それすらも駄目だったって言いたいわけ!？」

「……………いえ。そつすね、確かに俺が悪かったです……………サーセンした……………」
反論しようと試みるも相手は二人。多勢に無勢では勝ち目など無し。

JKとJCが繰り出す猛攻を受けて八一はその身をしゅんと小さくするのみ。

「あの日を境に手も繋がなくなっちゃって、あれつて本当は破門なんだからね、破門」
「……………そつすね。破門になつてもおかしくないぐらいに俺が悪かったです、はい……………」

「大体さあ、私が女王を獲つたあの時つてあんたは中学2年生でしょ？ もう少し中学2年生らしくというか、年上らしく出来なかつたわけ？」

「はい……………出来なかつたです……………全部俺が悪いです……………ごめんなさい……………」

「いくら気心知れた相手とはいえ、中2の男が小6の女子相手に突然冷たくしたり素つ

気無くしたりするのってどうなの？　ちよつと陰湿っていうか、ハッキリ言つて性格悪いわよ」

「ほんとにもうマジで勘弁して下さい……」

余程堪えたのか、心を折られたようにガツクリと頭を下げる八一。

空銀子が女王のタイトルを獲得して、その日から「姉弟子」と呼んで距離を取つた過去。

己が罪状を見つめ直して、断罪を受け入れて謝罪する八一はぽつぽつと語りだす。

「でもさあ、でも違うんだよ……。あれはね？　あれはなにも銀子ちゃんに冷たくしたかつたとか意地悪したかつたとか、そういうんじゃない……」

「なくて？」

「その……当時の俺なりにね？　銀子ちゃんとの正しい距離感を考えた結果っていうか……」

「は？　なにそれ、正しい距離感とか知つちやこつちやないんだけど。あんたそんな下らない理由で私のことを姉弟子って呼び始めたわけ？」

「いや、これは下らない理由ってわけじゃ——」

「あ？」

「ハイ、ソウデスネ……下らないです……」

J K 銀子にギロリと睨まれ、それだけで小動物のように身を縮こまらせる八一。
そして縮こまったまま「……はあく」と、それはもう大きな溜め息を吐き出した。

「下らない理由か……。でも、そっか、そうだよなあ……。こんな下らない理由だよなあ……」

当時の八一がそうすべきだと思つたこと。そこには一応それなりの理由はあるのだろう。

けれどもそれは空銀子からしたら下らないこと。そんなJ Kの意見には私も同歩だ。

そして当時の自分とここにいる私達、二つの狭間に立つて考えた18歳の八一は最終的に当時の自分ではなく私達の意見を採用したらしい。肩を落とすその表情には深い後悔が滲んでいた。

「どう？ 八一。自分がどれだけ愚かな事をしたのか分かつたかしら？」

「……うん。ほんとにごめんね、銀子ちゃん。当時の俺がバカで考えなしだった」

「その通り。とはいえまああんたがバカで考えなしなのは今に始まつた事じゃないから、私としては5年近くも前の事に今更文句を言つたりするつもりは無いんだけど……
問題はJ Sよ」

そして、J K 銀子が私を見る。

釣られて八一やJ C 達も、この場にいる皆の視線が私に向いた。

「私達と違ってJSは当事者、今まさにあんたのせいで大変な目にあってるんだから」「あ、そっか……小6になったJS銀子ちゃんは女王のタイトルを獲得したんだね？」

そしたら当時の俺が敬語になってよそよそしい態度を取るようになったと

「そういう事。中2のあんたが優しくしてあげないからJSは苦しんでいるのよ。夜寝る時なんてベッドの中で毎日泣いてるんだから」

「っ、そうなの？」

「別に泣いてなんかないっ！」

咄嗟に声を張り上げて否定する。JKめ、勝手な事を言うな。

私は別に泣いてなんかない。ただあのバカに対してどうしようもなくイラつくだけだ。

……別に、八一が優しくしてくれないからって……べつに、かまわないもん。

「ごめんね……JS銀子ちゃん」

「だから、泣いてないって……」

八一の手が、私の頭を撫でる。

……っ、なんか、だめだ。もう、私は別に泣いてなんかないのに。

優しく撫でてくれる八一の右手が……その感触のせいで、目元がじんわりとしてき
ちやう。

「ほんとにごめん。当時の俺なりに考えての行動だったんだけど……そのせいで銀子ちゃんを傷付けるって最初から分かってたら……」

「……………」

「ごめんで済んだら警察は要らないのよバカ。……ってJSが言ってるわよ」

「傷付いた私が非行の道に走ったらあんたのせいだからね。……ってJSが言ってるわよ」

「……………言ってるない」

「せきにんとってきすしなさい。……ってじえーえすが言ってる」

「言ってるないっ!」

幼女! この幼女はなんなの!?! 最近キスのことばっか言ってるない!?!

というかJKとJCもだけど、勝手に人の気持ちを代弁しないで欲しい。

「とにかく。JSは今とても困ってるってわけ。だから八一、あんたも解決策を考えな
きゃ」

「解決策か……それって俺とJK銀子ちゃんみたいに時間が解決してくれるのを待つ
……って言うのは駄目だってことだよな?」

「当たり前でしょ。それで良いならわざわざあんたをここに連れてきたりしないわよ」

「だよなあ……………」

うん。そうだ。それはやだ。

JK銀子達の様子を見てたから時間が解決してくれるってのは私も分かった。でもそれってあと5年近くもこのままって事でしょ？ そんなのやだ、絶対にやだ。

その方法ならJKと18歳の八一みたいに恋人同士になれるのだとしても。それでも今の八一との距離感をこのまま数年間も継続するなんて……そんなのむり。そんなの寂しくて死ぬ。

「だったら当時の俺……っていうか、JS銀子ちゃんのそばにいる九頭竜八一にさ、直接そう言っちゃうのが一番手取り早いんじゃない？」

「甘い。それはもうやった。ねえJS？」

「え、そうなの？」

「……うん」

うん。JKの言う通りそれはもうやった。

敬語で話すのは止めてって、姉弟子って呼ぶのは止めてって直接そう言った。

けれども八一は聞き入れなかった。なんと私のお願いを無下にしたのだ、あのバカは……。

「あの時のやり取りをあんたに見せてあげたいわ。JSが『姉弟子って呼ぶのは止めて』って言ってるのに、中2の八一は全く取り合わないで、それどころか『ワガママ言

わないで下さいよー』とか言っちゃって」

「……………」

「どうやら周囲の目が気になったみたいだけど……………あの時の八一の変な方向への強情さは……………あれはあんたのダメダメな部分がかたもかというぐらいに詰まってたわね」

「ぐっ！……………返す言葉も無いっす」

呻き、ぐったりと項垂れる八一。

にしてもJKは見事に八一の急所に刺さる言葉を次々と繰り出していく。

これが年の功なのだろうか。こういう手際の良さは正直言って私も見習いたいところだ。

「でもそうだね。中2の時の俺ってのは……………つまり思春期真っ盛りの俺って事だからさ

……………」

「だから？」

「だから、その……………ね？ 年下の銀子ちゃんから言われた事をさ、そのままさんなりと受け入れるのが難しい性格をしてるっていうかさ、なんていうかさ……………あるじゃん？

そういうの」

「つまりは面倒くさい性格をしてる、と」

「えっと、まあ、多少はその傾向があるかもしれないね。なんせほら、当時は思春期だか

らさい」

「ねえ八一。なんかさも昔の事のように語ってるけどハッキリ言っつて今も大差無いわよ」

「なツ……!?!」

「ねえじえーしー。思春期つてなに?」

「ん? そうね……要はあの時の八一みたく面倒くさい性格になる年頃を思春期つて言うのよ」

思春期。詳しくは知らないけど中学2年生辺りは思春期真っ盛りだと言えるだろう。

確かにあの八一は面倒くさい性格をしている。何を気にしたのか、私に相談も無く勝手に私との距離感を改める事を決めて、そんなのをどうやら5年近くも続ける程に頑なで。

それでいて18歳になったらこうして当時の事を後悔してるんだから、もう手の施しようがないおバカつていうか、ほんとにこれ以上面倒くさい性格は無いと思う。巻き込まれるこっちは溜まったもんじゃない。

「にしても言っつても聞かない当時の俺が相手となると……うーん、どうすつか……」

「やっぱぶちころすしかないかしら」

「JC銀子ちゃん、そういうのはちよつと……」

「でも他に方法がある？　言っても聞かないからもう身体に分からせるしかなくない？」

「同歩。あのバカ相手にはそれぐらいしないと難しいと思う」

「いやいや駄目だつて。銀子ちゃんに叩かれるのなんて当時の俺には日常茶飯事なんだから、それぐらいじゃ何も変わらないよ」

「じゃあきすするとか」

「ちよつと幼女！　さつきからキスキス言うんじゃないのっ！」

「むぐきゅ」

私は幼女銀子の口を両手で塞いだ。

すると4歳児は両手を振つてもがもがと暴れる……みたいな事をしてると、

「……しようがない」

「八一？」

何かを思い付いたのか、固い表情をした八一が口を開いた。

「当時の俺の考えを変える為には……多分だけど結構な劇薬が必要になると思うんだ」

「そうね。それは私もそう思うけど……なにかいい方法があるの？」

「うん。これは少々酷な方法だけど、当時の俺にはちよつと地獄を見てもらおう」

「じ、地獄？」

思わず呟く私。

地獄とは。それは今の私が置かれている状況そのものだ。

まさか私がやられた意趣返しとして、今度は八一の方に地獄を見せるというのか。

「地獄を見せるって……どうやって？」

「当時の俺が一番嫌だと感じる事をするんだ。前にJS銀子ちゃんには話したと思うけど……」

そして八一は言った。

当時の自分に対する劇薬を。中学2年生13歳の九頭竜八一に地獄を見せる方法を。

「JS銀子ちゃんが……俺以外の誰かを好きになればいいんだ」

おまけの話 JS銀子のその後⑤

固い表情をした八一が言う。

「JS銀子ちゃんが……俺以外の誰かを好きになればいいんだ」

「それって……」

それが、劇薬。

私の現実を苦しめるあの八一に、中学2年生13歳の九頭竜八一に地獄を見せる方法。

成長した本人自らが酷な方法だと言う、劇薬だと称する程の一手を打ち明けた八一は、

「ああでもやつぱ駄目えっ！」

「えっ」

直後手のひらを返すように声を上げた。

「あああああ……いやだ嫌だあ……もうそんな言葉にするだけで嫌だよお……」

そして先程のようにまた小さくしゃがみ込んで、両手で頭を抱えて。

そのまま八一は身体を揺すりながら苦悶の表情でうわあうわあ……と唸りだす。

「銀子ちゃんが俺以外の男を好きになるなんて。もう自分で言つて吐きそうになるよお……メantalが死んじやうよお……おえええ……」

「そ……そんなに？」

生気の無い顔で口元を押さえて嘔吐く八一。

そのオーバーなアクションを大げさに感じたらしいJK銀子が眉を顰める。だが、

「そんなにだよおっ！ 疑うんだつたら銀子ちゃんも自分の立場で想像してみなよお

!!」

「む……」

涙目になってる八一から言い返されて、JKはしばし思考の海に沈む。

「……………」

言われた通りに想像しているのだろう、その劇薬を自らが飲んだらどうなるかを。

それを自分の立場に置き換えると……つまり、八一が自分以外の女を好きになるとい

う事——

「……………」

「いてっ！」

瞬間、JK銀子は鋭く息を呑んで。

そして八一の膝にローキックをかました。

「このバカっ！ どバカ！ そんなっ、そんな縁起でもない事想像させるんじゃないわよっ！」

「だから言ったじゃん……」

……ほんと、縁起でもない話だ。

ただでさえ八一との関係が上手くいっていない今、あんまり不吉な事を言わないで欲しい。私まで背筋が凍っちゃったじゃないの。

だって八一が、私の八一が、私の知らない内に私以外の誰かを好きになって、私の知らない内に恋人同士になったらなんて考えると——

……やだ。いやだ。そんなの想像したくもない。

「……ぶちころす。そうなたらもう絶対にぶちころす」

「……むう？」

同じく想像をしたのか、見ればJC銀子も血の気の引いた表情をしている。

普段通りなのは幼女銀子だけだ。流石にまだ幼女には事の重大さがよく分からないのだから。

「ね？ 分かったでしょ？ この一手は本当にヤバいぐらいの劇薬なんだ」

「……………そうね」

「ちよつと想像してみただけでも頭痛や吐き気、動悸や息切れ、目眩いや胸の痛みがしてくるんだから……………これを直接本人から言われた日には……………」

「……………（ゴクリ）」

私とJCとJKは三人共に喉を鳴らして。

「その時はもう……………死んだっておかしくない」

「……………ツツ！」

続く八一の言葉に息を飲んだ。

その劇薬を直接投与された場合、待ち受ける最悪の結果は——死。

いやそんな死ぬなんて大げさな話を……………と、一笑に付す事は出来そうにない。

だって、本当にそれはキツイ。

今ここで仮定の話として想像してみるだけでこんなにキツイのに、それを嘘だと知らずに直接本人の口から言われでもしたら。

その衝撃度合いは……………そのショックさはもう想像も及ばないレベルだ。特に心臓の弱い私なら本当にそれが死因になってもおかしくない。

「……………死ぬ」

「うん。死ぬ。死ぬに等しいぐらいエゲツないダメージを負う。今の俺がそうなんだか

ら当時の俺だつてきつと同じはずだ」

「ま……そうね。当の本人がそう言うならそうなんでしょうね」

「うん。他でもない九頭竜八一が保証するよ。これは絶対に効く」

死ぬ……か。私はなにも、八一を死なせたいってわけじゃないんだけど。

でも言っている意味は分かる。要はそれぐらい致死性の高い劇薬を使わなければ、あの頑なで面倒くさい八一の思考を変える事は出来ないって事なんだろう。

「そう言えば八一、前に言つてたよね。私が冗談で『クラスの男子に好きな子が出来たの』とか言おうものなら自分はもう即死だつて」

「ああうん、前の夢の時に話したね。そう、当時の小六の銀子ちゃんに恋人が出来たーなんて事になったら、中二の俺は絶対に平常心じゃいられない、頭が真っ白になってパニックになるはずだ。そうなったら銀子ちゃん相手によそよそしい態度を取つて余裕なんて無くなると思うんだよね」

「それで……それで元の八一に戻る？」

「と、思うんだけどね。それこそ例えば『八一が元に戻らないなら私はクラスの〇〇くんと付き合うから』みたいな事を言えば、中二の俺なんてもう即投了間違いなしだつて」

「……ふうん」

私が——空銀子が、九頭竜八一ではない他の誰かに気があるようなフリをする。

そうする事によって八一の動揺を誘う。そして上手く言い包めて最終的に投了まで追い込む。

それが最適解なのか。八一の言う事はまあ分からないでもないけど………でも。

「………どう、かな」

「銀子ちゃん？」

「私は………そんな簡単にはいかないと思うけど」

私は首を横に振った。すると「どうして？」と八一やJK達が怪訝な目でこつちを見てくる。

だって、私は当事者だから。問題のあの八一と生活を共にしているから。世代の違うJK達や18歳の八一よりもあいつに関しては私が一番詳しいと思うから。

だから………そんな私だからこそ分かる事がある。

「だって、それって………その劇薬で投了するのは、つまり八一が私を好きだからって事でしょう？」

「まあ………そうだね」

「でしよ？ だったら無理。あの八一は全然そういう感じじゃないもん」

さつき八一が言った戦法は、前提として中二の八一が私の事を意識していなければ成立しない。

空銀子に恋人が出来てパニックになるのは空銀子の事が好きだからであって、空銀子なんて別にどうでもいい、単なる姉弟子としか思っていないなら特段パニックになどならないはずだ。

「だったら……だったらそれは無理だ。」

「だって、私には分かる。あいつは……別に私の事なんて好きじゃない。」

「だって好きだったらこうはならない。好きな相手にあんな態度は取らないはずだ。そうでしょ？」

「そりゃ18歳になった八一はJK銀子の事が好きなのかもしれないけど、当時の八一は別に——」

「違う」

「え？」

「すると言い掛けた私の言葉を、八一が強い口調で遮った。」

「それは違うよ、銀子ちゃん」

「……でも」

「うん、きみの言いたい事は分かる。けれどもそれは違う、そうじゃないんだ」

「……………」

「違うって……なにが。」

なにも違うことなんて無いもん。あいつは私の事なんて好きじゃない。

だからそんな劇薬は効かない、って……私はそう思うんだけど……でも、八一が。

「俺は銀子ちゃんの事が好きだ。それは当時の俺だつて変わらないよ」

「つつー！」

——や、やいちに告白されたつ！

なんかサラツと告白された。『好き』だつて言い慣れているような感じがした。す、す
い。

たかが告白一つ、18歳ともなれば変に気負ったりはしないのか。それとも日頃から
JK相手に『好き』だと言ってるからなのか……ごくり。

「ただ……当時の俺にはそういう意識というか、そういう自覚が無かつたんだ。これも
以前の夢の時に話したと思うけど……覚えてないかな？」

「ああ、そういえば……」

当時の八一は空銀子を『好き』だという気持ちを自覚していなかった。

確かにあの夢の中でそんな話を八一としたような気がする。聞いた当時はそんなも
んかと思つてあまり深くは考えなかつただけ……。

「でも……それって本当にほんとの？」

「本当にほんとだよ。当時の俺ならともかく今の俺はこんな事でウソ吐いたりしないつ

て」

そして八一は一呼吸置いて。

私の目を真つ直ぐ見て、言った。

「今も、中学生の頃も、子供の頃からこの気持ちは変わらないよ。きつと俺は出会った時から君の事が好きだったんだ、銀子ちゃん」

「……………あ、う」

う、そ、そんな……………ずつと昔から、ずつと？

な、なによ、八一、やいちつてそんな、そんなに好きなんて……………そんなそんな……………。

だつてそんな、こんな積極的に来られたらさすがに照れるう……………ああだめ、顔がにやける。

……………とか思っていたのは私だけではないようで。

「……………へえ」

「……………ふーん」

「つてちよつと、みんなして照れないでよつ！ 言つてることちが恥ずかしくなつちやうじゃん！」

見ればJC銀子とJK銀子も、嬉しい感情を表に出すまいとするふにやつとした表情をしていた。

そして残る一人、幼女銀子はてくてくと八一のそばに近付いていつて。

「ねえやいち。それほんと？」

「うん。本当だよ」

「出会ったときから」

「うん」

「わたしがすきなんだ」

「うん。そうだよ」

「ほうほう」

なにやら四歳児なりに思う事があるのか、幼女銀子は興味深そうに頷いている。

それにしても……18歳になって成長した八一は自らの気持ちを露わにする事に躊躇いが無い。

私が『好き』だって、真つ直ぐちゃんと言つてくれる八一は……なんか……すごく、いい。

「……ねえJK」

「なに？」

「私、こつちの八一がいい」

「……これは私のだから駄目」

くう、駄目か。出来ることなら交換して欲しかったんだけど……まあそりゃ駄目か。八一は成長してイイ感じな八一になった。きつと私の教育が良かったんだろう……けど、この八一とはあくまで夢の中でのしか出会えないもんね。

私の八一は別にいる。私が倒すべき八一はあくまで13歳中学二年のあの八一だ。

ああ、あの素っ気ないダメ八一もこんな感じの八一になってくれれば良いんだけどなあ……。

「銀子ちゃんが女王のタイトルを獲った頃は、俺にとつては色々と難しい時期っていうか……なんていうか、色々と悩んでいる時期なんだ」

「……そうなんだ」

「うん。色々と悩んで……その結果銀子ちゃんの事を姉弟子と呼んだり、敬語を使って他人行儀な態度を取ったりする羽目になったんだけど……でも、それでも心の奥底にある気持ちは変わらないはずだ」

心の奥底にある気持ち。

それはきつと……私が八一に対して向けている気持ちと同じもの。

「とにかくそういう訳だからさ。この劇薬は当時の俺に絶対に効くはずだつて」

「……うん、分かった。八一がそこまで言うなら信じる」

当の本人からのお墨付きだ。信じてみる価値はあるだろう。

それにこの八一はちゃんと信頼出来る良い八一だからね。ダメダメな八一とは違うのだ。

「八一じゃない他の誰かを好きになつたようなフリをして、自分の気持ちを自覚してないあのバカを動揺させれば良いんだよね？」

「そうそう。それでパニックになつて俺に元通りの態度に直す事を約束させればいい。要は駆け引きだよ、将棋の対局と同じだつて」

「将棋と同じ……そつか、そうだね」

慣れ親しんだ将棋と同じだと思えば、なんだか簡単な事のような気がしてきた。

私は両手をぎゅっと握つて顔を上げる。すると優しい目をしている八一と目が合った。

「頑張つてね、JS銀子ちゃん」

「うん、頑張る。頑張つて中二のダメダメ八一に地獄を見せてくるから」

「ははは……そうだね。あの頃の俺は本当にダメダメだったから、銀子ちゃんも色々苦勞すると思うけど……頼むから見放したりしないでね？」

見放す？ 私か、八一を？

「別に……見放したりはしないけど」

「ほんとに？」

「うん。だって私は八一の姉弟子だもん」

私がそう答えると、八一は「そっか」と嬉しそうに笑った。

——そして。

「……あ」

光が差し込む気配——朝だ。

気付けば私は目を覚ましていた。どうやら不思議な夢は見終わっていたようだ。

「……夢、か」

夢を見た。相変わらずの変な夢だった。

相変わらずの銀子トリオが居て、でも今回は久々に八一の姿もあって。

まるで全てを見ていたかのような、今の私の悩みにピンポイントで刺さる内容の夢だった。

ていうかもうこれ意図的だよな？ 偶然に見た夢とかって話じゃ済まないよね？

これはもはや超常現象の一種なのでは……とすら思うけど、この点に関しては考えた所で答えは出ないような気がするので目を瞑る事にする。

だって超常現象の謎を解き明かすよりも、今の私にはするべき事があるから。

「んしょつと……」

ゆっくりとベッドから身体を起こして、サイドフレームを掴んで真下を覗き込む。

二段ベッドの下段で眠る、あいつを。

「……………ぐう」

寝てる。八一はぐーすか寝てる。

私が倒すべき相手。一月前から急に素っ気ない態度になった中学二年生13歳の八一が。

「……………八一」

昨日までの私は何も出来なかった。

八一の変化をただ受け入れて、仕方の無い事だと自分の心を納得させようとしていた。

JK達から貰っていた助言も活かせず、寂しい心を押し殺してただけだった。

……………けれど。

「……………見てなさいよ」

けれど、今は違う。

今の私には秘策がある。18歳の八一から授けられた劇薬があるのだ。

「……ぐう、ぐう」

「呑気に眠っていられるのは今だけよ。じきに地獄を見る事になるんだからね」

「……ん、んん……んあ……？」

あ、どうやら起きたらしい。

目を覚ました八一はごしごしと両目を擦って、ふわあーと大きなあくびをして。

「……あ」

そして、上から覗き込んでいる私に気付いた。

「あれ？ 銀子ちゃん、どしたの？」

—— 銀子ちゃん？

「……ねえ」

「んっ？」

「……姉弟子、じゃなかったの？」

呼び名間違いを指摘すると、八一は「あ」と寝ぼけ眼を大きく見開いた。

「……うん。姉弟子、どうしたんですか？」

「……別に」

それだけで私はスツと身体を戻す。

おはようぐらいは言っておげようかなと思っただけ……ムカついたからやめた。

……まったく、言い慣れない呼び方なんてしなきゃいいのに。ほんとにこのバカときたら。

やっぱりこれは駄目だ。うん、これは良くない。

朝っぱらからこんなじゃ疲れちゃう。八一と会う度に私のテンションも下がる一方だ。

今後私が健やかな日々を送る為にも、このダメダメ八一にはお灸を据える必要があるだろう。

と、いう事で。

「八一。対局するわよ」

「あ……はい」

その日の学校終わり。

帰ってきて早々私は八一を将棋に誘った。

その懐に……致死性の劇薬を忍ばせて。

おまけの話　JS銀子のその後⑥

静かな空気の中、響く駒音。

「……………」

それは将棋の空気、将棋の音。

学校終わりの午後、只今私は対局中である。

「……………うーん」

お相手は勿論こいつ、九頭竜八一。

私の弟子であつて、今は色々と関係がギクシャクしちやつている因縁の相手、バカ八一。

とはいえ将棋の前では別の話。たとえケンカして仲違いしている最中でもそういつたいごっこを盤の中にまでは持ち込まない、それはお互いにとって共通のルールのようなもので。

「……………ふう」

だからこそ私は今、こいつと将棋を指している。

盤を睨む集中した目付き、軽く息を吐いた八一の指先が駒を掴む。

そして一気に前方へ、私が自陣に組んだ囲いの中に飛び込んできた。

「……………む」

思わず唸る私。

ぬう、ここで攻め手を変えてくるとは。相変わらずイヤらしい所を突いてくるヤツだ。

「……………」

中々次の手が出せない。悔しいけれど現状の盤面は私の劣勢と言わざるを得ない。

ここ最近の八一は一層強くなった。私が女王のタイトルの獲得して以後、八一の将棋に対する傾倒具合は更に強まったような気がする。

一方で私はタイトルホルダーになった事で取材などのお仕事が増加したのも相まって、ここ最近は一八との勝敗の星勘定が今まで以上に開いてしまっているのが現状だ。

——が。

「……………」

相変わらず、八一の視線はその盤面にのみ向けられている。

が、だ。生憎と私の視線はそちらには無い。今、私の視線は真っ直ぐ前だけを向いて

いる。

目の前に居る……こいつを。

「……………ふうん」

だってこれは将棋の勝負じゃない。私にとって今日の目的はそっちではないのだ。

これは言うなれば将棋をダシにした番外戦術のようなもの。けれども今日の勝負はその番外の争いこそが本命なのである。

このダメダメ八一に地獄を見せる為、私には用意してきた劇薬がある。

なんせムカつくし。散々イライラさせられてきた訳だし、やり返すのは正当な権利の
はずだ。

そしてなにより、私にはこの劇薬を用意してくれた頼もしい味方がいる。

私には見える。今、私の頭の中にはあいつらがいる。3人の銀子達と18歳の八一が
いる。

みんなが私を応援してくれている。そんなイメージが脳裏にくつきりと浮かんでい
る。

こうして頼もしい援軍が付いている以上、もはや恐れるものなど無し。

という事で……そろそろ仕掛けるとしよう。

「……………」

しばし悩みの末、私はようやく受けの一手を返して。

そして、八一の手番になった瞬間、

「……あ、そう言えば」

「ん？」

そんな切り口から。

さも唐突に思い出したかのような口振りで。

「今日、学校でさ」

「うん」

なんでもない事を言うかのように、言った。

「クラスの子から告白された」

「んぬう!!？」

入った。初っ端から右ストレートの一撃。

またもに食らった八一の口からは対局の静けさを裂く奇妙な大声が上がった。

「うるさい。急に大声出さないでよ」

「……え。……う？」

聞こえた言葉を頭の中で処理できないのか、目を白黒される八一。

とりあえず先程までの集中した表情は崩せた。滑り出しとしては上出来だろう。

「……え、姉弟子今なんて言いました？」

「うるさいから大声出すなって言った」

「いやあのそつちじゃなくて、その前に」

「だから告白されたんだって」

「……え、誰が？」

「私が」

「誰に？」

「クラスの子に」

「……………」

私が——空銀子が、クラスメイトの男子から告白された。

ようやく事情を飲み込んだのか、八一は長い沈黙の後にゆっくりとその口を開いて。

「……………ほうう？」

ほうう？ つてなんだ、ほううって。

なんだか偉そうに相槌を打ってきた八一は、これまた偉そうにふむふむと大袈裟に頷き始める。

「……………はー、なるほどねえ」

「なるほどって、なにが」

「いやあ、姉弟子に告白するような奇特で無謀で命知らずなヤツも居るんだなあつて思っています」

あんだとお？

なんというムカつく返事。こいつ、どうやらぶちころされたいようだな。

「……つと、ちがうちがう」

「え？」

落ち着け私、落ち着いて。ここで逆上してしまつては何も意味がない。

あくまで私は平然としているべきだ。今攻めているのは私の方で、あたふたと情けなく動揺するべきなのは八一の方なんだから。

ほら、私の頭の中にいる銀子達も「冷静になりなさい」とアドバイスをくれている。そう、ここは一つ冷静になって……冷静に、次の手を。

「今日の帰りにさ」

「はあ」

「告白をね」

「へえ」

「されたわけ」

「ほお」

まあ、勿論これは作り話なだけだ。別に私は告白なんてされてないんだけど。

けれどもその点は問題無い。アホな八一が私の嘘に気付くはずが無いからね。

「急に話しかけられてさ……突然の事だったからビックリしちゃった」

「ほうほう、そりやまた」

「告白されるなんて、今まで全然考えた事も無かったっていうか……あるのね、こういう事って」

「みたいですねえ」

今日の帰りにクラスメイトの男子から告白をされた（という設定の）私を前にして、八一はさもどうでもよさげな気のない返事を繰り返す。

「まあでもそうっすねえ。姉弟子も小学六年生ですもんねえ。小六といえぱそろそろ色気付いてくる年頃ですし、告白の一つぐらいされる事もあるのかもしれないね、ええ」
年上目線でなんとも偉そうに、余裕ぶつた態度でぺらぺらと喋るバカ。

けれども私には分かる。これは効いている。八一は今分かりやすく動揺している。

自分の手番だと言うのに次を指さない、目の前の将棋から集中が切れているのが良い証拠だ。

「そっすかあ、告白っすかあ」

「そうだけだ」

「姉弟子がねえ……告白かあ……」

「そうだけど?」

「……そうっすかあ……」

ふふん、効いてる効いてる。さあもつともつと動揺しなさいな。

この分だと18歳の八一が言っていた通り、今のこいつが私の事を全く意識していないっていうわけでは無いみたいだ。良かった。

ほら、私の頭の中にいるJKやJC銀子達もうんうんとしたり顔で頷いている。一方で18歳の八一はちよつと座りが悪そうな顔をしているけど。

「でもその……姉弟子に告白してきた男の子も不運って言うか、ちよつと可哀想ですよ
ねえ」

「は? なんで可哀想なの?」

「だって姉弟子に告白なんて、そんなんフラれるの確定してるじゃないですか。まあ好きになつちやつたもんはしょうがないとしても、勝ち目ナシの勝負に挑むつてのは中々可哀想な話ですよねえ」

「……………」

……ふむ、なるほど。

今のセリフを聞く限り、どうやら八一の頭の中ではすでに結果が出ているらしい。

私が告白を拒絶した事になっている、お相手の男をフツたという事で確定しているよ
うだ。

「……………ふふっ」

「姉弟子？」

思わず笑みが溢れる。

まあ、ね。そりゃあそう考えるのが自然な発想だとは思うけど。この私を、八一が知
る空銀子の人間性を考えればそのような結論になるだろう。

私って自分で言うのもなんだけど将棋以外にはまるで興味を示さないような人間だ
し。だからもし実際にクラスメイトの男子から告白されたとしても返事はお断り一択
だろう。

——けど、だ。

「別にそんなこと無い。フラれるのが確定してるなんて事は無いわよ」

空銀子が他の誰かを好きになって、それでもって八一を動揺させて追い詰める。

それが今回の狙いだ。であれば当然、ここは思わせ振りに感じて答えておく。

「……………あ？？」

すると予想外の返しだったのだろう、八一の口から裏返ったような声が聞こえた。

「……………え」

「……なによ、その顔は」

そしてまじまじと私を見てくる。

まるで目の前にあるものが信じられないと言わんばかりの表情で。

「ていうか八一、早く次の手を指しなさいよね。時間食い過ぎ」

「あつ、と、そ、そつすね……」

私に急かされて、盤面に目を移した八一は慌てた様子で次の手を打った。

しかしその一手に先程までの切れ味は無い。才能の冴えの欠片も見えない凡庸な手、盤外戦術の効果が如実に現れている。

「……え。あの……姉弟子」

「なに？」

「……いや、でも、まさか、そんな、姉弟子に限ってそんなわけ……」

「なにぶつぶつ言ってるのよ」

「いや、その……てかその告白って、もう返事はしたんですよね？」

八一は恐る恐るといった感じで聞いてくる。

その目が、言外に「勿論フツたんですよ？」と尋ねているのがひしひしと伝わってくる。

ふふふつ、完全に効いてるわね。

私にフって欲しいんでしょ？ 私に恋人なんて作って欲しくないんでしょ？
だったらここで本命の一撃だ。もう返事はしたのか、ですって？ そんなの勿論――

「……………」

「……………姉弟子？」

……………返事。返事……………か。

どうしよう。あの夢の中で18歳の八一が授けてくれた作戦通りにするべきか。

それなら「告白はOKした。だから私、彼氏が出来たの♡」とか言うべきなんだろう
けど。

そのつもりだったんだけど……………でも。

「……………」

「……………ちよつと、黙ってないでなんとか言っておきよ」

八一が急かしてくる。けれども私の口からは次の言葉が出ない。

これは所詮作り話だ。作り話の告白に対する作り話の返事をでっち上げるだけの事。
……………でも、それでも。

たとえば嘘で……………それを言うのは、なんか。

「……………っ」

考えてみるとこれは難しい話だ。

あの時18歳の八一は『私はクラスの〇〇くんとか付き合うからー』みたいな事を言えば即投了間違い無しだって言ってたけど、これは言う程に簡単な話では無いと思う。

だって、そんなセリフ……言えない。八一の前で……そんなこと。

自分の気持ちを裏切るような言葉……今でもこんなに、こんなに心が痛くなってるのに。

「……八一」

「はい」

「……えっと」

好きな人を前にして、別の人が好きだなんて言えるはずが無い。

ど、どうしよう、これは想定外だった。作戦の根幹に大きな欠点を発見してしまった。私の頭の中にいるJK銀子達も頭を抱えている。そんなイメージが見える。

けれども今更作戦を変える訳にもいかないし、となるとここは、ここは……！

「告白の返事は……まだ、してない」

「まだ、って……どうして？」

「その……か、考え中、だから」

私は絞り出すようにそう答えた。

というかそう答えるしかない。これでも自分的には良心が痛むギリギリのラインだ。

でもこの返しでは、こんな中途半端な答えじゃせつかくの劇薬の効力が下がっちゃうかも——

「か……考え中!?!」

「うん」

「か、考えるってなにを?!? なな、なんで、なにを考える事があるんですか!?!」

「なにをって……そりや色々な事よ」

あ、良かった。大丈夫っぽい。

ちゃんと八一は驚愕してくれている。信じられないとばかりに目を剥いた表情をしている。

告白を受諾する可能性をほんの少し匂わせただけでこれとは、八一の中での私はよっぽど恋色沙汰に無縁な存在だと認識されているのか。

……それとも。

やっぱこれって……この八一はもう、わ、わたしが、わたしの事が……。

「え、え、え。てか姉弟子……もしかして、そいつの事好きなんですか?」

「……さあ」

「さあ、ってなんすか。自分の気持ちなんだから分かるでしょうよ」

「……だって、よく知らないし」

「知らない？」

「うん。一応クラスメイトだけど、今まで話したりした事も無かったし……」
さすがに「好き」とは答えられない。

ので、ここは自分の気持ちを分かかっていないようなフリをする。

「ああ、なるほど。まあ姉弟子ならそういう事もあり得るか……」

私なら、という部分が気になるが……ともあれ八一は納得したようだ。

「で、でも、だったら答えは一つしかないじゃないですか」

「一つって？」

「そりゃあ……お断りでしょうよ。だって姉弟子、そいつの事全然知らないんでしょ？」

知らない相手と付き合ったりはしないでしよう」

「……そうね」

「でしょ？」

私が一旦同意する素振りを見せると、八一は見るからにホツとした表情に変わった。

「どうやらこいつは意地でもそっち方向に、私が告白を拒否する方向に持っていきたい
ようだ。」

「これってやつぱり……そういう事だよな？」

あの夢の中で18歳の八一が言っていた通りだって事だよな？

つ、つまり……この八一は、わ、わたしの事が……す、好きなわけで。

好きだから、私への告白を成立させたくない、……ってことだよ？　そうでしょ？

「……へへ。えへへ」

「な、なに？」

「う、ううん、別に？」

危ない危ない、気を抜くと顔がにやけちゃう。

でもやっぱりそうなんだ。18歳の八一が言っていた事は正しかった、さすがは本人。今も私の頭の中で成行きを見守ってくれている18歳の八一に感謝の言葉を送りたい気分だ。

「ま、成長した本人が私の味方に付いた時点であんたに勝ち目は無かったって事ね」

「は？　え、なんの話？」

突然の話にきよとんとする八一の一方、私は素知らぬ顔で「なんでもないわよ」と首を振る。

もはや状況は私の圧倒的勝勢。……だが、とはいえまだ勝ちが決まったわけでは無い。

18歳の八一が言っていた事が全面的に正しいのだとすると、この八一は私の事が好きで、けれどもその気持ちを実感していないという事になる。

だったらその気持ちこそ自覚させてやらないとね。そうしてこそその勝利というものだろう。ついでに言えばその為の劇薬なのだから。

「それで、えつと……知らない相手だから、付き合ったりはしないって話だっけ」

「はい。普通はそうでしょう」

「……どうかな」

「え？」

「知らない相手だからこそ……っていう考え方もあると思うけど」

だから私はそう答えた。

突然の告白に戸惑い「YES」と「NO」のどちらにも転びそうな状態の空銀子、の

フリをする。

「いや、えつ、知らない相手だからこそ……それ本気で言ってます？」

「うん。そういう理由で付き合い始めるような人達だつて居ると思うけど」

知らない相手だからこそ、付き合う。まあ、世の中にはそういう人達だつて居るだろ

う。

個人的にはそんな考え方はナシだと思うけど、この際それはどうでもいい。とにかく攻めて攻めて八一を揺さぶる事が大事だ。

「でもそんな、知らない相手を知りたいなら友達からでいいじゃないですか。てか姉弟

子……マジでそいつと付き合うつもりなんですか？

「だからそれは考え中だって」

「考え中って……」

私が曖昧な態度を取り続けているからか、呟く八一の眉間に皺が寄り出した。

恐らくこいつの思考としては、私がスパッと告白を拒絶するものだと思っていたのだろう。

告白を受けるのは論外として、こうして悩む素振りを見せる事すら想定外だったに違いない。

「姉弟子……」

だからこそ最初驚きが動揺に、そして動揺が苛立ちへと変わってきたのか。

もはや対局の事なんてすっかり忘れてそうな八一の表情はどんどん強張ってきて、

「それは……」

「ん？」

そして固い声で、言った。

「……駄目じゃないですか？ それは」

おまけの話 JS銀子のその後⑦

「……駄目じゃないですか？ それは」

駄目。そう言ってきた八一の顔は。

私がお付き合いするしないで揺さぶられた八一の顔には、その眉間には皺が寄っていた。

「駄目？」

「ええ。相手が誰だかは知らないけど、付き合うなんて駄目だと思いますけどね、俺は」

「駄目って、なんでよ」

「なんでって……」

私が尋ねると、八一はこちらを小馬鹿にするかのように軽く首を振って。

「そもそもね、俺達は奨励会員でしょう」

「む」

「奨励会員って事は修行中の身でしょう？」

姉弟子は将棋の修行をしている最中ですよ

ね？」

「それは……」

「だつたら修行中の身で恋愛なんかにうつつを抜かしている暇なんて無いっつーか、そんな事をしていちゃ駄目だと思えますけどね」

「……むう」

それは……そうかもしれない。八一の意見には確かに一理ある。

基本的に奨励会員に恋愛事はご法度だ。勿論そうじゃない人だつて居る、奨励会員であつても恋人を作つたり恋愛をしたりしている人だつて中には居るだろうけど、それもあまり推奨されるような事ではない。

八一の言う通り、私達はまだ修行中の身だ。将棋の道を志して師匠に弟子入りした……という訳では無かつたけど、とにかく奨励会員であるならプロになるまでは恋愛なんて二の次にして将棋に打ち込むべし、との意見には大いに頷ける。

「……けれど」

「ん？」

けれど……なんか、なんか。

なんか、難癖というか、いちゃもん付け方にムカついてしまうのは私だけだろうか。そりゃ正しいんだろうけど。正しいんだらうけどさあ。正しいからこそ……なんか

ムカつく。

こう言えば私が折れざるを得ないだろうという八一なりの打算が見える。そこがムカつく。

だってさあ、『駄目』ってなに？ なんなの？

駄目、じゃなくてほんとは『嫌』なんでしょ？ 嫌だからそういう事を言うんでしょ

？

だったら「姉弟子が誰かと付き合うなんて嫌です」ってちゃんとやってくればいいのか。

そうは言わないところがムカつく。正論を建前にして本音を隠すところがムカつく。

大体ね。「奨励会員に恋愛はご法度でしょう」なんて言っちゃダメだから。

そんなセリフをJC銀子の前で言おうものなら絶対ぶん殴られるからね？ 分かっ

てんの？

あのJCはまだ奨励会員だったのに八一と何度もキスをしちやってた。あんな姿を見せられた後に奨励会員に恋愛はご法度なんて言えたものか。

「……別に、そんな事ない」

「いやいや、あるでしょ」

「奨励会員でも恋人が居る人だって居るはずよ。それでプロになった人だってきつと居

る。その人の事も間違ってるって言いたいわけ？」

「そういうつもりじゃないですけど……」

ですけど、なんだ。文句があるならハッキリと言いなさいよね、バカ八一。

……って、私の頭の中でJ C 銀子が怖い顔をして怒っている。そんなイメージが見える。

一方でその隣に居るJ K 銀子はしれっとした顔をしているのが気になる。この様子だと案外J K 銀子は奨励会員の間は恋愛を我慢したのかも……詳しくは聞いてないから分からないけど。

「……でも」

「でも、なによ」

「でも、姉弟子はまだ小学生じゃないですか」

「だから？」

「さすがに早すぎますって。小学生の頃から恋愛にうつつを抜かして将棋を疎かにするなんて、そんなの絶対駄目だと思えますけどね」

「……っ！」

……っ、こいつ……！

駄目だ。今の言葉にはムカついてしまった、カチンと来てしまった。

なんなの？ それって私への当て擦りなの？ そうとしか聞こえないんだけど？

小学生の頃からどっかのバカに恋をしているこの私が大バカだって言いたいわけ？

「……将棋を疎かにはしてない」

「なりますって、絶対。恋愛なんか意識を削がれていたら自ずとそうなっちゃいますよ」

……悪かったわね。小学生の時から思いつき恋愛に意識を削がれちゃってて。

ほんとに……ほんとにこいつは私の地雷を踏み抜くのが得意なようだ。マジでムカつく。

私の頭の中に居るJK銀子達もキレそうな顔になってる。そんなイメージが見えてしまう。

「きつと師匠だって反対すると思いますよ。クラスの男子によそ見している暇なんてあるのかって、姉弟子の将棋への気持ちはそんなものなのかって言われると思いますけどね」

「くっくっ！」

……む、む、ムカつくうっ！

師匠だとか将棋への気持ちだとか、なんでこいつはそういう事しか言えないわけ!?

自分が嫌だから止めて欲しいって、そう言えいいの!!

ああムカつく。果てしなくムカつく。

私の頭の中に居るJK達もムカついたのか、隣に居た18歳の八一をタコ殴りにしている。

そんなシーンが頭に浮かんだ。それぐらい今の私はムカついている。

「……決めた」

「え？」

あまりにムカついたから、私は決めた。

「もう決めた。付き合う」

「なっ!？」

もう決めた! こんなバカは放つといて付き合ってやる!

相手が誰かは知らないけど、空想上のクラスメイトの男子と付き合っただけだか
らっ!

「ちよつと姉弟子!! そんなっ、急にどうしたんですか!？」

「うるさい。もう決めたから」

「な、なんで……てかなにをそんなムキになってるんですか!？」

「ムキになんてなつてないっ!」

そうだ、決してムキになつてゐるわけじゃない。

私は至って冷静だ。だってこんなムカつくニブちんのどバカ、こっちから願い下げだっ！

私の頭の中に居る銀子達が「ヤケになるんじゃないの！」と叫んでいるけど……知らないっ！

「あなたのおかげで決心が付いた。あんがと」

「っ、姉弟子、考え直して下さいっ！」

「やだ。もう決めた」

「姉弟子!!」

「私が誰と付き合おうが私の勝手でしょ？ あんたには関係無い」

「そ、れは……!!」

言われて、八一の表情が悔しげに歪む。

「そうでしょ？ あんたは姉弟子なんだから」

「……っ」

そうだ。こいつはただの弟弟子、こいつにとっての私はただの姉弟子だ。

私達の関係なんて所詮はそれだけなんだ。だからこいつは私の事を姉弟子と呼んでるんだ。

「……けどっ！ 大体さつきも言ってたけどよく知らない相手なんだよね!? そんなヤ

ツと付き合うなんて絶対に間違ってるって！」

「それでもいい。一応はクラスメイトだし、何事も経験だって言うし、付き合ってみないと分からない事だつてあるかもだし」

「なっ……！　　そ、そんなでいいの!?!」

「いいのよそんなんで」

そうだ。もうどうだつていい。どうせ作り話、そんな相手なんてどこにも実在してないし。

それより今日はもう八一の顔を見たくない。ムカついちゃってまともに話せる気がしないから。

「疲れたから休む。対局はあんたの勝ちでいいわ」

言いながら私は席を立つ。

この対局は——この勝負は私の負けだ。

用意していたとつておきの劇薬は毒性が強すぎて私の方が飲まれてしまった。

ああ……もう一度あの夢が見たいな。このまま眠ったらまたあの夢が見られないかな。

もう一度あの八一に、18歳の八一に会いたい。それで抱きしめて欲しい。頭を撫でて欲しい。

ここに居る超分からず屋で意地悪なバカ八一じゃなくて、あの優しく成長した八一に

とか思ってたら左手をバシツと掴まれて、

「——だっ」

うん？

「だ、だったら俺でもいいじゃんっ！」

「——え？」

……あれ？

なんか、聞こえたぞ？

「……え。なにが？」

「…………え？ あ、いや、俺、あの……」

八一の表情が、引き攣ったままの顔で固まってる。

立ち去ろうとする私の手を慌てて掴み取って、脊髄反射の如く口走ってしまったよう

な。

それで自分が言った発言に自分自身でビックリしている。今の八一は表情をしてい

て。

「……いや、あの」

「なに」

「だから……ね？」

「うん」

「……その、ほら、よく知らない相手でもいいなら、それともう誰でもOKって事ですよね？」

「まあ、そうかもだけど」

「だったら……ね？ それなら例えば、俺とかでもいいのでは……と、思ったり？」

「……ふえ？」

誰でもOKなら？ 八一でもいい？

いやそりゃいいけど。別に構わないけど。

ていうかそれがいいっていうかそれこそが最高なんだけど……ふえ？

……ふ、ふええええええ！

な、なななにそれ!? なんか、なんか急に八一がデレ始めたんですけど!?

なんなの!! なんの奇跡なのこれは!?

「……え。付き合うって話だよね？」

「……まあ」

「……え、え、や……やいち、と？」

「……ま、ほら、一例、として？　みたいなの？」

答える八一は見るからにテンパった表情をしている。ついでに言う顔全体が赤い。自分でも何を言っているのか、なぜそんな事を口走っているのか理解していないような顔。

……案外、劇薬はこいつにもちゃんと効いていたのか。

「な、なにそれ。あんた……わ、わたしと、わたしと……」

「いやあのつ、なんか姉弟子の言い分を聞いているとですね！　なんか相手は誰でもよくて、単にお付き合いを経験してみたいって言っているようにも聞こえてますね！？」

「それ、は……そう、かも？」

私、そんな事言ったっけ？

……言ったかな、言ったのかも。正直途中から勢いで喋っていたのであんまり覚えてない。

そもそもそんな相手は居ないし、そんなつもりだつて無いし。これは単なる作り話、口から出まかせだったただけ……まさかそれが功を奏したのか。

「で、でしょ!?　でもそういうのは良くないっていうか、ほら、そんな軽い気持ちでお付き合いを受ける相手の男の子だつて可哀想でしょ!？」

「それは、まあ……」

「だったらそこはほら、後々面倒な事にならない為にも、事情を理解している俺とかで手を打っておくのも……一案ではないかと思ひまして……」

「……ふむ」

ええと……私が誰でも良さそうに見えたから？

だったら自分でもいいんじゃない？ その方が他人に迷惑が掛からないから？
的
な？

……まあ、理屈は分かる……ような？

いやでもこれって、すつごく面倒くさい感じに言ってるけど要はこれって――

「……ねえ。それって告白？」

「いやあの告白っていうか……そういう選択肢もあるかなーって思っただけで……」

「……………」

……なぜそこで言葉を濁す。ばか八一め。

あともう一步なのに。今のセリフを告白だつて認めればそれで終わる話なのに。

私のトキメキを返して欲しい。ああ、私の頭の中の銀子達もガツカリしちゃってる。

……が、しかしだ。

とはいえ、これは……。

「だってほら、姉弟子。よく知らない相手と付き合うって不安な事もあると思うんですよ」

「……まあ、そうかもね」

「でしょ？ だったら……ねえ？ それならよく知っている相手の方が……良いですよ
ね？」

「……でも、私をよく知ってるそいつは……時折私の事をめちやくちや苛つかせてくる
んだけど」

「そ、それは……」

一瞬、八一は言い淀んだ様子を見せて、

「……いい、いやでも、でもほら、それもさっき言ってみたにき、付き合ってみないと
分からない事だってあるかもしれないですし？」

「ま、まあ……」

「だったらねえ!? それを知ってみるのだから一つの選択肢と言えなくもないですし
!？」

な、なんかスゴいぐいぐいと来る。ここに来て八一の押しがスゴい。

でも、そのくせ告白とは認めようとしない。八一は自分の気持ちを明かそうとはしない。
い。

なんだろう。もしかしてこいつの中には私を好きだと言えないルールでもあるのだろうか。

「ど、どうです?」

「どうって……な、なにが」

「だから……誰かとお付き合ひする前に、身近な相手に試してみるってのは」

「……え、えっと」

ど、どど、どうしよう。

正直なんでこんな展開になっているのか、話の流れがもうよく分かんないんだけど。

でも、これは願ってもない話だ。

ここで頷くだけで私の本願が叶う……って、そう思っちゃってるのは確かなんだけど。

でも一方で、ここまで来たなら八一からちゃんと告白されたい、という思いもある。

こんな回りくどい言い方じゃなくて、ビシッと直球でカツコよく来て欲しい。

それこそあの18歳の八一みたいに……と、そう思ってしまうのもまた事実で。

「どうします?」 俺は……あの、別に、ぶっちゃけどっちでもいいっすけど」

「……む」

——俺はあ、正直興味無いけどお。でも姉弟子がどうしても言うならあ、まあ?

みたいな顔をする八一。あくまで自分には気のないフリをしている。この期に及んでも。

「……む、む、む……」

どうする。ここで意地を張らずに私が折れるか。それとも意地つ張りな八一が折れるまで粘るか。

最後の一手は……私の選択に委ねられた。

「むむ、むむむう……」

「……っ」

目の前にいる八一と。

私の頭の中に居るJK銀子達と、そして18歳の八一が固唾を飲んで見守る中。

ここで私が出した答えは――

「……分かった」

「あ……」

「じゃあ、八一でいい」

私は……折れる事にした。

勝ちを拾った。けれども私の攻め手で八一を詰ませる事は出来なかった。

試合には勝って勝負には負けたような形だけど、でも……うん、これでいいの。

「え、あ……良いんです……か？」

「……うん。いいけど」

「……マジで？」

「……まじで」

そう、マジだ。だって私は姉弟子だから。

こいつはこういうヤツなんだ。八一がバカで頑固で意地っ張りなのは最初から分かっていた。

だから……だから、ここは姉弟子の私が仕方なく折れてあげるのだ、仕方なく。

っていうかね、なんか分かつちやった。多分だけどこれはまだ無理なんだね。

こいつが自分の気持ちを自覚するには、それでビシツとカツコよく告白してくれるには、まだまだ成長が足りないって事なんだろう。

13歳のダメダメ八一が優しい八一になるまでにはそれなりの年月が必要なんだね、きつと。

「あんたの言う通り、よく知らないクラスメイトより身近なバカの方が扱い安いのは確かだし。この際そつちでも構わないっていうか」

「だから……つ、付き合う？」

「……まあ、ものの試しに?」

あう、うう……だめだ。恥ずかしくて八一の目を見られない。

視線を真横に向けながら私が答えると、八一がごくりと喉を鳴らす音が聞こえた。

こうして私は八一と付き合う事になった。

なんでこんな流れになったのか、さっぱり分からないけどいつの間にかそんな事になった。

私の頭の中に居るJKとJC銀子が「まさか小学生の内に付き合うなんて……」「これって最速記録じゃない?」とか呟いてる。

私としてもこの結果には正直びっくりなんだけど……ま、決して悪くはないから良しとする。

「じゃあ八一、そういう事だから」

「そ、そういう事って?」

「だから……そういう関係になったんでしょ?」

「あ……はい」

まあ、相変わらず八一はこんな調子だし?

私達が付き合うっていても、あんまりそれっぽい関係にはならないかもだけど。

もしかしたら子供のお遊びの延長線上なのかもしれないけど……でもほら、それでも

既成事實は大事だからね。電光石火、先手必勝、早い者勝ち、勝てば官軍だ。

「……つ、つまり」

「ん？」

「こつ、恋人つて……こと、ですよね？」

「……ん」

高く上擦った声。それに頷きを返して、見つめ合う八一と私。

八一の顔は赤い。そして私も顔がとつてもあつい。きつと似たような顔になってる。

なんか……なんか、とつても恥ずかしい。

考えてみると……私も八一に「好き」とは言つてない。ちゃんと告白はしていないわけ。

これは八一の事をどうこう言える立場では無いのでは……と思いはすれど、でもいいのだ。

だつて私は姉弟子だから。告白するのは弟弟子の役目なのである。そうでしょ？

だからいつか、いつの日か八一にちゃんと告白して貰おう。

あの八一みたいに、優しくカツコよく成長した時に改めてその言葉を聞きたいな。

少なくともプロ棋士になるまではお預けになると思う。私達はまだ修行中の身なのだから。

「八一」

「なに？」

「浮気したらぶちころすから」

「はっ、はい！」

「あそうだ、それも直してよね。その敬語と、姉弟子っていう呼び方」

女王のタイトル獲得後、突然八一が他人行儀な態度を取るようになった事。

元はと言えばこれが原因だった。私はこれを止めて欲しくて、色々と試行錯誤した結果、どうしてか八一と付き合う事になった訳だけど……それでも本題を忘れてはいけない。

「もうそういう関係になったんだから、敬語を使ったり姉弟子って呼ぶ必要は無いでしょ？」

「それは……そうですけど。でも、これは……」

「……分かってる」

「え？」

「分かってるから。あんたの言いたい事は……」

タイトルを取って以降、ここ一ヶ月の間で私は将棋関係のお仕事を沢山経験した。

公の場に出る機会が増えた事で、八一の言いたい事も理解出来るようになった。そ

そろ棋士としてある程度分別を持たなければならぬ、と八一はそう言いたいのだろう。

同門の先輩とは目上の相手だ。目上の相手であれば敬語を使う。そういったルールは守らなければ棋界の品格が落ちてしまう。

だから八一は私を「姉弟子」と呼ぶ。いつまでも「銀子ちゃん」と呼ぶ訳にはいかないのだ。

「でも……だったらせめて二人きりの時は元通りにして。それなら良いでしょ？」

「二人っきりの時か……うん、それなら」

「よし。約束だからね」

人前では敬語を使うけど二人の時は普通に話す。妥協案としてはこれがベストだろう。

大体ね、18歳の八一は私の事を「JS銀子ちゃん」って思いつきり呼んでたからね。あれだつて本当なら「JS姉弟子」とかって呼ばなければいけないはずだ。

成長した八一が私の事を銀子ちゃんって呼んでいる以上、棋界の品格どうこうはプライベートな時まで杓子定規に考える必要は無いはずだ。

「じゃあ八一、前みたいに呼んでみて」

「……うん。その……銀子ちゃん」

……その言葉を耳にした瞬間、ふっと身体が軽くなったような気がした。

ああ、やつとだ。やつと八一から元の呼び名で、「銀子ちゃん」って呼んで貰えた。

「……八一。一発叩いていい?」

「えっ」

「それぐらいの権利はあると思うんだけど」

「……え、ええつと……」

「……ふん、まあいいわ。せつかくの付き合いたてだし今日はサービスしてあげる」

たったこれだけの事なのに。これだけの事なのに一ヶ月以上も費やしてしまった。

ほんとおバカな八一に散々に振り回された一ヶ月間だった。あー疲れた。

「……あ、そうだ」

とそこで唐突に八一が顔を上げて。

すぐに立ち上がると自分の机の引き出しの中から何かを取り出した。

「あの……これ」

「これは?」

差し出されたのは……ポケットに入るぐらいの小さな紙袋。

「これ、銀子ちゃんにプレゼント」

「プレゼント?」

「うん。本当は女王のタイトルの獲得した記念に渡そうと思ってただけ……ほら、その、タイミングを逃しちゃって、それで……」

「そうなんだ……開けていい?」

「うん」

八一が頷くのを見て、私はその紙袋を開く。

「……あ。これ……」

その中であつたのは……銀色に光る雪の結晶の形のブローチ。

J C 銀子の頭にも、J K 銀子の頭にもあつたもの。私の頭にはまだ無かつたもの。

「その、大したものじゃないんだけどさ、でも銀子ちゃんに似合うかなって思って、それで……」

「……うん」

そっか。J C と J K が揃って身に付けていたこれは……私が女王を獲得したご褒美だったんだね。

……嬉しい。八一が選んでくれたブローチ。他のどんなプレゼントよりも嬉しい。

「八一。これ、私に付けて」

「えっ、俺が?」

「うん。八一に付けて欲しい」

「……分かった。どこに付けければいい？」

「カチューシャの上に付けて。髪飾りみたいになるように」

J K 達お手本通りの位置にお願いすると、八一の手が私の頭に伸びてくる。

壊れ物に触れるかのような優しい手付きで、カチューシャの上に雪の結晶が重なった。

「はい、出来たよ」

「ん」

こうして小さな銀の華が私の頭にも咲いた。

これで J K 達とお揃いだ。ようやくあいつらに一步近付いたような気がする。

振り返ってみると、今回の一件は J K 銀子達の協力無しでは解決出来なかった。

ちよつとムカつく所は多々あるものの、さすがは成長した私だけあって J K 達は頼りになる。

私も早く高校生になって、八一相手にあれぐらいビシバシと言えるようになりたいものだ。

「ねえ八一、どう？ 似合ってる？」

「うん。似合ってるよ」

「……………」

「あれ？ 銀子ちゃん？」

「……それだけ？」

「えっ、と……あの、うん、似合ってる、よ？」

「……むう」

……そして、こいつも。

この八一はまだダメダメ八一だからね。一刻も早く成長してくれる事を願うばかりだ。

具体的に言うところで「可愛いよ」って言うてくれるぐらいには成長して欲しい。それぐらいは要求したってバチは当たらないはずだ。

「ま、安心しなさい。この私がちゃんと教育してあげるから」

「え、教育ってなんの話？」

「あなたが真人間になる為に必要な事よ。じゃないとあなたは一人で勝手に訳分かんない方向に進み始めちゃうからね。突然に私を姉弟子って呼び始めたみたい」

「うう……って、ごめんね？」

そう、私は姉弟子。

おバカな弟弟子を決して見放さず、根気よく手を焼いてあげるのも姉弟子の役目なのである。

その時ふと……私の頭の中にいるあいつらが、仲直りした私達を見て、JK達と18歳の八一が目を細めた。そんなシーンが頭に浮かんだ。

おまけの話 幼女銀子のその後

「……むにゃ」

と、可愛い寝ぼけ声。

「……んにゅ？」

ゆっくりとまぶたを開いて、小さなおててでおめめをこしこし。

どうやら目を覚ましたようですね。その子はむくりと身体を起こします。

「……ふああ」

小さなお口を大きく開いてあくびをしたこの子の名前は空銀子ちゃん。

4歳の幼女、将棋が大好きなとてもかわいい幼女です。

「ん……」

さつきまでやすやすと眠っていた銀子ちゃん頭の中心に残る光景、それは。

お昼寝から目覚めて早々ぼつりと一言眩きます。

「……むう。またあのゆめか」

あの夢。それはとても不思議な夢。他の夢とは一味も二味も違うおかしな夢。

銀子ちゃんはこの最近、そんな不思議な夢を見る事が多々あります。

そこには成長した自分自身である『じえーえす』がいます。こいつは小学生です。

そしてじえーえすよりも成長した『じえーしー』もいます。こいつは中学生です。

更にはじえーしーよりも成長した『じえーけー』だっていたりします。こいつは高校生です。

そこにはどうしてか銀子ちゃんが沢山いて……そして更にもう一人。

それは今も。銀子ちゃんの隣で仲良く一緒にお昼寝をしていた男の子。

「ん……あ、銀子ちゃん、おはよ」

「やいち」

この子の名前は九頭竜八一くん。

銀子ちゃんと同じように将棋が大好きな6歳の少年です。

ついでに言うとおまけの銀子ちゃんの弟弟子です。つまりは格下です。下っぱです。家来なのです。

そして先程の不思議な夢の中には、今よりも大きく成長した八一くんもいたりします。

自分を含む四人の銀子ちゃん達と八一くんが出てくる夢。妙に現実感のある不思議

な夢です。

ちよつと手狭なワンルームマンションの一部屋でみんなと一緒に生活をして。

将棋を指したり、将棋を指したり、他にも将棋を指したりと色々な事をして。

そして次に見た夢の中では、じえーしーと17歳の八一くんのイチヤつきを見せられたりして。

そしてつい先日は、じえーえすと12歳の八一くんの仲違いを解決したりもしました。

「まったく、あいつらはほんとに手間がかかる」

「銀子ちゃん、あいつらつてだれのこと？」

「じえーしーとじえーえす。あいつらはわたしがついていないとダメダメでこまる」

年上の銀子達はどうにもダメダメなようです。銀子ちゃんはやれやれと首を振りま
す。

一方で事情を知らない八一くんは「だれそれ？」と首を傾げます。

ともあれ。銀子ちゃんは最近そんな夢を見るようになりました。

勿論それは夢です。現実にはじえーけーやじえーしー達がいるわけではありません。

そんな事は銀子ちゃんだつて分かっています。あれはただの夢でしかありません

……が。

「……ううむ」

「どうしたの、銀子ちゃん？」

「……じい」

「ぎ、銀子ちゃん？」

「じい……」

じいーつと見つめる銀子ちゃん。

その瞳の先にいるのは……まだまだ幼い顔付きをしている六歳の八一くん。

あれはただの夢でしかありません。ですがあの夢を見た事による影響は別です。

特に4歳の銀子ちゃんにとって、体感で一ヶ月以上にも及んだ夢の日々は濃密なものでした。

そのせいあってかあの夢を見て以降、銀子ちゃんにはちよつとした変化がありました。

「……」

「……あの」

その一つがこれです。

「……」

「……ねえ」

「……………」

「ねえねえ、銀子ちゃん」

困惑顔な八一くん。身動きが取れずに窮屈そうにしています。

「なに？」

「ちよつとさ……近くない？」

近くない？ と尋ねる八一くんのすぐ隣には銀子ちゃんが居ます。

いいえ、これはもはやすぐ隣なんていうレベルの距離ではありません。

言わば息の掛かるような距離です。互いに接触面積だらけです。空間的隔たりはほ

ぼゼロです。

「銀子ちゃん」

「ん？」

「どうしたの？ 寒いの？」

「ううん。そんなことないけど」

銀子ちゃんは八一くんにくっついていました。

両手を腰に回してピタリと密着していました。ぎゅーつと抱きついていました。

「これ、ちよつと動きにくいんだけど」

「そう」

「うん」

「……………」

「……………え？」

「ん？」

「いや、ん？ じゃなくて……………ほら、これ動きにくいからさ……………」

「離れないの？」と言外に尋ねる八一くん。

銀子ちゃんは「離れないけど。文句あんのか？」とアイコンタクトで返事をします。

「いや、あの、ほら、ちよつと近いし……………」

そのアイコンタクトの距離がまた近過ぎて、恥ずかしくなった八一くんは顔を背けます。

「そう」

それでも銀子ちゃんは知ったこつちやないとばかりに密着するのを止めません。

「やいち。たいきよくする」

「えっ、対局って、このままっ……………」

「うん」

こくりと頷く銀子ちゃん。

これが変化の一つ。ここ最近の銀子ちゃんは八一くんにべったりなのです。

将棋の時も。ごはんの時も。なにをする時もずっと、八一くんにくつついたままなのです。

「おお八一。いつの間にやら随分と銀子に懐かれたみたいやなあ」

「う、うん……なんかよく分からないんだけど銀子ちゃんがさ……」

「なんや銀子、八一の事が気に入ったんか」

「べつに」

自分達に対しては野良猫のように懐かない銀子ちゃんが八一くん相手にはべったり。

その姿に二人の師匠である清滝鋼介も目を丸くしますが、銀子ちゃんは一向に素知らぬ顔です。

これはあの不思議な夢を見て、その中で大きくなった八一くと出会った事による影響です。

成長した18歳の八一くんは一番小さい銀子ちゃんの事が大好きなようで、あの夢の中で暇さえあればスキンシップを図ってきました。

何度もぎゅーってされたり、高い高いされたり、一緒にお昼寝をしたりと沢山触れ合いました。

そうしたスキンシップを銀子ちゃんも最初こそは面倒くさそうにしていたのですが

……しかし。

「……いいい」

「いい？ なにが？」

「これ」

「これ？」

しかし。次第に銀子ちゃんの方もハマってしまいました。

夢の中で八一くんの温もりを知って以降、どうやら病みつきになってしまったようです。

「……銀子ちゃん。ちよつと立ちたいんだけど」

「ん」

八一くんが立ち上がろうとすれば、密着している銀子ちゃんも一緒に立ち上がりま

す。

「……銀子ちゃん。これ歩きにくくない？」

「べつに」

「そ、そっか……」

「しかしなあ銀子、さすがに外では普通に歩いた方が……転んでも知らんぞ？」

「だいじょうぶ。手を繋ぐよりもあんぜんだし」

「そ、そうか……」

何処に行くにも当然くつついたままです。

八一くんは何を言われても、師匠に何を言われてもそのスタンスを変える気はありません。

「……銀子ちゃん、ちよつとトイレ……」

「ん」

「いやあのね、『ん』じゃなくてさ……」

何処に行くにも当然一緒です……が。

しかしトイレにまで付いてこられるとさすがの八一くんも困ってしまいます。

「ねえ銀子ちゃん」

「ん？」

「これ、まだ続けるの？」

八一くんが尋ねると、相変わらずの超至近距離で銀子ちゃんは「うん」と頷きます。

「でもさ、さすがに——」

「だいじょうぶ」

「え？」

「飽きたらやめるから」

「……そっか。それなら、まあ……いつか」

飽きたら止めるとの事だし、それならもう少しだけ付き合っただけだろうか。

気まぐれな銀子ちゃんの事だ、どうせすぐに飽きるだろうし……と考えた八一くんはそれ以上何かを言うのを止めました……が。

しかして飽きる日など訪れるのでしょうか。

あの夢の中にいた銀子ちゃんズを見る限り、少なくとも銀子ちゃんがじえーけーと呼ばれる年齢になるまでは、八一くんの温もりに飽きる日などは訪れないでしょう。

となると八一くんはとても早まった選択してしまったかもしれませんが……それはまた別の話。

とこのように、銀子ちゃんが八一くんの温もりにドハマリしたのはあの夢の影響です。

その結果、四六時中くっついてくる抱き付きたがりな銀子ちゃんが出来上がりました。

4歳の時点でこれでは将来どうなってしまうのでしょうか。将来の八一くんの気苦労が偲ばれます。

そしてまたある日の事。

銀子ちゃんは突然こんな事を言ってきました。

「やいち」

「なに？」

「きすする？」

「ぶっ！」

思わず八一くんは吹き出してしまいました。

それぐらい聞こえてきた言葉が衝撃的でした。ビックリ仰天でした。

「き、き、ききっ、きしゅ!」

「うん。きす」

「き、きすつて、そんな、そんなそんなそんな、そんな……!」

銀子ちゃんと——きす。

そんな事を考えて一瞬で顔が真っ赤になった八一くんの一方、

「すする？」

銀子ちゃんはこてりと首を傾げます。

これもあの夢を見た影響です。きっかけになったのはじえーしーの夢。

じえーしーが17歳の八一くんとキスをするかしないかで悩む姿を見て以降、銀子

ちゃんもキスというものに興味が湧いてきたようです。

銀子ちゃんはキスが気になるお年頃なのです。とつてもおませさんなのです。

「え、でも、き、き、きすつて、でもぼく、ぼくまだそんな、あの……」

「しないの？」

「え、ええ、ええええ……！」

しないの？ と尋ねる銀子ちゃんの瞳はまさに無垢そのもの。一切の穢れがありません。

この銀子ちゃんはまだ自らの気持ちというものを自覚していません。キスの意味も、そもそも誰かを好きになるという事すらよく分かっていません。

だからこんな事も言えてしまいます。そういう意味では無敵の銀子ちゃんなのです。

「でつ、でも、ぼくたちまだ子供だし、キスなんてしちやいけない年齢だし……！」

「そうなの？」

「えつ、あ、いやでも、でもべつにそんな事はないのかな!? うん、そんな事はないかも！」

「そうなの？」

「う、うん！ だからあの、あの、つまり銀子ちゃんがしたいっていうなら、その——！」

——し、しようか!?

と、八一くんが答えるよりも一瞬早く、

「やっぱいいや」

銀子ちゃんはスツとそつぽを向きました。

「ええっ!?!」

「ん?」

「……いい、いいの?」

「うん。いい、やめた」

「あ……………そう……………」

あつさり興味を失った銀子ちゃんをよそに、八一くんは呆然とした表情で呟きます。

「……………銀子ちゃん、ほんとにいいの?」

「うん」

「……………ほんとにほんと?」

「うん。いい」

銀子ちゃんの気持ちとしては「ちよつと気になるからしてみようかな」程度のもので
す。

けれども八一くんがあんまり乗り気じやないみたいなので止めたようです。銀子
ちゃんは相手の気持ちを理解出来るお利口さんなのです。

「……………」

「やいち。たいきよくする」

「……………あ、うん……………」

一方で…………キスを逃した八一くんは。

攻めると見せかけて引く。銀子ちゃんの無垢が故の天然小悪魔ムーブに翻弄された八一くんの表情には生気がありません。その頭の中では様々な感情がぐるぐると渦巻いています。

先程「きすする？」と尋ねられた時、あれは千載一遇かつ絶好のチャンスだったので
は？

あの時即座に「する！」と答えていれば銀子ちゃんとキスする事が出来たのでは？

そうしたら今頃自分は銀子ちゃんとのファーストキスを体験出来ていたのでは？

そう思ってももはや後の祭りです。

バカ！ バカバカ！ ああもうなんですすぐにキスするって答えなかったんだぼくの

バカあ!!

…………と自らの判断の遅さを海よりも深く後悔をした挙げ句、八一くんはこの一件を長らく引きずる事になりますが…………それもまた別の話。

とにかくこのように、あの不思議な夢を見た事で銀子ちゃんには様々な変化がありました。

抱き付くのが好きになったり。キスに興味を持ってみたり。まだ幼い銀子ちゃんはその分色々影響を受けやすいようです。

そして……そんな日々が続いた結果。

「……ねえ、ねえ、銀子ちゃん」

「なに？」

「ぼく、分かっちゃったよ」

「？」

ある日、遂に八一くんは気付いてしまいました。

だってだって、ここ最近の銀子ちゃんの様子はあまりにも露骨でした。

自分のところにべったりとくっついてきたり、突然「キスする？」とか尋ねてきたり。

「これは……そういう事だよね」

「そういうことって？」

「……へへっ」

八一くんの口元にはにんまりとした笑みが浮かんでいます。

これ程あからさまな態度を続けられたらさすがの八一くんだって気付くのです。

今もくつついてくる銀子ちゃん。その気持ちは、これはつまり……つまり。

——銀子ちゃんは、ぼくの事が好きなんだ！

18歳の自分に先行する事12年、6歳の八一くんは早々その答えに辿り着きました。

おまけの話 幼女銀子のその後②

——銀子ちゃんは、ぼくの事が好きなんだ!

18歳の自分に先行する事12年、6歳の八一くんは早々その答えに辿り着きました。

「そうなんだね、ふふふ……!」

絶対にそのはずです。そうに違いありません。

だからこそ、八一くんは言いました。

「銀子ちゃんっ! 銀子ちゃんはさ、ぼくのことを好きなんだね!」

「ううん」

銀子ちゃんはノータイムで首を横に振りました。

「えッツ!?」

「ん?」

「…………え。…………ち、ちがうの?」

「うん。ちがうけど」

どうやら違ったようです。

銀子ちゃんは一ミリも表情を変えずに答えます。

「…………あ、そう…………」

一方で見事に読みが外れた八一くんは力の抜け落ちた表情で呆然と眩きます。

「…………そ、そう…………なんだ…………」

やってしまいました。八一くんはやらかしてしまいました。

ぼくの事が好きなんですよ? と尋ねておいて即否定されるのはとてもこっ恥ずかしい事です。

しい事です。

自意識過剰が故の自爆です。赤っ恥です。ヤバいです。八一くんの心の傷が一つ増

えました。

「…………そっか。銀子ちゃんはぼくのが好きじゃないんだ。そっかあ…………」

「うん」

「…………はは、ははは…………」

目の前にいる小さな女の子は…………特に自分の事が好きなのではない。

知りたくなかったその事実を知って、八一くんは乾いた声で自嘲気味に笑います。

「……ああ、なんか駄目だ。ぼく吐き気がしてきたから……ちよつと横になろうかな……」

「でも」

「……あ？」

ですが、銀子ちゃんの攻勢はこの程度では終わりませんでした。

「でも。やいちはわたしのこと、好きでしょ？」

「ええええ!!？」

——わたしのこと、好きでしょ？

まさかの質問を食らった八一くんは素っ頓狂な声で叫びました。

「えつ、な、え……ッ！」

「わたしのこと。好きなんでしょ？」

問い掛けというよりも「知ってるんだから」と言わんばかりな様子の銀子ちゃん。

こんなセリフ、長年恋心を拗らせまくっているじえーけー達には到底言えないセリフです。

しかし4歳の銀子ちゃんは無敵です。無敵なのでこんなセリフも平然と言ってしま
うのです。

「えっ、いや別にそんな、好きなんてそんな!？」

「好きなんですよ？」

「いやだからそんな、別にぼくは……ぼくはそんな銀子ちゃんのことなんて……」

「ごまかすな」

「ごまかしてないよっ！ ぼくだって別にその、ふ、ふ、ふっうだからっ！」

八一くんは真つ赤な顔で答えました。

あくまで普通。ここで普通と答える所に複雑な少年心が見え隠れしています……が。けれども銀子ちゃんは納得してくれません。その灰色の瞳の奥をキラリと光らせま

す。

「うそつくな」

「うそじゃないよ！」

「うそ。好きっていつてたもん」

「い、言ってた？」

「うん」

「え、言ってたって……だれが？」

「やいちが」

「……えっ？ ぼくが？」

きよとんとする八一くんの一方、

「ん」

銀子ちゃんはこくりと頷きます。

どうやらこれもあの夢を見た影響のようです。きつかけになったのはじえーえすの夢。

じえーえすが13歳の八一くんと仲違いして色々と苦勞していたあの夢の中、銀子ちゃんは久々に18歳の八一くと再会する機会がありました。

そしてその時、銀子ちゃんは18歳の八一くから直々に「出会ったときから好きだった」とのお墨付きを貰っているのです。

出会った時からという事はつまり、この八一くはもう自分の事が好きだということになります。

「やいちが言つてた。やいちはわたしのことが好きなんだから」

「いやあの、ぼくそんな事言つてない……」

「うそつけ。はくじようしろ」

「白状もなにも、べつにぼくは、そんな、あくまで普通つていうか——」

「ああん？」

言い逃れは許しません。

4歳の銀子ちゃんがメンチを切るかのようにその目元口元を歪めます。

「う、ううう……!」

弱々しく唸る八一くん。どうやら至近距離から銀子ちゃんに睨まれたので照れているようです。

たとえメンチ切った顔でも可愛く見えてしまうから困ったものです。八一くんの中には銀子ちゃんのどんな表情でも可愛く映ってしまうのです。これはそういう病気のようです。

ただでさえ八一くんにとって、銀子ちゃんというのは出会ったときからそういう存在でした。

かわいい。端的に言って可愛いのです。凶暴だけど可愛いのです。ただただ可愛いのです。

福井の田舎から出てきたばかりの純朴少年八一くんにとって、この可愛さはもはや毒です。

こんなかわいい女の子にぎゅーつと密着されたり「きすする?」とか聞かれたりして、それでもなんとか正気を保っていられるだけ八一くんも頑張っているのです。

「ま、まあその……別に嫌いじゃないよ? 嫌いじゃないけどね、でも——」

「それじゃあだめ。好きだといえ」

「え、ええ〜!?」

しかしどれ程に八一くんが頑張ったところで、この銀子ちゃんは無敵です。

あの不思議な夢の中で多くの事を知った無敵の銀子ちゃんを相手に、何も知らない6歳の八一くんが太刀打ち出来るはずがありません。

「いえ」

「……………」

「やいち。いえ」

銀子ちゃんがずいずいと迫ってきます。

「ほら。いいなさい」

「……………」

八一くんはのろのろと背後に退がります。

「やーいーち」

「ううううう……………」

銀子ちゃんにどンドン迫られて、とうとう壁際まで追い詰められました。

「……………」

もはや逃げ場はありません。

八一くんは真っ赤になった顔を斜め下に向けて、

「……好き、だけど」

ぼそりと答えました。

言わされた感は大いにありますが、それでも言ってしまった以上八一くんの負けです。

「よし」

と頷く銀子ちゃん。その表情には達成感と僅かな笑みが見えます。

こうして銀子ちゃんはあつさりと八一くんに「好き」だと言わせる事に成功しました。素晴らしいお手並みです。幼少の頃からの初恋を長々と熟成させた結果、両片思いなのに途轍もない時間が掛かったじえーしーやじえーけー達とは大違いです。さすがは無敵の銀子ちゃんです。

「……で、でもさあつ!!」

「なに?」

「ぼくは言ったんだからつ、だったら銀子ちゃんだって『好き』って言つてよ!!」

自分だけ好意を言わされて悔しいのか、真つ赤な顔で喚き立てる八一くん。

「やだ」

「なんで!」

「だってわたしはやいちのこと好きじゃないし」

「そんなのズルい！ ぼくは好きなんだから銀子ちゃんも好きじゃないとズルいー！」
好きという気持ちにズルいも何も無いのですが、そこはそれ。あくまで子供の理論で
す。

「ずるい？」

「うん！ ズルいよ！ 公平じゃないじゃん！」

「しるかそんなこと」

「そんなあ！」

ですがそんな子供の理論が銀子ちゃんに通用するはずもありません。

公平かどうかなんて知ったこっちゃなし。まるで取り付く島もありません。

「うう……ひどい、ひどいや銀子ちゃん……」

「ひどくない。これが現実」

「現実かあ……現実ってひどいんだね……」

「ん。現実はそのまんま」

このように随分とつれない態度を取る銀子ちゃんですが、本心なのだから仕方ありません。
せん。

その心の内にある感情も、幼い銀子ちゃんにはまだ理解出来ません。これは八一くん
の方も同様なのですが、理解出来ないものは当人にとって無いものと同じなのです。

「…………ふむ」

だからこそ銀子ちゃんは「好き」とは言わず。
だからこそ無敵でいられるのですが…………しかし。

「やいち」

「なに？」

「……………じい」

「…………ど、どうしたの？」

銀子ちゃんはじいっとその顔を眺めます。

「……………じい」

「銀子ちゃん？」

その瞳に映るのは年上の弟弟子、八一くん。

まだ幼いからか、どうにもなよっとした感じの頼りない顔付きをしています。

「やいち」

「な、なに？」

「やいちはもつとシャキつとしたほうがいい」

「シャキつと……………してないかな？」

「うん。だめだめ」

「そっかあ……」

しよんぼりとする八一くん。

ですが、これが将来は自分好みの優しい顔付きになる事を銀子ちゃんは知っています。

「ねえ銀子ちゃん。銀子ちゃんはぼくがシャキつとしてないから嫌いななの？」

「ううん。ていうかべつにやいちがきらいとは言ってない。すぎじやないだけ」

「うう……それ、あんまり変わらないような……」

「……でも」

「ん？」

そして……自分の気持ちも。

今は分からない大事な気持ちだって、実のところ銀子ちゃんはすでに知っているのです。

「いまはすぎじやないけど。でも……そのうちすぎきになるらしい」

「え……その内に？」

「うん」

「……ほ、ほんとに？」

「うん」

銀子ちゃんはこくこくと頷きます

それはあの不思議な夢の世界で、16歳の自分であるじえーけーから教えて貰った話。

「そのうちにやいちのことが好きになる。そういうびようきにかかるんだって」

「病気？」

「うん。びようき」

「え……ぼくを好きになることって病気なの？」

「うん。びようき。じえーけーが言ってたから」

将来、自分は八一くんの事しか考えられなくなる病気に罹ってしまうそうです。

そして好きになってしまいます。そんなまさかと思いはすれど、しかしあの夢の中で恋に思い悩むじえーしーやじえーえすの姿を幾度と見せられた以上、銀子ちゃんも受け入れざるを得ません。

「びようきはこわいけど」

「怖いの？」

「うん。でもびようきだからしょうがない」

それはとても恐ろしい病です。恋の病とは特効薬の無い不治の難病です。

銀子ちゃんはその病気に罹るのがとても怖いですが……が、しかし病気ならしょうがな

い
です。

今のところ全然全くそんな気配は無いのですが、病気とあつてはどうしようもありません。病気なんだから自分が八一くんを好きになつちやうのも仕方無いのです。

「病気……」

「うん。びょうき」

「ねえ銀子ちゃん。その病気っていつになつたらかかるの？」

「それはしらない」

「一年後ぐらいかな？」

「さあ？」

「半年後ぐらいかな？」

「さあ？」

「一ヶ月後ぐらいかな？」

「さあ？」

今でこそ平然としている銀子ちゃんも、やがてはそういう病気に罹ります。

そして病気に罹つた事で……その時から、銀子ちゃんは無敵ではなくなつてしまふのです。

あの不思議な夢の中で見た、じえーしーやじえーえす達と同じように。

自分の大事な気持ちに戸惑い、思い悩む日があつたかは銀子ちゃんにも訪れるのです。ですが……いずれ無敵でなくなつて、そうした病気に罹つてしまう事も、思い悩む日々も。

それはそれで悪くないものよ……と、その病気を克服したじえーけーならそう言うでしょう。

「じえあさ、銀子ちゃんがその病氣にかかつてぼくの事を好きになつたら教えてね」

「え……やだ」

「なんでっ！」

「なんかやだ」

なんかいやなので銀子ちゃんはそう答えました。

「……んにゅ」

するとその直後、銀子ちゃんのおめめがとろんとしてきました。

「……んう、やいち、ねむい」

「あ、お昼寝するの？」

「うん」

そろそろ幼女には必須となるお昼寝タイムです。

おねむになつた銀子ちゃんはそのままカーペットの上で丸くなつてしまいました。

「銀子ちゃん。身体に何か掛けて寝ないとまた体調わるくなっちゃうよ?」
「もつてきて」

「しょうがないなあ……えつと……」

立ち上がった八一くんは二段ベッドの中から毛布を引つ張り出します。

そしてそれを銀子ちゃんの身体の上にそつと掛けてあげました。

「はい銀子ちゃん。これで大丈夫? まだ寒い?」

「ん、だいじょうぶ」

「そっか」

「やいち」

「ん?」

「て」

「ああうん、はい」

すつと八一くんの右手が伸びてきて、銀子ちゃんの左手と重なります。

「ん……」

そしてちよつとだけ力を入れて握れば、銀子ちゃんの表情がふにやつと柔らかくなりました。
「……やいち」

「おやすみ、銀子ちゃん」

「うん……………すう」

その左手にある温もりを感じたまま。

銀子ちゃんはあつという間に眠りました。どんな時でも幼女は眠るのが早いのです。

「……………」

一方で八一くんも、その右手にある温もりも感じたまま。

さーて詰将棋の問題でも解くかなあと頭を巡らせ始めた……………そのすぐの事でした。

「……………ふわぁ」

その口から大きなあくびが。

どうやらおねむな銀子ちゃんに釣られて八一くんも眠くなつたようですね。

「ん……………」

「……………すう、すう……………」

「……………すやぁ」

そして、じきに八一くんも同じように眠ってしまいました。

銀子ちゃんの隣にくつつくような形で。

ぴたりと寄り添い合うような形で。

「……………すう、すう……………」

「くう、くう……」

仲良くその手を繋ぎ合つたまま。

まだまだ幼い銀子ちゃん和八くんは今日もすこやかに眠ります。

いつの日か、銀子ちゃんが恋の病に罹つてしまう日が訪れて。

そしていつの日か、その手を一度離さないといけない日が訪れるかもしれません。

お互いにそう望まなくても、そうせざるを得ない日がやってくるかもしれないかもしれません。

それでも大丈夫。二人の手が本当の意味で離れる事は絶対にありません。

銀子ちゃんも、和八くんも。二人の気持ちはこの時からもう繋ぎ合っているのですか

ら。

八月某日の空銀子

「いやあ、今日もあつついねー!」

コンビニへのおつかいから帰ってくるなり八一がそう言った。

時刻はそろそろ夕方、歩いて十分足らずの距離だというのにその額には汗が滲んでい
る。それを見れば先程の台詞が心から出た言葉だという事が察せられる。

「そうね」

注文していたアイスを受け取りながら、私はとりあえず同意しておく。

季節は夏、そりや暑い。とはいってもこの部屋は今も冷房がガンガンに効いているか
ら全然暑くないし、私は一歩も外に出ていないから今日の暑さを知らない、熱中症ア
ラートが発せられて外出する人々に警戒を促す程の過酷な外気温を実感してはいない
けど。

「もう連日の真夏日やら猛暑日やらの繰り返し、分かっていたけど今年の夏も本当に暑

いねー!」

「そうね」

「なんか聞いた所によると、近年の夏は二十年前に比べて平均気温が10度近くも上がってるんだって!」

「そうなんだ」

妙にテンションが高めな八一の言葉を適当に流しながらアイスを一口。うん、美味しい。

やっぱり夏はアイスね。夏に食べるアイスは結構好き。一方で八一はおつかいが好きらしいので頼めばどんなに暑い日でもアイスを買ってきてくれる。持つべきものは便利な弟弟子である。

「夏は嫌いじゃないけどさ、ここまで暑い日が続くとさすがに参っちゃうよね!」
「まあね」

八一は意外と夏を好む。きつと市民プールで水着姿の小学生を合法的に観察出来るからだろう。

ちなみに私は夏が好きではないので、こんな季節は早々に滅んでしまえと思ってる。

「で、さ」

「うん」

「こんな暑い日はさあ……アレだよね！」

「あれ？」

「アレだよ、アレ」

あれ。あれとは何か。

私が先を促す視線を向けると、八一は何かを掴むかのように丸めた右手を口元に当てて。

「キンキンに冷えたアレでさあ、こう……ぐいっといきたいよね!!」

言葉通りぐいっと、右手に掴んだそれを一気に飲み干すようなジェスチャー。

さて問題、一体これは何を表しているのか。私にはサツパリなんだけど、その答えはきつと共感する人も多いのではと思う。この季節は特に。

「ま、私にはサツパリ分らないんだけどね。なにそれ？」

「ビールだよビール!! こんな暑い日にはキンキンに冷えたビールを飲むしかないっしょ!!」

ビール、だって。八一の口から聞き馴染みの無い単語が飛び出してきた。

それが意味するところは一つ。私は出来るだけ優しく聞こえるような声で応えてあげた。

「……誕生日おめでと」

そう、つい先日の八月一日。その日はこいつ、九頭竜八一の誕生日だった。

その日を以て八一は一つ年齢を重ねて、今年でとうとう20歳になった。

それはつまり、お酒を飲んでも許される年齢になったという事である。

「ねえ銀子ちゃん銀子ちゃん、誕生日プレゼントは？」

「そうね、気が向いたらね」

「気が向いたら!? 誕生日プレゼントってそういうもんだっけ!」

「ええそうよ、そういうものなの」

四歳の時から一緒にいる相手への誕生日プレゼントなんてそんなもんよ。甘えてはいけない。

というか私がプレゼントに何を用意したとかはどうでもいい、今回それは大した意味を持たない。何故ならこの部屋にはもっと重要なものがすでに用意されているのだから。

「それよりもなに? 二十歳になったからってもう夏場にビール飲むような男になっ

ちやつたの? これじゃ師匠みたいな酔っ払い駄目オヤジになるのも時間の問題ね」

「いやあ……まあ正直さっきの流れはほほほほノリだったんだけど。ただ……」

すると八一は、ちよつと困った表情になって部屋の片隅に視線を投げた。

「あれをどうにかしなきゃなーってのはあつてさ……」

そこに鎮座するもの。それはこの部屋に來た時から私もずっと気になっていた。

そこにあるのは酒。酒だ。酒である。師匠の家で暮らしていた頃の夕食時によく目にしたお馴染みのビール瓶とか、私には銘柄が分からない様々なお酒の瓶やら何やらが所狭しと並んでいる。

先日二十歳になったばかりの男がもうあんな大量のお酒を買い込むだなんて。九頭竜八一、実はこいつとんでもない酒豪だったのか……つてのは冗談で。

「……貰ったの？ あれ全部」

「うん。二十歳の祝いといったらこれやー！ って感じで会う人会う人みんなお酒をくれた」

「そのシーンすっごい簡単に想像出来ちゃうところが嫌ね……」

という事らしい。あれ全部八一が知り合いから貰った二十歳の誕生日祝いだそうだ。ちなみにその内の一人はあのヒゲ師匠だという事には確信が持てる。

パツと見たところ日本酒とか焼酎が多いかも。私はお酒の知識がほぼ無いのでこれはただの直感なんだけど、なんとなくアルコール度数が高めなお酒が揃っているような気がする。

「なんかさー、普段はプレゼントどころか俺の誕生日すら知らないでしょ、みたいな人も

今回ばかりはちゃんとくれる人が多くてビックリしちゃったよ」

「ふうん、そうまでして二十歳になったばかりの人間にお酒を飲ませたいのかしら。大阪在住の中年オヤジにロクな人間はいないわね」

「いや全員が中年オヤジだったってわけじゃ……てかこれ後で聞いた話なんだけど、どうやら成人祝いも兼ねているんだって」

「成る程ね。こうやって酒を飲める人間を増やしていく事で酒飲みの輪が広がっていくのね。ほんと大阪在住の中年オヤジにロクな人間はいないわね」

成人祝いと称してお酒を贈られたら受け取った側は飲むしかない。祝い物を無碍には出来ないし、せっかく飲める年齢になったのだからと飲みたい気持ちだってあるだろう。

そうやって飲ませて酒に慣れさせて同類を増やしていくのが酒飲みの手口という訳だ。結論、大阪在住の中年オヤジにロクな人間はいない。

「でもこれは善意っていうかき、将棋の世界で生きていくなら嫌でも酒を飲む機会は訪れるからね。そこで潰れない為にも早めにアルコールには慣れておけってことなんだと思うよ」

「随分と好意的に解釈したわね。私はただ自分達に付き合える酒飲みを増やしたいだけだと思っわ」

「……まあ、それもあるだろうけど」

絶対に私の意見が正しいと思う。とはいえ八一が言っていた事も決して間違いではない。

祝いの席や飲みの席など、将棋の世界で生きていく限り何かと酒は付いて回るもの。とうか世の中で普通に働いている人だって多かれ少なかれそうなんじゃないのかと思っけど。

一応今は『アルハラ』なんていう言葉もあるぐらいだし、お酒が苦手な人に飲む事を強要するのはご法度な社会になってきているけれども、生憎と将棋界は古い世界なので飲まなきゃいけない時は飲まなきゃいけない。

「ところで八一、二十歳になってから少しは飲んでみたりしたの？」

「ううん、まだ飲んでない。ちなみに二十歳になる前でも飲まされた事なら結構あるけどね！」

だから別にお酒を飲むのは初めてではない。

とでも言いたいのでしょうけど、それ、いい笑顔で言う事じゃないから。

「俺はジュースを飲んでいるつもりだったのに実はお酒が混ぜられていたりとかさ、よくあるよねーそういう事って」

「うわー未成年飲酒とか。警察にバレて逮捕されればいいのに」

「大丈夫大丈夫、その場合逮捕されるのは未成年に酒を飲ませた悪い大人達だから」

八一の周囲には悪い大人がいるものだ。それが顔見知りでない事を祈るばかりね。

「酒飲み特有の悪ノリってやつなんだろうけどさ、こつちにも立場があるから辛いところだよね」

「……そうね」

避けられるのなら避けたいけど、中々そうもいかないんだよ。と八一の渋い顔が語っている。

特に八一は弱冠16歳という年齢で竜王位を獲得した。単なるプロ棋士ならまだしもタイトルホルダーともなれば出席しなければならない集いや催しが一段と増える。で、それらに参加しているのは基本オヤジ達ばかりなのでおのずと酒の席になる。

そこで未成年に酒を飲ませようとする悪い大人がいたとしても棋士側は上手に応対しなければならぬ。完全に無下にする訳にもいかないし、やんわりと断り続けるのにも限度がある。

要するに立場に付随する面倒な責務というやつだ。私も女流位を獲得した時から内容は違えども似たような経験をする羽目になった覚えがあるので、この点について八一を責める気にはならない。

「とはいえ俺もようやく20歳になったわけで、これで無理やり飲まされる日々にもサ

ヨナラ！ 今日からは自分の意思で好きに飲める！ だから飲む！ そう、飲むんだ！！」

「ま、別に飲むなどは言わないけどね。事実あんたは二十歳なんだし。けど……」

今日、ここには八一がいる。先日二十歳になったばかりの八一と。

「……わざわざ、ここぞ？」

そしてもう一人、ここには私がいる。

今年の誕生日を迎える前なので一七歳、まだまだお酒を飲める年齢じゃない未成年の私。

「うん。いやほら、そうは言ってもまだお酒には全然慣れてないし、一人きりの時に飲むのはなんかあつたら怖いじゃん？ その点今日なら銀子ちゃんが一緒だからちようどいいかなーって」

「だったら桂香さんや師匠と一緒に飲みなさいよね。どうしてわざわざ私と？ まだお酒が飲めない私の隣で自分だけ飲むってどうなの？ 性格悪いわよそれ」

「いやそれは……え、てかもしかして銀子ちゃんもお酒飲みたいの？ なら大丈夫だよ、今日からは俺が悪い大人になって飲ませてあげるから」

「いらぬ。死ぬ」

今分かった。こいつもだ。朱に交われれば赤くなるというように、大阪在住のロクでも

ない中年酒飲みオヤジ達に囲まれて育った八一の中にもその血は流れているのだろう。ああ、こいつもきつといつかは酒浸りの中年棋士になつて若い新人棋士にお酒を強いたりするのね。そうなる前に私がキツチリと引導を渡してあげよう。今決めたわ。

……え、私？

ううん、私にはそんな酒臭い血は流れてないから。あんなロクでもない酒飲み達と一緒ににしないで。

その証拠に私は今の所お酒を飲みたい気持ちはゼロだ。幼少の頃より酒でべろんべろんに酔っぱらつた師匠や桂香さんの姿を見てきた身としては、あんな無残な生き物と同類になりたいとは欠片も思わない。

少なくとも八一の前では飲みたくないわね。八一の前であんな醜態晒したらもうお嫁にいけなくなつちやう。

「まあいいわ、飲みたいつてんなら好きなかだけ飲みなさい。ただしあんたがフラフラになるぐらい酔つ払つたとしてもお世話なんてしてあげないから、優しく介抱してもらえらだなんて期待しない事ね」

「ははは……本当の事を言つちやうとね、ただ銀子ちゃんと一緒にいたいってだけなんだ」

えっ……。

「そりゃ酔っ払いの世話なら桂香さんが一番得意だろうし、せっかく二十歳になったんだから師匠と一緒に酒を飲み交わしたいなって気持ちもあるんだ。そういう機会もおおい作ろうとは思っているけど……」

私と目を合わせて、八一がふつと微笑む。

そうやって優しく私を見つめる表情が、私は、大好きで。

「今は銀子ちゃんと一緒にいたいよ。せっかくこうして一緒にいられるようになったんだ、今は銀子ちゃん最優先かなーって思ってたさ」

「八一……」

……しようがないなあ、もう♡

■
という事で。

「よし……つと。銀子ちゃんはミネラルウォーターでいいの？」

「うん」

栓抜きで瓶ビールの王冠を外して。一人分のグラスの中身を黄金色の液体で満たして。

一方で私が持つグラスにはお水。そしてテーブルの上には八一がコンビニから買ったきた数々のおつまみやポテチなんかが並べられて。

「それじゃー銀子ちゃん、かんぱーい!!」

「はいはい、乾杯」

キン、とグラス同士が交わる。

こうして二十歳になった八一と、お酒を飲めるようになった八一と初めて乾杯を交わした。

……最優先という事なら仕方が無いわね。付き合つてやろうじゃないの、恋人として。

わ。

「ぎんこちゃんー!」

この声。

随分とだらしなく間延びした、この声。

「ぎんこちゃんー!」

この声を愛嬌があると捉えるか、鬱陶しいと捉えるかは人それぞれだろう。

今日初めて八一のそれを聞いてみての感想だけど、私はとても鬱陶しいと感じた。

「ぎくぐんこちやぐん!!」

酔った。八一は酔った。

もはや分かり切っていた流れ、ここまで特段特筆すべき事項もない。

ただ普通に食べたり飲んだり話したりしていて、気が付いたらこうなっていた。

「ぎんこちゃん、ぎんこちゃん!」

「なに」

「お酒のんでるよ、おれ! いま!」

その言葉通りにグラスを掴んで、ゴクリと一口。

「ほら! おさけ! 飲んだ! いやあくすごいねえ大人だねえ!」

「そうね、すごい酔ってるわね」

「そうだね!!」

大口を開けてケタケタと笑う八一。何が面白いのか全然分からない。

なんか陽気だ。普段よりも遥かに陽気、八一は酔うと陽気になるタイプなのかしら。出来れば静かになつてくれるタイプのほうが有難かったんだけどね。

「いやあく、こうしてのむとお酒つてのも、こう……あじわい深いもんですなあ!」

「美味しいの?」

「おいしい!」

「へえ、そうなんだ。でもあんたさつき乾杯した時に飲んだビールは苦いだけでよく分かんない」とか言つてたけどね」

「ええ!!? まつさかあ! おれもうハタチなんすよ!!? ビールぐらいよゆうつすよ!」

そう言つて八一は新しいビール瓶に手を伸ばす。

すぐ手元にあるグラスにはまだビールが十分注がれているというのに、新しい瓶を開けようとする辺り明らかに判断能力が低下している。要するにバカになっている。

自分は飲めると言い張りたいのだろうけど、私から見れば酒に飲まれているようにしか見えない。

「ほらこれ、みてこれぎんこちゃんこれねくクラフトビールつて言つてね、ふつうのビールじゃないんだよこれ。すごいでしょオシヤレでしょ」

「そうだねオシヤレだね。でも八一、そろそろ飲むのは止めときなさい」

「ええ!!? なんでえ!!?」

「もう十分酔つてるじゃないの。これ以上あんたが酔っぱらうと本当に後処理がめんどくなりそうだからイヤ」

「そんなつ、そんな理由でおわりなんてやだ! もう飲み会終了なんてやだあ! せつ

かくぎんこちゃんとはじめての飲み会なんだからもつとたのしみたい、初めてのお酒をもつとたのしもうよー！」

酒瓶を抱えて駄々っ子のように首を振る八一。ウザい。

もつとお酒を楽しもうよー、とは言うけど私はまだお酒を楽しめる年齢じゃない。つてことをさつき言つたはずなのにこいつは理解していなかったのかしら。

お酒を飲んでいない私にとつては飲み会ではなくただ夕食代わりに酒のお供を摘まんでいるだけの会、そこに普段よりもめんどくさくなくなった八一に構つてあげなきやいけないこの状況を楽しめと言うつもりなのか。

「ていうかさ、酔つてるからつてダメつてなにさ！ いいじゃん酔つたつて！ お酒をのんだら酔うのはふつうじゃん！ 酔うのがたのしいんじゃない！」

「うるさい酔つ払い。酔つ払いはみんなそう言うのよ」

「酔つ払いだつていいじゃん！ おれもう二十歳だもん！！ はちだもーん！！」

「だもーん、とか言うな気持ち悪い」

「ひーどーいー！」

全然ひどくない。二十歳になった男が語尾を伸ばさないでほしい。マジでキモいから。

「うう、つめたいなあぎんこちゃんは。せつかく二人きりなのにー」

「冷たくないわよ普段通りでしょ。付け加えるとしたら二人きりだからって甘やかしてもらえると思つたら大間違ひよね」

「じゃあたんじょうび！ せつかくの俺のたんじょうび！ これならどうですか！」
「どうですかって何をどうも無いんだけど。そもそもあんたの誕生日はとつくに過ぎてるじゃないの」

せつかくの誕生日なんだから優しくしてよ！ とでも言いたいのだろうが知つたこつちやない。

酔つ払いを甘やかすとロクな事にならない、酔つ払いには毅然とした態度で接するのが大事。それを私は酔つ払つた師匠の世話を焼く桂香さんの姿を見て学んだのだ。

「やさしいーぎんこちゃんがいーいいなー」

「うるさい酔つ払い」

「やさしいぎんこちゃんがーおれはすきだなー」

「うるさい酔つ払い。ひつつくな」

ヘンテコな拍子の歌を歌いながら酔つ払いが引つ付けてくる。鬱陶しい。

これが酔つ払いの実態である。天下の竜王様もこうなってしまうと形無しね。

……ていうか。その、別にね、優しくしてあげるぐらい全然良かったんだけど。

でも今日の八一は酔つ払つてるからダメ。これで酔つてなければ優しくしてあげ

たつて良かったんだけど、なんか酔つてる八一に優しくしようものなら余計に調子乗りそうなんでもん。

「ぎんこちゃんー」

「なに」

「ぎんこちゃんぎんこちゃんー」

「ちよつと、なに、邪魔なだけけど」

鬱陶しい八一が引つ付いてきたと思つたらそのまま身体を密着させてきた。

そのまま力を抜いてだらーつと私に寄り掛かるような恰好。とても鬱陶しいわねと思つていたら、八一がその手を私の腰辺りに回してきて。

「ぎんこちゃんのおなかだ、おなかー」

お腹をもみもみ、もみもみと。

なんだこいつ、ぶつ飛ばしてやろうかしら。

「ぎんこちゃん、おなかだね」

「そうね」

「ぎんこちゃんつてさーおなか細いよねー」

「そうかもね」

「これさーもうちよつと太つたら？　なんか細すぎてしんぱいになつちやうよおれ」

「あんたね、女性に向かって太れとか言うんじゃないの」

「だめなん？」

「駄目に決まってるでしょ、バカ八一」

「そっかー」

さつきはもみもみと表現したものの、正直なところ私のお腹に掴めるほどの肉は無い。

その感触が物足りなかったのか八一は更に身体を倒しながら両手を私の腰に回して、お腹に抱き付くような態勢になる。

「ちよつとぐらい太ったっておれは気にしないけどなー、すりすり」

「……私が気にするの」

「そっかー。すりすり、すりすり」

「っ……………」

そして、お腹に顔を当ててすりすり頬ずりを。

……な、なんだろう、これは。鬱陶しい、まあ鬱陶しいんだけど。

「すりすり。ぎんこちゃんすきー」

これは……最大限好意的に解釈すると……甘えてるの、かな？

酔っ払うとこうなるの？ こういうボディタッチが増えるもの、なのかな？

だったらそれは中々……いや、うーん、どう、どうだろ。いい、いや良くない？

む、むむう……良くはない、か？ いやでも別にダメって訳じゃ——

「ねえぎんこちゃん、おれ誕生日なんだけど。なんかちよーだい」

「っ、なんかって何を？」

「ぎんこちゃんがほしい。誕生日プレゼントはぎんこちゃん一年分がいいです」

「だーめ」

「なんでっ！」

赤ら顔を跳ね上げて叫ぶ八一だったが、駄目なものは駄目だ。

言うに事欠いて私を一年分だなんて。そんなの……そんなの、正直、あげてもいいんだけど。

でもやつぱりダメ。普段の八一ならいいけど酔っ払いにはあげたくない。

「くれよーぎんこちゃんをー！　ぎんこちゃんをおくれー！」

「うるさい」

「うるさくない！　おれにはぎんこちゃんをいただく権利があります！」

「ない」

「あるー！　あるったらあるんだよー！」

「語尾を伸ばすなっつってんでしょ」

人の膝の上でぎやーぎやーと喚く酔っ払い八一。うるさい。

私を頂く権利だなんて。そんなの……まあ、その、八一にはあるだろうけども。

「くれー！　ぎんこちゃんくれー！」

「うるーさーい」

ていうか、なんていうか。付き合ってからもう二年経つし、その間もあれこれ色々あったし。

だからなんかもう、それ、私の感覚だと、とつくにもう全部あげちゃってるつもりなんだけど。

それを誕生日プレゼント扱いにするのなら私にはあげるものが無くなっちゃうんだけど。それとも八一的にはまだ足りないって事なのかな。

「ううう、つめたいー。せっかくの誕生日なのにぎんこちゃんがつめたいよー」

「つめたくないから。今日だってこうして一緒にいてあなたのお酒に付き合っただけでるじゃないの」

「そーだけどさあ、そこにもっと愛情があればーいいなあと思うんですよねえわたくしはー」

「愛情？」

「そう！　もっとイチャイチャしたい！」

酔っ払った影響なのか、恥ずかしげも無く堂々と言い放つ八一。

「したい！ したい！」

「……………」

……そりや私だつて、イチヤイチヤはしたいけど。

したい。したいはしたい。けれども節度は守らなきゃいけない、という気持ちもあつて。

で、問題はこのバカ。こいつは基本的に役に立たない、そういうイチヤイチヤムードな時の八一は待てが出来ない犬なので、節度を守る為には私が自制心を強くするしかないのだ。

全くこのバカ八一、ほんとあんたは人の気持ちも知らないで、と言つてやりたい。言わないけど。

「おれはねえ！ ハッキリ言つてね！ 一日中ぎんこちゃんといちやいちやしたいの！」

「つ……………」

「そりや毎日とはいわんけどさ！ でも月一、いや週一ぐらいでそういう日があつたつていいじゃん！ いいじゃんかよーつて思うの！ おれは!!!」

「……………」

——そんなの私だつて一日中とあんたとイチャイチャしたいわよ！

ていうか私は週一どころか毎日ずっとイチャイチャしてたつて全然おつけーだもん！
！ けどそんな自堕落な日々送つたら大変つていうか本業に支障が出ちゃうじゃない！

だから私が自制してあげてるのに！ あんたがそういう奴だから私が苦勞してるつてのに、その努力を知りもしないでぶーぶー言うんじゃないわよ八一のばかばか！

——と、言つてやりたい。言わないけど、言わないけど！

私も酔つ払つていたとしたら言い返していたかもしれないけど、生憎と私は素面なのだ。

「はー、なーんか納得いかねー、なつとくいかねーつすわー」

返事をしない私を見てか人の膝の上でへそを曲げる八一。

いい加減重いからそこをどけと言いたい。とうかこれだつて甘えさせてあげてるんだからね？

「納得いかないつてなにが」

「なんつーかなー、温度感つていうかさー」

温度感？

「なーんかさー、おれとぎんこちゃんて温度感にちがいがあがるんだよねー。お

れはこーんなにもぎんこちゃんが好きなのに、ぎんこちゃんはぜんぜんそうじゃないじゃん」

「……別にそんな事無いわよ」

「いやあるね！　ぎんこちゃんはつめたい、ぎんこちゃんはそつけない！　一体いつからこうなつてしまつたんだ、おれなんて今もぎんこちゃんへの愛情があふれてばくはつしちゃいそうなの！　うりや、うりや！」

「あ、あんたねえ……」

うりやうりや言いながら人の太ももにその顔を擦り付ける八一。これは愛情が溢れて爆発しそうなのではなく単にセクハラをしたいただけだと思う。

酔つ払いに言い聞かせるのも面倒なのでこれぐらいなら目を瞑るけど、度が過ぎるようなら容赦なく頭を引つ叩くので覚悟しなさい。

「私はずっと前からこうよ。ついでに言えばあんたは爆発しそうなんじゃなくてただ酔つ払つてるだけ」

「そうじゃなくつてさあ！　ぎんこちゃんつてほんとそういう……そういうところあるよねー！」

「どういとうとよ」

「そういうところ！　そういうそつけないところ！　おれがこんなにも熱くなつてつての

に、ぎんこちゃんつたらずつとそんな感じじゃなか！」

「あんたが熱くなってるのはお酒を飲んだからでしょ」

「ほらー！　すぐそういうこと言うー！」

事実を言ったまでじゃないの。と言っても聞かないのが酔っ払いなのよね、めんどい。

とか思っていたら、私の膝上を占拠していた八一が突如ガバつと起き上がって。

「ぎんこちゃんさあ」

「な、なによ」

じーつと視線を合わせてきた。

その顔色は十分に赤い。けれども目の奥はまだちゃんとしているように見える。

というか、なんか意外な程にその視線が鋭くなっている。一体何だと言うのか。

「そういうところあるよね。おれは寂しかったのに」

「はっ」

「まえのときもさー、ぜーんぜん連絡くれなくて。おれ寂しかったのに」

……なぬ？

「それって……」

「まえの、ぎんこちゃんがいなかったとき」

「……………」

「病気でぎんこちゃんがいなかったあのとき、全然れんらくくれなかったじゃん。音信不通だったじゃん。あの時おれずつと寂しかったんだよ」

……………こ、こいつ、それを持ち出してくるとは。

「ぎんこちゃんがいなくてさー、おれずつと寂しかったんだけどなー!」

「つ……………」

「さみしかったんだけどなー! あーあーさびしかったなーまーじでー!!」

「……………」

約二年前、16歳になった年の暮れから私は諸事情により入院をしていた。

その療養期間は一年近くにまで及び、その間は私の方から八一に連絡を取るのを控えていた。今ではこうして体調を戻して八一と一緒にいるわけだけど、当時はずつと離れ離れだった。

その件について、事後報告になったけど八一には一通りの説明をしたつもりだ。当時の私の事情を隠さずに話したし、その流れで一回はちゃんと謝った。

その結果八一は受け入れてくれたし、当時の私にとつてやむを得ない選択だった事も納得してくれた。なのでそれ以降、あの件について八一がどうこう言うてくる事は無かったんだけど。

「急にいなくなっちゃうんだもんなー！ あんときはつらかったなー！」
「……………」

酔っ払っているからなのか、普段なら言葉に出さないのであるものが次々と。

「なーんも教えてくれないんだもんなー！ あんときはもう恋人だったのにさー！ 恋人のおれになーんも教えてくれないんだもん！ ぎんこちゃんは！」

「…………ごめん」

こうしてこの話を持ち出されると、基本的に私はごめんとしか言えなくなる。

そして普段の八一は私にそういう言葉を言わせようとはしない。性格的にもそうだし、事情が事情だけにごめんと謝られる八一の方も申し訳ない気持ちになっちゃうんだと思う。

なのであの件についてのこういう非難めいたというか、厭味つたらしい言葉を聞くのは始めてだ。まあ八一の立場からしたら正当な恨み言なので私は文句を言える立場じゃない、じゃないんだけど。

「そりゃぎんこちゃんの気持ちもわかるけどさー！ おれひとりだけ蚊帳の外なんだもん、おれだってぎんこちゃんとずっといっしょにいたのにさー！」

こういうのはどうせなら酔っ払っていい時にぶつけて欲しかったなとは思う。

これでは八一の本心なのか酔っ払いの妄言なのか紛らわしいじゃないの。さすがに

口先だけの言葉じゃないとは思うけど――

「せめてれんらくぐらいはあつてもよかつたと思うんだけどなー、ぎんこちゃんのこえだけでもなー聞きたいときいっぱいあつただけどなー」

「……うん」

「急にいなくなつちやつてね？ とつても不安だつたんだよ？ おれは。あのときに声

だけでも聞ければすつごいあんしんできたんだけどなー」

「……ごめんつて」

それとも。言葉には出さなかつただけで心の中にずつと貯め込んでいたのかな。

そうだとしたら……酔つ払い相手とはいえ申し訳なさと、ごめんねという気持ち膨らんでくる。

「……………」

ただ、それとは別に……さすがにこれを言ったら怒られちゃうだろうけど。

正直なところ、ここまで八一に寂しかったと言われるのはちよつと嬉しい気持ちもあつて。

「ごめんね、八一」

なんせ私はすつごい寂しかったから。

自分で選んだ選択とはいえ、八一と会えない時間はとんでもなく寂しかった。

なんかもう療養中なのにこれが原因で死んじゃうんじゃないかってぐらいに寂しかったので、その時に八一も同じ気持ちを抱えていてくれたんだとしたら……いけないことだとしても、やっぱり嬉しいと思ってしまう。

「あ、いやいや、そんなべつに……あのね、ちがうんだよぎんこちゃん？」

「何が違うの？」

「おれはね、何もべつにあやまつてほしいわけじゃないんだ。ぎんこちゃんにも事情があつたつてことわかつてるし、そんなことでぐちぐち言うつもりなんてありませんとも、ええありませんとも！」

「だよね。それは私も分かつてるけど、じゃあ何が言いたいの？」

「いやだからさ、おれはすつごいさみしかつたわけ！ だからぎんこちゃんもさみがつてほしいの！ おれだけさみがつてたなんてそれこそさみしいじゃん！」

それはそうだね。私もそう思う。

「そんなの……私だつて寂しかつたに決まつてるじゃない」

「そのきもちが伝わつてこないのがもんだいなんだよなー！ 俺はこーんなにあつくなつてるのに、ぎんこちゃんつてばずつとそつけないからなー」

だからあんたが熱くなつてるのは酔つ払つてるからだつて、とは言つても聞きそうにない。

気持ちが伝わってこないと言われてもね、私がこういう性格なのは今更なので今更変えようがないし……っていうかね、そもそも私の気持ちとか、知りたいの？　ほんとに？

だってあの療養期間中に味わっていたあの寂しさを伝えろなんてね、そんなの本気でしようもんなら最低でも一ヶ月間はずっとイチヤイチャしてなきや。そのぐらいしないと到底伝わらないって断言出来るからね。

なのでそんなのは端から八一に伝えるつもりなんてない。だからそれはどうでもいいんだけど。

(これは……お酒の影響、だよね)

今のこの、酔っ払った状態の八一がちよつと新鮮で……うーん、酔っ払い、かあ。

さっきのが八一の心の中にあつて蓋をしてあつた言葉なのだとしたら、それを聞き出したのはお酒のおかげだ。アルコールの力が八一の心中を程良く開放的にしてくれたのだろう。

そう考えるとお酒っていうのも案外悪くないのかも。特に八一って昔っからそう、一番そばに居るこの私相手にも言えない言葉を抱えたり秘密を作ったりしがちなので、その紐を緩める良い薬なのかもしれない。

「ほんつとぎんこちゃんってさー、昔っからずっとそうだよなー」

「そうね、そっけなくて悪かったわね」

「それもだけどさあ、すーぐ俺のそばからいなくなっちゃうのもどうにかして欲しいんだよな。こっちは何度も何度もさみしい思いをさせられてるんだから」

「……何度も?」

「そう。昔っからずっとそうじゃん、すーぐ俺のそばから離れてくんだもん。なんかもうわざとやってんじゃないのかって思うぐらい」

——けれども

「こういう見当違いな事を言ったりもするので、やっぱりお酒を信用してはいけなと分かる。」

「ちよつと待つて八一、ストップ」

「なにさ」

「そりゃ一年前のあれは私がしたことだし、色々と心配させちやつたのも事実だからあなたにはあれこれ言う権利があるのは認める」

「うん」

「けど『何度も』ってなに? あれ以外で私がいつあなたのそばからいなくなつたつて言うのよ」

「え?」

「とういかむしろそれって私の台詞よね? 一年前のあれを除けば何度も何度も私のそばからいなくなつちやう常習犯なのはあんたの方じゃないの」

「はいいー?」

「はいいー? じゃないから。そんなオーバーなりアクションを取られても困る。なんなのその訳分らないものを見るような目はムカつくんだけど。」

まるで私が頓珍漢な事を言っているような反応をされたけど、どう考えても私の言葉は正しい。だって私は八一のそばを離れようとした事なんてないし、一方で八一からは何度もそういう目に合わされた覚えがあるし。

「は? え? 常習犯? なんのこと?」

「だから……何度も私のそばからいなくなる常習犯じゃないのあんたは。まあ過ぎた話だし今更とやかく言うつもりはないけど——」

「いやちがうちがう、おれじゃなくてぎんこちゃんですよ。ぎんこちゃんつてすぐおれのおそばからいなくなつちやうよねー、つて話をしてたんじゃん。さてはぎんこちゃん酔つてるな?」

「バカ、あんたと一緒にしないでつていうかそもそも私はお酒飲んでないわよ!」

先程からどうにも話が噛み合わない。お互いで真逆の事を言い合っている。

これは八一が酔つ払つてるからか、まあそうでしょうね、ほんと酔つ払いはこれだけ

ら困る。

「え、ぎんこちゃんそれほんきで言ってる？ まさかわすれちゃってるのか？」

「それもこつちの台詞、どうせあんたがド忘れしてるんですよ。あるいは自分にとって
は些細な事だと感じて最初から気にも留めてないかのどちらね」

「いやいやそれはない、さすがに忘れるわけないっしょ。おれのそばからぎんこちゃん
がいなくなつちやう寂しさをなんど味わってきたとおもつてんの、その度おれがどれだ
け苦勞して——」

「だからそれは私の台詞なんだけど!? 私のそばからいなくなつてるのはあんたの方で
しょ!?!」

「はー!? はー!!? おれがいついなくなつたっていうんですかー!? はー!?!」

はー!?! はこつちの台詞なんですけど!?! はー!?!

俺のそばから銀子ちゃんがいなくなつちやう寂しき!?! それを何度も味わつたつて
ホントなにそれなんの話なに言つてんの!?! 酔つ払つてるからつて適当なことばつか
言わないでくれない!?!

「八一が! なくなつてたの! その度に寂しい思いをしてきたのは私!」

「ちがうよ! おれじゃん! それをあじわつてきたのはおれの方!」

私の劍幕に負けじと八一も声を張る。その表情は必死でとても嘘を吐いているよう

には見えない。

え、じゃあなに、こいつの脳内だと私は何度も八一のそばからいなくなっていてその度に寂しい思いをさせていた、その上で自分は私のそばから離れていったことは無い。つて本気でそう思ってるってこと!?

「あり得ない! 記憶の捏造も大概にしなさいよね!」

「ぎんこちゃんこそ! そんなにいうなら具体例をだしてよ! おれがぎんこちゃんのをばをはなれたつていう具体例をさあ!」

「具体例つてそんなの数が多すぎていちいち思い出せないわよ! 自分の胸に聞いてみなさい、特にあんたが弟子を取つて以降のこと!!」

「してない! おれはぜーっつたいにそんなことしてない! ぎんこちゃんこそ、そのころからいつそう態度がつめたくなつた! これは絶対にまちがいないね!」

「そんなの当たり前でしょ! その原因があんたにあるつて言つてんのよ!! そもそも勝手に師匠の家を出したのは八一じゃない! それまではずっと一緒にいたのに!!」

「それはノーカンでしょ! そんな遅かれ早かれそうなることじゃん! それいつたらおれが前のアパートに引つ越してからはむしろ会いやすくなつてたはずなのに、ぎんこちゃんつてばぜんぜん来てくれなかつたじゃん!!」

「だーからそんなの当たり前でしょつて言つてんの!!」

八一が以前のボロアパートで一人暮らしを始めた時なんて私は14歳の頃、中学二年生だ。

八一は最終学歴中卒男なのでその頃はもう暇してたから勘違いしているみたいだけど、学生の私は普通に学校があつたのだから平日はおいそれと行けるわけじゃない。

そりゃ休日は入り浸っていた時もあつたけど、それも八一が内弟子を取るまでの話だ。それ以後私があのアパートを訪れる頻度が減つた事など言うまでも無いし、その原因が八一にあることも言うまでもない。そうでしょ!?

「じゃああのとき！ おれのそばからぎんこちゃんが離れていつちやうつて一番感じたのはあの時だった、ぎんこちゃんの女王戦初挑戦のとき！」

「ああその時ね、勿論分かるわよ。あんたが私の呼び名を姉弟子に変えたことでしょ?」
「ちがうよ！　ぎんこちゃんが女流タイトルをとつたことだよ!!　あれのせいでおれがどれだけさみしい思いをしたか！　タイトルなんて獲るのがわるい！」

「獲るのが悪いってなに!?　そんなこと言つたらあんただつて竜王位獲つたじゃない！　あれだつて私はすつこい寂しかったんだから！」

「それはぎんこちゃんがタイトル獲つたからだ！　さきにとるほうがわるい！」

「なにそれ意味分かんない!!　それに先にした方が悪いなんて言つたら八一の方がもつと先じゃない！　なんたつて私が一番最初に寂しい思いを感じたのは六歳とか七歳の

頃なんだから!!」

「はあ!? ちょっとまって意味わかんないって! ぎんちゃんが六歳七歳のころなんかおれたち師匠の家で四六時中ずっと一緒にいたじゃん! それでなんでさみしくなるのさ!!」

「それは——」

……それはそうだけど、けれどもこれは物理的な距離の話じゃなくて精神的なものだ。

ずっと隣にいた存在が、自分のそばを離れていく。何よりも切ないあの感覚を一番最初に感じたのは小学校低学年の頃だったはず。

出会った時は私よりも将棋が弱かった八一がどんどん実力を付けていく。これは子供の頃に限った話じゃなくて、私が徒歩で進んでいる傍らを一足飛びで駆けていく様を見せられる度、そこに大きな距離を感じていた。

「それは、……とにかくあったの、そういう事が」

「ないよそんなこと! ぜったいに銀子ちゃんの勘違いだって!!」

「そんなことない! 実際に私はすつごく寂しかったんだから!」

すぐ隣にいるのに距離を感じる事程寂しい事は無い。この気持ちは八一に分かるはずがない。

……けれどもこれは言えない。これを言うのはなんか悔しい。言ったら負けな気がする。

それに当時の八一は当然ながらただ将棋を強くなるうとしていただけだ。そこに悪気なんて無いし、私のそばを離れていくのが目的だったわけじゃないって事も分かっている。

しかし。それを以て八一が何もしていないって言い張るのだったら私だってそうだから。

さつき八一が文句を付けてた女流タイトルとかもそうだけど、私だって全ての行いは将棋を強くなるうとした結果であり、八一のそばを離れようという意図があった訳じゃない。

なのでお互い将棋に強くなる為の行動をノーカウントとして除外した場合、私には何も落ち度が無いけど八一には中学卒業と同時に師匠の家を出て一人暮らしを始めたという落ち度が残る。

あれは明確に私のそばを離れようとした行為。以前そのように言質も取っている、よって悪いのは八一だ。

「とにかくあんたが悪い」

「いや、ぎんこちゃんがわるい」

「私が悪いわけない。とにかくあんたがフラフラしてたから、あんたが優柔不断なのが悪い」

「うっそだねー、おれはフラフラなんてしてない、おれはこどもの頃からぎんこちゃん一筋だもーん」

「あ、あんたね、言うに事欠いて……」

子供の頃から銀子ちゃん一筋い？ だったら子供の頃にとつとと告白しろと言いた

い。十六歳で付き合うまでに私が何度アプローチを掛けた事か。八一がボケボケのニブチンじゃなかったら絶対もつと早く落ち着いていたはずだ。ハワイでキス待ち顔まで作つたのにスルーされた事忘れてないんだからね？

「なんか思い出したらムカついてきた」

「えっ」

「まあいいわ、酔っ払いと話していても埒が明かないって事が分かったから。この責任はあんたが素面に戻った時に取って貰うわね」

「なにそれこわい。ってかもうおれ酔ってないって。さつき大声だしてたら酔いさめちゃった」

「嘘おっしやい。顔真つ赤じゃないの」

「うそじゃないってー」

あのね、そんな赤ら顔で俺酔ってないってーとか言われても説得力が無いんだけど。さっきの言い合いを素の状態で言えたのならむしろ良く言ったわねと褒めてあげたいくらいだ。酔ってなきや聞けない言葉もちらほらあつたし。

……あつたよね。もう一度いけるか、ちよつと試してみようかな。

「八一、もう酔ってないの?」

「うん、よつてないよ」

「じゃあちよつと来て。それで私の目を見て答えてね」

「うん」

私は八一の両頬に手を添えて顔を近付けさせてから、その目を覗き込んだ。

……つとその前に、スマホスマホ。

「どつたの?」

「いいから、ちよつと待って」

録画アプリを起動して、つと。うん、これでよし。

「ねえ八一。八一は子供の頃から私の事が好きだったの? 一筋だった?」

「そうだよ! おれはずつとぎんこちゃん一筋、ぎんこちゃんがだいすき!!」

ほーら酔ってるじゃないの。

普段の八一ならこれは照れるはず。恥ずかしげも無くそんな事を言えるのが良い証だ。

にしても良いものが録れた。この動画、後で酔いが冷めた八一に見せてあげようつと。

「すきだよーぎーんこちゃんー！」

「わっ、ちよつとー！」

ちよつとした悪戯に私がにんまりしていた隙を突いて八一が抱き付いてきた。

横抱きになって私の首元付近に顔を埋める恰好。この酔っ払いめ、八一は酔っ払うと抱き付く頻度が増えるのかしら。それだと桂香さんとか他の人との飲み会には参加させられなくなるんだけどどうしよう。

「ぎんこちゃん……♪」

「八一。その位置で吐いたら殺すからね」

「そんなことより！　ぎんこちゃん、わかってくれた？」

「はいはい、分かったから」

頷きながら左手で八一の頭をなでなで。

言いたいことはなんとなく分かった。酔っ払い八一は普段よりも分かりやすい。

「おれはね、ぎんこちゃんが大好きなんだよ」

「はいはい、そうね」

「ちよつとー、はいはいじゃないでしょーよー、そういうところなんだつてばー」

「……………」

……言わせたいのね。もう、分かったから。

「ふう…………。八一、好き」

言つてあげた。ていうか別に言いたくないわけじゃないんだけどね。

こんなの付き合ひ始めの頃ならともかく、今じゃもう恥ずかしいつてことも無いし。

ただなんか…………まあ、そんなのいちいち言う必要もないよね？ つていうか。わざわざ

ざ言葉にしなくても分かるよね？ みたいな。

とはいえまあ私は言つて欲しいんだけどね。そう、私はちゃんと言葉に出して言つて

欲しい。だから…………つまり、私は言いたくないわけではなくて…………ただちよつと、気恥

ずかしいだけだ。

「ぎんこちゃん、すーき」

「はいはい、私も好きだよ、八一」

とはいえこうもねだられたら仕方ない。ちゃんと言葉にしてあげようじゃないの。

どーせ相手は酔つ払い、明日になったら記憶に残っているかも怪しいんだから。

「ぎんこちやーん、かわいいよー」

「んっ……八一、これ誕生日プレゼントだから」

「いいよそれで。誕生日ばんざーい」

「いいのか。一応ちゃんとプレゼント用意してきたんだけど。」

「あーよかった、ぎんこちやんがはなれていってないって再確認できた」

「……そういう理由なの？」

「うん。なんせぎんこちやんつたらすーぐどっか行っちゃうし」

「だからそれはあんたの方でしょ……」

私は子供の頃からずっと。八一のそばから離れないなんて思ったことはない。

八一の方もそうだとか言っていたけど……怪しいものだ。こいつには数々の前科があるから。

けれども八一に言わせれば私もそうらしくて。まあ正直に言うると以前の入院の際には勝手に八一のそばを離れたので、他の件はともかく私にも前科一犯は確かにある。

「絶対に八一が悪い」

「ちがうよ、ぎんこちやんでしょ」

「ううん、そっち」

「ちがうって、そっち」

仮にお互いの主張が正しくて、お互い相手のそばを離れようとした事が何度もあったとしたら。

そうだとしたら……なんか、運が良かったなというか、よく一緒になれたな、とか思っちゃうかも。

特に私はそういう気持ちが芽生えてからずっと、本当にずっと八一が好きだったのに、当の八一には全然意識されてなかったというか、脈が無いのかなって思う事だつて何度もあったから。

「八一が悪いー。反省しなさいー」

「いででで、暴力はんたいー」

あの日々を思い出すと……今こうして八一が隣にいるのが……すごい、幸せというか。

ちよつとした奇跡なのでは、とすら思っちゃう。ていうかこいつ子供の頃からずっと私一筋だったってほんとなのかなあ？ 今更確かめる術が無いからって話盛ってない？

「んー……、ぎんこちゃーん、なんかおれ眠くなってきたかも」

「ほら見なさい、酔っ払いの最期はそうなるのよ。もう十分飲んだしお開きにしましよ、片付けはしといてあげるから寝ていいわよ」

「ぎんこちゃんもいつしよに寝よ」

「やだ」

「なーんでー」

片付けをしようと身体を起こしかけた私を逃すまいと八一が引つ付いてくる。邪魔で鬱陶しい。

話盛りがちな八一はともかくとして、私の方は本当だ。本当に子供の頃から八一一筋だった、大変困った事にこのニブチン男がずっと大好きだったから。

「ちよつと、もう、邪魔だつて、片付けするから放しなさい」

「だーめ、ぎんこちゃんどこいくの、いなくなつちやだめだつていつてるじゃんかー」

「あのねえ、片付けするだけつて言つてるでしょ。……ていうかあんた、もしかしてこんな些細な事もカウントしてるんじゃないでしょうね……?」

こんな八一でも、まあいいかな。

初めてお酒を飲んで酔つ払つた八一はとても邪魔で鬱陶しかつたけど、それでも、好き。

ていうか八一つてね、元々そういうやつだから。一緒にいるとムカつく事だつて沢山あるし、時には悔しい思いだつてさせられる。それは昔から今になつても大して変わらない。

でも、それでも、好き。こんなにも八一が好き。一緒にいたい。

だから仕方ないけど酔っ払いの面倒も見てあげちゃう。きつとこの先八一が酔っ払う度こういう事を繰り返すのだろう、ほんと優しく根気のある私に感謝して欲しいぐらいだ。

「つ、この、どけ、じゃまー！」

「ぐえー！」

すぐ近くにあった顔に肘を入れて強引に邪魔者を振り払って身体を起こした。

哀れ八一は両手で顔を覆って「うえええくん……」とか泣いてるけど知ったこつちやない。もうめんどくさいのでとっとと眠って静かになつて欲しい。

「こんなに飲み散らかして……よいしょ」

「……んー」

と、そんな願いが届いたのか。

飲み切った空き瓶やグラスをキッチンに置いて戻つてくると、うとうと瞼が落ちかけている八一がそこに。

「ちよつと八一、寝るならベッドに行きなさいよ」

「んー……」

「んーじゃなくて、ベッド」

「んー……いい、うごくのめんどい、ここでねる」

「フローリングの上なんかで寝たら身体を痛めるわよ。いいからベッドに行きなさい」
「んー……」

すでに反応が鈍い。八一は芋虫のように丸くなって入眠間近といった様子。

ま、放っておいてもいいんだけどねこんなの。でもやっぱり放っておけない、ような。全くだうしてくれようか、この居眠り酔っ払いを。

「……ふう」

……だったら、こうしてあげようか。

って考えちゃうのは……うう、これは、やっぱり惚れた弱みっていうのかな。

「……あのね、私にここで寝ろっての？」

「……んー？」

その意味を理解するところ、数秒後。

「……ん」

今にも寝ちやいそうだった八一がむくりと身体を起こした。

「起きられるじゃないの」

「うん。おきれた」

「寝る前にちゃんと歯も磨きなさいよ」

「んー」

ふわあと欠伸を一つ、ふらふらとした足取りで洗面所に向かつていく八一。

「……はあ」

ほらね？ 私って優しいでしょ？

こうやっていつつも八一の面倒を見てあげてるの。あいつの姉弟子になった日からずっと。

「……考えてみれば、これだけはずっとそうだったわね」

恋人になる前も、恋人になつてからも。お互いがそばにいる時も、いられなかつた時も。

八一と出会つたその時から、私が姉で八一は弟。師匠に破門されない限り、この関係性はこの先ずっと死ぬまで変わる事は無い。

つまり今日みたいな夏場におつかいに出るのはこれからもずっと八一で、酔つ払いのお世話をしてあげるのはこれからもずっと私なのである。

「……ま、いいんだけど」

ていうか先程あ言った以上、今日も一緒のベッドで眠つてあげなきゃいけないわけ
で。

あの酔つ払いと一緒に眠つてあげる私の懐の深さを誰か褒めて欲しい。えらいで

しよ？

「む……」

その時、バタンと。

洗面所で身支度を終えた八一がベッドの待つ寝室に入る音が聞こえた。

「……すぐ眠っちゃうよね？」

あれだけ眠そうにしていたのだからベッドに入ったらもう即ぐっすりだろう。

そう、どうせあいつはすぐに眠っちゃうのだから、今日は変なことにはならないはず。

でもまあ、私が行くまで起きていたら……ま、まあ、おやすみのキスぐらいは、べつに？

「……………」

……それとも、念の為シャワーだけでもサツと浴びてくる？

その分時間は伸びちゃうけど、そこまで八一が起きていられたら……まあ、べつに――

「……つ、ああもう、よく見たら全然食べきってないじゃないの……まったく」

とか、なんか色々考えていたらすぐあつちに行くのも違うような気がしてきて。

とりあえず私は時間稼ぎをするべく、散らかったリビングの後片付けに戻るのだった。